

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第144集

しも かけ 下 懸 遺 跡

2009

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県安城市は、矢作川と境川に挟まれた岡崎平野に位置します。戦前から農業を主産業とした地域で、「日本のデンマーク」と呼ばれるなど、全国的にみても飛躍的に農業が発展したことは著名であります。最近では企業誘致による工業都市化も進んでおります。

一方、この街には歴史的にも多くの文化財が残されておりますように古くから人々が生活した場所で、西三河を代表する地域の一つにも数えられてまいりました。

このたび、財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県建設部河川課による鹿乗川河川改修工事に伴う事前調査として、下懸遺跡の発掘調査を愛知県教育委員会の委託を受けて実施いたしました。その結果、先人の生活・文化に関するいくつかの新知見を得ることができました。

今回これらの成果をまとめ報告書として刊行するにいたりました。本書が歴史資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いに存じます。

なお、文末で恐縮ではありますが、発掘調査の実施に当たりましては、地元住民の方々をはじめとし、関係者及び関係諸機関の多大なるご指導とご協力をいただきました。深く感謝を申し上げる次第であります。

平成 21 年 3 月 31 日

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 林 良三

例 言

1. 本書は愛知県安城市小川町に所在する下懸遺跡（『愛知県遺跡地図』による遺跡番号は54127）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鹿乗川改修に先立つもので、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた、財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター（現財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団・愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。
3. 調査期間は平成12（2000）年12月～平成13（2001）3月である。
4. 発掘調査は、川井啓介（主査、現愛知県教育委員会）・池本正明（主任、現調査研究専門員）・竹内睦（調査研究員、現加木屋南小学校教諭）・鈴木 裕（調査研究員、現西端小学校教諭）・皆見秀久（調査研究員、現安城南高校教諭）が担当した。
5. 調査参加者は以下の通りである。（五十音順・敬称略）
青山ミヨ子・秋山 猛・浅田レイ子・安達亜紀子・阿部治己・稲垣理恵子・今西武久・浦上静江・小笠原恵美・岡田陽子・大野千代子・小沢幸雄・加藤良子・北村正子・木村和彦・黒柳滝子・児玉五一・小坂井井仁・近藤妙子・近藤久子・坂野 弘・清水俊紀・鈴木智恵・鈴木達・鈴木寿悦・杉山朝子・妹尾 勝・瀬高明美・千賀里司・筒井徳二・手島精一・栃原美智代・中野堅司・中村恵朗・那須昌俊・七ツ村清吉・野場義和・野村愛子・長谷川隆三・花田 暁・原田智子・服部和平・浜島喜代美・深津宏二・平岩みさ子・深津祐一・福島和人・細井嘉乃・本庄栄子・本田由希・宮島澄子・村野 實・村松一茂
6. 調査に際しては、次の機関から指導・協力を受けた。
愛知県教育委員会文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県建設部河川課・安城市教育委員会・安城市埋蔵文化財センター・安城市埋蔵文化財研究会・安城市史編さん室・独立行政法人奈良文化財研究所
7. 整理期間は、平成18・19（2006・2007）年度をあてた。
8. 遺物の整理・製図などについては、次の方々から協力を得た。
神谷巳佳・小川あかね・堀田春美（敬称略）
9. 本書をまとめるにあたっては、以下の方々にご教示、ご協力を得た。
天野暢保・市 大樹・内田智久・岡安雅彦・奥野絵美・小沢幸雄・神谷友和・神谷真佐子・神谷正弘・加納俊介・川崎みどり・黒坂貴裕・鈴木敏則・鈴木とよ江・鈴木 元・西宮秀紀・橋本達也・服部信博・馬場 基・福岡猛志・藤田三郎・古尾谷知浩・細田 宏・穂積裕昌・山田昌久・山本奈緒・吉川 聡・渡辺晃宏（五十音順・敬称略）
10. 本書で使用する色調名は『新版標準土色帳』小山正忠・竹原秀雄編に依拠した。
11. 調査区の座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系（旧基準）に準拠し、海拔標高はT・P（東京湾平均海面標高）による。
12. 本書の執筆は池本正明、赤塚次郎（本センター統括専門員）・樋上 昇（本センター調査研究専門員）・堀木真美子（本センター調査研究主任）・鬼頭 剛（本センター調査研究主任）・森 勇一（津島東高校教諭）・長草康二（神塾）・植田弥生・山形秀紀・野村敏江（以上、株式会社パレオ・ラボ）・平尾良光・鈴木浩子（以上、独立行政法人東京文化財研究所）・神谷巳佳（元本センター調査研究補助員）が担当し、分担は文末に記した。編集は池本正明が担当した。なお、遺物写真は金子知久（写真工房 遊）の撮影による。
13. 調査に関する実測図や写真などの資料はすべて本センターが、出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターが保管している。

目 次

第Ⅰ章 はじめに

- 1 経緯と経過 1
- 2 環境と周辺の遺跡 1

第Ⅱ章 層序と遺構

- 1 層序 5
- 2 遺構 5

第Ⅲ章 遺 物

- 1 土器 23
- 2 土製品 42
- 3 石器・石製品 42
- 4 金属器 43
- 5 木製品 43
- 6 木簡 86
- 7 その他の遺物 86

第Ⅳ章 理科学的分析

- 1 下懸遺跡における堆積環境と地形解析 89
- 2 愛知県下懸遺跡から産出した昆虫化石について 97
- 3 樹種同定 102
- 4 下懸遺跡出土土器の胎土分析 103
- 5 赤色顔料の分析 108
- 6 木簡年代測定・樹種 112
- 7 銅鏃の鉛同位体比 114

第Ⅴ章 総括

- 1 主要遺構の変遷 115
- 2 出土土器の検討 119
- 3 弥生後期～古墳初頭の下懸出土木製品に対する評価 123
- 4 下懸遺跡D区S K 25 出土の銅鏃について 141
- 5 下懸木簡を巡って 144

挿図目次

図 1	周辺の遺跡 1:200,000	3	図 39	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 9	75
図 2	基本層序 1:40	6	図 40	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 10	76
図 3	B区全体図 1:200	9	図 41	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 11	77
図 4	C区全体図 1:200	13	図 42	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 12	78
図 5	D区全体図 1:200	17	図 43	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 13	79
図 6	E区全体図 1:200	19	図 44	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 14	80
図 7	10 部分	24	図 45	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 15	81
図 8	70 部分	25	図 46	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 16	82
図 9	299 部分	29	図 47	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 17	83
図 10	柱・杭の直径分布グラフ	45	図 48	A・B区NR 02 トレンチ他出土木製品 1	84
図 11	A区NR 02 埋土 5 群出土木製品 1	47	図 49	A・B区NR 02 トレンチ他出土木製品 2	85
図 12	A区NR 02 埋土 4 群出土木製品 1	48	図 50	A・B区NR 02 埋土 1 群他出土木製品	87
図 13	A区NR 02 埋土 4 群出土木製品 2	49	図 51	瓦	88
図 14	A区NR 02 埋土 4 群出土木製品 3	50	図 52	下懸遺跡におけるボーリング調査地点	89
図 15	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 1	51	図 53	00B 区のボーリング調査における柱状図	92
図 16	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 2	52	図 54	00B 区ボーリング調査の各層準の数値年代	94
図 17	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 3	53	図 55	下懸遺跡調査地点周辺の等高線図	96
図 18	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 4	54	図 56	下懸遺跡木簡切片	113
図 19	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 5	55	図 57	00B・C 区と 98F 区 1:250	116
図 20	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 6	56	図 58	主要遺構変遷図 1:1,000	118
図 21	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 7	57	図 59	鹿乗川流域遺跡群	120
図 22	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 8	58	図 60	下懸遺跡の外來系土器	122
図 23	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 9	59	図 61	甕の外面調整	122
図 24	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 10	60	図 62	層位別の樹種・器種組成グラフ	124
図 25	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 11	61	図 63	器種別樹種組成グラフ	125
図 26	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 12	62	図 64	器種（用途）別樹種グラフ	126
図 27	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 13	63	図 65	樹種別器種組成グラフ	127
図 28	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 14	64	図 66	樹種別木取りグラフ	128
図 29	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 15	65	図 67	針葉樹 / 広葉樹別復元径グラフ	130
図 30	A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 16	66	図 68	針葉樹 / 広葉樹別復元年輪数グラフ	131
図 31	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 1	67	図 69	針葉樹 / 広葉樹別平均年輪幅グラフ	132
図 32	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 2	68	図 70	古井遺跡群の集落・古墳分布	133
図 33	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 3	69	図 71	下懸遺跡 D 区 S K 25 出土遺物	142
図 34	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 4	70	図 72	下懸系銅鏃の変遷	143
図 35	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 5	71	図 73	下懸木簡赤外線写真	145
図 36	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 6	72			
図 37	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 7	73			
図 38	A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 8	74			

表目次

表 1	土層一覧	7
表 2	00B 区ボーリング調査の 放射性炭素年代測定結果	91
表 3	下懸遺跡から産出した昆虫化石	101
表 4	胎土分析プレパラートリスト	107
表 5	下懸遺跡出土土器の赤色顔料 蛍光 X 線分析結果	109
表 6	朝日遺跡出土土器の 赤色顔料蛍光 X 線分析結果 (1)	110
表 7	朝日遺跡出土土器の 赤色顔料蛍光 X 線分析結果 (2)	111
表 8	朝日遺跡出土土器の 赤色顔料蛍光 X 線分析結果	111
表 9	放射性炭素年代測定および 暦年代較正の結果	113
表 10	銅鏝の鉛同位体比	114
表 11	木製品一覧表 (1 ~ 4)	135 ~ 140

図版目次

図版 1	割付図	148
図版 2	全体図 1	149
図版 3	全体図 2	150
図版 4	全体図 3	151
図版 5	全体図 4	152
図版 6	全体図 5	153
図版 7	全体図 6	154
図版 8	全体図 7	155
図版 9	全体図 8	156
図版 10	全体図 9	157
図版 11	全体図 10	158
図版 12	全体図 11	159
図版 13	全体図 12	160
図版 14	全体図 13	161
図版 15	全体図 14	162
図版 16	全体図 15	163
図版 17	全体図 16	164
図版 18	全体図 17	165
図版 19	主要遺構図	166
図版 20	S B 01	167
図版 21	S B 02	168
図版 22	S B 03	169

図版 23	S B 04	170
図版 24	S B 05	171
図版 25	S B 06	172
図版 26	S B 07	173
図版 27	S B 08	174
図版 28	S B 09	175
図版 29	S B 10	176
図版 30	S B 11	177
図版 31	S B 12	178
図版 32	S B 13	179
図版 33	S B 14・15	180
図版 34	S B 16	181
図版 35	S B 17	182
図版 36	S B 18	183
図版 37	S B 19	184
図版 38	S B 20	185
図版 39	S B 21	186
図版 40	S Z 01	187
図版 41	S Z 02・03	188
図版 42	B 区 S K 25	189
図版 43	B 区 S D 18	190
図版 44	E 区 S K 23・C 区 S D 11	191
図版 45	土器実測図 1	192
図版 46	土器実測図 2	193
図版 47	土器実測図 3	194
図版 48	土器実測図 4	195
図版 49	土器実測図 5	196
図版 50	土器実測図 6	197
図版 51	土器実測図 7	198
図版 52	土器実測図 8	199
図版 53	土器実測図 9	200
図版 54	土器実測図 10	201
図版 55	土器実測図 11	202
図版 56	土器実測図 12	203
図版 57	土器実測図 13	204
図版 58	土器実測図 14	205
図版 59	土器実測図 15	206
図版 60	土器実測図 16	207
図版 61	土器実測図 17	208
図版 62	土器実測図 18	209
図版 63	土器実測図 19	210

図版 64	土器実測図 20	211
図版 65	土器実測図 21	212
図版 66	土器実測図 22	213
図版 67	土器実測図 23	214
図版 68	土器実測図 24	215
図版 69	土器実測図 25	216
図版 70	土器実測図 26	217
図版 71	土器実測図 27	218
図版 72	土器実測図 28	219
図版 73	土器実測図 29	220
図版 74	土器実測図 30	221
図版 75	土器実測図 31	222
図版 76	土器実測図 32	223
図版 77	土器実測図 33	224
図版 78	土器実測図 34	225
図版 79	土器実測図 35	226
図版 80	土器実測図 36	227
図版 81	土器実測図 37	228
図版 82	土器実測図 38	229
図版 83	土器実測図 39	230
図版 84	土器実測図 40	231
図版 85	土器実測図 41	232
図版 86	石製品実測図 1	233
図版 87	石製品実測図 2	234
図版 88	石製品・土製品・金属製品実測図	235
図版 89	木簡実測図	236

写真図版目次

図版 90	遺構 1	237
図版 91	遺構 2	238
図版 92	遺構 3	239
図版 93	遺構 4	240
図版 94	遺構 5	241
図版 95	遺構 6	242
図版 96	遺構 7	243
図版 97	遺構 8	244
図版 98	土器 1	245
図版 99	土器 2	246
図版 100	土器 3	247
図版 101	土器 4	248
図版 102	土器 5	249

図版 103	土器 6	250
図版 104	土器 7	251
図版 105	土器 8	252
図版 106	土器 9	253
図版 107	土器 10	254
図版 108	土器 11	255
図版 109	土器 12	256
図版 110	土器細部 1	257
図版 111	土器細部 2	258
図版 112	石器・石製品	259
図版 113	石器・石製品 2・土製品・金属器	260
図版 114	木製品 1	261
図版 115	木製品 2	262
図版 116	木製品 3	263
図版 117	木製品 4	264
図版 118	木製品 5	265
図版 119	木製品 6	266
図版 120	木製品 7	267
図版 121	木製品 8	268

添付 C D - R O M

添付データ 1	遺構計測一覧
添付データ 2	遺物計測一覧
添付データ 3	B 区 S U 01 土器出土位置図
添付データ 4	A 区土器出土位置図
添付データ 5	A 区木製品出土位置図 1
添付データ 6	A 区木製品出土位置図 2
添付データ 7	B 区 S K 29
添付データ 8	樹種同定顕微鏡写真





国土地理院 20 万分の 1 地勢図
「豊橋」「名古屋」より作成

第Ⅰ章 はじめに

1 経緯と経過

愛知県建設部は、鹿乗川改修工事を計画したが、この計画予定地区には周知の遺跡である下懸遺跡が所在していた。このため、愛知県建設部と愛知県教育委員会とがその取り扱いを巡って協議し、工事に先立って遺跡を発掘調査して記録として保存することが決定した。

発掘調査は愛知県教育委員会を通して委託を受けた愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査は平成12(2000)年12月～平成13(2001)3月で、面積は3700㎡である。調査区は排土や作業領域などの関係で大きく前半行程と後半行程に区分し、前半工程はA・B・E区、後半工程はC・D区にあてた。なお、後半工程の調査途中の3月10日には現地説明会を開催し、近隣に在住する人々など約450人の参加を得た。

出土遺物の整理は、発掘調査とほぼ並行して遺物の洗浄を進め、平成12(2000)年度中には洗浄・注記作業も完了した。二次整理は平成18・19(2006・2007)年度があてられ、報告書の編集も実施した。

(池本正明)

調査手順

2 環境と周辺の遺跡

安城市小川町下懸に所在する下懸遺跡は、碧海台地東南部を縁取るように流れる鹿乗川の左岸沿いに位置している。沖積地の微高地に立地し、標高は約7mで、台地との比高は約2mである。西に隣接する台地上には小川町の集落が、東に約1km離れた所を南北に流れる矢作川までは乾田が広がっている。

矢作川と境川に挟まれた岡崎平野(西三河平野)には段丘地形がみられ、高位から三好面・拳母面・碧海面・越戸面と区別されている。さらにそれより低い面が、矢作川の河床面である沖積面である。碧海面をつくる碧海台地は、安城市及びその周辺の市域に分布し、北東から南西に向かって緩やかに傾斜する。碧海層は11万年前以降から7万年前頃までに形成されたと推定されている(安城市史編集委員会 2005)。

一方、沖積面は矢作川やその支流に沿って碧海台地の東一帯に広がっている。氾濫原ともいわれるように、洪水のときには氾濫して水没する場合が多い。氾濫とそれによって運ばれた土砂が堆積して微高地を形成することが繰り返される不安定な環境である。この沖積面をつくる沖積層が形成されたのは、最終氷期後の海面が上昇し始める1万年前頃から、6500年前頃の縄文海進期を経て、3000年前頃までとされる(安城市史編集委員会 2005)。安城市史編集委員会は、下懸遺跡より約4km北の安城市安城町地点で珪藻分析をおこなっており、陸化以降の環境変遷を読みとっている。すなわち、2900年前頃から2500年前頃には後背湿地的な環境で比較的安定した期間があったこと、それが2500年前頃以降になって洪水や氾濫の受けやすい環境に変化したというのである(安城市史編集委員会 2004)。

沖積低地

歴史的環境

碧海台地東縁部は、特に弥生時代からの遺跡が集中する地域である。現在もこの台地東縁部に沿って集落が存在していることから、人々が継続して生活してきた様子を伺い知ることができる。

しかし、縄文時代以前に人々が生活した痕跡が見られる遺跡は数少ない。このうち著名な遺跡に縄文時代晩期の堀内貝塚がある。堀内川による開析谷を北に面した、標高14.5mの台地上に立地している。開析谷との比高は5.5m。貝塚に近接して、土壇墓や土器棺墓が検出されている。

弥生時代に入っても前期の遺跡はほとんど確認されていない。各地で若干の条痕文系土器が採取されているに留まる。下懸遺跡周辺では、亀塚遺跡・矢作川河床遺跡（楠遺跡）・釈迦山遺跡・古井堤遺跡などから遠賀川系土器も採集されているが、いずれも断片的となる。

鹿乗川流域遺跡群

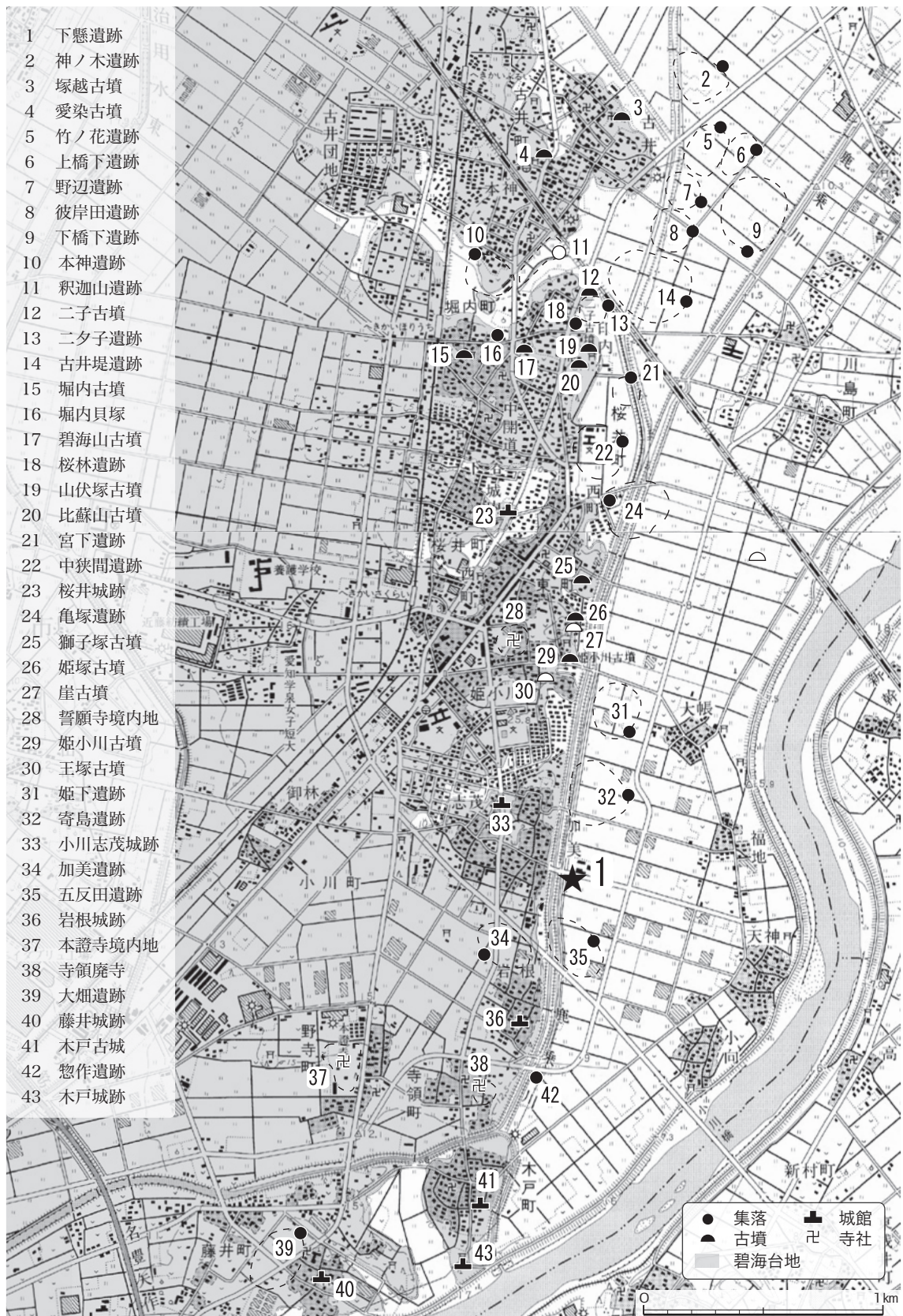
遺跡が爆発的な広がりを見せるのは、弥生時代中期後葉以降～古墳時代初頭頃である。遠賀川系土器を出土した上述の遺跡は規模を拡大し、この他にも神ノ木遺跡・竹ノ花遺跡・野辺遺跡・上橋下遺跡・下橋下遺跡・本神遺跡・中狭間遺跡・宮下南遺跡など、遺跡を数多くあげることができる。これらは相互に関連するものと考えられ、「鹿乗川流域遺跡群（または古井遺跡群、以下鹿乗川流域遺跡群と記す。）」と暫定的に総称されている（安城市史編集委員会 2004）。これらの遺跡のうち、亀塚遺跡では後期以降の豊富で多様な遺物が出土し、代表的な出土品となる人面文土器や桜皮巻土器は愛知県指定文化財となっている。釈迦山遺跡は木製品が多様に出土しており、短甲・盾は特記すべき資料である。釈迦山遺跡の南西、舌状台地上に隣接するのが本神遺跡である。釈迦山遺跡と同時期と考えられており、全長120m以上あったと推測される環濠が見つかった。中狭間遺跡は、幅9.5m～13.5m、深さ1.3m以上の規模を持つ溝が確認されている。埋土からは弥生時代後期後半～古墳時代前期前半までの遺物が出土しているが、外来系土器の比率が高く、注目される資料となっている。なお、中狭間遺跡と類似する溝は、中狭間遺跡の北に位置する宮下南遺跡でも確認されており、これらが連続する可能性も指摘されている。

桜井古墳群

鹿乗川流域遺跡群に近接する台地の端部、古井町から小川町にかけては、前・中期を中心とした約20基の古墳で形成される桜井古墳群が知られている。代表格の桜井町二子古墳は全長約68mの前方後方墳である。また姫小川町の姫小川古墳は、桜井古墳群のうち最南端にある前方後円墳で、全長は約69m。二子古墳と共に国指定史跡である。また、姫小川古墳の南東部350m程度にも前期古墳が存在していた。八ツ塚古墳と命名されているが、明治時代の開墾により滅失し、今はその位置すら明らかではない。沖積地中の微高地に立地していたと考えられ、開墾時には内行花文鏡が出土したことで知られている。

古代になると、多数の墨書土器が見つかった桜林遺跡のような前時代から続く沖積地の遺跡も知られている。一方では、鹿乗川流域遺跡群よりも南側、小川町以南の台地上で加美遺跡・木戸城遺跡・大畑遺跡のように、新たな集落遺跡が広がりを見せるようになる。このうち注目できる遺跡には、寺領町に所在する寺領廃寺がある。発掘調査も実施されているが、範囲や伽藍配置などは不明となっている。使用されている瓦の同范関係から、奈良時代後半には碧海郡内で一定の地位を有していたことが推測されている（安城市史編集委員会 2004）。

中世に入ると、掘立柱建物や井戸・火葬施設などが検出されている加美遺跡や神ノ木遺



国土地理院発行2万5千分の1地形図「安城」「西尾」

図1 周辺の遺跡

跡などが知られている。加美遺跡は台地縁端部、神ノ木遺跡は沖積地中の微高地に立地する。また、城館関係では桜井城跡・小川志茂城跡・岩根城跡・木戸古城跡・木戸城跡・藤井城跡などが知られ、これらもやはり台地東縁部端または開析谷端に立地している。多くは内藤氏・石川氏などの在地有力勢力と関わるであろうが、応仁の乱より後は織田氏、松平氏など大勢力の進出を受けるようになる。

本證寺は寺領廃寺の北西 500m ほどの所にある寺で、城郭伽藍を持つことで知られている。台地上でもやや奥まった場所に立地するが、周囲よりも標高が高い位置にあって、やはり防御施設としての性格が色濃い。室町時代には三河三か寺の一つに数えられ、有力な真宗寺院であった。

矢作川改修

矢作川は西三河全体の歴史に大きな影響を与えてきた河川であるが、慶長 10（1605）年に、改修工事による大規模な河道変更が加えられている。現在、安城市は木戸町・藤井町の南端を矢作川によって西尾市と隔てられているが、この部分がこの段階の開削工事により掘削された河道となっている。改修前の矢作川の本流は、矢作古川の名で現存し、木戸町の南から西尾市を縦断して幡豆郡で海に注ぐ。なお、この工事によって矢作川の河道が固定されるが、一方では川底に砂粒などの堆積が進み、やがて鹿乗川と矢作川の川底に高低差が生じて今度は鹿乗川が氾濫を頻繁に起こすようになる。そのため、19 世紀前半以降には、鹿乗川でも数回にわたって治水工事がなされ、藤井町から矢作川に平行して西尾市鷲塚町で矢作川に合流するような現在の流路に改修されている。

沖積低地中の微高地はこうした改修工事により安定化する。一方、洪積台地上でも開墾は進む。明治 13（1880）年は明治用水が開削され、これまで農耕に適さなかった土地も可耕地となった。安城市では現在でも郊外に広大な耕作地が続く。こうした景観は近世以降の大規模な治水工事の賜物と言え、これらにより農業を主としたこの地域の基本的スタイルが成立したと言えよう。

古井式土器

昭和 16（1940）年～昭和 31（1956）年頃には古井町を中心とした範囲で耕地整備が実施される。この段階で沖積低地中に点在した微高地の多くが削平されるが、鹿乗川流域遺跡群の範囲とも重複しているため多くの出土遺物があったらしく、学史上重要な資料も知られている。まず、大字下橋下（当時）付近からは弥生時代中期～古墳時代にまで及ぶ多量の土器が出土し、下橋下遺跡として知られるようになる。このうち中期に属する漆黒色に仕上げられた一群の土器が、久永春男氏により古井式土器と命名された事は著名である。また、大字竹ヶ花（当時）で、「住居跡と考えられる一つの堅穴状遺構」から採集された土器は、大参義一氏により欠山式土器の基準資料として紹介されている。（神谷巳佳）

参考・引用文献

- 安城市史編集委員会 2004 『新編安城市史 10 資料編考古』
安城市史編集委員会 2005 『新編安城市史 11 資料編自然』
大参義一 1968 「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集 XLVII 史学 16』
久永春男 1964 「弥生式土器総括」『瓜郷』豊橋市教育委員会

第Ⅱ章

層序と遺構

1 層序

調査区は調査直前まで水田となっていた。調査区は鹿乗川の東側に位置するが、道路や排水路などを避けこれを5分割して設定し、南側からA～E区と呼称した。現在の標高は約7.5～7.6mとほぼ平坦となっている。

調査区の遺構埋土を除く基本層序は、以下の通りである。

1層 表土層	調査開始前まで使用されていた水田の耕作土など。
2層 黄灰色シルト	調査区全域を覆う。E区を中心に、古代・中世の土器・陶磁器類を含む。
3層 黒褐色シルト	C区以北では部分的にしか確認できない。堆積後に上部が削平された可能性が高い。弥生時代中期末以降の土器を含む。
4層 灰色シルト	上面を遺構検出面としたが、E区では斜方向の堆積が認められる。弥生時代中期の土器をわずかに含む。
5層 粗粒砂	旧河道（NR 01）の埋土で、ほぼ調査区全域に分布する。遺構は確認できない。弥生時代中期後葉を中心とする土器類を含むが、D区ではこれがややまとまった量となる。基底部は確認できなかった。 (池本正明)

基本層序

2 遺構

(1) 概要

今回の調査で確認できた主要な遺構を、A区から順に第Ⅲ章1に記す時期区分に従って報告する。なお、時期・性格が不明確な遺構は、本書に添付されているCD-ROMに格納する遺構計測一覧（CD-ROM添付データ1）を参照とする。

遺構標記は調査時のものを基本的に踏襲している。近年、本センターでは遺構標記を、例えば001SKのようにアラビア数字に続けて遺構記号を明記する方法に変更している。しかし、本書で報告する調査は、新標記に変更以前に実施された事業で、調査時は旧標記で作業を進めている。こうした理由から、本書では混乱を避けるため旧標記を使用している。また、調査段階では竪穴建物と方形周溝墓を、SKないしSD・SXなどと表記していたが、報告書編集段階では煩雑さを避けるため、竪穴建物をSB、方形周溝墓にSZとし、番号を新たに付与した。このためSBについては、調査区毎ではなく全調査区の通番となっている。

遺構標記

今回の調査は、調査区のほぼ全域に広がる灰色シルト層上面を遺構検出面とした。灰色シルト層は厚さ約1m。実際には細分が可能だが、E区での例外（図版85-1349～

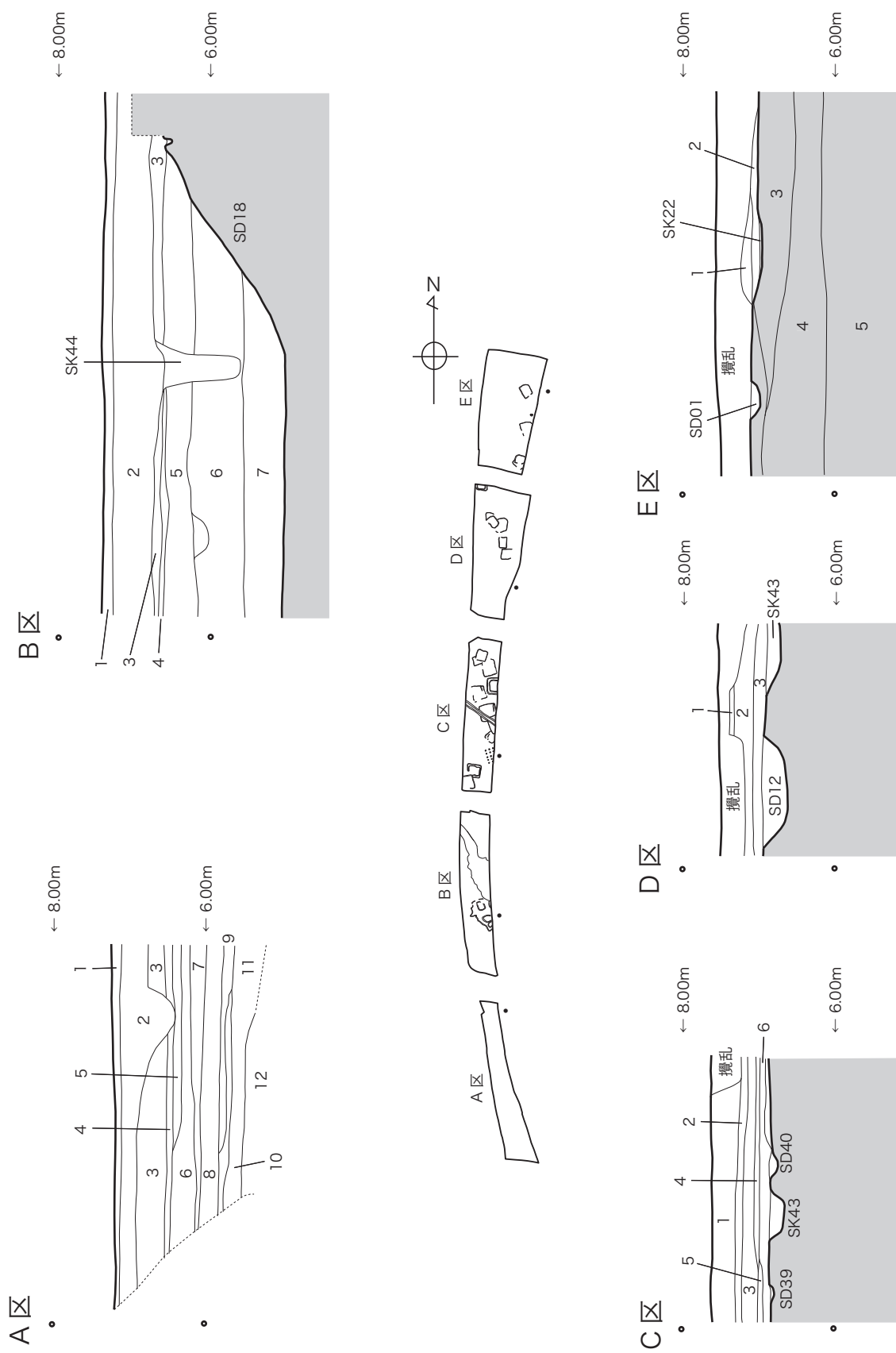


図2 基本層序 1:40

表1 土層一覧

調査区	番 号	埋 土	マンセル値	埋 土 の 特 徴
A	1	表土		
A	2	暗灰黄色シルト	2.5Y4/2	粒子細かく粘性なし。(埋土1群)
A	3	黄褐色シルト	2.5Y5/3	粒子細かく粘性ややあり。(埋土1群)
A	4	黄褐色シルト	2.5Y5/3	黒色シルト 7/5YR2/1 が混じる。(埋土1群)
A	5	黒褐色シルト	7.5YR3/1	(埋土2群)
A	6	黒色シルト	10YR2/1	黒色シルト 7/5YR2/1 が混じる。(埋土2群)
A	7	黒色シルト	10YR2/1	(埋土2群)
A	8	黒褐色シルト	7.5YR2/2	締まり悪く植物質多量。(埋土3群)
A	9	黒褐色シルト	2.5Y3/1	黒褐色シルト 2.5Y3/1、極細粒砂混じる。植物質も含む。(埋土3群)
A	10	黒褐色シルト	2.5Y3/1	黒褐色シルト 2.5Y3/1、極細粒砂混じる。(埋土3群)
A	11	黒褐色シルト	2.5Y3/1	締まり悪い。(埋土3群)
A	12	黄灰色極細粒砂	2.5Y6/1	黄灰色細粒砂 2/5Y3/1 と互層となる。(埋土4群)
B	1	表土		
B	2	黄褐色シルト	2/5Y5/3	粒子細かく粘性ややあり。
B	3	黒褐色シルト	10YR3/2	粒子細かく粘性なし。
B	4	黒褐色シルト	10YR3/1	粒子細かく粘性なし。土器類を多量含む (SU01)
B	5	黒褐色シルト	10YR3/1	炭化物極小片 10%含む (SD18)
B	6	灰色シルト	10YR4/1	粒子細かく粘性あり (SD18)
B	7	オリーブ黒シルト	5YR3/1	粒子細かく粘性ややあり。植物質含む (SD18)
C	1	表土		
C	2	黄灰色シルト	2.5Y4/1	粒子細かく粘性なし。
C	3	暗灰黄色シルト	2.5Y4/2	粒子細かく粘性なし。
C	4	暗灰黄色シルト	2.5Y4/2	粒子細かく粘性なし。
C	5	黒褐色シルト	10YR3/2	粒子細かく粘性なし。炭化物若干含む。
C	6	黄灰色シルト	2.5Y4/1	粒子細かく粘性なし。
C	7	灰オリーブ褐色シルト	5Y5/2	粒子細かく粘性なし。炭化物若干含む。
D	1	黄灰色シルト	2.5Y4/1	粒子細かく粘性なし。
D	2	暗灰黄色シルト	2.5Y4/2	粒子細かく粘性なし。
D	3	黒褐色シルト	10YR4/2	粒子細かく粘性なし。
E	1	暗灰黄色シルト	2.5Y4/2	粒子細かく粘性ややあり。
E	2	黒褐色シルト	5Y4/1	粒子細かく粘性あり。炭化物若干含む。
E	3	灰色シルト	7.5Y4/1	粒子細かく粘性なし。
E	4	細粒砂		クロスラミナ (灰色シルト)
E	5	粗粒砂		NR 01

NR 01	1351) を除き、ここからは出土遺物が確認できないため一括して捉えている。このシルト層の直下からは旧河道 (NR 01) を確認できた。埋土は現代の矢作川に類似する花崗岩に起因する粗粒砂で占められている。この粗粒砂からは、前半行程の E・B 区では出土遺物がほとんど得られなかったため、調査日程の関係でこれを部分的な掘削による層序の確認に留めてしまったが、後半行程の A・C・D 区のうち D 区でややまとまった量の土器類が得られた。このため面的な確認を実施したが、NR 01 の西岸は確認できなかった。NR 01 の西岸は調査区外に存在するものと考えられるが、上記の理由からこれは確認できてはいない。一方、東岸は A 区では確認できず、調査区外となる。出土遺物は A 期～B-1b 期まで含まれており、図示した遺物は C 区が図版 74-899-911、D 区が図版 78-82-1048-1228、図版 86-1366・1367、図版 88-1387-1389、E 区が図版 85-1352-1359 である。 なお、E 区の灰色シルト層出土資料は、出土位置が集中しないことから、NR 01 埋没後の灰色シルト堆積中にそれぞれ個別に混入した可能性が強い。しかし、上面で確認できなかった遺構に帰属する資料も含まれている可能性も否定できない。
NR 02	(2) A 区 今回の調査区のうち、最も南側に位置する。調査区内は全て旧河道となっている。 NR 01 の上部に確認された河道で、細砂～シルトが堆積している。左岸となる北側は後述する B 区で確認した。NR 01 と重複しこれを切る。A 区では調査区の西側がやや立ち上がる傾向が確認できるが、調査区内で上端は確認できなかった。掘削においては大きく 5 つに区分し、上層より埋土 1 群～5 群と呼ぶ (図 2・表 1)。なお、5 群については掘削時に湧水が著しく、調査区の中央で部分的に確認したにすぎず、壁面の記録は出来なかった。また、主要な遺物の出土地点は、本書に添付されている CD-ROM に格納した CD-ROM 添付データ 4～6 を参照とする。出土遺物で注目されるのは、木製品およびその未製品の多量出土である。また埋土 1 群からは、奈良時代と考えられる木簡が 1 点出土している。図示した遺物は埋土 1 群が図版 45-1-7、埋土 2 群が図版 45-46-8-61・図版 88-1388、埋土 3 群が図版 47-49-62-125、埋土 4 群が図版 50-52-126-194、埋土 5 群が図版 52-195-202 である。
SK 19	(3) B 区 B 区の北側、C 区の南側に位置する調査区である。 調査区の北部に位置する。平面形が楕円形で、規模は短径が 0.6 m、長径は 0.8 m、深さ 0.2 m。埋土は黒褐色と暗灰黄色シルトの斑土を基調とする。時期は C 期。図示した資料は、図版 54-237 である。
SK 27	調査区南部に位置する。平面形が円形で、規模は直径 0.3 m、深さ 0.2 m。埋土は黒褐色シルトと暗灰黄色シルトの斑土を基調とする。時期は C-1 期。図示した資料は、図版 54-238 である。
SK 29 CD-ROM 添付データ 7	調査区の南部に位置する。平面形は三角形に近いが、東端が調査区外となり明らかにできない。規模は南北の最大値が 2.6 m、東西は 2.0 m まで計測できる。深さは 0.3 m。埋土は

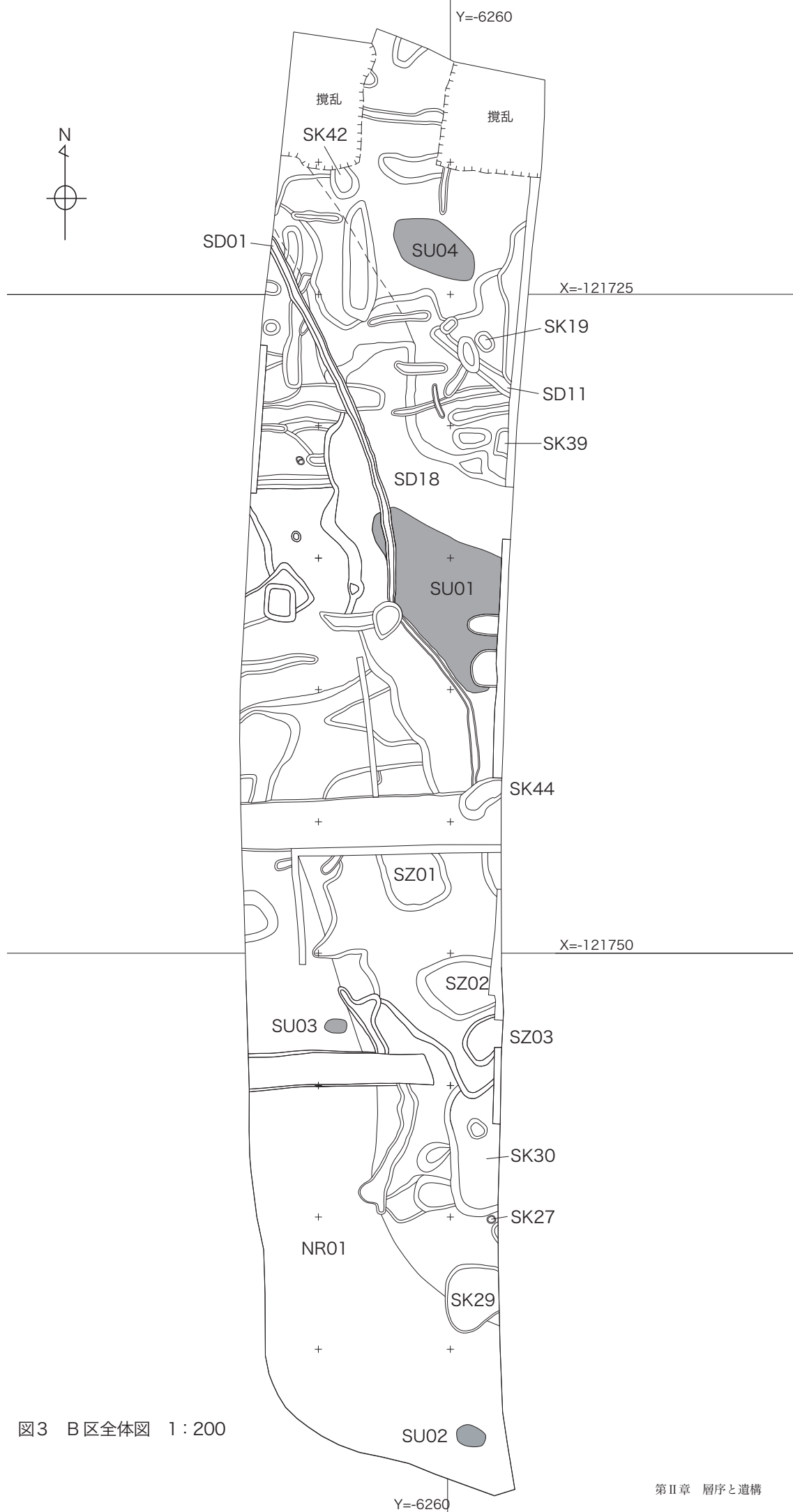


図3 B区全体図 1:200

	褐灰色シルトを基調とする。時期はC－2期。図示した資料は、図版53－203～236である。
S K 30	調査区の南部に位置する。S Z 03 と重複しこれに切られる。平面形は長方形に近いが、東部が調査区外となり明らかにできない。規模は南北の最大値が5.0 m、東西は2.0 mまで計測できる。深さは0.5 m。埋土は黄灰色シルトを基調とする。時期はC期。図示した資料は、図版54－239～241である。
S K 39	調査区の北部に位置する。平面形は方形に近いがやや歪む。東部は調査区外となる。規模は一辺が1.1 mで、もう一辺は0.8 mまで計測できる。深さは0.08 m。埋土は黒褐色と暗灰黄色シルトの斑土を基調とする。時期はB－1～C－1期。図示した資料は、図版54－242である。
S K 42	調査区の北部に位置する。平面形は卵形に近いが、北部は攪乱により破壊され不明。規模は短径が1.0 m、長径は1.2 mまで計測できる。深さは0.1 m。埋土は黒褐色と暗灰黄色シルトの斑土を基調とする。時期はC期。図示した資料は、図版54－243～245である。
S K 44	調査区の東部に位置する。S D 01 と S D 18 に重複しこれらを切る。平面形はやや歪む楕円形だが、東端が調査区外となり明らかにできない。規模は短径の最大値が1.2 m、長径は2.0 mまで計測できる。深さは0.5 m。埋土は黒褐色と暗灰黄色シルトの斑土を基調とする。時期はC期。図示した資料は、図版54－246・247である。
S Z 01 図版 40	調査区の中央部に位置する。周溝が浅く平面形状がやや歪む正方形となるもので、溝が周囲にめぐる形状か。平面形状とS Z 02・03と連続する状況から、方形周溝墓として理解しておく。東溝が幅1.8 m、深さ0.2 m、西溝が幅2.5 m、深さ0.3 m、S X 02 と共有する南溝が幅2.5 m、深さ0.2 m。対面する溝の内側下端間は、東～西間で2.4 m程度となる。埋土は褐灰色シルトを基調とする。時期はC期か。図示した遺物は、東溝出土が図版54－248～253、西溝出土が図54－254、南溝出土が図版54－255、S Z 02 と共有となる北溝出土が図版54－256である。
S Z 02 図版 41	調査区のほぼ中央部に位置する。やはり周溝が浅く平面形状が大きく歪むもので、東側は調査区外となる。溝が周囲にめぐる形状か。平面形状とS Z 01・03と連続する状況から、方形周溝墓として理解しておく。溝幅は西溝が幅1.6 m、深さ0.3 m。S Z 03 と共有となる南溝が幅0.5 m、深さ0.1 mとなる。北溝はS Z 01 と共有する。対面する溝の内側下端間は、南～北間が2.4 m程度、東西間は3.2 m以上となる。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期はC期か。図示した遺物は、S Z 01 と共有となる南溝から出土した図版54－256である。
S Z 03 図版 41	調査区の中央部に位置する。やはり周溝が浅く平面形状が大きく歪むもので、東側は調査区外となる。溝が周囲にめぐる形状か。平面形状とS Z 01・02と連続する状況から、方形周溝墓として理解しておく。溝幅は西溝が幅1.0 m、深さ0.2 m。南溝が幅1.0 m、深さ0.2 mとなる。北溝はS Z 02 と共有する。対面する溝の内側下端間は、南～北間が1.5 m程度、東西間は1.9 m以上となる。埋土は暗灰黄色シルトを基調とする。時期はC期か。図示した遺物は、西溝から出土した図版54－257である。
S D 01	調査区の中央部に位置する。S D 18 の埋没後に掘削された小規模な溝である。幅は0.4 m、検出長は22.4 m、深さは0.1 m。S D 18 とほぼ同一方向に重複する。形状は蛇行するが、主軸は概ねE－64°－Sをはかる。北西側は調査区外に伸びる。S D 18 の他、S U 01 と S K 44 に重複するが、S U 01 を切り端部がS K 44 に切られる。埋土は黒色

シルトを基調としている。時期はC期。図示した遺物は図54-258～262である。	
調査区の北部に位置する。幅は0.5 m、深さは0.1 mで、主軸はE-39°-Sをはかる。検出長は4.1 mで、南東側が調査区外に伸びる。埋土は黄灰色シルトを基調とする。時期はC期。図示した資料は、図版54-263である。	SD 11
調査区の北～中央部に位置する大規模な溝。幅3.3 m、深さ1.6 mをはかる。断面はU字形を呈する。検出長は18.8 mだが、端部は双方ともに調査区外に伸びる。主軸はE-61°-Sをはかる。埋土は灰色シルトとオリーブ黒色シルトを基調とする。埋没の最終段階で大規模な土器集積であるSU 01が形成されるが、この部分の溝幅は最大値7.1 mと広くなり形状も不整形となる。SU 01形成時にやや拡張されたものか、溝幅がやや広くなる位置にSU 01が形成されたものかは判断できない。この他SD 01とSK 44が重複するが、いずれもSD 18埋没後に掘削された遺構である。時期はC-1期。図示した資料は、図版54-264～281である。	SD 18 図版 43
調査区の中央部に位置する。SD 18の埋没最終段階に集積された多量の土器群。このうち面積18 m ² 程度の範囲には、特に完形ないしほぼ完形の土器が集中する。遺物は上・下層に区分して取り上げたが、出土状況に大きな違いはなく厳密な区分ではない。主要な遺物の出土地点は、本書に添付されているCD-ROMに格納したCD-ROM添付データ3を参照とする。時期はC-2期が中心となるが、上層資料にはC-3期の資料も含まれる。図示した資料は、図版55～65-282～603・図版87-1375・1376だが、このうち上層として取り上げたものは、図版64・65-488～603である。	SU 01 CD-ROM 添付データ3
調査区の南部に位置する。NR 02の左岸付近にあたる。面積0.8 m ² 程度の範囲に土器が集中するが、小規模で図化できる資料に乏しい。時期はC-2期。図示した資料は、図版66-604～619である。	SU 02
調査区の南部に位置する。NR 02の左岸沿いでSZ 02の西側にあたる。面積0.4 m ² 程度の範囲に土器が集中するが、小規模で図化できる資料に乏しい。時期はC期か。図示した資料は、図版66-620～623である。	SU 03
調査区北部の遺構空白部分に位置する。やや散在的に広がる遺物集中部分を呼称する。小規模で図化できる資料に乏しい。時期はC-2期。図示した資料は、図版66-624～630・図版87-1369である。	SU 04
調査区の西～南部に位置する。B区では左岸が確認できた。出土遺物は土器類がややまとまり、SU 02・03などの集中部分も確認できるが、A区とは異なり木製品がほとんど出土していない。おおむねA区の埋土3・4群に対応するが、分層による取り上げは実施していない。時期はC-2期が主体となる。図示した資料は、図版67・68-631～682・図版86-1361である。	NR 02
(4) C区	
B区の北側、D区の南側に位置する調査区である。	
調査区の南部に位置する。西側が調査区外で、南西部分を攪乱により破壊される。また、北東隅がSB 02と重複しこれを切る。平面形は南壁がやや歪むが、確認できる南北方向の一边は4.6 m、東西方向は3.6 mまで計測できる。深さは0.1 m。主柱穴はSK 94で、	SB 01 図版 20

	S K 95 もやや位置が南東にずれるが、その可能性が強い。他は確認できない。埋土は黒褐色シルトと暗灰黄色シルトの斑土を基調とし、出土遺物は図示できる資料は得られなかったが、C 期に属する土器片などが出土している。
S B 02 図版 21	調査区の南部に位置する。幅 0.4 ～ 0.8 m、深さ 0.1 m の幅広の溝が南東隅を残して方形にめぐる。東西方向が 4.5 m、南北方向が 4.3 m の、幅広の周溝状の掘方のみを残存させる竪穴住居と理解しておく。南西隅が S B 01 と重複しこれに切られる。支柱穴は S K 84・82 で、他は確認できない。周溝状の掘方（S D 50）部分の埋土は黒褐色シルトと暗灰黄色シルトの斑土を基調としている。時期は C 期。図示した資料は、周溝状の掘方から出土した図版 71 － 781 ～ 784 である。
S B 03 図版 22	調査区の東部に位置する。東側の一部が調査区外となる。北西隅が S B 04 と重複しこれに切られる。平面形はやや歪むが、確認できる一辺は 3.6 m で、南西から北東の一辺は 3.4 m まで計測できる。幅 0.6 m、深さ 0.1 m と、やや幅広の周溝を北西と南東の一辺と南西の一部に持つ。S K 81 は支柱穴であろうが、他は確認できない。埋土は黒褐色シルトと暗灰黄色シルトの斑土を基調とし、出土遺物には図示できる資料は得られなかったが、C 期に属する土器片などが出土している。
S B 04 図版 23	調査区の東部に位置する。一部を確認したのみで、東側のほとんどは調査区外となる。南西隅で S B 03 と北側が S B 05・S D 01 と重複し S B 03・S B 05 を切り、S D 01 に切られる。南北方向は 4.7 m、東西方向は 2.0 m まで計測できる。S K 69 は支柱穴であろうが、他は確認できない。西壁の中央には幅 0.3 m、深さ 0.1 m の周溝が、2.8 m 程度確認できたが、端部はいずれも隅に達していない。埋土は黒褐色シルトと暗灰黄色シルトの斑土を基調としている。時期は C 期。図示した資料は、図版 71 － 785・786・図版 87 － 1377 だが、このうち 786 は支柱穴（S K 69）出土。
S B 05 図版 24	調査区の中央部に位置する。S B 04・S D 01 と重複し、これらに切られる。形状は長辺 5.3 m、短辺 5.2 m、深さ 0.1 m のほぼ正方形となる。S K 64 は支柱穴であろうが、他は確認できない。東側に S D 47 とした幅 0.9 m ～ 0.7 m をはかる幅広の周溝状の掘方を持つ。埋土は黒褐色シルトと暗灰黄色シルトの斑土を基調としている。時期は C 期。図示した資料は、図版 71 － 787 である。
S B 06 図版 25	調査区の中央部に位置する。形状は南北方向が 5.0 m ～ 4.5 m、東西方向が 4.3 m とやや歪む。深さは 0.05 m と浅い。支柱穴は確認できない。北東隅の S K 108 は周溝状の掘方となるのかもしれない。埋土は黒褐色シルトを基調としている。時期は C － 3 期。図示した資料は、図版 71 － 788 ～ 792 である。
S B 07 図版 26	調査区の北部に位置する。東側は調査区外となる。南北方向は 5.5 m、東西方向は 3.6 m まで計測できる。外側には幅 1.1 m、深さ 0.3 m の、幅広の周溝状の掘方（S D 46）が方形にめぐる。S K 60・61 は支柱穴であろう。埋土は黒褐色シルトと暗灰黄色シルトの斑土を基調とし、周溝状の掘方は灰色シルトと黄灰シルトを埋土としている。時期は C － 3 期。図示した資料は、図版 71 － 793 ～ 808 だが 800 ～ 808 は周溝（S D 46）出土である。
S B 08 図版 27	調査区の北部に位置する。北側が S B 09・10 と重複し、S B 09 を切り S B 10 に切られる。東西方向が 4.8 m、南北方向は、5.4 m まで計測できるが、北側が S B 10 によ

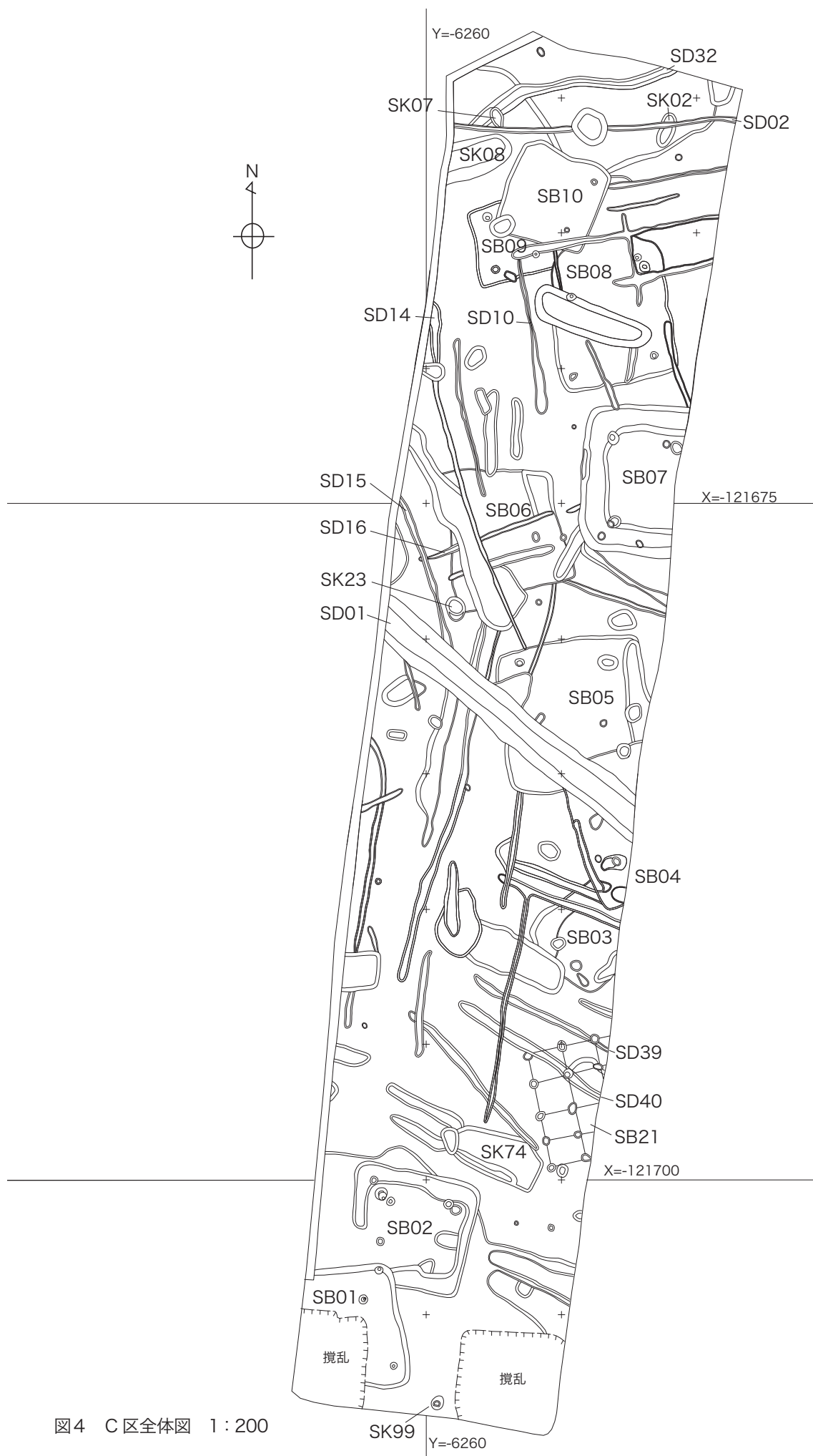


図4 C区全体図 1:200

	り不鮮明となる。主柱穴は確認できない。埋土は黒褐色シルトを基調としている。時期はC期か。図示した資料は、図版71－809である。
S B 09 図版 28	調査区の北部に位置する。東側がS B 08・10と重複しこれらに切られる。形状はやや歪むが、南北方向は2.9 mで、東西方向は2.9 mまで計測できる。S K 11は主柱穴であろう。埋土は黒褐色シルトを基調としている。図示できる資料は得られなかったが、C期に属する土器片などが出土している。
S B 10 図版 29	調査区の北部に位置する。北側がS B 08・09と重複し、これを切る。規模は東西方向が3.5 m、南北方向が3.4 mで、深さ0.1 mのほぼ正方形となるが、北西隅がやや歪む。S K 66・67は主柱穴であろう。埋土は黒褐色シルトを基調としている。図示した資料は、図版71－810～813である。時期はC－3期。
S B 21 図版 39	調査区の東部に位置する。S K 41・42・44・45・47・48・49・50・86・87・88・89・104・107・108で構成される総柱掘立柱建物である。東側が調査区壁に接したため、この部分は最終段階で拡張して確認した。S K 87・88・107がS D 40と、S K 89がS D 39と重複するがいずれも切られる。西側の柱穴は直径0.3 m程度の平面形が円形のものが多いが、楕円形も含まれる。南北方向は4間で、各柱間は柱穴中央で計測して北から1.1 m、1.2 m、0.9 m、1.1 mをはかる。東西方向は2間まで確認した。北側の柱間は、やはり柱穴の中心で計測すると、西から1.4 m、1.3 m。各柱穴の埋土は黒褐色シルトと暗灰黄色シルトの斑土を基調としている。出土遺物はほとんど得られなかったが、S K 50からは、C期に属する図版71－814が出土している。
S K 02	調査区の北部に位置する。S D 02と重複しこれに切られる。平面形が楕円形で、規模は長径1.3 m、短径0.6 mで、深さは0.05 mと浅い。埋土は黒褐色と暗灰黄色シルトの斑土を基調とする。時期はC期か。図示した資料は、図版71－815である。
S K 07	調査区北部に位置する。S D 32・02と重複し、S D 32を切りS D 02に切られる。平面形は楕円形で、規模は短径が0.5 mで、長径は0.8 mまで計測できる。深さは0.2 m。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期はC期か。図示した資料は、図版71－816・817である。
S K 08	調査区北部に位置する。西側は調査区外となる。溝とするべきかもしれない大型のやや細長い土坑。短径は1.8 mで、長径は2.8 mまで計測できる。深さは0.3 m。埋土は黒色ないし黒褐色シルトを基調とする。時期はC期。図示した資料は、図版72－818・819である。
S K 23	調査区の中央部に位置する。S B 06と重複しこれを切る。平面形はやや歪む楕円形で、規模は長径0.9 m、短径0.7 m、深さ0.1 m。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期は特定できない。図示した資料は、図版72－820である。
S K 74	調査区の中央部に位置する。平面形は不整形で、規模は長径3.4 m以上、短径1.8 m、深さ0.1 m。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期はC－1期。図示した資料は、図版72－821・822である。
S K 99	調査区の南部に位置する。平面形が楕円形で、規模は長径0.6 m、短径0.5 m、深さ0.3 m。埋土は暗灰黄色シルトを基調とする。時期はC－1期。図示した資料は、図版72－823である。

調査区の中央部に位置するやや大規模な溝。幅 1.3 m、深さ 0.5 mをはかる。S B 04・05・S D 15 と重複しこれらを切る。検出長は 11.6 mだが、両端はともに調査区外に伸びる。主軸はE－39°－Sをはかる。埋土は黒褐色シルトを基調としている。時期はC－3期。図示した資料は、図版 72－824～838 である。	S D 01 図版 44
調査区の北部に位置する。全長 5.8 mを検出したが、北端はS B 09 と重複しこれを切る。幅は 0.2 mをはかるが、南端付近は 0.5 mとやや広くなる。深さは 0.1 m。主軸はE－79°－Sをはかる。埋土は黒褐色シルトを基調としている。時期はC期。図示した資料は、図版 72－839 である。	S D 10
調査区の西部に位置する。全長 10.5 mを検出したが、北端は調査区外に伸びる。S B 06 と重複しこれを切る。南端はS B 05 と接する。幅は 0.2 mだが、北側はやや広くなる。深さは 0.1 m。主軸は北側の 6 mが、E－74°－S、これ以南がE－67°－Sをはかる。埋土は黒褐色シルトを基調としている。時期はC期。図示した資料は、図版 72－840 である。	S D 14
調査区の西部に位置する。全長 13.5 mを検出したが、北端は調査区外に伸びる。S D 01 と重複しこれに切られる。北側約 6 mはS D 14 と並行し、幅は 0.2 m、深さは 0.1 m。この部分の主軸はE－72°－Sをはかる。これより南側は西側に屈曲し、主軸はS－14°－Wで、幅は 0.9～0.2 mと一定でない。埋土は黒褐色シルトを基調としている。時期はC期か。図示した資料は、図版 72－841 である。	S D 15
調査区の中央～西部に位置する。全長 4.5 mを検出した。S B 06・S D 14・15 と重複し、S B 06 を切り、S D 14・15 に切られる。幅は 0.2 m、深さは 0.05 mと浅い。主軸はN－70°－Wをはかる。埋土は黒褐色シルトを基調としている。時期はC期。図示した資料は、図版 72－842 である。	S D 16
調査区の北部に位置する。全長 7.6 mを検出したが、東端は調査区外に伸びる。西端はS D 02 に切られる。幅は 0.4 m、深さは 0.1 m程度だが、西端付近はやや幅広となる。主軸は西端付近がN－51°－E、中央部分がN－85°－E、東側がN－72°－Eと蛇行する。埋土は黒褐色シルトを基調とし、遺物は東側に集中して出土している。時期はC－2期。図示した資料は、図版 72－843～849 である。	S D 32

(5) D区

C区の北側、E区の南側に位置する調査区である。

調査区の中央部に位置する。東側を攪乱により破壊される。確認できる南北方向の一辺は 3.5 mで、東西方向は 3.2 mまで計測できる。南東隅がやや歪む形状となる。S K 73b・74 は支柱穴であろうが、他は確認できない。西壁の南隅には幅 0.1 m、深さ 0.05 mの周溝が 1.0 m程度確認できる。埋土は暗灰黄褐色シルトを基調とし、遺物は東側に集中して出土している。時期はC－2期。図示した資料は、図版 75－912～914 である。	S B 11 図版 30
---	-----------------

調査区の中央部に位置する。規模は東西方向 2.6 m、南北方向 3.7 m、深さ 0.1 mのややゆがむ長方形となる。S K 77・81・83 は支柱穴であろうが、他は確認できない。南壁の西隅には幅 2.0 m、深さ 0.1 mの周溝が 1.2 m程度確認できる。埋土は黒褐色シルトを基調とし、遺物は東側から集中して出土している。時期はC－2期。図示した資料は、図版 75－915～919 である。	S B 12 図版 31
---	-----------------

S B 13 図版 32	調査区の北部に位置する。S B 14・S K 87 と重複し、S B 14 に切られ、S K 87 を切る。形状が歪むが、一応竪穴住居に含める。確認できる南北方向の一辺は 4.6 m で、東西方向は 4.2 m まで計測できる。支柱穴は確認できなかった。埋土は黒褐色シルトを基調とする。図示できる資料は得られなかったが、C 期に属する土器片などが出土している。
S B 14 図版 33	調査区の北部に位置する。S B 13・15・S D 22 と重複し、S B 13・15 を切り、S D 22 に切られる。規模は東西方向が 2.9 m、南北方向は 3.9 m、深さ 0.2 m の長方形となる。北西隅がやや張り出す。S K 86 は支柱穴であろうが、他は確認できない。埋土は黄灰色シルトを基調としている。時期は C - 2 期。図示した資料は、図版 75 - 920 ~ 929 である。
S B 15 図版 33	調査区の北部に位置する。S B 14・S D 22 と重複しこれらに切られる。東西方向は 2.6 m まで、南北方向は 2.6 m まで計測できる。支柱穴は確認できなかった。埋土は黒褐色シルトを基調としている。時期は C - 2 期。図示した資料は、図版 75 - 930 ~ 933 である。
S B 16 図版 34	調査区の北部に位置する。北側と西側の一部が調査区外となる。幅 0.8 ~ 0.4 m、深さ 0.1 m の幅広の状の掘方が方形にめぐる。周溝状の掘方のみを残存させる竪穴住居と理解しておく。東西方向が 4.0 m まで、南北方向は 1.6 m までが計測できる。支柱穴は確認できなかった。周溝の埋土は暗灰黄色シルトを基調とする。図示できる資料は得られなかったが、C 期に属する土器片などが出土している。
S K 05	調査区の南部に位置する。平面形はやや歪む楕円形で、規模は長径 2.4 m、短径 1.4 m、深さ 0.2 m。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期は C - 2 期。図示した資料は、図版 75 - 934・図版 87 - 1371 である。
S K 15	調査区の東部に位置する。平面形が円形で、規模は直径 0.4 m、深さ 0.7 m となる。埋土は暗灰黄色シルトを基調とする。時期は C - 2 期。図示した資料は、図版 75 - 935 である。
S K 25 図版 42	調査区の西部に位置する。平面形がやや歪む卵形で、規模は長径 4.6 m、短径 2.6 m、深さ 0.1 m となる。埋土は黒褐色シルトを基調とし、遺物は多量で出土位置は北側に集中する傾向にある。時期は C - 2 期。図示した資料は、図版 75 - 936 ~ 957 の他、篋被付柳葉式銅鏃 (1391) や小型鉄製品 (1392) も含まれており注目できる。
S K 44	調査区の東部に位置する。東側が調査区外。規模・形状とも明らかにできない。埋土は暗灰黄色シルトを基調とする。時期は C 期か。図示した遺物は、図版 88 - 1384 である。
S K 87	調査区の北部に位置する。S B 13 と重複しこれに切られる。平面形は楕円形で、規模は短径が 0.3 m、長径は 0.7 m まで計測できる。深さは 0.05 m と浅い。埋土は暗灰黄色シルトを基調とする。図示した資料は、図版 75 - 958 である。
S K 96	調査区の北部に位置する。平面形は楕円形で、規模は短径が 0.5 m、長径は 0.7 m まで計測できる。深さは 0.2 m。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期は C 期。図示した資料は、図版 75 - 959 である。
S D 10	調査区の南部に位置する。全長 6.5 m を検出した。S D 09・07 と重複し、S D 09 を切り、S D 07 に切られる。幅は 0.8 m、深さは 0.2 m。主軸は N - 59° - E をはかる。埋土は暗灰黄色シルトを基調としている。時期は C 期。図示した資料は、図版 76 - 960 である。
S D 22	調査区の北部に位置する。全長 8.5 m を検出したが、北側は調査区外に伸びる。S B 14 と重複しこれを切る。幅は 1.0 ~ 1.6 m。検出部分の中央ではやや細くなる。深さは 0.3

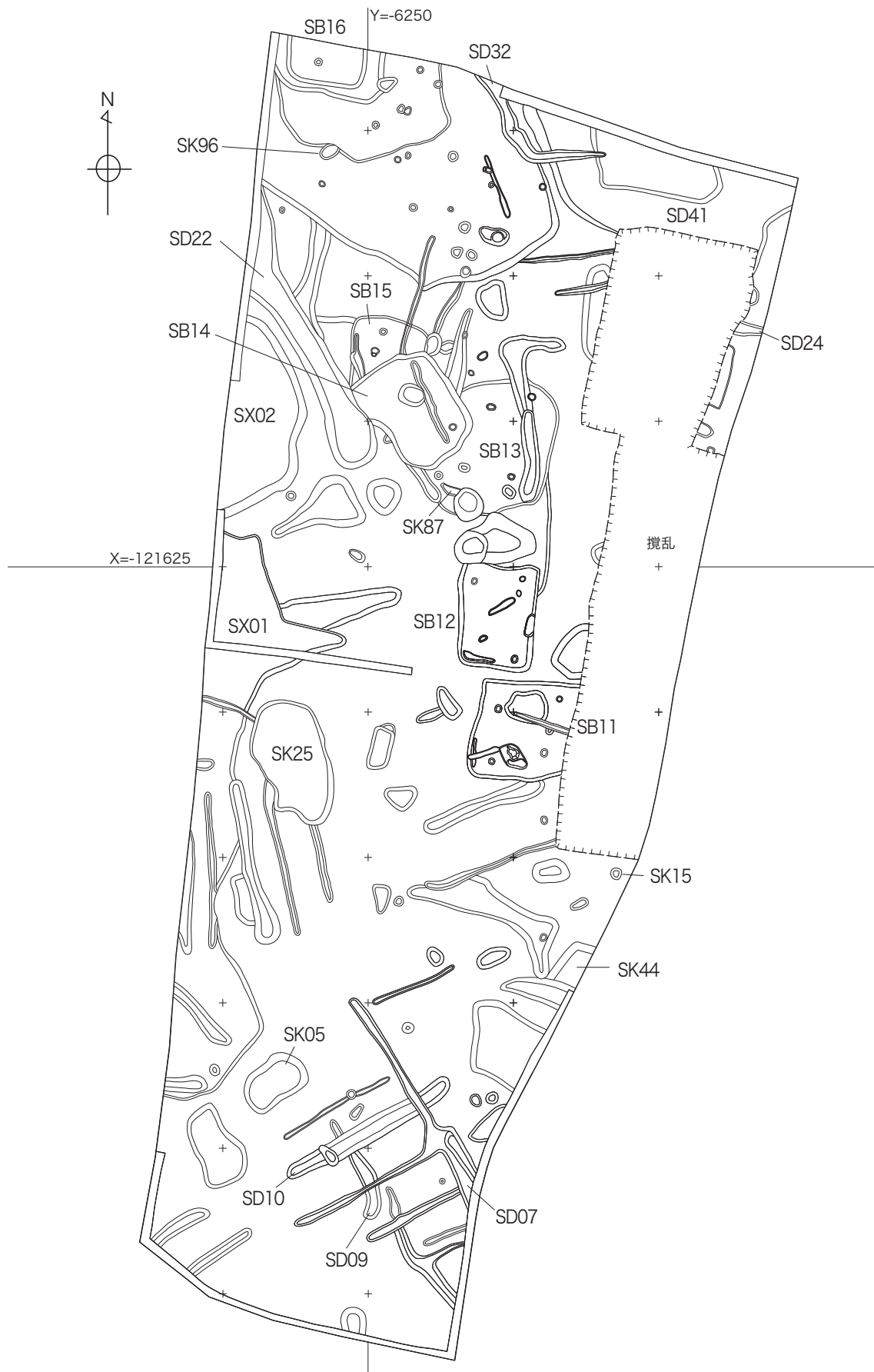


図5 D区全体図 1:200

	～0.5 m。主軸はE－63°－Sをはかる。埋土は黒褐色シルトを基調としている。時期はC期。図示した資料は、図版76－961・962である。
S D 32	調査区の北部に位置する。全長8.0 mを検出したが、北側は調査区外に伸びる。S D 41と重複しこれを切る。幅は2.0～5.3 m、深さは0.2 m。主軸は、E－35°－Sをはかり、鈍く屈曲する。埋土は暗灰黄色シルトを基調としている。時期はB－2～C期。図示した遺物は、図版76－963～969である。
S D 41	調査区の北部に位置する。全長10.3 mを検出した。コの字状に鈍く屈曲し、北側の二か所は調査区外に伸びる。一応溝に含めたが、形状と幅が一定しない不正形となる。深さは0.1 mだが、南東の屈曲部分は0.7 mと深くなる。埋土は暗灰黄色シルトを基調とし、遺物は東側に集中して出土しているが、時期はB～C期とばらつく。図示した資料は、図版76－970～992である。
S X 02	調査区の北部に位置する。西側が調査区外となる。検出部分は円形を呈するが壁の立ち上がりが鈍く、人為的な掘削とは判断できなかったため、土坑とは一応区別している。壁面で計測した長さは7.2 m、深さは0.2 mとなる。埋土は黄灰色シルトを基調とする。時期はC期。図示した資料は、図版76－993～997である。
(6) E区	
今回の調査区のうち、最も北側に位置する。東壁部付近ではほぼ全域に灰色シルト層上面まで検出されているが、Ⅲ期の遺構が集中的に検出されている。	
S B 17 図版 35	調査区の南部に位置する。東側の一部が調査区外となり、南東隅は攪乱により破壊される。また、S B 18と重複しこれに切られる。規模は、南北方向が3.9 m、東西方向は3.6 mまで計測できる。深さは0.05 mと浅い。支柱穴は確認できなかった。埋土は灰色シルトを基調としている。図示できる資料は得られなかったが、C期に属する土器片などが出土している。
S B 18 図版 36	調査区の南部に位置する。東側の一部が調査区外となり、南側の一部は攪乱により破壊される。また、S B 17と重複しこれを切る。南北方向は2.9 mで、東西方向は3.2 mまで計測できる。P 07は支柱穴であろうが、他は確認できない。埋土は灰色シルトを基調とする。時期はC期か。図示した資料は、図版83－1229・1230である。
S B 19 図版 37	調査区の東部に位置する。東側の一部が調査区外となる。また、S K 80・81・S D 14などと重複しこれらに切られる。東西方向は4.0 mまで、南北方向は5.0 mまで計測できる。支柱穴は確認できなかった。埋土は黒褐色シルトを基調している。図示できる資料は得られなかったが、C期に属する土器片などが出土している。
S B 20 図版 38	調査区の東部に位置する。S K 15と重複しこれに切られる。規模は南北4.2 m、東西3.3 m、深さ0.1 mの長方形となる。P 01・02・03・04は支柱穴であろう。埋土は黒褐色シルトを基調とする。図示した資料は、図版83－1231・1232である。
S K 02	調査区の北部に位置する。平面形は雫形で、規模は長径2.2 m、短径は最大で1.3 m、深さは0.1 mをはかる。埋土は褐灰色シルトを基調とする。時期はD期。図示した遺物は図版83－1234～1238である。
S K 09	調査区の中央部に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.8 m、短径0.7 m、深さ0.1 m。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期はC期。図示した資料は、図版83－1239である。

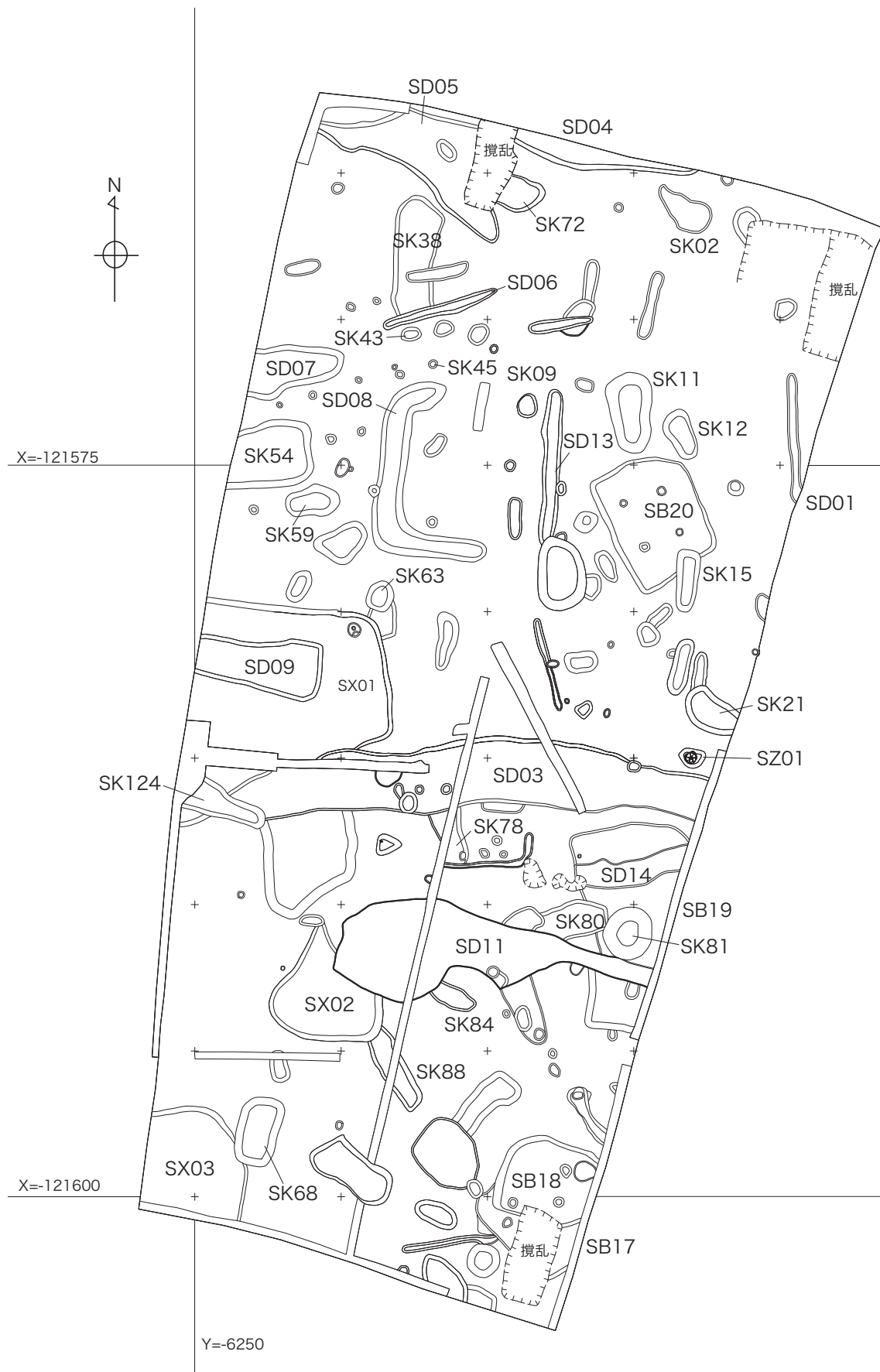


図6 E区全体図 1:200

S K 11	調査区の東部に位置する。平面形は卵形で、規模は長径 2.8 m、短径は最大で 1.6 m、深さは 0.4 m をはかる。埋土はにぶい黄褐色シルトと黄灰色シルトの斑土を基調とする。時期は D 期。図示した資料は、図版 83 - 1240 ~ 1242 である。
S K 12	調査区の東部に位置する。平面形は卵形で、規模は長径 1.8 m、短径は最大で 1.0 m、深さは 0.1 m をはかる。埋土は暗灰黄色シルトを基調とする。時期は D - 1 期。図示した資料は、図版 83 - 1243・図版 90 - 1394 である。
S K 15	調査区の東部に位置する。S B 20 と重複しこれを切る。平面形は楕円形で、規模は長径 2.2 m、短径 0.8 m、深さ 0.1 m。埋土は黄灰色シルトを基調とする。時期は C 期。図示した資料は、図版 83 - 1244 である。
S K 21	調査区の東部に位置する。東側が調査区外となる。検出できた範囲では平面形は楕円形で、規模は短径が 1.2 m で、長径は 2.0 m まで計測できる。深さは 0.2 m。埋土は灰黄褐色シルトを基調とする。時期は D - 1 期。図示した資料は、図版 83 - 1245 ~ 1247 である。
S K 38	調査区の北部に位置する。南側が S D 06 に切られる。平面形は楕円形で、規模は短径が 1.5 m で、長径は 4.0 m まで計測できる。深さは 0.1 m。埋土は灰色シルトを基調とする。時期は D - 2 期。図示した資料は、図版 83 - 1249 である。
S K 43	調査区の北部に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径 0.7 m、短径 0.5 m、深さ 0.1 m。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期は C 期。図示した資料は、図版 83 - 1250 である。
S K 45	調査区の北部に位置する。平面形は円形で、規模は直径 0.3 m、深さ 0.1 m。埋土は灰色シルトを基調とする。時期は D - 1 期。図示した資料は、図版 83 - 1251 である。
S K 54	調査区の西部に位置する。西側が調査区外となる。検出できた範囲では平面形は長方形で、規模は短辺が 2.3 m で、長辺は 2.7 m まで計測できる。深さは 0.1 m。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期は C 期。図示した資料は、図版 83 - 1252 ~ 1254・図版 88 - 1392 である。
S K 59	調査区の西部に位置する。平面形は楕円形で、規模は、長径 1.9 m、短径 1.1 m、深さ 0.3 m。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期は C 期。図示した資料は、図版 83 - 1255 ~ 1258 である。
S K 63	調査区の中央部に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径 1.1 m、短径 0.9 m、深さ 0.2 m。埋土はにぶい黄色シルトと黄灰色シルトの斑土を基調とする。時期は C 期か。図示した資料は、図版 83 - 1259・1260 である。
S K 68	調査区の南部に位置する。S X 03 と重複しこれを切る。平面形は長方形で、規模は長辺 2.4 m、短辺 1.4 m、深さ 0.3 m。埋土は黄灰色シルトを基調とする。時期は C - 1b 期か。図示した資料は、図版 83 - 1261・1262 である。
S K 72	調査区の北部に位置する。東側は攪乱により破壊される。検出できた範囲では平面形は楕円形で、規模は短径が 1.2 m で、長径は 1.4 m まで計測できる。深さは 0.1 m となる。埋土は灰色シルトを基調とする。時期は D - 1 期。図示した遺物は、図版 83 - 1263 である。
S K 78	調査区の中央部に位置する。北側が S D 03 と重複しこれに切られる。平面形は歪む楕円形か。規模は長径が 1.9 m まで、短径は 1.1 ~ 0.9 m まで計測できる。深さは 0.1 m。埋土は黄灰色シルトを基調とする。時期は C - 2 期。図示した資料は、図版 83 - 1264・1265 である。

調査区の東部に位置する。S B 19・S K 80 と重複しこれらを切る。平面形は楕円形で、規模は長径 1.8 m、短径 1.7 m。深さ 0.6 m。埋土はにぶい黄色シルトと黄灰色シルトの斑土を基調とする。時期はD－1 期。図示した資料は、図版 83－1266 である。	S K 81
調査区の南部に位置する。西側がS D 11 により切られる。平面形は楕円形で、規模は短径 0.7 m、長径は 1.4 m まで計測できる。深さは 0.05 m と浅い。埋土は黄灰色シルトを基調とする。時期はD－1 期。図示した資料は、図版 83－1267 である。	S K 84
調査区の南部に位置する。S X 02 と重複しこれに切られる。溝とすべきかもしれない細長い土坑で、規模は短辺が 0.9 m で、長辺は 2.8 m まで計測できる。深さは 0.1 m。埋土は灰色シルトを基調とする。時期はD－1 期。図示した資料は、図版 83－1268 である。	S K 88
調査区の東部に位置する土器棺墓。掘方の平面形は、歪む楕円形で、規模は長径 0.9 m、短径 0.7 m。深さ 0.1 m。大振りの太頸壺（1248）を用いた単棺で、底部を上に向けて納める。埋土はにぶい黄色シルトと黄灰色シルトの斑土を基調とし、骨片などは検出されなかった。時期はB－2 期か。	S Z 01 図版 43
調査区の北～東部に位置する。全長 4.5 m を検出したが、南側は調査区外に伸びる。幅は 0.4 m、深さは 0.1 m。主軸はE－88°－S をはかる。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期は不明。図示した資料は、図版 83－1269 である。	S D 01
調査区のほぼ中央に位置する。やや大規模な溝で、幅は中央で 2.3 m と最大、東側と西側は狭くなる。深さは 0.1 m。検出長は 15.8 m だが、東側は調査区外に伸び、西端はS K 124 により切られる。主軸は東側がE－8°－S、西側はN－83°－E をはかる。埋土は黄灰褐色シルトを基調とする。時期はD 期。図示した資料は図版 83－1270～1279 である。	S D 03
調査区の北部に位置する。検出長は 6.3 m だが、ほとんどが調査区外に伸び、幅も主軸も計測できないが一応溝と理解する。埋土は黄灰色シルトを基調とする。時期はD－2 期。図示した資料は、図版 83－1280・1281 である。	S D 04
調査区の北部に位置する。北側が調査区外に伸び、東側の一部は攪乱により破壊される。形状が一定しないが、一応溝として報告する。溝幅は東側が広く、最大値は 3.1 m、西端は最小値の 0.4 m となる。深さは 0.1 m。主軸はE－15°－S をはかる。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期はC－1 期。図示した資料は、図版 84－1282 である。	S D 05
調査区の北部に位置する。全長 4.1 m を検出した。S K 38 と重複しこれを切る。幅は 0.6 m、深さは 0.1 m。主軸はN－74°－E をはかる。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期はD－2 期。図示した資料は、図版 84－1283 である。	S D 06
調査区の中央部に位置する。全長 9.3 m を検出した。幅は 0.7～1.1 m、深さは 0.2 m。主軸は一定せず、コの字状となる。埋土は黄灰色を基調とする。時期はC 期。図示した資料は、図版 84－1284 である。	S D 08
調査区の西部に位置する。全長 4.3 m 以上を検出したが、西側は調査区外に伸びている。幅は 1.4～2.1 m、深さは 0.05 m。主軸はE－10°－S をはかる。埋土は黒褐色を基調とする。時期はD－2 期。図示した資料は、図版 84－1285 である。	S D 09
調査区の南部に位置する。S B 19・S K 80・84・S X 02 と重複しこれらを切る。全長 10.6 m を検出したが、東側は調査区外に伸びる。幅は一定せず、西側端部付近では最	S D 11

大値 3.5 mをはかるが、東端付近では最小値の 0.6 mとなる。深さは 0.05 m。主軸は E - 16° - Sをはかる。埋土は黄灰色シルトを基調とする。時期は D 期。図示した資料は、図版 84 - 1286 ~ 1294 である。

S D 14 調査区の東部に位置する。S B 19 と重複しこれを切る。全長 3.8 mを検出したが、東側は調査区外に伸びる。幅は 0.9 m、深さは 0.1 m。主軸は N - 82° - Eをはかる。埋土は黄灰色シルトを基調とする。時期は D - 1 期。図示した資料は、図版 84 - 1295 である。

S X 01 調査区の西部に位置する。不整形で壁の立ち上がりが鈍く、人為的な掘削とは判断できなかったため、土坑とは一応区別している。深さは 0.1 m。埋土は黒褐色シルトを基調とする。時期は D - 2 期。図示した資料は、図版 84 - 1296 ~ 1298 である。

S X 02 調査区の西部に位置する。S K 88・S D 11 と重複し、S K 88 を切り、S D 11 に切られる。不整形で壁の立ち上がりが鈍く人為的な掘削とは判断できなかったため、土坑とは一応区別している。深さは 0.05 mと浅い。埋土は灰色シルトを基調とする。時期は D - 1 期。図示した資料は、図版 84 - 1299・1300 である。

S X 03 調査区の南西部に位置する。西側と南側が調査区外となる。検出部分は円形を呈するが壁の立ち上がりが鈍く、人為的な掘削とは判断できなかったため、土坑とは一応区別している。壁面で計測した長さは東西が 3.5 mまで、南北が 3.1 mまで計測できる。深さは 0.2 m。埋土は褐灰色シルトを基調とする。時期は C 期。図示した資料は、図版 84 - 1301 ~ 1305 である。
(池本正明)



第Ⅲ章 遺物

出土遺物は整理箱で370箱得られた。土器・陶器・土製品・石製品・金属製品・木製品などがみられるが、数量は土器が圧倒的となる。以下、土器から順に報告するが、計測値や色調などは本書に添付されているCD-ROMに格納した遺物台帳（CD-ROM添付データ2）を参照とする。なお、土器の容量については実測図上で高さ5mmの円錐台に分割し、これを集計する方法を取った。左右対称でない資料は中心線を左右に移動した補正值、直接計測が可能な資料には水と粃殻を使用した計測値も記入した。

容 積 計 算

1 土器（図版45～85-1～1359）

（1）時期区分

ここでは今回の出土遺物で主体となる土器についてA区から順に説明を加えるが、記述の煩雑さを回避するため、事前に整理を試みる。

まず、時期的には弥生時代前期頃～中期（A期）、弥生時代中期中葉～後葉（B期）、弥生時代後期～古墳時代前期（C期）、古代～中世（D期）にまとまりが確認できる。各期はさらに細分し、A期については、弥生時代前期のものをA-1期、岩滑式～岡島式をA-2期とし、前者をA-2a期、後者をA-2b期と区分する。B期については弥生時代中期中葉～後葉をあて、瓜郷式と古井式をB-1期とし、前者をB-1a期、後者をB-1b期とする。B-2期は長床式。C期は弥生時代後期～古墳時代初頭で、川原上層Ⅰ・Ⅱ式（≒八王寺古宮式・山中式）をC-1期とし、前者をC-1a期、後者をC-1b期とする。次に川原上層Ⅲ式Ⅰ・Ⅱ段階（≒廻間Ⅰ式）をC-2期、川原上層Ⅲ式Ⅲ段階～Ⅳ式（≒廻間Ⅱ～Ⅲ）をC-3期と区分する。D期については、古代をD-1期とし、中世以降をD-2期にそれぞれまとめた。

（2）A区（図版45～52-1～202）

1～202はNR02出土。前述のように、NR02は埋土1群～5群に区分して掘削した（図2）。

1～7は埋土1群出土。時期はD-1期である。

1は須恵器杯。使用痕は確認できないが、外底部に不鮮明ではあるが墨痕が観察できる。折戸10号窯式。2は須恵器蓋。東山50号窯式。3は灰釉陶器長頸瓶。底部片で、やはり使用痕は確認できないが、外底部に墨書『一』が観察できる。折戸10号窯式。4～7は表土剥ぎなどにより出土した資料。ややさかのぼるが、一応ここで扱う。4は壺で端部を折り返す。体部～頸部への屈曲は明瞭。5は北陸・山陰系甕の口縁部片か。体部内面はヘラケズリ調整。6も壺で端部を折り返す。端部には縄文、口縁部外面の折り返し部分には布目圧痕が観察できる刺突を施す。南関東系か。7は二重口縁壺の頸部片。丁寧なミガキ調整を施す精製品で、頸部は柱状で大きく屈曲する。上面には竹管による円形刺突を並べる。

埋土1群
木簡に関連

埋土2群

8～61は埋土2群出土。時期はC－3期が主体となる。

線刻資料

8は単純口縁の壺だが、肩部に線刻が確認できる。7本の線刻を弧状から直線へグラデーション状に並べる。線刻は16にも確認できる。壺の体部片で線刻は一部を欠く。残存部分は6本の横位に延びる直線となり、上部2本が浅く下部4本が深く施される。9は口縁部が外彎するが、内面には弱い段を持つ。口縁端部には内傾する面を持ち、イタによる羽状の連続刺突を施す。体部はやや下膨れで外底部は環状底となる。容量は約10.4ℓ。10～12は長頸壺で、いずれも口縁部が短い。12は肩部と頸部の境界が不明瞭となる。10は全形を残し、体部の最大径は中央より下がる。頸部は内彎気味。口縁部の一部を打ち欠くのか(図7)。13も壺で、肩部と頸部の境界外面に低い突帯



図7 10部分

口縁部
打ち欠き

をめぐらす。19は二重口縁壺の頸部。丁寧なミガキ調整を施す精製品で無文。頸部は柱状部分から屈曲する。20～23・25は壺の体部片だが、いずれも最大径は中央より下がる。23は底部が上げ底となり、外面に貝殻による刺突を並べる。20・25・29には外面に赤彩が確認できる。25・29は波線文を施す。25がへう描き、29はイタによる刺突。30は高杯の杯部片か。外面には墨書の可能性を持つ中央で交差するラインが確認できる。

墨書か

31～40は甕。33はやや長い受口状口縁を持つ。34はく字状口縁甕の口縁部片。破片の中央には、墨痕の可能性を持つ楕円形の変色部分が確認できる。36～38は平底の甕。37の底部は環状底となる。幅広のハケメ調整の後にナデ調整によりこれを消す。38は甕に含めたが壺かもしれない。下胴部に焼成後穿孔を施す。41～52は高杯。41・42・45・46・48・49が有稜高杯。41・42・46・49はやや深い杯部を持つが、44・45は浅い。44～46は口縁端部内側に内傾する面を有する。また、41は脚部片で、上方が柱状を呈した後に裾部で弱く内彎する。口稜比は41が46.9、42が58.2、45が31.2、46が45.3、49が50.8となる。43・50は椀形高杯。43は口縁部片で小型となる。49・50の脚部の上部にはへうによる直線文を積む。47・51・52は脚部片。51は裾部を欠くが、脚部は上方で柱状となり、屈折して裾で開く形状か。透かし穴は直径4mmと小型となる。上部にはクシによる直線文を積むが、雑な仕上げとなる。

口稜比＝
稜径
口縁部径×100

53は大型の鉢で外面にススが付着する。単純口縁で口縁部内面にミガキ調整を施す。54・55は小型丸底鉢。54は外面に横方向のミガキ調整を施し、底部はくぼむ。56は蓋。上面はフラットで屈曲して口縁部に至る。屈曲部分より上方は柱状となる。口縁部付近の内外面にはススが薄くリング状に付着する。57は小型鉢。内外面にはミガキ調整を施す。

58 はミニチュア壺で口縁部を欠く。外面は横位のミガキ調整。60 は小型の台杯甕。外面はハケメ調整。外面に被熱痕やススの付着は観察できない。61 は手焙形土器。ほぼ全形を留める。外面はハケメ調整による。覆部の内面には薄くススが付着する。

62 ～ 125 は埋土 3 群出土。時期は C - 2・3 期である。

62 ～ 89 は壺。62 は細身の体部を持ち、下方に弱い稜を持つ。頸部は不明瞭で口縁部には上端に面を持つ。肩部には対角線上の 4 か所に、線刻が浅く不鮮明に施されている。西遠江系で搬入品かもしれない。64 は口縁部片。柳ヶ坪型壺に類似するが、端部に下方に拡張された内傾する面を持つ。頸部外面はナデ調整を施し、肩部と境界には上端が尖る突帯が付く。口縁部の上面には漢字の『入』に類似する形状の線刻を施し、外周にはイタによる羽状の連続刺突を施す。66 は口縁端部に内傾面を持つ。67 は口縁部内面に明瞭な段を持つ。体部上方にはクシによる直線文と波状文を重ねる。頸部との境界部分には上端がやや丸い突帯を持つが、貼付部分が頸部との境界部よりやや上方となる。68 ～ 72 はほぼ全形を確認できる。いずれも体部の最大径は中央より下がる。体部にはハケメ調整を施すが、70 は体部最大径以下がヘラケズリ調整となる。体部下方にはススが付着し、煮沸に転用されたと思われる。なお、穿孔が体部下方に二か所確認できる（図 8）。いずれもほぼ円形で、図示した方が直径 12 mm、もう一つは直径 50 mm となる。破面にはススが付着しない。72 は腰部に弱い稜を持つ。73 ～ 75 は体部上方の破片である。73 はクシによる直線文と竹管による円形刺突を交互に重ねるが、上面に刺突を持たない円形浮文も確認できる。74 は頸部との境界に突帯、肩部には幅広のクシによる波状文と直線文を重ね、波状文の下部には部分的に上面に竹管による円形刺突を持つ円形浮文を並べる。75 はやや大型品で、クシによる直線文と波状文、竹管による円形刺突を重ねる。内面にはススが付着する。77 は口縁部から体部最大径付近までを大きく打ち欠く。図示していないが、82 も体部の最大径付近を打ち欠いている可能性を持つ。78 ～ 80 は長頸壺で 78・79 は頸部が短い。78 は口縁部付近で鈍く屈曲し、体部との境界が不鮮明となる。外面はラフなミガキ調整を施す。79 は頸部に縦位、体部に横位のミガキ調整。外面にはヘラによる連弧文を施す。80 は頸部がやや長い。体部の最大径はやや下がり、底部は上げ底状となる。88 は線刻か。85 は口縁部片でシャープに整形される。不明瞭だが、外面に赤彩を施して

埋 土 3 群
線 刻 資 料

体 部 に 穿 穴

線 刻 資 料 か



図 8 70 部分

いたのかもしれない。

90 ～ 102 は甕。90 ～ 96 は口縁部片。95 は受口状口縁を持つが、他はく字状口縁となる。93・94 は小型。いずれも外面はハケメ調整で、93 は内面にヘラケズリ調整を施す。97 ～ 101 は台部。外面は 97 ～ 99 がハケメ調整、100・101 はナデ調整による。101 はやや

邇るのか。102は北陸・山陰系の甕で大型品。容量は約24.3ℓとなる。器壁は薄く、外面はハケメ調整、内面は下方に縦方向のケズリ調整を施す。口縁端部の外面には10×5mm程度の範囲で布圧痕が1か所確認できる。

103～121は高杯。103～107・113は有稜高杯。106はやや邇るのか。上面にはクシによる直線文を施す。103～105の杯部は深い。103・104は口縁端部内側に内傾する面を有する。また、103にはやや高く内彎する脚が付き、上方にクシによる直線文を積む。113は杯部が浅く、少し下がるのか。口稜比は103が38.8、104が44.9、105が46.9となる。112は大振りな碗形高杯の口縁部片。115は高さ9.6cmと小型で、短い脚部にやや深い杯部が付く。116は有段高杯。杯部下半は弱い稜を持つ。罅部は内彎気味となる。121は碗型高杯と理解するが、器台の可能性も残す。脚部の裾を欠く。時期はやや下がるのか。108～111、117～120は脚部。108～111はやや高く内彎する形状となる。108・111の上方にはクシによる直線文を積む。114はほぼ中央で屈曲する形状。柱状となる上部にはクシによる直線文を積む。

122・123はミニチュア品でともに粗製となる。122は甕で低く粗雑な台が付く。外面はハケメ調整による。外面には薄くススが付着する。123は鉢。124・125は小型鉢。124はナデ調整をラフに施す粗製品、125はミガキ調整を施す精製品となる。

126～194は埋土4群出土。時期はC-1b～2期である。

126～157は壺。126・127は赤彩を施す。口縁部の上面にイタによる羽状の連続刺突を並べるが、127はやや不整形となる。また、127は肩部と頸部の境界に突帯を貼付するが、剥離して残存しない。130は単純口縁の壺だが、口縁端部にイタによる刺突を並べる。文様は全周せずに1/4程度にとどまり、間隔も一定ではない。131・134は体部上方の破片である。131は肩部と頸部の境界に、高さは低いが上端が尖る突帯を貼付する。肩部には幅の広いクシによる波状文と直線文を重ねる。134も同様の突帯が付くが、肩部はミガキ調整を施し無文となる。140は受口状を呈する口縁部片か。ナデ調整で仕上げられ、全面に赤色顔料が付着する。154は外面に縄文を施す。南関東系か。155～157は赤彩を施す体部片。155・157は波線文が確認できるが、155はこれを赤彩のみで表現し、157はイタによる刺突後に赤彩を施す。

158～174は甕。158はく字状口縁甕。外面はハケメ調整で、内面には縦方向のヘラケズリ調整を施す。162・163は受口状口縁を持つ。屈曲部分の外面にイタによる刺突を並べる。162は鉢とすべきかもしれない。164はS字甕でA類。165は北陸・山陰系の甕。口縁部の小片で、頸部の屈曲はナデ調整によるもので、やや弱い。166・167は体部片。外面にはタタキ調整を施すが、166はヘラケズリ調整も付加する。168～174は台部を集めた。168はやや邇るのかかもしれない。168・170・171・173はナデ調整で仕上げる。174はミニチュア品か。

175～188は高杯。175・177・178・180は有稜高杯。181もこれに含まれるかもしれない。176は高さ8.4cmと小型で、脚部に対して杯部が大きい。180は杯部が浅く盤状、177はこれよりやや深くなるがいずれも古相となる。177の口稜比は70.0。175・178・181は口縁端部内側に内傾する面を有する。179は碗形高杯の杯部片。182・183、185～188は脚部。182・183・185は内彎するが、185は端部で短く屈曲する。185～187は上方

にクシによる直線文を積む。188 は長脚で、脚部上方にはクシによる直線文と刺突を積む。裾端部には内傾する面を有し、クシによる直線文を施す。杯部片の 177・180 と同様に古相。

184・189 は器台。いずれも貫通穴を持つ。184 は脚部片で内彎する。外面にはラフなミガキ調整を加える。189 は外面にハケメ調整を残す。

190 は大型鉢。口縁部内外面と体部外面にミガキ調整を施す。破片資料で肩部に舌状の把手が 1 つ付くが、対角線上に一对が存在するものとしてとして図示した。外面にはススの付着や被熱は確認できない。

191～193 は小型鉢。191・193 はミガキ調整を施す。192 は内底部に赤色顔料が付着する。191 も同様である可能性が高い。いずれも外面にススの付着や被熱は確認できない。194 はミニチュアの甕でナデ調整をラフに施す。

195～202 は埋土 5 群出土。時期は C－1a～1b 期だが、B 期に属する N R 01 資料が混在する。

196～199 は壺。199 は口縁部片でへうによる直線文を施す。

195・200・201 は高杯。195 は脚部。上方は直線的で、裾部で弱く屈曲して広がる。200 は口縁部片で弱い稜を持って立ち上がる形状。口縁部外面は凹線文を施す。鉢かもしれない。201 は裾部を欠く。やはり口縁部が弱い稜を持って立ち上がる形状。口縁部外面は無文。202 は器種不明。焼成・胎土が他とは大きく異なり、混入品かもしれない。時期は 195・201 が C 期でこれらを埋土 5 群に伴う資料、196～200 は B 期に属するため N R 01 の資料と理解しておきたい。

(3) B 区 (図版 53～70－203～780)

203～236 は S K 29 出土。時期は C－2 期。甕と小型鉢が主体となる。

203～209・217 は壺。207 を除き小片となる。203 は二重口縁壺の頸部。ミガキ調整を丁寧に施す。上面には赤彩を施しているのかもしれない。204～206 はハケメ調整を施す単純口縁の壺。204・205 は接合しないが同一個体の可能性を持つ。206 は口縁端部にへうによる切り込みを持つ。

210～216、218～222・224 は甕。210～213 は全形をとどめる。いずれもハケメ調整を施すく字状口縁甕である。213 を除き内面にはへうケズリ調整を施す。210 は口縁端部を連続してつまむ。218～220 は受口状口縁を持つ。外面はハケメ調整で、内面には縦方向のへうケズリ調整を施す。220 は口縁部と肩部の境界外面にクシによる直線文を施す。223 は台部でミニチュア品か。外面にはハケメ調整を施す。221・222・224 は平底の甕。222・224 はハケメ調整を施す。221 は外面にラフなミガキ調整、内面にはへうケズリ調整を施す。外面にはススが付着するため甕と理解した。

225～229 は高杯。いずれも全形をとどめない。225・226 は有稜高杯の杯部。口縁端部内側に内傾する面を有する。口稜比は順に 52.5、51.8 となる。227～229 は脚部で、227・228 は内彎し、227 はさらに上方が柱状となる。いずれも上方にはクシによる直線文を積む。229 は低い脚で、裾部で外反する。

230～233 は小型鉢。230 はやや大型。いずれも外面にハケメ調整を施す。230・233 は口縁端部内側に内傾する面を有する。232・233 は環状底となる。234・235 はミニチュ

把手が付く鉢

埋土 5 群

B 区 S K 29

ア品の甕と理解する。いずれも台付で、体部はハケメ調整を施すが台部はラフなナデ調整となる。236 は器台。脚部片で裾を欠く。大型品で残存部は柱状を呈する。外面の文様はヘラによる直線文を重ねる。やや廻り混入であろう。

237 は S K 19 出土。柳ヶ坪型壺の口縁部片。頸部の外面にはハケメ調整痕、口縁部上面と端部には、イタによる羽状の連続刺突を施す。時期は C 期。

238 は S K 27 出土。小型の鉢で口縁部外面の屈曲部分外面にイタによる刺突を並べる。時期は C - 1 期である。

239 ～ 241 は S K 30 出土。239 は有稜高杯の杯部。口稜比が 50.0 となる。241 は外面ハケメ調整のく字状口縁甕。時期は C 期。

242 は S K 39 出土。く字状口縁甕の口縁部片で口縁端部にやや雑な面を持つ。全面ナデ調整。時期は B - 2 ～ C - 1 期。

243 ～ 245 は S K 42 出土。時期は C 期。243・244 は小型丸底鉢の口縁部片か。243 は全面に赤彩を施す。

246・247 は S K 44 出土。時期は C 期。246 はワイングラス形高杯。外面はミガキ調整ではなく、ラフなナデ調整を施す。247 は甕の口縁部片である。外面にはハケメ調整を施す。

248 ～ 256 は S Z 01 出土。時期は C 期か。248 ～ 253 は東溝資料。248 は壺の口縁部。端部に面を持ちラフなヘラによる直線文上に竹管による刺突文を並べる。やや廻るのか。249・250 は接合しないが、634 と同一個体か。249 は口縁端部の拡張部分であろう。クシによる斜線の上に竹管による円形刺突を並べる。250 はクシによる直線文と波状文を重ねるが、直線文部分に赤彩を施して強調する。251 は高杯もしくは器台の脚部である。254 は西溝資料。壺の体部最大径以下の破片。255 は南溝出土。高杯の接合部片。256 が北溝（S Z 02 共有溝）資料。底部を焼成前に穿孔した壺と理解する。

257 は S Z 03 出土。外面にハケメ調整を施す甕の台部。時期は C 期。

258 ～ 262 は S D 01 出土。時期は C 期。

258・259 は壺。258 は口縁部片で赤彩を施す。口縁部の上面には、イタによる羽状の連続刺突を施す。外傾する端部にはイタによる刺突を並べ棒状浮文を重ねる。260・261 は高杯。260 は脚部。上方にはクシによる直線文を積む。261 は大振りな椀形高杯。口縁端部内側に内傾する面を有する。262 は小型の甕。外面にはハケメ調整を施す。いずれも S U 01 からの混入であろう。

263 は S D 11 出土。有稜高杯で脚部はやや低く丸みを帯びる。脚部の上方にはヘラによる細かな羽状の連続刺突を施し、その上・下にはヘラによる直線文を重ねる。口稜比は 37.6。時期は C 期。

264 ～ 281 は S D 18 出土。時期は C - 1 期。

264 ～ 268 は広口壺。264 は口縁部片。上面にクシによる扇形文を並べる。265 は頸部～肩部片でクシによる文様が特徴的となる。269・270 は甕。269 は口縁部付近の小片で、外面ナデ調整を施す。270 は台部で大振り。外面はハケメ調整。272 ～ 275 は有稜高杯の杯部。いずれも口縁部片。272 は屈曲部外面にヘラによる直線文を施す。277 ～ 281 は脚部片。277・278 は上方にヘラによる直線文を重ね、279 はクシによる直線文となる。281 は裾部付近が屈曲して柱状となる。柱状部にはヘラミガキ調整を施す。

282～603はSU01出土。資料数は今回の調査中で最も多量となる。大きく上・下層に区分したが厳密なものではない。時期はC-2期が中心となる。

282～487は下層出土。

282～342は壺。282はいわゆるパレス壺。口縁部の上面にはイタによる羽状の連続刺突を施す。口縁端部に棒状浮文を貼付するが、この部分にのみ赤彩を施す。283は頸部の外面にハケメ調整痕、口縁部上面と端部にはイタによる羽状の連続刺突を施す。肩部と頸部の境界には上端が尖る突帯を貼付する。488と同一個体の可能性を持つが、接合はしない。肩部と頸部の境界には突帯を貼付する。284・285は二重口縁壺の口縁部片。284はクシによる波状文と直線文の文様帯の下部に竹管による円形刺突を施す。無文部分には赤彩を施す。肩部と頸部の境界には突帯が確認できない。285は無文。内面にはミガキ調整を施すが、外面はナデ調整となる。286～291は単純口縁の壺。ミガキ調整のみで無文を主体とするが、286は肩部と頸部の境界に上端がにぶく尖る低い突帯、肩部にはクシによる直線文と扇形文を施す。287は肩部に貝殻による刺突を不揃いに並べる。288は破片接合の結果ほぼ全形を知り得たが、破損状況から意図的に破損された可能性も持つ（図版103）。299～301は長頸壺。299・301は外面に貝殻による刺突を並べる。299には頸部に打ち欠きと考えられる打撃痕（図9）が確認できる。301も同様か。304は受口状口縁を持ち、屈曲部分の外面にはイタによる刺突を並べる。体部の最大径はやや下がる。305～309は長頸壺の口縁部を集めた。305はやや大型で、外面にはクシによる直線文とヘラによる赤彩を伴う波線文を交互に積み、最下段には竹管による刺突を施す。内面は丁寧なミガキ調整後に赤彩を施す。不明瞭だが、外面の刺突より下位にも赤彩の痕跡が確認できる。306は頸部がやや短い。307・309は口縁端部内側に内傾する面を有する。307は口縁端部外側にクシによる直線文を施し、中央部分には貝殻による刺突を並べる。311は体部内面の上部にもミガキ調整を施す。鉢とすべきかもしれない。312～328は壺の体部～底部を集めた。313は体部下方に弱い稜を持ち、上方にはクシによる直線文を施す。315・326は壺の底部片だが、端部をラフに研磨して鉢として再利用している可能性を持つ。330～342は文様を施す体部片を集めた。いずれもクシによる施文が特徴的となる。330・331は赤彩を伴わないヘラによる波線文。同一個体の可能性が強い。341は無文部分に赤彩を施す。332・333も同一固体か。細くやや特殊なクシによる直線文と波状文を重ねる。波状文は振幅がやや大きい。340は肩部と頸部の境界に突帯を貼付し、両側

B区SU01
下層

打 撃 痕



図9 299部分

に竹管による刺突を並べる。肩部はイタによる羽状の連続刺突を施す。335 は円形の破片。やや大振りだが、加工円盤とすべきかもしれない。

343 ～ 396、446 ～ 462 は甕。343 ～ 372 はく字状口縁甕。343 ～ 347 には台部が残存する。346 は大型で容量が約 13.0 ℓ、347 は小型で約 1.3 ℓ となる。外面ハケメ調整が一般的だが、365 はこれが羽状となる。361・364・369 は外面をナデ調整で仕上げる。344・346・348 ～ 350・353・355・356・357・361・362・364・368・369 は内面ヘラケズリ調整。359・366・367 は口縁端部にイタによる刺突を並べる。358 は端部の調整が丁寧で鉢とすべきかもしれない。369 は頸部が一旦直立する。駿河湾系か。372 は体部が直線的で外面にもススは付着しない。手焙形土器の覆部とすべきかもしれない。

374 ～ 377 は受口状口縁の甕。374 は容量 0.8 ℓ と小型である。376 は外面にイタによる刺突を並べる。口縁部もやや発達し、鉢とすべきかもしれない。内面はヘラケズリ調整後に横ナデ調整を施す。378・381 は口縁端部が撥ね上げる。378 は体部の上端にイタによる刺突を並べる。381 は内面にヘラケズリ調整を施す。383 は平底の甕。く字状口縁となり口縁端部には弱い面を持つ。外面は幅広のハケメ調整を施す。底部は環状底となる。384 は口縁端部の下方にイタによる刺突を並べる。385・386 は口縁端部に面を持ち外面をナデ調整で仕上げる。能登系か。387 ～ 390 は S 字甕。389 は B 類で他は A 類。390 は S 字甕 A 類に含めるが、器壁も厚く調整具は太く幅が広い。

391 は外湾するやや長い口縁部を持つ。ナデ調整で仕上げられているため不鮮明だが、幅広のハケメ調整痕が確認できる。392 は口縁端部に面を持ち、384 ～ 386 と類似する。口縁部はナデ調整で仕上げるが、体部に細かいタタキ調整を施す。393 は体部片。小片だが縦長の形状となるのか。394・395 は底部片。394 は小振りで突出する平底となる。外底部には木葉痕。ナデ調整で仕上げられた後に部分的にタタキ調整が観察できる。395 もタタキ調整を施す。396 は台部片で外面は幅広のハケメ調整による。

329・397 ～ 418、420 ～ 438 は高杯。329 は開脚高杯の脚部片。小型でシャープに整形されており、外側には 2 本 1 組の波線文、内側にはヘラによる直線文を施す。細部まで 758 と類似し、接合しないが同一固体かもしれない。397 ～ 412、415・416・426 ～ 428 は有稜高杯。426・427 は杯部が浅くやや下がるのか。404・410・411・415 を除き、口縁端部内側に内傾する面を有する。399 ～ 401 の脚部の上方にはクシによる直線文を積む。404 はやや浅い杯部に直線的な脚部が付く。口縁部の内側が比厚してその部分にはクシによる直線文を刻む。西濃系。口稜比は 397 が 50.4、398 が 49.5、399 が 48.0、400 が 50.2、401 が 50.8、402 が 53.4、403 が 46.4、404 が 39.2、405 が 51.7、406 が 54.8、407 が 50.7、408 が 46.1、409 が 40.0、410 が 54.7、411 が 46.3、412 が 40.3、415 が 72.3、416 が 66.2、426 が 40.7、427 が 45.1 となる。

414・420 ～ 424 は有段高杯。414・420 は大振りで、414 は鏝部を欠く。鏝部片の 420 は直線的に伸びる。421 は鏝部との境界に強いナデ調整が施され、大きく屈曲する。422 ～ 424 は段が不明瞭で鏝部は外湾する。423・424 は接合しないが同一個体かもしれない。鏝部内面は縦方向のミガキ調整で仕上げるが、前段階の横方向となるミガキ調整も確認できる。

417・418 は碗形高杯。いずれも杯部片で 417 は内面のミガキ調整が横方向となる。

425 は高杯に含めたが、杯部が丸みを有しやや深い形状となる。杯部は内外面ケズリ調

整で仕上げ、口縁部付近にのみ横ナデ調整を施す。内面はラフなミガキ調整も施す。

429～438は脚部。429～431、435の上方にはクシによる直線文を積むが、435はさらに文様部分に赤彩を施す。437・438はやや遡り後期前半か。

419・439～443は器台。419はいわゆる装飾器台。439・442・443は貫通穴を持つ。439は脚部を杯部が陵駕する形状。杯部に打ち欠きと考えられる打撃痕が確認できる。440は杯部が小型となる。442・443とともに小型器台となる。

444は端部が垂下し縁帯となる。やはり器台か。445は小型丸底鉢。口縁端部内側に内傾する面を有する。やや下がるのか。

446～456は台付甕の台部を集めた。456は大振りとなる。東三河～遠江系か。457～461は一応平底の甕と理解する。459は環状底となる。

464・465は鉢。464は大型で、容量は約16.3ℓ。丸みを帯びた体部に直立する口縁部が付く。外面はミガキ調整を施す。内面にはヘラケズリ調整後、雑なミガキ調整も加える。465は口縁部が片口となる。甕とすべきかもしれないが、被熱やススの付着は確認できない。外面はハケメ調整を施す。底部側の端部にはナデ調整が確認できるため、台付だったかもしれない。

466～473は小型鉢。473はミガキ調整を施す精製品。470・471・472はナデ調整、466～469はハケメ調整による。底部は環状底となるが平面形は歪む。471は内面の調整が外面と比較して雑に仕上げられており鉢ではない可能性も存在する。472には被熱痕、473は内面に赤色顔料が付着する。

475・476は蓋。輪状の鈕を持つ。鈕の内面にナデ調整が確認できるため、一応蓋と理解した。475はラフなナデ調整による。476にはススが薄く付着するが475にはこれが確認できない。

477～485はミニチュア品で、477は蓋、479は壺、485は器種不明。他は甕か。486・487は器種不明だがよく類似しており、同一個体かもしれない。図示した位置で左側が破面、右側は突帯が貼付され、上面にラフなヘラによる直線文を施す。486は内面にススが付着する。

488～603は上層出土。時期は下層に類似するが、C-3期に属する資料も含まれる。

488～525は壺。488は頸部の外面にハケメ調整痕、口縁部上面と端部にはイタによる羽状の連続刺突を施す。283と細部まで類似し、接合はしないが同一固体かもしれない。489は頸部の外面にはハケメ調整痕、口縁部上面と端部にはイタによる羽状の連続刺突を施す。490は口縁部片。端部が下部に拡張し上面にはイタによる羽状の連続刺突を施す。491も口縁部片。全面ナデ調整を施す。肩部と境界に突帯が付く。口縁は大きく開き端部の対角線上には棒状浮文をやや雑に貼付するが、一方は2本、もう一方は3本となる。492・493は直立する口縁部を持つ。492の端部付近には線刻が確認できる。494～496は柳ヶ坪型壺の口縁部片。495の口縁部上面には羽状の連続刺突を欠く。498は長頸壺。頸部はやや短く口縁端部外側にクシによる直線文を施す。外面はラフなミガキ調整を施す。499も長頸壺か。頸部は短く口縁端部外側にクシによる直線文を施す。501・502は口縁端部を折り返すが502はこの部分にイタによる刺突を並べる。503は口縁端部を欠く。赤彩を施し肩部と境界に上面をイタにより刻んだ突帯が付く。504は肩部片。丸みを帯び

B区SU01
上層

線刻資料

線刻資料か

る。体部上方はクシによる直線文と波状文を重ね、肩部と境界には上端がやや丸い突帯が付く。突帯と体部文様帯の下部は赤彩を施す。505は頸部が柱状に立ち上がる。二重口縁壺か。506は底径がやや広い。509～512は壺の底部片を集めた。509・511は環状底で外底部には木葉痕が確認できる。510は不鮮明だが、外底部に線刻を施すのか。513～525は壺の体部片。513～518は波線文が施される資料で、513・514は赤彩が確認できる。515は接合はしないが330・331と同一個体の可能性が高い。516～518も同一個体の可能性が高い。517は頸部と境界部分が残存する。クシによる不揃いな波状文を施す。破片の上部には剥離痕が確認できるため、突帯が貼付されていたものと考えられる。519・520は刺突を伴わない円形浮文が付く。いずれも浮文の上部より下方には赤彩を施す。520はクシによる波状文と直線文を重ねる。円形浮文の剥離痕も確認でき、浮文は二個一組となる。522は肩部と境界部分が残存する。上端がやや丸い突帯が貼付され、赤彩される。体部にはクシによる不揃いな波状文を施す。524・525は線刻が確認できる。

線刻資料

526～565は甕。533は頸部が若干直立する。駿河系か。536は口縁端部にヘラによる刺突を並べる。540は368と接合はしないが、同一固体か。541・542は内彎する口縁部を持つ。543～545は受口状口縁となる。543は屈曲部分外面にイタによる刺突を並べる。544は口縁部内面に強い横ナデ調整を施し、受口を形成する。548～554はS字甕。548～552はB類、553・554はC類。547はやや崩れる受口状口縁を持つ。器壁は厚く鉢とすべきかもしれない。口縁部にはぶく屈曲し、外面にイタによる刺突を並べる。555・556、558・559はタタキ調整を施す。555・556はハケメ調整後にタタキ調整を施す。558・559は底部片で、558はやや突出する環状底を持つ。不鮮明だがタタキは右下りとして図化した。560・562・563は平底の甕と理解する。560・563が環状底となる。560・563はハケメ調整を施すが、562はこれが不鮮明となる。561は台杯甕の台部と体部の接合部片。磨滅が進み不鮮明だが、外面はタタキ調整か。

墨書か

566～573、577・588は高杯。566・567・569～573は有稜高杯。570～571は杯部が浅い。566・567・569は口縁端部内側に内傾する面を有する。569は小振り。脚部の上方にはクシによる直線文を積む。口稜比は566が48.6、567が42.0、569が52.0となる。568は碗形高杯。口縁端部内側に内傾する面を持ち、外面にはクシによる直線文を施す。脚部は中央で弱く屈曲するが、屈曲部分の上方にはクシによる直線文を積む。572は外面に羽状のミガキ調整を施す。577は高杯に含めるが台付鉢とすべきかもしれない。外面は墨書か。578～588は脚部。578は長い。578・579の上方にはクシによる直線文を積む。588は脚部が中央で弱く屈曲する。583も同様か。575・576は高杯のミニチュア品と理解するが後者は小型器台かもしれない。いずれも杯部片となる。

574、589～592は器台。589～592は小型器台でいずれも受部片。589は貫通穴を持つが他は明らかにできない。

593～595は蓋。593は扁平な形状。鈕を欠く。594・595は輪状の鈕を持つ。全体的に粗雑な仕上げだが、鈕の内面は594がヘラケズリ調整、595にはナデ調整が確認できるため蓋と理解した。594は笠形を呈する。いずれも表面に薄くススが付着するが、595にはこれが確認できない。

597・598は小型鉢。いずれもミガキ調整を施すが597は調整がややラフとなる。599～602はミニチュア品を集めた。599～601は甕、602は蓋か。596・603は混入か。

604～619はSU02出土。時期はC－2期である。	B区SU02
607・608は壺。いずれも底部片である。609～611は甕。609・610は口縁部片で、609が受口状口縁。屈曲部分外面にイタによる刺突を並べる。610はS字甕で0類。611は台部。外面はナデ調整後にS字甕に類似する斜方向の短いハケメ調整を並べる。612～616は高杯。612～614は有稜高杯。612は杯部片で、口縁端部内側に内傾する面を有する。口稜比は44.0。613・614は脚部。614は不鮮明だが上方にクシによる直線文を積む。615は碗形高杯。杯部はやや深い。617は鉢で口縁部が直立する。外面はハケメ調整で仕上げられるが、最大径以下にはケズリ調整を施す。618はミニチュア品。台部内面の調整が雑であることから、鉢ないし甕と理解した。619は壺の体部小片。外面に赤彩を施す。	
620～623はSU03出土。C－2期に属する資料が主体である。	B区SU03
620～622は甕。いずれもく字状口縁となる。620は体部の最大径がやや強く張り出す形状。底部を欠く。621は口縁部に横ナデ調整を丁寧に施す。体部には肩部の一部と底部の周辺にタタキ調整痕が観察できるが、最大径付近はハケメ調整によりこれが消されているのか。底部は平底で環状底となる。622は底部を欠く。口縁部内外面に通常のハケメ調整、体部外面には幅広のハケメ調整を施す。623は有段高杯。脚部を欠く。	
624～630はSU04出土。時期はC－2期である。	B区SU04
624は平底甕の底部片か。外面にはラフなミガキ調整を施す。強く被熱する。625～627は壺。625は受口状口縁を持つ壺。外面には赤彩された痕跡が確認できるが、不鮮明で範囲は不明。626は体部片。上部にはクシによる直線文と上面に竹管による円形刺突を施す円形浮文を貼付し、それより下部には赤彩を施す。627は頸部に幅広のハケメ調整を施す。628は碗形高杯の口縁部片。629は蓋。器高が高い笠形となる。630はミニチュア品の台杯甕で粗製となる。	
631～682はNR02出土。時期はC－2期が主体となる。	B区NR02
631～639・641～651は壺。631・632は接合はしないが同一固体か。外反する口縁部は端部に縁帯を持ち、イタによる刺突を並べさらに竹管による円形刺突を施した円形浮文を貼付する。634は二重口縁壺。249・250・694～696と接合しないが同一個体だろう。赤彩する壺で頸部は柱状で外傾、屈曲して口縁部に至るが、端部は拡張される。634では拡張部が剥離するが、695・696などの拡張部片を観察すると、クシを×形に施し下部には竹管による円形刺突を施す。口縁部の上面はクシによる直線文と波状文、ヘラによる波線文を施す。体部はクシによる直線文と波状文となる。635・637・642は体部の最大径が中央よりやや下方となる。635は体部最大径付近に焼成後穿孔を施す。頸部の屈曲が不鮮明で腰部が屈曲する。西遠江系。638は赤彩を施す壺。クシによる直線文と波状文が特徴的となる体部片である。639は長頸壺。大型品で外面は縦方向のナデ調整、内面はハケメ調整で仕上げ、ミガキ調整は確認できない。647は壺の口縁部片で端部に面を持つ。頸部の外面にはハケメ調整痕、口縁部上面と端部には、イタによる羽状の連続刺突を施す。650・651は壺の底部か。651は環状底となる。いずれも外底部に木葉痕が確認できる。	
652～665は甕。外面はハケメ調整で、652～655・659・660・663は内面にヘラケズリ調整を施す。655は平底。外面は通常のハケメ調整を施すが、さらに棒状工具による	

調整(図 61)を重ねることで、幅の広いハケメ調整に類似する印象を受ける。659 は北陸・山陰系甕の口縁部片か。頸部外面には幅広のナデ調整を施す。662・665 は S 字甕。662 は A 類の口縁部片。665 は B 類の台部。

666～677 は高杯。666・667、670 は有稜高杯。668 は内面に赤色顔料、外面にはススが付着する。669 は椀形高杯の杯部。口縁端部内側に内傾する面を有する。671 はワイングラス形高杯の口縁部か。全体に雑な仕上げで、口縁部にその傾向が強い。外面にはミガキ調整も加えるが、内面はケズリ調整となる。673～677 は脚部。674 はやや下がるのか。676 はシャープなつくりの脚部片で、文様帯を以外には赤彩が確認できる。677 は裾を欠くが、長い脚部であろう。上方にクシによる直線文を積む。678 は器台。貫通穴を持つ。上方にクシによる直線文を積む。

683～780 は遺構外出土。

683～716 は壺。683 はパレス壺の口縁部。端部の拡張部分が剥離する。口縁部の上面には、イタによる羽状の連続刺突を施す。684 は柳ヶ坪型壺の口縁部片。頸部の外面にはハケメ調整痕、口縁部上面と端部にはイタによる羽状の連続刺突を施す。690 は二重口縁壺の口縁部片。表面は磨滅するがナデ調整によるのか。702～709 は赤彩を施す資料を集めた。703～705 はヘラによる波線文の片側を塗りつぶした三角形を連続させる。710 は縄文を施す。711・714～716 は線刻、712・713 は墨書か。

717～747 は甕。722 は肩部に線刻を持つ。不鮮明だが線刻の周囲にはナデ痕が数条確認できる。720 はタタキ調整後にハケメ調整を施す。724～731 は S 字甕。いずれも口縁部片。723 は北陸・山陰系甕の口縁部片か。ただし、内面は段状にはならず、外側のみを厚くすることで段を表現している。733 は口縁部片。墨書か。734～738、740・741 はタタキ調整を施す。741 は底部片で小さな平底となる。

748～759 は高杯。758 は開脚高杯の脚部片。小型でシャープに整形されており、外側には 2 本 1 組の波線文、内側にはヘラによる直線文を施すが、部分的には波線文も確認できる。329 と類似し、接合しないが同一固体かもしれない。

760～763 は器台。760～762 は受部片。763 は貫通穴を持つ。764 は有段鉢。器壁は薄く、シャープな仕上げとなる。畿内系か。765～772 は小型鉢。773 は頸部を持つのか。被熱が確認できる。778 は底部片。穿孔は焼成前。779 は上下方向が不明。突帯の上面に板による刺突を並べる。手焙型土器か。780 は灰釉陶器碗の皿で、折戸 53 号窯式。外底部に墨書が確認できるが、全形が残存せず判読できない。

(4) C 区 (図版 71～74－781～911)

781～784 は S B 02 の周溝状の掘方出土。時期は C 期。781・782 は壺の口縁部片。782 は上面に扇形文を並べる。783・784 はく字状口縁甕の口縁部片。

785・786 は S B 04 出土。785 は球形の体部を持つ甕。口縁端部は面を持ち、ヘラによる刺突を並べる。C－1 期で混入か。786 は小型丸底鉢。C－3 期で主柱穴 (S K 69) から出土。

787 は S B 05 出土。甕の台部で外面はナデ調整後に斜方向にハケメ調整を施す。時期は C 期である。

788～792 は S B 06 出土。時期は C－3 期である。

788 はく字状口縁甕。外面は浅く幅広のハケメ調整を施す。789 は高杯か。杯部は丸みを帯び、脚部との境界部にわずかな突帯を持つ。790 は小型器台。裾部を欠く。791 は高杯の脚部。混入か。792 は小型鉢か。表面は磨滅が進み不鮮明。

793 ～ 808 は S B 07 出土。時期は C - 3 期である。

793 は高杯の脚部と理解する。器壁は厚く外面にミガキ調整を施す。794・795 は甕。794 はナデ調整による甕。口縁部は大きく屈曲し端部に面を持つ。795 は台部。796 は小型器台。外面はナデ調整。794・797・798 は混入か。799 は壺の口縁部片。端部が垂下する。端部には竹管による連続刺突を二段、上面にはイタによる羽状の連続刺突を施す。800 ～ 808 は周溝状の掘方から出土した資料。802 ～ 805 は甕で、804 は受口状口縁甕、805 は S 字甕の口縁部片となる。806 は小型器台の受部片。

809 は S B 08 出土。台杯甕で、外面はナデ調整を施す。時期は C 期か。

810 ～ 813 は S B 10 出土。時期は C - 3 期である。

810 は柳ヶ坪型壺の口縁部片。頸部の外面にはハケメ調整痕、口縁部上面と端部にはイタによる羽状の連続刺突を施す。811 は小型の壺で外面にミガキ調整を施す。812 は受口状口縁甕。屈曲部分外面にイタによる刺突を並べる。813 は壺の口縁部片。平坦な口縁端部にはヘラによる直線文、上面に扇形文を並べる。

814 は S K 50 (S B 21 柱穴) 出土。壺の口縁部片。頸部はやや細く口縁部は外反する。時期は C - 1 期である。

815 は S K 02 出土。輪状の鈕を持つ蓋と理解する。鈕の内面にはヘラケズリ調整が確認できる。C 期か。

816・817 は S K 07 出土。いずれも甕。816 は球形の体部で、口縁端部には面を持つ。外面はハケメ調整、内面にはヘラケズリ調整を施す。817 は台部で外面ナデ調整による。

818・819 は S K 08 出土。やはりいずれも甕。818 は体部の最大径がやや高い位置にある。819 は口縁部を欠く台付甕。時期は 818 より下がるのか。

820 は S K 23 出土。壺の体部片で、不鮮明ではあるが線刻が確認できる。

線刻資料

821・822 は S K 74 出土。時期は C - 1b 期である。821 は壺の口縁部片。平坦な口縁端部にはラフなヘラによる直線文、上面には扇形文を並べる。822 はワイングラス形高杯の杯部片である。

823 は S K 99 出土。時期は C - 1a 期。く字状口縁甕で底部を欠く。外面はハケメ調整をナデ調整でラフに消し、内面にはヘラケズリ調整を施す。

824 ～ 838 は S D 01 出土。時期は C - 3 期である。

824 は柳ヶ坪型壺の口縁部片。頸部の外面にはハケメ調整痕、口縁部上面と端部には、イタによる羽状の連続刺突を施す。825 は二重口縁壺か。全面にミガキ調整を施し、赤彩する。826 は壺で底部に焼成前穿孔を持つ。828 ～ 830 は S 字甕。いずれも C 類だが、830 はわずかに下がるかも知れない。831・832 は高杯。831 は有稜高杯で杯部が浅い。口稜比は 27.3。833 は鉢か。外面は部分的にミガキ調整も施すがラフな仕上げとなる。内面は比較的丁寧なミガキ調整を施す。834 ～ 836 は小型丸底鉢。834・836 はナデ調整か。835 のミガキ調整は体部が斜方向、口縁部は縦方向となる。837 は小型鉢か。粗製で底部は環状底となる。

839 は S D 10 出土。壺の底部か。外面にミガキ調整を施す。時期は C 期。

840 は S D 14 出土。外面ナデ調整による甕。口縁部は屈曲し、端部に面を持つ。時期は C－1 期。

841 は S D 15 出土。小型鉢で、外面に被熱が確認できる。表面は磨滅が進み不鮮明。時期は C 期か。

842 は S D 16 出土。壺の口縁部片で、時期は C 期。

843～849 は S D 32 出土。時期は C－2 期である。

843 は壺。口縁部は内彎する。体部外面はハケメ調整、口縁部はナデ調整による。844～846 は甕。844 は外面に浅く幅広のハケメ調整を施す。847 は大型鉢の口縁部片。口縁部内面と体部にミガキ調整を施す。848・849 は高杯である。848 は碗形高杯。脚部はやや長く、上方にはクシによる直線文を積む。849 は有稜高杯。杯部は突帯状の稜を持つ。外面のミガキ調整は雑で、ハケメ調整痕を残す。口稜比は 78.3。

850～898 は遺構外出土。

850～861 は壺。850 は下膨れの体部に外反する口縁部を持つ。頸部は細く、口縁部は外反する。文様は頸部から肩部にクシによる直線文と波状文を積む。体部はミガキ調整による。西遠江系。851・852 は大型の壺。852 は外彎する口縁部が端部で垂下し、上面にはイタによる羽状の連続刺突を施す。856 は二重口縁壺か。無文でナデ調整による。857 は壺で、折り返し口縁を持つ。861 は壺の型部片。外面に線刻が確認できる。不鮮明で線刻後にナデ調整が付加されているのかも知れない。

863～876 は甕。867～871 は S 字甕。いずれも C 類。

877～883 は高杯。883 は脚部上方が柱状となり裾部で屈折する。外面はミガキ調整を施す。886 は小型器台。893 は底部に焼成前穿孔を施す。894 は山陰・北陸系の高杯か。895 は手焙形土器か。外面に上面にへうによる刺突を並べた突帯を貼付する。896 は器台に壺を乗せた姿を表現するのか。897 は蓋。笠形で環状鈕が付く。898 は D－2 期の甕の口縁部片。

899～911 は N R 01 出土。時期は B－1b 期。

899～901 は在地系の壺。900 は丸みを帯びた体部には不揃いなクシによる縦方向の波状文を半載竹管により区画する。901 は頸部片。やや長い頸部を有する。902 はナデ調整の在地系甕。903～906 は凹線文系土器の壺。903 は大型の広口壺で口縁端部を拡張して、クシによる波状文を施す。口縁部の上面にはイタによる羽状の連続刺突を施す。904 は壺の口縁部で端部にはへうによる直線文を施す。907・908 は高杯。907 は口縁部小片で鉢の可能性もある。908 は鐙を有する。909 は大型鉢もしくは甕か。ごく低い台を有する。外底部はミガキ調整を施す。910・911 は甕。

(5) D 区 (図版 75～85－912～1228)

912～914 は S B 11 出土。時期は C－2 期。912 はパレス壺。口縁部の上面にはイタによる羽状の連続刺突を施す。913 は高杯の脚部。裾部は内彎する。914 は小型鉢。ナデ調整による。

915～919 は S B 12 出土。時期は C－2 期。915・916 は壺。916 は、上方にはクシによる直線文と円形刺突を重ね、下方に赤彩を施す。917～919 は甕。919 は受口状口縁

で屈曲部分外面にイタによる刺突を並べる。

920～929はS B 14出土。時期はC－2期。920～924は壺。923・924は赤彩を施す。925～928は甕。926は受口状口縁で、屈曲部分外面にイタによる刺突を並べる。927・928はS字甕。927がO類、928がA類。929は有稜高杯。脚部にはクシによる直線文を施す。

930～933はS B 15出土。時期はC－2期。930は壺底部片。931は有稜高杯。口稜比は36.2。932・933は甕。いずれも外面ハケメ調整を施すく字状口縁甕。932は内面にヘラケズリ調整を施す。933は小型で、細身の体部に長い口縁部を持つ。尾張系。

934はS K 05出土。鉢と理解する。台が付くかもしれない。口縁部が短く屈曲して直立する。外面はハケメ調整を施す。時期はC－2期。

935はS K 15出土。く字状口縁甕の口縁部片。外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ調整を施す。時期はC－2期。

936～957はS K 25出土。出土資料には銅鏃(1391)と小型鉄製品(1392)も含まれており注目できる。時期はC－2期。

D区S K 25

936～946は壺。938～940は長頸壺の口縁部片。口縁部は内彎するがやや短くなる。944はヘラにより波線文を刻むが赤彩は確認できない。947は外面ハケメ調整、内面ヘラケズリ調整のく字状口縁甕。949～954は高杯。949は有稜高杯の杯部。口縁端部内側に内傾する面を有する。950～954は脚部。952・953はクシによる直線文を積む。954は裾付近で屈曲する形状。柱状となる上部にはクシによる直線文を施す。955は器台。956は小型鉢。957も同様か。いずれも外面ナデ調整による。

958はS K 87出土。高杯の脚部で杯部底は円盤充填法による。

959はS K 96出土。有稜高杯の杯部片で口稜比は50.4である。時期はC期。

960はS D 10出土。壺の口縁部片で拡張される端部は丸みを帯びて無文。時期はC期。

961・962はS D 22出土。961はく字状口縁甕で大振りである。外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ調整による。962は高杯脚部。時期はC期。

963～969はS D 32出土。時期はB－2～C期。

963は壺の口縁部片。頸部はやや細く口縁部は外反する。965は鉢か。口縁部がわずかに外反する。外面はハケメ調整。966～968は高杯。966は高杯の脚部。裾部がわずかに内彎する。964はナデ調整の甕。964・967は混入か。968は碗形高杯。脚部の裾を欠く。

970～992はS D 41出土。時期はB～C期とバラツキが大きい。

970～976は壺。970は口縁部片で端部に貝殻による刺突、上面には扇形文を並べる。973は口縁端部に凹線文を施す。外面は赤彩を施す。976は中央が張る体部を持つ。ミニチュア品でクシによるラフな波状文を施す。977～985は甕。979は長く内彎する口縁部を持つ。978・980はタタキ調整の甕。978は内面に体部最大径よりやや上方まで縦方向のケズリ調整を施す。979も内面にヘラケズリ調整を施す。986～988は高杯。986は有稜高杯の杯部。987・988は脚部で、987の上部にはクシによる直線文を施す。991は小型器台。992はミニチュア品の甕か。

993～997はS X 02出土。時期はC期。993は壺の口縁部で、折り返し口縁となる。995はく字状口縁甕の口縁部。外面はハケメ調整を施し肩部上方にはイタによる刺突を並

べる。996は小型の壺。外面はナデ調整。

998～1047は遺構外出土。998～1014は壺。998～1002はいずれも口縁が拡張して端部に面を持つ。998は柳ヶ坪型壺のA類。端部は下方に垂下する。頸部の外面がナデ調整。口縁部上面と端部にイタによる羽状の連続刺突を施す。体部と頸部の境界には幅が広く上端がわずかに尖る突帯を貼付する。体部外面はクシによる波状文と直線文を積む。999はパレス壺に類似するが赤彩は施されていない。口縁部の上面にはイタによる羽状の連続刺突を施す。1000・1007・1010・1011・1012・1013には赤彩が確認できる。1000はパレス壺で無文。1001は二重口縁壺。全面ナデ調整でやはり無文。1007も二重口縁壺で、頸部が柱状となる頸部片。1009～1014は波線文を施す類を集めた。1010～1012はへう、他はクシによる。1010と1011、1009と1014は同一個体か。

1015～1021は甕。1015・1016はく字状口縁甕の口縁部。1015は口縁端部に貝殻による刺突を並べる。1017は平底の甕でタタキ調整を施す。1019・1020・1021はS字甕。1021を除きB類。1022～1030は高杯。1022は口縁端部内側に内傾する面を有する。1027は脚部だが杯部との接合部に突帯を持つ。1029・1030はへうによる直線文を施す。1030は外面赤彩か。1031・1032は小型器台。1033は折返し口縁を持つ蓋か。笠形を呈し鈕を欠く。1042・1043も蓋。輪状の鈕を持つ。全体的に粗雑な仕上げだが、鈕の内面にナデ調整が確認できるため蓋と理解した。

1035はいわゆる小型甕か。底部は焼成前穿孔。1037は手焙型土器か。上面にイタによる刺突を並べる突帯を貼付する。

1044は灰釉陶器の輪花皿。内底部に直径約2cmの円形の線刻、外底部には墨書が確認できる。墨書は全形が残存し、墨付きも比較的明瞭ではあるが判読できない。

1048～1228は、NR 01出土。弥生時代中期後葉のものが主体となる。前期頃～中期中葉の資料も若干含むが、これらについては多くはローリングを受ける。

1048は上面にへうによる刺突で刻む。時期はA期か。1049～1070は条痕文系土器。1049～1053はA－1期。1049・1050は壺。口縁端部に押引文、口縁部直下には突帯を貼付する。1051～1053は甕。

1054～1061はA－2期。1054～1057は壺。頸部片で条痕と同一原体による波状文と撥ね上げ文を施す。1059は厚口鉢の口縁部片。1060は沈線文系土器の壺。肩部屈曲成形技法（永井 1994）が観察できる。1061は体部片で羽状条痕を施す。1063・1064は尾張系。搬入品か。

1065～1068、1071・1072もA－2期。1066は壺の頸部片で上面を二枚貝の背面で刻む。1067・1068は条痕文を地文とし、条痕と同一原体による波状文を付加する。1073は壺の底部か。1071・1072は甕。いずれも外面に条痕文、口縁端部に押引文を施す。1072は内面にも2本1組の直線文と波状文を積む。

1069・1074～1101はB－1a期。1076～1078は細口壺の口縁部片。へうによる直線文で区画された文様帯と無文帯を積む。1079は受口状となる太頸壺。1069・1080～1083は鉢。1080・1083は口縁部直下の外面に撥ね上げ文を施す。1084～1092は壺の体部片。へうによる直線文で区画された文様帯と無文帯を積む。1091・1093は文様帯が擬似縄文となる。1095～1011は甕の口縁部片である。

1104～1219はB-1b期。1104～1112は太頸壺の口縁部片。体部～頸部には不揃いなクシによる直線文と波状文・跳ね上げ文、口縁端部には局所圧痕文が特徴的となる。1104は肩部が発達する。1110～1112は受口状口縁となる。1112はやや時期が下がり上面からの混入か。1113～1116は細口壺の口縁部片。1113～1115は受口状口縁となる。1120は無頸壺。口縁部付近に焼成前穿孔が確認できる。

1142～1162・1125は外来系の壺。1142・1143は大型の広口壺で、頸部から大きく開き端部を拡張する。1142は端部に凹線文を施す。頸部には突帯を積み、間には竹管による刺突を並べる。1143は口縁部の上面にイタによる連続刺突と扇形文を交互に施す。1146～1153は細頸壺の口縁部片で、1148～1153は袋状口縁となる。1151・1154はやや時期が下がり、上面からの混入か。

1163～1184は在地系の甕。外面はナデ調整を基本とする。1163・1164は倒鐘形を呈する。1173～1184は台部。体部との接合部分が柱状に発達する資料が多い。1175・1183・1184の柱状部は縦方向のラフなミガキ調整を施す。1185～1198は外来系の甕。外面はハケメ調整とタタキ調整、内面は縦方向にケズリ調整を施す。底部は、1192～1197が台付、1191・1198は平底となる。

1199～1201は大型鉢。在地系で、太頸壺と同様に体部～頸部・口縁部上面に不揃いなクシによる直線文と波状文を施す。

1204～1214は外来系の高杯もしくは鉢か。口縁部が弱い稜を持って立ち上がる形状。1216～1219は脚部か。いずれも端部に面を有する。

1224は台形土器。裾部を欠く。1225は粗製で器壁が厚い。現在は剥離しているが、円盤充填法により底部が形成されている。被熱が確認され、取瓶の可能性も持つが、詳細は不明。1227～1228はミニチュア品で混入か。

台形土器
取瓶か

(6) E区 (図版 83～85 - 1229～1358)

1229・1230はS B 18出土。時期はC期であるが当該期の図示可能な資料を得ていない。1229・1230は混入品でB期。1229は細頸壺の口縁部。袋状口縁を呈する。1230は壺の頸部片。

1231・1232はS B 20出土。1231は壺の口縁部片で端部は面を持つが、中央がくぼむ。端部の下端はヘラにより刻む。1232は甕。外面はナデ調整による。いずれも混入か。

1234～1238はS K 02出土。時期はD-1期。いずれも灰釉陶器碗・皿で黒笹90号窯式～折戸53号窯式。1238は外底部に墨書が確認できるが、全形が残存せず判読できない。

1239はS K 09出土。壺で体部の最大径以下を欠く。体部外面はハケメ調整を施す。時期はC期。

1240～1242はS K 11出土。時期はD期。1240は灰釉陶器碗の底部片。黒笹90号窯式。1241は須恵器の甕。やはり底部片で平底となる。1242は羽釜の鋳部である。

1243はS K 12出土。須恵器杯の底部片である。図示していないが外面に線刻が施されているかもしれない。時期はD-1期で井ヶ谷78号窯式以降。

1244はS K 15出土。ミニチュア品の蓋。口縁部片で穿孔が二か所確認できる。時期はC期。

1245～1247はS K 21 出土。時期はD－1期。1245は灰釉陶器長頸瓶の底部。1246は灰釉陶器碗・皿類の底部で折戸53号窯式。1247はB期の壺底部。大型の破片だが混入だろう。

1248はS Z 01 出土。やや古様だが時期はB－2期と理解する。ほぼ全形をとどめる太頸壺で、体部中央に焼成後による円窓を付ける。頸部は短く肩部は張る。体部には不揃いなクシによる波状文を波長の長短を交互に重ねている。容量は約14.9ℓとなる。

1249はS K 38 出土。灰釉系陶器の碗である。時期はD－2期で、3・4型式。

1250はS K 43 出土。高杯の杯部片である。屈曲部は突帯により強調される。内外面にナデ調整を施す。時期はC期。

1251はS K 45 出土。灰釉陶器の碗・皿類である。深碗かもしれない。時期はD－1期で、折戸53号窯式。

1252～1254はS K 54 出土。時期はC期。出土資料には白玉(1392)も含まれている。1252は小型器台の受部である。1253は壺か。肩部の小片で、外面にハケメ調整を施す。小片のため判断しにくいだが、一部には線刻も施すのか。1254は壺の肩部片で、B期。混入であろう。

1255～1258はS K 59 出土。時期はC期。

1255は鉢。ワイングラス形高杯の杯部に酷似するが平底である。底部は突出して環状底となる。外面にミガキ調整は確認できない。1256はS字甕の口縁部片。1258は蓋。輪状の鈕を持つ。鈕の内面にラフだがナデ調整が確認できるため蓋と理解した。内面と鈕にススが付着する。

1259・1260はS K 63 出土。時期はC期か。1259はミニチュア品の高杯脚部か。外面はラフなミガキ調整を施す。1260は台付甕の台部。

1261・1262はS K 68 出土。時期はC－1b期か。1261は有稜高杯の口縁部片。外面にはやや乱れた波状文を施す。時期はC－1期。1262はミニチュア品の甕。体部は内外面ケズリ調整を施す。口縁端部は磨滅して不鮮明だが、ヘラによる刺突が施されたのかもしれない。

1263はS K 72 出土。灰釉陶器の碗か。時期はD－1期で折戸53号窯式。

1264・1265はS K 78 出土。時期はC期。1264は長頸壺。外面にミガキ調整を施す。頸部はやや短く、底部はくぼむ。1265は甕の台部。外面ハケメ調整を施す。

1266はS K 81 出土。灰釉陶器長頸瓶の底部。時期はD－1期で折戸10号窯式～井ヶ谷78号窯式。

1267はS K 84 出土。灰釉陶器の碗か。時期はD－1期で折戸53号窯式。

1268はS K 88 出土。やはり灰釉陶器の碗か。時期はD－1期で折戸53号窯式。

1269はS D 01 出土。A－2期の壺口縁部片だが混入であろう。

1270～1279はS D 03 出土。時期はD期。1270～1272は須恵器杯。1273～1278は灰釉陶器碗・皿類、1279は灰釉系陶器碗である。時期はばらつくが下限となる1279は12～13世紀。

1280・1281はS D 04 出土。時期はD－2期。1280は灰釉系陶器碗、1281は灰釉系陶器小碗。時期は12～13世紀。

1282 は S D 05 出土。外反高杯の口縁部片。時期は C－1 期。

1283 は S D 06 出土。灰釉系陶器碗の口縁部である。時期は D－2 期で第 6 型式。

1284 は S D 08 出土。壺の口縁部片で外傾する端部には棒状浮文を貼付する。上面は無文。赤彩は確認できない。時期は C 期。

1285 は S D 09 出土。灰釉系陶器鉢の底部片。高台は断面三角形となる。時期は D－2 期。

1286～1294 は S D 11 出土。時期は D 期。1288～1292 は灰釉陶器碗・皿類で、黒笹 90 号窯式～折戸 53 号窯式。1289 は外底部に墨書が確認できるが、全形が残存せず判読できない。1293 は灰釉系陶器碗で第 3 型式。1294 は貿易陶磁で白磁碗の口縁部片。

1295 は S D 14 出土。灰釉陶器の碗・皿類。内底部に線刻が確認できる。時期は D－1 期で、折戸 53 号窯式。

1296～1298 は S X 01 出土。時期は D－2 期。いずれも灰釉系陶器碗で第 5 型式頃。

1299・1300 は S X 02 出土。時期は D－1 期。いずれも灰釉陶器で 1299 は長頸瓶で黒笹 90 号窯式。1300 は碗で外底部に墨痕か。東山 72 号窯式。

1301～1305 は S X 03 出土。時期は C 期。1301 は細頸壺の肩部片だが混入だろう。1302 は折り返し口縁の壺。1303・1304 はミニチュア品。1305 は小型器台の受部か。

1306～1347 は遺構外出土。

1314 は二重口縁壺。大振りとなる。無文で外面にラフなミガキ調整を施す。1318 は須恵器の杯。外底部に墨書が確認できる。1 文字分は残存すると思われるが判読できない。1322 は須恵器の蓋で無鈕。内面が著しく摩滅しており転用硯の可能性を持つ。折戸 10 号窯式～井ヶ谷 78 号窯式で D 期。1324 は須恵器の横瓶。頸部の外面に線刻が確認できる。1329・1330 は灰釉陶器碗・皿で、折戸 53 号窯式。いずれも外底部に墨書が確認できるが全形が残存せず判読できない。1347 は貿易陶磁の青磁碗。口縁部片で外面には鎬蓮弁文を施す。

1348～1351 は灰色シルト層から出土。時期は B 期。

1348 はほぼ全形をとどめる太頸壺。容量は約 14.2 ℓ。体部中央に焼成後による円窓を付ける。頸部はやや短く肩部は張り、体部には不揃いなクシによる波状文と直線文を重ねる。灰色シルトの上面で確認できなかった遺構に伴う資料である可能性もあるが、S Z 01 から出土した 1248 よりは古相となる。1349 は細頸壺の体部、1350・1351 は甕。1351 は外面ハケメ調整、内面は最大径以下に縦方向のケズリ調整を施す。

1352～1359 は N R 01 出土。時期は A 期～B 期。1352 は条痕文系土器の甕。時期は A 期。1353～1359 は B 期。1355 は外来系土器の細頸壺で袋状を呈する。1359 は高杯の杯部か。

(池本正明)

転用硯か

E 区 N R 01

参考・引用文献

- 永井宏幸 1994 「沈線紋系土器について」『朝日遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 34 集
- 加納俊介・石黒立人編 2002 『弥生式土器の様式と編年』東海編 木耳社
- 赤塚次郎 2001 「川原上層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式の設定」『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 91 集
- 石黒立人・宮腰健司 2007 「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』

2 土製品 (図版 88 - 1381 ~ 1390)

1381 ~ 1385 は球形土製品。全面ナデ調整による。重量は 1381 から順に 105.0 g、78.1 g、46.7 g、30.6 g、26.7 g。1384 は D 区 S K 44 出土、その他は遺構外資料で、1381・1383 が C 区、1382・1385 が D 区出土。

1386 は土器片を転用した研磨具で、A 区埋土第 2 群の出土。

1387 ~ 1389 は加工円盤。いずれも D 区 N R 01 資料。土器片を円形に整えたもので、研磨は 1389 に若干確認できるのみ。重量は 1387 から順に 24.3 g、14.2 g、9.8 g。素材となる土器片は 1387・1389 が壺、1388 が甕である。

1390 は勾玉。E 区遺構外資料である。ナデ調整を施す。全長 36 mm、重量は 8.9 g。

(池本正明)

3 石器・石製品 (図版 86 ~ 88 - 1360 ~ 1380・1393)

1360 ~ 1365 は石斧。いずれも混入であろうが 1361 は B 区 N R 02、1364 は A 区 N R 02 埋土第 3 群出土。その他は遺構外資料で、1363 が B 区、1360 が C 区、1362・1365 が D 区出土。

1363・1365 は風化が著しい。1362 は破損後に転用されている。石材は 1360 から順にハイアロクラスタイト・ハンレイ岩・ホルンフェルス・変玄武岩・砂質凝灰岩・ハイアロクラスタイトである。

1366 は石包丁か。図示した他にも同一個体と思われる破片が 3 点あるが、いずれも接合しない。石材は紅レン石片岩 (外帯) である。1367 は二次加工薄片。石材は下呂石である。

1368 ~ 1374 は砥石。1368 が A 区 N R 02 埋土第 4 群、1369 が B 区 S U 04、1371 が D 区 S K 05、1370 が E 区 S X 01 出土。その他は遺構外資料で、1372 が C 区、1373・1374 が D 区出土。石材は 1368 から順に片麻岩・凝灰質砂岩・泥質凝灰岩・凝灰質砂岩・凝灰質砂岩・(領家) 結晶片岩・凝灰岩である。

1375・1376 は B 区 S U 01 出土。いずれも大型の磨石で、1375 は上部を欠損するが、1068 は全形を留め、図示した下部に光沢を持つ摩滅痕が観察できる。いずれも砂質凝灰岩。

1377 は台石。C 区 S B 04 出土。重量 3260 g をはかる大型品となる。石材は凝灰質砂岩。

1378 ~ 1380 は棒状を呈する石製品。1378 は図示した位置で上部が欠損する。自然石に若干の加工を加えるもので石材は花崗岩。A 区の N R 02 埋土第 4 群出土。1379 はしずく状を呈する。やはり図示した位置で上部が欠損する。下部には対角線上に敲打痕が確認できる。石材は凝灰岩。やはり A 区の N R 02 埋土第 4 群出土。弥生時代中期末～後期前半か。1380 は棒状の精製品。E 区の遺構外資料だが弥生時代後期か。図示した位置で上部が細くなり、側面は弱い面を持つ。石材は黒色片岩もしくはフォルンフェルス。1379・1380 は銅鐸舌の可能性を持つが穿孔や紐ずれ痕は確認できない。重量は 1379 が 62.0 g、1380 が 130.7g。

1393 は白玉。E 区 S K 54 出土。石材は滑石で、重量は 0.2 g。

(池本正明)

銅鐸舌か？

4 金属器 (図版 88 - 1391・1392)

1391 は篋被付柳葉式銅鏃。D区 S K 25 出土。全長は 44 mm、鏃身長 23 mm、篋被長 10 mm、鏃幅 11 mm。重量は 4.7 g。詳細は第 V 章 4 で報告する。また、鉛同位体分析も実施しており、第 VII 章 7 で結果を掲載している。

1392 は板状を呈する小型鉄製品で、側面図に表現する様に若干彎曲する。全長は 93 mm。1391 に近接して出土しており鉈の身部か。重量は 25.8 g。
(池本正明)

銅 鏃

5 木製品 (図版 11 ~ 50 - 1403 ~ 1638)

(1) 出土遺構・層位と所属時期

下懸遺跡では、A 区の NR 02 を中心に約 350 点の木製品・木材が出土した。うち、樹種同定をおこなったのは 281 点で、本報告書に掲載した木製品は木簡をふくめて 237 点 (1427 の丸太に刺さったクサビをカウントすれば 238 点) である。

A 区 NR 02 出土の木製品は、出土層位によって埋土 1 群~5 群に分けられる。それぞれの所属時期は、

埋土 1 群-古代 (7 ~ 9 世紀) D 期

埋土 2 群-川原上層式 III-3 ~ IV 期 (廻間 II ~ III 式期併行) C-3 期

埋土 3 群-川原上層式 III-3 期 (廻間 I ~ II 式期併行) C-2・3 期

埋土 4 群-川原上層式 III-1・2 期 (山中~廻間 I 式期併行) C-1b ~ 2 期

埋土 5 群-川原上層式 I・II 式期 (八王子古宮~山中式期併行) C-1 期

である。

しかし時期的にかなり隔たりのある埋土 1 群以外は、厳密に区分しうるような堆積状況ではなく、供伴する土器群にも複数の時期の混入が認められることから、埋土 2 ~ 5 群という時期区分はおおむね目安程度にとどめておき、大まかには NR 02 の北側に展開する居住域の中心時期である弥生後期後半~古墳前期前半の木製品群としてとらえるべきであろう。ただ埋土 5 群のみは、居住域の盛行時期よりもやや先行することから、埋土 2 ~ 4 群とは区別する必要があるのかもしれない。

ここではひとまず、層位ごとに木製品を時期の古い順から概説していき、その後は弥生後期初頭~古墳前期前半 (埋土 2 ~ 5 群) の木製品について、さまざまな角度から検討を加えていくこととしたい。

(2) 木製品の概説

埋土 5 群の木製品には、曲柄二又鋏 (1403)・甲片 (1404) のほか、角棒・丸棒がある。

1403 は伊勢湾型曲柄二又鋏の刃部で、筆者分類の I 類に属する (樋上 2000)。樹種はクヌギ節。

1404 は、緩やかに湾曲する板状の木製品で、5 個体の破片に分かれている。それぞれ

埋土 5 群
(図 12:
1403・1404)

凸面には縦に断面三角形、横に幅が広い断面台形の突帯をつくり出し、黒漆を塗っている(1404-2は凸面に突帯なし)。1404-1には横方向に3条の穿孔列がある。凹面には穿孔列に沿った浅い溝以外に紋様はなく、全面に赤彩をほどこしている。樹種はトチノキである。甲と楯のいずれかである可能性が高く、樹種・紋様・形態から、弥生後期に盛行する装飾的な甲の前胴の破片と判断した(鹿児島大学橋本達也氏、高石市教育委員会神谷正弘氏のご教示による)。ただ、甲とすれば、身体に密着する内面(凹面)に赤彩する必要がないため、今後さらに検討を要する。

埋土4群
(図12～14:
1405～1427)

埋土4群の木製品には、曲柄四又鍬(1405)・木錘(1406)・柱?(1407)・杭(1408～1412)・丸棒(1413～1416)・角棒(1417・1418)・穿孔板(1419～1421)・有扶板(1422)・板(1423)・分割材(1424～1426)・丸太(1427-1)・クサビ(1427-2)のほか、残材などがある。

曲柄四又鍬(1405)は、軸部が筆者分類のD類で、尾張地域に多いタイプである。樹種はアカガシ亜属。

1407は柱の可能性がある建築材で、下端付近に横架材と組み合わせるための仕口がある。樹種はヒノキ科。

このほか埋土4群で特筆すべきは、クサビが刺さったままの丸太(1427)である。樹種はコナラ節で、全長204.5cm、最大径は19.5cmである。図面上の上端から約25cmの位置に、斜めに小型(残存長15.6cm、最大幅3.3cm)のクサビ(アカガシ亜属)が挿入されている。クサビによる亀裂は、上から約65cmまで達しているが、クサビそのものが真ん中あたりで折れたためか、全体が割れないままで放棄されている。

埋土3群
(図15～30:
1428～1545)

埋土3群の木製品には、曲柄平鍬(1428～1430)・曲柄三?又鍬(1431)・曲柄鍬(1432)・鋤柄(1433)・堅杵(1434)・槽(1435～1437)・舟形(1438)・刀形?(1439)・船材?(1440)・台輪(1441)・梯子(1442・1443)・柱(1444～1451)・垂木?(1452・1453)・垂木受け(1455)・建築材(1454)・杭(1456～1468)・穿孔丸棒(1485)・有段丸棒(1469)・有頭丸棒(1470)・有扶丸棒(1471)・丸棒(1472～1482)・穿孔角棒(1483・1484)・有段角棒(1486・1487)・角棒(1488～1492)・穿孔板(1493・1494)・有段板(1495)・有溝板(1496)・有扶板(1497)・板(1498～1524)・分割材(1525～1535)・残材(1536)・丸太(1537～1545)などがある。

1428は筆者分類のDI類で、1430はCII類、1432はD類である。1428～1430はコナラ節で、1431・1432はアカガシ亜属。

1434は堅杵CI類(奈良国立文化財研究所 1993)で、樹種はクヌギ節の芯持材。

1435は低脚付の槽でアカガシ亜属、1436は未成品でクリ、1437は大型槽の破片でスギを用いる。

1438は舟形で、舳先に横方向の穿孔をほどこす。樹種はカヤ。1439は刀形の可能性が高く、樹種はヒノキ。

1440はスギの厚板で、ほぼ等間隔に穿孔があり、そこに樺皮を5枚重ねにして詰め込んでいる。小型の準構造船の舷側板と考えられる。

1441 はクリの巨大な厚板で、中央に直径約 50cm の穿孔をほどこし、片面には穴の両側に蟻溝を彫っている。おそらく、大型掘立柱建物の床を支える台輪であろう。ほぼ同大・同形のものが、岐阜県大垣市荒尾南遺跡から出土している（大垣市教育委員会 鈴木元氏のご教示による）。

1444 ～ 1451 は柱で、いずれも下端が尖り、上端が又状に分かれることから、竪穴建物（住居）の柱材である可能性が高い。直径は 7 ～ 20cm で、全長は 120cm を超える。

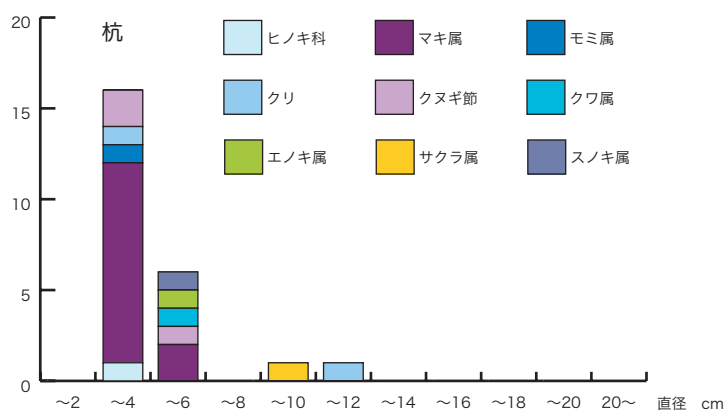
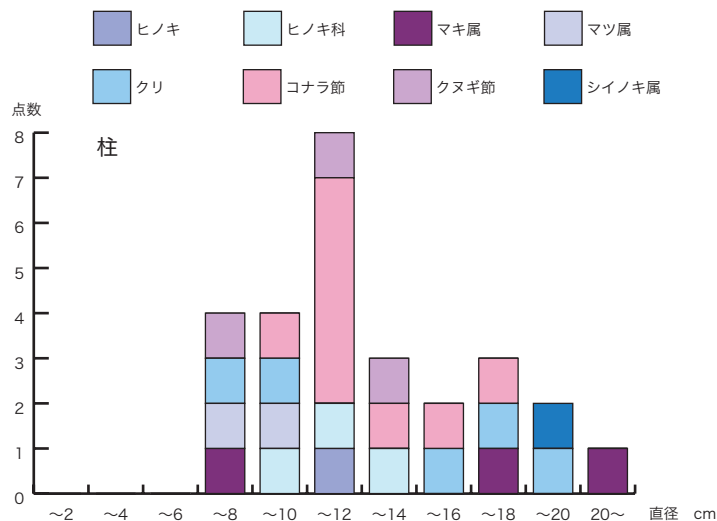


図 10 柱・杭の直径分布グラフ

ただ 1449 には、下端付近に横架材を受ける仕口があることから、掘立柱建物の柱かもしれない。樹種は 1444 ～ 1447 がクリ、1448・1449 がクヌギ節、1450 がヒノキ科、1451 がコナラ節である。1446 ～ 1448 には樹皮が残る。

1452・1453 は、細いマキ属の丸棒で、端部付近に抉りが入ることから、垂木と考えられる。

1455 は垂木受けて、中央に掬首を受けるための大きな V 字の切り込みがあり、その両横には垂木を受ける小さなコの字状の抉りが入る（奈良文化財研究所 黒坂貴裕氏のご教示）。樹種はヒノキ。

おおむね直径が 5cm 以下、全長が 1m 以下で、先端を尖らせたのものは、柱と区別して杭（1456 ～ 1468）とした（図 11）。樹種はマキ属・クヌギ節が多い。

1488・1499・1501～1503はいずれもマキ属の角棒ないしは板で、手斧痕が明瞭に残っている。このほか、ヒノキ科（ヒノキ・サワラ・クロベ）の板（1504～1515）、クリ（1527～1530）・クヌギ節（1531～1534）の分割材、クリ（1537～1539）・コナラ節（1540～1543）の丸太がめだつ。特に1532・1533のクヌギ節の分割材は、幅が13～15cmあり、曲柄平鋏を作るには適当なサイズである。1537～1545の丸太はおおむね直径が10cm前後であることから、堅穴建物の柱材として切り出された可能性が高い。

埋土2群の木製品には、直柄横鋏（1546）・曲柄二？又鋏（1547）・曲柄三？又鋏（1548）・一木平鋏未成品（1549・1550）・堅杵（1551・1552）・腰掛（1553・1554）・編み台（1555）・棟木（1556）・柱（1557～1574）・礎板？（1576）・建築材？（1577～1579）・杭（1580～1585）・穿孔円板（1586）・円形板（1587）・有扶丸棒（1588）・丸棒（1589・1590）・穿孔角棒（1591）・角棒（1592～1596）・穿孔板（1597）・板（1598～1609）・分割材（1610～1616）・残材（1617～1619）・丸太（1575）がある。

直柄横鋏（1546）には、泥除け具を装着した痕跡は認められない。樹種はアカガシ亜属。曲柄鋏（1547・1548）はいずれも刃部のみの破片で、樹種はアカガシ亜属である。一木平鋏未成品（1549・1550）はまだ整形段階で、把手の削りぬきや柄の面取りなどはまだなされていない。樹種はいずれもアカガシ亜属。

堅杵（1551・1552）は、いずれもC I 類に属し、クヌギ節の芯持材を用いる。

腰掛は、板状で脚部が別作りのタイプ（1553）と、一木式（1554）がある。樹種は、前者がヒノキで後者がマツ属。

編み台（1555）は両端を欠損する。樹種はクヌギ節。

1556は棟木で、マキ属を用いる。2ヶ所に穿孔があり、棟束を挿入する。側面の挟りは垂木を結合するための細工と考えられる。

柱（1557～1574）には、堅穴建物の柱と考えられるもの（1565・1567）と、掘立柱建物の柱と考えられるもの（1557・1559・1560・1562・1564・1566・1568・1569）があり、後者には横架材と組み合わせるための出ホゾや仕口をほどこした例が多い。このうち1557は、下端部が欠損し、上端部に段を設けて丁寧に整形している。三重県伊賀市石山古墳出土の家形埴輪の棟持柱に同様の作りが認められる（三重県埋蔵文化財センター2005）。また、東南アジアの民俗例にも同様の細工をほどこした柱が存在する（黒坂貴裕氏のご教示）。樹種はマキ属。また1566は、下端から約75cmより上が炭化している。おそらく、焼失した掘立柱建物の柱で、下側75cmが地中に埋められていたため、炭化しなかったものと考えられる。樹種はコナラ節である。

1576はヒノキの板で、中央が約15cmの範囲で凹んでいる。本遺跡における掘立柱建物の柱は、下端が平らに仕上げられている例がいくつか（1559・1566・1569）見受けられることから、掘立柱建物の礎板であった可能性が高い。

杭（1580～1585）は、いずれもマキ属の芯持材を用いる。

1586は、長軸44.1cm、短軸36.3cm、厚さ9.0cmを測る亀甲状の木製品で、6ヶ所に穿孔をほどこす。うち、四隅の穴が大きく、長軸辺の中央両側に開けられた穴はやや小さい。穴はいずれも中心に向かって斜めに開けられている。クリの半裁材を用いてい

る。用途は全く不明だが、本遺跡に近接する安城市姫下遺跡からは完形品（本センターが2005年度に調査をおこない、報告書は未刊）で、また三重県津市六大A遺跡からは破片で同形品が出土している（三重県埋蔵文化財センター 2000）。

このほか、ヒノキの角棒（1593～1596）、シイノキ属の板（1604～1608）などがまとまって出土している。

1622・1623 以外は、A 区 NR 02 からの出土で、曲柄平鋏（1620）・曲柄三又鋏（1621）・櫛状（1622）・梯子（1623）・建築材（1624）・穿孔角棒（1625）・丸棒（1626）・角棒（1627）・板（1628・1629）・分割材（1630）などがある。

層位不明の
弥生後期～
古墳初頭
(図 48・49：
1620～1630)

A 区 NR02 埋土 5 群

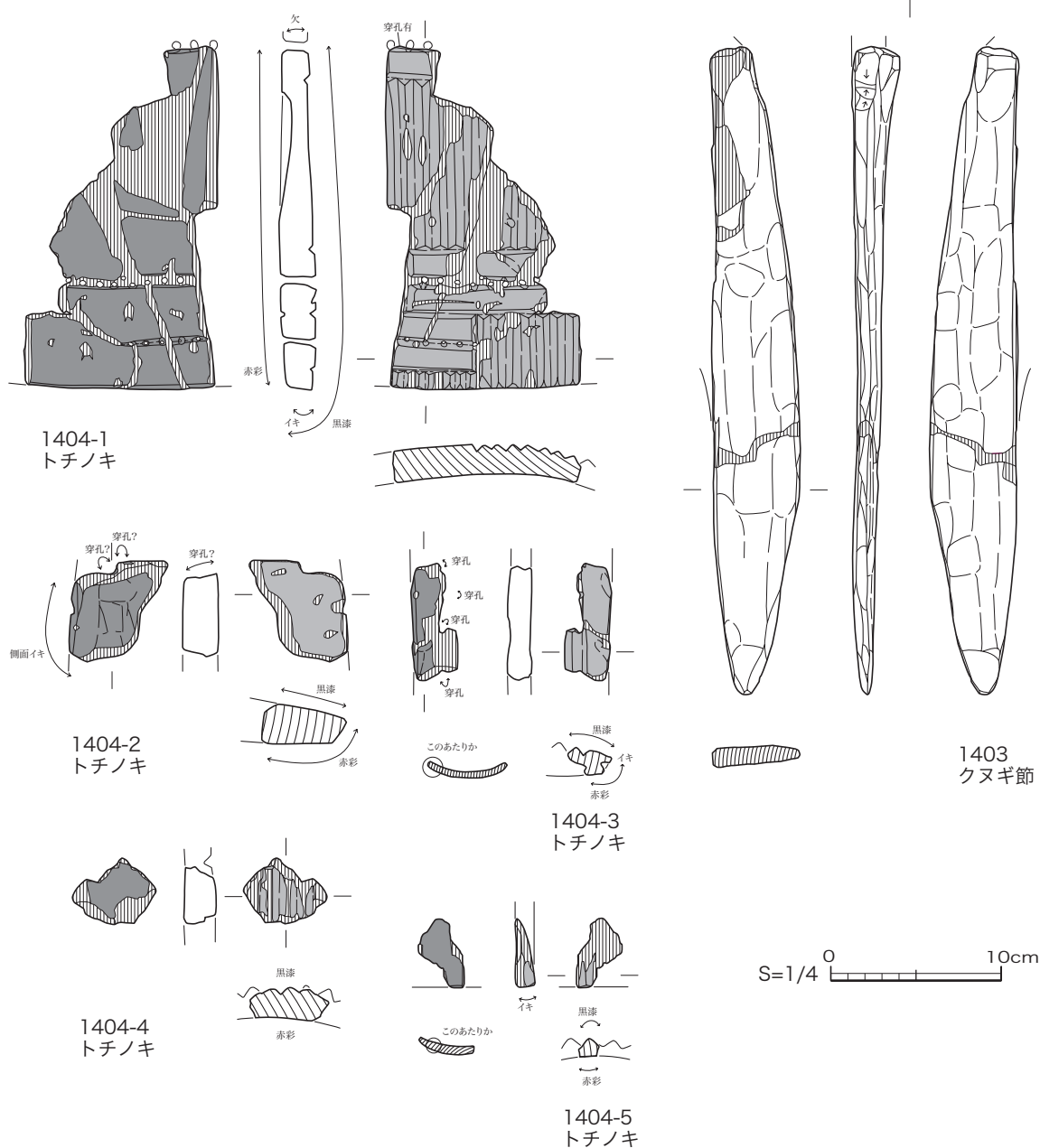


図 11 A 区 NR 02 埋土 5 群出土木製品 - 1

A区 NR02 埋土 4 群-1

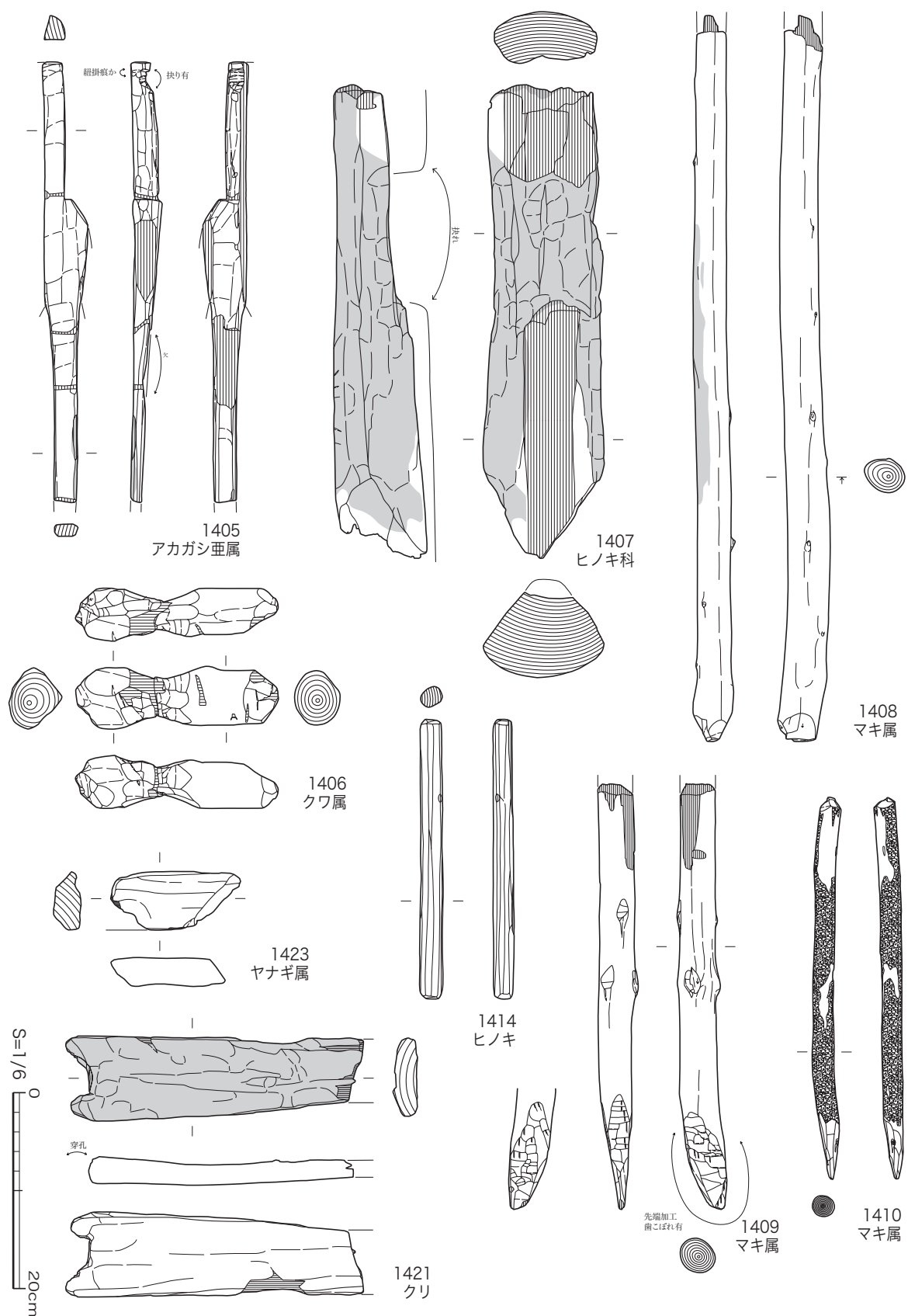


図 12 A区NR 02 埋土 4 群出土木製品 - 1

A区 NR02 埋土4群-2

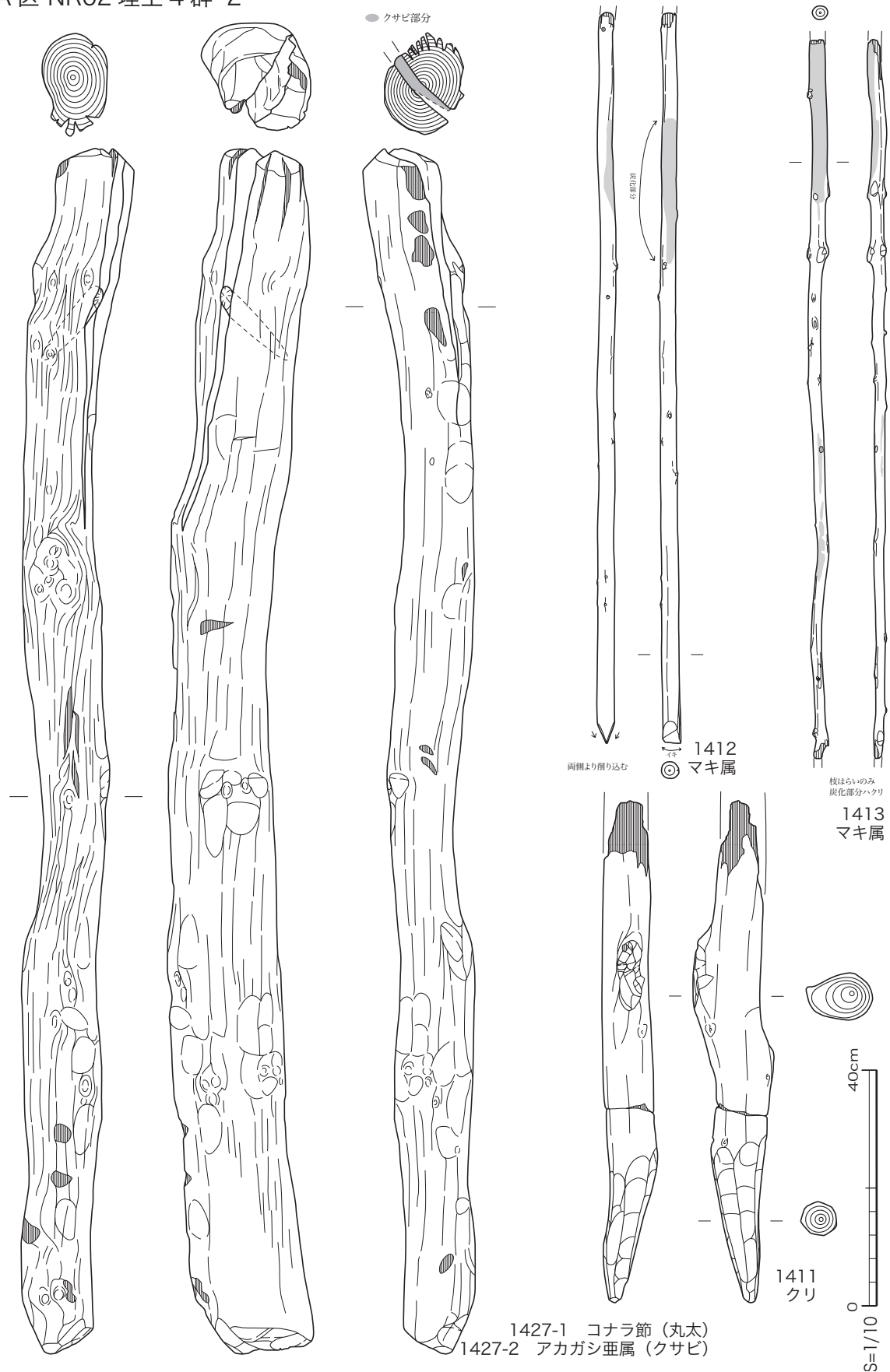


図 13 A区NR 02 埋土4群出土木製品 - 2

A区 NR02 埋土 4 群 -3

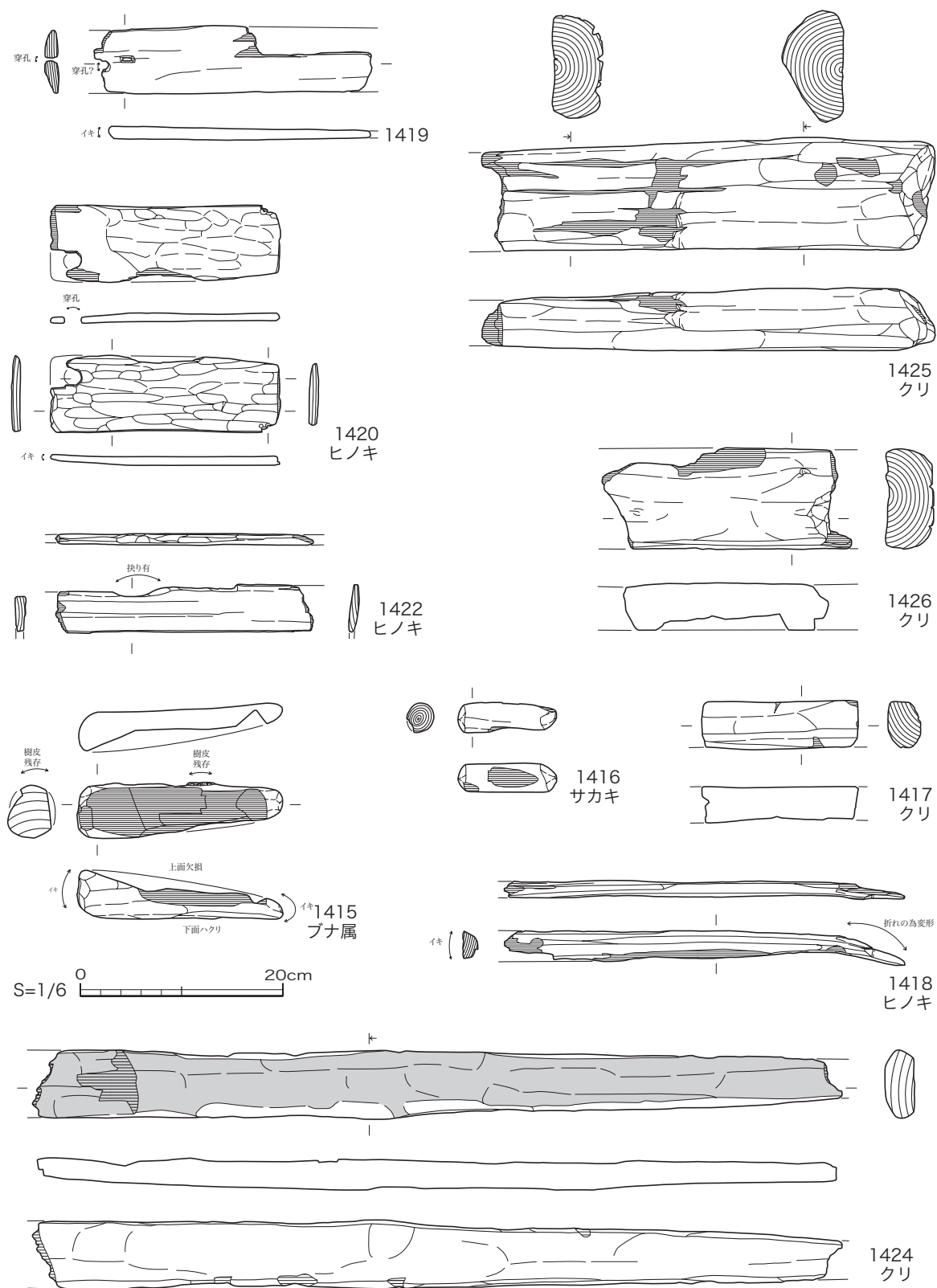


図 14 A区NR 02 埋土 4 群出土木製品 - 3

A区 NR02 埋土 3 群 -1

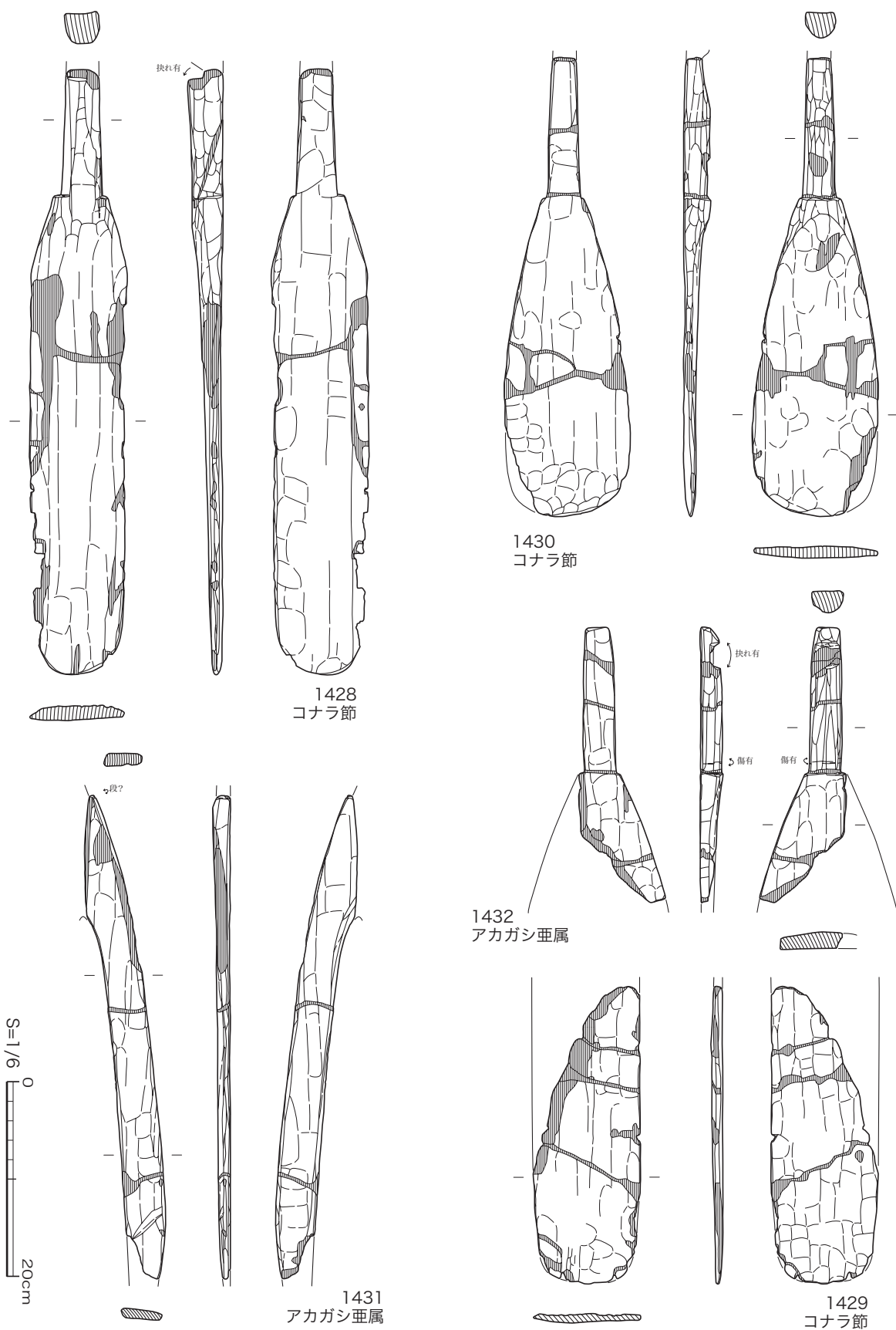


図 15 A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 - 1

A 区 NR02 埋土 3 群 -2

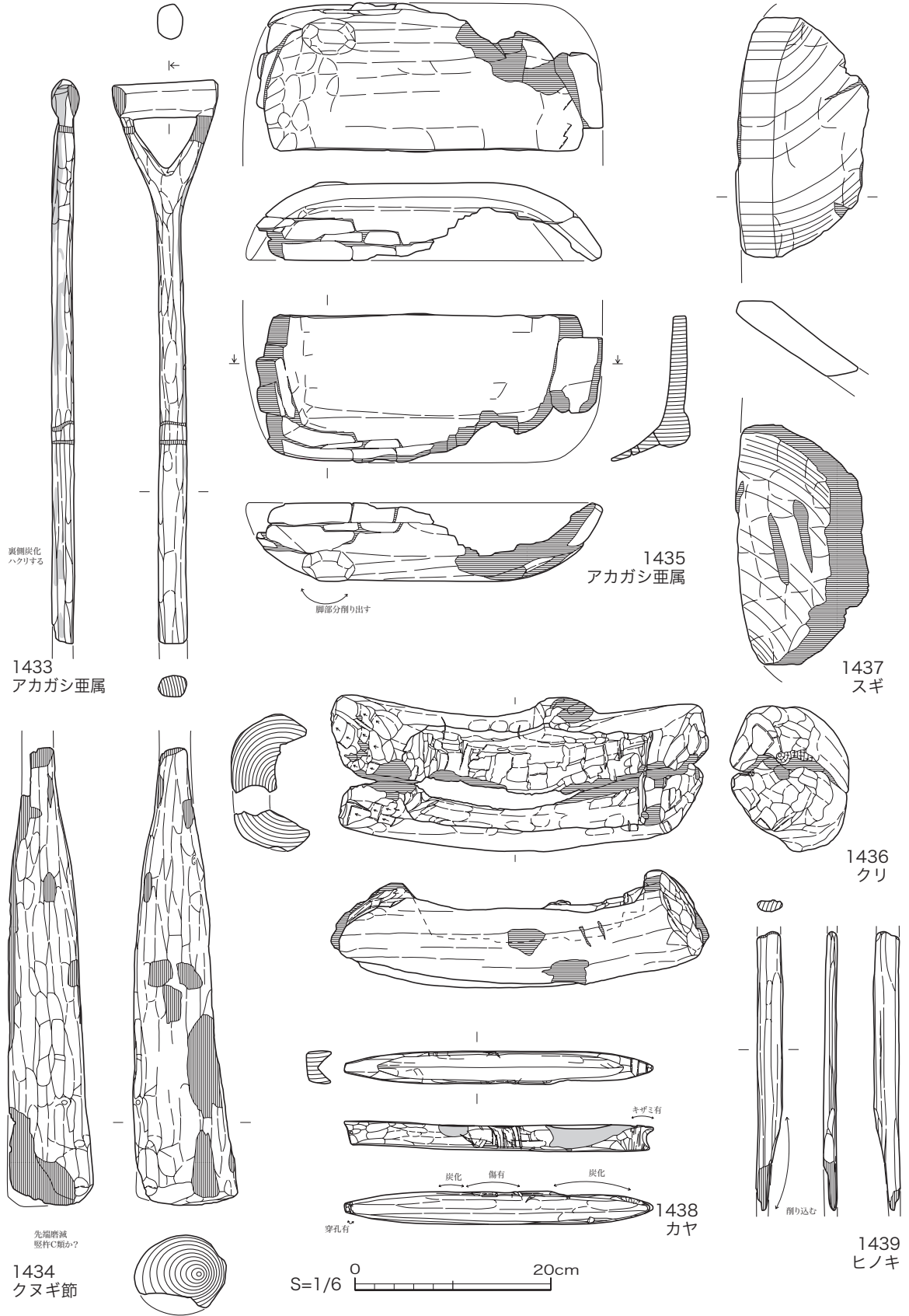


図 16 A 区 NR 02 埋土 3 群出土木製品 - 2

A区 NR02 埋土 3 群 -3

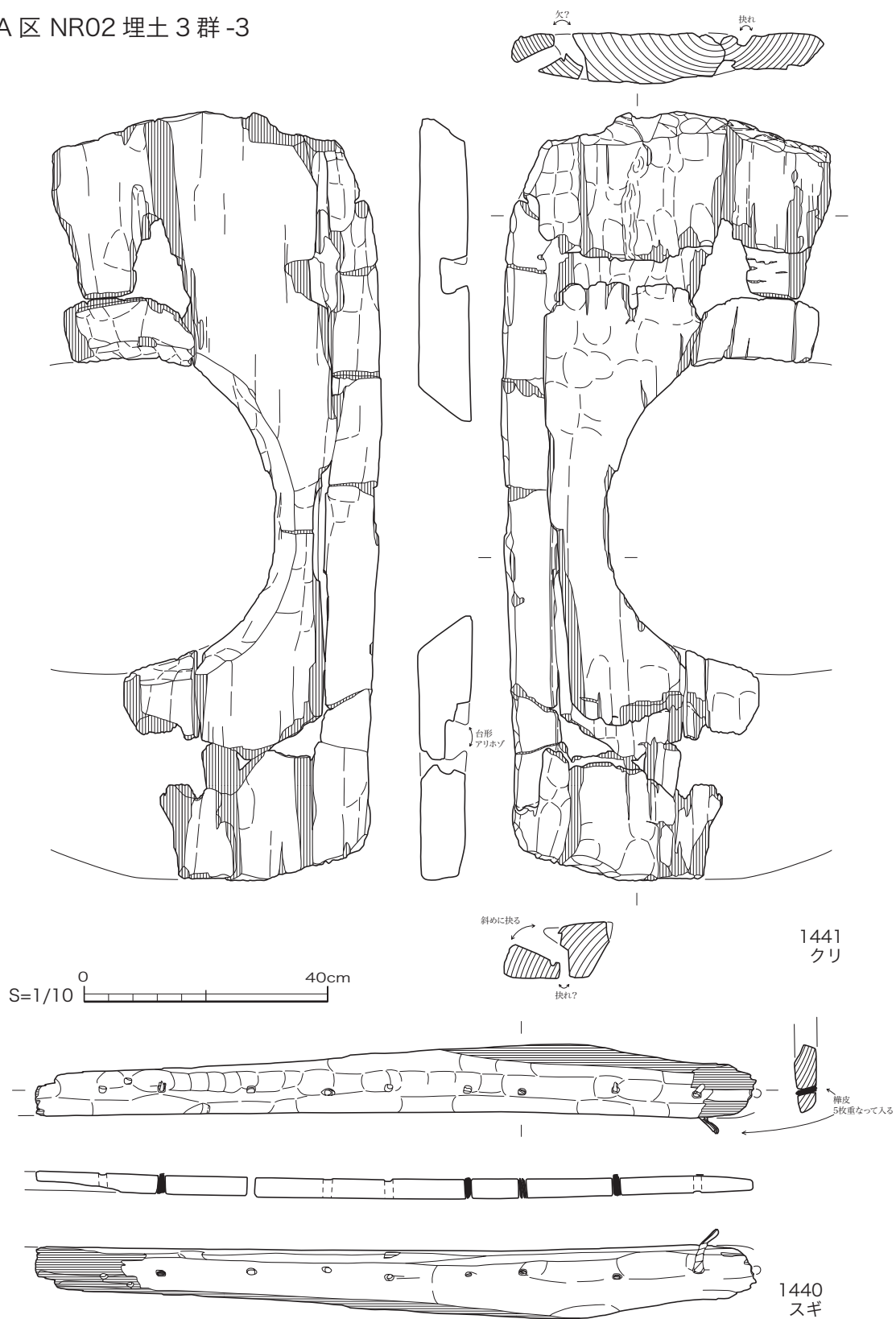


図 17 A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 - 3

1442 クリ

1443 コナラ節

1444 クリ

1445 クリ

1446 クリ

1447 クリ

1448 クリ

1449 クリ

1450 ヒノキ

1451 ヒノキ

1452 ヒノキ

1453 ヒノキ

1454 ヒノキ

1455 ヒノキ

0 40cm

S=1/10

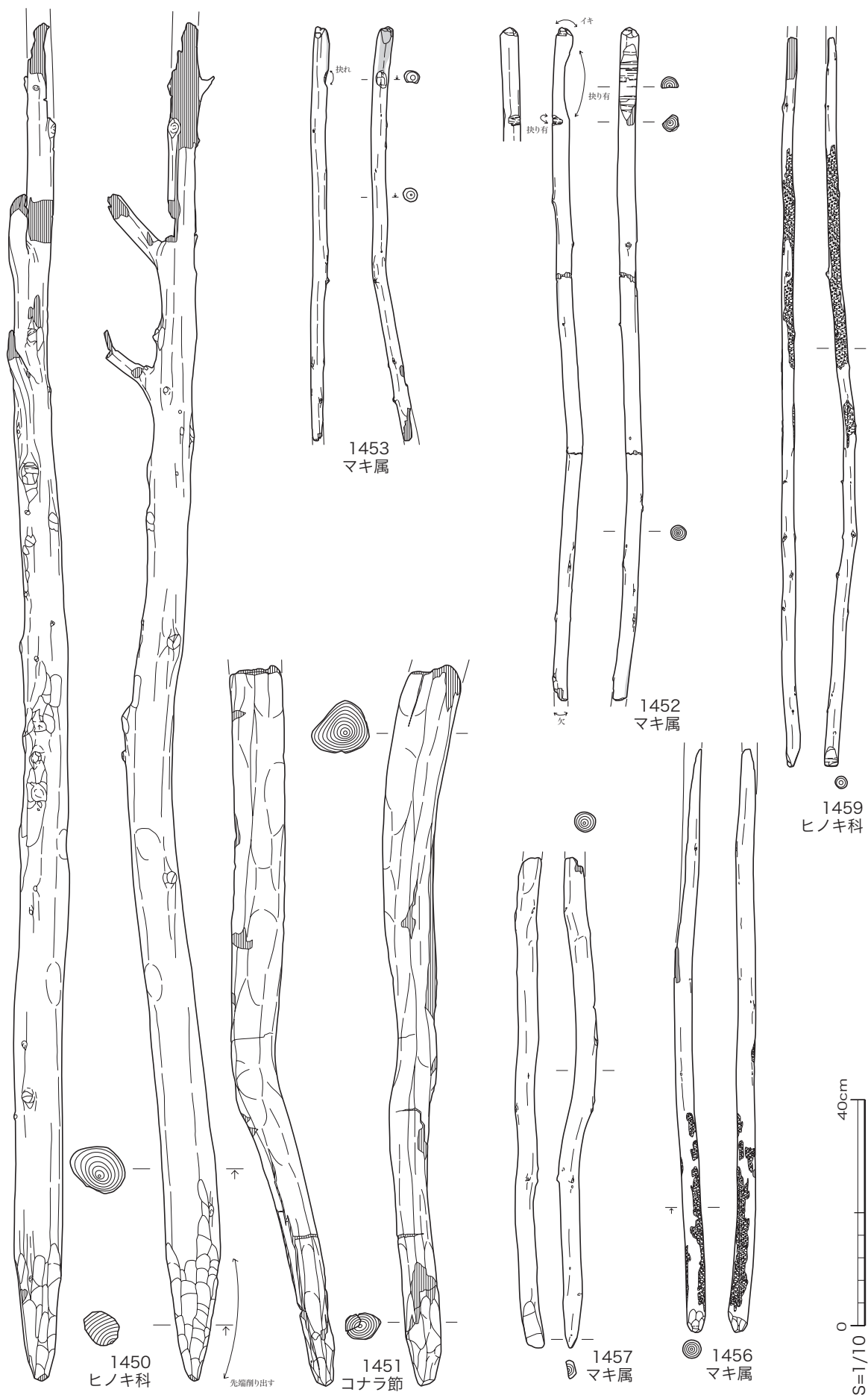
54 第三章 遺物

A区 NR02 埋土 3 群 -5



図 19 A区 NR 02 埋土 3 群出土木製品 - 5

A区 NR02 埋土 3 群 -6



A区 NR02 埋土 3 群-7

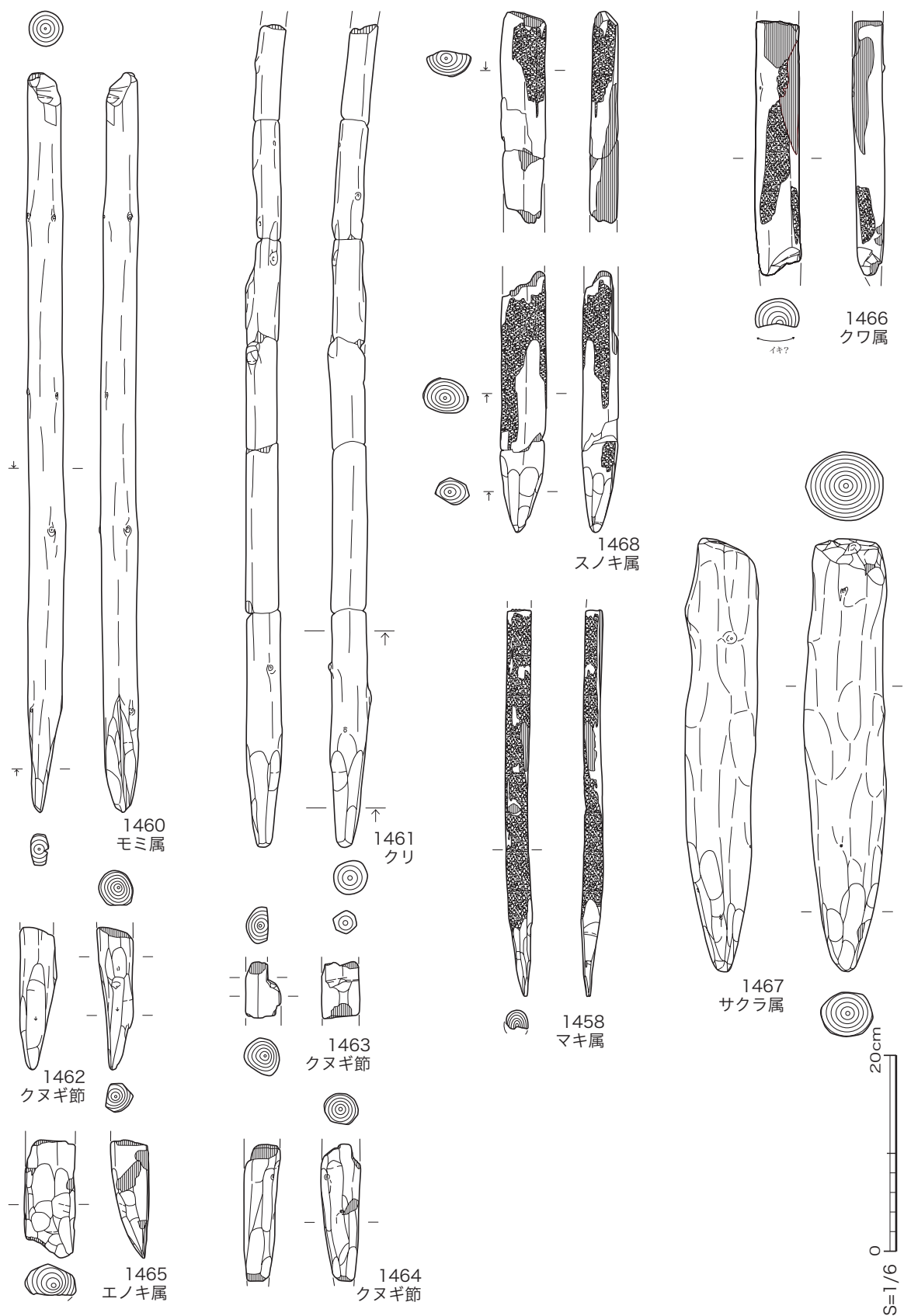


図 21 A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 - 7

A 区 NR02 埋土 3 群 -8

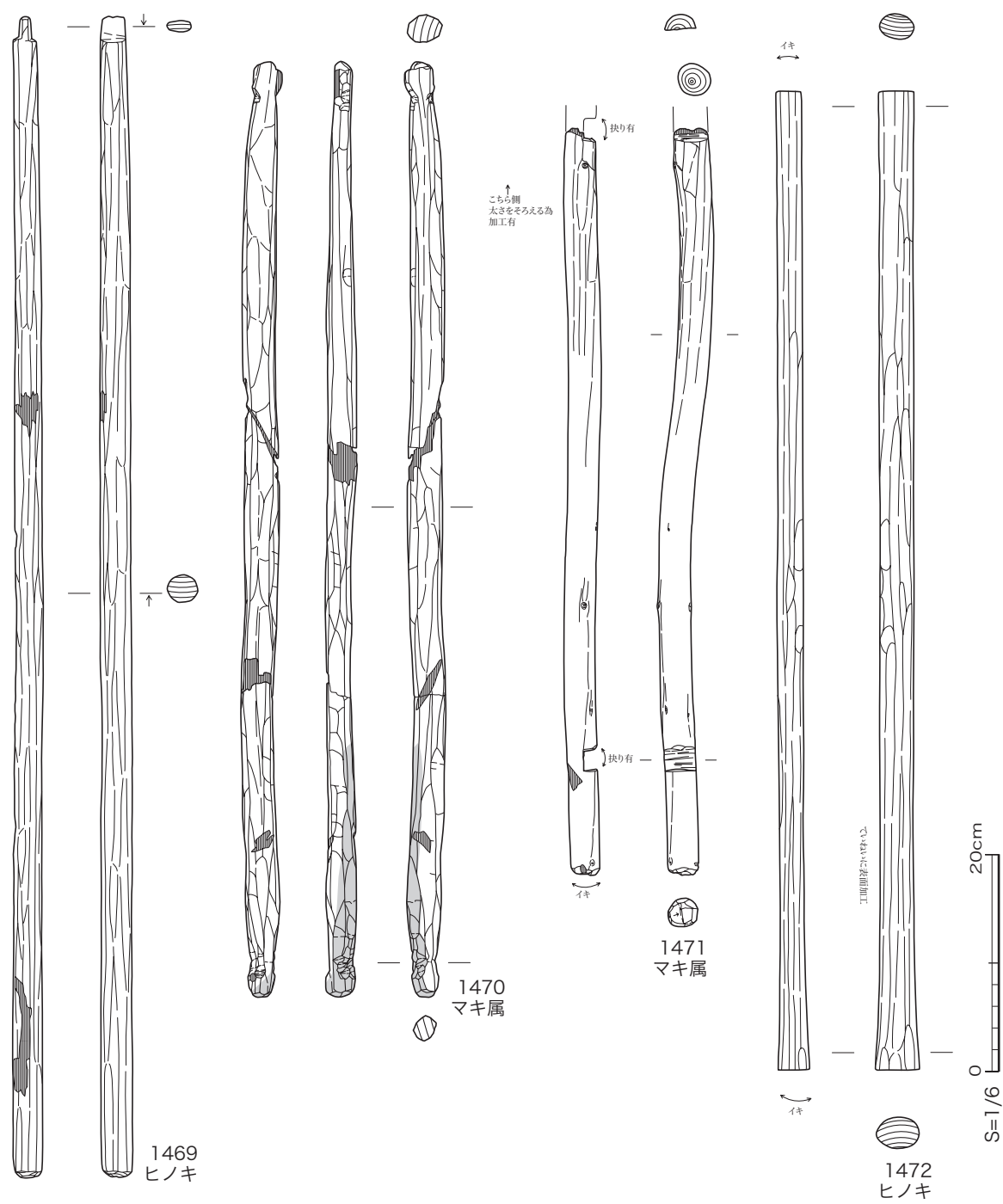


図 22 A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 - 8

A 区 NR02 埋土 3 群 -9

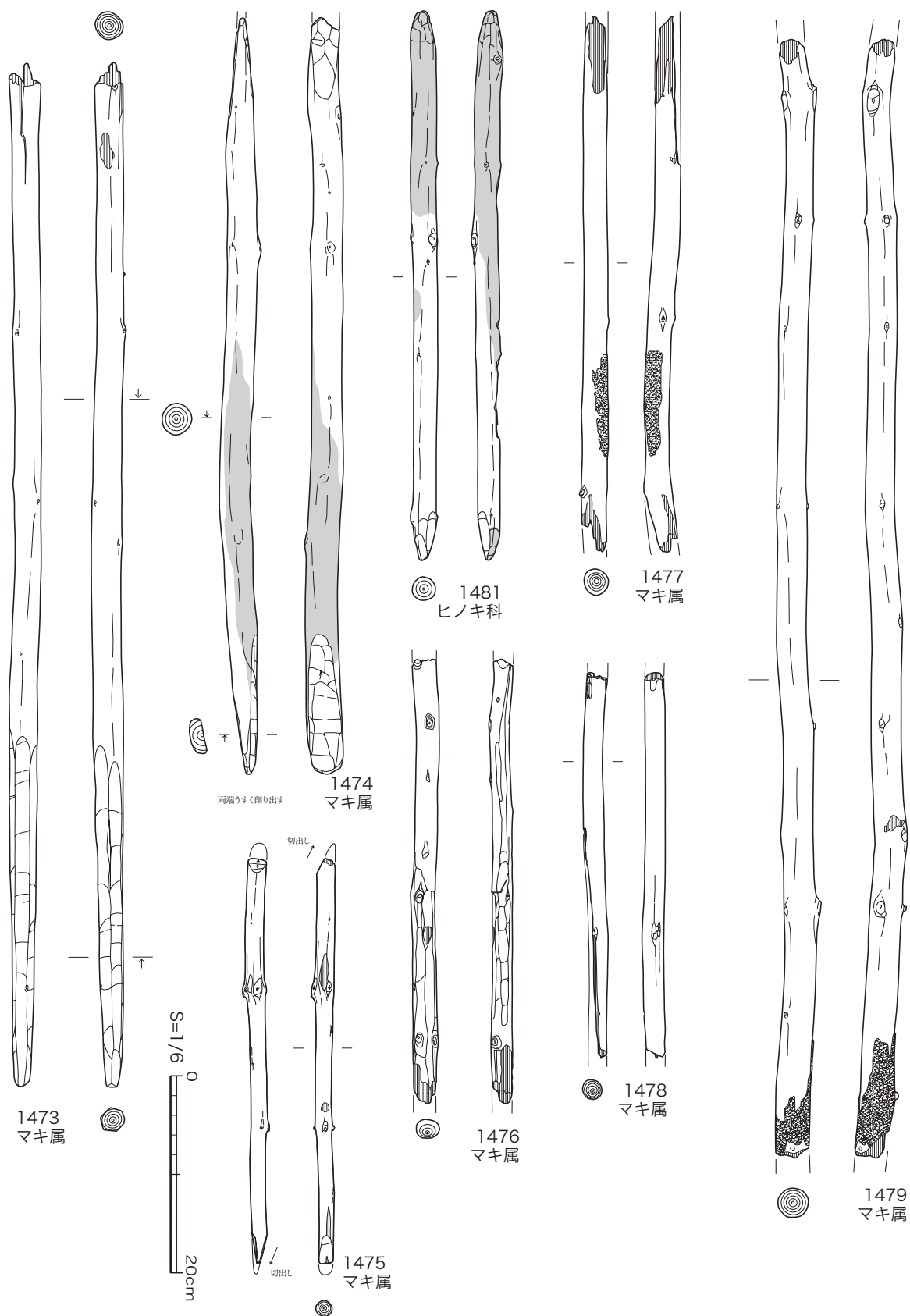


図 23 A 区 NR 02 埋土 3 群出土木製品 - 9

[illegible]

60 第三章 遺物

A 区 NR02 埋土 3 群 -11

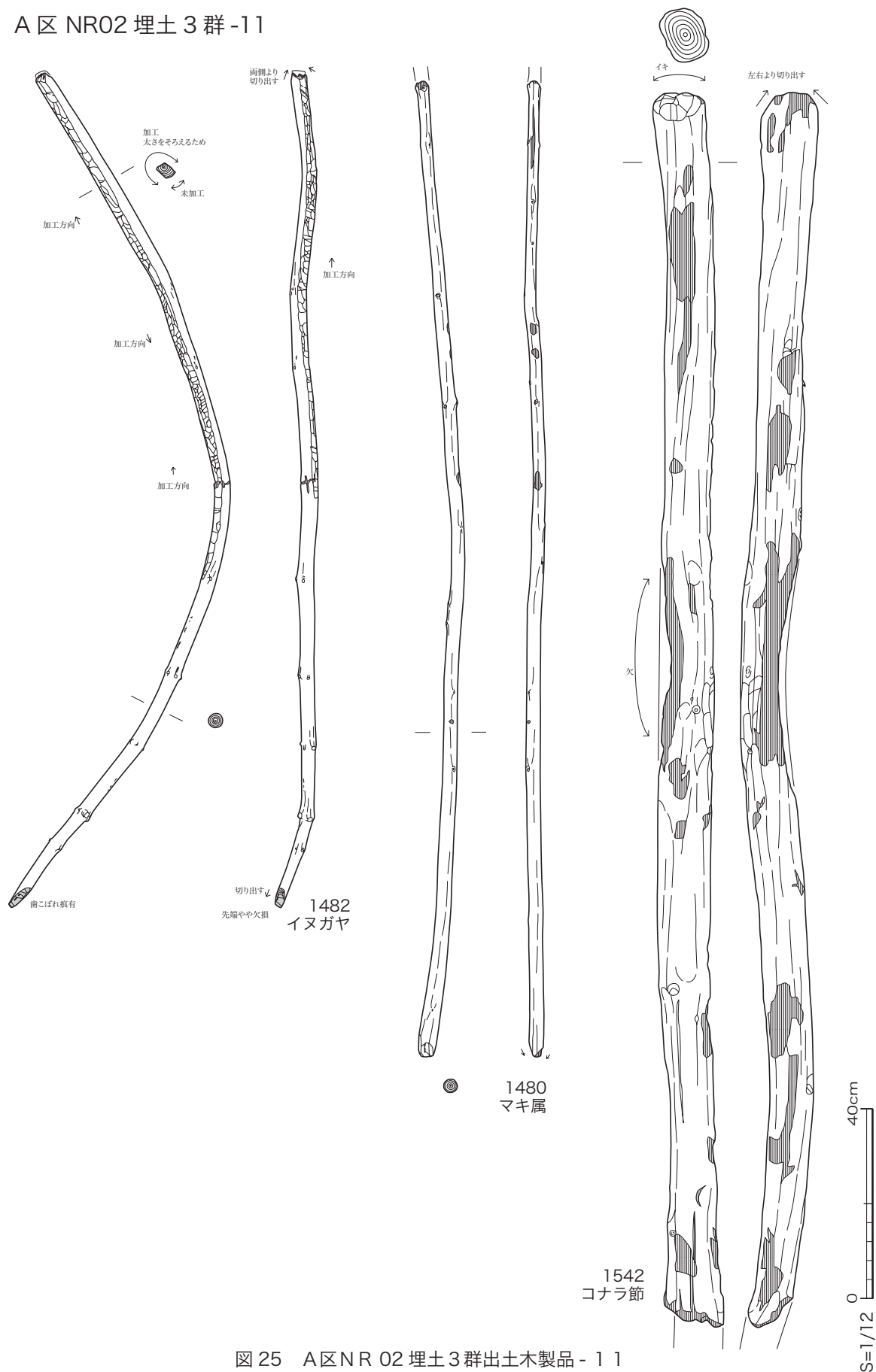


図 25 A 区 NR 02 埋土 3 群出土木製品 - 1 1

A区 NR02 埋土 3群 -12

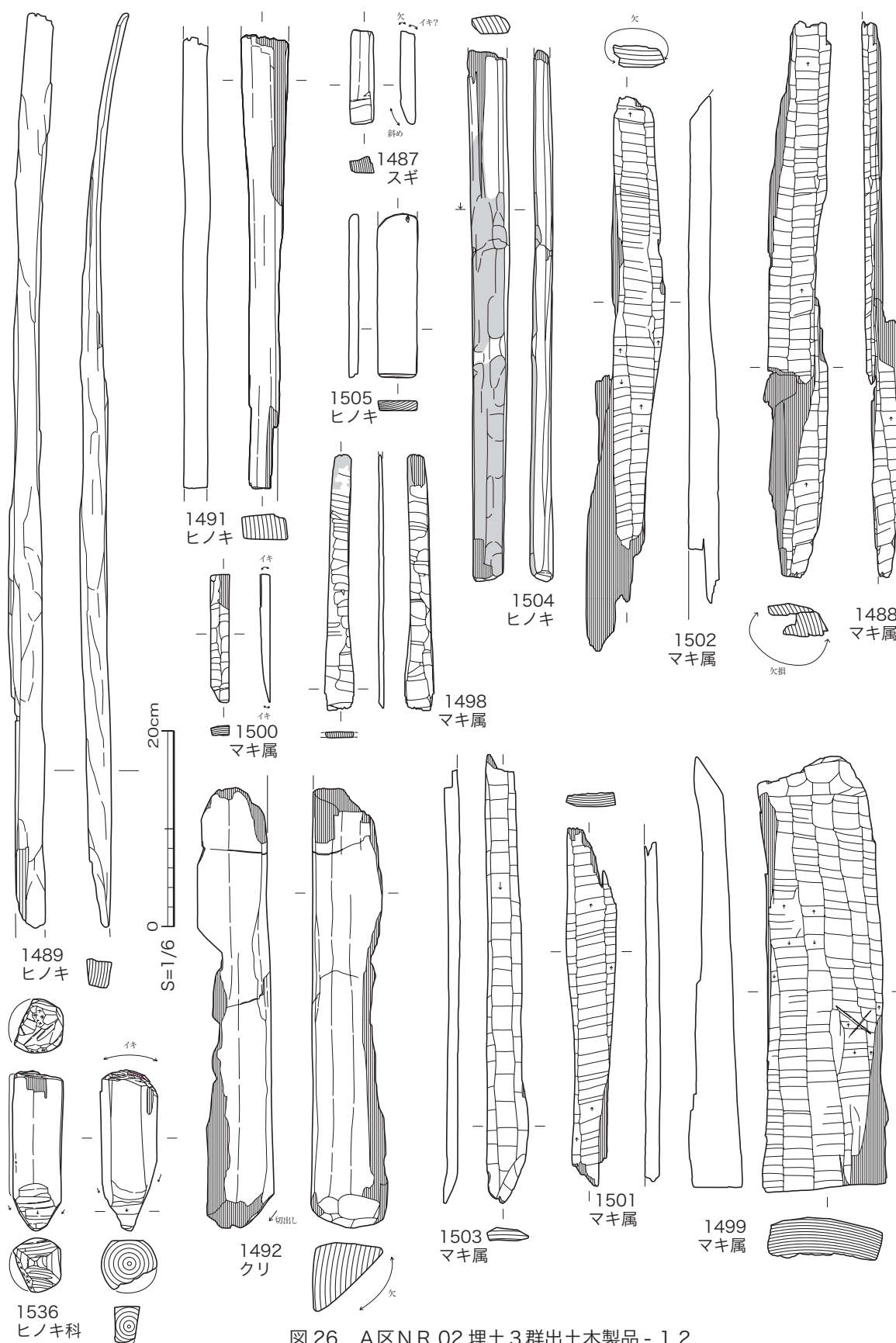


図 26 A区NR 02 埋土 3群出土木製品 - 12

Archaeological illustration of various artifacts, including wooden fragments (ヒノキ), a bone (アカガシ垂属), and a shell (クヌギ節). The artifacts are numbered 1506 through 1521. A scale bar indicates 20cm.

Artifacts shown include:

- 1506 ヒノキ
- 1508 ヒノキ
- 1509 ヒノキ
- 1510 ヒノキ
- 1511 ヒノキ
- 1512 ヒノキ
- 1513 ヒノキ
- 1514 ヒノキ
- 1516 スギ
- 1517 モミ属
- 1518 クリ
- 1520 クヌギ節
- 1521 クヌギ節
- 1522 アカガシ垂属

Scale: 20cm

第三章 遺 物 63

A区 NR02 埋土 3 群 -14

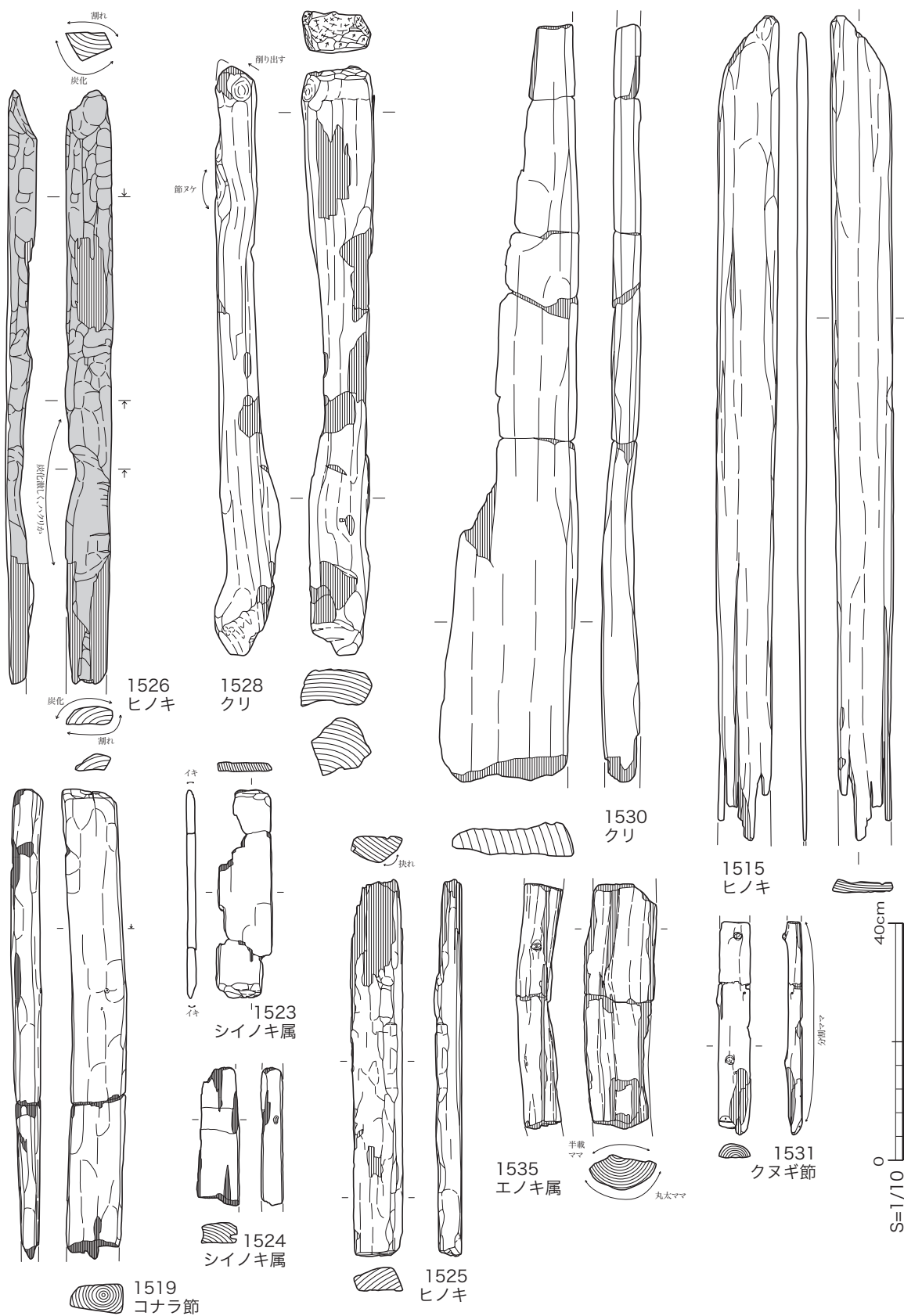


図 28 A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 - 1 4

A区 NR02 埋土 3 群-15

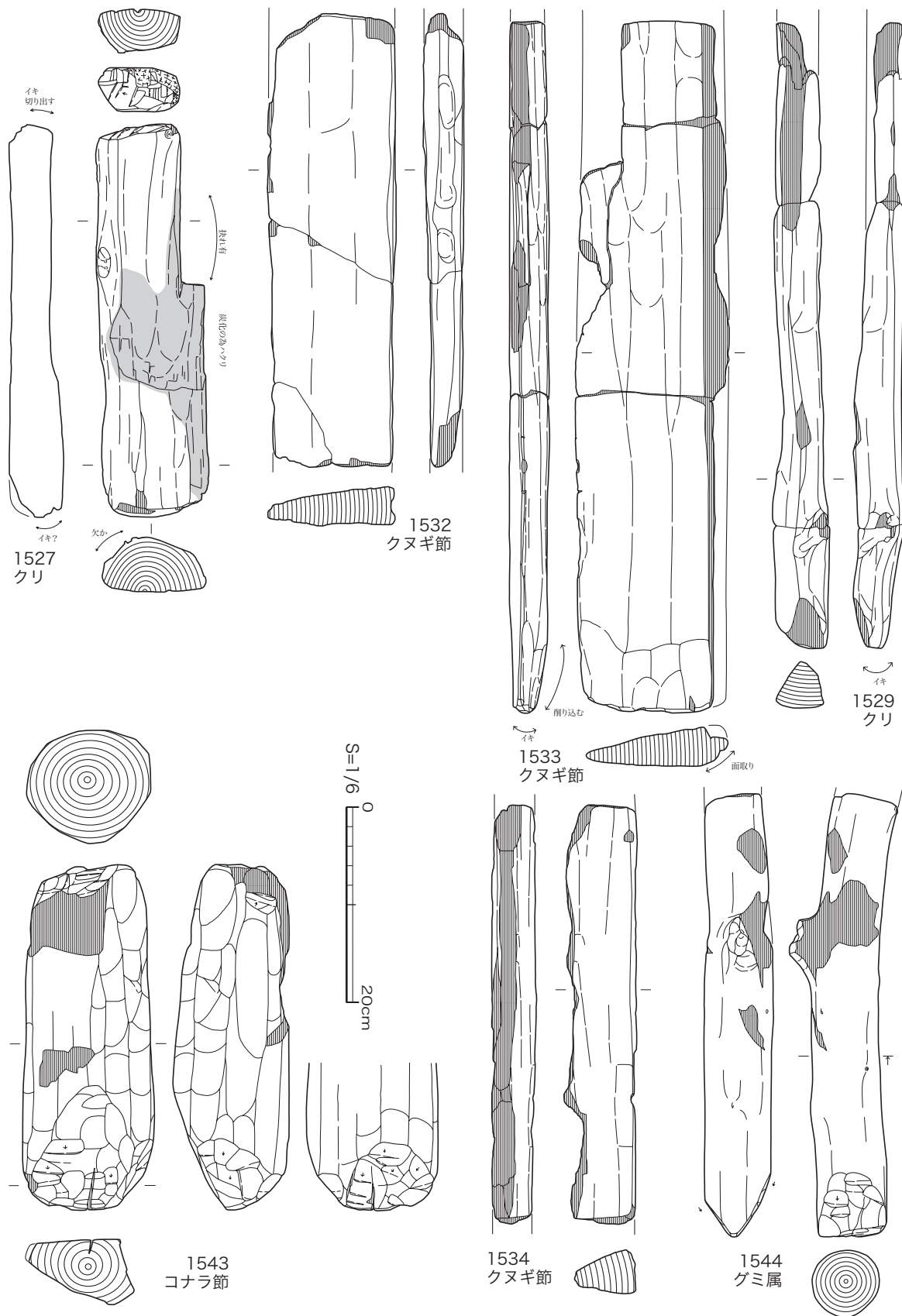


図 29 A区 NR 02 埋土 3 群出土木製品 - 1 5

A区 NR02 埋土 3 群 -16

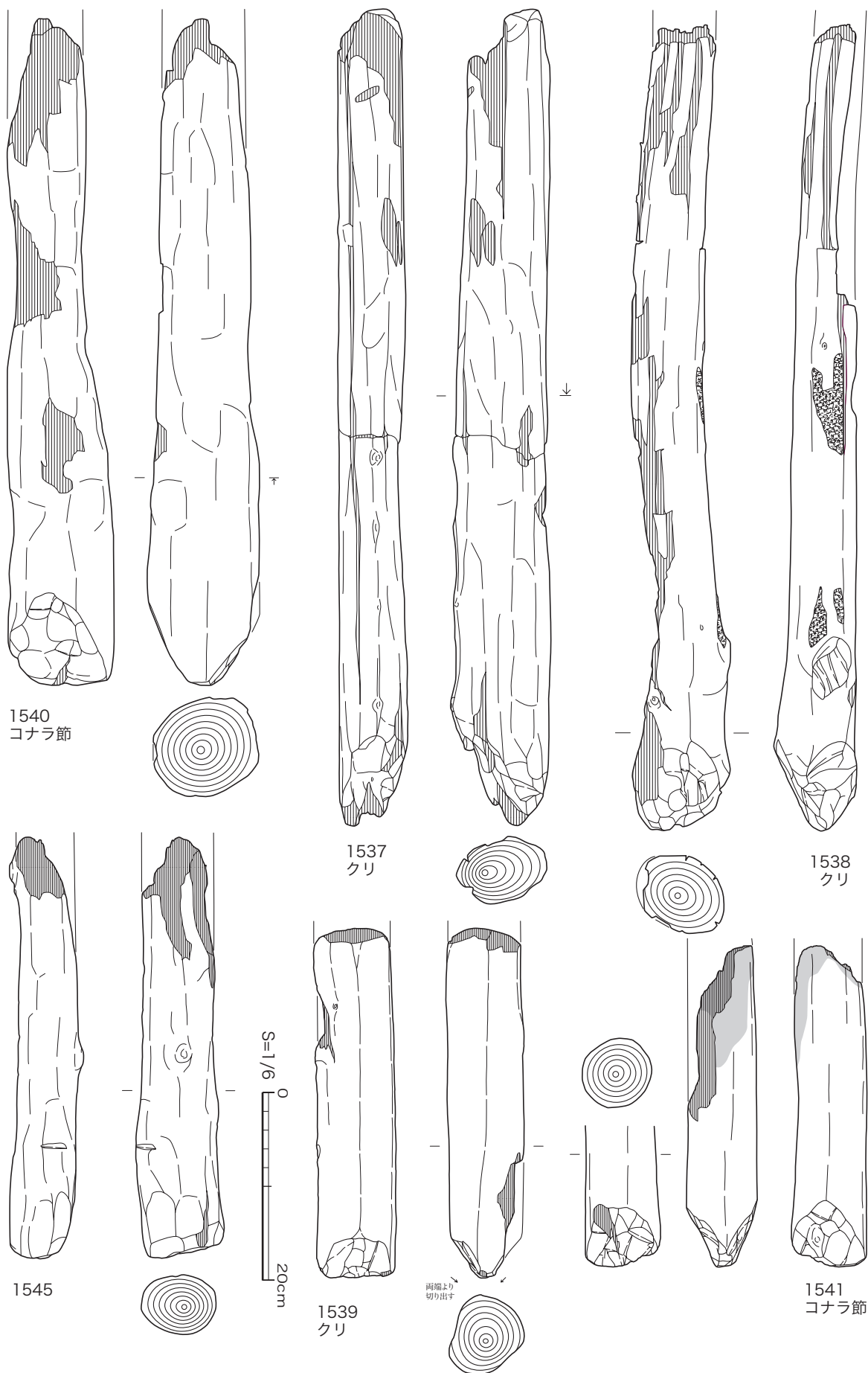


図 30 A区NR 02 埋土 3 群出土木製品 - 1 6

1546
アカガシ亜属

1553
ヒノキ

1547
アカガシ亜属

1548
アカガシ亜属

1554
マツ属

図10 木簡類

0 20cm

S=1/6

図10は、木簡類の考古学的図録ページで、5つの木簡（1546, 1547, 1548, 1553, 1554）の図解と実物写真を示している。各木簡の図解は、平面図、側面図、断面図、および詳細な部分図を含む。1546はアカガシ亜属、1547はアカガシ亜属、1548はアカガシ亜属、1553はヒノキ、1554はマツ属に属する。図解には、年輪線、欠損部分、穿孔、斜めに穿孔、削り込むなどの特徴が示されている。右下には、0から20cmまでのスケールバーと、S=1/6の縮尺比率が記載されている。

第Ⅲ章 遺 物 67

A 区 NR02 埋土 2 群 -2

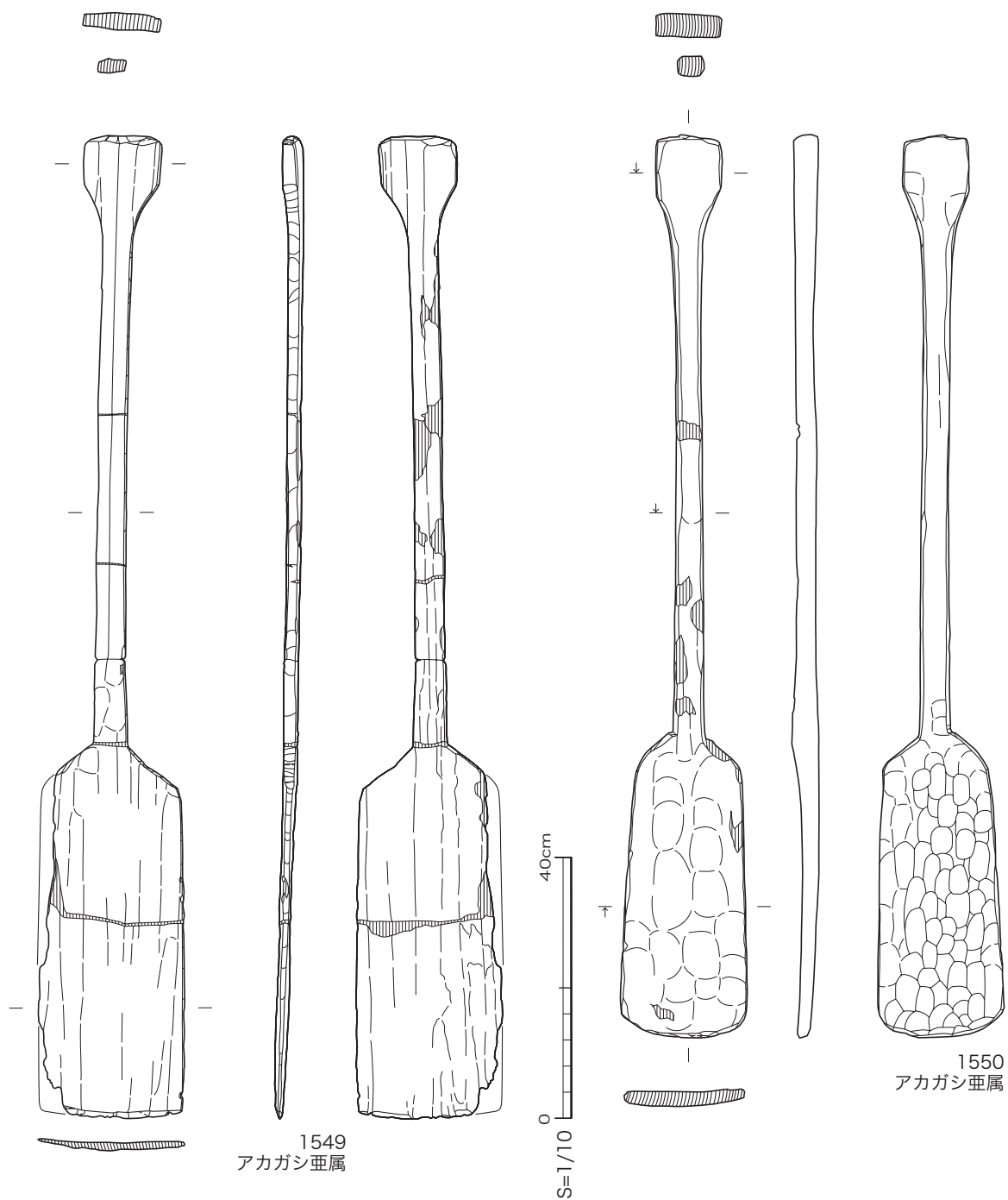


図 32 A 区 NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 2

A区 NR02 埋土 2 群-3

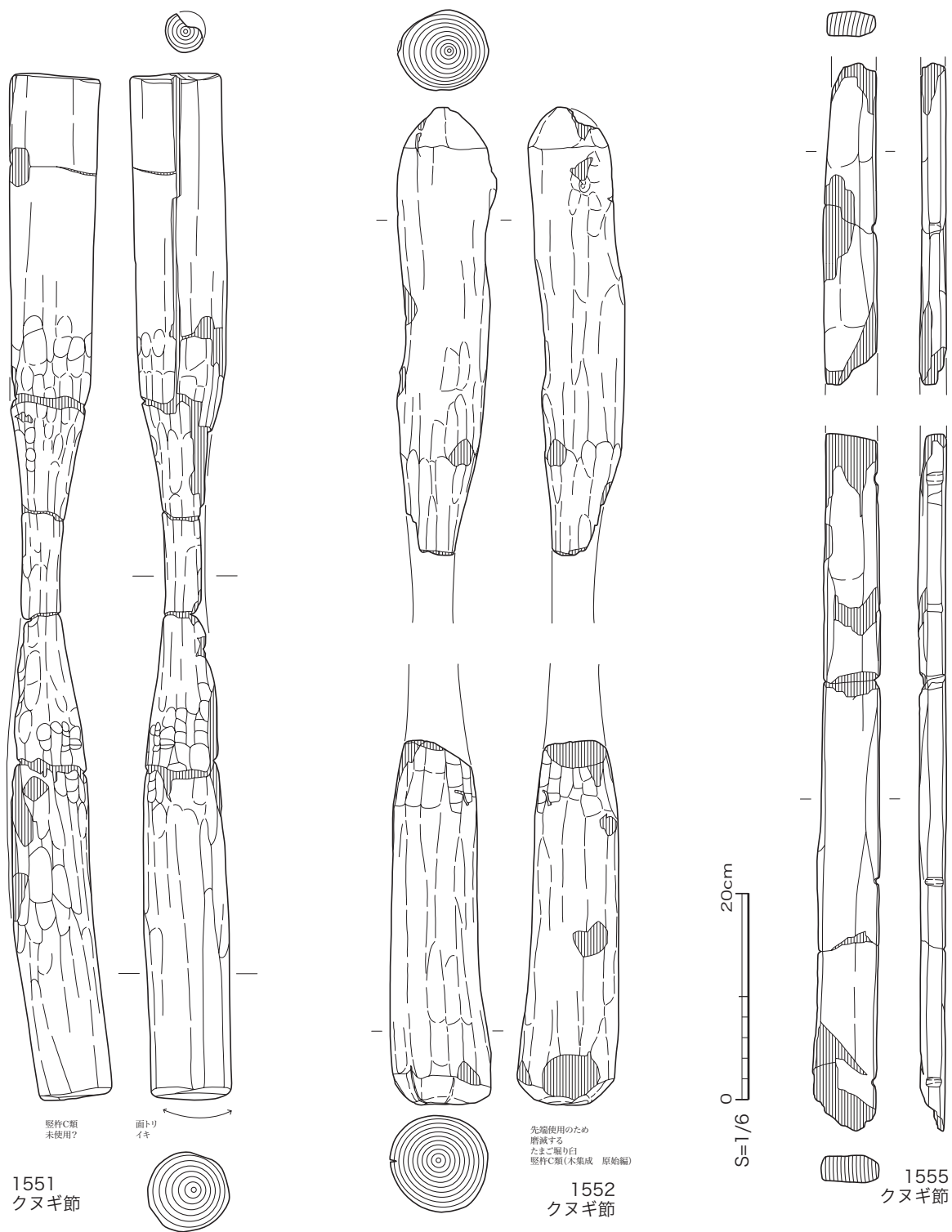


図 33 A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 3

A 区 NR02 埋土 2 群 -4

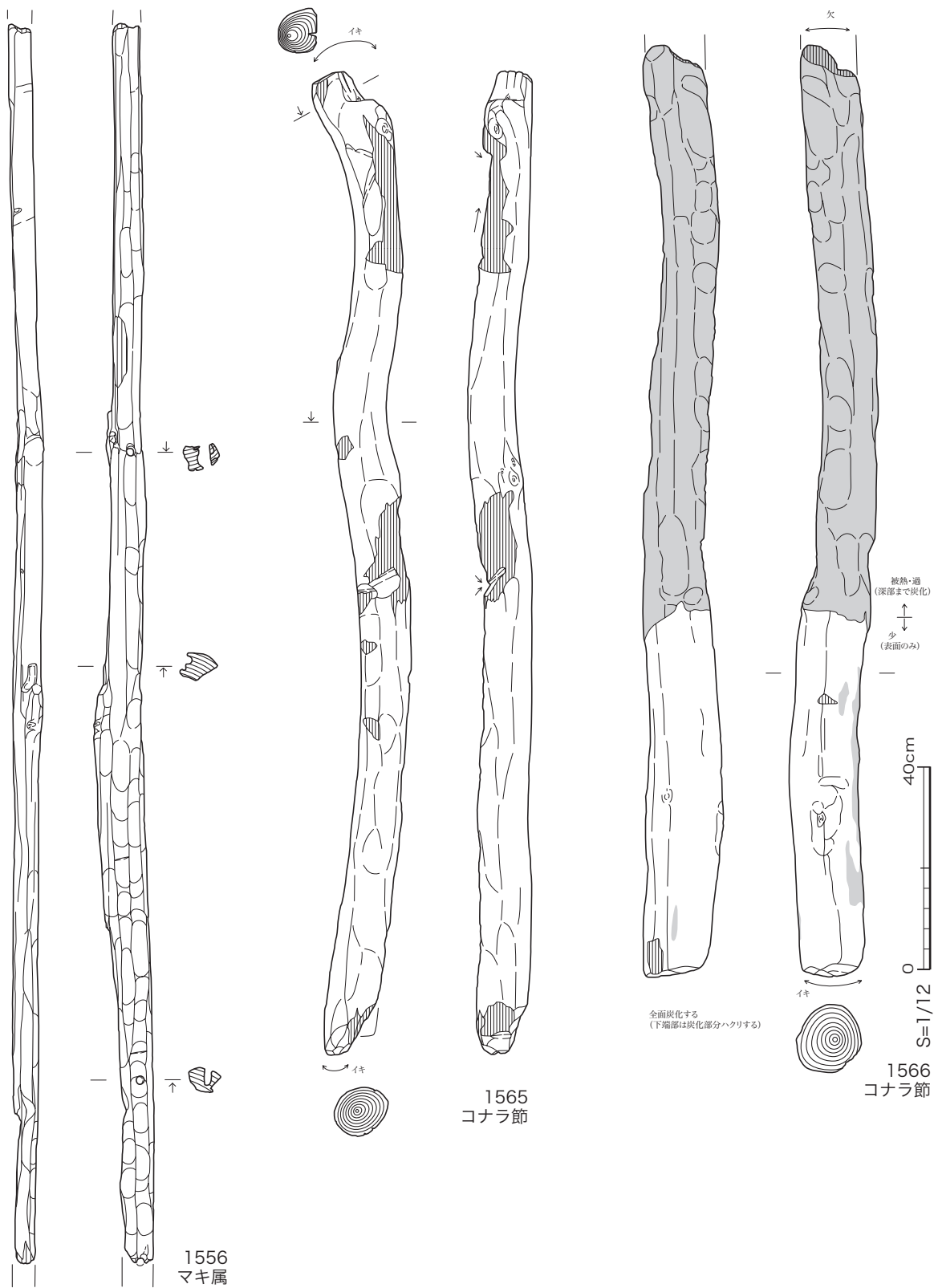


図 34 A 区 NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 4

A 区 NR02 埋土 2 群-5

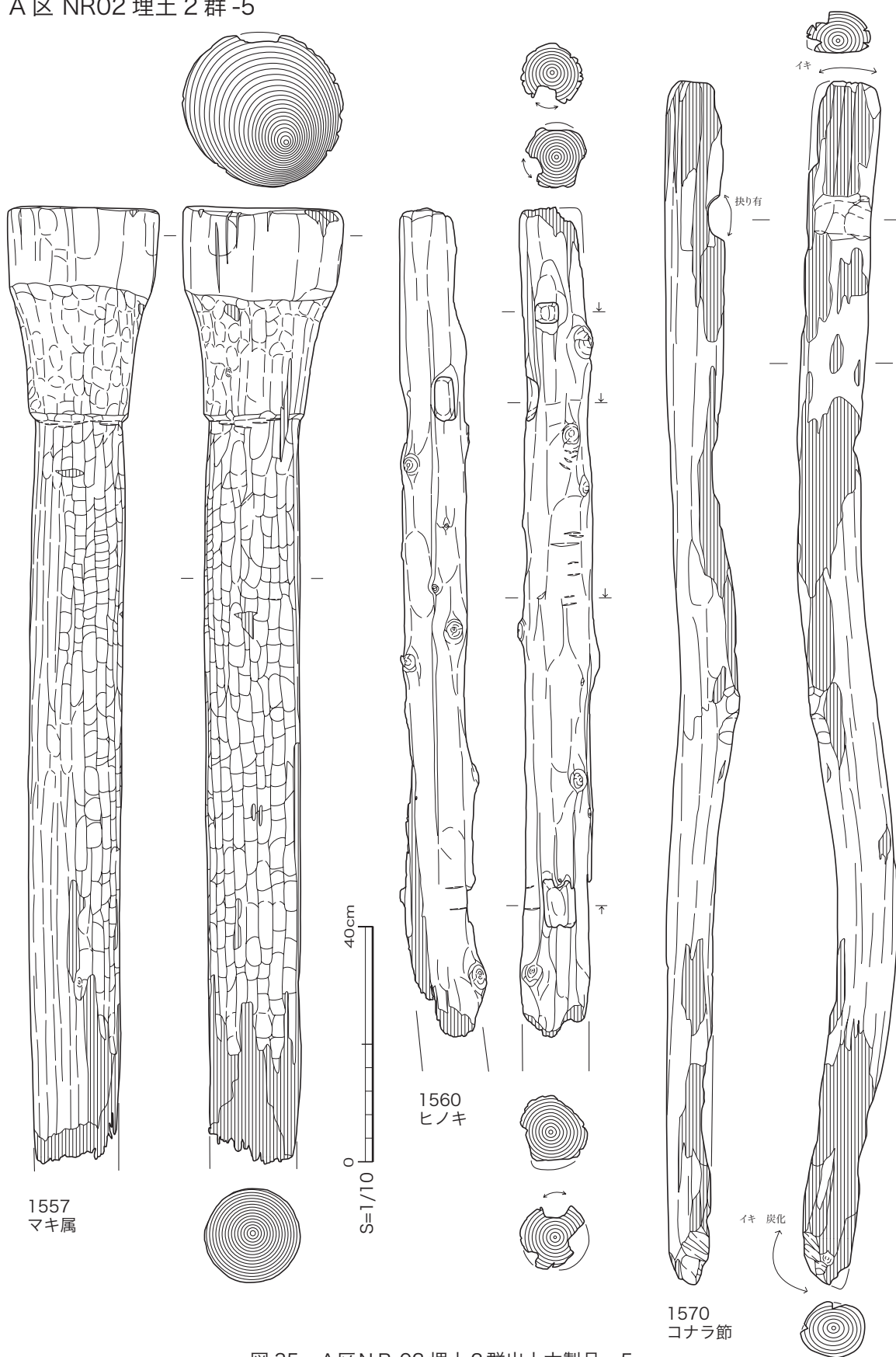


図 35 A区NR 02 埋土2群出土木製品-5

A 区 NR02 埋土 2 群 -6

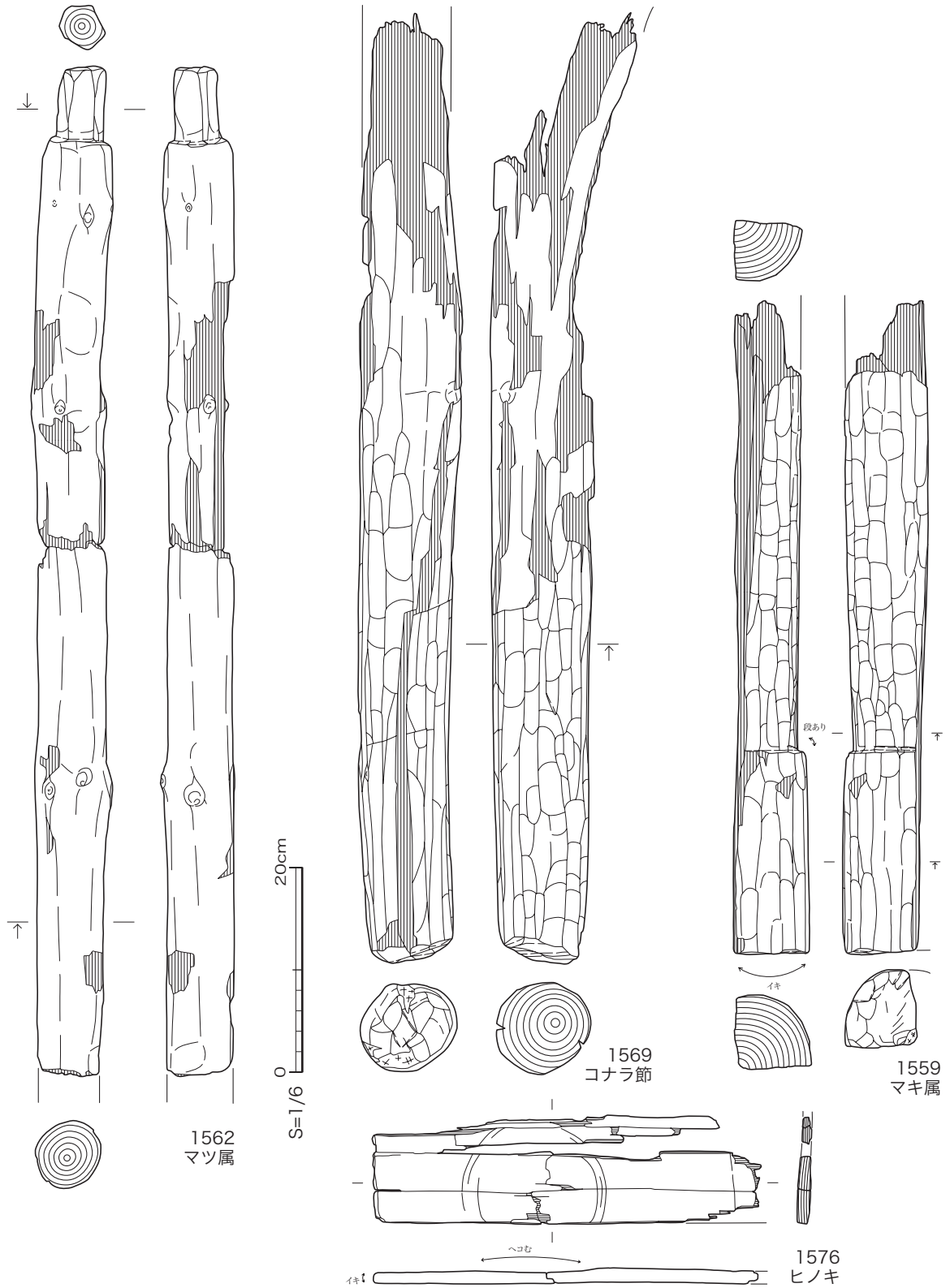


図 36 A 区 NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 6

A区 NR02 埋土 2 群-7

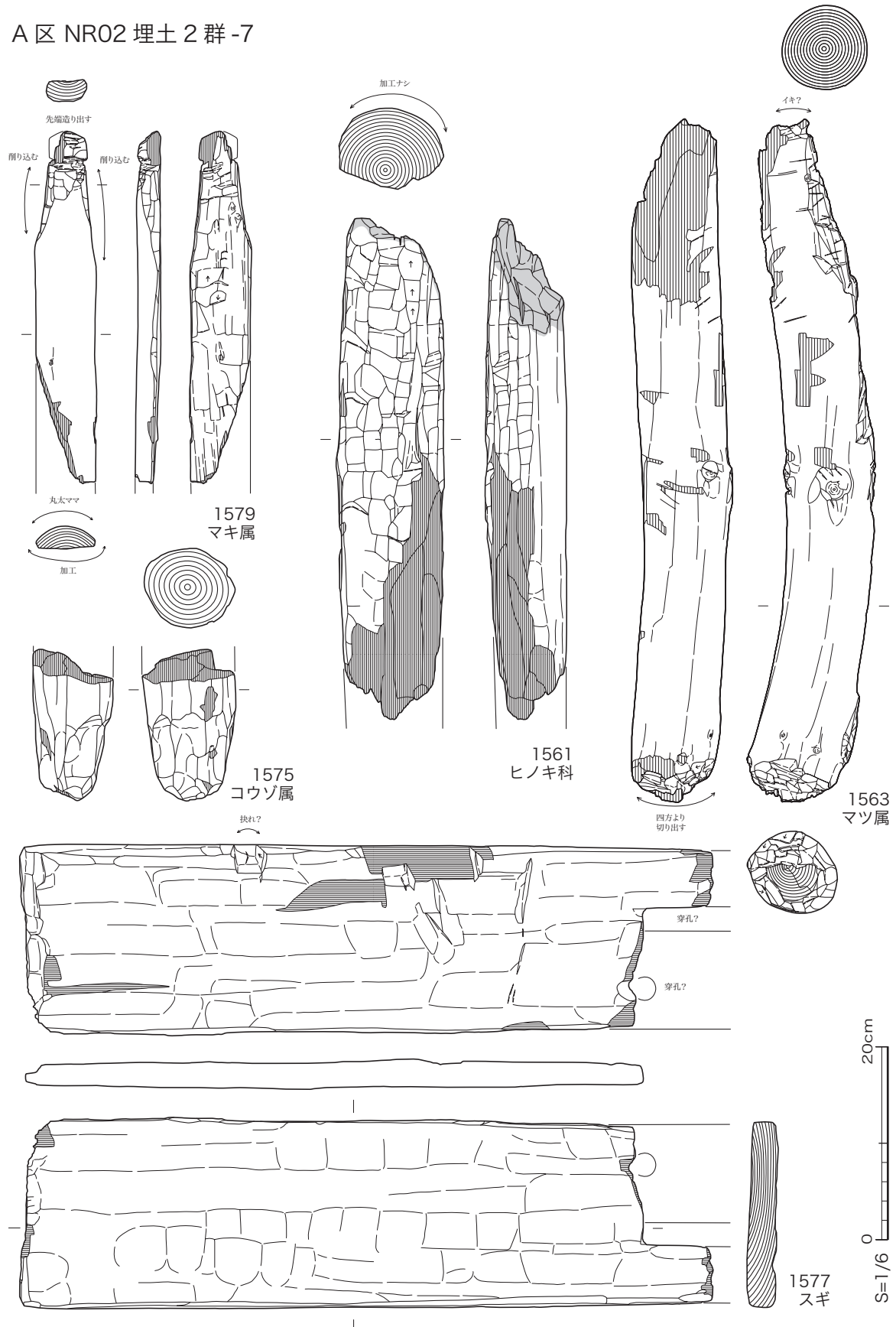


図 37 A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 7

A区 NR02 埋土 2 群 -8

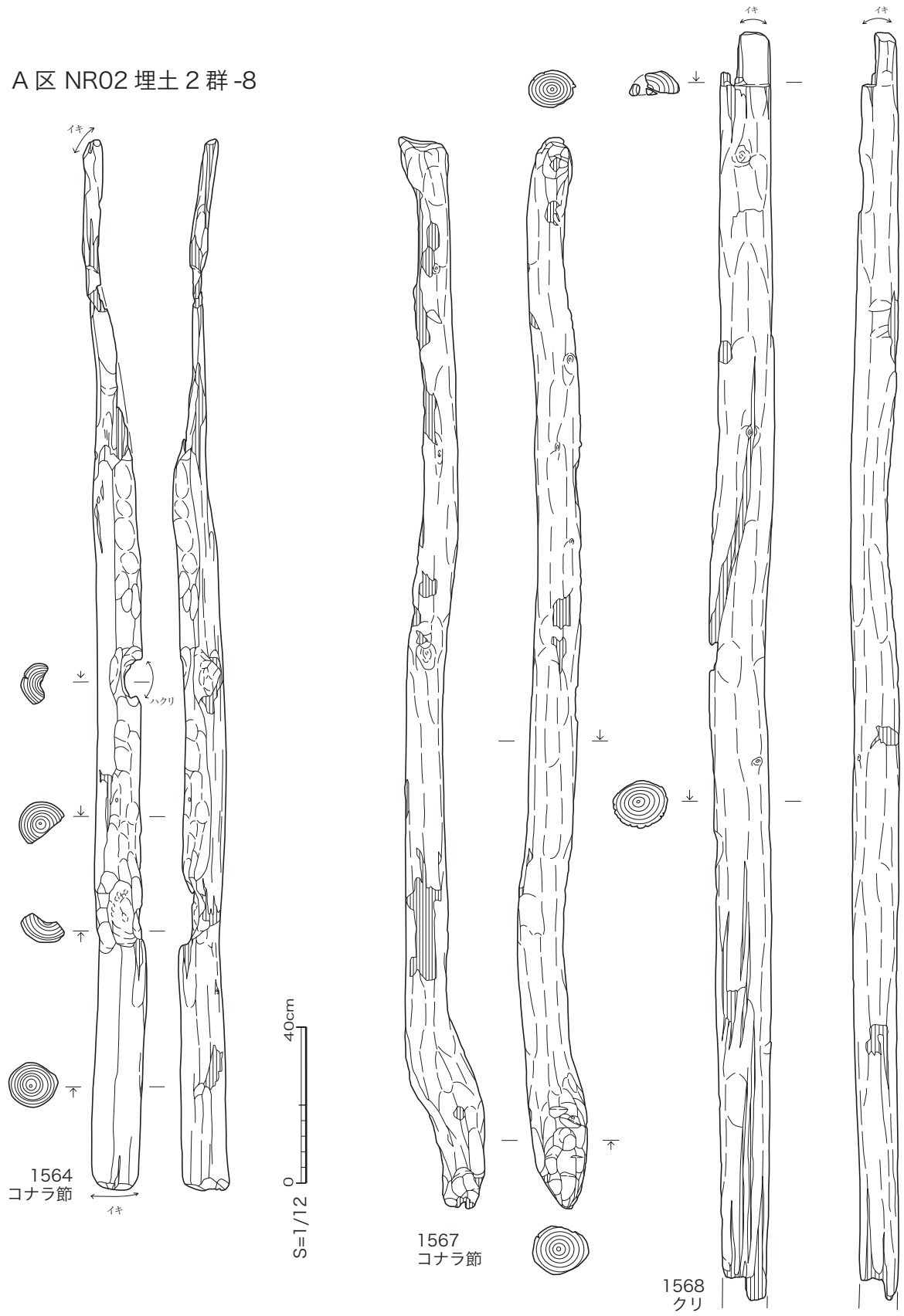


図 38 A区 NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 8

A区 NR02 埋土 2 群 -9

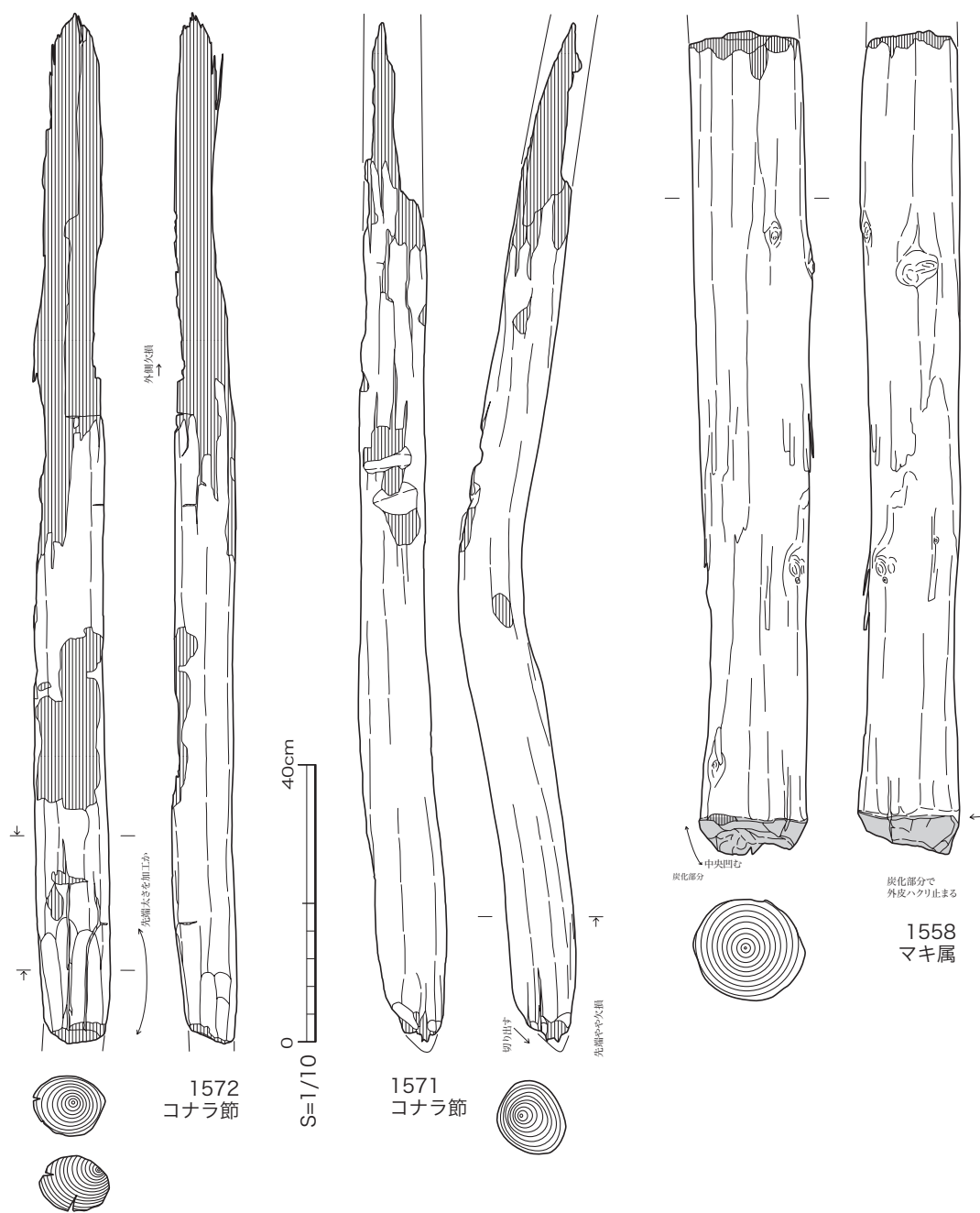


図 39 A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 9

A区 NR02 埋土 2 群 -10

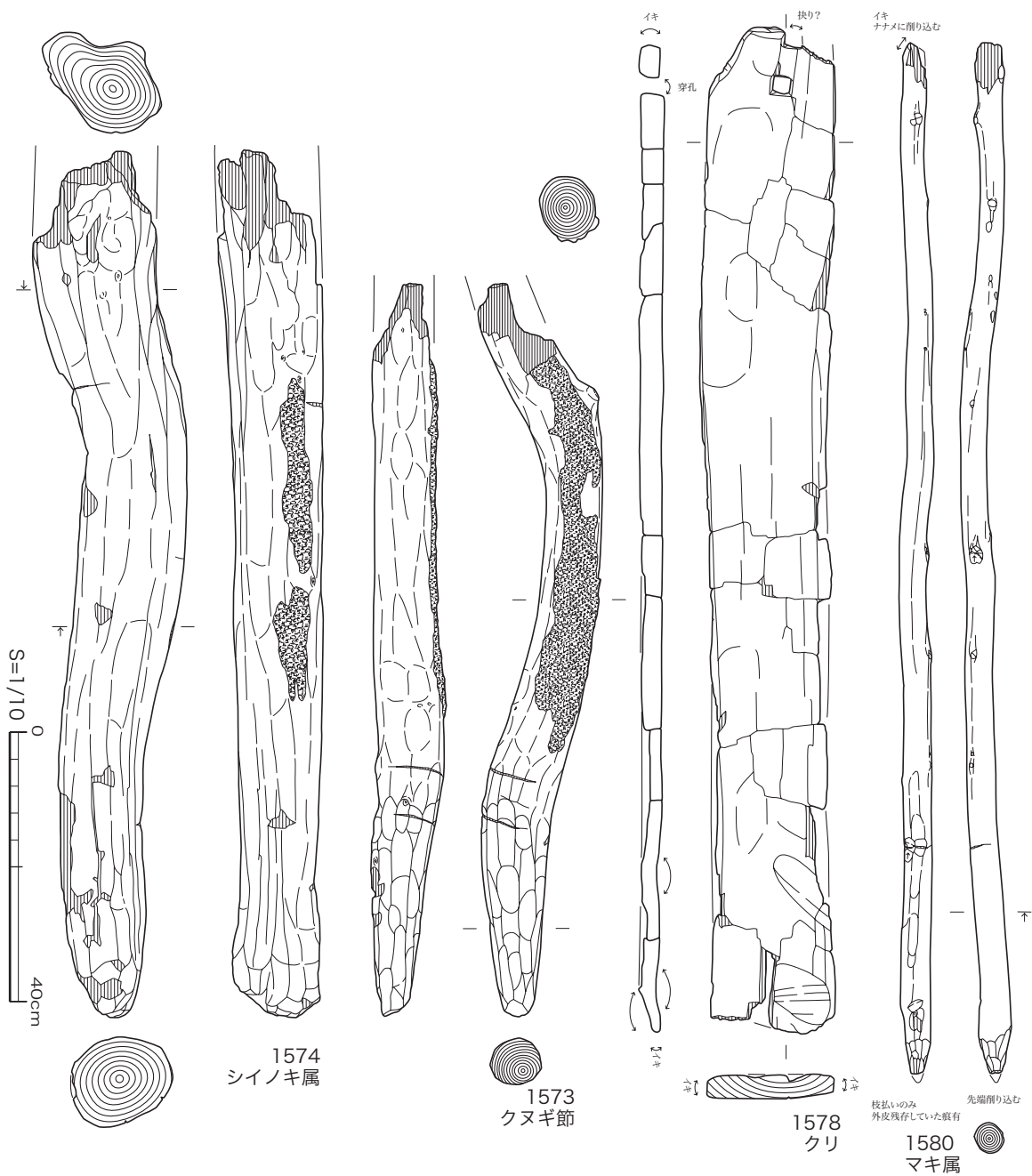


図 40 A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 1 0

A 区 NR02 埋土 2 群 -11

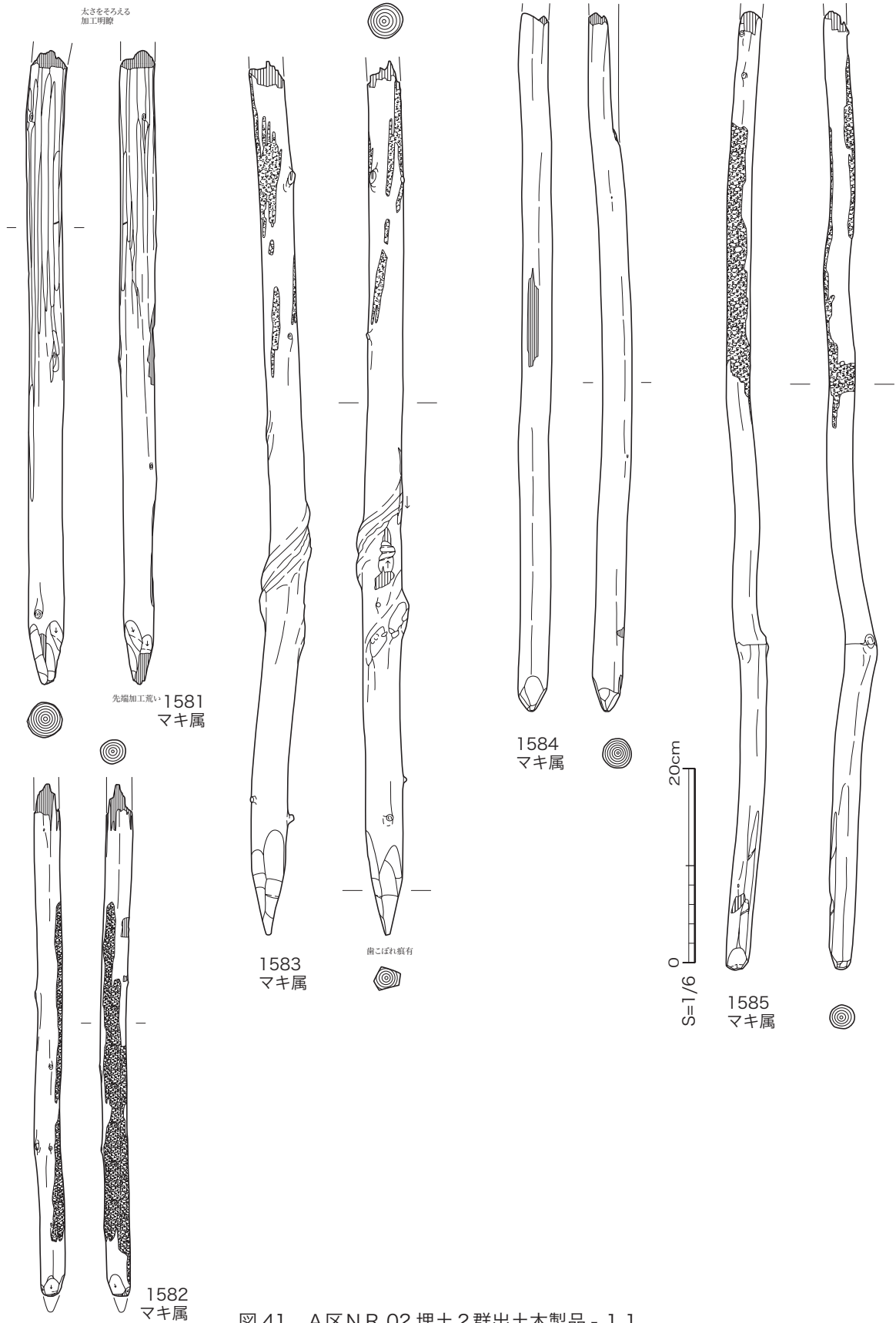


図 41 A 区 NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 1 1

A 区 NR02 埋土 2 群 -12

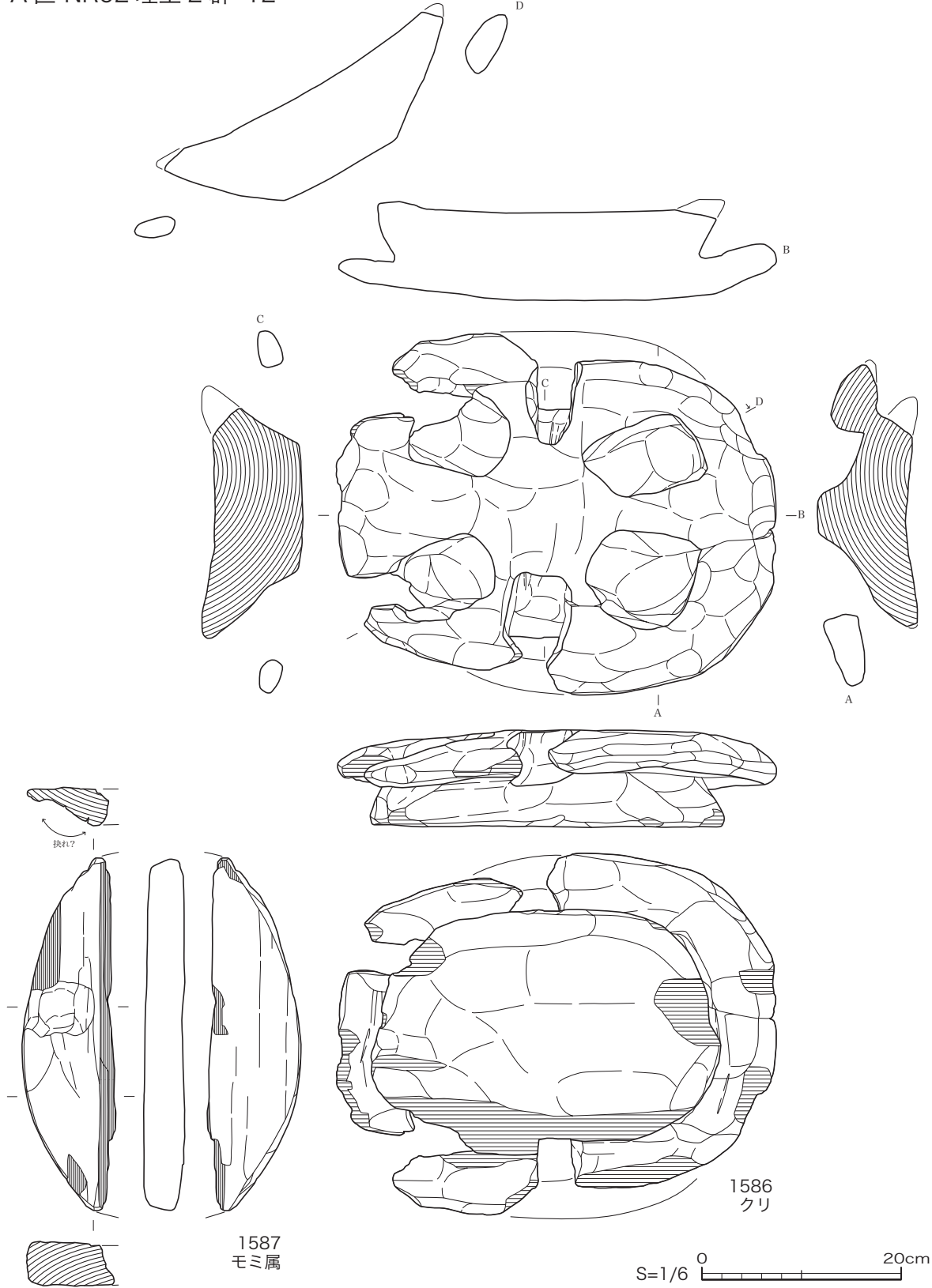


図 42 A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 1 2

1593
ヒノキ

1591
スギ

1611
マキ属

1610
マキ属

側面加工の進み方
左列を先にならした後
右列を加工
加工工具最大幅3.7cm

削りママ

ていどいり
面取り
丸太柱を四つに分割、別材に転用か

削り込む

削り込む

グサビ痕か?

→ 刃の流れ

S=1/10 0 40cm

第三章 遺 物 79

A区 NR02 埋土 2 群-14

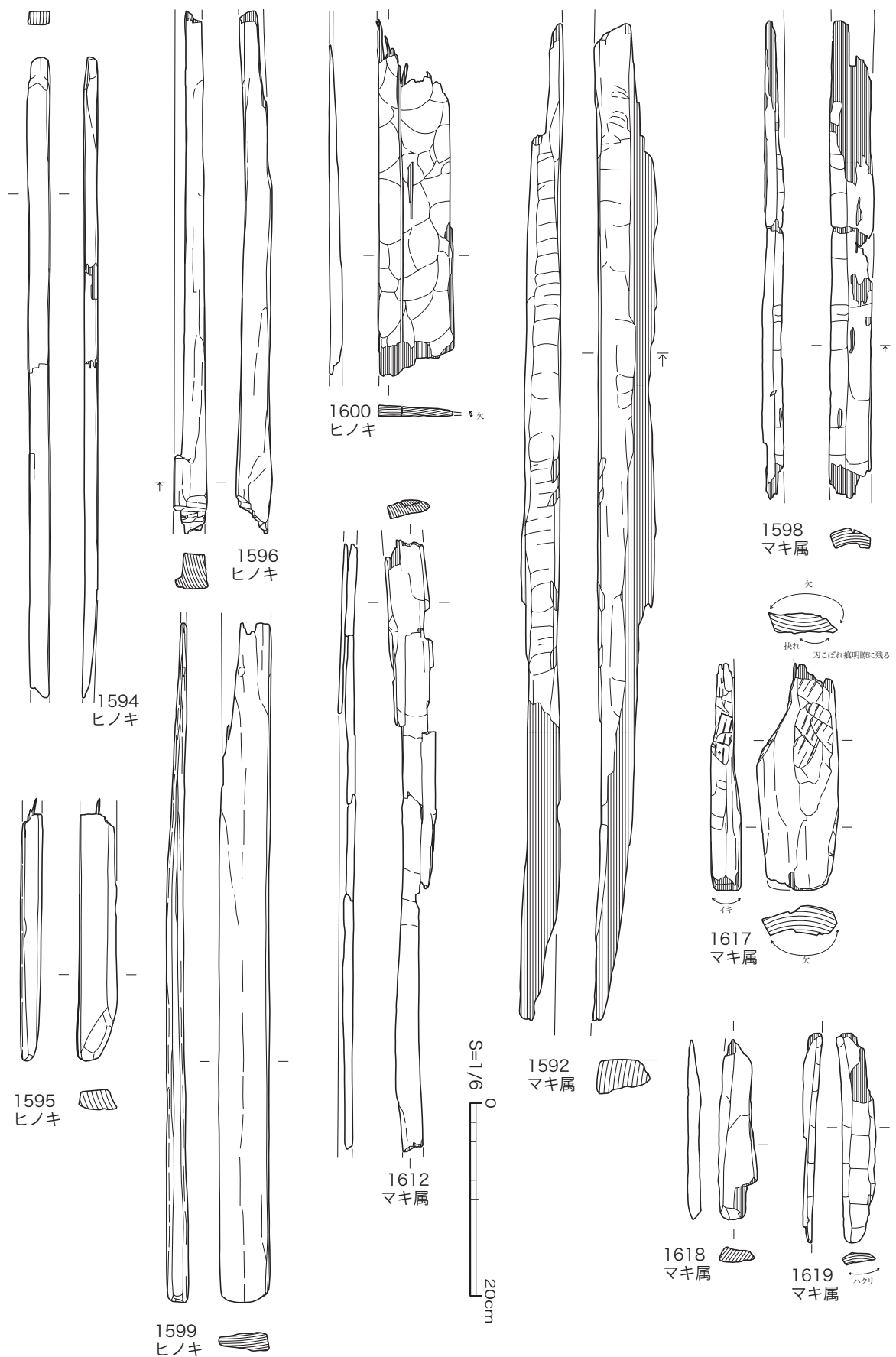


図 44 A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 1 4

A区 NR02 埋土 2 群 -15

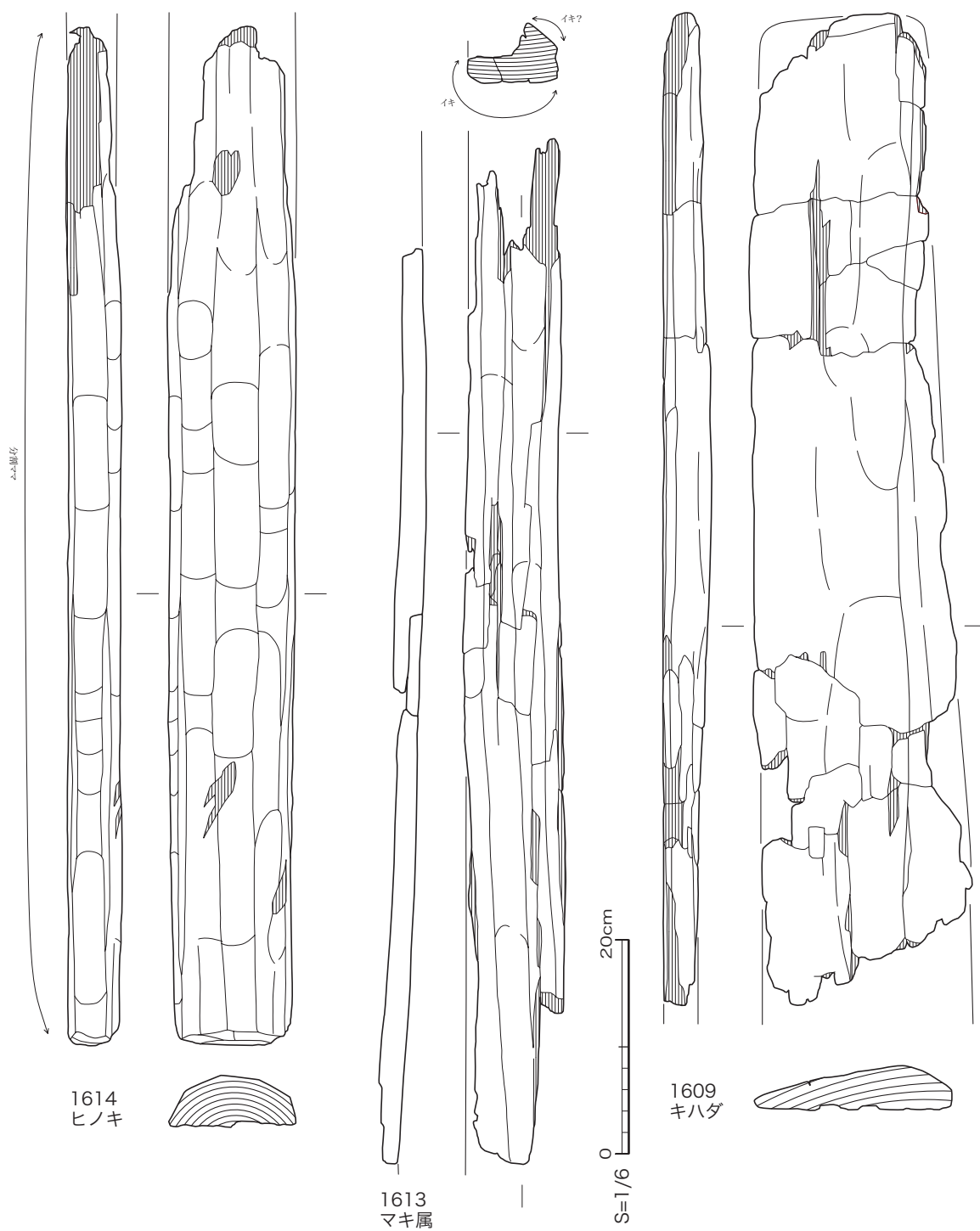


図 45 A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 1 5

A区 NR02 埋土 2 群 -16

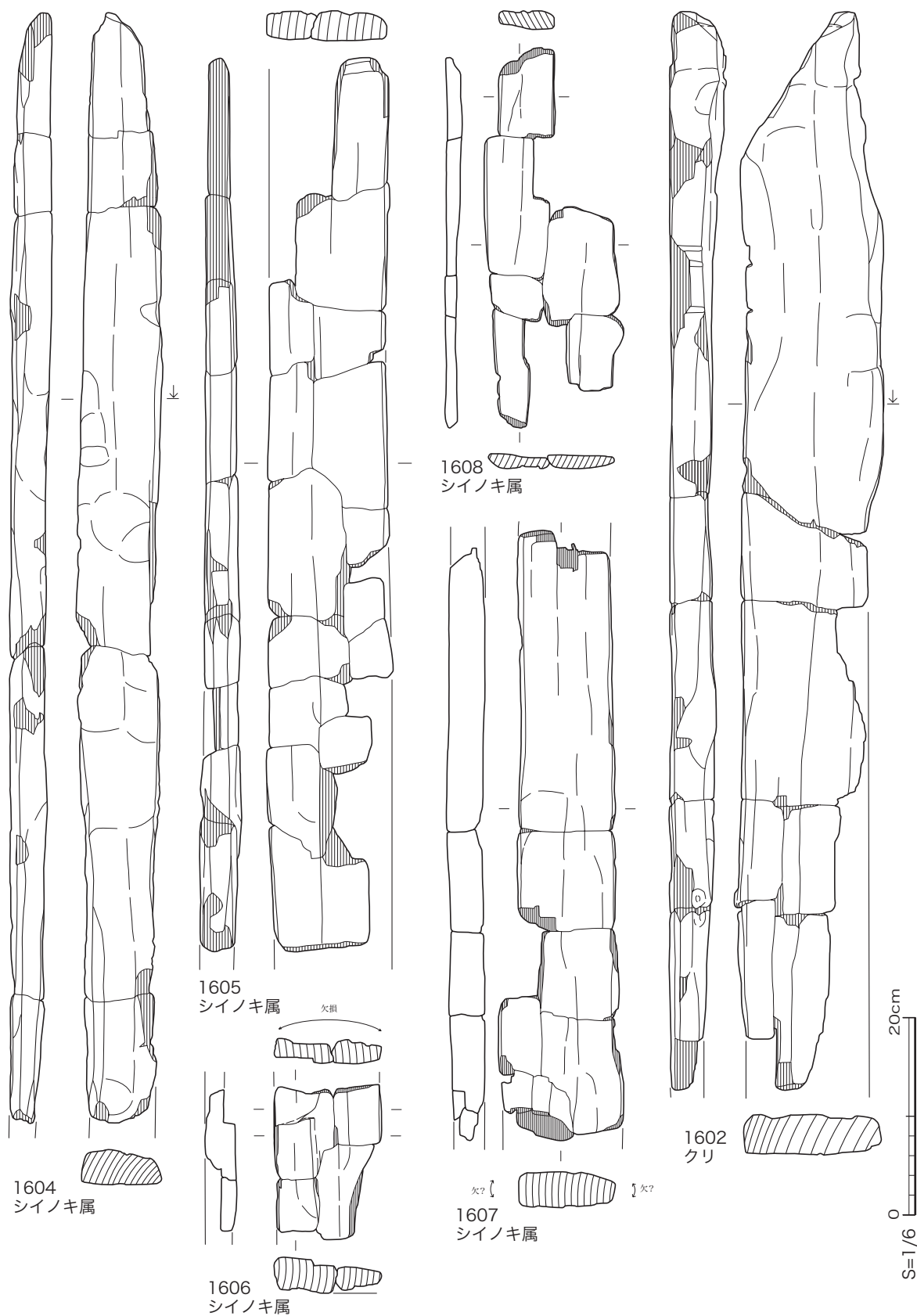


図 46 A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 1 6

A区 NR02 埋土 2 群 -17

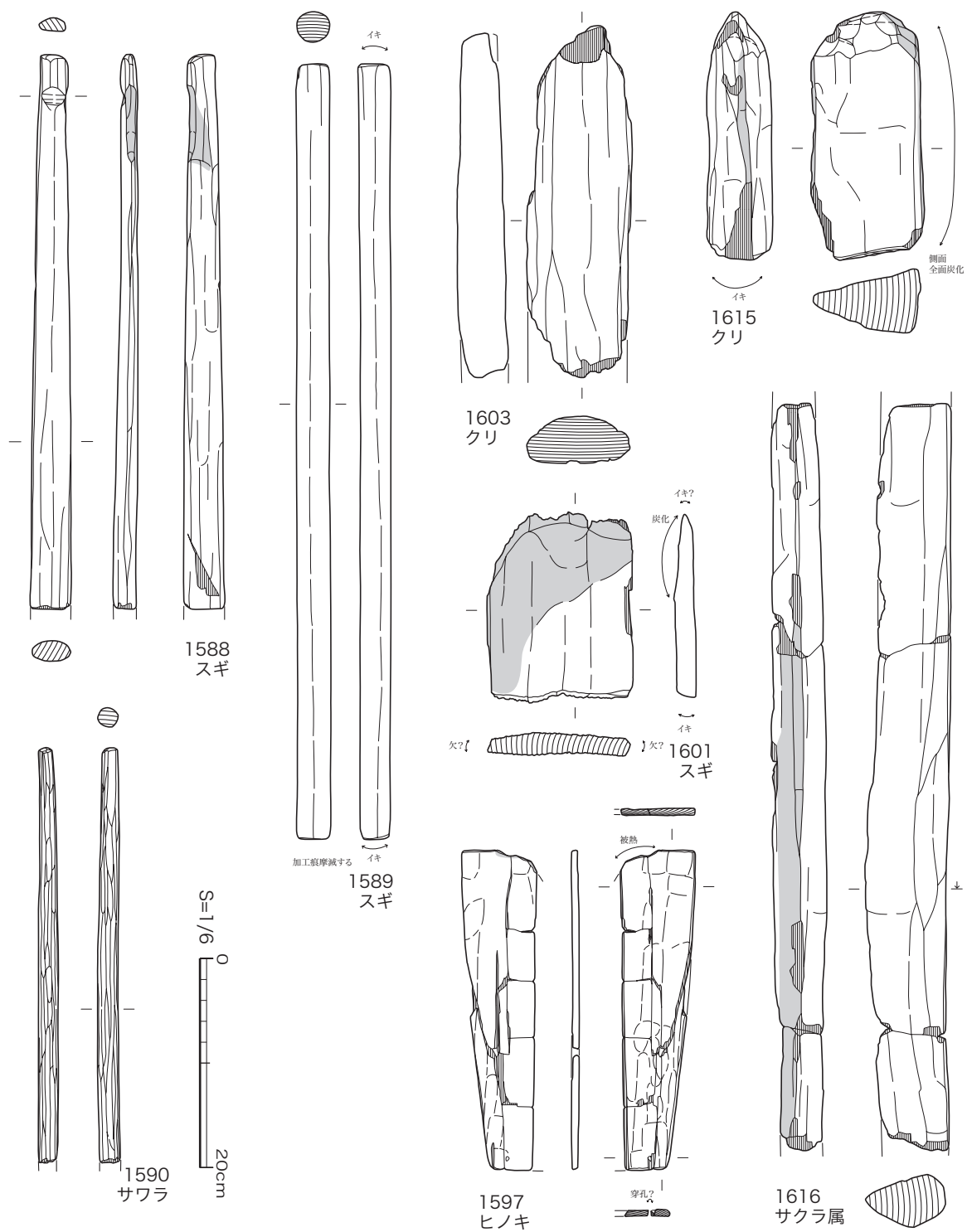


図 47 A区NR 02 埋土 2 群出土木製品 - 1 7

A・B区 NR02 トレンチ他 -1

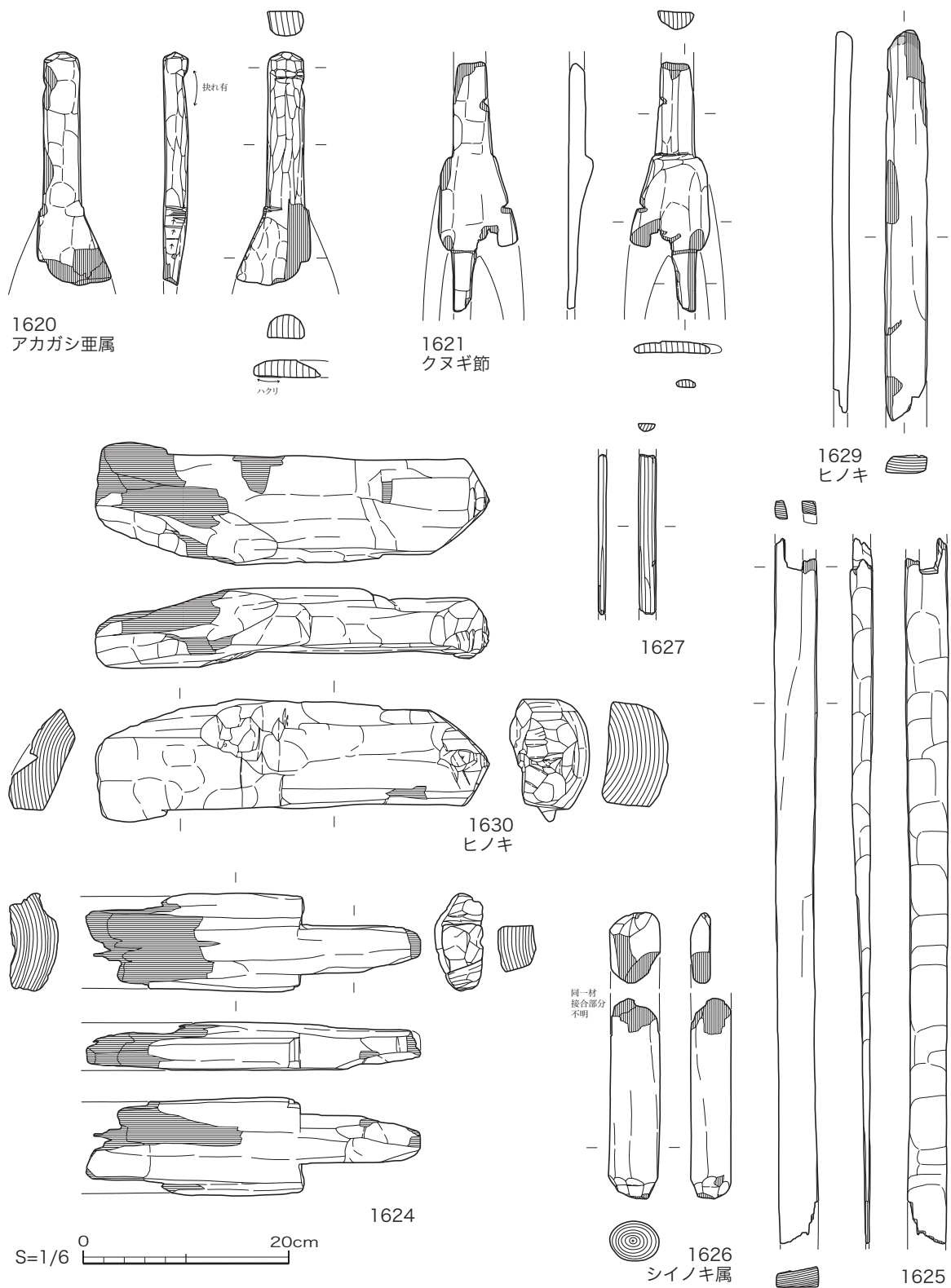


図 48 A・B区NR 02 トレンチ他出土木製品 - 1

A・B区 NR02 トレンチ他 -2

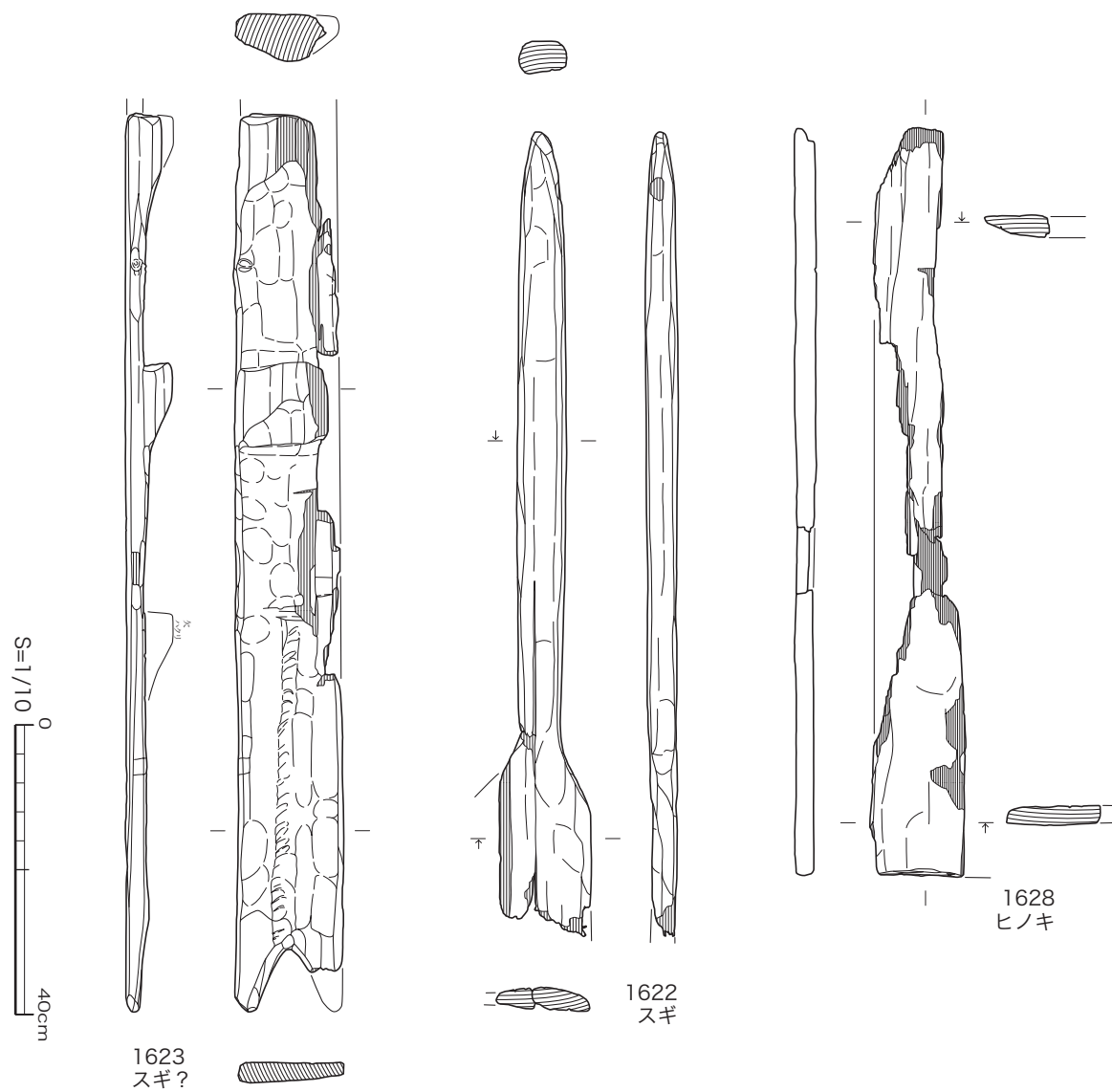


図 49 A・B区NR 02 トレンチ他出土木製品 - 2

埋土1群
ほか古代
(図50:
1631～1638)

木簡(1391)・杵型田下駄横木(1631)・曲物底板(1632)・穿孔板(1633)がA区NR 02埋土1群で、1634～1636はB区NR 02出土。

曲物底板が多く、うち、1633・1635は分割し、穿孔をほどこしている。

1637は火鑽白。

樹種は、1631がコウヤマキ、1637がスギで、他はすべてヒノキである。(樋上 昇)

6 木簡(図版89－1394)

積文

A区NR 02の埋土第1群から奈良時代と思われる習書木簡が1点出土している。

幅は2.4 cm、厚さは0.5 cmで、全長26.1 cmが残存する。積文は表面が『春春春秋秋尚尚書書律』で、裏面が『令令文文□□是(カ)是人』となる。『四書五経』の題目などを墨書したと思われ、表面の『律』と裏面の『人』の下に同じ文字がそれぞれもう一文字ずつあったと推定できる。

木簡の形状を観察すると、上部側面に切り込みが確認でき、荷札木簡の転用と考えられる。ただし、上部の切り込みが浅く長い点が特徴的な形状となる。切り込みは、側面部が両側共に折れて失われているが、より残存する左側では、幅28 mm、上部では2 mmが確認できる。

キリオリ

なお、この資料は「尚」と「書」との間で折れた状態で近接して出土している。この部分の断面には刃物の痕跡が確認でき、キリオリによる切断であったと考えられる。木簡の裏面左側には剥離が観察できるが、これはキリオリにより生じたものであろうか。

次に材を観察すると、板目取りで製作されている。樹種は第IV章6で報告するようにヒノキである。また、放射性炭素年代測定も実施しており、calA.D.255－300(54.6%)という数値を得た。(池本正明)

7 その他の遺物(図51－1395～1402)

瓦類を集めた。図示した資料は全てE区出土だが、D区からも少量出土している。1395はSK 12、1396・1397はSD 03出土だが、いずれも混入であろう。1398～1402は遺構外資料。(池本正明)

A・B区NR02埋土1群他

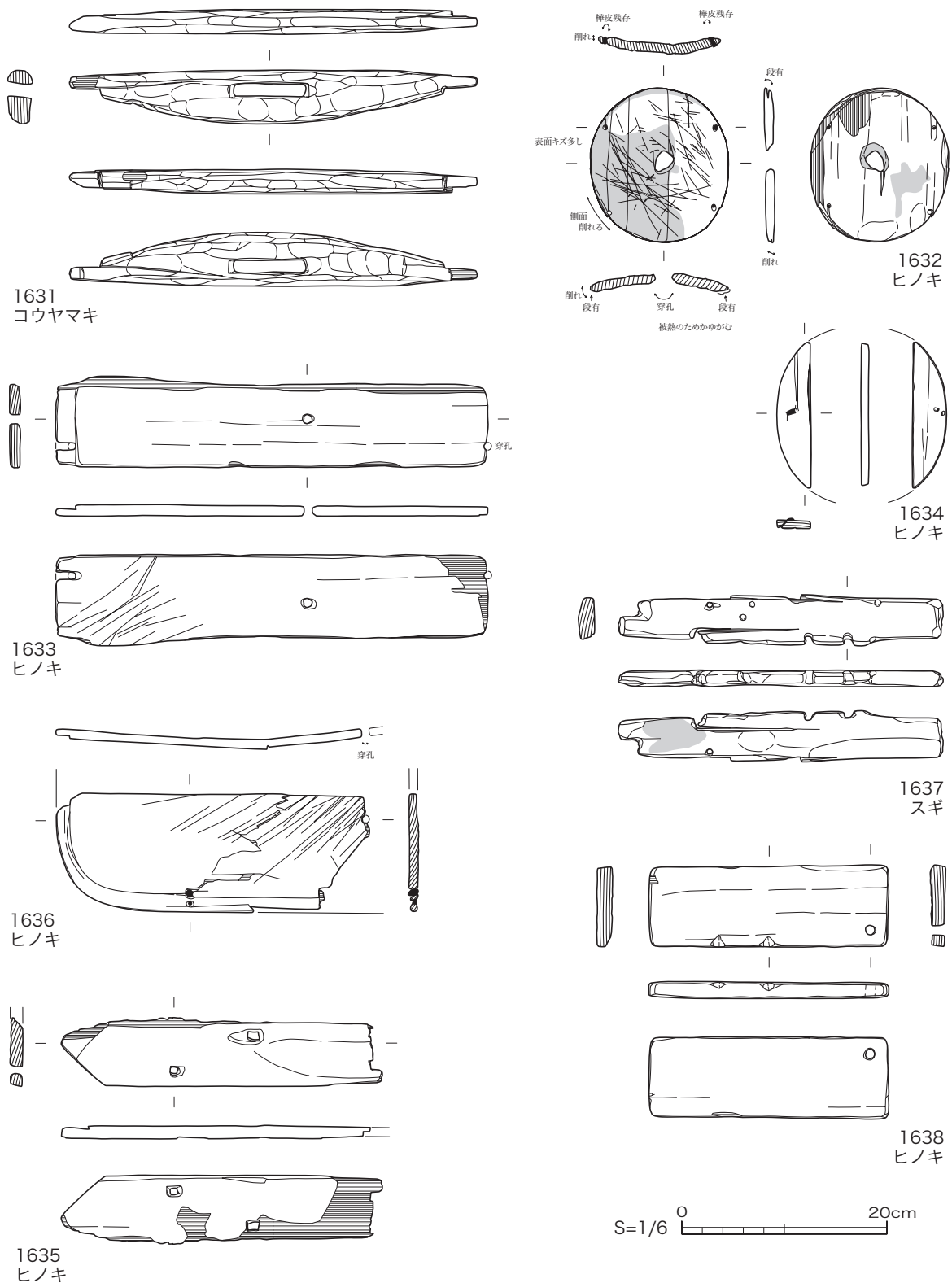
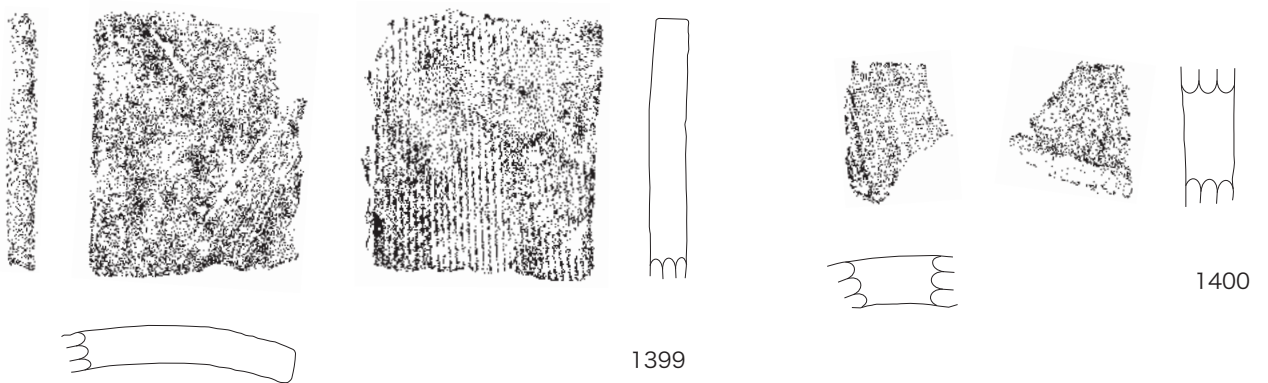
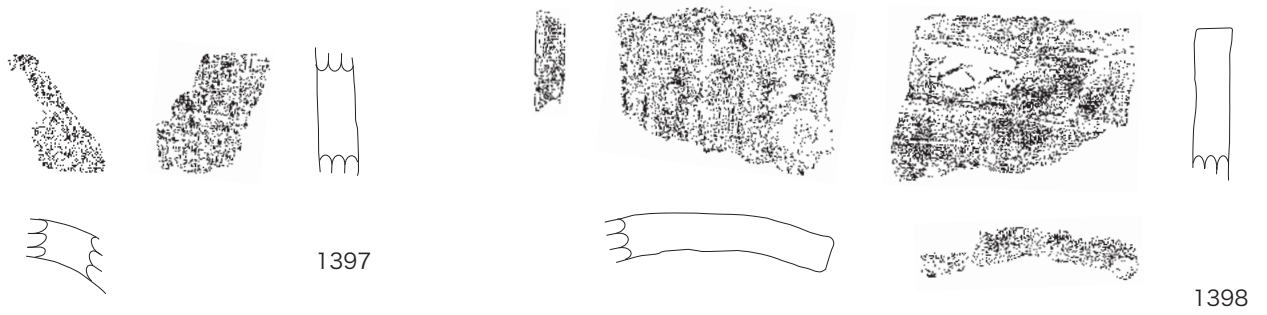
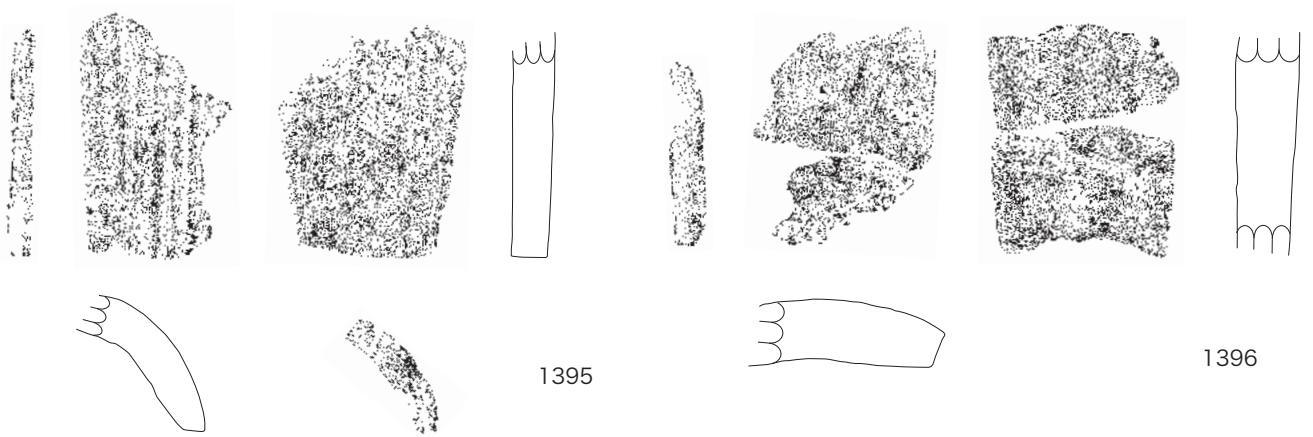


図 50 A・B区NR 02 埋土 1 群他出土木製品



0 10cm

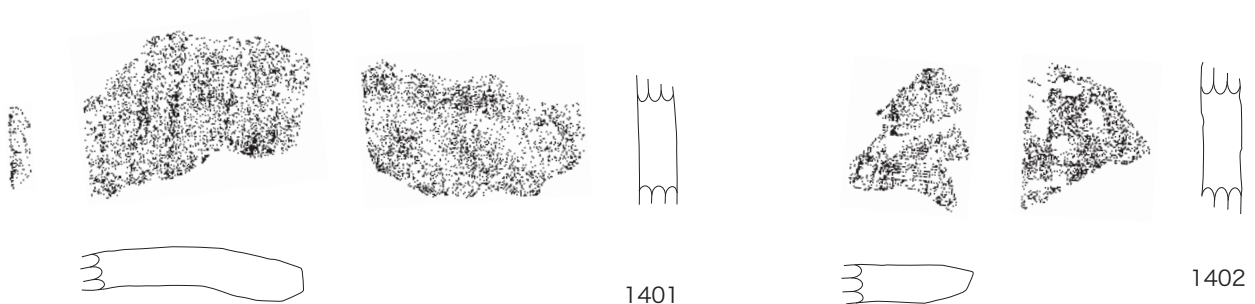


图 51 瓦

1 下懸遺跡における堆積環境と地形解析

(1) はじめに

岡崎平野中央部、安城市小川町の下懸遺跡調査地点にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定および表層地形解析の結果を報告する。

(2) 試料および分析方法

下懸遺跡の地下層序解析のためB区南西端においてオールコア・ボーリング調査を行った(図49)。オールコア・ボーリングの掘削調査は平成13(2001)年に応用地質株式会社に依頼し、油圧式ロータリーマシンを用いて標準貫入試験併用のボーリング口径86mmのオールコアで実施した。コアの層序断面からは放射性炭素年代測定用試料を採取した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析(AMS)法により測定を行なった。試料は125 μm の篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨(グラファイト)に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。 ^{14}C 年代の暦年代への較正にはCALIB4.3を使用した。測定は株式会社パレオ・ラボ(Code No.; PLD)に依頼した。調査地周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成した。作成は愛知県安城市発行の「都市計画基本図(1/2,500)」にプロットされた標高値を用いて鬼頭が作成した。等高線図上には下懸遺跡の調査地点のほかに、(三田 2005)を参考にして調査地周辺の主要な遺跡をプロットした。

(3) 分析結果

下懸遺跡におけるオールコア・ボーリングの層序 00B区の調査区南西端でオールコア・ボーリングを実施し

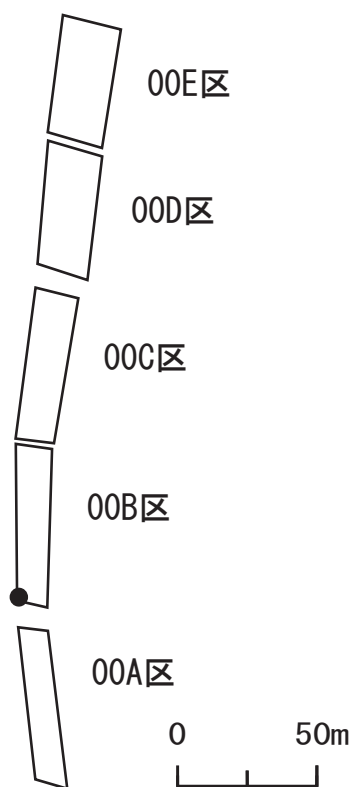


図 52 下懸遺跡におけるボーリング調査地点

た(図 52)。地表面(標高 7.60 m)から深度約 30 mの深掘断面を得た(図 53)。下位層より標高 -23.00 ~ -22.80 mには黄褐色を呈するシルト層からなる。塊状で全体に均質である。標高 -22.80 ~ -15.86 mは中礫層よりなり、角礫~亜角礫層で構成される。平均礫径は約 20mm で標高 -16.00 m付近では礫径 70mm の大礫サイズの礫もみられる。基質は極粗粒砂~細礫からなり、微量ながら植物片を含む層準も確認される。標高 -15.86 ~ -15.20 mはシルト質砂層、標高 -15.20 ~ -13.60 mは砂質シルト層からなる。標高 -15.20 ~ -13.60 mの砂質シルト層には極微量ながら植物片を含む層準がみられた。標高 -13.60 ~ -13.33 mは極粗粒砂層と中礫層がみられる。標高 -13.33 ~ -12.40 mは層厚最大 10cm ほどの灰色を呈する粘土層や粗粒砂層、砂質シルト層との互層からなる。標高 -12.40 ~ -8.00 mは下部で細礫~中礫層、上部へ向かって粗粒砂が卓越するようになる上方細粒化する砂礫層からなる。基質は粗粒砂で構成される。標高 -8.00 ~ -6.67 mは極粗粒砂~細礫層で、上部に向かうにつれて粗粒砂が卓越する上方細粒化傾向を示す。さらに単層内で明瞭に上方細粒化が認められる層準もみられる。標高 -6.67 ~ -5.73 mは砂質シルト層、標高 -5.73 ~ -5.33 mは中粒砂層からなる。標高 -5.33 ~ -3.20 mは細礫~極粗粒砂層からなり、細礫が優勢である。標高 -3.20 ~ -1.06 mは細礫の混じる中粒砂層である。標高 -1.06 ~ -0.53 mは最大径 40mm の中礫サイズの亜角礫層からなる。本層よりも上位層でしだいに植物片や木片を含むようになる。標高 -0.53 ~ 3.60 mは下部で細礫層、上部で中粒砂層からなる。本層準も含めて上位の地層で植物片多く含むようになってくる。標高 3.60 ~ 3.90 mはシルト質粘土層からなり、層厚 20cm のシルト質砂層を挟む。標高 3.90 ~ 4.26 mは黒褐色の腐植質粘土層である。標高 4.26 ~ 5.87 mは下部層において基質が粗粒砂からなり礫径 10 ~ 20mm 中礫層、細礫の混じる極粗粒砂層となり、上部層でシルト質極細粒砂層へと漸移する上方細粒化傾向を示す。標高 5.87 ~ 7.60 mは人工的な盛り土である。

(4) 放射性炭素年代測定

B 区のボーリング資料から 11 試料の放射性炭素年代値を得た(表 2・図 54)。最下位層である標高 -23.00 ~ -22.80 mのシルト層中の標高 -22.81 mから採取した土壌は 26220 ± 150 yrs BP (PLD-3090)、標高 -13.33 ~ -12.40 mでみられる粘土層や粗粒砂層、砂質シルト層との互層中の標高 -12.65 mの砂質シルト層から得られた土壌が示す 32010 ± 220 yrs BP (PLD-3093) を示し、この標高 -12.65 mの層準から最下位層までは約 4 万年前から約 2 万 4 千年前と古い値を示した。いっぽう、それらの層準よりも上位の地層では標高 -1.06 ~ 0.53 mの中礫層中から採取した標高 -0.52 mの木片が 5290, 5095, 5090 (BC 3345, 3145, 3140) cal yrs BP (PLD-3094)、標高 -0.53 ~ 3.60 mの細礫層~中粒砂層の標高 1.64 mから採取された木片は 4805, 4760, 4645, 4640, 4630 (BC2855, 2815, 2695, 2690, 2680) cal yrs BP (PLD-3087) と約 5000 年前~4000 年前代を、標高 4.26 ~ 5.87 mのシルト質砂層の標高 5.50 mから採取された植物片は 1545 (AD 405) cal yrs BP (PLD-3084) と約 1500 年前代を示した。

以上のように、放射性炭素年代は標高 -12.65 mの層準を境としてそれより下位層では約 4 万年前~2 万 6 千年前まで、上位層では約 5000 年前から約 1500 年前代までの数値年代を示し、大きく二分された。

表2 OOB区ボーリング調査の放射性炭素年代測定結果

標高 堆積物 (m)	試料の種類	¹⁴ C年代 (yrs BP)	δ ¹³ C PDB (‰)	暦年代較正值 (1σ, AD/BC)	暦年代較正值 (1σ, cal yrs BP)	1σ暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1σ暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
-22.81 シルト層	土壌	26220±150	-21.7	-	-	-	-	PLD-3090 (AMS)
-14.65 砂質シルト層	土壌	29530±190	-23.1	-	-	-	-	PLD-3091 (AMS)
-13.94 シルト層	種子片	41430±410	-25.7	-	-	-	-	PLD-3088 (AMS)
-13.65 シルト層	土壌	34950±280	-22.8	-	-	-	-	PLD-3092 (AMS)
-12.65 砂質シルト層	土壌	32010±220	-29.4	-	-	-	-	PLD-3093 (AMS)
-0.52 中礫層	木片	4535±45	-27.9	BC 3345, 3145, 3140	5290, 5095, 5090	BC 3235-3170 (39.5%) BC 3160-3115 (28.6%) BC 3355-3310 (27.8%)	5185-5120 (39.5%) 5110-5065 (28.6%) 5305-5260 (27.8%)	PLD-3094 (AMS)
1.64 極粗粒砂層	木片	4140±40	-28.7	BC 2855, 2815, 2695, 4805, 4760, 4645, 2690, 2680	4420, 4640, 4630	BC 2705-2660 (27.7%) BC 2760-2720 (24.1%) BC 2865-2830 (20.5%) BC 2650-2620 (16.3%)	4655-4610 (27.7%) 4710-4670 (24.1%) 4810-4780 (20.5%) 4600-4570 (16.3%)	PLD-3087 (AMS)
1.90 中粒砂層	木片	3965±45	-29.4	BC 2470	4420	BC 2500-2455 (42.2%) BC 2570-2520 (38.3%) BC 2420-2405 (10.3%)	4450-4405 (42.2%) 4515-4470 (38.3%) 4370-4355 (10.3%)	PLD-3095 (AMS)
2.90 腐植混じり中粒砂層	腐植物片	3095±35	-28.2	BC 1390, 1330, 1325	3340, 3275, 3270	BC 1410-1370 (54.7%) BC 1345-1315 (34.1%) BC 1360-1345 (11.1%)	3360-3320 (54.7%) 3295-3265 (34.1%) 3305-3295 (11.1%)	PLD-3086 (AMS)
4.15 腐植層	腐植物片	3105±35	-28.0	BC 1395	3345	BC 1415-1370 (59.5%) BC 1340-1315 (30.2%)	3365-3320 (59.5%) 3290-3265 (30.2%)	PLD-3085 (AMS)
5.50 シルト質砂層	植物片	1665±35	-28.2	AD 405	1545	AD 375-425 (65.5%) AD 340-375 (34.5%)	1575-1525 (65.5%) 1605-1575 (34.5%)	PLD-3084 (AMS)

(5) 調査地周辺の表層地形解析

表層地形解析のため愛知県安城市発行の「都市基本図 (1/2,500)」を用いて等高線図を作成した。東西約 1.8km、南北約 2.6km の解析範囲において標高 7.2 m から標高 13.0 m までの等高線が描ける (図 55)。解析範囲の西側や、北東から東側にかけて標高 9 m を超えて相対的に高くなっており、これらのうち西側の標高 9 m から標高 13 m には第四系上部更新統の碧海層が露出する台地となっている。また、矢作川右岸沿いには周りに比べて高い地形が島状に分布する。それらは北側の川島町や東町で標高 9.0 ～ 10.0 m まで、小川町で標高 9.0 ～ 9.6 m まで、木戸町では標高 8.8 ～ 9.2 m まで、南側の小川町では標高 9.0 ～ 9.2 m までの地形の高まりが捉えられる。それらの地形がつくる面積は北から南へ向かいしだいに小さくなる傾向がある。

いっぽう、標高 9 m よりも低い等高線において、特に標高 8.0 m 以下の等高線を基準とするとわかりやすいが、北側の姫小川町から南の小川町・木戸町の南北方向にかけて標高 7.2 m までの谷状地形がみてとれる。この谷状地形は解析範囲だけでも南北方向約 1.7km、東西の幅は約 0.7km あり、下懸遺跡の調査地点はこの谷状構造の西縁にあたっている。同じような谷状地形は下懸遺跡からさらに北側に、ちょうど姫小川町で標高 9 m よりも高い尾根状地形に隔てられた標高 9.0 ～ 8.2 m の南北約 0.7km、東西の最大幅約 0.4km の谷地形が確認される。

(6) 下懸遺跡における堆積環境

下懸遺跡のオールコア・ボーリングでは標高 -23.0 m から標高 7.60 m までの層厚約 30 m の層序が得られ、全体に礫や砂といった粗粒な堆積物が卓越した。最下位層 (標高 -23.00 ～ -22.80 m) であるシルト層の標高 -22.81 m から採取した土壌は 26220 ± 150 yrs BP (PLD-3090) の値を示し、それより上位層においても標高 -13 m までの 4 層準で約 4 万年前代から約 2 万年前代までの値であった (図 51)。この年代値に関して、下懸遺跡の北東約 2.8km の安城市川島町・古井町にある上橋下遺跡では、深度およそ 20 m のオールコア・ボーリングが行なわれており、標高 -9.10 ～ -8.90 m のシルト質砂層の標高 -8.90 m から採取した植物片が 43280 ± 530 yrs BP (PLD-1988) であった (鬼頭

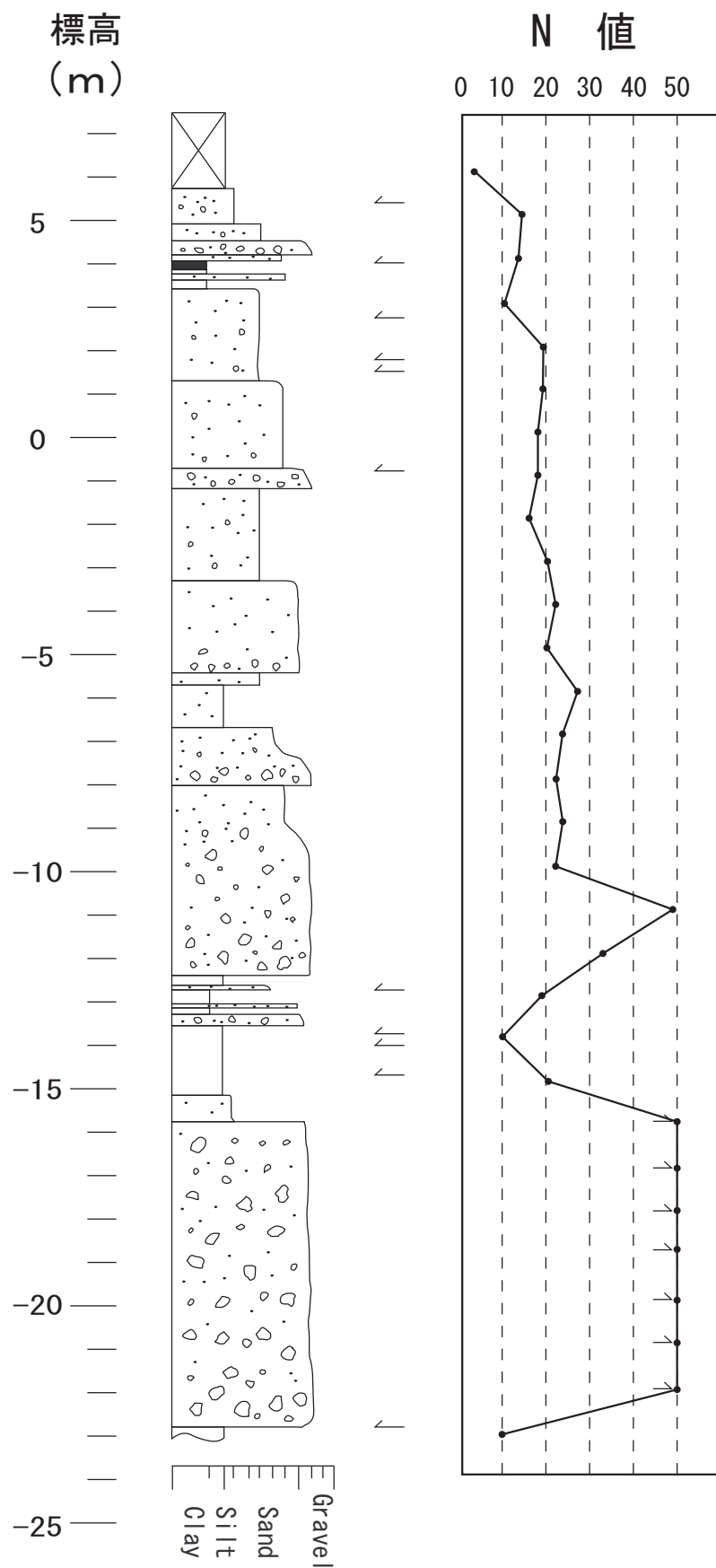


図 53 00B 区におけるボーリング調査地点

2007)。これらの値は地質学的に第四系中部～上部更新統にあたり、岡崎平野周辺において該当する地層として中部更新統の三好層や拳母層とそれらの相当層、上部更新統では碧海層と越戸層がある。これらのうち、下懸遺跡の調査地周辺では西側一帯にかけて標高 9～10 m よりも高い台地を形成している碧海層があたる。碧海層における放射性炭素年代測定に関して、安城市篠目町の地下約 2.5 m より得られたモミの実が 29000 yrs BP よりも前の値、西尾市道光寺町の地下 5.8 m の木片が 31000 yrs BP の報告がある（坂部 1971）。今回得られた放射性炭素年代測定値とも調和的である。この碧海層の基底面については標高 -10 m から標高 -20 m にあるとされ（牧野内 1988）、今回のボーリング資料では放射性炭素年代測定の値を基にすると標高 -12.65 m 以下の地層があたり、その標高は牧野内（1988）が報告した碧海層の基底面にあたっている。地表では標高 9～10 m 以上に露出し台地をつくっている碧海層が、下懸遺跡の地下では標高約 -13 m 以下にあることがわかる。

標高 -0.53～3.60 m にかけては細礫層～中粒砂層からなる地層であり、標高 -0.52 m から採取した木片が 5290, 5095, 5090 cal yrs BP (BC 3345, 3145, 3140) (PLD-3094) の値を示した。また、同じ地層の標高 1.64 m の極細粒砂層中から得られた木片は 4805, 4760, 4645, 4640, 4630 cal yrs BP (BC 2855, 2815, 2695, 2690, 2680) (PLD-3087)、標高 1.90 m から採取した中粒砂層中の木片は 4420 (BC 2470) (PLD-3095) と約 5000 年前代から約 4000 年前代の値を示した。これらの年代値について、下懸遺跡の北側にある前述の上橋下遺跡で実施したボーリング資料では標高 -0.20 m の粘土層から採取された土壌が 4845 cal yrs BP (BC 2895) (PLD-3079)、標高 1.05 m の腐植層から採取したピートが 5910 cal yrs BP (BC 3960) (PLD-3078)、標高 2.60 m のシルト質砂層より採取された植物片が 4255 cal yrs BP (BC 2305) (PLD-3077) と下懸遺跡とほぼ同様な数値年代を得ている。加えて、それらの年代値が得られる層準は標高 0 m 付近から標高 2～3 m までに集中しており、その頃には調査地点周辺には堆積空間を埋めて堆積地形の平坦化が進んだものと思われる。また、下懸遺跡では標高 3.90～4.26 m に黒褐色を呈する腐植質粘土層が確認された。この腐植層の標高 4.15 m から得られた腐植物片は 3345 cal yrs BP (BC 1395) (PLD-3085) の値を得ている。このおよそ 3000 年前代を示す値について、下懸遺跡の北側の上橋下遺跡では、標高 5.17～5.52 m の黒褐色ピート層の標高 5.20 m から採取した木片が 2945, 2935, 2925 cal yrs BP (BC 995) (PLD-2109)、標高 6.08～7.28 m の粘土層～シルト質粘土層の標高 6.09 m より採取した有機質土壌が 2775 cal yrs BP (BC 830) (PLD-2108) と約 2900～2700 年前代の値を示した。また、地点 4 (03 区南端) でも最下位層である標高 4.24～4.73 m の粗粒砂層の標高 4.24 m から得た有機質土壌が 2845 cal yrs BP (BC 895, 875, 860, 850, 845) (PLD-2850)、標高 4.73～5.07 m の有機質粘土層の標高 4.78 m から採取した木片が 2710, 2630, 2610, 2590, 2535, 2530, 2495 cal yrs BP (BC 760, 685, 665, 640, 590, 585, 545) (PLD-2854) と、約 2800～2500 年前代の値を得た。このように、約 3000～2500 年前代の値が下懸遺跡や上橋下遺跡の標高 4～6 m の層準から得られていることから、堆積地形の平坦化とともに堆積物の上流からの供給による地層の累積が顕著に行なわれたことがわかる。また、堆積物の層相は下懸遺跡、上橋下遺跡の両地点とも黒褐色を呈する腐植質に富む堆積物が

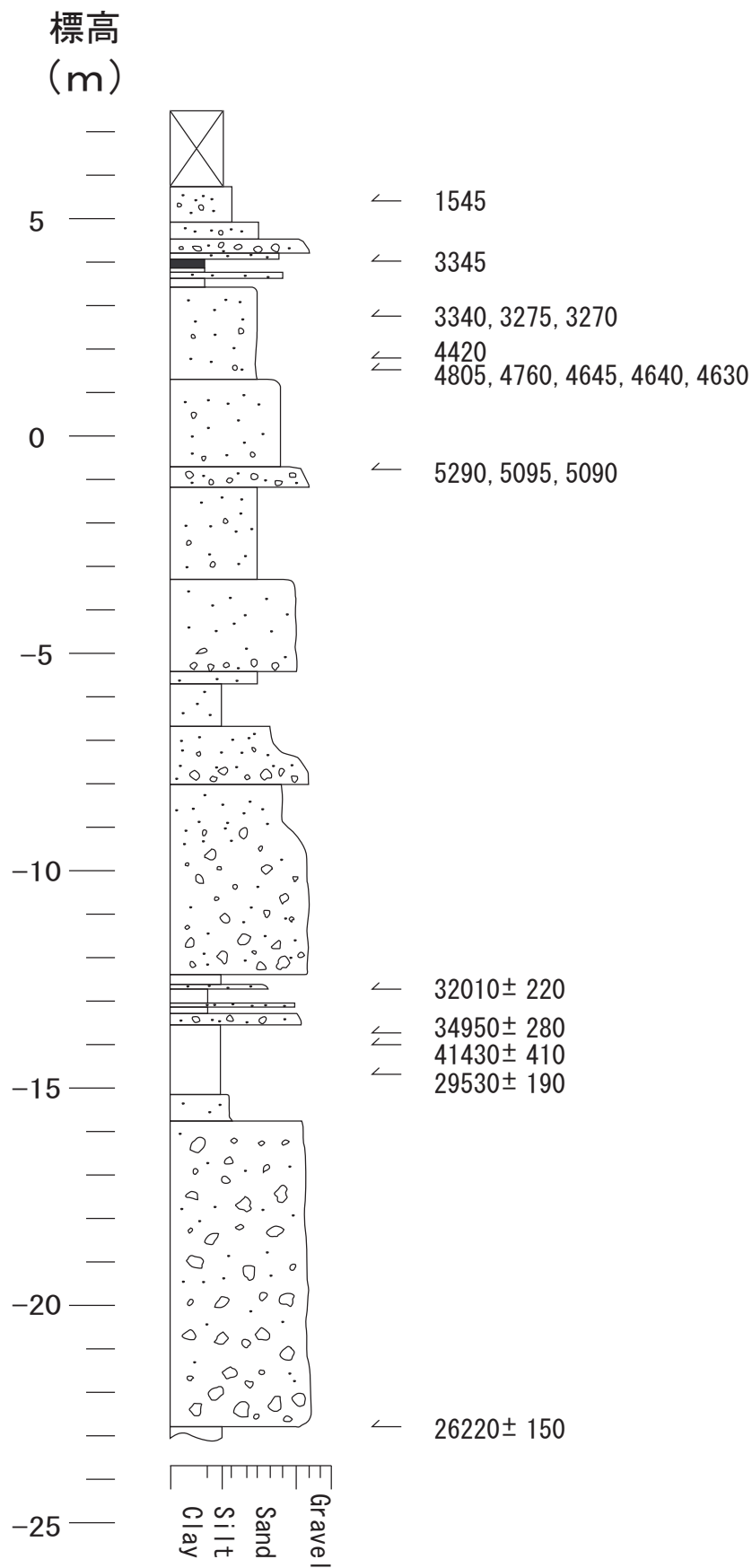


図 54 00B 区ボーリング調査の各層準の数値年代

卓越するようになるため、水理学的な低エネルギー環境へと変化したことがわかる。低エネルギー環境には池や湿地のような環境が推定できる。これらの堆積物を覆って、考古学的には弥生時代中期の考古遺物が検出されるようになることから、そのような場所でおおよそ 2000 年前以降からヒトの人為活動が始まったと思われる。

(7) 下懸遺跡周辺に現われる表層地形構造

表層地形解析では東西約 1.8km、南北約 2.6km の範囲に標高 8.0 m の等高線を目安として、南北方向にのびる谷地形が認められた (図 54)。この谷地形は谷の北側の姫小川町で碧海層からなる台地を開析し、そこを北端として南側の小川町にかけて広がっている。等高線間隔は地形の傾斜の程度を表わすが、この谷地形は姫小川町から小川町にかけて、ちょうど鹿乗川が台地の東側縁辺を北から南へ流下する方向に平行して等高線間隔が狭く、傾斜が急であることがわかる。ところで、下懸遺跡の西側近傍を流下している鹿乗川であるが、現在の鹿乗川の流路は姫小川町付近などで表層地形解析による等高線と明らかに斜交しており、等高線とは非調和的なところがみられる。このような場合、少なくとも斜交のみられる範囲では人工的に流路を改変されている可能性が指摘できる。

さて、下懸遺跡は南北にのびる谷状地形の西側縁辺にあたり、その東側には等高線の閉曲線で囲まれる谷の低地部の広がりが見られた。オールコア・ボーリングの結果をみると、下懸遺跡の地下には深度 30 m に砂礫の卓越した地層が累重していた。この砂礫層の卓越について、下懸遺跡の北東約 2.8km にある上橋下遺跡で実施したオールコア・ボーリングの層序には、今回の下懸遺跡で見られるような砂礫層の卓越はみられず、砂層や礫層のあいだに細粒のシルト層や粘土層を挟む頻度が多かった。これは上橋下遺跡に比べて下懸遺跡の地点の方が、砂礫を運びこめるような凹地が顕著であったことを示唆する。実際に下懸遺跡の方が上橋下遺跡よりも、構成される堆積物中に礫の占める割合が高く、砂礫層の上方細粒化が頻繁にみられることから、現在下懸遺跡の東側約 1km を蛇行しながら北から南へ流下している矢作川は、表層地形解析で現われた谷を粗粒な堆積物を運びこみながら埋積していったものと思われる。発掘調査ではオールコア・ボーリングを実施した B 区とその南側の A 区との間に東西方向の谷地形が認められたとの考古学的な所見がある (鈴木 2001)。これは下懸遺跡の東側に表層地形解析で現われる低地部へ向けて、西側の台地から開析する谷を捉えているのかもしれない。

考古学的に下懸遺跡の周辺は古墳の密度が高い地域として知られており、三田 (2005) を参考にすれば下懸遺跡から北へ約 1.1km には姫小川古墳、北へ約 1.2km には姫塚古墳、北へ約 1.4km には獅子塚古墳、北東へ約 1.2km には八ツ塚古墳がある。これらの古墳を表層地形開析図上にプロットすると、姫小川町の標高 9.0 m 以上の等高線がつくる尾根状 (舌状) 地形を境として、その北側に古墳はプロットされる。また、それらの古墳はちょうど標高 8.2 ~ 8.8 m に認められる凹地をとり囲むように分布しているようである。これは今回の下懸遺跡の調査には直接関係のないことであるが、今後ふたたび周辺で調査が行なわれる際の興味ある事実として覚えておきたい。

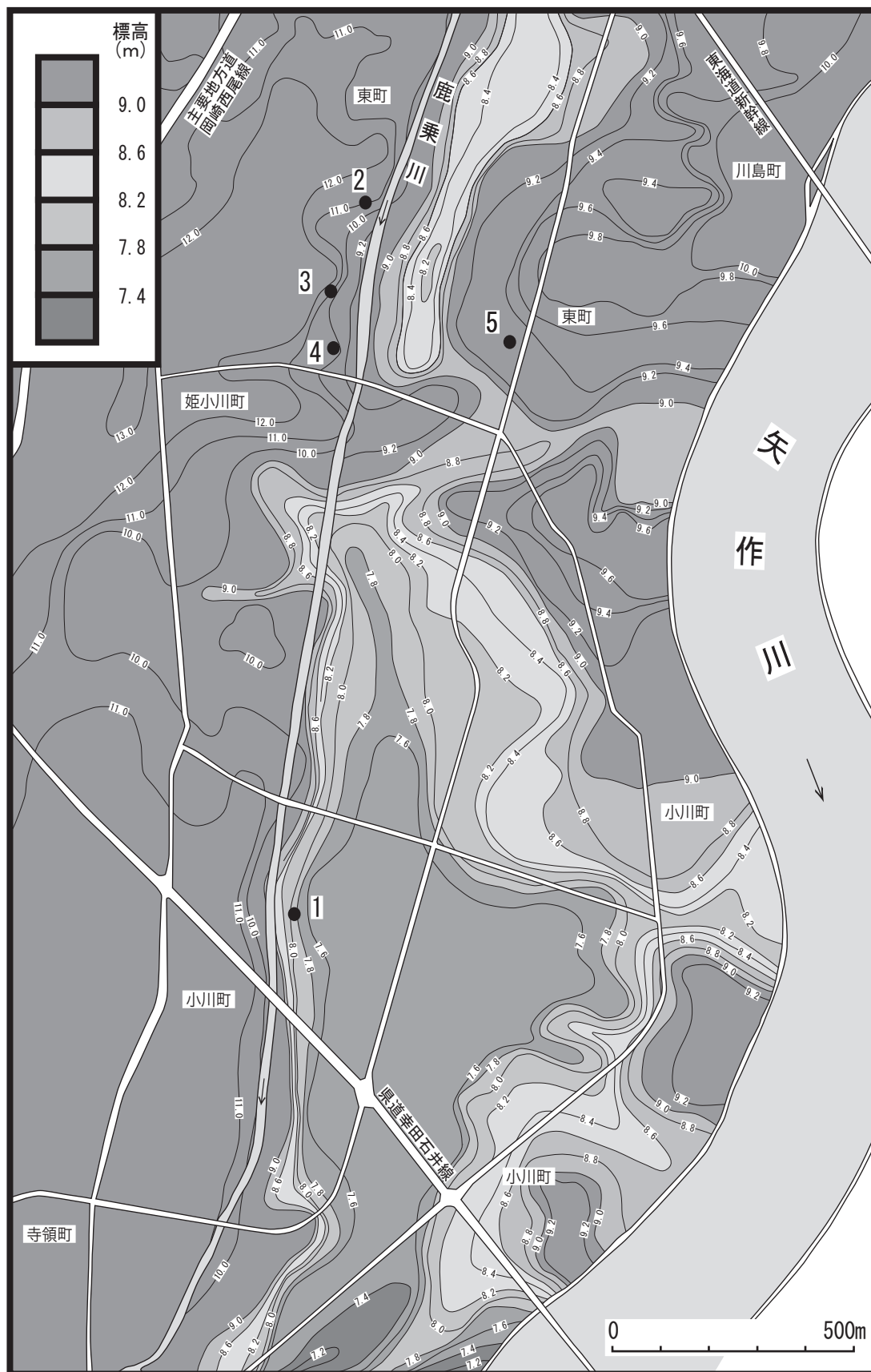


図 55 下懸遺跡調査地点周辺の等高線図

謝辞

本論を作成するにあたり、オールコア・ボーリングの資料採取では応用地質株式会社中部支社の細田 宏氏・下山奈緒氏にお世話になった。分析試料の整理・保管と原図の作成では整理補助員の前田弘子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。
(鬼頭 剛)

参考・引用文献

- 鬼頭 剛 2007 堆積環境『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 145 集』「上橋下遺跡 鹿乗川流域遺跡群（高圧線鉄塔移設地点）」愛知県埋蔵文化財センター 92-100.
- 牧野内 猛・小井土由光 1988 「第 5 章 第四系」山下 昇・紺野義夫・糸魚川淳二編『日本の地質 5』「中部地方」共立出版 144-177.
- 坂部和夫 1971 「矢作川流域の第四系と ^{14}C 年代 - 日本の第四紀層の ^{14}C 年代 (64) -」『地球科学 25』46-48.
- 三田敦司 2005 『古井遺跡群』愛知県史 資料編 3「考古 3 古墳」愛知県 534-542.
- 鈴木 裕 2001 『下懸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター平成 12 年度「年報」愛知県埋蔵文化財センター 52-53.

2 愛知県下懸遺跡から産出した昆虫化石について

(1) はじめに

遺跡包含層から得られた昆虫化石（昆虫遺体ともいう）群集が、遺跡が成立していた頃の周辺環境や植生・人の集中居住の様子を探る手がかりになることについては、わが国のみならず諸外国においても多くの研究例がある。

昆虫の種数が多く棲み分けが明瞭であることや、昆虫の食性がきわめて多様であることは、環境復元の際、重要な武器となる。一方で、昆虫の種数が多いことは、種を同定するうえで困難さを伴い、種の決定は究極的には交尾器（Genital organ）の外部形態と、DNA による系統解析が主流となりつつある。五体満足に揃った成虫の分類においてこうした状況であることから、先史～歴史時代における遺跡産昆虫や、地質時代の昆虫化石の分類・同定に取り組む研究者がなかなか生まれないことはよく理解できる。

遺跡の発掘現場では、条件さえ整えば昆虫化石は必ずといってよいほど保存されている。そして、これらが同定されれば他のどんな生物化石より、古環境について多くのデータを提供するのもまた事実なのである。遺跡から発見される限られた体節片から、同定上必要な情報をいかに的確に判別し分類・同定に利用するか、このことが昆虫分析を実施するうえで最も苦労するところである。

本分析を実施するにあたり、名古屋大学文学研究科の奥野絵美氏には、資料整理にあたり大変お世話になった。ここに記してお礼申し上げる。

(2) 分析試料

ここに述べる試料は、発掘調査が平成 13（2001）年度に実施された愛知県安城市下懸遺跡 B 区の土坑（S K 29）中より発見されたものである。土坑の幅は長径約 2.6 m、短径約 2.0 m、深さは 2.3 m 前後であった。これまでの発掘調査の成果から、本土坑が機能

していた時代は、考古遺物などより弥生時代終末期～古墳時代のころ「C-2期（川原上層Ⅲ-1・2段階）」のものとされている。この土坑に隣接しSU01とされる土器集積遺構が確認されており、この遺構についても、弥生時代終末期～古墳時代と考えられている。

なお、遺跡は、安城市小川町の矢作川水系鹿乗川と矢作川本流が形成した沖積地となっており、矢作川右岸に形成された小規模の微高地上に位置している。遺跡周辺の表層地質は、砂ないし砂質シルトに覆われており、この下位に暗灰ないし黒灰色の遺物包含層が認められた。

分析試料は、主にSK29上部の「検出1」（試料1）、同中部の「検出2（上部）」（試料2）、同中部の「検出2（下部）」（試料3）の3層準より採取したものである。検出に供した分析試料の湿潤重量は、いずれも10～15kgであった。

（3）分析結果

分析試料中より確認された昆虫化石は、現時点での集計で計202点であった（表3）。うち、試料1から産出した昆虫化石は77点、試料2からは69点、試料3からは56点が見いだされた。

昆虫化石を分類群ごとにみると、試料1、および2・3を合わせ、目レベルまで分類できたもの1目2点、科レベル12科73点、亜科レベル1亜科8点、族レベル1族2点、属レベルは10属37点、種まで同定できたものは28種65点であった。これ以外に、不明甲虫とした昆虫が15点存在する。検出部位別では、鞘翅（Elytron）が最も多く、続いて腿脛節（Legs）・前胸背板（Pronotum）・胸部（Thorax）などであった。

生態別では、陸生の食植性昆虫を中心に、食肉性ないし雑食性の地表性歩行虫、食糞性や食屍性の歩行虫、および各種の水生昆虫をまじえる昆虫群集であった。

試料1で水生昆虫の出現率が高く（35.0%）、試料2で地表性昆虫（37.7%）、試料3では食植性昆虫（48.2%）の出現率が高かった。

特徴的な種についてみると、試料1より食肉性で中型のキベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicalis*（1点）、同じくヒメゲンゴロウ *Rhantus pulverosus*（2点）、ヒメゲンゴロウ亜科 Colymbetinae（4点）のほか、種が特定できていないゲンゴロウ科 Dytiscidae（3点）、および食植性の水生昆虫であるガムシ科 Hydrophilidae（4点）、ガムシ *Hydrophilus acuminatus*（2点）、コガムシ *Hydrochara affinis*（1点）、セマルガムシ *Coelostoma stultum*（3点）などが検出された。これ以外の地表性昆虫では、湿潤地表面を好むミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp.（1点）・ツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp.（1点）・ヤマトトックリゴミムシ *Lachnocrepis japonica*（2点）、トックリゴミムシ属 *Lachnocrepis* sp.（3点）などが見いだされた。これらはいずれも水辺に多い歩行虫である。

試料2では、人糞や獣糞に集集するコブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis*（2点）、ほぼ同種と考えてよいエンマコガネ属 *Onthophagus* sp.（1点）、人糞に多いマグソコガネ属 *Aphodius* sp.（2点）、同じくマグソコガネ *Aphodius rectus*（1点）、コマグソコガネ *Aphodius pusilpha*（1点）のほか、食屍性昆虫では、生ゴミや獣糞に集まるハエのウジなどを食するエンマムシ科 Histeridae（1点）が認められた。いっぽ

う、同一試料中より自然度の高い林床内を徘徊する夜行性のミカワオサムシ *Carabus arowianus* (1点)に加え、乾燥した地表面上や畑作地・人家周辺に生息し、攪乱環境を示唆する食屍性昆虫のオオヒラタシデムシ *Eusilpha japonica* (2点)などが検出されている。

試料3では、人が植栽した畑作物や果樹、二次林の樹葉や花粉などに集まるヒメコガネ *Anomala rufocuprea* (2点)・コガネムシ *Mimela splendens* (1点)・サクラコガネ属 *Anomala* sp. (9点)・アオハナムグリ *Eucetonia roelofsi* (1点)が確認されたことは重要である。

(4) 昆虫群集が示す古環境

下懸遺跡の分析試料より得られた昆虫化石群集をみると、3試料ともにオサムシ科を中心とした地表性昆虫の出現率が高いことがわかる。この結果は、下懸遺跡をめぐる地表環境を考えるうえで興味深い。なかでも、S K 29 廃棄土坑の「検出2上部」とされる試料2からは、人間生活に伴う周辺環境の汚染を示す食糞性昆虫が多数認められた。人為度の高い環境下の乾燥した地表面上を好むコブマルエンマコガネや、人糞に多く集まるマグソコガネ・コマグソコガネを含むマグソコガネ属の存在は、時代を特定することはできないものの土坑周辺に活発な人間活動があったことを示している。畑作地や人家周辺の攪乱環境の乾燥した地表面上を徘徊するオオヒラタシデムシの産出も、同様の推定を可能とする食屍性昆虫と考えられる。

試料3(検出2下部)におけるコガネムシやヒメコガネ・サクラコガネ属・アオハナムグリといった食植性昆虫の発見は、昆虫化石を産出した土坑周辺の植生に由来するものと推定される。ヒメコガネやサクラコガネ属などは、ブドウ・カキなどの果樹や各種畑作物を加害する畑作害虫として知られる。コガネムシは、サクラやクヌギなど多くの広葉樹の葉を食する食葉性昆虫であるが、人が植栽した果樹や畑作物の葉を食害することも多い。

土坑内堆積物の最上部を構成する試料1には、未分解の植物片が多数混入しており、水流の停滞した湿地のような環境下に堆積したことがうかがわれる。昆虫化石のうえでも止水環境を示すセマルガムシやコガムシ・ガムシなどの食植性の水生昆虫や、同じく水たまりや湿地などに多いミズスマシ・キベリクロヒメゲンゴロウ・ヒメゲンゴロウ・ヒメゲンゴロウ亜科といった食肉性水生甲虫が多数検出されている。

土坑が掘削されてしばらくのころ(弥生時代終末期～古墳時代)、下懸遺跡一帯に人為の介在した植生が繁茂していた。試料3より検出された食植性昆虫は、ヒトが遺跡内か遺跡にごく近い場所に植栽した畑作物や果樹などに由来するものか、それとも遺跡の後背地に生えていた里山林の植生を加害していたものかは、土坑内に認められた堆積物がヒトの手で埋められたものか自然堆積によるものかを、正しく判別する必要がある。

次のステージ(試料1)、下懸遺跡周辺にヒトが定着し(弥生時代終末期～古墳時代前期)、生産活動と自然への働きかけを行った。この結果、地表面上は裸地化が進行し人間生活に伴う周辺環境の汚染が少なからず認められたことだろう。

その後(古墳時代前期以降)、遺跡が水没し、湿地となった時期が存在したことを昆虫群集の組成変化から読みとることができる。

(5) まとめ

下懸遺跡の廃棄土坑内より産出した昆虫化石を同定・分析し、その群集組成から当時の古環境変遷の過程を復元した。

食植性昆虫が優占し、コガネムシ・サクラコガネ属・アオハナムグリなどの畑作害虫が多く認められる時期（ステージ1）、ついで地表性歩行虫が増加し、人の居住に伴う環境汚染を示すコブマルエンマコガネ・マグソコガネ・コマグソコガネなどの食糞ないし食屍性昆虫のほか、攪乱環境の乾燥した地表面を好むオオヒラタシデムシなどの地表性歩行虫が顕著な時期（ステージ2）があり、最後に、セマルガムシやガムシ・コガムシ・ヒメゲンゴロウ亜科などの水生昆虫が多く検出され、湿地化した時期（ステージ3）があったことが、明らかになった。（森 勇一）

参考・引用文献

- 森 勇一 1994 「昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元」『第四紀研究』33 (5) 31-349.
- 森 勇一 1996 「稲作農耕と昆虫」『季刊考古学』第56号 特集・稲作の伝播と長江文明 雄山閣 59-63.
- 森 勇一 1997 「虫が語る日本史-昆虫考古学の現場から」『インセクトリウム』34 (1)・34 (2) 18-23、10-17.
- 森 勇一 1999 「昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史」『国立歴史民俗博物館研究報告』第81集「歴博国際シンポジウム論文特集号」311-342.



表3 下懸遺跡から産出した昆虫化石

生 態	和 名	学 名	試料 1	試料 2	試料 3	小 計		
水生	食肉性	ゲンゴロウ科	Dytiscidae	3	1	2	25	
		ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i> Sharp		1			1
		ヒメゲンゴロウ	<i>Rhantus pulverosus</i> (Stephens)	2				2
		ヒメゲンゴロウ亜科	Colymbetinae	4	2	2		8
		マメゲンゴロウ属	<i>Agabus</i> sp.	2				2
		マメゲンゴロウ	<i>Agabus Japonicus</i> Sharp			1		1
		キベリクロヒメゲンゴロウ	<i>Ilybius apicalis</i> Sharp	1	1	1		3
		ミズスマシ属	<i>Gyrinus</i> sp.	1				1
		ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp	1				1
	食植性	ガムシ科	Hydrophilidae	4	2		6	
		ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky	2	1		3	
		コガムシ	<i>Hydrochara affinis</i> (Sharp)	1	1		2	
		ヒメガムシ	<i>Sternolophus rufipes</i> (Fabricius)			2	2	
		マメガムシ	<i>Regimbartia attenuata</i> (Fabricius)		2		2	
セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (Walker)	3	6		9	24		
地表性	食糞性	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.		1			1
		コブマルエンマコガネ	<i>Onthophagus atripennis</i> Waterhouse		1		1	2
		マグソコガネ属	<i>Aphodius</i> sp.		2			2
		マグソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)		1			1
		コマグソコガネ	<i>Aphodius pusilus</i> (Herbst)		1		1	
	食屍性	エンマムシ科	Histeridae		1		1	
		シテムシ科	Silphidae			1	1	
		オオヒラタシテムシ	<i>Eusilpha japonica</i> (Motschulsky)		2	1	3	
	食肉雑食性	オサムシ科	Carabidae	13	8	8	29	
		ミカワオサムシ	<i>Cerabus arrowianus</i> Breuning		1		1	
		トックリゴミムシ属	<i>Lachnocrepis</i> sp.	3			3	
		ヤマトトックリゴミムシ	<i>Lachnocrepis japonica</i> Bates	2			2	
		ミズギワゴミムシ属	<i>Bembidion</i> sp.	1	2		3	
アオゴミムシ属		<i>Chlaenius</i> sp.			1	1		
アオゴミムシ		<i>Chlaenius Pallipes</i> Gebler	1	1	3	5		
ツヤヒラタゴミムシ属		<i>Synuchus</i> sp.	1			1		
ヒラタゴミムシ族		Platynini		2		2		
キマワリ属		<i>Plesiophthalmus</i> sp.	1			1		
ハネカクシ科	Staphylinidae	2	3	2	7	64		
陸生	食植性	コガネムシ科	Scarabaeidae	3			4	7
		サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	5	8		9	22
		サクラコガネ	<i>Anomala daimiana</i> Harold		2			2
		ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope	1	4			5
		アオドウガネ	<i>Anomala albopilosa</i> Hope	1				1
		ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky		2		2	4
		コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> Gyllenhal	1			1	2
		コアオハナムグリ	<i>Oxycetonia jucunda</i> (Faldermann)	1				1
		アオハナムグリ	<i>Eucetonia roelofsi</i> (Harold)				1	1
		カミキリムシ科	Cerambycidae		1			1
		コメツキムシ科	Elateridae	2			3	5
		ゴミムシダマシ科	Tenebrionidae				2	2
		ハムシ科	Chrysomelidae		2	4	6	
アカガネサルハムシ	<i>Acrothinium gaschkevitchii</i> Motshulsky		1		1			
クワハムシ	<i>Fleutiauxia armata</i> Baly		1		1			
ゾウムシ科	Curculionidae	2		1	3	19		
その他	カメムシ目	Hemiptera	1	1			2	
	ツチカメムシ	<i>Macroscytus japonensis</i> Scott	1				1	
	アリ科	Formicidae		1			1	
	不明甲虫	Coleoptera	11	3	1	15		
合 計			77	69	56	202		

(検出部位凡例)

H (Head) : 頭部 An (Antenna) : 触角 M (Mandible) : 大腮 S (Scutellum) : 小楯板 P (Pronotum) : 前胸背板 C (Chrysalis) : 蛹 E (Elytron) : 鞘翅 W (Wing) : 上翅 T (Thorax) : 胸部 A (Abdomen) : 腹部 L (Leg) : 腿脛節 O (Others) : その他

3 樹種同定

(1) はじめに

試料数

前述したように、今回の調査ではA区を中心として多量の木製品が出土している。本センターでは、平成13(2001)年度と平成18(2006)年度に株式会社パレオ・ラボに依頼してこれらの樹種同定を実施した。結果はそれぞれ報告書が提出されているが、紙面の関係からこれらを池本が要約して報告する。なお、平成13年度分の試料は149点で植田弥生氏が執筆、18年度は試料数が118点で、植田弥生氏と野村敏江氏が執筆となっている。なお、紙面の関係で試料の顕微鏡写真は本書に添付されているCD-ROMに格納する(添付データ8)。

(2) 試料と方法

木製品から材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラルで封入し永久プレパラート(材組織標本)を作成した。そして光学顕微鏡を用いてこれらの材組織を観察し特徴をもとに、同定を行った。

なお、同定に使用した材組織標本は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

(3) 考察

表11に結果をまとめた。これを観察すると、針葉樹と広葉樹の複数種類が出土しているが、針葉樹ではマキ属・ヒノキ、広葉樹では落葉広葉樹、特にクリが多い。マキ属・ヒノキ・クリは、板・板材・角材・柱・棒・杭など様々な製品に利用されている。これらの樹種は入手が容易で木材資源として豊富であったと考えられる。

マキ属

下懸遺跡では、この中でも特に針葉樹のマキ属が最も多く検出された事が特徴として挙げられる。一方、濃尾平野一帯の遺跡からは、針葉樹ではヒノキの出土例が目立ち、マキ属は朝日遺跡(清須市など)や岡島遺跡(西尾市)で弥生時代の木製品の一部で使われているが、優占するほどではない(山田 1993)。しかし更に西方の静岡県内では多くの遺跡から検出され、マキ属のイヌマキやマキ属と同定された報告が目立つ(山田 1993)。

日本産のマキ属にはイヌマキとナギの2種があり、いずれも暖温帯の山林や照葉樹林に混生する常緑高木である。ナギは紀伊半島以西に分布しているが、イヌマキは房総半島以西の海岸に近い地域に分布している。材組織からナギとイヌマキを識別はできないが、渥美半島付近一帯はイヌマキの自然分布地である(中川 1994)。下懸遺跡からマキ属が多く出土したことは、イヌマキの生育環境下に近い立地にあることと附合する。古墳時代には本来の植生、つまりマキ属も豊富に混在していた照葉樹林が成立していたと推測される。ただし、今回の調査対象試料から検出された常緑性の広葉樹は、ツブラジイを含むシイノキ属が7点とアカガシ亜属が1点だけであった。しかし、当遺跡の近隣にある中狭間遺跡(川崎他 2000)や釈迦山遺跡(神谷他 2001)の弥生時代後期～古墳時代前期の鍬・有頭棒・堅杵・木錘など作業道具類からは、常緑広葉樹のサカキやアカガシ亜属(カシ)が多く報告されているので、やはり当地域周辺には照葉樹林のシイ-カシ林があった

と考えられる。

マキ属と共にヒノキも多く使用されていた。ヒノキは、暖温帯の落葉広葉樹林や人間活動や災害などで照葉樹林が破壊された跡に生育するアカマツやコナラ・クヌギなどからなる二次林にも生育する。このような二次林も当時は一部にあったかもしれないが、ヒノキもマキ属と同様に板・板材や角材に加工して大量に使われている事から、安定した森林環境に成立している落葉広葉樹林から伐採してきたのではないだろうか。近隣の二子遺跡(山田 1993) では古墳時代後期の木製品樹種は、ヒノキが多く、スギ・カシ類・コナラ・サクラが報告されている。このことからヒノキが豊富な森林が、当地域一帯にあったことが伺える。

二子遺跡や中狭間遺跡そして釈迦山遺跡からは、下懸遺跡から出土した分類群と対応する針葉樹ではヒノキ・モミ・スギ・マツが、そして広葉樹ではクヌギ・コナラ亜属・サクラなどが出土していることから、当遺跡も含め地域一帯で利用していた樹種の構成が類似していることが判った。ただし、マキ属が多く検出されたのは下懸遺跡だけである点が注目される。

(原文 植田弥生・野村敏江、要約 池本正明)

参考・引用文献

- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 - 用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第1号
- 中川重年 1994 『検索入門 針葉樹』 保育社
- 川崎みどり他 2000 『中狭間遺跡』 安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 安城市教育委員会
- 神谷真佐子他 2001 『釈迦山遺跡』 安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 安城市教育委員会

4 下懸遺跡出土土器の胎土分析

(1) 分析の目的

安城市小川町に位置する下懸遺跡から出土した弥生時代中期および後期の土器を対象に分析を行った。

筆者らは、下懸遺跡の約5km南方の岡島遺跡(西尾市岡島町)出土土器を対象に、胎土分析を行い、この地域における在地土器の胎土の胎土を明らかにするとともに、主に尾張地区との土器の移動について考察しており、西三河地域では尾張からの直接の土器搬入は、その逆の移動に比べ、ごく少数であることを報告している(池本ほか 1990a・b, 永草 1993)。

今回は、下懸遺跡において当時の交流関係が、ほど近い岡島遺跡と同様であったかを比較検討することを主な目的とした。

(2) 分析の方法

胎土分析の方法は、筆者がこれまでに愛知県内外の遺跡出土土器を対象に実施してきた方法に準ずる。ただし、今回は上述のように当時の土器の移動を明らかにすることを目的としたため、在地系の土器ではなく他地域からの搬入の可能性の高いものを抽出し、分析を行った。

ヒ ノ キ

まず、出土土器の中で十分に形式が復元でき、その系統が判別できるものを対象に、実体顕微鏡で表面観察を行った(砂礫の計数は行っていない)。その数は1000を越える。その結果、胎土が下懸遺跡およびその周辺地域産ではない可能性のあるもの、および土器形式等から他地域産である可能性のあるもの60点をプレパラート化し、偏光顕微鏡下で詳細な観察を行い、砂礫の構成と地質との整合性の検討を行った。

(3) 分析の結果

以下に、偏光顕微鏡観察の対象となった土器の情報と、観察結果を記す。(表4)

(4) 分析土器の産地別分類

偏光顕微鏡観察結果をもとに、推定される産地またはその他の特徴により分類する。

(1) 下懸遺跡及びその周辺地域産と思われる土器

(No1~5,7~13,15~17,19~21,33,35,41,44,48~50,52,54,56~60)

花崗岩起源の砂礫により支配され、多くの場合白雲母を伴う。これは同遺跡東を流れる矢作川の上・中流域に露出する花崗岩に影響される。特に岡崎市周辺には両雲母花崗岩が分布することが知られており、それが白雲母の供給源と推定される。花崗岩の副鉱物であるジルコンなども含まれることがある。

(2) 三重県北部産の可能性のある土器 (No6,40,42,43,46,47)

花崗岩を主体とするが、白雲母を伴わない他、堆積岩の影響がある。

ただし西三河地域(特に中でも西部地域)と地質は類似し、土器胎土に関してもその区別は難しい。土器形式や文様との整合性など、複数要素からの判断が望ましい。No55もこのグループであるかもしれない。

(3) 尾張西部産の可能性のある土器 (No23,26)

過去の分析結果と比較する中では、尾張西部産の土器と鉱物の組み合わせが類似する。しかし2点ともそれらの比率は必ずしも代表的な尾張西部産の特徴に合致する訳ではなく、その点ではその周辺地域産も含めた可能性にとどめたい。2点とも赤彩の施された土器(いわゆるパレススタイル土器)である。

(4) 尾張東部産と思われる土器 (No24,25,28,30,31,45)

無色鉱物と、堆積岩の中でもチャートが多数を占める。この給源は尾張東部丘陵から岐阜南部に露出する美濃帯と呼ばれる中・古生層と考えられる。愛知県では、木曽川・揖斐川・長良川もこれを侵食して南流するが、これらの河川による運搬物の堆積域である尾張西部地域ではさらに上流の地質の影響も受けるため、この地域の土器胎土は異なった傾向を示す。これまでの分析では庄内川流域の土器がこれらのグループの土器胎土と類似する。

このうちNo25は、形式の上では西濃地域?とされている。胎土の点では、砂礫の多くが無色鉱物であり、このグループとしたものの疑問が残される。上記のように、同じ系列の地層が西濃地域まで分布していることを考えると、その想定も必要かもしれない。

(5) 火山ガラスが多量に含まれる土器 (No27,29,34)

3点とも赤彩の施された土器(いわゆるパレススタイル土器)である。鉱物の組み合わ

せは上の(4)と類似し、この3点も尾張東部産の可能性はある。しかし火山ガラスの多さが特徴的であり、区別して考えるのが妥当であろう。

(6) 静岡県西部産と思われる土器 (No22,32,38,39)

チャートや砂岩などの堆積岩類を多く含んでいる。尾張東部産に比べ、チャート以外の堆積岩の比率が高い。これは、永草(1993)の中で比較試料とした静岡県浜松市の角江遺跡の胎土と類似する。浜名湖北部から西部に分布する堆積岩類に由来するものと思われる。

(7) その他

No36,37,51,53は、4点ともS字状口縁台付甕(以後S字甕という)である。胎土は花崗岩を基調としつつも、西三河の胎土とは若干異なる。いわゆるS字甕の胎土であろう。

S字甕は、伊勢湾岸地域における弥生時代後期から古墳時代初頭の遺跡では普遍的に出土する土器である。発生初期段階は特に尾張西部で出土するものもすべて共通の規格をもって作られており、胎土も在地の土器とは異なり花崗岩質の胎土で作られた。この4点もこの規格に沿って作られたものであるといえる。筆者らのこれまでの調査により、S字甕の胎土の産地は三重県中部(雲出川下流域)と想定している。(ただし尾張西部では土器材料として移動し、尾張西部で作られたと考えられている)。

S字甕ではないが、No18はこのグループに類似する。この土器も上の4点と共通の起源と考えられる。

No14は、土器形式は尾張西部の特徴を持つ、いわゆる凹線文系の土器である。胎土は、西三河の土器胎土に共通しながらも尾張の土器とも類似性がある。現在のところこの胎土の産地を推定することは難しい。土器形式と合わせて考えれば、全くの別地域は想定しにくく、もしかすると尾張産の胎土と西三河産の胎土を混合するような調整が想定できるかもしれない。

(5) 考察

(1) 在地産の土器

偏光顕微鏡観察を行った土器のうち、約2/3が遺跡周辺の土器胎土である。この中には、形式からは凹線文系と分類される、尾張西部の特徴を持っているものが多数含まれる。すなわち多くの場合は、尾張西部の土器形式を模倣して遺跡周辺で作製されていたといえる。この点では、下懸遺跡も岡島遺跡などこれまでに分析を行っている西三河地域の結果と一致する。

また土器形式のみならず、胎土の質感の点でもかなり類似しているものが多い。具体的には、在地系の土器は多くの場合胎土中に雲母が目立つなど、一見して三河の胎土であることが判別できる場合がほとんどである。しかしこれらの土器ではそれとは異なり、表面的には雲母が目立たないなど、かなり尾張西部の土器に類似している場合が多い。すなわち、全体のフォルムや文様はもちろん、混和する砂礫の量や粒度・質など、土器胎土の質感についても忠実に模倣する意思が読みとれる。すなわちこれは単なる「模倣」ではなく、たとえば尾張西部からの移住民が作製に関わったなど、より深い関係があった可能性が想定できるのではなかろうか。

(2) 尾張産と思われる土器

分析にあたった土器総数から考えれば、ごくわずかであるといえる。この点も岡島遺跡

の結果と一致し、尾張からの直接の土器搬入は非常に少ない。

また尾張産とされる土器のうち、多くが尾張西部の胎土ではなく、尾張東部産である。特にいわゆるパレススタイルも、火山ガラスを含むことをのぞけばおそらく尾張東部の胎土であることを考えると、尾張産の土器に占める東部産の比率が高い。また尾張西部から直接搬入の可能性がある土器も、朝日遺跡など尾張西部の拠点集落の胎土とは一致せず、その周辺地域である可能性が高い。尾張からの土器自体の搬入が、いったん東部地域のどこかでワンクッションをおいて持ち込まれているといえる。尾張では、西三河産の形式を持つ土器が、かなり高い比率で胎土と一致し、土器移動の状況が異なっている。当時の物流を知る上で大変興味深い結果となった。

またこの尾張東部を経由すると想定されるルートは、考古学的な見地からも川原遺跡（愛知県豊田市）における凹線文系土器の受容として、鈴木（2001）によって指摘されており、三河地域における西方からの土器形式の波及経路の一つとして、自然科学的手法からも追認する結果である。

（3）静岡県西部産と思われる土器

岡島遺跡で比較試料として分析を行った浜松市角江遺跡の試料とも類似し、土器形式ともよく合致する。また岡島遺跡での分析試料中にも同様の土器があり、下懸遺跡だけでなく、周辺地域も含め直接交流があったものと考えられる。

（4）S 字状口縁台付甕

在地産の胎土で作られたものと、S 字甕胎土で作られたものが混在している。尾張地域においても S 字甕 B 類以降は同様の状況である。ただしこれまでには A 類段階までは S 字胎土で作られており、その例外は八王子遺跡で 1 点見いだされていたにすぎない。今回下懸遺跡でも、A 類(?) と分類されながら三河産胎土で作られているものが 1 点見いだされたことは特筆すべき点である。ただし形態からも明らかに模倣品であるとされており、考慮すべき点を含んでいる。

（5）その他

上述のように、三重県中部と西三河地域は地質区分上は同じ領家帯に属するため、その区別には複数要素から総合的に判断するのが望ましい。その点では三河地域産と分類した凹線文土器中には、三重県産を含むかもしれないことを付記しておく。

（6）まとめ

今回の分析において、特に西三河地域と尾張の交流の様相について、多くはこれまでの結果を追認するものであった。しかし直接の土器移動が、いわゆる尾張西部からの移動途中に、中継地点を置く可能性が指摘できたことは大きな意味を持つ。またそれが尾張東部地域であれば、距離的にもほぼ中間地点である。

集落の立地上、交流において当然海路の利用の可能性が想定されるであろうが、今回の結果からは、陸上の中継地の存在が想定される。つまり海路ではなく陸路による交流も想定すべきであるといえる。距離的には大きくは離れていないものの、下懸遺跡・川原遺跡と岡島遺跡では、土器の受容体制に違いがあることが土器の形式的分析のみならず、自然科学的分析からも明らかになった。土器のみではなく、その他の物的交流も同様の様子であったことが想定される。

表 4 胎土分析プレパレーターリスト

試料番号	図番号	器 種	部 位	時 期	備 考	偏光顕微鏡観察記載
1	1145	高杯・鉢	杯部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母、少量の角閃石・白雲母を伴う。
2	1162	壺	下胴部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に角閃石・黒雲母を伴う。シルコンも見られる。
3	1158	壺	下胴部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に角閃石・黒雲母を伴う。シルコンも見られる。
4	1205	高杯・鉢	杯部	中期	凹線文系	砂礫の多くを無色鉱物で占める。花崗岩片（中に面雲母花崗岩）が含まれる。
5	1202	鉢	杯部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片（中に面雲母花崗岩）に黒雲母を伴う。
6	1204	高杯・鉢	杯部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩に角閃石・黒雲母を伴う。チャートが見られる。
7	1211	高杯・鉢	杯部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に少量の黒雲母・角閃石・白雲母を伴う。
8	1206	高杯・鉢	杯部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石・白雲母を伴う。
9		高杯	杯部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・白雲母を伴う。
10	1219	高杯	脚部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石・白雲母を伴う。
11	1217	高杯	脚部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石・白雲母を伴う。
12	1216	高杯	脚部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石・白雲母を伴う。
13	1191	壺	底部	中期	凹線文系・平底	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母を伴う。
14	1198	壺	底部	中期	凹線文系・平底	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石を伴い、まれに両輝石が見られる。
15	200	高杯・鉢	杯部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石・白雲母を伴う。変成岩系の岩片が見られる。
16	1185	鉢	口縁部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石・白雲母を伴う。
17	199	壺	口縁部	中期	後期かも	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・白雲母を伴う。結晶片岩片が見られる。
18	202	不明	不明	不明	後期かも	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母を伴う。
19	1354	壺	口縁部	中期	凹線文系	砂礫の多くを無色鉱物で占める。花崗岩片が含まれる。
20	1301	壺	肩部	中期	凹線文系	砂礫の多くを無色鉱物で占める。花崗岩片が含まれる。
21	292	壺	口縁部	後期		無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・白雲母を伴う。軽石と思われる岩片が見られる。
22	359	壺	体部	後期		無色鉱物に加え、チャート及びその他の堆積岩が砂礫の多数を占める。花崗岩片も含まれる。
23	305	壺	口縁部	後期	赤彩	無色鉱物・チャートが含まれる。斜方輝石が見られる。
24	282	壺	口縁部	後期	赤彩	砂礫は少ない。無色鉱物・チャートが含まれる。
25	404	高杯	杯部	後期	西濃系？	砂礫の多くを無色鉱物で占める。花崗岩片が含まれる。
26	347	壺	口縁部	後期		無色鉱物・チャートが多い。花崗岩片・斜方輝石も見られる。
27	514	壺	肩部	後期	赤彩	砂礫は少ない。無色鉱物・チャートが含まれ、素地には火山ガラスが多く見られる。
28	702	壺	肩部	後期	赤彩	無色鉱物及びチャートが多い。
29	703	壺	肩部	後期	赤彩	砂礫は少ない。無色鉱物・チャートが含まれ、素地には火山ガラスが多く見られる。
30	683	壺	口縁部	後期	赤彩 (特徴的)	無色鉱物及びチャートが多い。
31	859	壺	肩部	後期	赤彩	砂礫は少ない。無色鉱物・チャートが含まれ、素地には火山ガラスが多く見られる。
32	891	ミニチュア壺	下胴部	後期	ミニチュア	無色鉱物に加え、チャート及びその他の堆積岩が砂礫の多数を占める。花崗岩片も含まれる。
33	989	高杯・鉢	口縁部	後期か	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母を伴う。角閃石も見られる。
34	912	壺	口縁部	後期	赤彩	砂礫は少ない。無色鉱物・チャートが含まれ、素地には火山ガラスが多く見られる。
35	1030	高杯・鉢	口縁部	後期か	赤彩	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石を伴う。シルコン・ガーネットも見られる。
36	928	S 字壺	口縁部	後期	A 類	花崗岩に加え、チャート及び堆積岩が伴う。
37	926	S 字壺	口縁部	後期	A 類	細粒の砂礫が多数含まれる。花崗岩片・角閃石が含まれる。
38	59	壺	下胴部	後期	小型	無色鉱物に加え、チャート及びその他の堆積岩が砂礫の多数を占める。
39	62	壺	下胴部	後期	縞刻面あり	無色鉱物に加え、チャート及びその他の堆積岩が砂礫の多数を占める。
40	1212	高杯・鉢	杯部	中期	凹線文系	ほとんど無色鉱物で占める。わずかに黒雲母が含まれる。斜長石には花崗岩に見られる組織がある。
41	1161	壺	肩部	中期	凹線文系細頭壺	無色鉱物・花崗岩にチャートが伴う。
42	1160	壺	底部	中期	凹線文系	ほとんど無色鉱物で占める。黒雲母が見られる。
43	1209	高杯・鉢	口縁部	中期	凹線文系	ほとんど無色鉱物で占める。黒雲母が埋られる。
44	1213	高杯・鉢	口縁部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石・シルコンを伴う。
45	27	壺	口縁部	後期		砂礫は細粒で少ない。チャートが見られる。
46		壺	口縁部	中期	凹線文系	ほとんど無色鉱物で占める。黒雲母・角閃石を含む花崗岩片が含まれる。
47		壺	頸部	中期	凹線文系	ほとんど無色鉱物で占める。黒雲母・角閃石を含む花崗岩片が含まれる。白雲母が見られる
48		壺	口縁部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石・白雲母を伴う。
49		壺	口縁部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石・白雲母を伴う。
50		壺	口縁部	中期	凹線文系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石・白雲母を伴う。
51	S 字壺	口縁部	口縁部	後期		無色鉱物・花崗岩片を含む。輝石を含む岩片がある。
52	S 字壺	口縁部	口縁部	後期	S 字壺A類もどき	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石・白雲母を伴う。
53	S 字壺	肩部	肩部	後期	S 字壺A類	無色鉱物・花崗岩片を含む。角閃石を含む岩片がある。
54	壺	体部	体部	後期	縞文 遠江系か	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石を伴う。
55	壺	体部	体部	後期	尾張系	細粒の砂礫が多数含まれる。
56	壺	体部	体部	後期		無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石を伴う。
57	高杯	脚部	脚部	後期		無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石を伴う。
58	壺	体部	体部	後期	縞刻面あり	細粒の砂礫が多数含まれる。花崗岩片・角閃石が含まれる。
59	壺	体部	体部	後期	6 3 4 と同一個体	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母・角閃石を伴う。
60	壺	体部	体部	後期	山陰系	無色鉱物・花崗岩片に黒雲母を伴う。

参考・引用文献

- 池本正明・永草康次・楯真美子 (1990) 岡島遺跡の土器胎土の特徴. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 14 集) 岡島遺跡, 51-63.
- 池本正明・永草康次・楯真美子 (1990) 岡島遺跡の土器胎土に関する考察. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 14 集) 岡島遺跡, 98-101.
- 森勇一・永草康次・楯真美子 (1989a) 尾張地方を中心とした土器胎土の地域色について. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 9 集) 町田遺跡, 44-49.
- 森勇一・永草康次・楯真美子 (1989b) 町田遺跡出土の弥生土器胎土の特徴. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 9 集) 町田遺跡, 50-53.
- 永草康次 (1992) 朝日遺跡出土の土器胎土. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 31 集) 朝日遺跡 II (自然科学編), 299-314.
- 永草康次 (1993) 岡島遺跡の土器胎土. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 43 集) 岡島遺跡 II・不馬入遺跡, 141-152.
- 永草康次 (1994a) 朝日遺跡 sz162 出土の土器胎土. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 34 集) 朝日遺跡 V, 322-328.
- 永草康次 (1994b) 伊勢湾岸地域の土器胎土 - 弥生時代から古墳時代を中心として -. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 34 集) 朝日遺跡 V, 355-362.
- 永草康次 (1998) 一色青海遺跡出土土器の岩石学的手法による胎土分析. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 79 集) 一色青海遺跡 (自然科学・考察編), 101-108.
- 永草康次・蔭山誠一 (2001) 川原遺跡出土弥生中期土器の胎土分析とその考古学的評価. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 91 集) 川原遺跡 (第三分冊), 61-70.
- 永草康次 (2007) 朝日遺跡 (2001 年度・2002 年度出土) における土器胎土の岩石学的分析. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 138 集) 朝日遺跡 VII (第 3 分冊), 143-145.
- 鈴木とよ江 (2001) 凹線文土器の波及をめぐって. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 (第 91 集) 川原遺跡 (第一分冊), 104-114.

5 赤色顔料の分析

(1) 試料および分析方法

分析を行った資料は赤色顔料の付着が認められた 41 点の土器である。それぞれの破片資料よりセロハンテープを用いて赤色顔料のみを採取し分析試料とした。また部位による差を確認するために、一部の資料では複数箇所から分析試料を採取した。

測定方法は、セロハンテープ上の試料に X 線を照射する方法で測定を行った。測定ポイントは 1 試料につき、隣接しない 5 カ所を設定した。各ポイントでの測定条件は以下の通りである。測定機器は (株) 堀場製作所製 XGT-5000、X 線管電圧 30kV、測定時間 500 秒、照射径 100 μ m、雰囲気は大気。セロハンテープには Si と Al、S が確認される。

(2) 測定結果

測定の結果を表 7～8 に示す。認められた元素は Si (珪素)、S (硫黄)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Ti (チタン)、Cr (クロム)、Mn (マンガン)、Fe (鉄)、Zn (亜鉛)、Cu (銅)、Ni (ニッケル) である。

表 5 では 1 試料内の 5 つの測定ポイントすべてにおいて確認される元素を○、測定ポイントによって確認されない元素を△で示した。Si、S、Ca、Ti、Fe は、全ての分析試料の全ての測定ポイントで確認されている。また K は試料番号 704 でのみ確認されないポイントが存在した。

確認された
元素

表5 下懸遺跡出土土器の赤色顔料 蛍光X線分析結果

図版番号	器種	時期	採取部位	Si	S	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	Cu	Zn	Ni
20	壺	C期		○	○	○	○	○		△	○			
25	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
29	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
126	壺	C期		○	○	○	○	○	△	△	○			
127	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
155	壺	C期		○	○	○	○	○		△	○			
156	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
157	壺	C期		○	○	○	○	○			○	△		
243	鉢	C期		○	○	○	○	○		△	○			
249	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
250	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
258	壺	C期	凸部	○	○	○	○	○			○	△		
			凹部	○	○	○	○	○		△	○			
282	壺	C期	凸部	○	○	○	○	○	△	△	○			
			凹部	○	○	○	○	○	△	△	○			
284	壺	C期	脚部内側	○	○	○	○	○			○			
			杯部外側	○	○	○	○	○			○			
305	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
329	高杯	C期		○	○	○	○	○	△		○		△	
603		C期		○	○	○	○	○	△		○			
626	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
634	壺	C期	首部外側	○	○	○	○	○			○			
			首部内側	○	○	○	○	○		△	○			
638	壺	C期		○	○	○	○	○	△	△	○	△		
643	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
668	高杯			○	○	○	○	○			○			
676	高杯			○	○	○	○	○			○			
683	壺	C期	外側	○	○	○	○	○	△		○			
			内側	○	○	○	○	○	△		○	△		
695	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			△
696	壺	C期		○	○	○	○	○		△	○			
697	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○	△		
700	壺	C期		○	○	○	○	○			○	△		
702	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
703	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
704	壺	C期		○	○	△	○	○			○			
705	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
707	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
859	壺	C期		○	○	○	○	○	△	△	○			
862		B期		○	○	○	○	○		△	○			
912	壺	C期	口外	○	○	○	○	○	△		○			
			口内	○	○	○	○	○	△		○			
973	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
1000	壺	C期		○	○	○	○	○	△		○			
1007	壺	C期	底部	○	○	○	○	○			○			
			外壁	○	○	○	○	○	△		○			
			内壁	○	○	○	○	○	△		○			
1013	壺	C期		○	○	○	○	○			○			
1030	高杯または鉢	B期		○	○	○	○	○			○			

B期: 弥生時代中期後葉

○: 5つの測定点全て確認された元素

C期: 弥生時代後期～古墳時代初頭

△: 1～4つの測定点で確認された元素

同一の土器で異なる部位の赤色顔料（試料番号 258、282、284、634、683、912、1007）について、元素の組成を比較すると、試料番号 258 と 634、683、1007 において、Cr、Mn、Cu に違いが認められた。残る 3 試料では、元素の組成に違いは確認できなかった。

(3) 他地域との比較

今回分析を行った試料とほぼ同時期の試料として、朝日遺跡のパレススタイル土器の赤

表6 朝日遺跡出土土器の赤色顔料 蛍光X線分析結果(1)

SampleNo	器種	所属時期	登録番号	採取部位	Si	S	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	As	Cu	Zn	Ni	Rb	Sr
44	直口壺	八王子古宮	1829	胴部	○	○	○	○	○			○						
63	ワイングラス形高杯	八王子古宮	1812	脚部	○	○	○	○	○		△	○						
63			1812	杯部	○	○	○	○	○	△	△	○		△		△		
65	碗形高杯	八王子古宮	50	杯部内側	○	○	○	○	○			○		△				
66	ワイングラス形高杯	八王子古宮	1888	口縁内側	○	○	○	○	○	△	△	○		△		△		
66			1888	口縁外側	○	○	○	○	○	△	△	○						
67	ワイングラス形高杯	八王子古宮	1887	脚部	○	○	○	○	○		△	○						
4	短頸壺	廻間	1526	胴部	○	○	○	○	○			○		△				
4			1526	口縁	○	○	○	△	○			○						
3	バレス壺	廻間	1312	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
6	バレス壺	廻間	1496	口縁内側	○	○	○	○	○		△	○						
6			1496	口縁外側	○	○	○	○	○	△	○	○						
6			1496	胴部	○	○	○	○	○	△	○	○						
7	バレス壺	廻間	1281	口縁	○	○	○	○	○	△	△	○		△				
7			1281	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○		△	△			
8	バレス壺	廻間	440	口縁内側	○	○	○	○	○	△	○	○		△	△			
8			440	口縁外側	○	○	○	○	○	△	○	○		△				
8			440	胴部	○	○	○	○	○	△	○	○						
9	バレス壺	廻間	04AbSD01 2層-005	胴部	○	○	○	○	○	△	○	○		△	△		△	
10	バレス壺	廻間	1497	口縁	○	○	△	○	○	△		○		△				
10			1497	頸部	○	○		○	○			○						
10			1497	胴部	○	○	△	○	○			○						
11	バレス壺	廻間	86	口縁外側	○	○	○	○	○	△	△	○			△			
11			86	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○		△	△			
13	バレス壺	廻間	1次19図-11	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
2	バレス壺	廻間II	一次1-4	胴部	○	○	○	○	○			○			△			
2			一次1-4	口縁	○	○	○	○	○	△		○		△	○			
1	二重口縁壺	廻間II	34-G-18	口縁部外側	○	○	○	○	○			○						
14	有段高杯	山中I	356	杯部	○	○	○	○	○	△	△	○						
14			356	脚部	○	○	○	○	○	△		○		△				
20	有段高杯	山中I	1745	口縁	○	○	○	○	○	△	△	○						
20			1745	脚部	○	○	○	○	○	△	△	○		△				
23	有段高杯	山中I	1062	杯部	○	○	○	○	○		△	○		△				
23			1062	脚部	○	○	○	○	○	△	△	○		△				
61	有段高杯	山中I	980	内側	○	○	○	○	○	△		○			△			
61			980	外側	○	○	○	○	○			○			△			
19	台付鉢	山中I	72-73-P5-1	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
27	鉢	山中I	1025	胴部	○	○	○	○	○		○	○			△			
29	鉢	山中I	1027	胴部	○	○	○	○	○	△	○	○	○	△	△	△		△
28	バレス壺	山中I	黒赤丸文	頸部部	○	○	○	○	○		○	○	△				△	
28			黒赤丸文	胴部上部	○	○	○	○	○	△	○	○	△	△				
28			黒赤丸文	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○		△				
30	バレス壺	山中I	1737	口縁	○	○	○	○	○		△	○		△	△			
30			1737	赤丸文	○	○	○	○	○		△	○		△	△		△	
30			1737	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○		△				
24	有段高杯	山中	733	杯部内側	○	○	○	○	○	△	△	○			△			
24			733	杯部外側	○	○	○	○	○		△	○					△	
25	有段高杯	山中	1066	口縁	○	○	○	○	○	△	○	○						
25			1066	胴部	○	○	○	○	○		△	○		△		△		
52	高杯	山中	1101	杯部内側	○	○	○	○	○		○	○		△				
52			1101	杯部外側	○	○		○	○	△		○						
62	高杯	山中	1011	後円部	○	○	○	○	○		○	○						
40	ワイングラス形高杯	山中		杯部	○	○	○	○	○	△	○	○		△	△			
40				脚部	○	○	○	○	○	△	○	○						
45	ワイングラス形高杯	山中	1110	胴部	○	○	○	○	○		○	○		△				
45			1110	口縁	○	○	○	○	○	△	△	○						
46	ワイングラス形高杯	山中	78-p5-28	胴部	○	○	○	○	○	△		○		△				
46			78-p5-28	脚部	○	○	○	○	○	△		○		△				
48	ワイングラス形高杯	山中	390	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
50	ワイングラス形高杯	山中	1056	胴部	○	○	○	○	○			○						
50			1056	脚部	○	○	○	○	○	△		○						
54	ワイングラス形高杯	山中	1次-19-1	口縁	○	○	○	○	○	△		○						
55	ワイングラス形高杯	山中	1104	口縁	○	○	○	○	○		△	○						
55			1104	脚部	○	○	○	○	○		○	○						
64	ワイングラス形高杯	山中	1749	杯部	○	○	○	○	○	△	△	○				△		
64			1749	脚部	○	○	○	○	○	△	△	○						
15	碗形高杯	山中	1102	杯部	○	○	○	○	○		△	○						
15			1102	脚部	○	○	○	○	○		△	○		△				
22	器台	山中	655	頸部	○	○	○	○	○	△	△	○				△		
22			655	脚部	○	○	○	○	○		○	○		△				
32	器台	山中	1018	脚部	○	○	○	○	○		△	○						
32			1018	杯部内部	○	○	○	○	○	△	○	○		△				
35	器台	山中	972	脚部	○	○	○	○	○		○	○			△			
39	器台	山中	1019	口縁	○	○	○	○	○	△	△	○						
39			1019	胴部	○	○	○	○	○	△	○	○						
5	バレス壺	山中	1863	胴部	○	○	○	○	○		○	○						
5			1863	口縁	○	○	○	○	○	△	○	○						
12	バレス壺	山中	1281	口縁	○	○	○	○	○	△	△	○			△			△
12			1281	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○		△				
26	バレス壺	山中	1739	口縁	○	○	○	○	○	○	○	○						
26			1739	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○			△			
34	バレス壺	山中	973	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
16	広口壺	山中	1060	胴部	○	○	○	○	○	△		○						
17	広口壺	山中	707	胴部	○	○	○	○	○		△	○						△
17			707	口縁内側	○	○	○	○	○	△	△	○			△			
53	広口壺	山中		胴部	○	○	○	○	○		○	○						
58	広口壺	山中	1874	胴部	○	○	○	○	○		○	○						
58			1874	頸部	○	○	○	○	○	△	△	○						

表7 朝日遺跡出土土器の赤色顔料 蛍光X線分析結果(2)

SampleNo	器種	所属時期	登録番号	採取部位	Si	S	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	As	Cu	Zn	Ni	Rb	Sr
18	直口壺	山中	1273	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
31	直口壺	山中	1316	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
38	直口壺	山中	1354	胴部	○	○	○	○	○	△	○	○						
51	直口壺	山中	1272	口縁	○	○	○	○	○	△		○						
51			1272	胴部	○	○	○	○	○		△	○						
21	長頸壺	山中	520	口縁	○	○	○	○	○	△		○			△			
21			520	胴部	○	○	○	○	○		△	○						
33	長頸壺	山中	399	口縁	○	○	○	○	○	△	△	○						
33			399	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○				△		
37	長頸壺	山中	1280	口縁	○	○	○	○	○	○	○	○						○
37			1280	胴部	○	○	○	○	○		△	○				△		
42	脚付長頸壺	山中	371	胴部	○	○	○	○	○	△	○	○				△		
43	台付短頸壺	山中	1105	口縁	○	○	○	○	○	△		○			△			
43			1105	胴部	○	○	○	○	○	△		○						
43			1105	脚部	○	○	○	○	○	△		○						
47	台付鉢	山中	745	杯部	○	○	○	○	○		△	○						
47			745	脚部	○	○	○	○	○			○			△			
41	鉢	山中	800	胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
56	ワイングラス形高杯	山中Ⅱ	976	杯部口縁	○	○	○	○	○			○			△			
56			976	脚部	○	○	○	○	○			○						
57	ワイングラス形高杯	山中Ⅱ	338	杯部口縁	○	○	○	○	○			○						
57			338	脚部	○	○	○	○	○			○						
60	パレス壺	山中Ⅱ		口縁内側	○	○	○	○	○	△		○						
60				胴部	○	○	○	○	○	△		○						
59	広口壺	山中?		胴部	○	○	○	○	○	△	△	○						
36	台付鉢	?		杯部	○	○	○	○	○	△	○							

表8 朝日遺跡出土土器の赤色物質 蛍光X線分析結果

SampleNo	調査区	遺構	試料の形状	Al	Si	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe
1	05Ab	1405SK	住居地床面の赤色物質		○	○		○	△	△	○
2	05Ab	検出2-T	赤色物質を含む土壌		○	○	△	○	△	△	○
3	05Ab	936SK	住居地床面の赤色物質		○	○	△	○	△		○
4	05Ab	52SQ-T	赤色物質を含む土壌		○	○		○	△		○
5	14次オ区	SK01(SZ28)	赤色物質を含む土壌	○	○		○		○		○
6	14次ク区	SB04-P300	水洗選別済赤色物質		○				○		○
7	14次ク区	9E7i	赤色物質を含む土壌	○	○		○		○		○
8	14次ク区	SB04-P271埋土西半	赤色物質を含む土壌	○	○						○

色顔料がある。朝日遺跡は愛知県西部の濃尾平野のほぼ中央に位置しており、矢作川中下流域に位置する下懸遺跡とは遠くはなれている。しかし、弥生時代後期から古墳時代初頭のころ、両地域で共に赤彩された土器が用いられていた。そこで、両地域の赤色顔料の元素組成に何らかの差異が見いだせるかの比較検討を行った。

朝日遺跡のパレススタイル土器に塗布された赤色顔料の分析については、今回と同様の分析装置を用い同様の分析方法で実施した(堀木2008)。結果を表6・7に示す。また赤色顔料を施された土器以外に、赤色顔料と考えられる赤色の物質塊も朝日遺跡では出土している。そこでこの赤色物質についても、塗布された赤色顔料と同様にセロハンテープを用いて採取したものを、分析試料として測定を行った(表8)。

まず朝日遺跡の試料において、検出された元素の違いをみると、As、Rb、Srが113試料中10点で確認されている。CrやMnなどにも違いが認められるが、時期や器種、部位によるものとは考えにくい。また同一の土器での部位毎の成分の比較を行うと、42点中5点のみ同一の元素が認められるが、残る37点では部位によって確認される元素が異なっている。ただし、確認される元素の種類と部位についての傾向はみられない。

次に下懸遺跡と朝日遺跡の元素の比較を行う。朝日遺跡だけで確認された元素は、As、Rb、Srの3種類である。また朝日遺跡の赤色物質のみに含まれる元素はAlである。下懸

朝日遺跡の
赤色顔料

下懸遺跡
と朝日遺跡

遺跡だけに確認された元素はない。ただし、蛍光 X 線分析の分析結果をみると、下懸遺跡の赤色顔料には Ti のピークが高く現れるものが多い傾向がみられた。今回の分析では、分析試料の性質から定量分析が行えなかったが、より詳細な分析を実施すると、Ti など含有量に違いが現れる可能性が推測される。

以上のことから、土器に塗布された赤色顔料の元素の組み合わせにおいては、地域および時期、使用される部位等による傾向は明確ではないことが判明した。

(4) まとめ

下懸遺跡出土の土器に塗布された赤色顔料と、ほぼ同時期の朝日遺跡出土の土器に付着した赤色顔料の元素の種類の調査と比較を行った。その結果、赤色顔料に含まれる元素は同一ではなく、As や Cu、Mn などの含まれかたに違いのあることが判明した。しかし元素の組み合わせと、塗布される部位や器種、使用された時期などに違いの要因を発見するには至らなかった。

今回の分析では、未調整の粉末試料による蛍光 X 線を用いた定性分析のみを行った。今後、赤色顔料の源材料の特定や精製方法、流通経路などの解明のためにも、蛍光 X 線回折による結晶構造の解析、定量分析など、より詳細な分析が必要となろう。(堀木真美子)

参考・引用文献

- 愛知県教育委員会 1982 『朝日遺跡 IV』210pp
財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1994 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 34 集 朝日遺跡 V』406pp.
財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2000 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 83 集 朝日遺跡 VI』406pp.
堀木真美子 2006 「名古屋市朝日遺跡出土の赤色顔料」『名古屋市文化財調査報告 69 埋蔵文化財調査報告書 54 朝日遺跡』(第 13・14・15 次) 233-240.
堀木真美子 2008 「パレススタイル土器の赤色顔料」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』8.53-64.

6 木簡の年代測定・樹種

木簡は樹種同定と加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を実施している。樹種同定は植田弥生氏 (パレオ・ラボ)、放射性炭素年代測定は山形秀樹氏 (同) により、それぞれ報告書が提出されているが、紙面の関係からここではこれらを池本が要約し、ここでまとめて報告する。

(1) 樹種同定の方法・結果

片刃の剃刃を用いて、材の横断面・接続断面・放射断面の薄い切刃を採取し、スライドガラスに並べてガムクロラルで封入した組織標本を作成した。これを光学顕微鏡で材構造を観察して同定する。

観察の結果、木簡はヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. であった。ヒノキは木簡として最もよく使われる樹種としても知られている (図 56)。

樹 種

(2) 放射性炭素年代測定

酸アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS 法）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を測定した。

表 9 に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値 - 25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値（yrBP）の算出は、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が 68%であることを意味する（表 9）。

(3) 暦年代較正

暦年代較正とは大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正し、より正確な年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて較正暦年代を算出する。

較正暦年代の算出に CALIB4.3（CALIB3.0 のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。

表 9 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代にした年代	
				暦年代較正值	1σ 暦年代範囲
PLD-1046 (AMS)	木筒(ヒノキ) A区NR02埋土1群	-23.7	1730 $\pm$ 30	cal AD 260	cal AD 255 - 300(54.6%) cal AD 320 - 345(32.4%) cal AD 370 - 380(11.3%)
				cal AD 280	
				cal AD 325	
				cal AD 335	

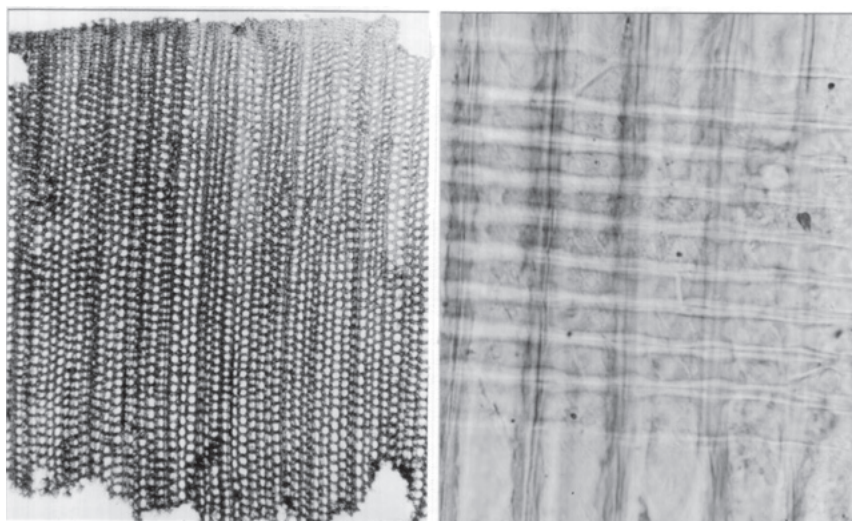


図 56 下懸遺跡木筒切片

カッコ内の百分率の値はその1 σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。

(4) 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行った。暦年代較正した1 σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が高い年代範囲に注目すると、PLD-1046の木片はcalAD255-300年(54.6%)が、より確かな年代値の範囲として示された。

(原文 植田弥生・山形秀樹、要約 池本正明)

参考・引用文献

- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の ^{14}C 年代』p.3-20.
 Stuiver,M.and Reimer,P.J. 1993 Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program Radiocarbon 35 p215-230.
 Stuiver,M.,Reimer,P.J.,Bard,E.,Beck,J.W.,Burr,G.S.,Hughen,K.A.,Kromer,B.,McCormac,F.G.,v.d.Plicht,J.,and Spurk,M. 1998 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration,24,000-0 cal Bp Radiocarbon,40 p.1041-1083.

7 鉛同位体

(1) 試料

D区SK25より出土した篋被付柳葉式銅鏃(1391)の鉛同位体分析を実施している。他遺跡出土銅鏃の分析(未報告)の比較資料となされたものである。分析を依頼した東京文化財研究所保存科学部からはすでに平尾義光氏と鈴木浩子氏の連名で報告書が提示されているが、ここでは下懸遺跡資料銅鏃のデータのみを抜粋して提示する。

(2) 分析法と結果

資料から微量(1mg以下)の金属を採取して、鉛同位体比測定用の試料とした。試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を、白金電極を用いて直流2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.2マイクログラムの鉛をリン酸-シリカゲル法でレニウムフィラメント上に載せ、サーモクエスト社製全自動表面電離型質量分析計MAT262に装着した。分析形の諸条件を整え、フィラメント温度を1200°Cに設定して鉛同位対比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定した鉛同位対比を表10に示した。

(原文 平尾義光・鈴木浩子、要約 池本正明)

表10 銅鏃の鉛同位体比

番号	出土地	処理番号	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
	下懸遺跡	00-950	17.738	15.544	38.397	0.8763	2.1647	HS1062
	誤差範囲		± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006	

第Ⅴ章

総括

1 主要遺構の変遷

第Ⅱ章で述べたように、今回の調査で確認できた遺構は弥生時代中期前葉～中葉(A期)、弥生時代中期末(B期)、弥生時代後期～古墳時代前期(C期)、古代～中世(D期)にまとまりが確認できるが、ここでは大まかな変遷をまとめておく。

A～B-1期(弥生時代前期～中期)

第Ⅱ章で報告したように、調査区のほぼ全域で旧河道(NR 01)を確認している。埋土は、現代の矢作川で採取される砂粒と類似する花崗岩に起因する粗粒砂で占められる。層序としては、灰色シルト層(今回の調査では上面を弥生時代後期以降の遺構検出面とした)の直下となる。この粗粒砂からは前半行程のE・B区の調査段階では出土遺物がほとんど得られなかったため、調査行程の関係でこれを部分的な掘削による層序の確認に留めてしまったが、後半行程のD区ではまとまった量の土器類が得られた。このため、D区は面的な確認を実施したが、NR 01の西岸はD区の中では検出できなかった。NR 01の西岸はE区または調査区外に存在するものと考えられるが、上記の理由からこれは確認できてはいない。

NR 01

B-2期(弥生時代中期後葉)

NR 01はE～B区周辺に灰色シルトの堆積が急速に進み、E～B区は微高地の縁辺部となる。調査区内では遺物は散在するが遺構は希薄である。E区では土器棺墓(SZ 01)が確認されており、墓域として使用されていたものと考えられるのか。

墓域？

C-1期(川原上層Ⅰ・Ⅱ式≒八王子古宮式・山中式)

A区ではNR 01が確認できる。B区SD 18は幅3mを超える大規模な溝だが、掘削後にあまり時期を隔てずに埋没が進む。環濠かもしれない。次段階にB区SU 01が分布する範囲では、幅が広く形状も不安定となっている。SD 18の拡幅が、SU 01の形成によるものでないのであれば、やや特殊な用途を付加された部分であったとも想定できる。なお、SD 18を環濠と理解した場合、環濠の内側に想定されるC区以北で当該期の竪穴建物などの遺構がほとんど確認できていない事も問題となる。しかし、出土遺物は散見でき、この時期の遺構がC-2期以降に削平された可能性も否定できない。

環濠？

C-2期(川原上層Ⅲ式1・2段階≒挟間Ⅰ式)

今回の調査では遺構の検出数が最も多い。遺構は調査区全域で確認でき、D区では竪穴建物が集中する。B区ではSD 18の埋没が進み、上面に大規模な土器集積遺構SU 01が形成される。これに近接して方形周溝墓と考えられるC-2～3期に属するSZ 01～

方形周溝墓

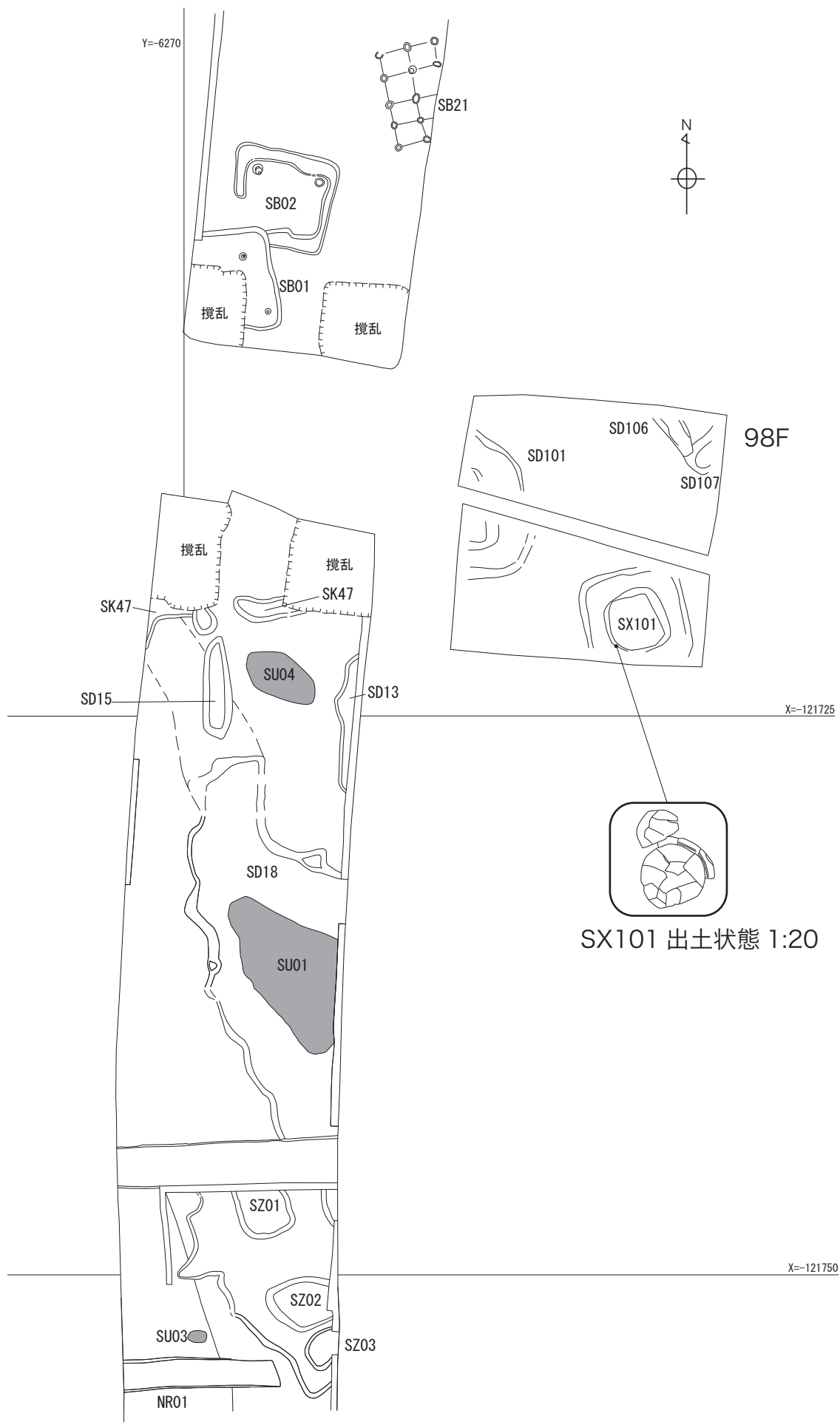


図 57 00B・C区と98F区

03 が形成される。これらは出土遺物も乏しく形状も不整形で、方形周溝墓と理解するには若干の躊躇も否めない。しかし、下懸遺跡に近接する上橋下遺跡（松田他 2007）や神ノ木遺跡（神取 2004）でも不整形な周溝墓が報告されており、これらに類似する方形周溝墓と理解し、NR 01 に近接して墓域が面的に展開する姿を想定しておきたい。なお、C-2 期の NR 01 は、A 区では埋土 3・4 群、B 区の埋土からもこの時期の遺物が出土しており、NR 01 は急速に埋没が進んでいるものと考えられる。

また、B 区では土器集積遺構が 4 か所確認できた。大規模な SU 01 と小規模な SU 02～04 に区分できる。出土遺物に甕と小型鉢が高い比率を占めやや特殊な内容となる SK 29 も、後者に含めても良いのかもしれない。これらを墓域に近接した位置に特徴的に存在することを評価して、これに関連した遺構群と理解したい。なお、この想定が成り立つのであれば、SZ 01～03 は C-2 期には存在している可能性が高い。

次に居住域だが、C-2 期に属する竪穴建物は D 区で確認されているのみである。ただし、E・C 区にも時期不明の竪穴建物が展開しており、分布域を D 区に限定できる可能性は低い。

C-3 期（川原上層Ⅲ式 3 段階・Ⅳ式 ⇨ 挟間Ⅱ・Ⅲ式）

A 区では NR 01 が継続し埋土 2 群が対応するが、B 区ではこれが確認できない。B 区の土器集積遺構は SU 01 のみが継続する。新たに登場する土器集積遺構は確認できていない。方形周溝墓の帰属時期が不明確だが、墓域としての性格は継承されているものと理解しておく。

竪穴建物は C 区で確認されているが、E・D 区にも時期不明の竪穴建物が展開しており、分布を C 区に限定できる可能性は低い。一応、C-2 期が D 区に、C-3 期が C 区に重心があることは指摘できる。また、C 区 SD 01 は居住域に掘削された溝で、同じ C-3 期に属する SB 04 と重複する。C-3 期の中でも居住域が再編されているのかもしれない。

竪穴建物では幅広い周溝状の落ち込みを持つものが特徴的となっている。C-3 期に限定される状況ではないが、これらは C 区で 3 基、D 区で 1 基が確認されている。C 区 SB 07 は残存状況が比較的良好で、周溝状の落ち込みは掘方でこれを埋め戻して床面を形成する状況が確認できた。ところで、本センターでは平成 10 年度に鹿乗川改修工事に伴う送電用鉄塔の移築に先立つ発掘調査（松田 2007）を実施し、A～H 区と命名された 8 か所の調査を実施している。このうち、F 区（以下、98 F 区）が今回の B・C 区に近接しているが、ここで検出された SX 101 も同様の竪穴建物である可能性も考えられる。なお、この類の竪穴建物は寄島遺跡（岡久 2008）でも確認されており注目できる。

D 期（古代～中世）

今回の調査区では E 区を中心として性格不明な遺構がわずかに確認できるにすぎない。出土遺物も乏しいが、8 世紀後半～13 世紀に属する資料に一応のまとまりを見ることができ。灰釉陶器に墨書土器が散見できるのも特色となる。分布範囲も限定的で、C・D 区では遺構はおろか当該期の遺物もほとんど出土していない。E 区のさらに北側に古代～中世の遺構が広がることも予測できるが、下懸遺跡のすぐ北側に広がる寄島遺跡では古

土 器
集 積 遺 構

竪 穴 建 物

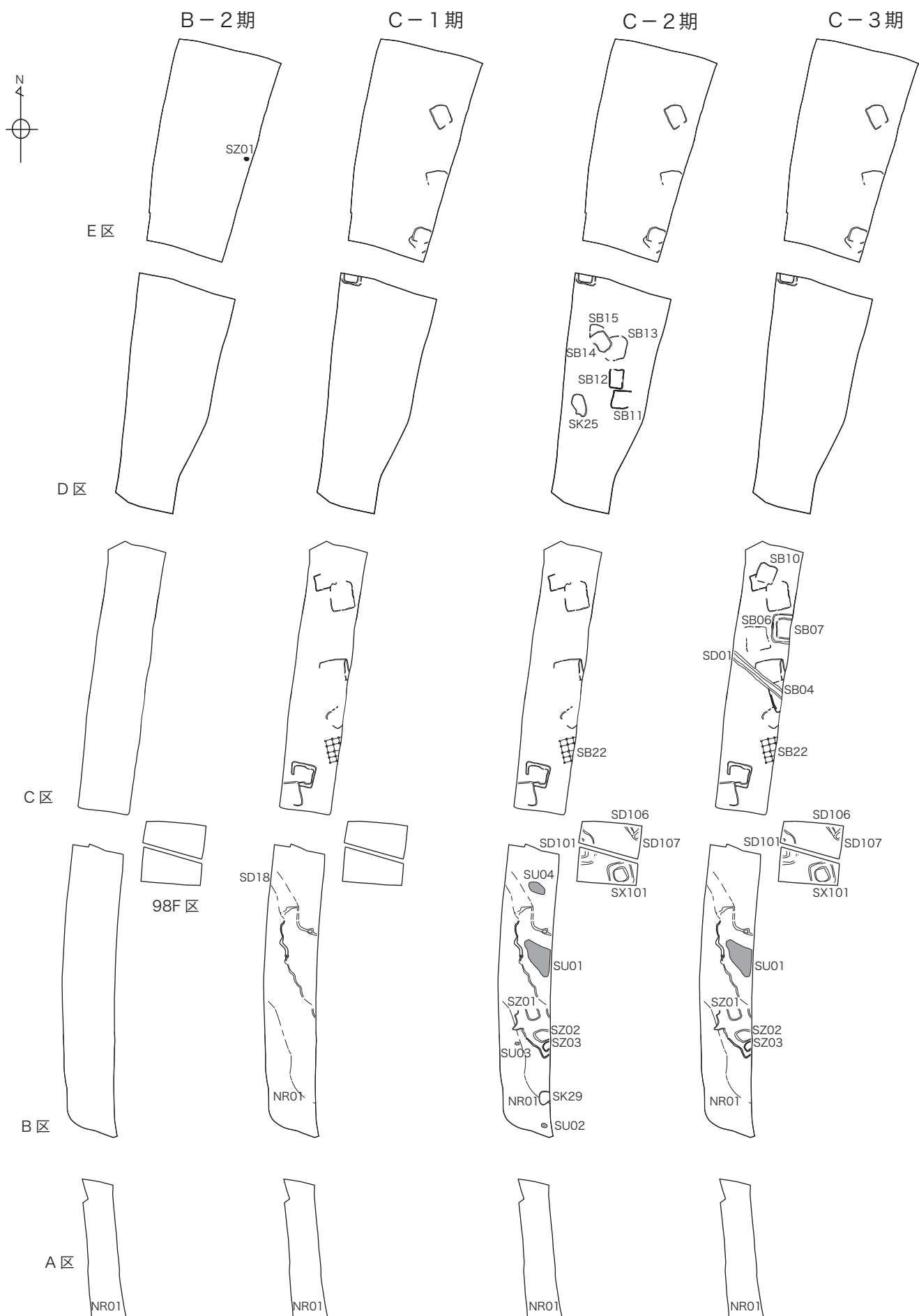


図 58 主要遺構変遷図

代～中世の遺構・遺物は乏しい状況となっている（岡久 2008）。A・B区のNR 02は埋没が進み、この段階ではわずかな窪みとして残存するにすぎないが、ここからは木簡（1394）が出土しており注目できる。木簡については後述する。（池本正明）

参考・引用文献

- 松田 訓他 2007 『上橋下遺跡・鹿乗川流域遺跡群』愛知県埋蔵文化財センター調査報告第145集
 神取龍生 2004 「神ノ木遺跡」『新編安城市史10 資料編 考古』
 岡久雅浩 2008 「寄島遺跡」『平成19年度 愛知県埋蔵文化財センター 年報』（財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター

2 出土土器の検討

今回の調査では弥生時代中期～古墳時代初頭の遺物にまとまりを見ることができた。ここでは、出土量が安定しているB期とC期について、資料の特色を観察する。

B期（弥生時代中期中葉～後葉）

今回の調査区全域で検出面の下層から確認できたD区NR 01の出土資料がある。第II章で報告しているように、これらは河道の埋土から得られたもので、出土状況に一括性が保障されたものではない。ただし中期後葉に属する資料については数量も多く、それ以外の資料と比較すると器面にローリング痕が顕著ではない傾向にある。また、出土位置もD区に集中するなど、一応のまとまりを想定することもできる。

本書第2章で述べている様に、今回検出した遺構は基本的には灰色シルトの上面で確認している。B期の土器を含むNR 01は灰色シルトの下層から検出できる粗粒砂である。これらの位置関係を、図2に示す各調査区の基本層序のうちE区で説明する。灰色シルトは3・4層、NR 01は5層で、図示地点での3・4層を合わせた厚さは50cm前後となっている。

次に、灰色シルトとNR 01の出土遺物を検討する。灰色シルトは基本的には無遺物だが、E区では若干の遺物が出土している。ここでは灰色シルト上面に構築されたE区SZ01から出土した1248と、灰色シルト中から出土した1348、D区NR 01から出土した1104と比較したい。これらはいわゆる古井（・長床）式土器の範疇で捉えられるが、形状では肩部の突出や口縁部の長さに差異が確認でき、文様では1248のようなピッチの短い波状文は新しい様相とも考えられるが、これらに大きな違いは確認できない。D区NR 01のその他の資料に着眼すると、1163・1164のような古井式初期に存在するとされる倒鐘形の甕も含まれている。一方、凹線文系土器に注目すると、一定量を占めている。器種も広口壺・細頸壺・甕・鉢・高杯と主要なものは揃っており、これらの出現率の高さには若干の不安は残る。しかし、出現率の差を時期差だけでなく遺跡差とする意見（鈴木 2001）もあり、D区NR 01もこれに矛盾するものではなからう。

以上の様に、灰色シルトの下層で確認できたD区NR 01資料は一括性に若干の疑問が存在するものの、実体としては古井式段階の様相を示していると言えよう。そして、灰色シルト上面で検出したE区SZ 01資料の1248との大きな差は確認できない。

灰色シルト

ところで、灰色シルト層は上面を今回の遺構確認面とした様に、谷地形となる A 区を除く調査区全体に広がっている。上記した様に、計測した E 区では厚さが 50 cm 前後となる比較的安定した土層である。一方、灰色シルトの下層（NR 01）資料を観察すると、灰色シルトは弥生時代中期後葉のある短期間で面的に堆積していることが考えられる。類似した状況は西尾市岡島遺跡でも確認できる（池本他 1993）が、矢作川流域で広く観察できる状況か否かは今後の資料増加を待ちたい。

C 期（弥生時代後期～古墳時代前期）

今回の調査で最もまとまった量の出土遺物を得ている。ここでは、当該期の下懸遺跡資料を鹿乗川流域遺跡群と豊田市川原遺跡と比較したい。

鹿乗川流域遺跡群は安城市東部から岡崎市南部の東西約 0.75Km、南北約 2.7Km の範囲に広がる広大な遺跡群である。弥生時代後期後半～古墳時代前期に最盛期を迎えている。



図 59 鹿乗川流域遺跡群

遺跡の内容や範囲は不明確な部分が多いが、「複数の遺跡が別々の役割を持ち、墓域も含めて全体として大きな共同体を構成した（川崎 2007）」と、理解されている。現在の理解では鹿乗川流域遺跡群の最南端は亀塚遺跡とされ、下懸遺跡との距離は約1.4Kmとなる。

鹿乗川流域遺跡群の出土遺物では、まず線刻土器の多さが指摘されるが、下懸遺跡でも小片も含めると、今回小片を含めて約10点を報告している。次に注目されるのは外来系土器の出現率であろう。外来系土器の定義は厳密には困難だが、鹿乗川流域遺跡群では各遺跡で確認されている。興味深い事に分布の濃淡が存在し、優位となる中狭間遺跡出土資料を個体識別法によりカウントすると全体量の5%を占めるとも報告されている（川崎他 1999）。

三河はハケメ調整のく字状口縁台付甕が主体となる地域である。実際、鹿乗川流域遺跡群や下懸遺跡でもく字状口縁台付甕が多く出土している。一方、数量は乏しいが、平底の甕が存在していることに注意しておきたい。これらは、V様式系タタキ甕やそれを模したものとして理解されている平底ハケメ甕（鈴木 1997）となる。

タタキ甕は鹿乗川流域遺跡群では数量こそ乏しいものの各地から一定比率出土している。中でも本神遺跡では、この類いのタタキ甕のうち最も古く位置付けられる一群が集中的に出土しており、「その赤みを帯びた独特の色調から、本神遺跡で製作された叩目甕が沖積地の各集落へ配布された可能性（川崎 2007）」すら指摘されている。

タタキ甕

一方、平底ハケメ甕も若干量が各地で出土している。これらはハケメ調整に通常（図61-345）と比較して幅広く浅い原体も多用され（図61-383）、一部には棒状工具を用いて同様の視覚的効果を得ている資料（図61-655）もある。こうした幅広いハケメ調整には独自の原体を使用しているものと考えられ、外面のタタキ調整を伝統的なハケメ調整を使用して視覚的に真似たものであったと考えられる。ここではさらに、この一群がタタキ甕が浸透した地域に存在するにふさわしい器形であることを評価して、これらを「鹿乗型甕」と仮称したい。

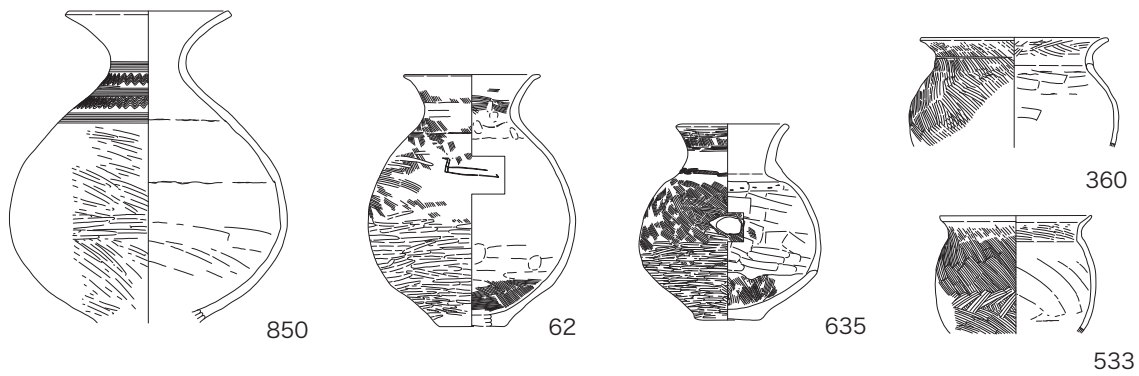
鹿乗型甕

以上のように、この時代の鹿乗川流域遺跡群と下懸遺跡の特徴としてあげられるキーワードは、線刻土器・外来系土器・タタキ甕・鹿乗型甕などとなる。なお、前述した幅広い周溝状の掘方を持つ堅穴建物もこれに含めて良いのかも知れない。

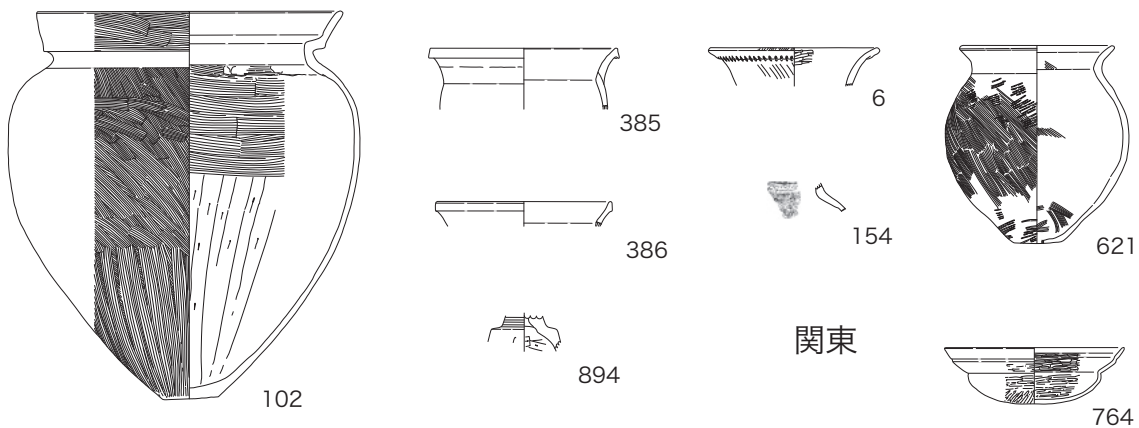
次に、下懸遺跡の内容を豊田市川原遺跡と比較する。ここでは墓域から出土した一括資料を中核として、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器を川原上層Ⅰ式～Ⅲ式の様式群と区分した報告がなされている（赤塚 2001）。なお、このうち川原上層Ⅲ式が主にここで話題としている時期とほぼ重なっている。川原上層Ⅲ式の内容を下懸遺跡や鹿乗川流域遺跡群と比較すると、線刻資料が欠落し外来系土器の出現率も極端に下がる状況にある。平底甕は確認されておらず、全て台付甕と報告されている。つまり、川原遺跡の在地的・伝統的傾向を保持するスタイルに対して、鹿乗川流域遺跡群や下懸遺跡は在地的・伝統的傾向をベースとしながらも、これにキーワードとして列挙した特徴が付加されている事が指摘できるのである。（池本正明）

引用・参考文献

鈴木とよ江 2001 「凹線文系土器の波及をめぐって」『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財愛知県埋蔵文化財センター調査報告第91集



東日本



関東

北陸

畿内

0 10cm

図 60 下懸遺跡の外来系土器

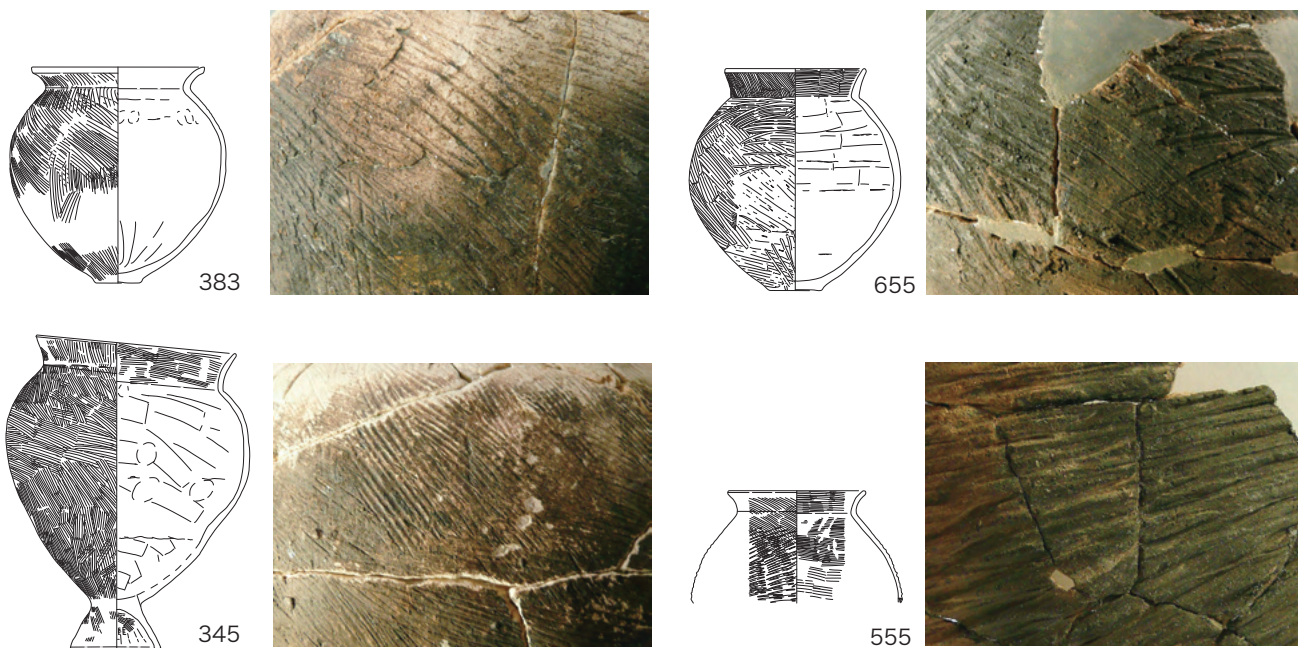


図 61 甕の外表面調整

- 池本正明他 1993 『岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡』愛知県埋蔵文化財愛知県埋蔵文化財センター調査報告第43集
- 川崎みどり 2007 「愛知県安城市の弥生時代後期遺跡群について」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』
- 赤塚次郎 2001 「川原上層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式の設定」『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財愛知県埋蔵文化財センター調査報告第91集
- 鈴木とよ江 1997 「矢作川流域における弥生時代後期～古墳時代前期の土器について」『考古学フォーラム』9
- 川崎みどり他 1998 『本神遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第4集

3 弥生後期～古墳初頭の下懸出土木製品に対する評価

ここでは主として、下懸遺跡出土木製品のうちNR 02の埋土2～5群について、いくつかの分析を試みる。前述のように埋土2～4群と埋土5群の木製品には、わずかに時期的な隔りがあることから、本来ならば分けるべきところではあるが、埋土5群の木製品はわずか5点（うち、実測して掲載したのは2点）しかないことから、これをふくめても統計的にさほど差がでないために、ここではまとめて分析する。

まずは埋土1群もふくめた全木製品について、層位別に樹種組成と器種組成をみていく（図62）。

樹種組成では、埋土2～4群で針葉樹と広葉樹の割合がほぼ拮抗しており、さらに針葉樹・広葉樹それぞれにみられる樹種の比率もきわめて似通った状況であることがわかる。すなわち、針葉樹ではヒノキとマキ属が大半を占め、広葉樹ではクリ・コナラ節・クヌギ節が多い。弥生～古墳前期には、一般に広葉樹のなかでアカガシ亜属が多数を占める遺跡が多いのだが、本遺跡ではアカガシ亜属は必ずしも多いとはいえず、むしろクリが多数を占めるのは珍しい。

全体では、針葉樹11種、広葉樹16種の計27種の樹種がみられるが、ヒノキ・マキ属・スギ・クリ・コナラ節・クヌギ節・アカガシ亜属・シイノキ属など特定の樹種に集中する傾向が強く、1点ずつしか出ていない樹種はトチノキ以下7種と、全体の点数（281点）の割にやや少ない。朝日遺跡など濃尾平野低地部では、集落の近辺に日常的に利用可能な森林が少ないため、遠隔地から木材を調達するとともに、付近に成育する、ありとあらゆる樹種（針葉樹16種・広葉樹39種）を用いる傾向があるが、本遺跡では木材の供給源である碧海台地が集落のすぐ西に控えているため、木材の利用にあたって、意識的に樹種の選択をおこない得た可能性がある。この点は、濃尾平野縁辺の鳥居松段丘崖に立地する春日井市勝川遺跡の樹種傾向（針葉樹10種・広葉樹13種）と似ている（樋上 2003）。

器種組成でも、埋土2～4群はほぼ似通った傾向を示す。丸棒・角棒・板・分割材・残材・丸太といった製品群以外が多く、製品のなかでは掘削具・建築材（柱をふくむ）・杭がめだつ。特に掘削具と容器に未成品があることは、この地で古墳前期に木製品生産をおこなっていたことを示す重要な手がかりとなる。ただし、工具が少なく、特に斧柄が全く出土していないことから、木製品の製作に関わる工具類は作業場と別の場所で保管していた可能性がある。また、柱にはあきらかに堅穴建物用と掘立柱建物用があり、後者には装飾性を意識したもの（1557）も認められる。直径50cmにおよぶ柱が想定される台輪（1441）も出

全木製品中の
樹 種 ・
器 種 組 成

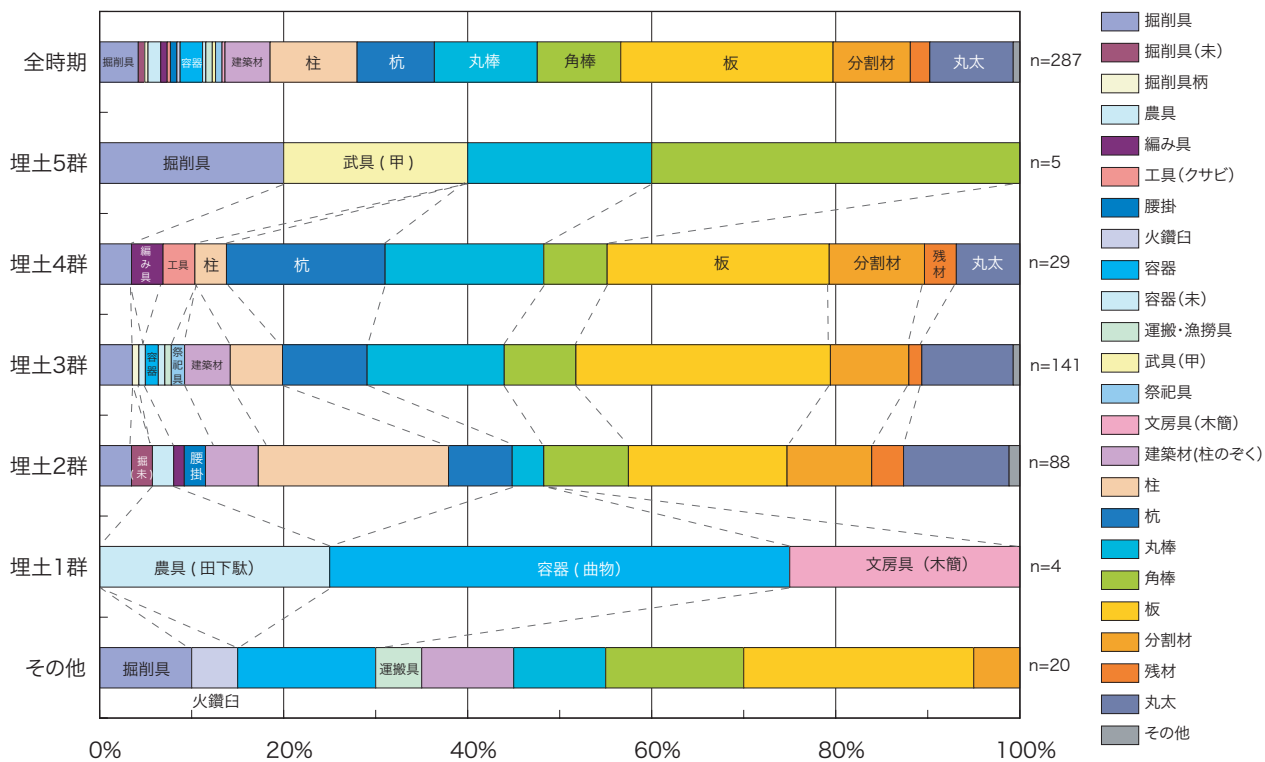
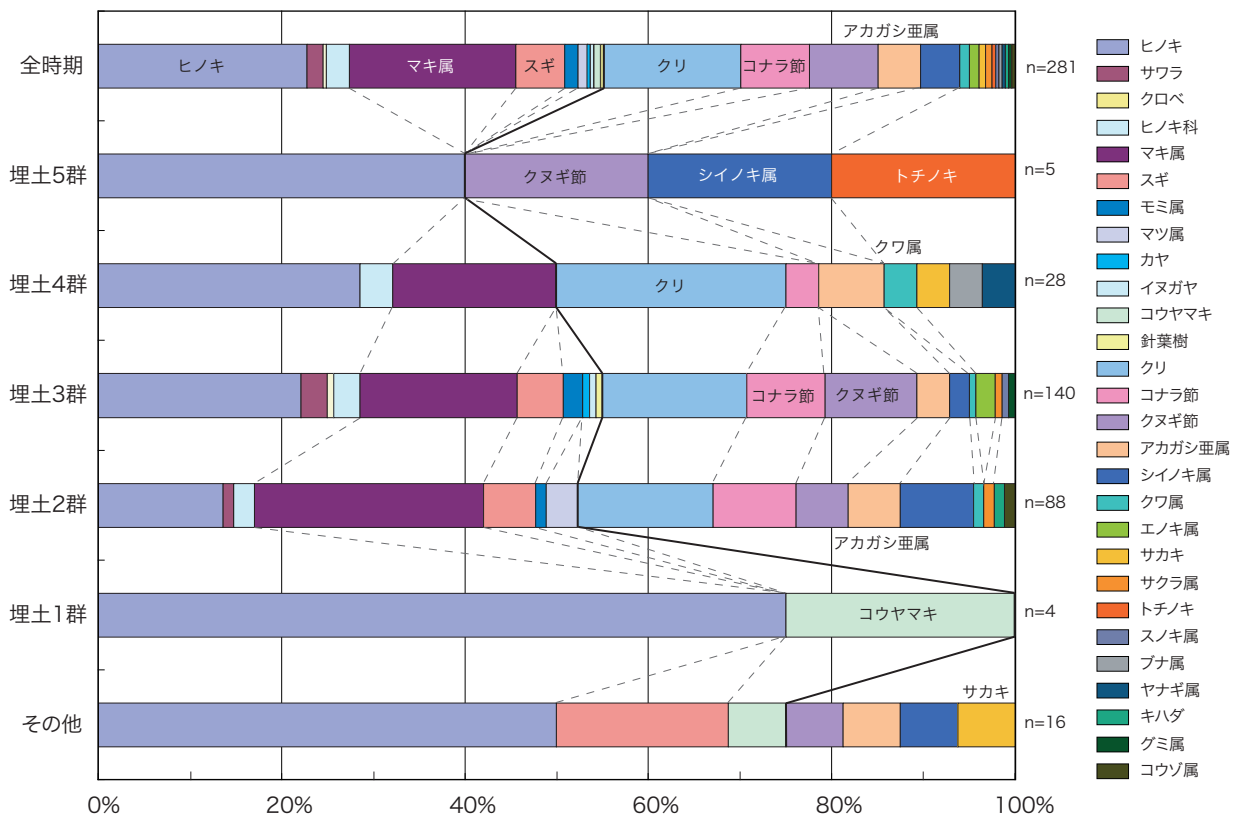


図 62 層位別の樹種・器種組成グラフ

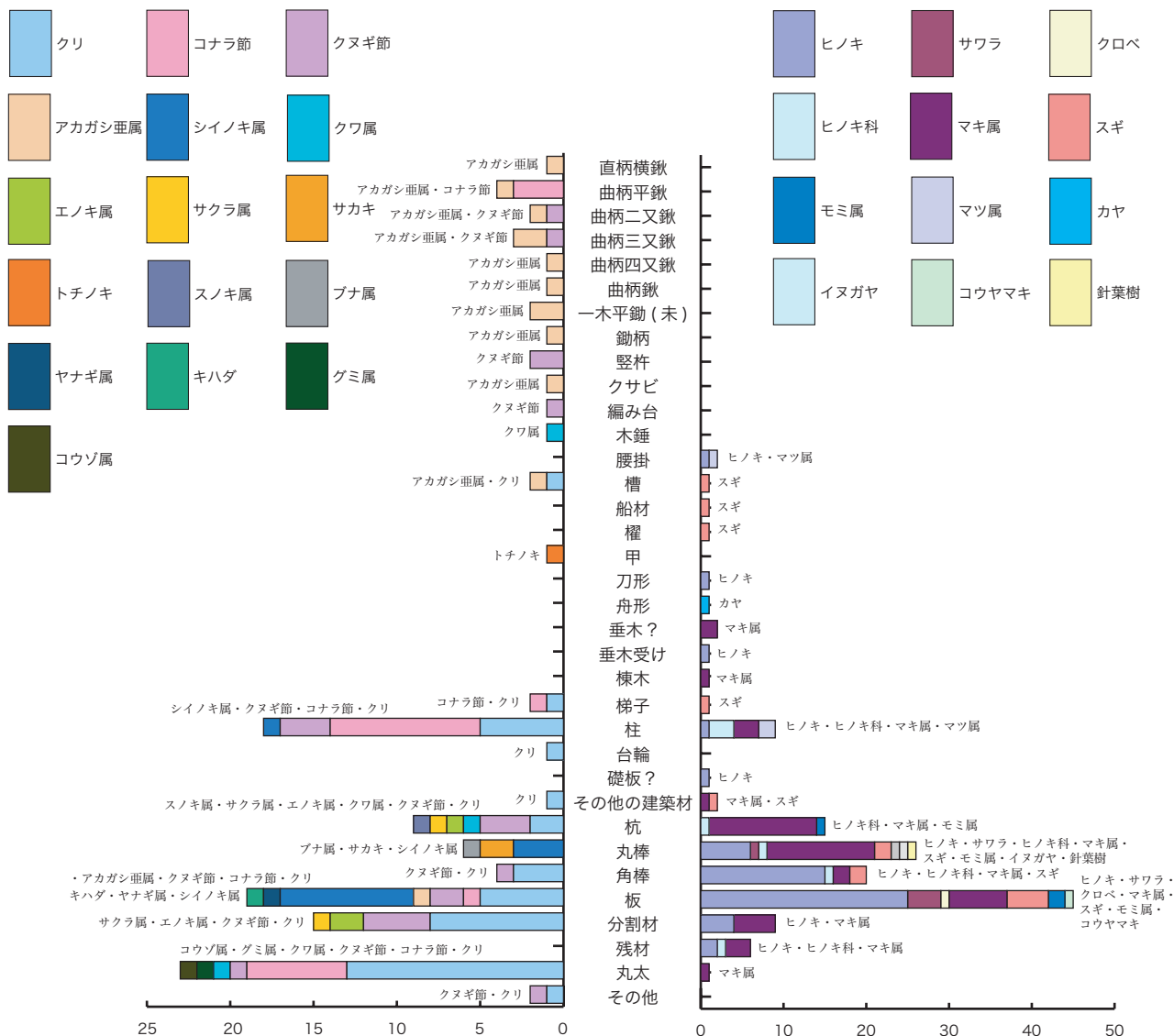


図 63 器種別樹種組成グラフ

土していることから、一色青海遺跡の大型掘立柱建物クラスの巨大な建物が復元できる(愛知県埋蔵文化財センター 2008)。今後、本遺跡に近接する碧海台地の縁辺から、当該期の首長居館に相当する大規模な掘立柱建物群が見つかる可能性はきわめて高い。

埋土 5 群の甲片はきわめて装飾性が高く、同様の甲は弥生後期の静岡県浜松市伊場遺跡(浜松市教育委員会 2002)など全国的にも類例が少ないことから、弥生後期初頭段階にはすでに有力な首長がこの地に存在していたことを強く示唆している。

埋土 1 群では、習書木簡の出土が注目されるが、ここでは詳しく触れない。木簡以外は田下駄・曲物と、奈良時代に一般的に認められる木製品群である。

以下、埋土 2～5 群の木製品について、さらに分析を進めていく。

図 62・63 をみると、器種によっては樹種傾向が極端に偏る傾向があることがわかる。掘削具・農具では、やはりアカガシ亜属が多く、クヌギ節・コナラ節が続く。ただ、その

器種別の
樹種組成

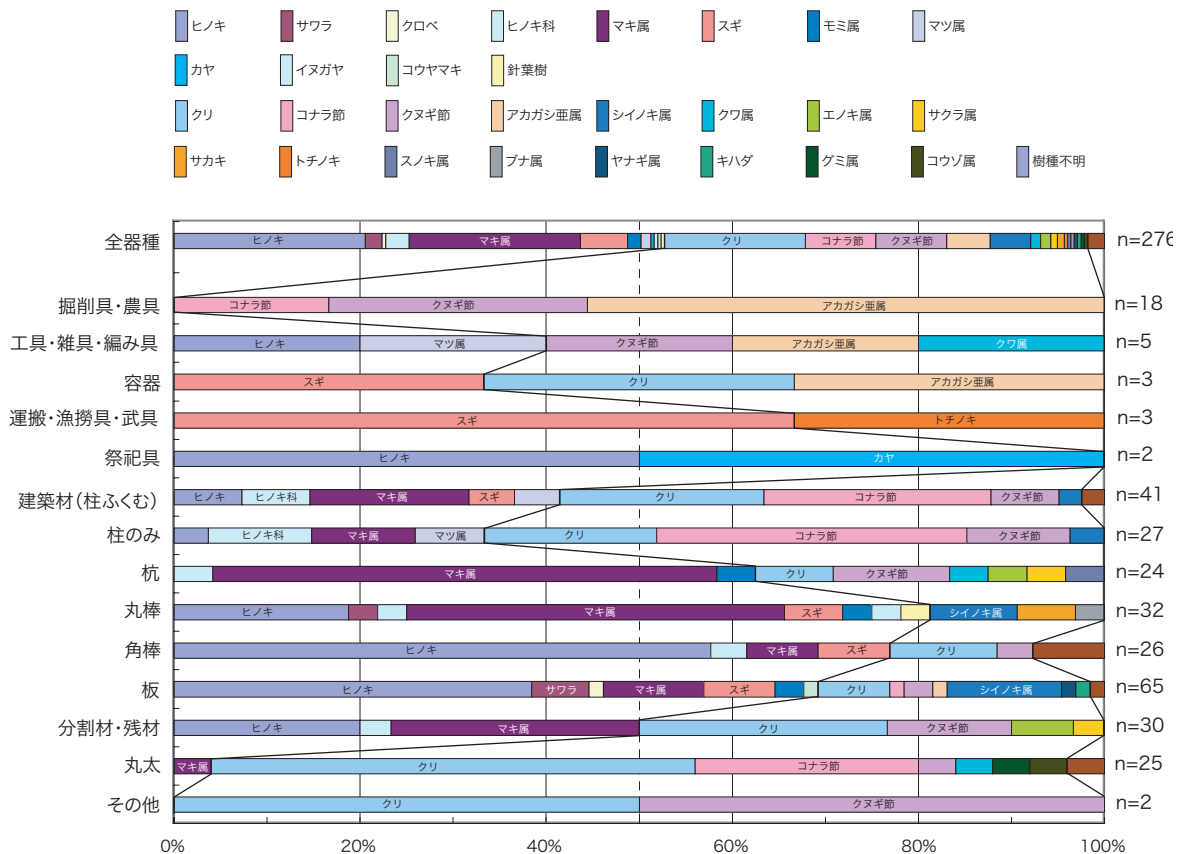


図 64 器種（用途）別樹種組成グラフ

なかでも曲柄平鋬のみはコナラ節が多い。これは濃尾平野と共通する用材選択である（樋上 2002）。

建築材全体では針葉樹と広葉樹がほぼ拮抗しており、柱のみでは広葉樹（特にコナラ節）が多い。

杭は針葉樹、特にマキ属を多用する。

棒・板は針葉樹が多く、丸棒ではマキ属、角棒・板はヒノキが多い。

丸太はほとんど広葉樹で、クリ・コナラ節が多いのに対して、分割材・残材ではヒノキ・マキ属もめだつ。

樹種別の器種組成

図 64 は、樹種別の器種組成グラフである。針葉樹ではマキ属・スギ、広葉樹ではクリ・クヌギ節のように、さまざまな用途に分散する樹種と、ヒノキ・コナラ節・アカガシ亜属・シイノキ属のように、比較的特定の用途に集中する樹種に分かれる傾向が認められる。

なかでもアカガシ亜属は、朝日遺跡が掘削具・掘削具柄・農具・工具・雑具・容器・食事具・運搬具・威儀具・建築材・杭・土木材など、きわめて多用途であるのと対照的である（樋上 2007）。特に本遺跡では、掘削具（一木平鋬）などの未成品こそあるものの、クリ・コナラ節・クヌギ節には多く認められる丸太や分割材に、アカガシ亜属が全くないことから、近接する碧海台地の森林にはアカガシ亜属の大径木（樹幹の直径が 60cm 以上）が、さほど多くなかったと思われる。

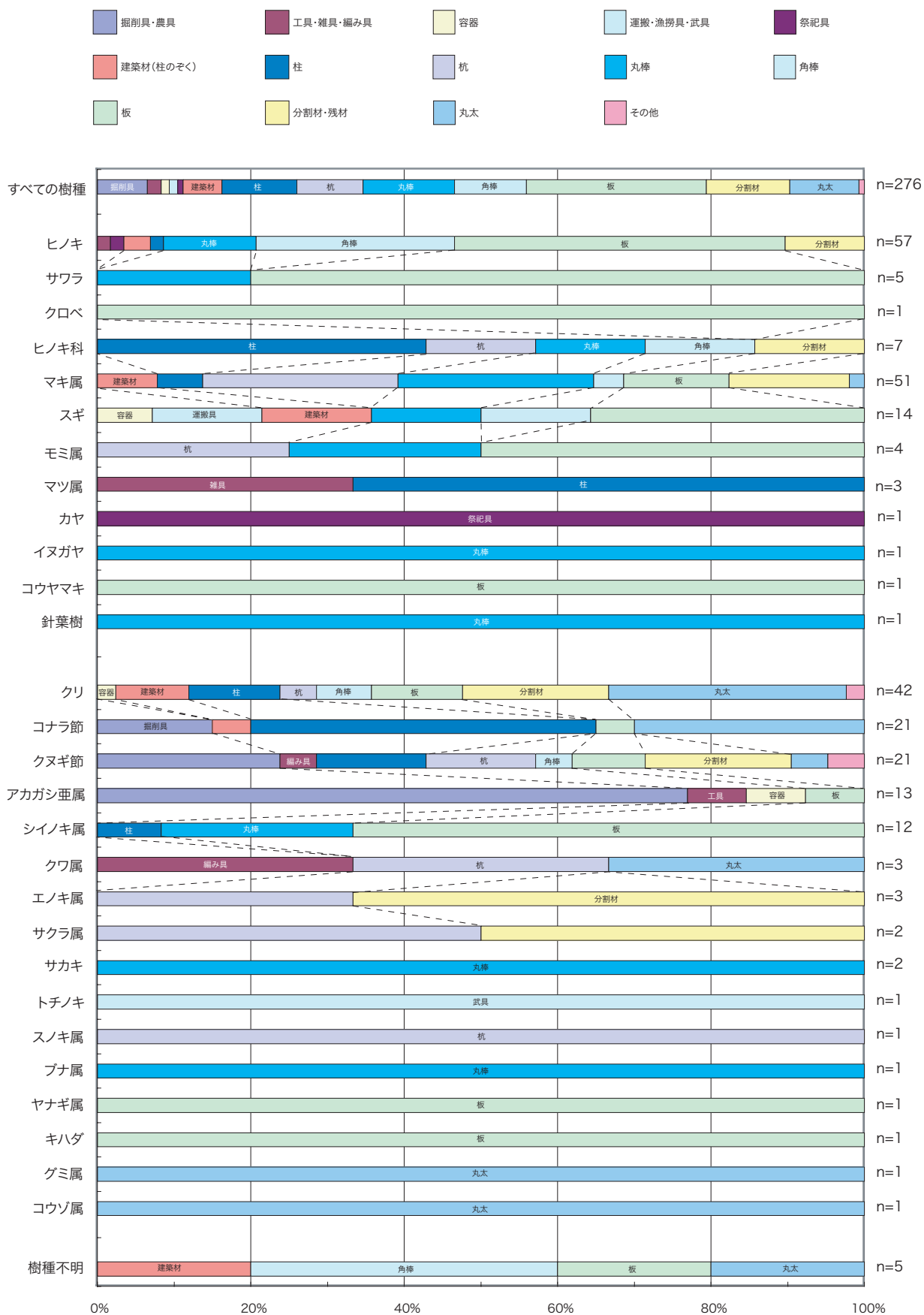


図 65 樹種別器種組成グラフ

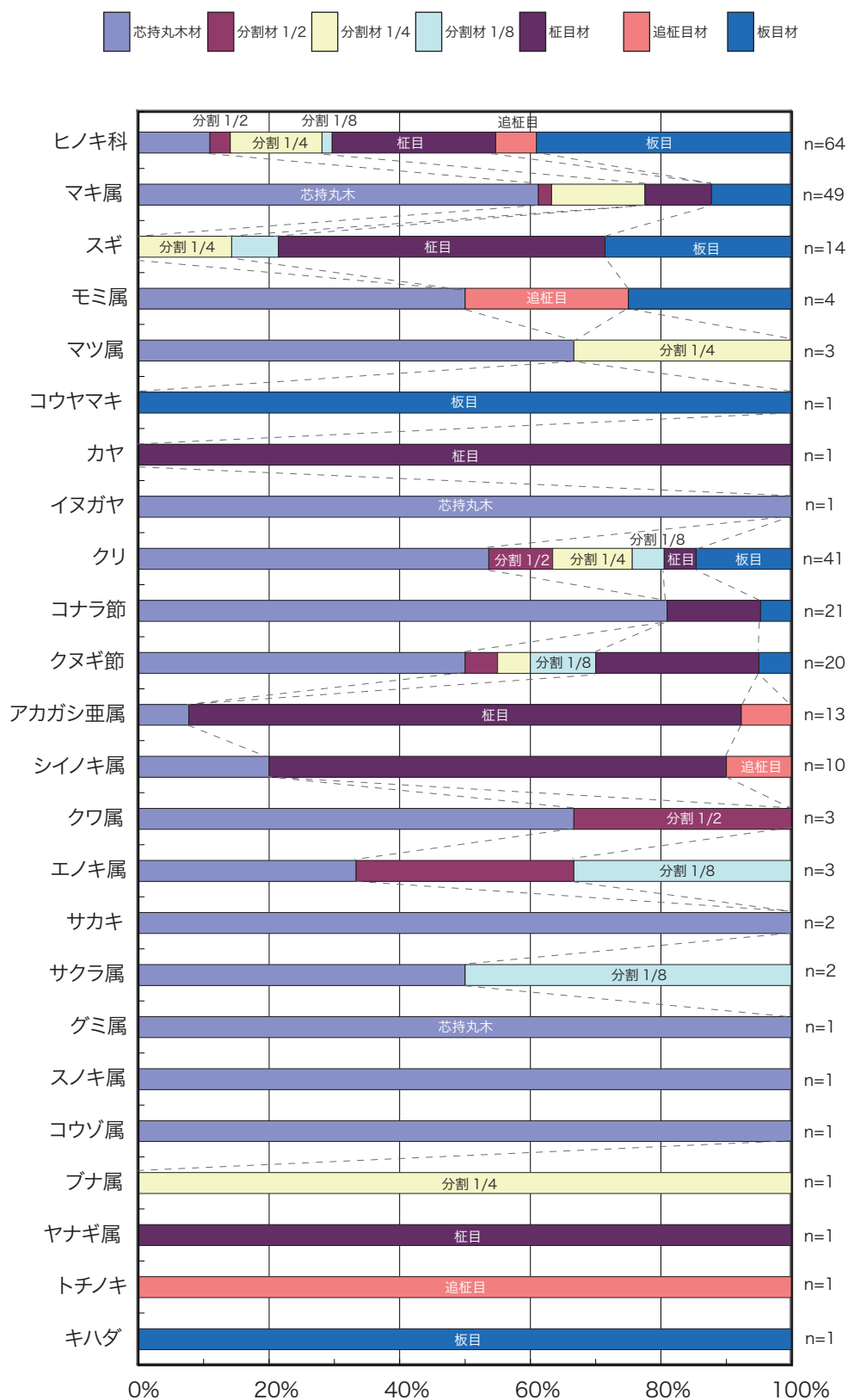


図 66 樹種別木取りグラフ

本遺跡をふくむ古井遺跡群が立地する安城市域における碧海台地縁辺部の開発は、縄文晩期の堀内貝塚に始まり、弥生中期以降、特に活発化することから、弥生後期～古墳前期には、台地上が本来の自然植生であるアカガシ亜属主体の常緑広葉樹林から、クリ・コナラ節・クヌギ節を主体とする落葉広葉樹林(二次林)へとすでに遷移していた可能性が高い。

図 66 のように、全体的には芯持丸木がめだつ。なかでも、マキ属・クリ・コナラ節・クヌギ節など、ヒノキ科に次いで多い樹種で、芯持丸木が多い。それに対して、ヒノキ科・スギ・アカガシ亜属・シイノキ属は芯持ちのまま用いる例が少ない。以上のことは、次に述べる材の復元径とも関わってくる。

今回報告する木製品では最外周の年輪をもとに、針葉樹 73 点・広葉樹 87 点について、遺存部分についての復元径を割り出すことができた。これを元に 5cm 刻みのグラフとしたのが図 67 である。

一見して、針葉樹ではマキ属が直径 5cm 未満、広葉樹ではクリ・コナラ節・クヌギ節は直径 15cm 未満に分布のピークがあることがわかる。前述の木取りと関連づければ、以上の 4 樹種は材径が細いゆえに芯持ちのまま使わざるを得なかったのか、あるいは芯持ちのまま用いることを前提に細い材を使っていたと考えられる。マキ属・コナラ節では直径 25～45cm の中径木、クリ・クヌギ節では 20～55cm の中径木と 60～75cm の大径木も認められることから、これらの樹種では、用途に応じて材径・木取りを使い分けていた可能性が高い。このことは、ヒノキ科・スギについても同様である。ただ 1427-1 のように、直径わずか 20cm のコナラ節の丸太をさらにクサビで分割しようとしていることから、本遺跡の近辺に限っていえば、必ずしも使用可能な太さの木材が潤沢にあったとはいえないのかもしれない。

それに対し、アカガシ亜属は点数こそ少ないが、復元径が 57cm と 100cm と、ほぼ大径木の範疇にふくめられる。このほか、直柄横鋏(1546)や一木平鋏(1550)は柱目材で幅 20cm 程度あることから、少なくとも直径 40cm 以上の中径木ないしは大径木から採られていることがわかる。このように、アカガシ亜属はクサビ(1427-2)を除けば、中・大径木を分割して利用するのが原則であったといえる。

次に針葉樹 73 点・広葉樹 86 点について、残っている部分の年輪数と年輪幅を計測し、それをもとに復元できる材径までの総年輪数を算出した(図 68)。

結果は、復元材径とほぼ同様の傾向といえる。マキ属・クリは 10～20 年をピークとする正規分布を示すが、マキ属では 50～150 年、クリでは 70～90 年にも分布域が認められる。ヒノキ科は 16 年から 415 年までの幅があり、うち 40～50 年と 90～100 年がやや多い。スギは 40 年から 200 年の間に点々と分布する。コナラ節は 30～40 年を中心とする正規分布で最大が約 100 年、クヌギ節は 10～20 年が最も多いが、60～170 年の間にも分布域がある。アカガシ亜属は 85 年と約 200 年である。

全体に針葉樹・広葉樹とも樹齢 40 年未満の若い木が多く、そのなかに樹齢 60 年以上のヒノキ科・マキ属・スギ・クヌギ節・クリ・アカガシ亜属などが混じっている。なか

樹 種 別
の 木 取 り

樹 種 と
復 元 材 径

樹 種 と
復 元 年 輪 数

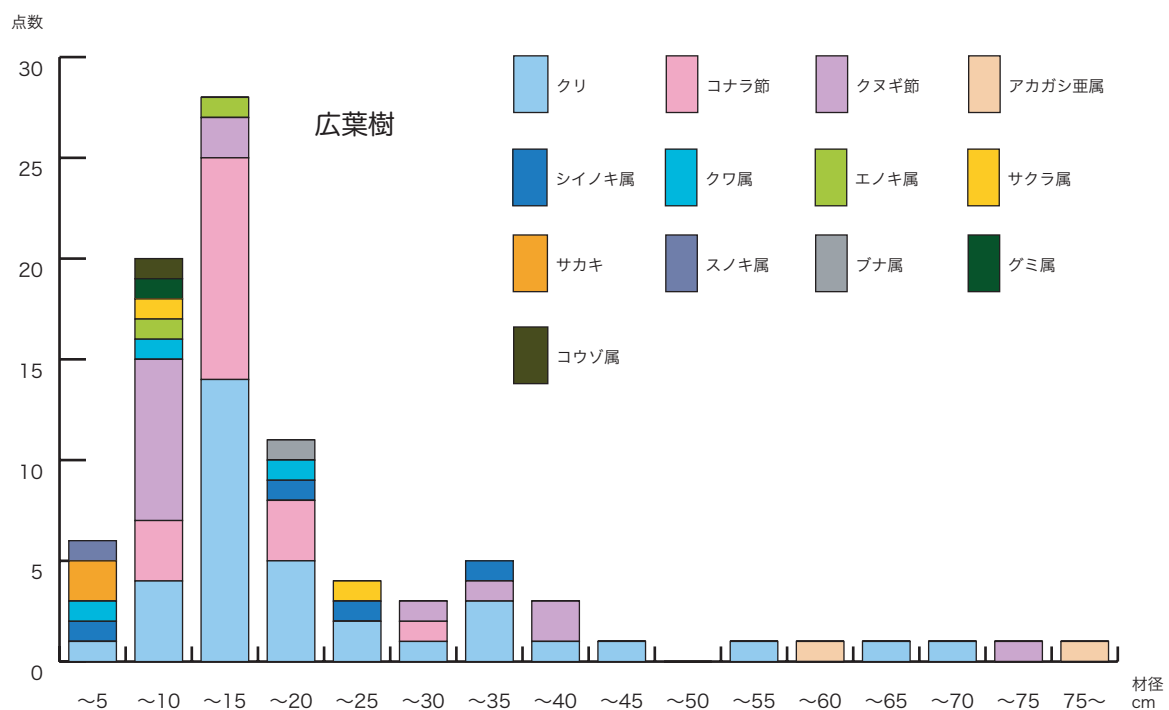
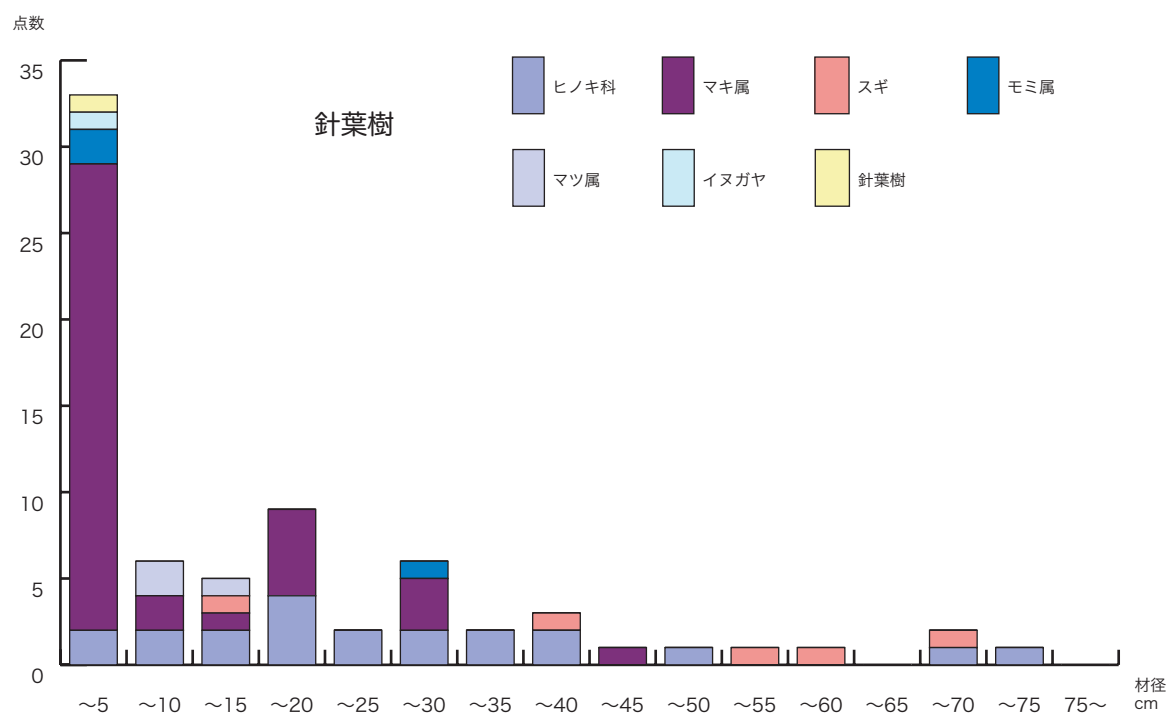


図 67 針葉樹 / 広葉樹別復元径グラフ

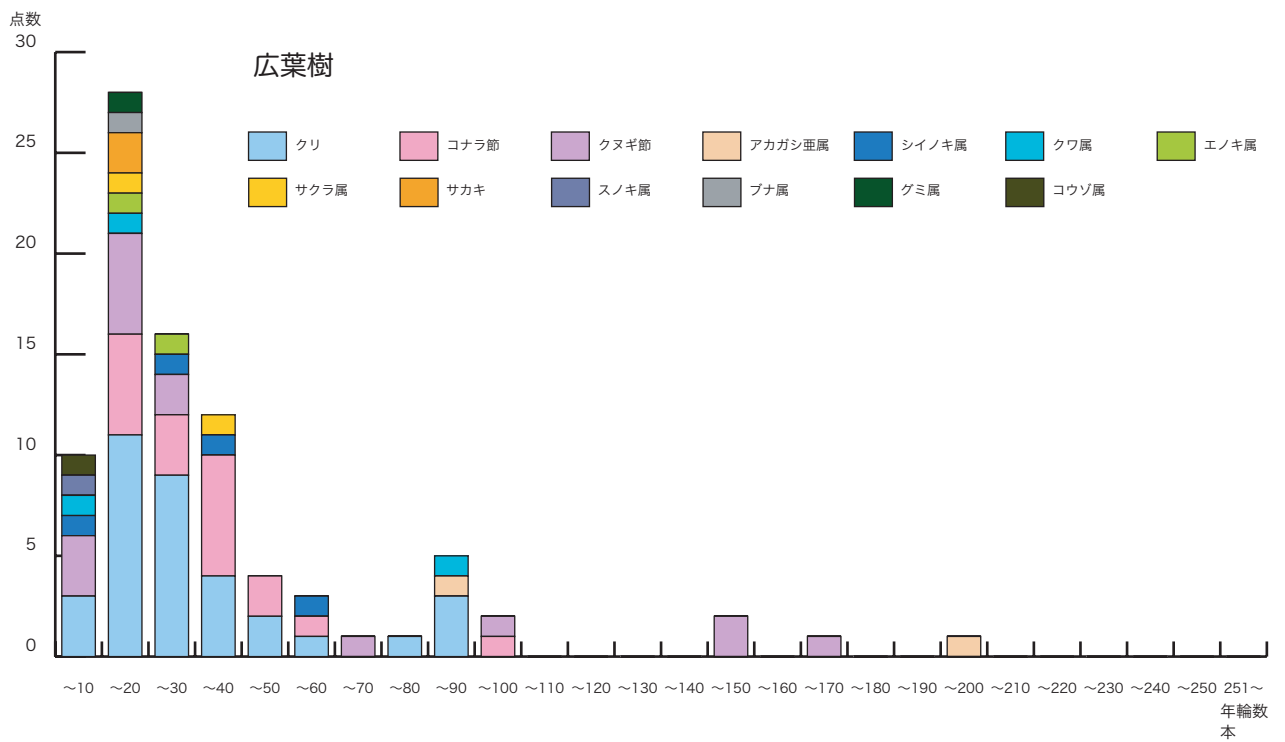
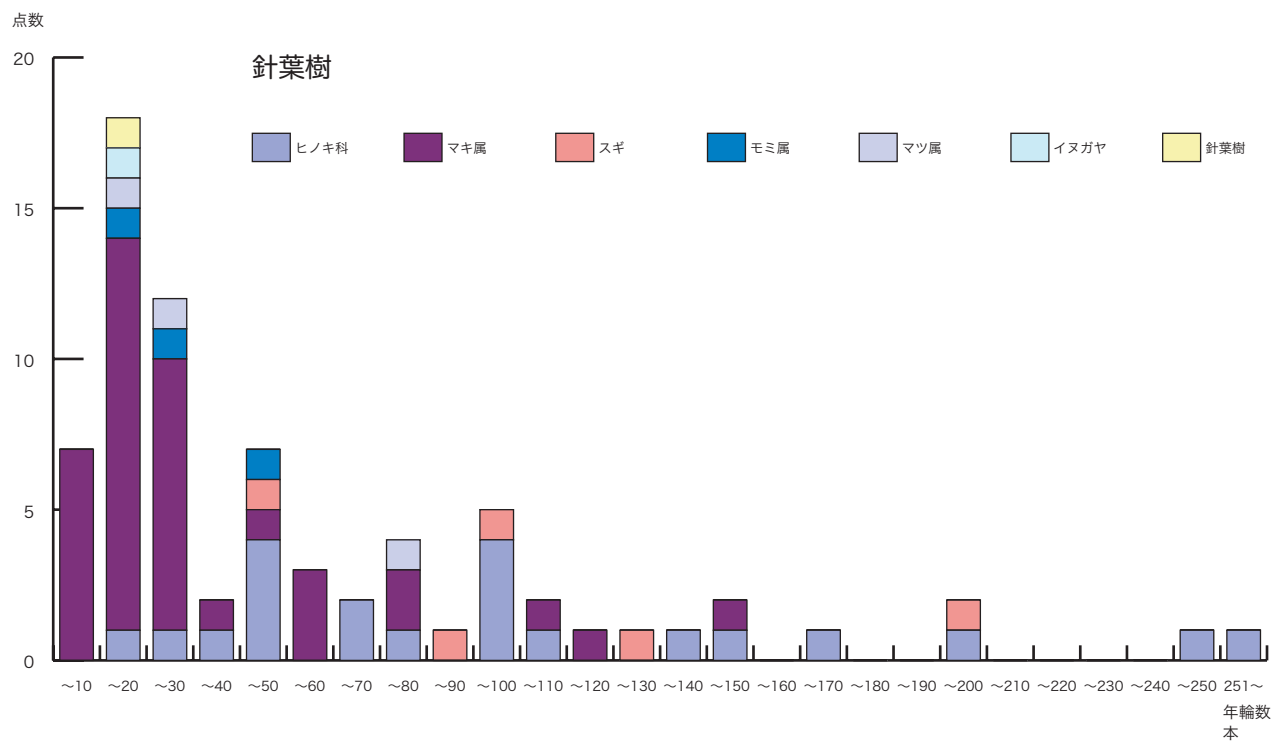


図 68 針葉樹 / 広葉樹別復元年輪数グラフ

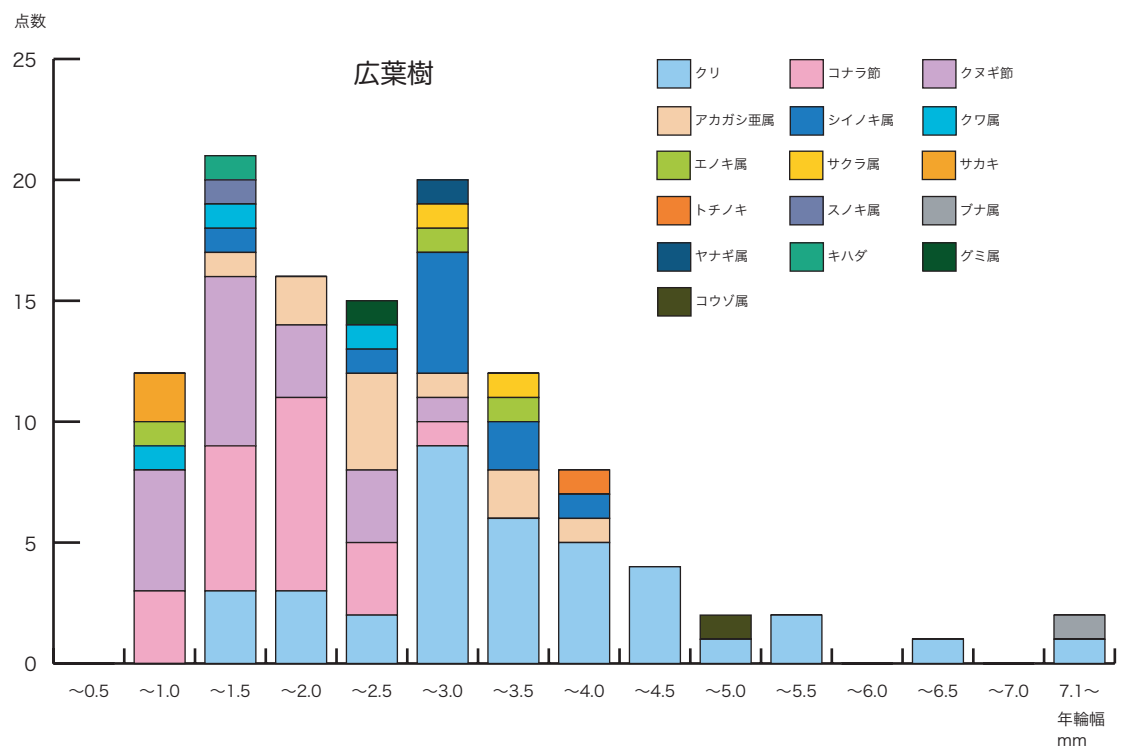
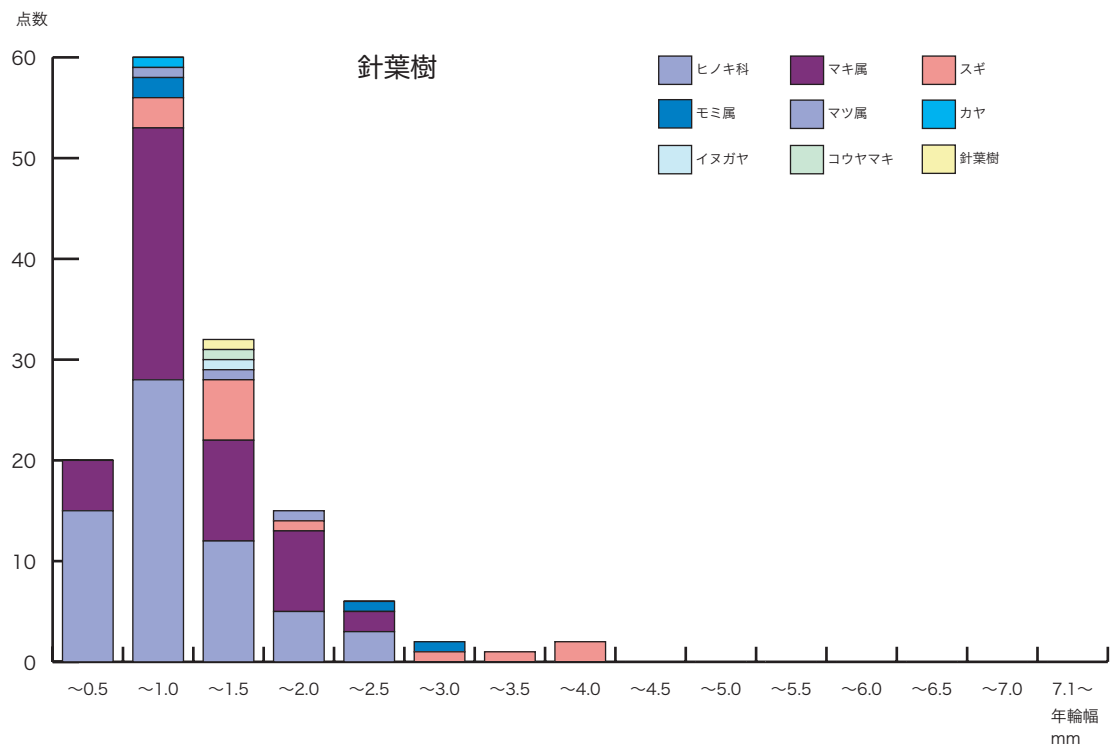


図 69 針葉樹 / 広葉樹別平均年輪幅グラフ

でもヒノキ科・スギには樹齢 100 年以上の木が比較的めだつ。

最後に、計測した年輪幅の平均値をもとに、0.5mm 刻みのグラフを作成した（図 69）。

一見して針葉樹は年輪幅が緻密で、広葉樹がやや粗いことがわかる。針葉樹はヒノキ科・マキ属が 0.5～1.0mm を中心とする正規分布を示すのに対し、スギは 0.5～2.0mm と 2.5～4.0mm に分かれる。一般にスギはヒノキ科よりも年輪幅が広い傾向があり、本遺跡でも同様の傾向が認められる。

広葉樹では、コナラ節・クヌギ節が 1.0～2.0mm を中心とするのに対し、クリは 2.5～3.0mm をピークとする裾野の広い正規分布を示しており、最も年輪幅が広いもので、1.0cm 近い。クリも一般に、他の広葉樹より年輪幅が広い傾向があることがわかっている。

全体的には年輪の詰まった緻密な材が多いことから、これらの木材を切り出した森林は、比較的密集度の高い、日当たりの悪い環境であったと想定される。

下懸遺跡の木製品群（2～5 群）は大きく、原材（丸太）・加工途上品（分割材・未成品・残材）・廃棄品（完成品・破損品）の 3 段階に分けることができる。

廃棄品のなかには、大型掘立柱建物を解体した柱や建築材が比較的多く認められるが、1 棟の建物がそのまま復元できるような遺存状況ではなかった。柱には焼失建物の炭化材や根腐れをおこしたとみられる転用不可なものほかに、再利用が可能なものもふくまれる。

丸太は、クサビによる半裁途中に放棄したもの（1427-1）をふくめ、直径 20cm 以下のものが大半で、しかも樹皮が残る例が多いことから、近接する碧海台地の森林から切り出して、アク抜き（乾燥）のために水漬け保管していたものと思われる。そして、直径 20cm 程度の細い丸太をさらに分割して利用しようとしていたことを考慮すれば、転用可能な太い柱材も、再利用のために保管されていた可能性が高くなる。しかも、樹齢 20 年前後の木が多いことから、この集落が利用できる範囲の森林は、20 年程度のサイクルで逐次更新されていた可能性が高い。

鹿乗川流域遺跡群内では、下懸遺跡と比較的近い時期に、釈迦山遺跡・二タ子遺跡・桜



図 70 鹿乗川流域遺跡群の集落・古墳分布図
（太字は木製品出土遺跡）

樹種と
平均年輪幅

ま と め

林遺跡・中狭間遺跡・亀塚遺跡・姫下遺跡など、直線距離で約 3km の間に木製品が出土する遺跡が密集しており、しかもその大半で原材や未成品が認められている（図 70）。このように近接する集落で、それぞれがほぼ同時期に（しかも自立的に）、碧海台地上の森林を利用して木製品の生産をおこなっていたとすれば、たちまち資源の枯渇を招いてしまうことになろう。当時の人々が、永続的な森林資源の利用を考えていたという前提に立つならば、おそらく 3 ないしは 4 群程度の集落が、転用可能な木材を再利用しつつ、一定（20 年程度）のサイクルで、伐採地点とともに居住地を移動していった結果の集積こそが、現在我々がみている鹿乗川流域遺跡群の実態といえるのではないだろうか。

（樋上 昇）

引用・参考文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 2008 『一色青海遺跡 II』
奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇（解説）』
浜松市教育委員会 2002 『伊場遺跡遺物編 8 木製品 II・金属器・骨角器』
樋上 昇 2000 「3～5 世紀の地域間交流－東海系曲柄鍬の波及と展開－」『日本考古学』第 10 号
41-70 頁 日本考古学協会
樋上 昇 2002 「樹種からみた尾張地域の木製品」『考古学フォーラム 15』2-28 頁考古学フォーラム。
樋上 昇 2003 「春日井市勝川遺跡出土木製品の再検討」『研究紀要』第 4 号 10-33 頁 愛知県埋蔵文化財センター
樋上 昇 2007 「朝日遺跡出土木製品の樹種組成と周辺の高植生」『朝日遺跡 VII（第 3 分冊 総括）』、
35-60 頁、愛知県埋蔵文化財センター
三重県埋蔵文化財センター 2000 『六大 A 遺跡発掘調査報告（木製品編）』
三重県埋蔵文化財センター 2005 『石山古墳』第 24 回三重県埋蔵文化財展図録



表 11-1 木製品一覧表

写真版番号	報告書用 遺物番号	実測番号	製品名	調査区	グリッド	遺構番号	取上げ no.	X	Y	Z	長さ cm	幅(直径) cm	厚さ(器高) cm	樹種	木取り	年輪数 本	年輪幅 cm	最外周の推定年輪数	年輪最外周の推定直径 cm	所属時期
50/51	1394	001	木簡	00A	IX H 5 j	埋土 1 群	32	-121810.802	-6257.804	5.688	(25.8)	2.5	0.7	ヒノキ	板目	4	0.2			古代
56	1403	012	曲柄二又櫛 I 類 刃部	00A	Ⅷ H 20 i	埋土 5 群	328	-121799.99	-6258.617	4.837	(37.9)	(5.0)	2.8	クスギ節	柁目	33	0.1～0.2			八王子古宮
52/53	1404	002	木製品 (彩色)	00A	IX H 2 i	埋土 5 群	302	-121809.397	-6256.87	4.995	(20.1)	(11.1)	1.8	トチノキ	追柁目	19	0.3～0.5			八王子古宮
44	1405	015	曲柄四又櫛 D 類	00A	IX H 2 i	埋土 4 群					(45.1)	(4.4)	(2.8)	アカガシ亜属	柁目	14	0.3			山中～廻間 I
	1406	023	木榑	00A	IX H 2 i	埋土 4 群	305	-121804.25	-6257.45	5.222	20.6	6.3		クワ属	芯持丸木(面取り)	7	0.2～0.3	7	6.3	山中～廻間 I
	1407	082	柱? (挟り有)	00A	IX H 2 i	埋土 4 群	298	-121806.672	-6257.649	5.469	(48.3)	12.4	(9.0)		分割 1/4	25	0.08～0.2	約 100	24.5	山中～廻間 I
	1408	101	杭	00A	Ⅷ H 19 i	埋土 4 群	312	-121792.757	-6259.518	5.096	(74.1)	4.3		マキ属	芯持丸木	62	0.1	25	4.3	山中～廻間 I
	1409	102	杭	00A	Ⅷ H 19 i	埋土 4 群	344	-121791.281	-6260.336	5.14	(43.4)	3.7		マキ属	芯持丸木	10	0.15	10	3.7	山中～廻間 I
	1410	130	杭	00A	Ⅷ H 18 i	埋土 4 群	319	-121785.45	-6260.123	5.083	39.0	2.2		マキ属	芯持丸木(細皮付)	24	0.05	24	2.2	山中～廻間 I
	1411	103	杭	00A	Ⅷ H 17 h	埋土 4 群	356	-121784.414	-6260.594	4.709	(84.8)	11.3		マキ属	芯持丸木	16	0.15～0.4	16	11.3	山中～廻間 I
	1412	129	丸太 (杭?)	00A	Ⅷ H 18 i	埋土 4 群	318	-121786.157	-6259.569	5.108	(123.9)	3.0		マキ属	芯持丸木	13	0.1	13	3.0	山中～廻間 I
	1413	132	丸榑	00A	IX H 3 i	埋土 4 群	327	-121812.29	-6256.926	4.704	(121.9)	2.8		マキ属	芯持丸木	8	0.1～0.3	8	2.8	山中～廻間 I
	1414	131	丸榑	00A	Ⅷ H 19 i	埋土 4 群	322	-121793.058	-6259.405	4.98	28.5	2.3	1.9	ヒノキ	分割 1/4(面取り)	9	0.25	33	16	山中～廻間 I
	1415	285	丸榑	00A	Ⅷ H 17 i	埋土 4 群	351	-121782.997	-6259.719	4.913	20.3	5.1	4.8	ブナ属	分割 1/4(面取り)	5	0.9	10	17.6	山中～廻間 I
	1416	286	丸榑	00A	Ⅷ H 19 i	埋土 4 群					9.7	2.9		サカキ	芯持丸木	10	0.1	10	2.9	山中～廻間 I
	1417	221	角榑	00A	IX H 2 i	埋土 4 群	304・2	-121807.632	-6256.519	4.991	(15.5)	(4.7)	3.6	クリ	分割 1/4(面取り)	13	0.15～0.35	27	13.6	山中～廻間 I
	1418	223	角榑	00A	IX H 7 j	埋土 4 群					(39.5)	2.7	1.5	ヒノキ	分割 1/4(面取り)	9	0.15			山中～廻間 I
	1419	176	穿孔板	00A	IX H 7 j	埋土 4 群					(27.4)	6.7	1.4		板目	16	0.05～0.1			山中～廻間 I
	1420	280	穿孔板	00A	Ⅷ H 18 i	埋土 4 群	346	-121787.203	-6259.237	4.865	22.7	7.5	0.9	ヒノキ	板目	9	0.1			山中～廻間 I
	1421	175	穿孔板	00A	Ⅷ H 19 i	埋土 4 群	313	-121793.019	-6258.878	4.889	(30.4)	8.7	3.0	クリ	板目	5	0.4～0.7	13	15	山中～廻間 I
	1422	284	有扶板	00A	Ⅷ H 19 i	埋土 4 群					(25.4)	(4.7)	1.1	ヒノキ	板目	9	0.1			山中～廻間 I
	1423	172	板	00A	IX H 3 i	埋土 4 群					(13.3)	6.0	3.0	ヤナギ属	柁目	15	0.3			山中～廻間 I
	1424	222	分割材	00A	Ⅷ H 19 i	埋土 4 群	314	-121792.571	-6259.282	5.12	(79.4)	6.8	3.0	クリ	分割 1/4(面取り)	6	0.3～0.5	32	25.6	山中～廻間 I
	1425	219	分割材	00A	IX H 2 i	埋土 4 群	303	-121807.418	-6257.191	4.948	(44.8)	11.0	6.2	クリ	分割 1/2(面取り)	17	0.2～0.4	20	12.4	山中～廻間 I
	1426	220	分割材	00A	IX H 2 i	埋土 4 群	304・1	-121807.632	-6256.519	4.991	(24.6)	10.0	4.7	クリ	分割 1/2(面取り)	15	0.2～0.4	21	12.8	山中～廻間 I
5	1427-1	083-1	丸太 (クサビ入り)	00A	IX H 2 i	埋土 4 群	308	-121809.745	-6258.359	5.205	204.5	19.5		コナラ節	芯持丸木	37	0.1～0.3	37	19.5	山中～廻間 I
	1427-2	083-2	クサビ	00A	IX H 2 i	埋土 4 群					15.6	3.3	2.1	アカガシ亜属	芯持丸木					山中～廻間 I
55	1428	006	曲柄平櫛 D I 類	00A	IX H 2 i	埋土 3 群	188	-121804.748	-6257.567	5.274	(62.3) 刃部長 49.3	10.0		コナラ節	柁目	61	0.1～0.2			廻間 I～II
	1429	007	曲柄平櫛 I 類 刃部	00A	IX H 2 i	埋土 3 群	189	-121805.305	-6257.49	5.266	(30.6)	11.1	(0.9)	コナラ節	柁目	58	0.1～0.2			廻間 I～II
64	1430	008	曲柄平櫛 C II 類	00A	IX H 5 j	埋土 3 群	147	-121822.135	-6254.07	5.249	32.8	12.8	2.7	コナラ節	柁目	80	0.2			廻間 I～II
65	1431	014	曲柄三?又櫛 刃部	00A	IX H 4 j	埋土 3 群	109	-121816.638	-6253.886	5.352	(49.7)	(4.6)	(1.8)	アカガシ亜属	追柁目	35	0.2～0.3			廻間 I～II
59	1432	010	曲柄櫛 D 類	00A	IX H 5 i	埋土 3 群	171	-121824.283	-6255.912	5.344	(28.3)	(9.0)	2.2	アカガシ亜属	柁目	44	0.1～0.3			廻間 I～II
54	1433	019	鋤柄	00A	IX H 4 j	埋土 3 群	192	-121817.996	-6255.204	5.225	(57.6)	10.8	2.8	アカガシ亜属	柁目	39	0.2～0.3			廻間 I～II
33	1434	022	整件 C 類	00A	IX H 5 i	埋土 3 群	194	-121820.059	-6255.452	5.171	(46.6)	9.9		クスギ節	芯持丸木(面取り)	15	0.2～0.3	15	9.9	廻間 I～II
48/49	1435	024	脚付槽	00A	IX H 1 i	埋土 3 群	197	-121801.334	-6258.117	5.364	(35.4)	(15.2)	8.0	アカガシ亜属	柁目	50	0.3～0.5			廻間 I～II
31	1436	025	槽 (未成品)	00A	Ⅷ H 17 h	埋土 3 群	246	-121783.965	-6261.521	5.186	57.4	23.3	15.0	クリ	芯持丸木(面取り)	27	0.1～0.6	27	23.3	廻間 I～II
	1437	170	槽	00A	IX H 1 h	埋土 3 群					(13.0)	(24.5)	(7.7)	スギ	分割 1/4 (横木取り)	63	0.15～0.5			廻間 I～II
60	1438	004	舟形	00A	Ⅷ H 19 i	埋土 3 群	263	-121793.54	-6257.776	5.293	31.5	3.4	2.6	カヤ	柁目	58	0.1			廻間 I～II
61	1439	003	刀形?	00A	IX H 5 i	埋土 3 群	224	-121820.75	-6257.117	5.257	(28.4)	2.4	1.3	ヒノキ	柁目	20	0.1～0.2			廻間 I～II
16/17	1440	037	船材? (板皮付)	00A	IX H 6 j	埋土 3 群	115	-121826.036	-6252.92	5.334	(118.4)	(11.8)	3.6	スギ	柁目	56	0.1～0.2	128	39	廻間 I～II
18/19	1441	032	台輪 (蟻溝)	00A	IX H 3 i	埋土 3 群	111	-121810.289	-6256.419	5.665	128.0	(54.0)	8.8	クリ	柁目	約 30	0.3～0.5	84	67.6	廻間 I～II
11	1442	034	梯子	00A	IX H 3 i	埋土 3 群	161	-121809.859	-6258.198	5.111	(138.7)	22.0	7.1	クリ	柁目	32	0.2～0.3	約 40	約 30	廻間 I～II

表 11-2 木製品一覧表

写真版番号	報告書用 遺物番号	実測番号	製品名	調査区	グリッド	遺構番号	取上げ no.	X	Y	Z	長さ cm	幅(直径) cm	厚さ(器高) cm	樹種	木取り	年輪数 本	年輪幅 cm	最外周の推定年輪数 本	年輪最外周の推定直径 cm	所属時期
30	1443	036	梯子	00A	VIII 17 h	埋土 3 群	235	-121781.574	-6262.036	5.268	(31.4)	(8.1)	6.6	コナラ節	板目	54	0.1～0.15	約 100	約 25	期間Ⅰ～Ⅱ
	1444	074	柱	00A	VIII 20 h	埋土 3 群	195	-121796.795	-6261.623	5.484	157.5	7.4		クリ	芯持丸木 (又木)	11	0.2～0.5	11	7.4	期間Ⅰ～Ⅱ
	1445	069	柱	00A	VIII 20 h	埋土 3 群	125	-121795.903	-6261.045	5.578	(153.0)	17.0		クリ	芯持丸木 (又木)	16	0.1～0.3	16	17.0	期間Ⅰ～Ⅱ
	1446	073-1	柱	00A	IX H 6 i	埋土 3 群	175	-121824.142	-6255.902	5.087	(89.2)	19.0		クリ	芯持丸木 (又木・樹皮付)	16	0.3～0.6	16	19.0	期間Ⅰ～Ⅱ
	1447	081	柱	00A	VIII 20 h	埋土 3 群	287	-121795.511	-6261.755	5.457	(78.4)	9.5		クリ	芯持丸木(樹皮付)	14	0.2～0.4	14	9.5	期間Ⅰ～Ⅱ
	1448	072	柱	00A	IX H 3 i	埋土 3 群	160	-121810.394	-6257.634	5.268	124.7	7.3		クスギ節	芯持丸木 (又木・樹皮付)	18	0.1～0.2	18	7.3	期間Ⅰ～Ⅱ
12	1449	078	柱 (狭り有)	00A	VIII 17 h	埋土 3 群	247	-121784.662	-6261.732	5.297	(77.9)	12.7		クスギ節	芯持丸木	21	0.2	21	12.7	期間Ⅰ～Ⅱ
	1450	070	丸木 (柱?)	00A	VIII 20 i	埋土 3 群	132	-121798.158	-6259.343	5.483	(235.5)	9.6		ヒノキ科	芯持丸木 (板付)	47	0.1	47	9.6	期間Ⅰ～Ⅱ
	1451	071	柱?	00A	IX H 2 i	埋土 3 群	141	-121809.828	-6257.269	5.477	(127.6)	10.2		コナラ節	芯持丸木	35	0.1～0.2	35	10.2	期間Ⅰ～Ⅱ
1453	1452	227	有段丸棒 (垂木?)	00A	VIII 19 i	埋土 3 群	289	-121793.774	-6258.042	5.183	(119.1)	3.1		マキ属	芯持丸木	10	0.1	10	3.1	期間Ⅰ～Ⅱ
	1453	127	有段丸棒 (垂木?)	00A	VIII 19 h	埋土 3 群	277	-121793.678	-6262.103	5.236	(72.9)	2.6		マキ属	芯持丸木	15	0.05～0.15	15	2.6	期間Ⅰ～Ⅱ
	1454	134	有段板 (建築材)	00A	IX H 3 i	埋土 3 群	152	-121810.837	-6258.116	5.56	(42.6)	8.0	3.8	クリ	板目	11	0.3～0.6	50	43	期間Ⅰ～Ⅱ
1455	041		垂木受け	00A	VIII 20 h	埋土 3 群	184	-121798.48	-6259.351	5.382	(75.6)	11.2	2.5	ヒノキ	板目	40	0.08	約 200	34	期間Ⅰ～Ⅱ
	1456	112	杭	00A	IX H 6 j	埋土 3 群	114	-121825.925	-6262.017	5.209	(102.8)	3.2		マキ属	芯持丸木(樹皮付)	約 20	0.08	約 20	3.2	期間Ⅰ～Ⅱ
	1457	099	杭	00A	VIII 20 i	埋土 3 群	280	-121795.76	-6257.36	5.255	(86.5)	3.5		マキ属	芯持丸木	14	0.1	14	3.5	期間Ⅰ～Ⅱ
1458	114		杭	00A	IX H 2 i	埋土 3 群	130	-121807.441	-6255.464	5.268	(39.4)	2.5		マキ属	芯持丸木(樹皮付)	7	0.2～0.3	7	2.5	期間Ⅰ～Ⅱ
	1459	116	杭	00A	IX H 6 j	埋土 3 群	134	-121826.232	-6254.15	5.169	(129.0)	2.4		ヒノキ科	芯持丸木(樹皮付)	21	0.05	21	2.4	期間Ⅰ～Ⅱ
	1460	121	杭	00A	IX H 5 i	埋土 3 群	202	-121820.532	-6256.164	5.09	75.1	3.6		モミ属	芯持丸木	17	0.1	17	3.6	期間Ⅰ～Ⅱ
1461	093		杭	00A	IX H 4 i	埋土 3 群	193	-121819.697	-6255.777	5.048	(83.7)	3.6		クリ	芯持丸木	5	0.2～0.4	5	3.6	期間Ⅰ～Ⅱ
	1462	095	杭	00A	VIII 19 i	埋土 3 群	272 - 1	-121793.284	-6258.223	5.195	(14.5)	3.7		クスギ節	芯持丸木	10	0.1～0.15	10	3.7	期間Ⅰ～Ⅱ
	1463	097	杭	00A	VIII 19 i	埋土 3 群	272 - 3	-121793.284	-6258.223	5.195	(6.8)	3.9		クスギ節	芯持丸木	約 10	0.1～0.2	約 10	3.9	期間Ⅰ～Ⅱ
1464	096		杭	00A	VIII 19 i	埋土 3 群	272 - 2	-121793.284	-6258.223	5.195	(14.0)	4.1		クスギ節	芯持丸木	約 10	0.1～0.2	約 10	4.1	期間Ⅰ～Ⅱ
	1465	100	杭	00A	IX H 5 j	埋土 3 群					(12.1)	5.1		エノキ属	芯持丸木	12	0.15～0.5	12	5.1	期間Ⅰ～Ⅱ
	1466	119	杭	00A	IX H 4 j	埋土 3 群	191	-121814.798	-6253.161	5.469	(25.9)	4.5	3.1	クロ属	分割 1/2 (樹皮付)	11	0.15	11	4.5	期間Ⅰ～Ⅱ
1467	089		杭	00A	IX H 1 i	埋土 3 群	124	-121801.712	-6257.337	5.15	(44.2)	8.3		サクラ属	芯持丸木	13	0.3	13	8.3	期間Ⅰ～Ⅱ
	1468	098	杭	00A	VIII 20 i	埋土 3 群	278	-121795.964	-6257.076	5.404	(26.7)	(21.5)	4.5	スノキ属	芯持丸木	約 10	0.1～0.2	約 10	4.5	期間Ⅰ～Ⅱ
	14		有段丸棒	00A	IX H 6 j	埋土 3 群	97	-121827.698	-6251.254	5.172	106.7	2.8		ヒノキ	分割 1/4 (面取り)	30	0.08			期間Ⅰ～Ⅱ
35	1470	040	有頭丸棒	00A	VIII 20 i	埋土 3 群	221	-121797.27	-6257.456	5.483	85.9	3.1	2.6	マキ属	分割 1/4 (面取り)	54	0.05			期間Ⅰ～Ⅱ
	1471	039	有段丸棒	00A	IX H 3 i	埋土 3 群	117	-121813.006	-6253.508	5.305	(68.4)	3.3		マキ属	芯持丸木	17	0.08	17	3.3	期間Ⅰ～Ⅱ
	1472	120	丸棒	00A	VIII 19 i	埋土 3 群	295	-121793.733	-6258.909	5.16	89.8	4.0	3.0	ヒノキ	分割 1/4 (面取り)	13	0.2	41	16.4	期間Ⅰ～Ⅱ
1473	128		丸棒	00A	IX H 5 i	埋土 3 群	200	-121821.38	-6255.526	5.058	(103.5)	3.0		マキ属	芯持丸木(面取り)	27	0.05	27	3.0	期間Ⅰ～Ⅱ
	1474	125	丸棒	00A	VIII 17 h	埋土 3 群	239	-121782.571	-6260.886	5.374	(76.4)	3.7		マキ属	芯持丸木 (面端尖る)	28	0.05	28	3.7	期間Ⅰ～Ⅱ
	1475	118	丸棒	00A	IX H 5 j	埋土 3 群	159	-121822.787	-6252.094	5.055	(41.2)	1.8		マキ属	芯持丸木	7	0.1	7	1.8	期間Ⅰ～Ⅱ
1476	126		丸棒	00A	IX H 1 i	埋土 3 群	260 - 2	-121800.987	-6257.257	5.09	(45.2)	2.4		マキ属	芯持丸木	8	0.1～0.2	8	2.4	期間Ⅰ～Ⅱ
	1477	113	丸棒	00A	IX H 4 j	埋土 3 群	116	-121816.271	-6253.717	5.135	(54.4)	2.7		マキ属	芯持丸木(樹皮付)	9	0.15～0.2	9	2.7	期間Ⅰ～Ⅱ
	1478	115	丸棒	00A	IX H 1 i	埋土 3 群	131 - 1	-121803.527	-6257.57	5.307	(39.2)	2.1		マキ属	芯持丸木(樹皮付)	9	0.1	9	2.1	期間Ⅰ～Ⅱ
1479	117		丸棒	00A	IX H 6 j	埋土 3 群	144	-121828.222	-6250.152	5.381	(113.5)	3.2		マキ属	芯持丸木(樹皮付)	26	0.05～0.08	26	3.2	期間Ⅰ～Ⅱ
	1480	123	丸棒	00A	VIII 20 i	埋土 3 群	218	-121799.041	-6257.344	5.253	(206.0)	3.9		マキ属	芯持丸木	25	0.05～0.1	25	3.9	期間Ⅰ～Ⅱ
	1481	122	丸棒	00A	VIII 20 i	埋土 3 群	222	-121799.286	-6259.1	5.218	55.7	2.6		ヒノキ科	芯持丸木(面端尖る)	16	0.05～0.1	16	2.6	期間Ⅰ～Ⅱ
1482	124		丸棒	00A	VIII 20 i	埋土 3 群	232	-121797.562	-6257.379	5.399	(175.7)	3.5		イヌガヤ	芯持丸木(面取り)	11	0.15	11	3.5	期間Ⅰ～Ⅱ
	1483	042	穿孔角棒	00A	VIII 20 h	埋土 3 群	185	-121798.781	-6259.258	5.549	(121.5)	4.1	3.1	ヒノキ	分割 1/8 (面取り)	20	0.1～0.15	約 70	18	期間Ⅰ～Ⅱ
	20	1484	穿孔角棒	00A	IX H 4 j	埋土 3 群	172	-121815.612	-6252.233	5.311	(73.9)	5.0	2.7	ヒノキ	分割 1/4 (面取り)	40	0.1～0.15			期間Ⅰ～Ⅱ
279-1	1485	279-1	棒 (穿孔別材挿入) 別材	00A	VIII 19 i	埋土 3 群					(30.4)	4.3	0.35	モミ属	芯持丸木(面取り)	20	0.1	20	4.3	期間Ⅰ～Ⅱ
	279-2										(3.9)	2.4		クスギ節	板目	2	0.1			期間Ⅰ～Ⅱ
	1486	199	有段角棒 (溝有)	00A	IX H 1 i	埋土 3 群	187	-121802.734	-6258.274	5.333	(90.6)	8.8	6.2	クリ	分割 1/4 (面取り)	15	0.2～0.7	20	18	期間Ⅰ～Ⅱ
	1487	283	有段角棒	00A	IX H 5 j	埋土 3 群					(9.5)	2.4	1.8	スギ	板目	13	0.1～0.2			期間Ⅰ～Ⅱ

表 11-3 木製品一覧表

写真版番号	報告書用 遺物番号	実測番号	製品名	調査区	グリッド	遺構番号	取上げ no.	X	Y	Z	長さ cm	幅(直径) cm	厚さ(器高) cm	樹種	木取り	年輪数 本	年輪幅 cm	最外周の推定年輪数 本	年輪最外周の推定直径 cm	所属時期
	1488	168	角棒 (手斧痕残存)	00A	ⅧH 20 h	埋土 3 群	288	-121796.524	-62822.216	5.435	(58.8)	(6.6)	(3.5)	マキ属	桁目	50	0.05~0.15	145	29	期間Ⅰ~Ⅱ
	1489	142	角棒	00A	ⅨH 1 i	埋土 3 群	186	-121801.724	-6259.25	5.427	(93.0)	3.5	2.7	ヒノキ	桁目	11	0.1~0.3			期間Ⅰ~Ⅱ
	1490	145	角棒	00A	ⅧH 19 i	埋土 3 群	271	-121792.663	-6258.554	5.104	(57.7) (25.8) (13.8)	3.0	3.3	ヒノキ	桁目	23	0.15			期間Ⅰ~Ⅱ
	1491	144	角棒	00A	ⅧH 20 i	埋土 3 群	270	-121795.193	-6257.558	5.195	(46.5)	4.8	2.7	ヒノキ	桁目	25	0.1~0.3			期間Ⅰ~Ⅱ
	1492	146	角棒	00A	ⅧH 19 h	埋土 3 群	296・2	-121794.85	-6260.533	5.142	(44.9)	(7.1)	(7.0)	クリ	桁目	23	0.2~0.5	48	34	期間Ⅰ~Ⅱ
	1493	027	穿孔板 (箱側板?)	00A	ⅧH 19 h	埋土 3 群	262	-121790.874	-6260.869	5.327	24.8	(5.9)	0.9	スギ	桁目	31	0.2			期間Ⅰ~Ⅱ
	1494	206	穿孔板	00A	ⅨH 2 i	埋土 3 群	209	-121806.171	-6257.556	5.247	(16.8)	13.1	4.8	ヒノキ	追桁目	約 80	0.1	165	33	期間Ⅰ~Ⅱ
	1495	202	有段板	00A	ⅨH 6 i	埋土 3 群	198	-121822.584	-6256.025	5.157	(103.7)	9.5	3.4	ヒノキ	桁目	95	0.05~0.1	240	36	期間Ⅰ~Ⅱ
	1496	211	有溝板	00A	ⅨH 1 i	埋土 3 群	259	-121801.661	-6257.045	5.264	(46.2)	13.6	3.0	ヒノキ	追桁目	57	0.15~0.2	106	37	期間Ⅰ~Ⅱ
	1497	161	有扶板	00A	ⅨH 4 j	埋土 3 群	164	-121815.998	-6255.142	5.024	(33.9)	4.6	1.3	スギ	桁目	16	0.05~0.1			期間Ⅰ~Ⅱ
	1498	156	板	00A	ⅨH 3 i	埋土 3 群	112	-121811.217	-6255.301	5.508	(26.2)	3.0	0.5	マキ属	桁目	13	0.25			期間Ⅰ~Ⅱ
	1499	215	板 (手斧痕残存)	00A	ⅧH 20 i	埋土 3 群	282・3	-121797.052	-6257.039	5.388	44.6	12.7	5.5	マキ属	桁目	30	0.1~0.3	100	40	期間Ⅰ~Ⅱ
	1500	160	板 (手斧痕残存)	00A	ⅨH 6 j	埋土 3 群	135	-121826.346	-6253.716	5.208	13.1	1.9	1.0	マキ属	板目	6	0.1~0.2			期間Ⅰ~Ⅱ
	1501	165	板 (手斧痕残存)	00A	ⅧH 20 i	埋土 3 群	279	-121796.19	-6257.154	5.37	(36.7)	5.1	1.7	マキ属	板目	10	0.1~0.15			期間Ⅰ~Ⅱ
	1502	166	板 (手斧痕残存)	00A	ⅧH 20 i	埋土 3 群	281	-121795.993	-6257.021	5.368	(56.6)	6.2	3.8	マキ属	板目	38	0.1			期間Ⅰ~Ⅱ
	1503	198	板 (手斧痕残存)	00A	ⅧH 20 h	埋土 3 群	182	-121797.712	-6261.561	5.572	(45.9)	4.2	1.6	マキ属	板目	13	0.1~0.15			期間Ⅰ~Ⅱ
	1504	162	板	00A	ⅨH 4 j	埋土 3 群	179	-121818.366	-6255.034	5.181	(54.3)	3.9	2.4	ヒノキ	桁目	23	0.1~0.2			期間Ⅰ~Ⅱ
	1505	159	板	00A	ⅨH 1 i	埋土 3 群	131・2	-121803.527	-6257.57	5.307	(16.8)	4.1	1.0	ヒノキ	板目	12	0.15			期間Ⅰ~Ⅱ
	1506	171	板	00A	ⅨH 1 h	埋土 3 群					(41.7)	(5.3)	1.3	ヒノキ	板目	12	0.08~0.15			期間Ⅰ~Ⅱ
	1507	157	板	00A	ⅨH 5 j	埋土 3 群	126	-121820.624	-6254.403	5.422	(55.0)	6.4	2.7	ヒノキ	板目	32	0.08			期間Ⅰ~Ⅱ
	1508	204	板	00A	ⅨH 4 i	埋土 3 群	203	-121816.803	-6256.216	5.077	(24.3)	(3.4)	1.3	クロベ	桁目	59	0.05			期間Ⅰ~Ⅱ
	1509	169	板	00A	ⅨH 5 i	埋土 3 群					(24.9)	4.2	1.4	ヒノキ	板目	19	0.05			期間Ⅰ~Ⅱ
	1510	167	板	00A	ⅧH 20 h	埋土 3 群	284	-121794.772	-6260.624	5.213	21.6	7.4	1.2	ヒノキ	板目	12	0.1	135	27	期間Ⅰ~Ⅱ
	1511	164	板	00A	ⅧH 20 i	埋土 3 群	215	-121797.648	-6259.395	5.27	(28.8)	7.9	1.3	ヒノキ	追桁目	63	0.05~0.1			期間Ⅰ~Ⅱ
	1512	163	板	00A	ⅨH 4 j	埋土 3 群	181	-121820.701	-6256.205	5.47	(71.8)	3.6	1.6	サワラ	桁目	約 60	0.05			期間Ⅰ~Ⅱ
	1513	158	板	00A	ⅨH 3 j	埋土 3 群	128	-121814.038	-6254.546	5.259	(57.6)	4.5	1.9	サワラ	板目	46	0.03~0.05			期間Ⅰ~Ⅱ
	1514	205	板	00A	ⅨH 1 i	埋土 3 群	207	-121799.902	-6258.373	5.394	25.9	30.0	2.7	ヒノキ	追桁目	約 130	0.08	415	66.4	期間Ⅰ~Ⅱ
	1515	207	板	00A	ⅧH 20 i	埋土 3 群	220	-121800.453	-6258.021	5.205	(139.5)	10.3	2.2	ヒノキ	板目	45	0.05			期間Ⅰ~Ⅱ
	1516	200	板	00A	ⅨH 2 i	埋土 3 群	190	-121805.519	-6257.746	5.365	(18.0)	6.2	1.9	スギ	桁目	32	0.15			期間Ⅰ~Ⅱ
	1517	197	板	00A	ⅨH 7 i	埋土 3 群	178	-121831.669	-6256.247	5.367	(28.0)	8.0	2.0	モミ属	追桁目	17	0.2~0.3			期間Ⅰ~Ⅱ
	1518	201	板	00A	ⅧH 20 h	埋土 3 群	196	-121797.065	-6262.205	5.545	(60.9)	10.6	5.6	クリ	芯持丸木(面取り)	8	0.5~1.0	8	14	期間Ⅰ~Ⅱ
	1519	217	板	00A	ⅧH 20 h	埋土 3 群	286	-121795.003	-6261.112	5.252	(79.3)	9.2	5.0	コナラ節	芯持丸木(面取り)	34	0.1~0.3	34	11.6	期間Ⅰ~Ⅱ
	1520	212	板	00A	ⅨH 1 i	埋土 3 群	260・1	-121800.987	-6257.257	5.09	(28.6)	12.3	4.3	クヌギ節	桁目	74	0.15~0.3	164	74	期間Ⅰ~Ⅱ
	1521	213	板	00A	ⅧH 20 i	埋土 3 群	282・1	-121797.052	-6257.039	5.388	(34.2)	11.8	3.8	クヌギ節	桁目	81	0.1~0.3	96	38.4	期間Ⅰ~Ⅱ
	1522	195	板	00A	ⅨH 3 i	埋土 3 群	118	-121810.583	-6255.191	5.521	(11.3)	19.2	1.9	アカガシ亜属	桁目	72	0.1~0.3			期間Ⅰ~Ⅱ
	1523	216	板	00A	ⅧH 20 h	埋土 3 群	285	-121794.749	-6261.232	5.18	35.2	9.1	1.5	シイノキ属	桁目	25	0.2~0.35			期間Ⅰ~Ⅱ
	1524	214	板	00A	ⅧH 20 i	埋土 3 群	282・2	-121797.052	-6257.039	5.388	(23.3)	(7.2)	3.4	シイノキ属	追桁目	12	0.4	27	22	期間Ⅰ~Ⅱ
	1525	196	分割材	00A	ⅨH 5 j	埋土 3 群	119	-121821.159	-6254.027	5.488	(63.6)	8.7	4.7	ヒノキ	分割 1/2(面取り)	31	0.1~0.2	94	28.4	期間Ⅰ~Ⅱ
	1526	143	分割材	00A	ⅧH 19 i	埋土 3 群	228	-121794.297	-6260.99	5.259	(100.3)	7.7	4.7	ヒノキ	分割 1/4(面取り)	38	0.15~0.3	約 100	45	期間Ⅰ~Ⅱ
	1527	209	分割材	00A	ⅧH 17 h	埋土 3 群	251	-121784.712	-6260.063	5.248	40.3	10.9	5.6	クリ	分割 1/2(面取り)	16	0.3~0.4	16	12.8	期間Ⅰ~Ⅱ
	1528	080	分割材	00A	ⅧH 19 h	埋土 3 群	266	-121792.495	-6261.413	5.323	(95.6)	11.6	6.4	クリ	分割 1/4(面取り)	15	0.65	27	36	期間Ⅰ~Ⅱ
	1529	090	分割材	00A	ⅨH 5 j	埋土 3 群	127	-121819.426	-6253.326	5.364	(64.0)	5.8	4.8	クリ	分割 1/4	20	0.1~0.3	28	11.2	期間Ⅰ~Ⅱ
	1530	203	分割材	00A	ⅨH 5 i	埋土 3 群	199	-121822.51	-6255.787	5.088	(127.8)	21.8	6.4	クリ	分割 1/8	45	0.2~0.6	80	64	期間Ⅰ~Ⅱ
	1531	094	分割材	00A	ⅧH 19 i	埋土 3 群	265	-121792.624	-6258.278	5.295	(36.0)	5.6	2.9	クヌギ節	分割 1/2	12	0.1~0.2	19	5.8	期間Ⅰ~Ⅱ
	1532	194	分割材	00A	ⅨH 3 i	埋土 3 群	113	-121811.624	-6254.573	5.654	(46.4)	13.2	3.2	クヌギ節	分割 1/8	102	0.1~0.15	144	36	期間Ⅰ~Ⅱ
	1533	210	分割材	00A	ⅧH 17 h	埋土 3 群	237	-121782.964	-6262.936	4.997	(70.8)	15.8	3.7	クヌギ節	分割 1/8	63	0.2~0.3	64	32	期間Ⅰ~Ⅱ
	1534	208	分割材	00A	ⅧH 17 i	埋土 3 群	256	-121782.545	-6259.843	5.398	(42.9)	(7.2)	4.4	クヌギ節	分割 1/4	53	0.1	140	28	期間Ⅰ~Ⅱ
	1535	229	分割材	00A	ⅧH 20 h	埋土 3 群	290	-121795.49	-6261.665	5.315	(41.4)	12.0	6.5	エノキ属	分割 1/2	23	0.3	23	12.6	期間Ⅰ~Ⅱ
	1536	091	残材	00A	ⅨH 1 i	埋土 3 群	131・3	-121803.527	-6257.57	5.307	16.5	5.9		ヒノキ科	芯持丸木	60	0.05	60	5.9	期間Ⅰ~Ⅱ

表 11- 4 木製品一覧表

写真架番号	報告書用 遺物番号	架別番号	製品名	調査区	グリッド	遺構番号	取上げ no.	X	Y	Z	長さ cm	幅(直径) cm	厚さ(器高) cm	樹種	木取り	年輪数 本	年輪幅 cm	最外周の推定年輪数	年輪最外周の推定直径 cm	所属時期
	1537	075	丸太	00A	IX H 4 i	埋土 3 群	214	-121817.239	-6256.522	4.973	(86.6)	10.6		クリ	芯持丸木	15	0.1～0.5	15	10.6	週間Ⅰ～Ⅱ
	1538	076	丸太	00A	VIH 20 i	埋土 3 群	231	-121793.936	-6260.758	5.166	(85.5)	10.5		クリ	芯持丸木(樹皮付)	22	0.1～0.5	22	10.5	週間Ⅰ～Ⅱ
	1539	228	丸太	00A	VIH 19 h	埋土 3 群	296・1	-121794.85	-6260.533	5.142	(36.3)	8.4		クリ	芯持丸木	9	0.4	9	8.4	週間Ⅰ～Ⅱ
	1540	077	丸太	00A	VIH 17 h	埋土 3 群	234	-121782.692	-6262.182	5.151	(70.6)	11.9		コナラ節	芯持丸木	19	0.1～0.3	19	11.9	週間Ⅰ～Ⅱ
	1541	230	丸太	00A	IX H 5 j	埋土 3 群	158	-121822.847	-6253.67	5.118	(34.3)	8.0		コナラ節	芯持丸木	13	0.2～0.3	13	8.0	週間Ⅰ～Ⅱ
	1542	079	丸太	00A	VIH 19 i	埋土 3 群	264	-121793.933	-6258.2	5.429	(260.0)	11.2		コナラ節	芯持丸木	32	0.1	32	11.2	週間Ⅰ～Ⅱ
	1543	231	丸太	00A	IX H 1 i	埋土 3 群	212	-121798.795	-6258.773	5.302	35.3	13.5		コナラ節	芯持丸木	46	0.1	46	13.5	週間Ⅰ～Ⅱ
	1544	092	丸太	00A	VIH 20 h	埋土 3 群	183	-121798.454	-6260.256	5.467	(45.4)	9.2		グミ属	芯持丸木	15	0.15～0.3	15	9.2	週間Ⅰ～Ⅱ
	1545	073-2	丸太	00A	IX H 6 i	埋土 3 群	175	-121824.142	-6255.902	5.087	(44.9)	8.7			芯持丸木	12	0.2～0.5	12	8.7	週間Ⅰ～Ⅱ
66	1546	005	直柄櫓轂	00A	IX H 4 i	埋土 2 群	93	-121815.737	-6255.525	5.509	19.0	38.9	3.5	アカガシ亜属	柁目	58	0.2～0.5	85	57	週間Ⅱ～Ⅲ
	1547	011	曲柄二又轂？ 刃部	00A	VIH 18 i	埋土 2 群	64	-121787.824	-6258.409	5.413	(12.8)	(3.7)	(0.8)	アカガシ亜属	柁目					週間Ⅱ～Ⅲ
	1548	013	曲柄三又轂？ 刃部	00A	IX H 5 j	埋土 2 群	98	-121823.579	-6251.322	5.503	(27.4)	(4.9)	(0.9)	アカガシ亜属	柁目	約 50	0.1～0.2			週間Ⅱ～Ⅲ
	58	017	一木平鋤 (未成品)	00A	VIH 17 h	埋土 2 群	4	-121870.916	-6259.187	5.432	150.8	22.5	2.7 刃部厚 2.4	アカガシ亜属	柁目	103	0.2～0.3	約 200	約 100	週間Ⅱ～Ⅲ
								-121781.021	-6260.727	5.438	刃部長 57.4									
6	1550	018	一木平鋤 (未成品)	00A	VIH 17 h	埋土 2 群	57	-121782.242	-6260.91	5.444	138.2	19.4	4.0	アカガシ亜属	柁目	65	0.3～0.4			週間Ⅱ～Ⅲ
27	1551	020	堅杵 C 類 (未使用)	00A	VIH 17 h	埋土 2 群	100・1	-121783.058	-6261.972	5.184	刃部長 45.8	8.8		クスギ節	芯持丸木	8	0.6	8	8.8	週間Ⅱ～Ⅲ
32	1552	021	堅杵 C 類 (たまご掘り白用)	00A	VIH 17 h	埋土 2 群	100・2	-121780.062	-6263.012	5.33	(43.3) (35.2)	9.6		クスギ節	芯持丸木	13	0.1～0.3	13	9.6	週間Ⅱ～Ⅲ
23	1553	028	腰掛 (穿孔板)	00A	VIH 17 h	埋土 2 群	41	-121783.174	-6261.589	5.275	(63.3)	6.3	2.3	ヒノキ	柁目	150	0.05			週間Ⅱ～Ⅲ
46/47	1554	029	一木腰掛	00A	IX H 6 j	埋土 2 群	89？	-121783.658	-6261.283	5.304	24.9	10.5	6.0	アカマツ	分割 1/4	約 40	0.1	74	14.8	週間Ⅱ～Ⅲ
34	1555	187	編み台	00A	IX H 6 j	埋土 2 群	80	-121827.015	-6250.37	5.386	(67.2) (31.0)	6.2	2.7	クスギ節	柁目	56	0.1			週間Ⅱ～Ⅲ
8	1556	054	櫓木	00A	VIH 20 h	埋土 2 群	60	-121795.788	-6263.077	5.769	(243.6)	9.6	5.9	マキ属	分割 1/4(面取り)	42	0.1～0.2	56	17	週間Ⅱ～Ⅲ
4	1557	033	柱 (段有)	00A	VIH 20 h	埋土 2 群	59	-121798.144	-6259.664	5.612	(162.0)	27.3		マキ属	芯持丸木(面取り)	約 80	0.08～0.1	約 80	27.3	週間Ⅱ～Ⅲ
13	1558	066	柱	00A	VIH 19 h	埋土 2 群	102	-121790.54	-6261.494	5.263	(118.7)	16.1	2.3	マキ属	芯持丸木(樹皮付)	73	0.05～0.1	73	16.1	週間Ⅱ～Ⅲ
	1559	063	柱？ (段有)	00A	IX H 6 i	埋土 2 群	92？				(63.5)	7.5	7.5	マキ属	分割 1/4	24	0.1～0.3	35	14	週間Ⅱ～Ⅲ
9	1560	050	柱 (ホゾ孔有)	00A	VIH 17 h	埋土 2 群	5	-121780.196	-6259.075	5.407	(140.2)	10.8		ヒノキ	芯持丸木	47	0.1	47	10.8	週間Ⅱ～Ⅲ
28	1561	052	柱	00A	VIH 19 h	埋土 2 群	50	-121780.63	-6260.244	5.407	(52.0)	10.8		ヒノキ科	芯持丸木	41	0.1	41	12	週間Ⅱ～Ⅲ
	1562	058	柱 (出ホゾ有)	00A	VIH 17 h	埋土 2 群	84	-121780.492	-6263.054	5.413	(98.2)	7.0		アカマツ	芯持丸木	15	0.1～0.3	15	7.0	週間Ⅱ～Ⅲ
	1563	051	柱	00A	IX H 2 h	埋土 2 群	47	-121805.288	-6262.133	6.021	(70.4)	9.0		マツ属複維管束亜属	芯持丸木	22	0.1～0.2	22	9.0	週間Ⅱ～Ⅲ
	1	1564	柱 (決り有)	00A	IX H 7 h	埋土 2 群	96	-121781.745	-6262.707	5.386	275.2	13.2		コナラ節	芯持丸木	15	0.1～0.5	15	13.2	週間Ⅱ～Ⅲ
3	1565	055	柱	00A	IX H 1 i	埋土 2 群	62？	-121805.952	-6262.048	6.047	193.8	10.7		コナラ節	芯持丸木	約 30	0.1～0.3	約 30	10.7	週間Ⅱ～Ⅲ
	1566	057	柱 (装面版化)	00A	VIH 19 h	埋土 2 群	72	-121793.091	-6260.598	5.377	(183.9)	15.0		コナラ節	芯持丸木	46	0.15～0.2	46	15.0	週間Ⅱ～Ⅲ
10	1567	064	柱	00A	IX H 7 h	埋土 2 群	95	-121781.089	-6261.493	5.507	275.0	16.0		コナラ節	芯持丸木 (又木)	30	0.1～0.2	30	16.0	週間Ⅱ～Ⅲ
	1568	059	柱 (段有)	00A	VIH 17 h	埋土 2 群	85	-121781.482	-6259.78	5.398	(325.0)	14.5		クリ	芯持丸木	40	0.1～0.2	40	14.5	週間Ⅱ～Ⅲ
	1569	060	柱	00A	IX H 4 i	埋土 2 群	89	-121818.993	-6256.993	5.205	(92.4)	9.6		コナラ節	芯持丸木	24	0.15～0.3	24	9.6	週間Ⅱ～Ⅲ
2	1570	068	柱 (決り有)	00A	IX H 3 j	埋土 2 群	107	-121811.163	-6255.597	5.252	204.8	10.9		コナラ節	芯持丸木	30	0.1～0.3	30	10.9	週間Ⅱ～Ⅲ
	1571	062	柱	00A	IX H 4 j	埋土 2 群	91	-121816.806	-6253.687	5.41	(146.8)	10.5		コナラ節	芯持丸木	13	0.2	13	10.5	週間Ⅱ～Ⅲ

表 11-5 木製品一覧表

写真仮番号	報告書用 遺物番号	実測番号	製品名	調査区	グリッド	遺構番号	取上げ no.	X	Y	Z	長さ cm	幅(直径) cm	厚さ(器高) cm	樹種	木取り	年輪数 本	年輪幅 cm	最外周の推定年輪数 本	年輪最外周の推定直径 cm	所属時期
	1572	061	柱	00A	IXH 4 i	埋土 2 群	90	-121817.984	-6257.188	5.281	(148.6)	10.6		コナラ節	芯持丸木	25	0.1～0.2	25	10.6	週間Ⅱ～Ⅲ
	1573	067	柱	00A	VIIH 19 h	埋土 2 群	103	-121791.533	-6261.757	5.263	(108.6)	10.7		クスギ節	芯持丸木(樹皮付)	27	0.1～0.3	27	10.7	週間Ⅱ～Ⅲ
	1574	183-1	柱	00A	VIIH 18 i	埋土 2 群	66	-121787.483	-6258.1	5.405	(129.2)	18.3		シイノキ属	芯持丸木(樹皮付)	35	0.1～0.4	35	18.3	週間Ⅱ～Ⅲ
	1575	225	丸太	00A	VIIH 17 h	埋土 2 群	86	-121781.871	-6261.856	5.516	(15.7)	9.6	8.3	コウゾ属	芯持丸木	9	0.4～0.6	9	9.6	週間Ⅱ～Ⅲ
36	1576	151	礎板? (円形圧痕)	00A	VIIH 18 i	埋土 2 群	38	-121788.695	-6258.051	5.451	(37.9)	(10.7)	1.3	ヒノキ	板目	21	0.05～0.08			週間Ⅱ～Ⅲ
24	1577	030	有扶板 (建築材?)	00A	IXH 3 h	埋土 2 群	30	-121812.802	-6257.973	5.945	(71.8)	19.7	3.0	スギ	板目	75	0.1～0.15	約 200	約 50	週間Ⅱ～Ⅲ
	1578	174	穿孔板 (建築材?)	00A	VIIH 20 h	埋土 2 群	70	-121794.846	-6262.399	5.594	149.3	19.6	3.4	クリ	板目	18	0.3～0.6	35	32	週間Ⅱ～Ⅲ
29	1579	226	有頭角棒 (建築材?)	00A	IXH 7 j	埋土 2 群	94・2	-121781.47	-6261.508	5.519	(36.5)	6.3	2.3	マキ属	分割 1/2(面取り)	16	0.15～0.2	24	8.4	週間Ⅱ～Ⅲ
	1580	107	杭	00A	VIIH 20 i	埋土 2 群	35	-121796.275	-6257.562	5.502	(153.0)	4.4		マキ属	芯持丸木(樹皮付)	14	0.1	14	4.4	週間Ⅱ～Ⅲ
	1581	087	杭	00A	VIIH 20 i	埋土 2 群	67	-121797.784	-6257.815	5.555	(65.2)	3.7		マキ属	芯持丸木	16	0.15	16	3.7	週間Ⅱ～Ⅲ
	1582	108	杭	00A	VIIH 18 i	埋土 2 群	39	-121786.711	-6259.982	5.472	(52.7)	2.6		マキ属	芯持丸木(樹皮付)	17	0.08	17	2.6	週間Ⅱ～Ⅲ
	1583	088	杭	00A	IXH 2 i	埋土 2 群	92	-121807.636	-6259.195	5.495	(89.6)	3.8		マキ属	芯持丸木(樹皮付)	9	0.1～0.3	9	3.8	週間Ⅱ～Ⅲ
	1584	109	杭	00A	VIIH 17 h	埋土 2 群	40	-121779.746	-6261.953	5.583	(71.8)	3.1		マキ属	芯持丸木	12	0.1	12	3.1	週間Ⅱ～Ⅲ
	1585	110	杭	00A	IXH 6 j	埋土 2 群	79	-121780.413	-6262.187	5.525	(98.2)	2.6		マキ属	芯持丸木(樹皮付)	15	0.05～0.15	15	2.6	週間Ⅱ～Ⅲ
25/26	1586	031	穿孔甲板	00A	IXH 1 h	埋土 2 群	17	-121801.817	-6262.597	5.682	44.1	36.3	9.0	クリ	分割 1/2	38	0.2～0.5	72	50.4	週間Ⅱ～Ⅲ
	1587	177	円形板	00A	IXH 1 i	埋土 2 群	43	-121801.217	-6258.557	5.478	(35.3)	9.2	4.5	モミ属	板目	30	0.1～0.5	48	29	週間Ⅱ～Ⅲ
	1588	105	有扶丸棒	00A	IXH 5 j	埋土 2 群	33	-121801.555	-6258.548	5.489	(53.0)	3.9	2.2	スギ	柱目	65	0.08			週間Ⅱ～Ⅲ
	1589	106	丸棒	00A	IXH 1 h	埋土 2 群	3	-121812.702	-6260.311	5.945	74.1	3.1		スギ	分割 1/8(面取り)	20	0.15	40	12	週間Ⅱ～Ⅲ
	1590	111	丸棒	00A	IXH 5 j	埋土 2 群	105	-121822.217	-6252.23	5.324	(39.7)	2.0		サワラ	分割 1/4(面取り)	38	0.05			週間Ⅱ～Ⅲ
21	1591	135	穿孔角棒	00A	IXH 1 h	埋土 2 群	2	-121801.801	-6259.748	5.523	(155.0)	3.8	3.6	スギ	分割 1/4(面取り)	36	0.1			週間Ⅱ～Ⅲ
	1592	141	角棒 (手斧痕残存)	00A	IXH 4 j	埋土 2 群	86 ?	-121803.17	-6259.048	5.498	(103.0)	(6.2)	(3.8)	マキ属	柱目	約 60	0.1			週間Ⅱ～Ⅲ
	1593	140	角棒	00A	VIIH 17 h	埋土 2 群	68	-121783.893	-6260.556	5.301	(137.0)	5.2	4.2	ヒノキ	柱目	80	0.05～0.1			週間Ⅱ～Ⅲ
	1594	138	角棒	00A	IXH 9 i	埋土 2 群	36	-121790.893	-6257.657	5.442	(66.4)	2.4	1.4	ヒノキ	柱目	13	0.1～0.2			週間Ⅱ～Ⅲ
	1595	148	角棒	00A	VIIH 19 h	埋土 2 群	54	-121791.559	-6257.593	5.535	(27.2)	3.8	2.0	ヒノキ	柱目	29	0.15			週間Ⅱ～Ⅲ
	1596	139	角棒	00A	IXH 1 i	埋土 2 群	44	-121802.736	-6260.056	5.582	(54.2)	3.5	3.7	ヒノキ	柱目	14	0.1～0.4	146	73	週間Ⅱ～Ⅲ
	1597	026	穿孔板	00A	IXH 4 j	埋土 2 群	106	-121816.979	-6254.263	5.499	30.6	(7.1)	0.7	ヒノキ	板目	16	0.1			週間Ⅱ～Ⅲ
	1598	178	板	00A	VIIH 20 h	埋土 2 群	52・1	-121795.237	-6261.662	5.539	(63.4)	4.4	1.5	マキ属	柱目	42	0.05～0.15			週間Ⅱ～Ⅲ
	1599	154	板	00A	IXH 4 i	埋土 2 群	71 ?	-121790.771	-6262.516	5.287	(70.4)	5.2	2.3	ヒノキ	板目	24	0.08			週間Ⅱ～Ⅲ
	1600	149	板 (手斧痕残存)	00A	VIIH 19 h	埋土 2 群	55	-121793.156	-6257.398	5.519	(37.0)	(7.8)	1.2	ヒノキ	板目	13	0.1			週間Ⅱ～Ⅲ
	1601	193	板	00A	IXH 5 j	埋土 2 群	93 ?	-121794.148	-6257.924	5.335	18.3	13.9	2.2	スギ	柱目	34	0.15～0.7			週間Ⅱ～Ⅲ
	1602	185	板	00A	VIIH 19 i	埋土 2 群	75	-121794.148	-6257.924	5.335	(108.8)	14.1	4.2	クリ	柱目	49	0.1～0.6			週間Ⅱ～Ⅲ
	1603	184	板	00A	VIIH 19 i	埋土 2 群	74	-121790.12	-6258.095	5.509	(33.7)	10.0	4.6	クリ	板目	19	0.2～0.35			週間Ⅱ～Ⅲ

表 11- 6 木製品一覧表

写真版番号	報告書用 遺物番号	実測番号	製品名	調査区	グリッド	遺構番号	取上げ no.	X	Y	Z	長さ cm	幅(直径) cm	厚さ(器高) cm	樹種	木取り	年輪数 本	年輪幅 cm	最外周の推定年輪数	年輪最外周の推定直径 cm	所属時期
	1604	183-2	板	00A	VIIH 18 i	埋土 2 群	66				(112.0)	8.2	3.6	シイノキ属	柾目	25	0.2 ～ 0.35			廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1605	188	板	00A	IXH 7 j	埋土 2 群	82 ・ 1	-121832.201	-6250.229	5.268	(90.2)	12.5	4.0	シイノキ属	柾目	26	0.3 ～ 0.4			廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1606	191	板	00A	IXH 7 h	埋土 2 群	82 ・ 2	-121832.016	-6252.844	5.274	(15.7)	11.0	3.1	シイノキ属	柾目	約 35	0.3			廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1607	189	板	00A	IXH 7 h	埋土 2 群	82 ・ 1	-121832.016	-6252.844	5.274	(61.8)	12.5	3.8	シイノキ属	柾目	約 30	0.3	54	33	廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1608	190	板	00A	IXH 7 j	埋土 2 群	82 ・ 2	-121832.201	-6250.229	5.268	(38.5)	(13.0)	1.7	シイノキ属	柾目	約 40	0.3 ～ 0.4			廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1609	181	板	00A	VIIH 20 h	埋土 2 群	62	-121796.543	-6261.412	5.606	(92.3)	18.6	4.5	キハダ	板目	27	0.1 ～ 0.2			廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1610	180	分割材 (手斧痕残存)	00A	VIIH 20 i	埋土 2 群	53	-121795.768	-6258.683	5.5	(169.8)	11.3	6.3	マキ属	分割 1/4	77	0.1 ～ 0.15	110	27.6	廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1611	053	分割材	00A	VIIH 19 h	埋土 2 群	51	-121794.704	-6262.417	5.623	(107.0)	10.1	7.1	マキ属	分割 1/4(面取り)	26	0.1 ～ 0.3	42	17	廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1612	153	分割材	00A	VIIH 20 i	埋土 2 群	71	-121795.427	-6261.627	5.592	(49.7)	4.4	1.6	マキ属	分割 1/4	14	0.14	54	15.2	廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1613	179	分割材	00A	VIIH 20 h	埋土 2 群	52 ・ 2	-121795.237	-6261.662	5.539	(95.3)	(9.1)	(5.6)	マキ属	分割 1/4	約 50	0.1			廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1614	182	分割材	00A	VIIH 18 h	埋土 2 群	63	-121786.897	-6262.392	5.16	(94.7)	11.9	5.0	ヒノキ	分割 1/2(面取り)	約 50	0.1	75	15	廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1615	192	分割材	00A	VIIH 18 i	埋土 2 群	87	-121787.758	-6263.24	5.173	23.7	10.7	6.2	クリ	分割 1/8	74	0.08 ～ 0.2	85	24	廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1616	186	分割材	00A	IXH 5 j	埋土 2 群	78	-121822.283	-6252.117	5.578	(71.4)	7.8	5.2	サクラ属	分割 1/8	16	0.2 ～ 0.5	34	24	廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1617	152	残材	00A	VIIH 20 h	埋土 2 群	69	-121798.09	-6262.746	5.797	23.6	8.5	(3.0)	マキ属	分割 1/4	14	0.1 ～ 0.25	52	18.4	廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1618	155	残材	00A	VIIH 20 h	埋土 2 群					(18.6)	4.0	1.4	マキ属	柾目	19	0.1			廻間Ⅱ ～ Ⅲ
	1619	150	残材	00A	VIIH 18 i	埋土 2 群	65	-121788.251	-6258.655	5.388	(21.7)	(3.4)	(1.3)	マキ属	板目	8	0.1			廻間Ⅱ ～ Ⅲ

62	1620	009	曲柄平鍬 CII 類	00A	VIIH 20 i	N 0 f					(22.7)	(7.2)	(2.4)	アカガシ垂属	柾目	30	0.2 ～ 0.3			古墳初頭
63	1621	016	曲柄三文鍬 D 類	00A							(24.3)	(7.6)	(2.4)	クヌギ節	柾目	13	0.4 ～ 0.8			古墳初頭
15	1622	104	櫛状	II A K	試掘	TT9-1 7 層					(110.7)	12.6	4.4	スギ	板目	14	0.2 ～ 0.4	95	57.2	古墳初頭
7	1623	035	櫛子	00B	IXH 11 g		16				(124.0)	14.7	6.6	スギ?	柾目	33	0.3 ～ 0.5	81	65	古墳初頭
	1624		横梁材 (建築材)	00A ?											板目					古墳初頭
	1625		穿孔角棒	00A ?											板目					古墳初頭
	1626	287	丸棒	00A							(19.5) (6.8)	4.8		シイノキ属	芯持丸木	6	0.3	6	4.8	古墳初頭
	1627	173-2	角棒	00A	VIIH 19 h						(10.6)	1.7	0.8		柾目	43	0.05			古墳初頭
	1628	224	板	00A	VIIH 18 i	東壁 N 0 f					(103.0)	(13.0)	2.9	ヒノキ	板目	22	0.05 ～ 0.15			古墳初頭
	1629	173-1	板	00A	VIIH 19 h						(37.9)	4.1	1.7	ヒノキ	板目	19	0.08			古墳初頭
	1630	147	分割材	00A	VIIH 20 i						48.2	10.7	6.8	ヒノキ	分割 1/2(面取り)	68	0.05 ～ 0.15	約 100	20	古墳初頭

38	1631	278	杵型田下駄横木	00A		埋土 1 群					39.8	5.2	2.4	コウヤマキ	板目	31	0.08			古代
45	1632	043	曲物底板 (穿孔)	00A	IXH 3 h		7	-121810.131	-6260.628	6.006	15.0		1.0	ヒノキ	柾目	約 200	0.08			古代
37	1633	044	穿孔板 (曲物底板転用)	00A	VIIH 18 h	埋土 1 群	42	-121798.938	-6262.172	5.948	(42.2)	(8.9)	1.1	ヒノキ	板目	約 20	0.05			古代

42	1634	045	曲物底板	00B	VIIH 14 j	俵 1	47				(14.2)	(3.3)	0.8	ヒノキ	板目	6	0.1			古代
41	1635	049	穿孔板 (曲物底板転用)	00B	IXH 11 g						(31.3)	(6.7)	1.3	ヒノキ	板目	58	0.05			古代
43	1636	046	曲物底板	00A ?							(30.5)	(11.5)	0.9	ヒノキ	板目	約 110	0.05			古代
39	1637	047	火鑪臼	00A ?							31.7	4.8	1.6	スギ	板目	25	0.05	178	17.8	古代
40	1638	048	穿孔板	00A ?							23.4	8.0	1.5	ヒノキ	板目	31	0.05			古代

4 下懸遺跡D区SK 25 出土の銅鏃について

下懸遺跡の集落内において良好な土器集積と供伴して、銅鏃・小型鉄製品各1点が出土した。ここでは特に、銅鏃についてあらためて整理しておくことにしたい。五角形銅鏃(図71-1391) 比較的保存状況が良好な篋被付の五角形銅鏃であり、計測値は以下のようになる。鏃長44mm・鏃身長23mm・鏃幅11mm・鏃厚さ3.0mmで、特徴的な篋被長が10mmで厚さ6.3mmを測る。茎は2.2mmの断面円形状で、長さは11mm。重さ4.7g。全体の形状は逆刺を意識した作りの五角形の鏃身に対して、大きな円錐状の篋被を伴う特徴的なカタチであり、それに対して茎は細く短い。鏃身は中央に明瞭に鑄が通り、やや不鮮明であるが朝日遺跡の事例を考慮に入れると、逆刺を伴うものと判断できる。形状は五角形で上部のエッジ両端が明瞭で、下部に比べてやや幅広になる。逆刺の下部には断面楕円形状を呈する円錐形状の篋被が取り付く。篋被から茎にかけての側面には、上下鑄型の合わせ面が明瞭に残る。なお茎端部には切断面が見られず、現状のカタチが、鑄込み段階の「形状と大きさ」をそのまま留めているものと想定したい。したがって濃尾平野の多くの銅鏃と同じく、おそらく単独の上下鑄型を伴うものであり、いわゆる連鑄式銅鏃ではないと思われる。なお表面の腐食のため、明瞭な研磨痕跡等は確認できない。

(1) 銅鏃の所属時期

まず、その所属時期について整理してみたい。出土したSK 25からは明瞭な供伴土器が見られる。検出状況から見ても、金属製品がこれらの遺物と相関関係を保っている点は明らかであり、二次的な混入等は考える必要はない。土器は特に高杯等の形状や技法などから、矢作川中流域の土器様式として設定した、川原上層Ⅲ式後半期を中心としたものであると判断できる。したがって濃尾平野低地部での廻間Ⅰ式後半期に主体を置くものと考えておきたい。暦年代ではおおむね二世紀後葉の時期を想定しておくことができる。下懸遺跡出土の銅鏃の特徴は、鏃身の形と篋被部の存在にあるが、特に東海地域での篋被付の銅鏃の初源的な資料として極めて重要な資料と評価することができる。

(2) 下懸系銅鏃の特徴とその評価

ここで、あらためて下懸遺跡出土の銅鏃の特徴を整理し、編年的な位置づけを踏まえてまとめておく事にしたい。まず、その特徴であるが、第1に鏃身のカタチが特徴的な五角形を呈する。具体的には各エッジ端部が明瞭で頂部が長く、さらに上部両端が幅広であり、どちらかというと槍先状になる。鏃身に取り付く篋被部は鏃身に対して長く、厚さを保つ袋状の形状となる。対して茎部は小さく細く、対象的なあり方を見せる。以上のようなカタチの特徴の中で、上部両端が幅広の槍先状の形態は、明らかに尾張低地部に分布する東海系銅鏃とは異なるものである。類似品を搜すと、篋被は見られないが、安城市内の弥生集落である岡島遺跡出土の多孔銅鏃が存在する。所属時期は、供伴した土器からは廻間Ⅱ式初頭段階に併行するものと思われる。また東三河地域であるが、欠山遺跡出土の銅鏃も近い形態をもつものと思われる。そしてこの特徴的な鏃身のカタチを大型化したものが、三重県鳥羽市の白浜遺跡から出土している。同様に篋被を伴うものである(図72-8)。資

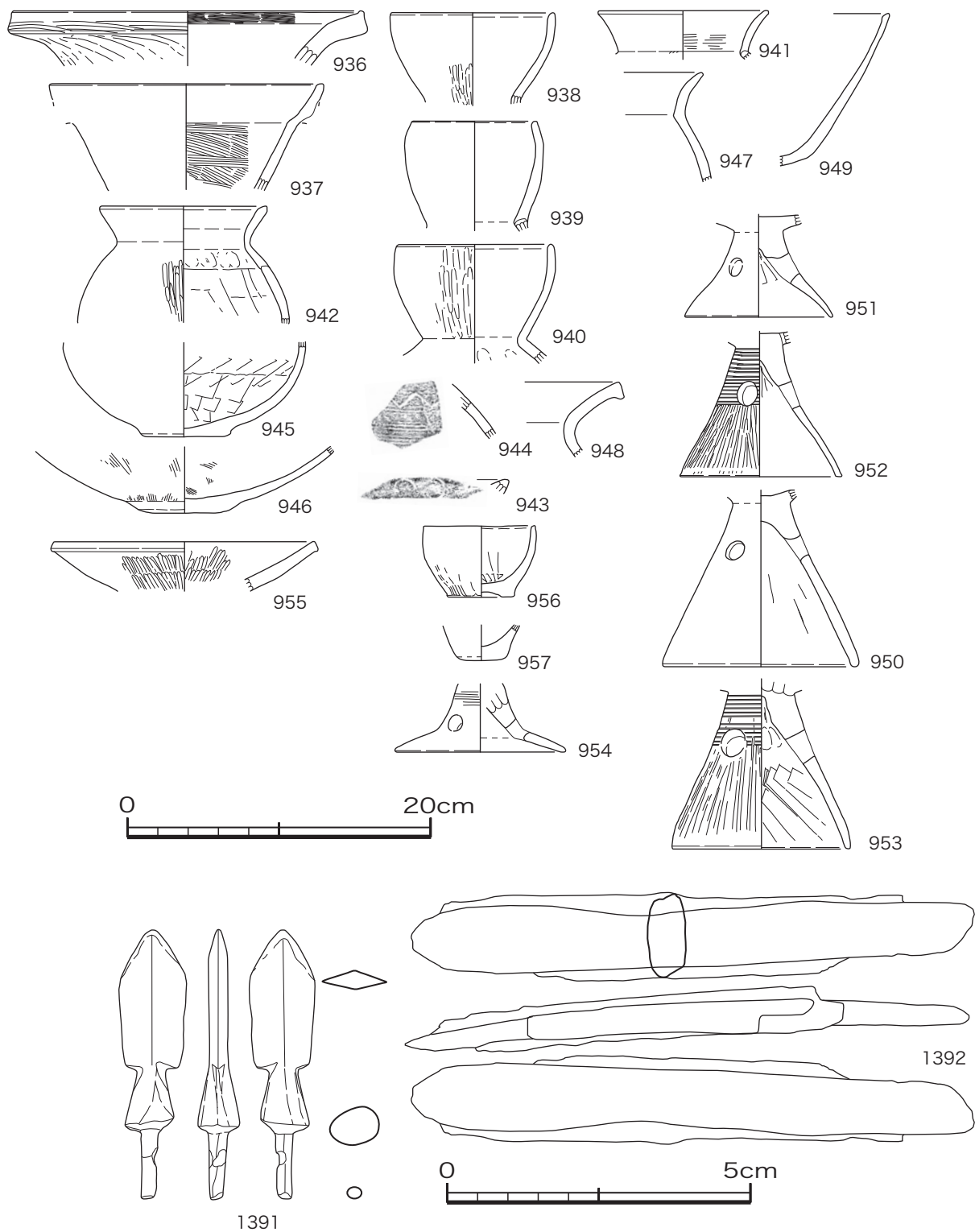


図 71 SK 25 遺物

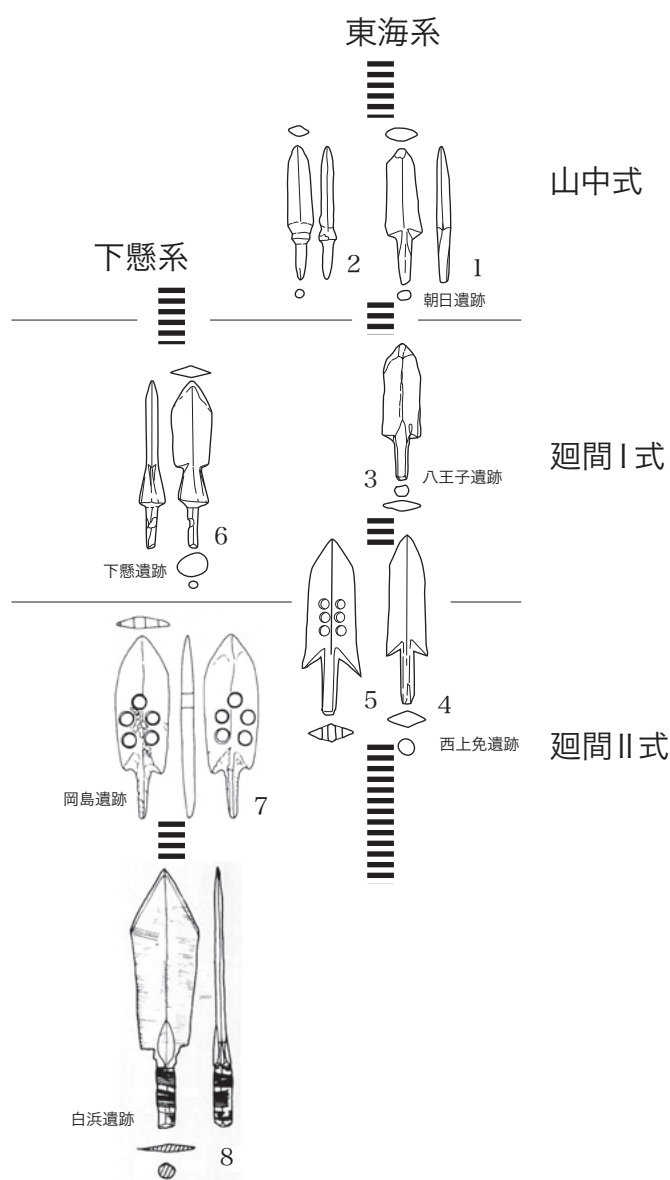


図 72 下懸系銅鐏の変遷

料は限定しているがおおむね廻間Ⅰ式からⅡ式期にかけて、三河地域から幡豆の海を介して一定の広がりをもつことが推測される。したがって、現状では下懸遺跡出土の銅鐏の鐏身形は、地域性を保有するものであり、あるいは矢作川下流域に一定の分布域を想定できる可能性がある。ここでは下懸系銅鐏として仮称しておきたい。ただ、その淵源については不明瞭である。特に当地域では中期以来の石鐏分布が消極的な地域であり、あるいは骨鐏・木鐏系を写した可能性を含めて再検討する必要がある。いずれにしろ今後の類例の増加を待ちたい。次に箆被についてであるが、東海地域の銅鐏に箆被を持つ形態として最古の事例は、愛知県清須市の朝日遺跡出土の資料と考えられる（図 72-2）。その形状は長細の鐏身に小さな箆被を付加させたもので、山中式後半期に遡るものと推測できる。ただ、尾張低地部の銅鐏出土例は多数見られるが、廻間Ⅰ式までに所属する銅鐏に箆被が見られる資料はほとんど存在しない。それに比べてすでに指摘されているように、矢作川下流域

では近接する安城市二夕子遺跡から同様な篋被付きの銅鏃が報告されている。所属時期はやや不明瞭ながら、川原上層Ⅲ式後半期を大きく下降する必要はない。したがって篋被付の下懸系銅鏃は、すでに二世紀後葉段階で下懸遺跡を含めた、鹿乗川流域遺跡群に存在し、矢作川下流域を中心に独自の変遷と地域的広がりをもつ作品群の可能性が高い。鏃と矢柄の形態やその拵え・色彩等は、本来地域社会の中で培われたものであり、部族社会を識別する表象と考える必要がある。実は銅鏃はその一部をわずかに残しているものにすぎない。以上、ここでは「下懸系」という地域性を保有した銅鏃の存在をあらためて指摘し、その変遷と評価を今後の研究に委ねることにしておきたい。(赤塚次郎)

参考文献

- 神谷真佐子 2003 「銅鏃一考察 篋被付柳葉式銅鏃について」『水野正好先生古希記念論文集 続文化財学論集』
- 北島大輔 2004 「特論5 銅鏃」『新編安城市史10 資料編 考古』
- 赤塚次郎 2007 「朝日遺跡における金属製品の分布とその特徴について」『朝日遺跡Ⅶ』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第138集

5 下懸木簡を巡って

本書第Ⅲ章で報告したように、今回の調査ではA区NR 02埋土1群から、奈良時代と考えられる木簡（以下、下懸木簡）が1点出土している。

図版45-1～3が関連すると考えられる資料である。木簡は1の須恵器杯よりやや下層から出土している。1の須恵器杯が折戸10号窯式に帰属することから、時期は8～9世紀と理解しておく。

ここで、下懸木簡の出土地点の性格を考えておく。まず注意したいのが、杯A(1)と長頸瓶(3)は墨書土器となっている。前述したように、A区NR 02埋土1群からは出土遺物がほとんど得られていない。墨書土器は2点得られたのみであるが、A区NR 02埋土1群中では高頻度であると言えよう。

ところで、谷地形ないし谷地形に掘削された溝から墨書土器が一定量出土する事例を近隣で探すと、桜林遺跡(伊藤他 1998)や惣作遺跡(鈴木 2005)、河原遺跡(池本 2004)などがある。下懸遺跡A区NR 02埋土第1群も現状では現象レベルの類似が指摘できるに過ぎないが、これらと同列に位置づけられるのかもしれない。なお、このうち桜林遺跡の事例は、報告書では同時に出土した斎串や鏃形などの木製品を積極的に評価して、祭祀との関連を想定している。

ただし、下懸木簡と墨書土器を伴う祭祀との関連は指摘できない。下懸木簡については、本報告に先行した資料紹介(池本・福岡 2002)や、これを引用した西宮秀紀氏による分析(西宮 2008)が知られているが、ともにA区NR 02に偶発的に入り込んだものとして理解している。また、いずれの論考もキリオリと習書された『四書五経』に着眼し、国府ないし碧海郡衙に関わりを持つ人物との関連を想定している。

前述したように、下懸遺跡の調査区内では古代に属する遺構はほとんど確認できなかった。調査区外に集中して存在する可能性も低いだろう。また、下懸遺跡の周辺にも古代の

墨書土器

『四書五経』



※撮影 奈良文化財研究所

図 73 下懸木簡赤外線写真

遺跡がいくつか知られているが、奈良時代以降に碧海郡の中核的な寺院となる寺領廃寺(川崎 2004) が近接して所在することは注目できるものの、郡衛の存在を想定できるような状況ではない。下懸木簡が下懸遺跡から出土した事実は、やはり偶発的と言わざるを得ないだろう。(池本正明)

参考・引用文献

- 伊藤基之他 1998 『桜林遺跡』 安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
池本正明 2004 「河原遺跡」『新編 安城市史5 資料編 古代・中世』
鈴木正貴 2005 「惣作遺跡」『平成16年度 愛知県埋蔵文化財センター 年報』(財)愛知教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
池本正明・福岡猛志 2002 「下懸遺跡出土の木簡」『研究紀要』第3号 (財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
西宮秀紀 2008 「下懸遺跡出土木簡」『新編 安城市史1 通史編 原始・古代・中世』
川崎みどり他 2004 『寺領廃寺』 安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集



図版



A区NR02出土遺物



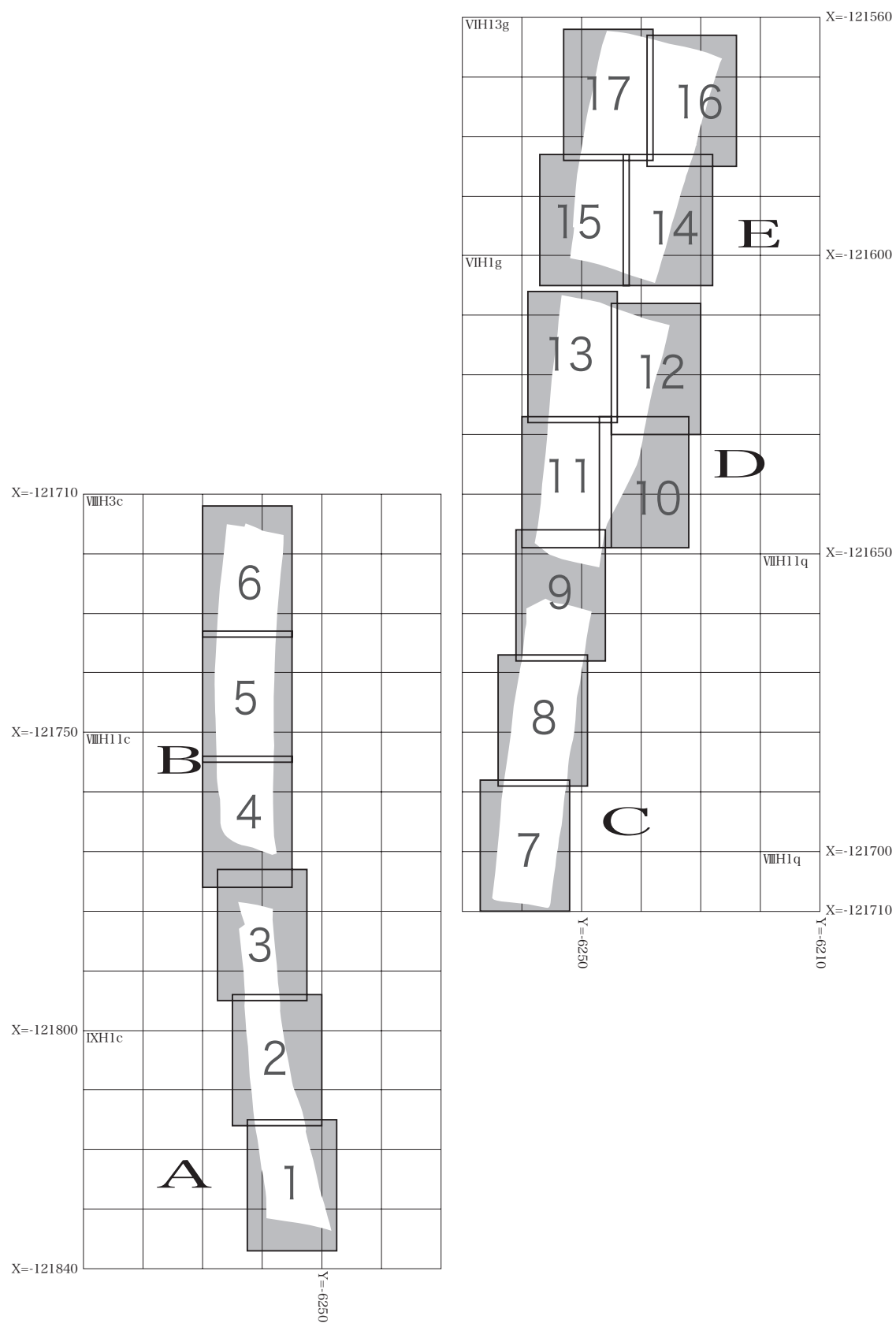
銅鏃と小型鉄製品

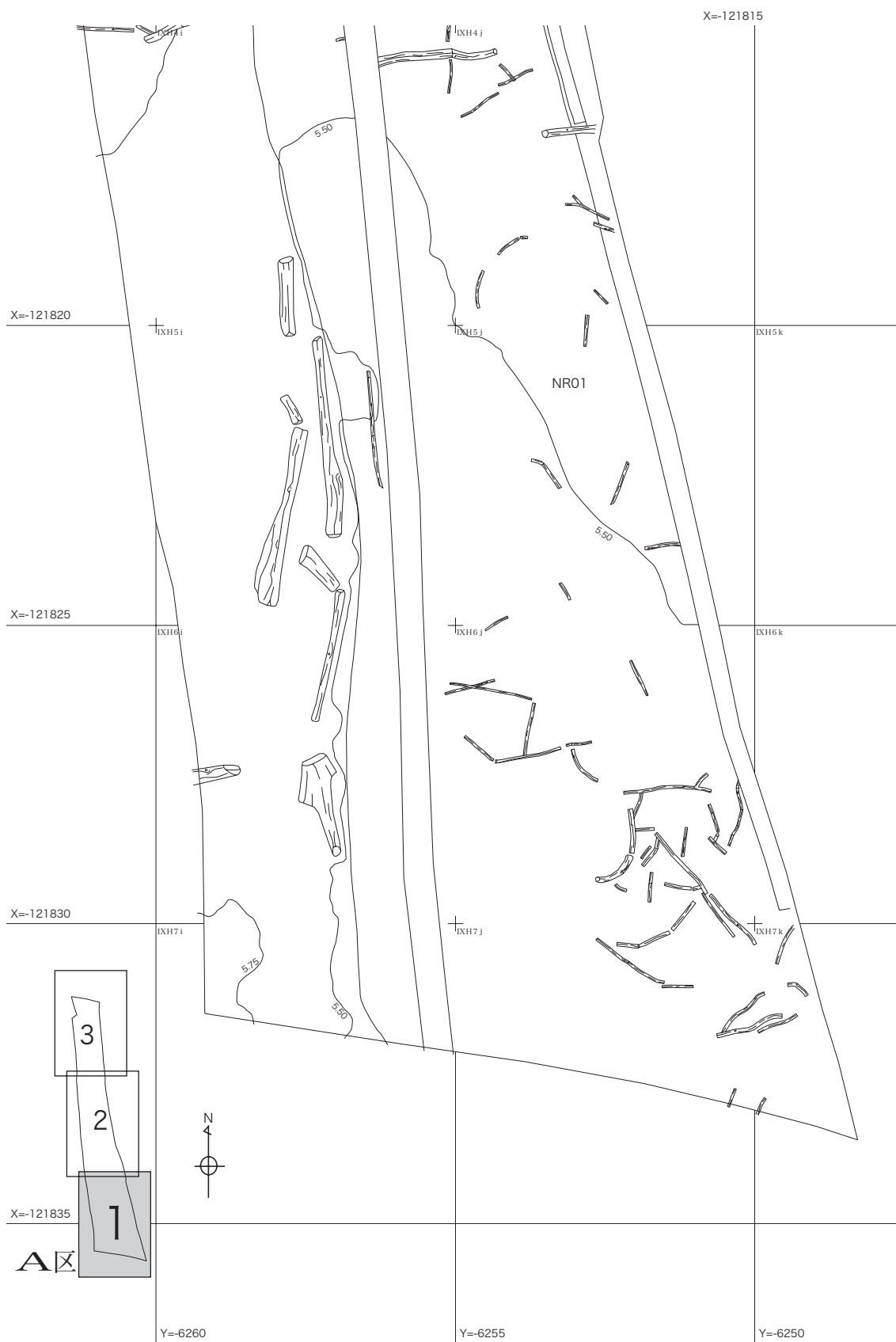


木簡と関連遺物

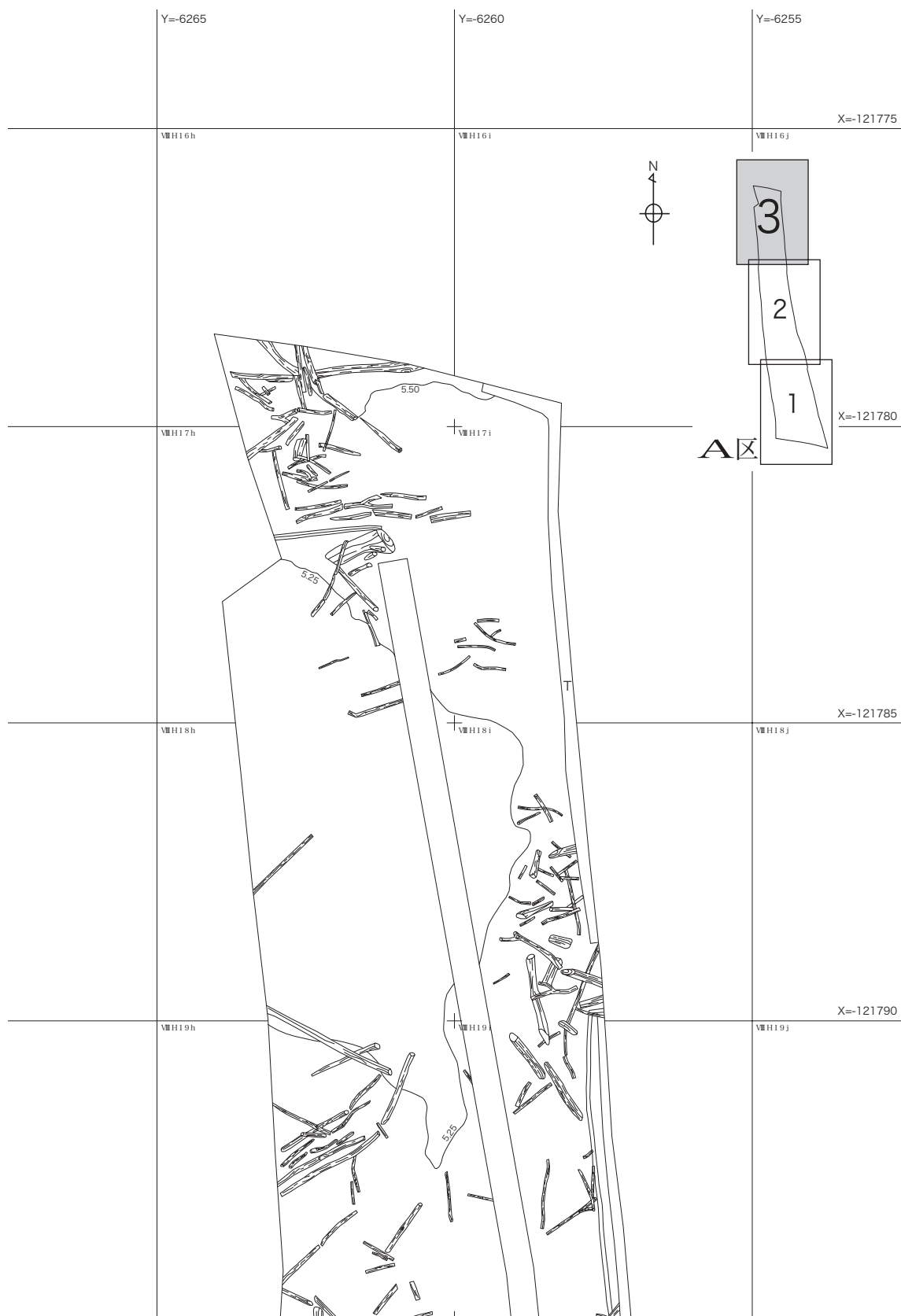


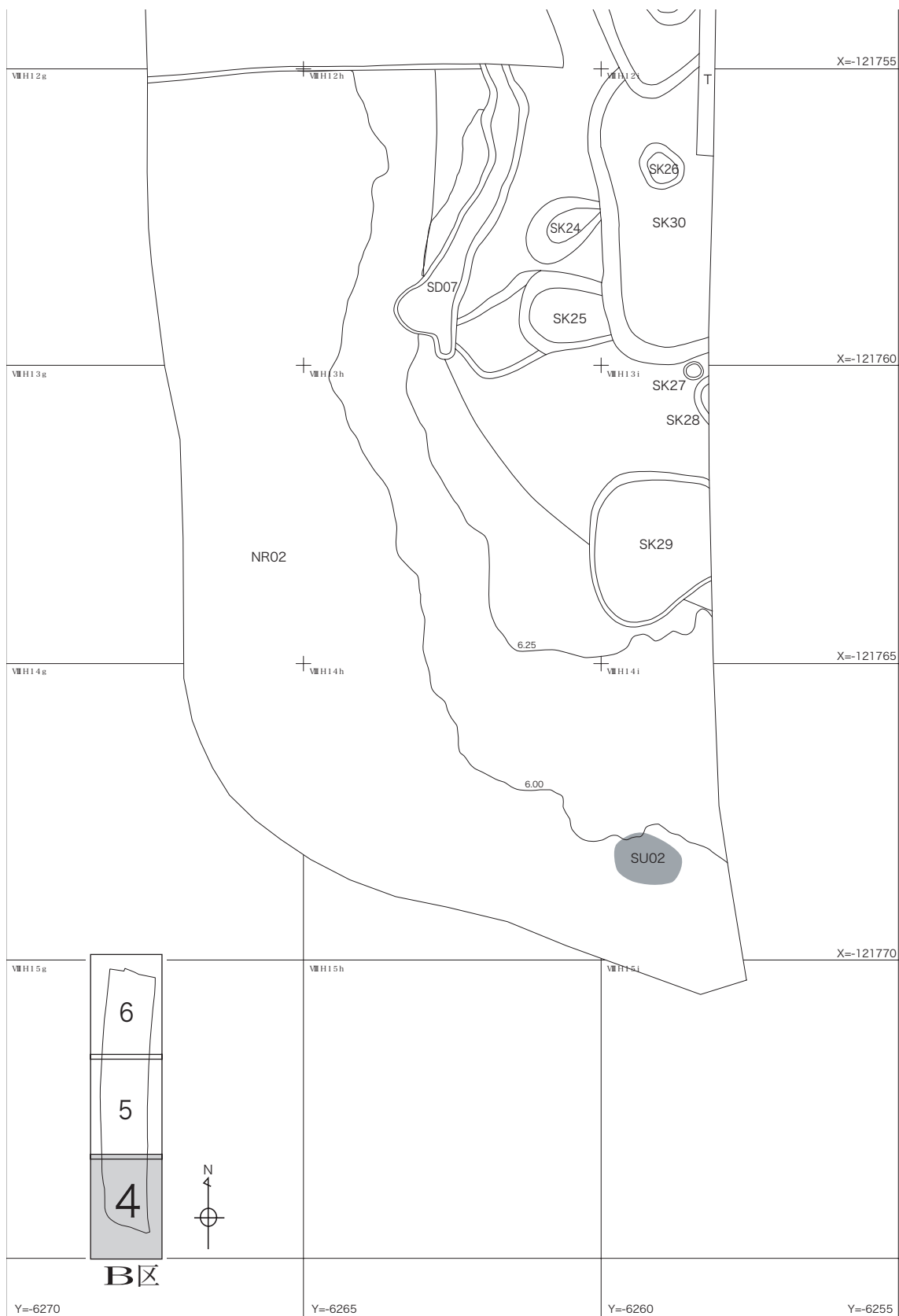
B区SU01出土遺物

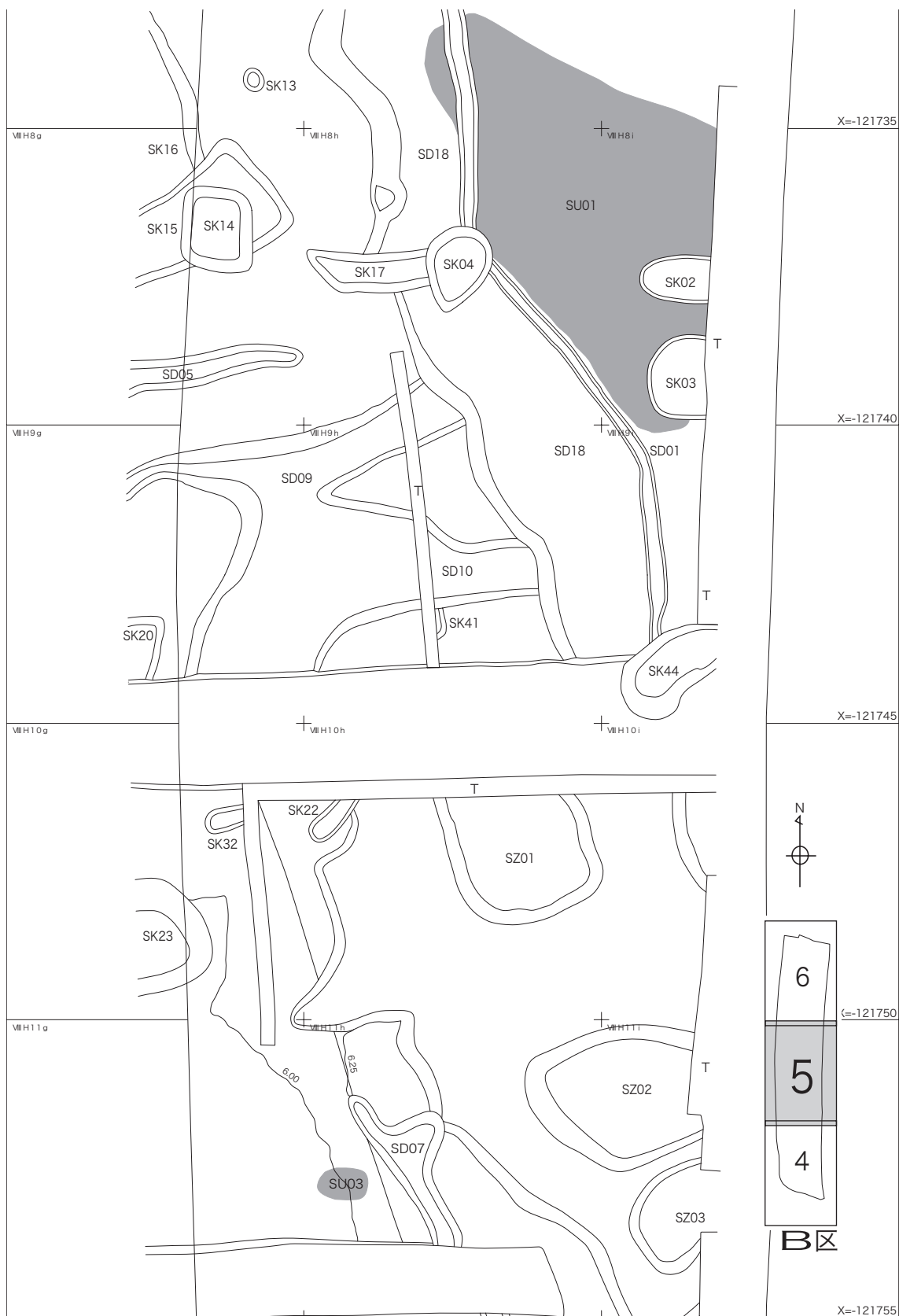


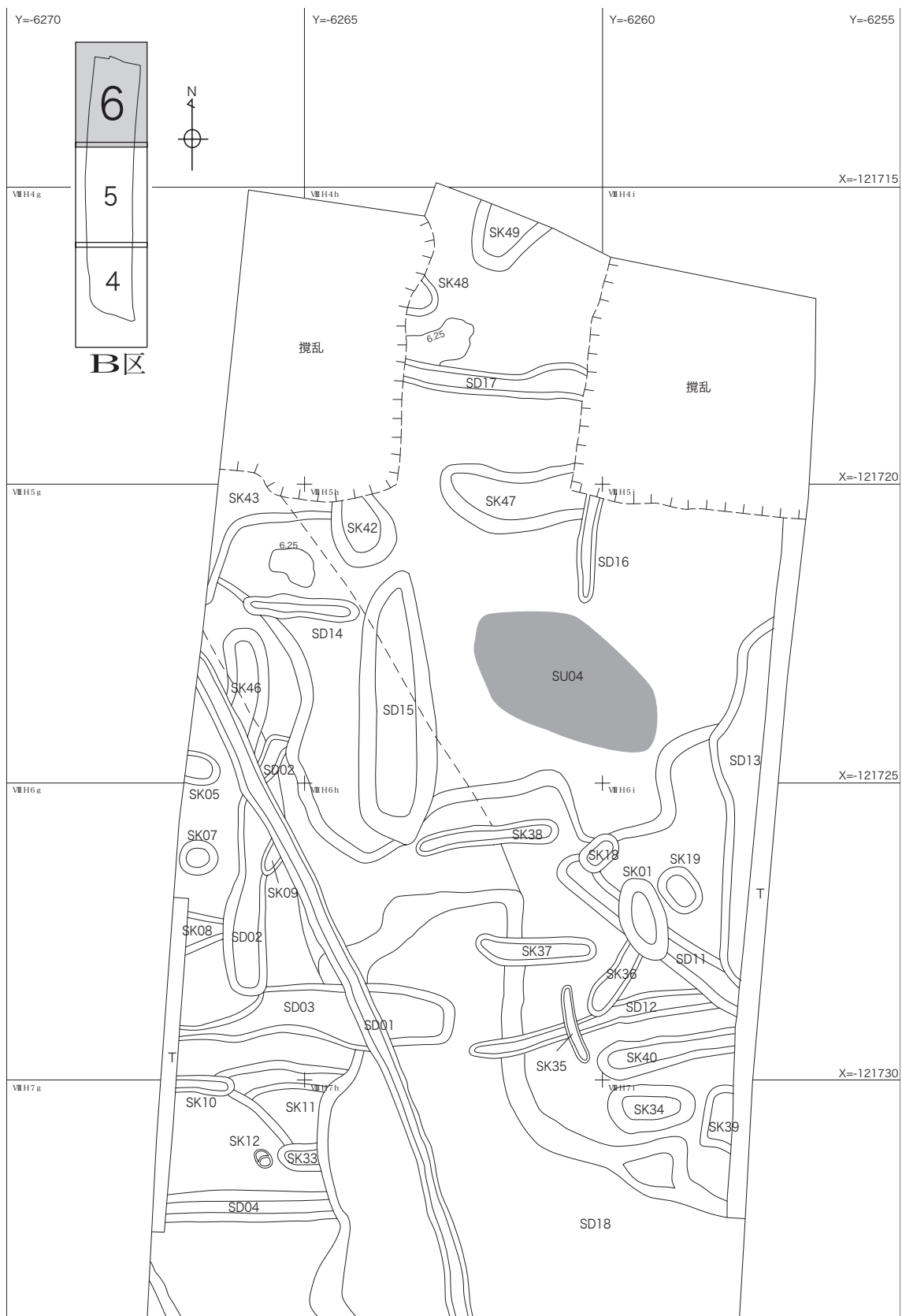


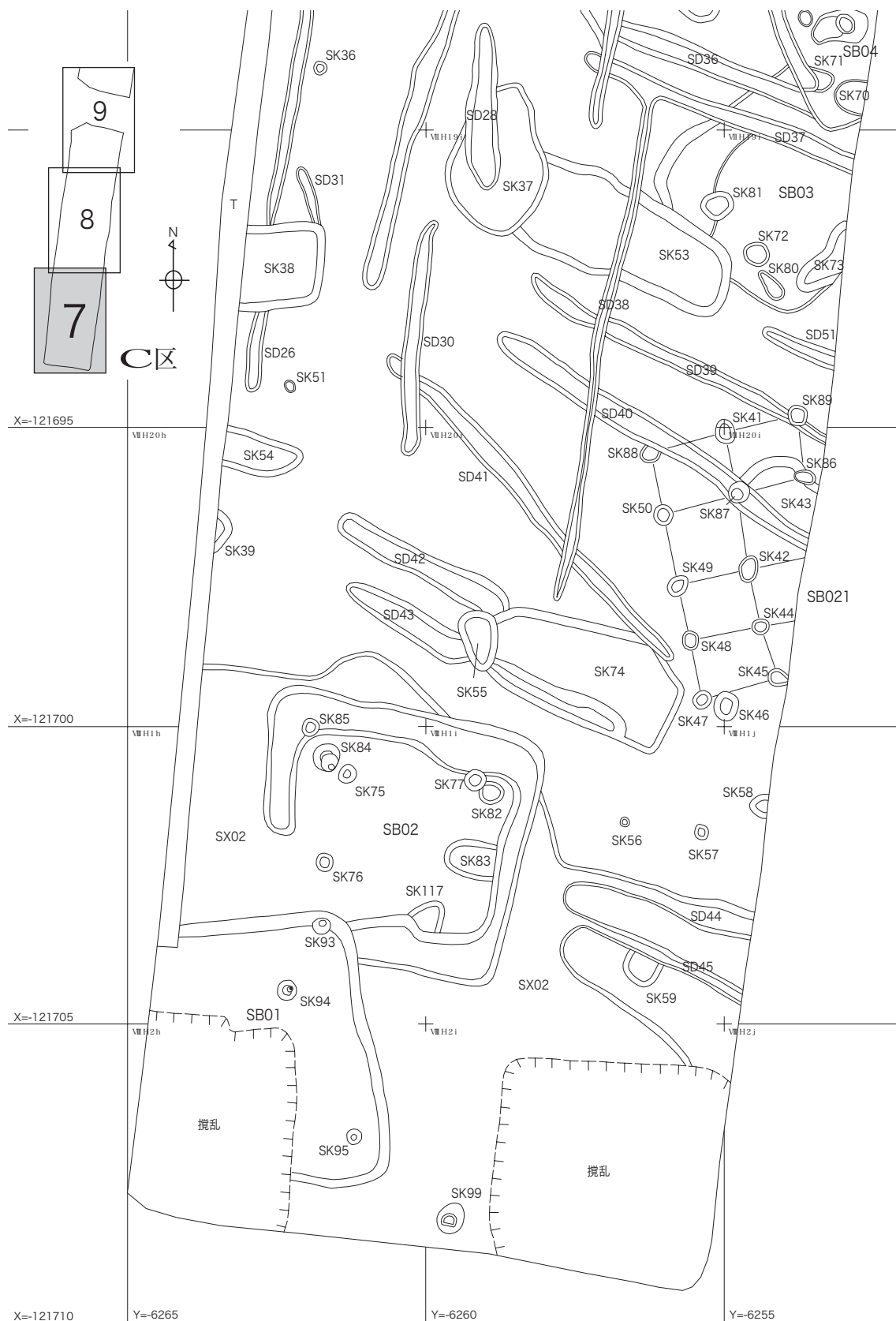


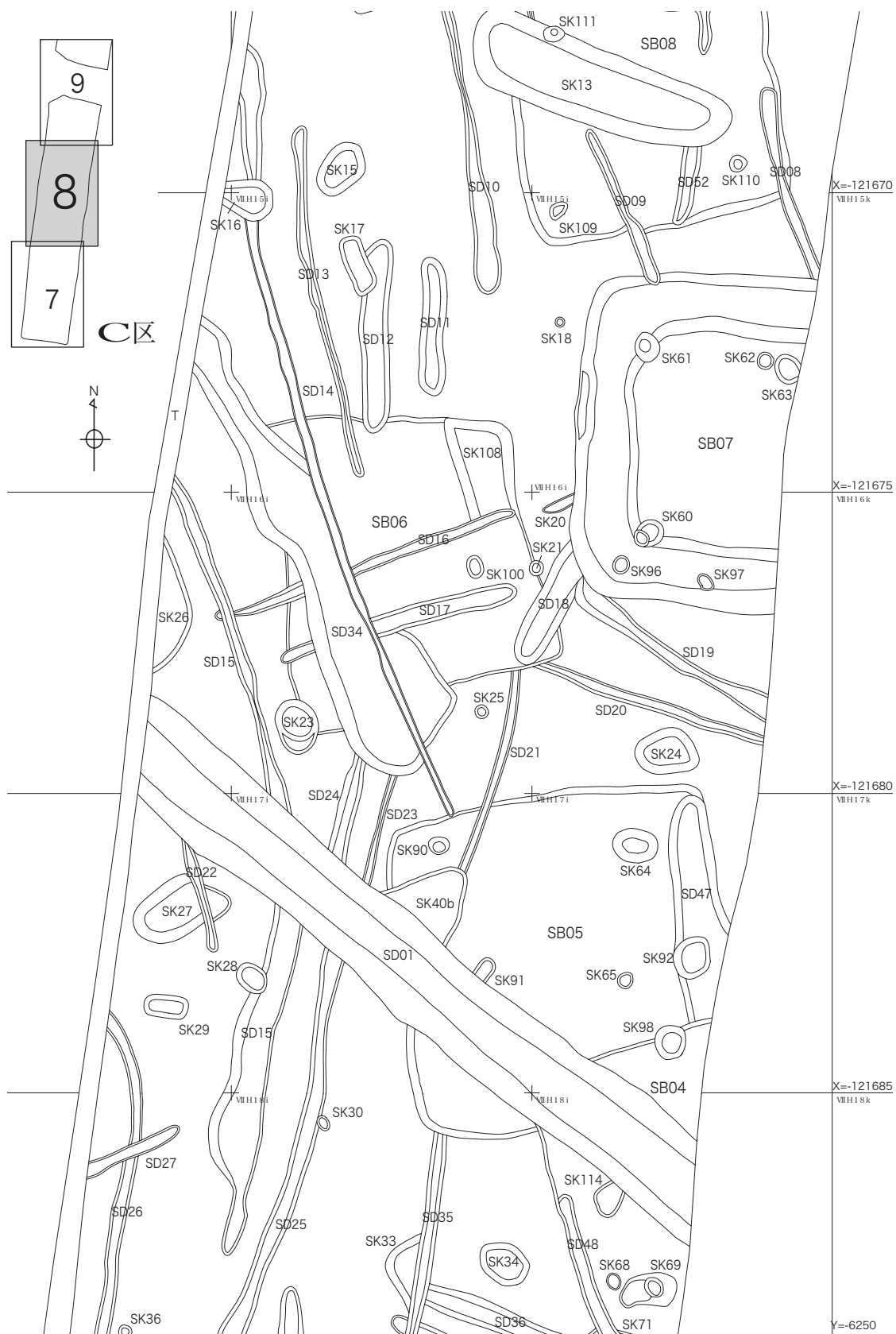


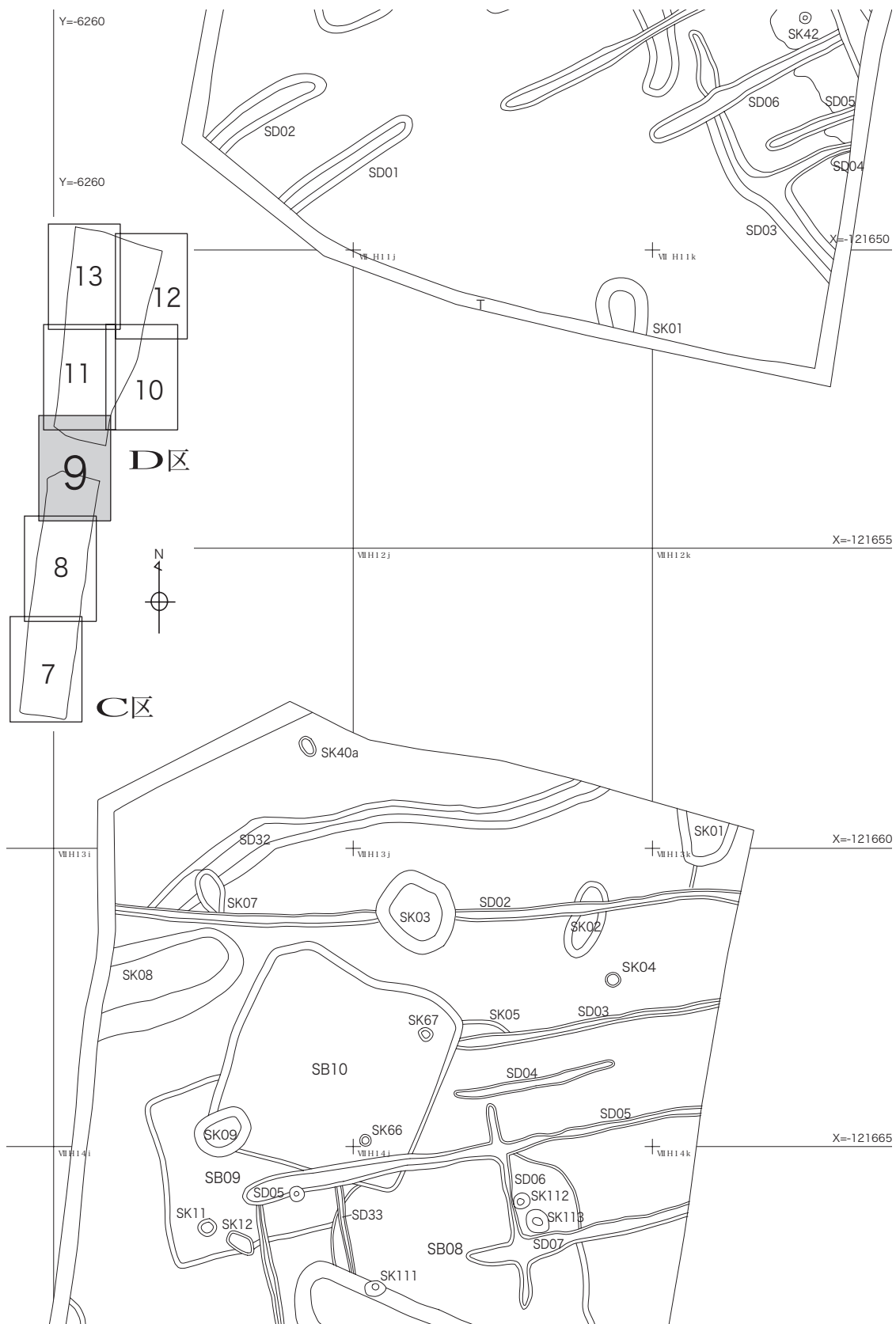


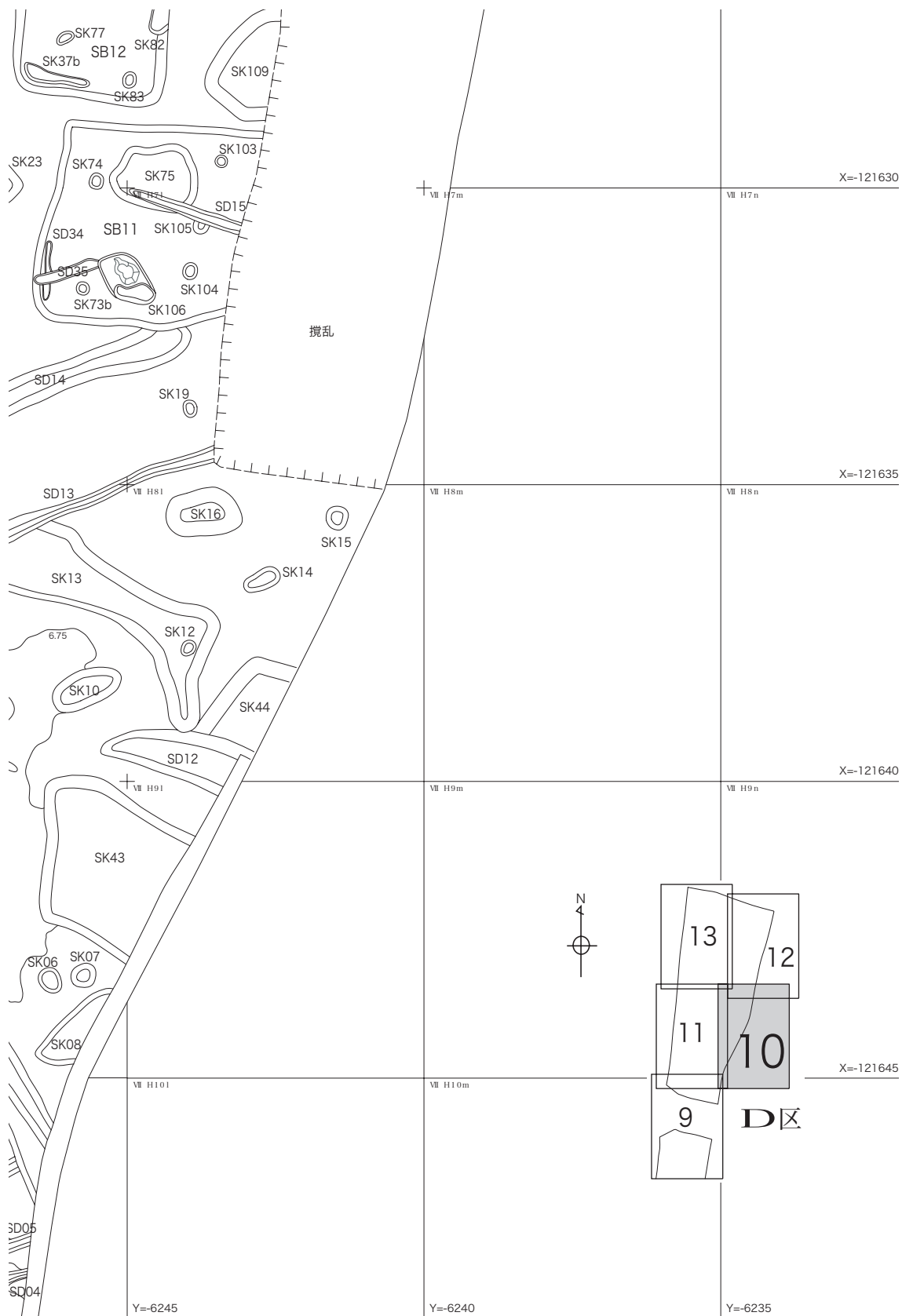


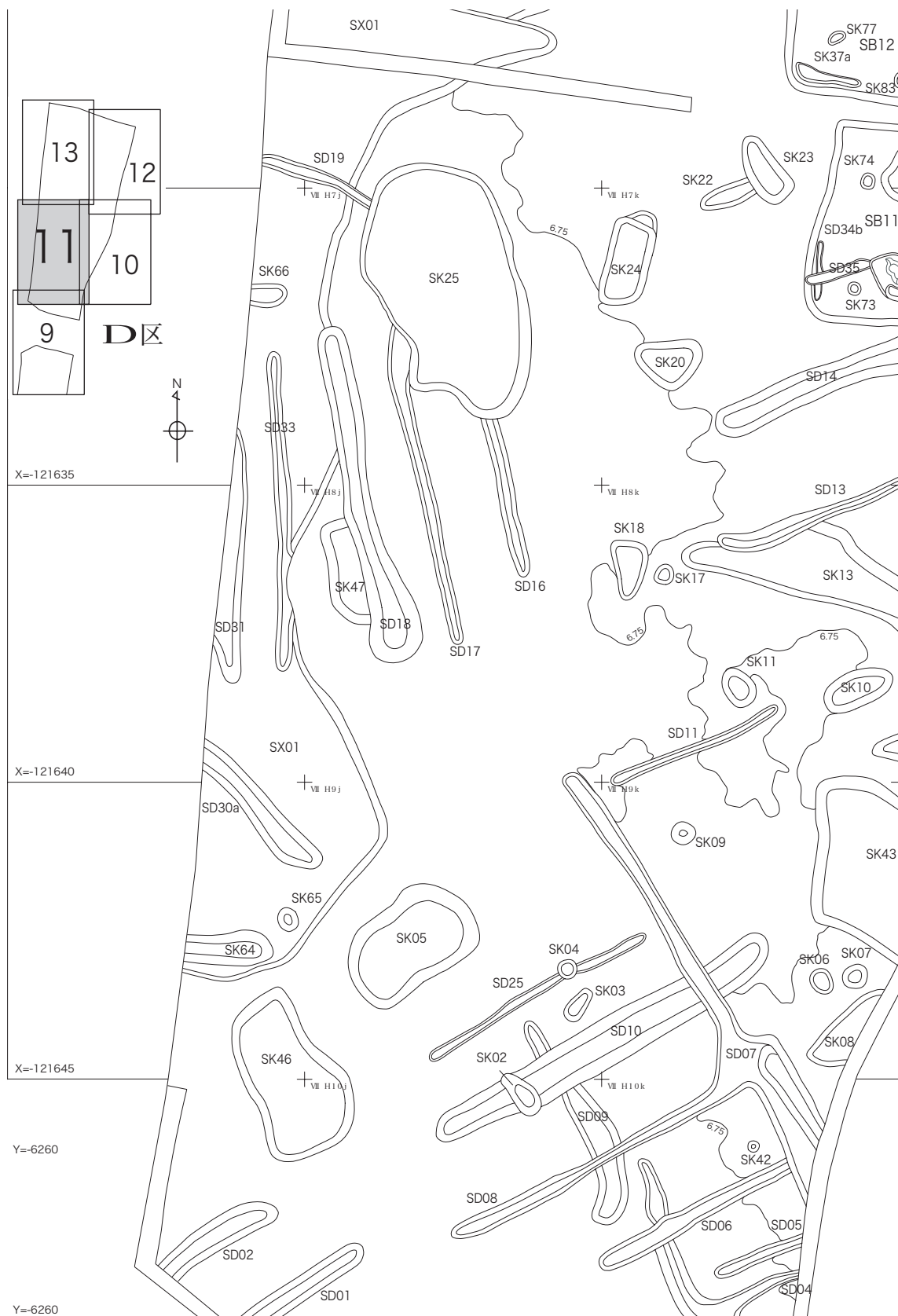


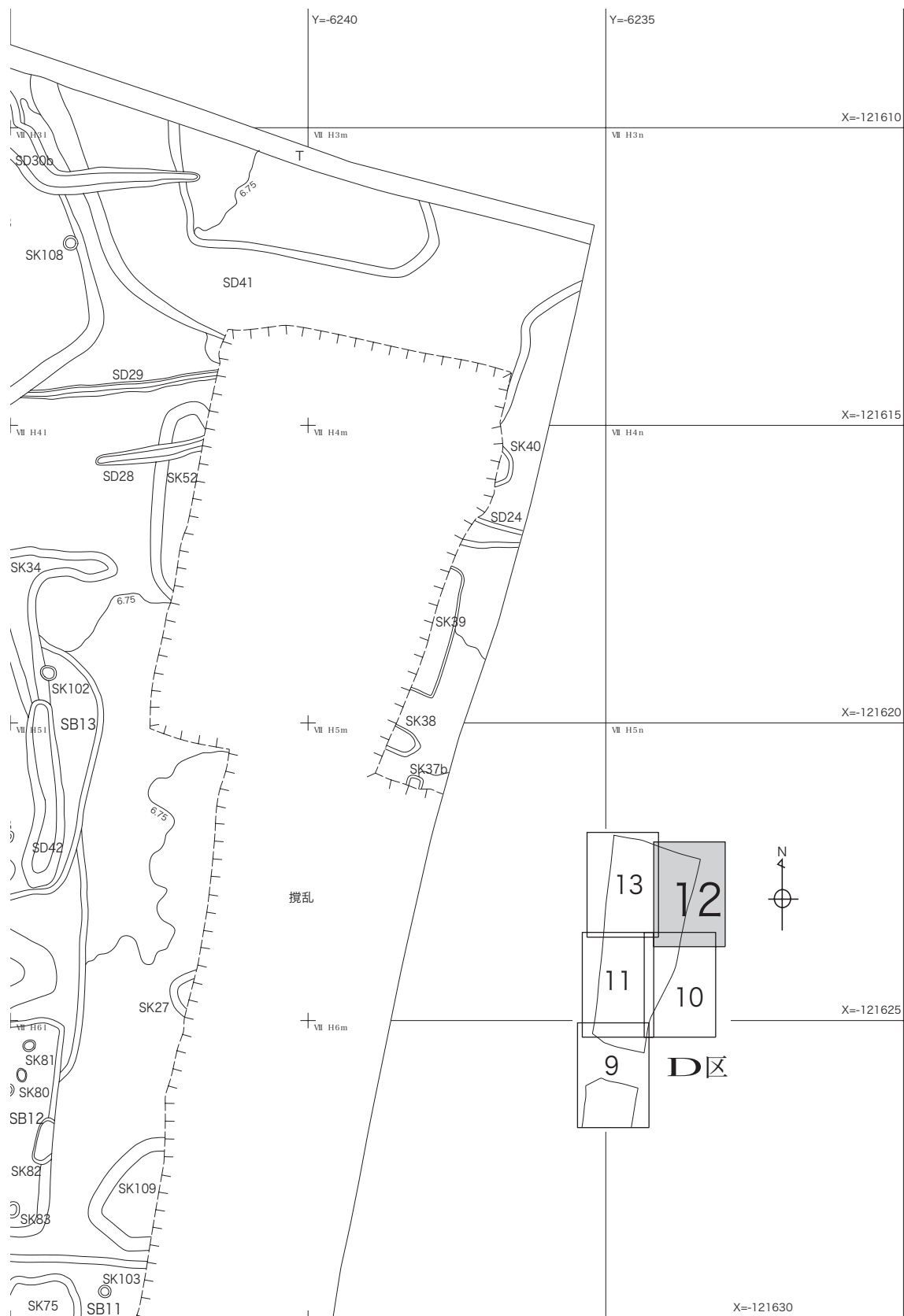


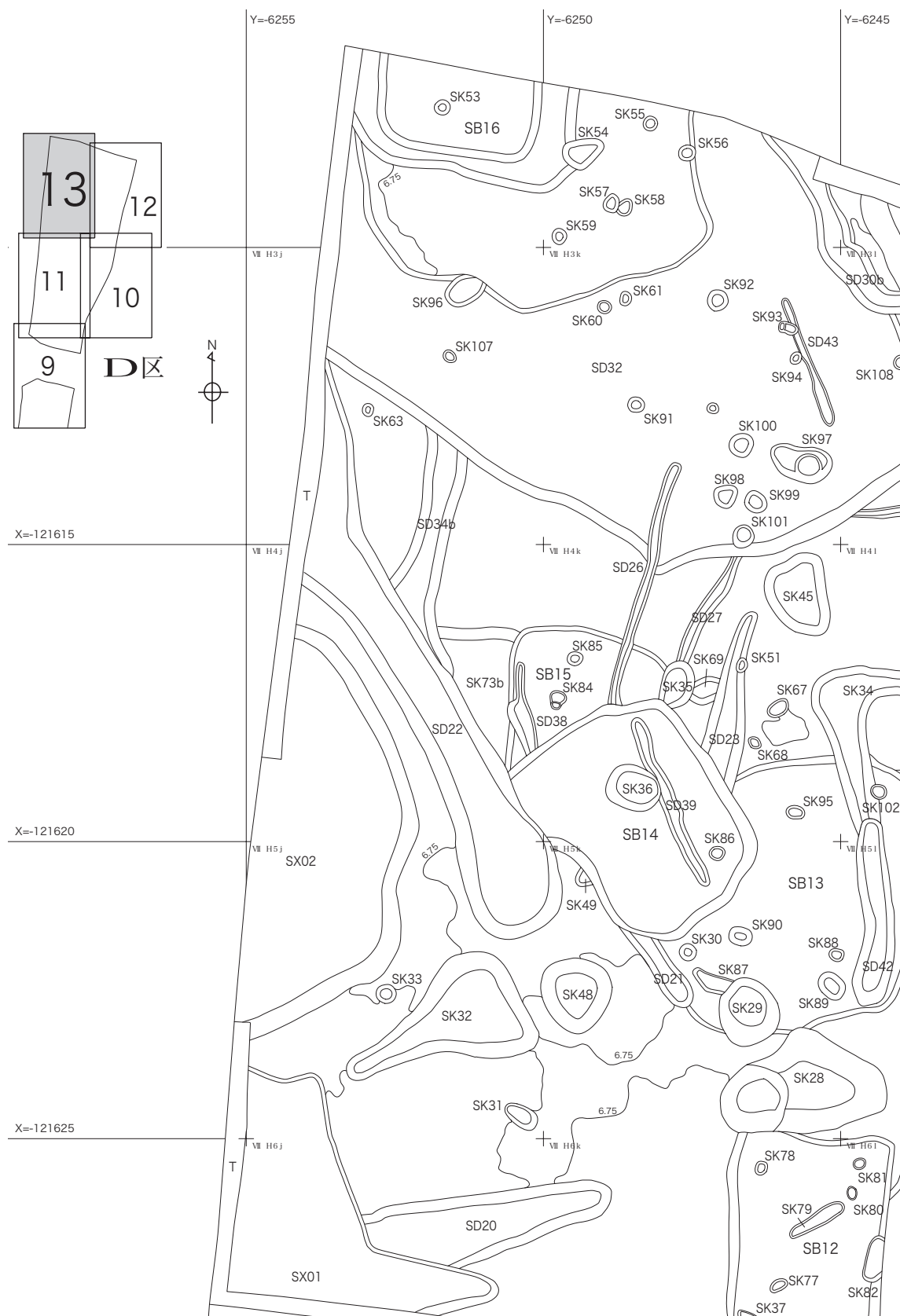


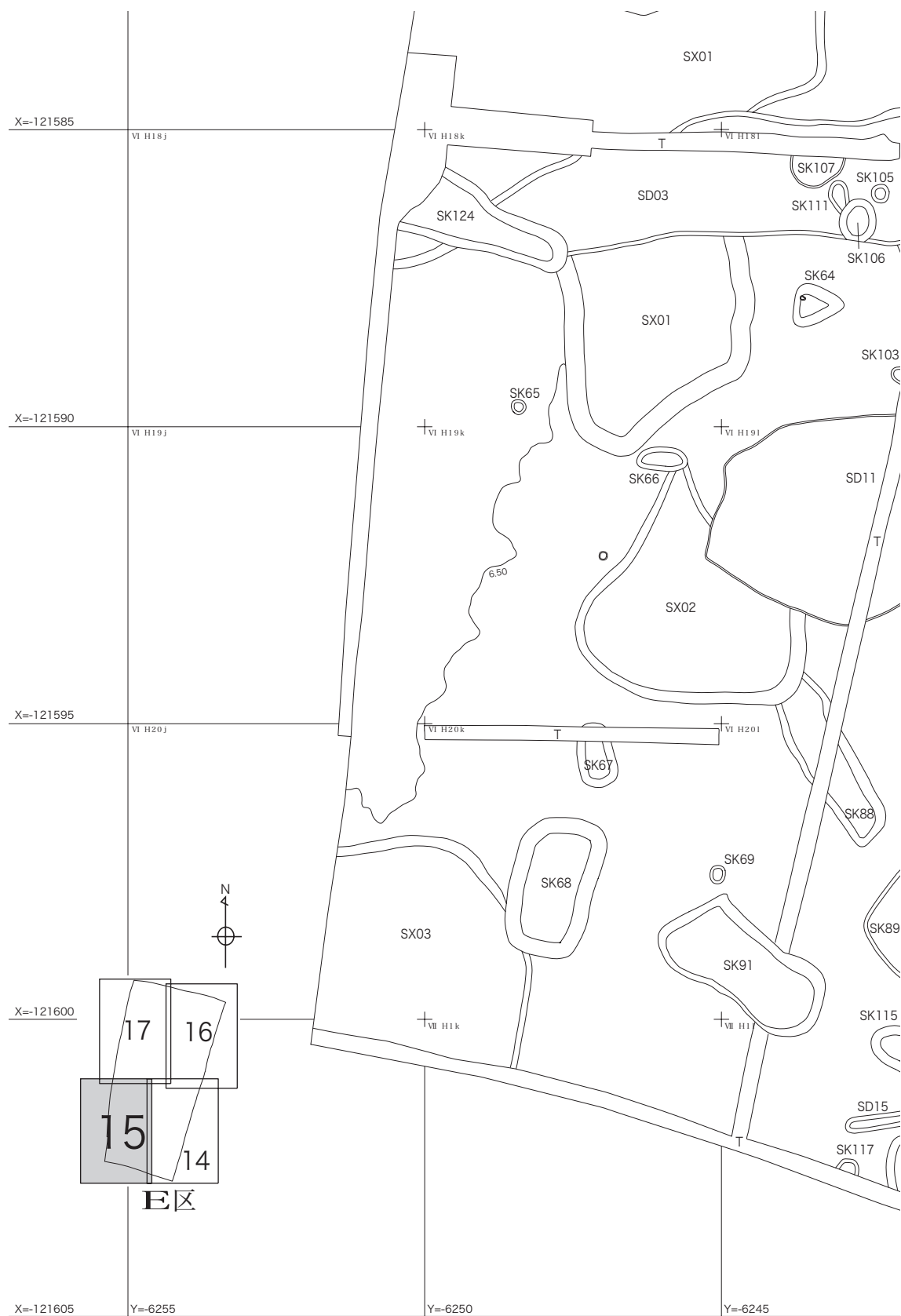


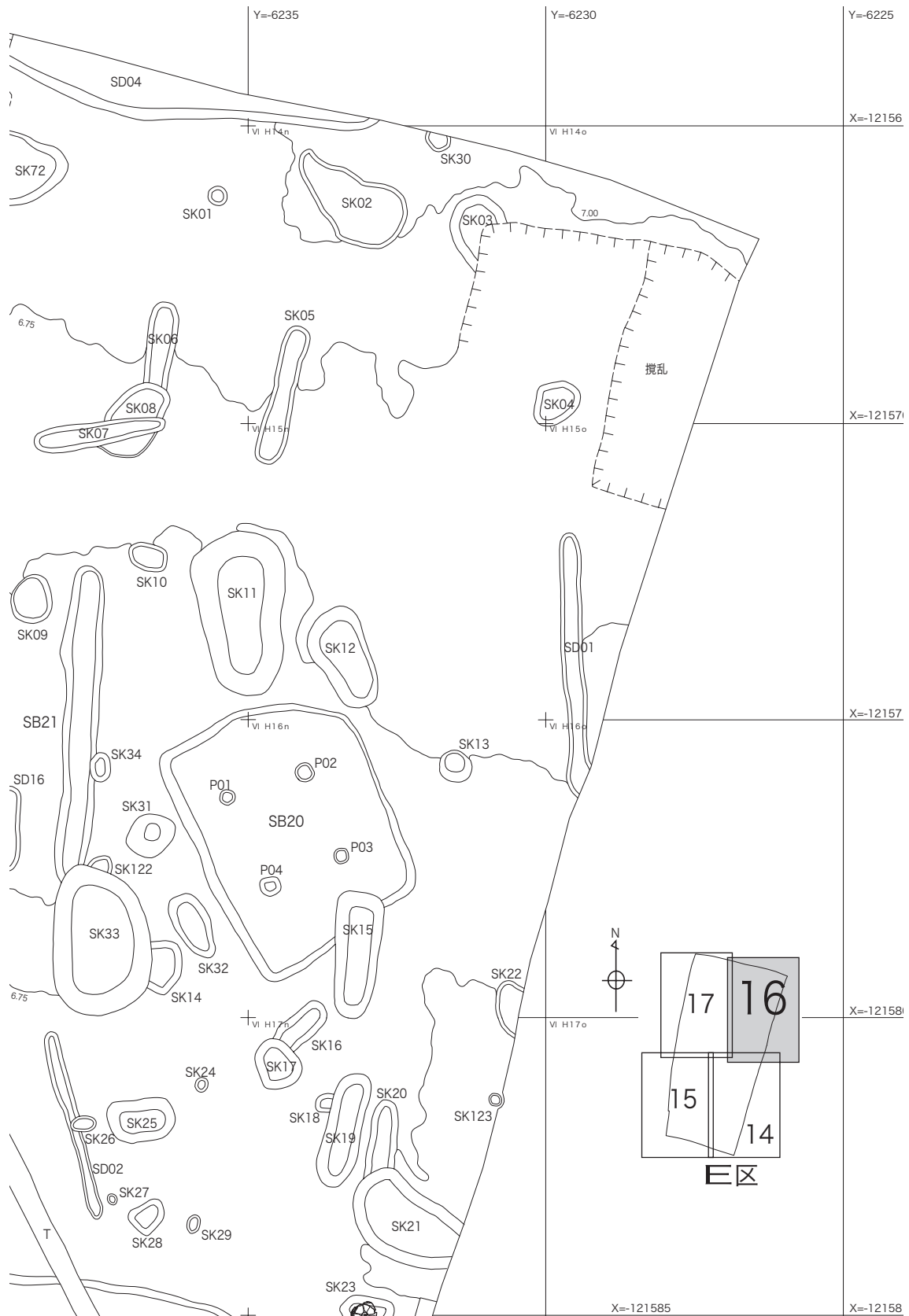


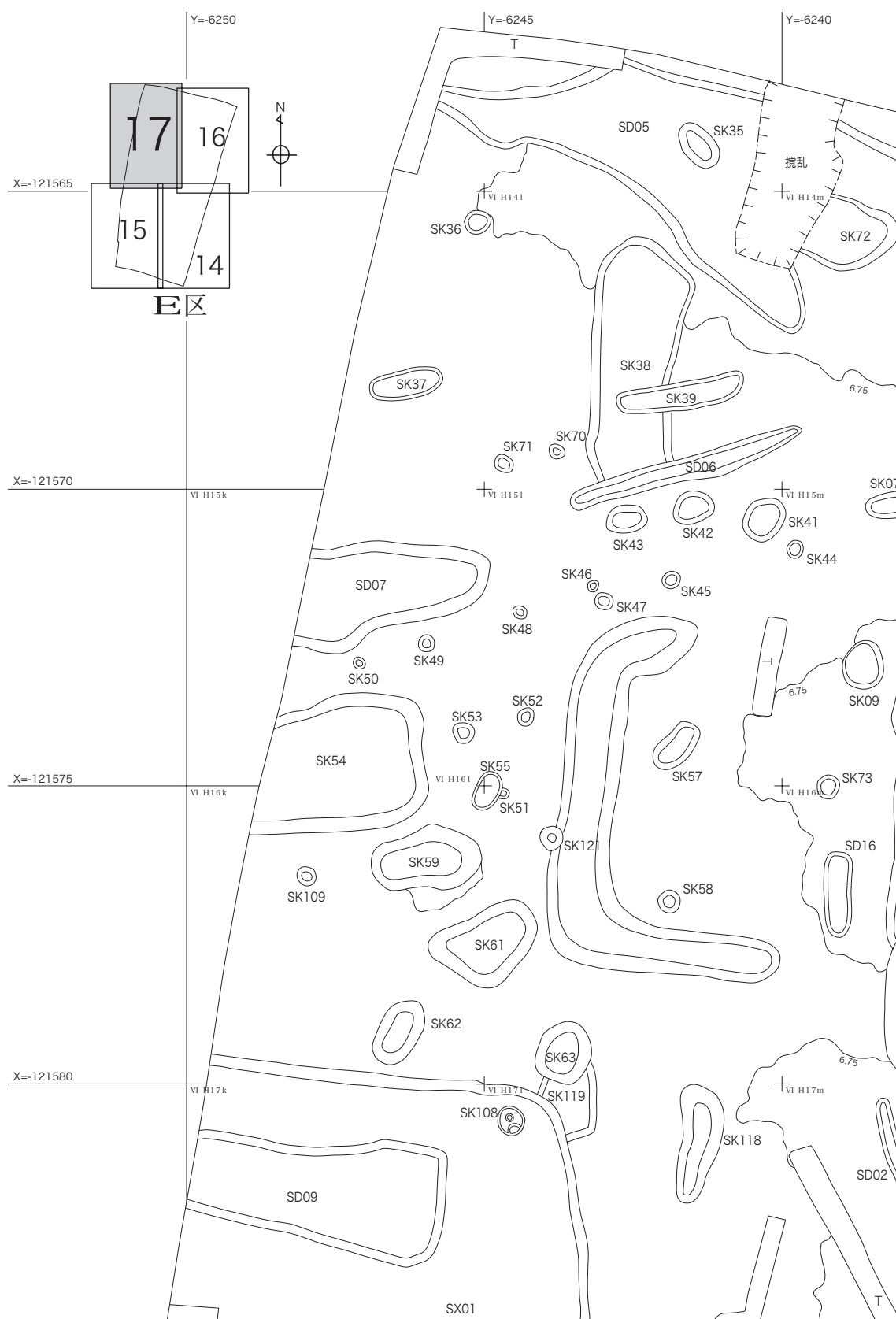


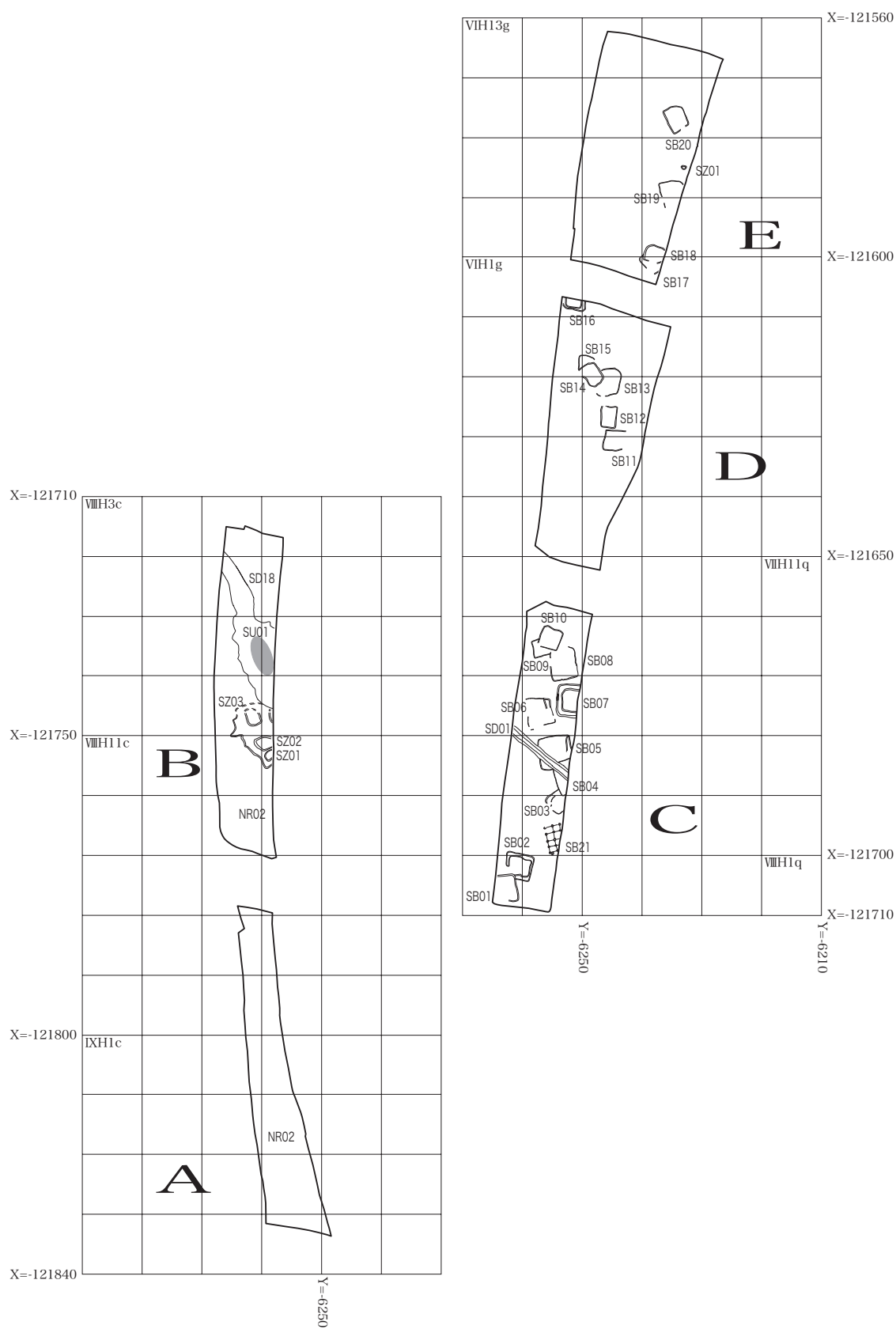


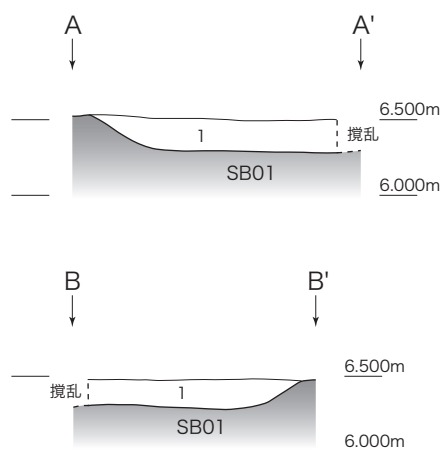
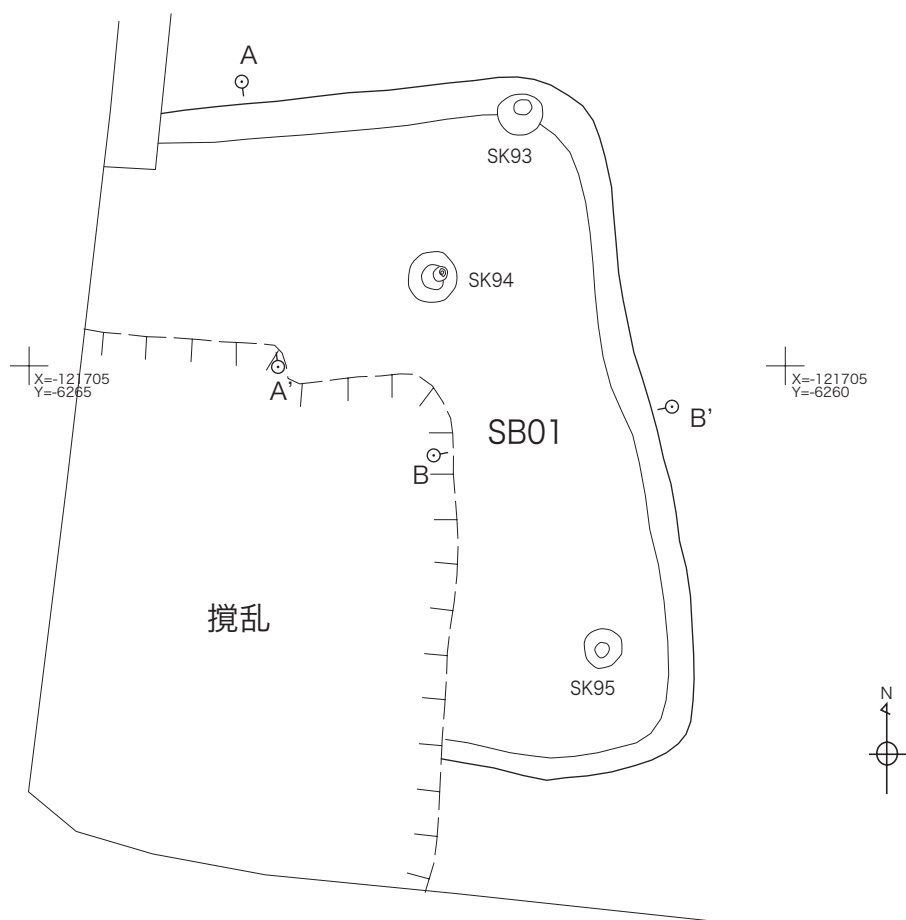






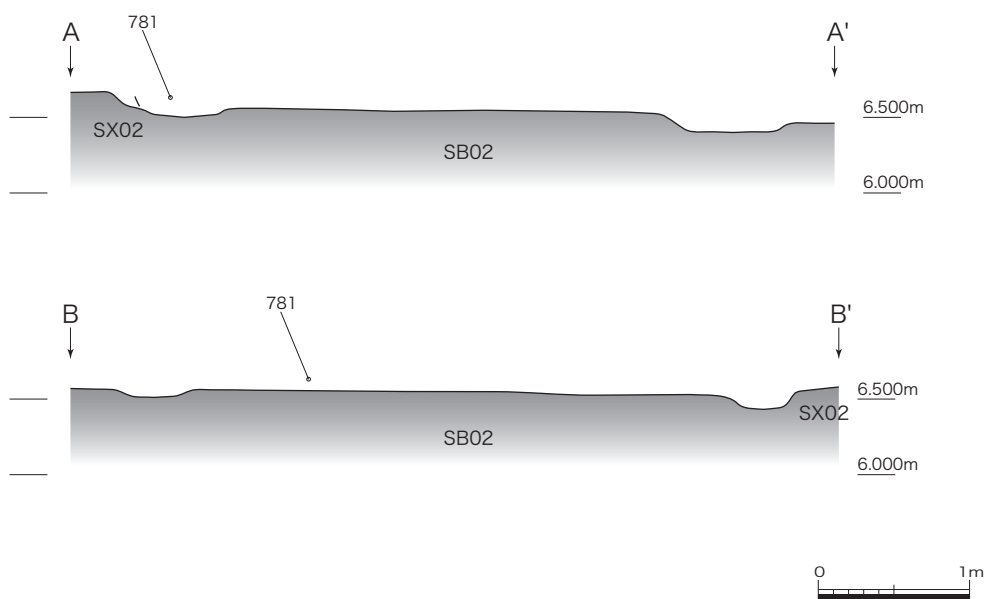
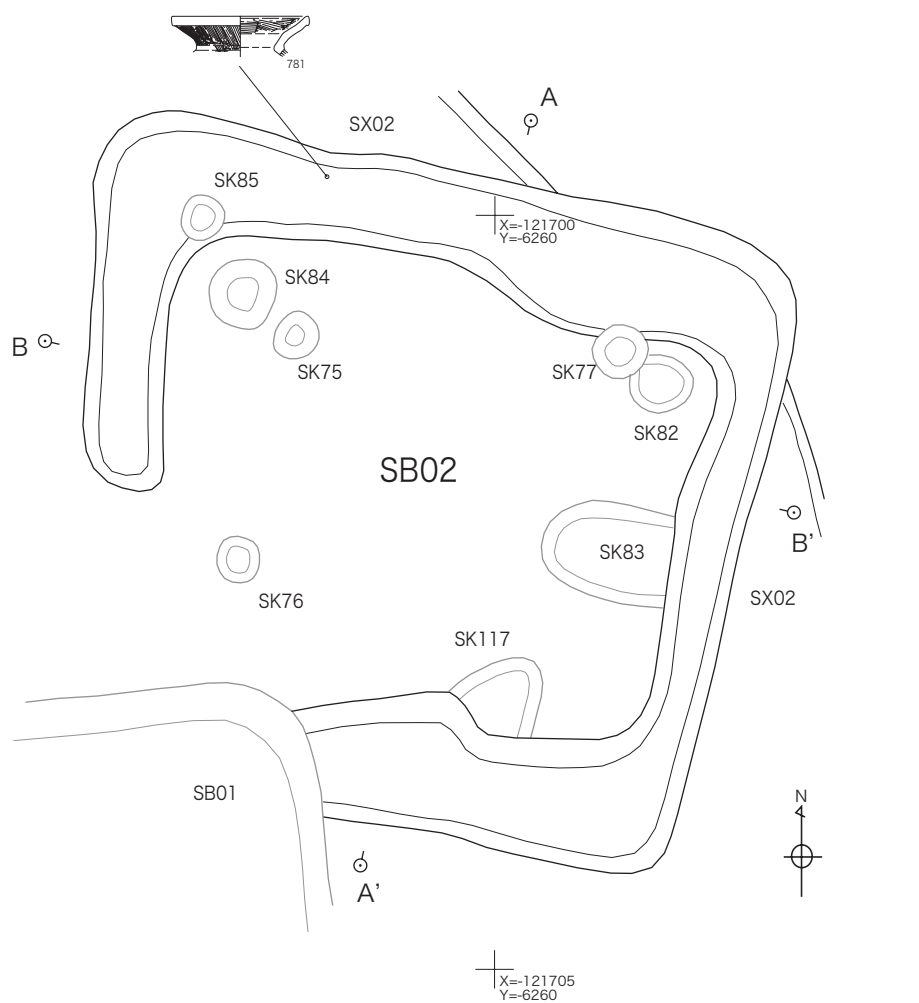


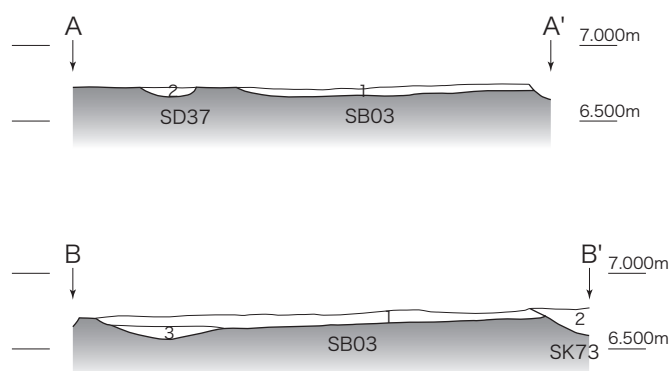
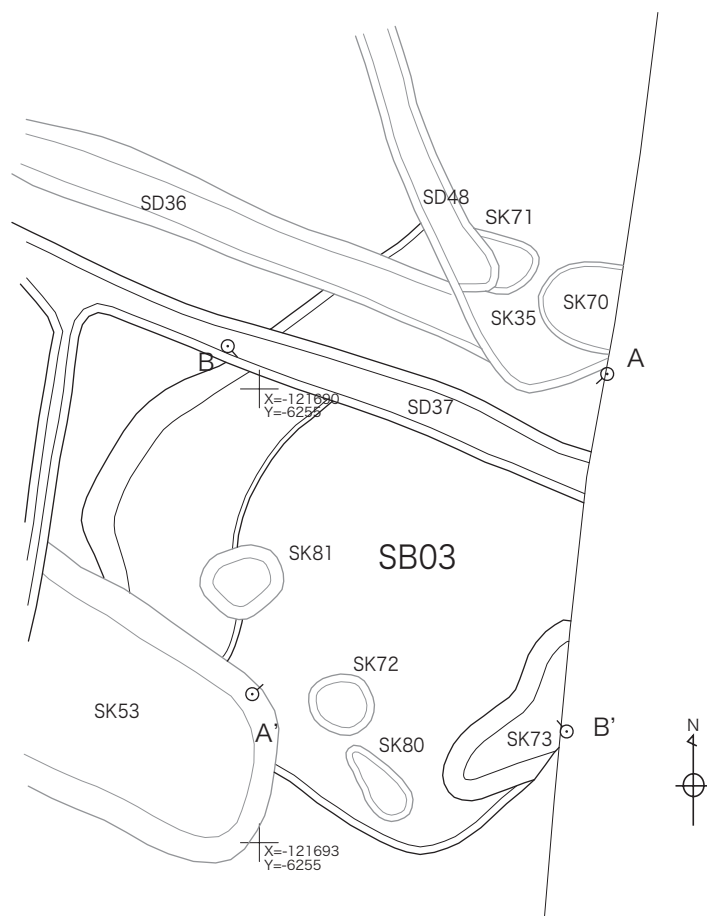




1層 2.5Y3/2 黒褐色シルト、2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 炭化物5%

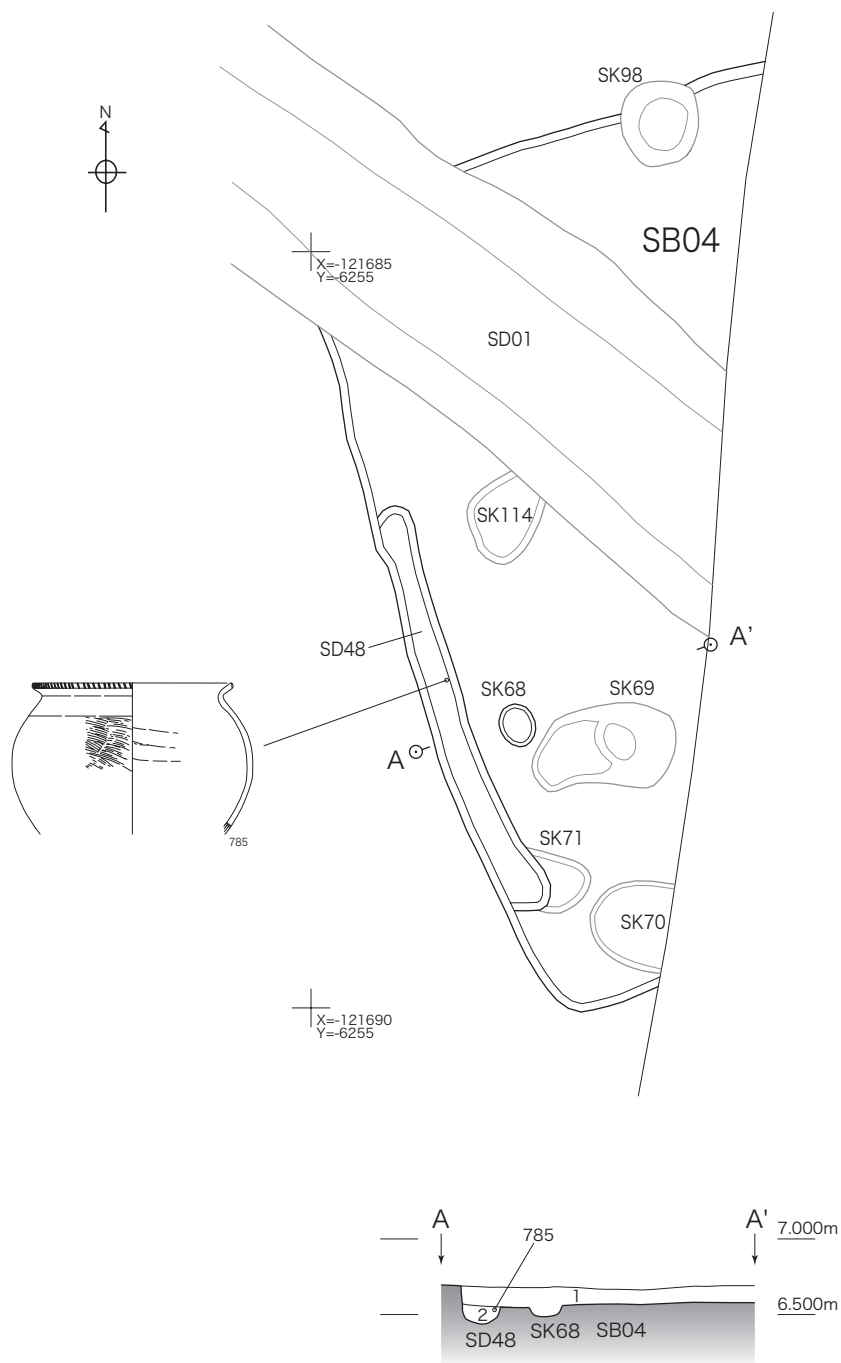






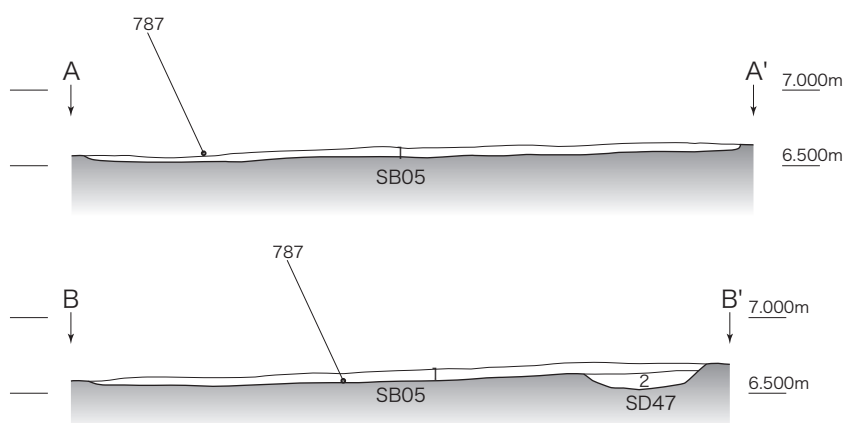
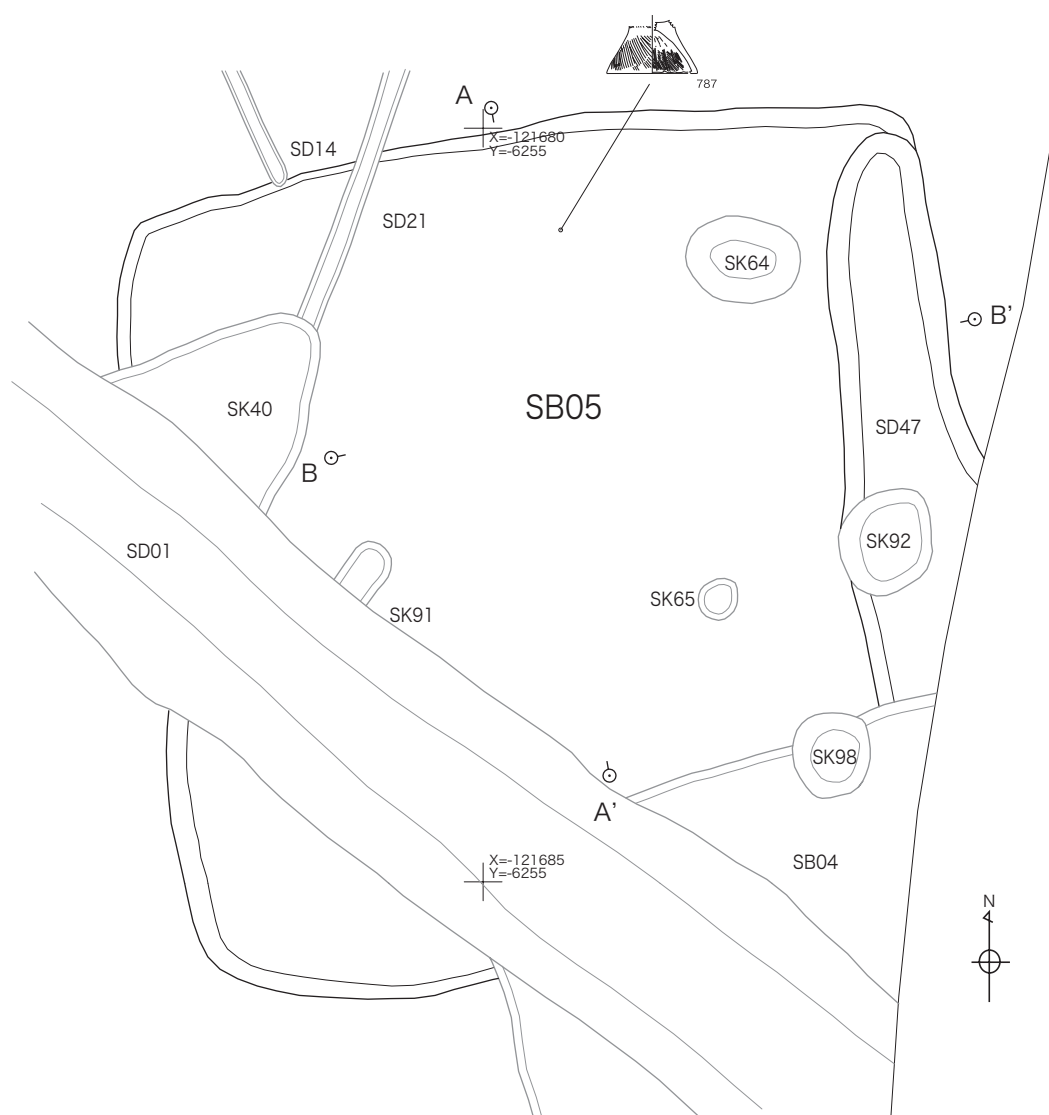
- 1層 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
- 2層 2.5Y3/2 黒褐色シルト
- 3層 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
- 2.5Y3/2 黒褐色シルト
- 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト





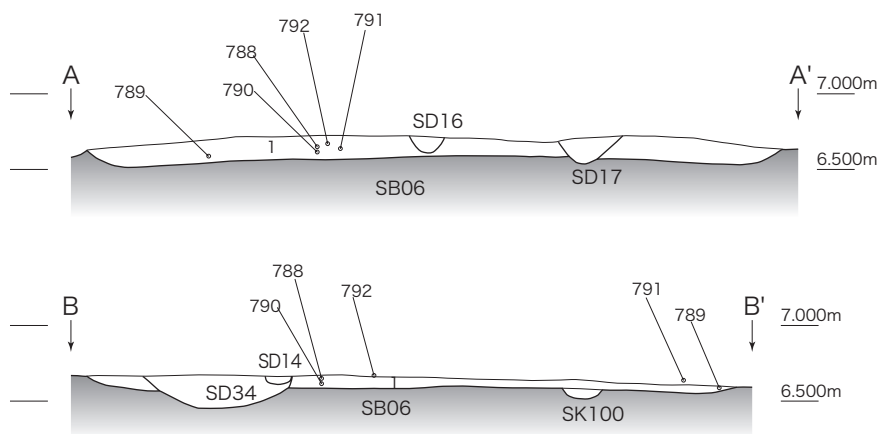
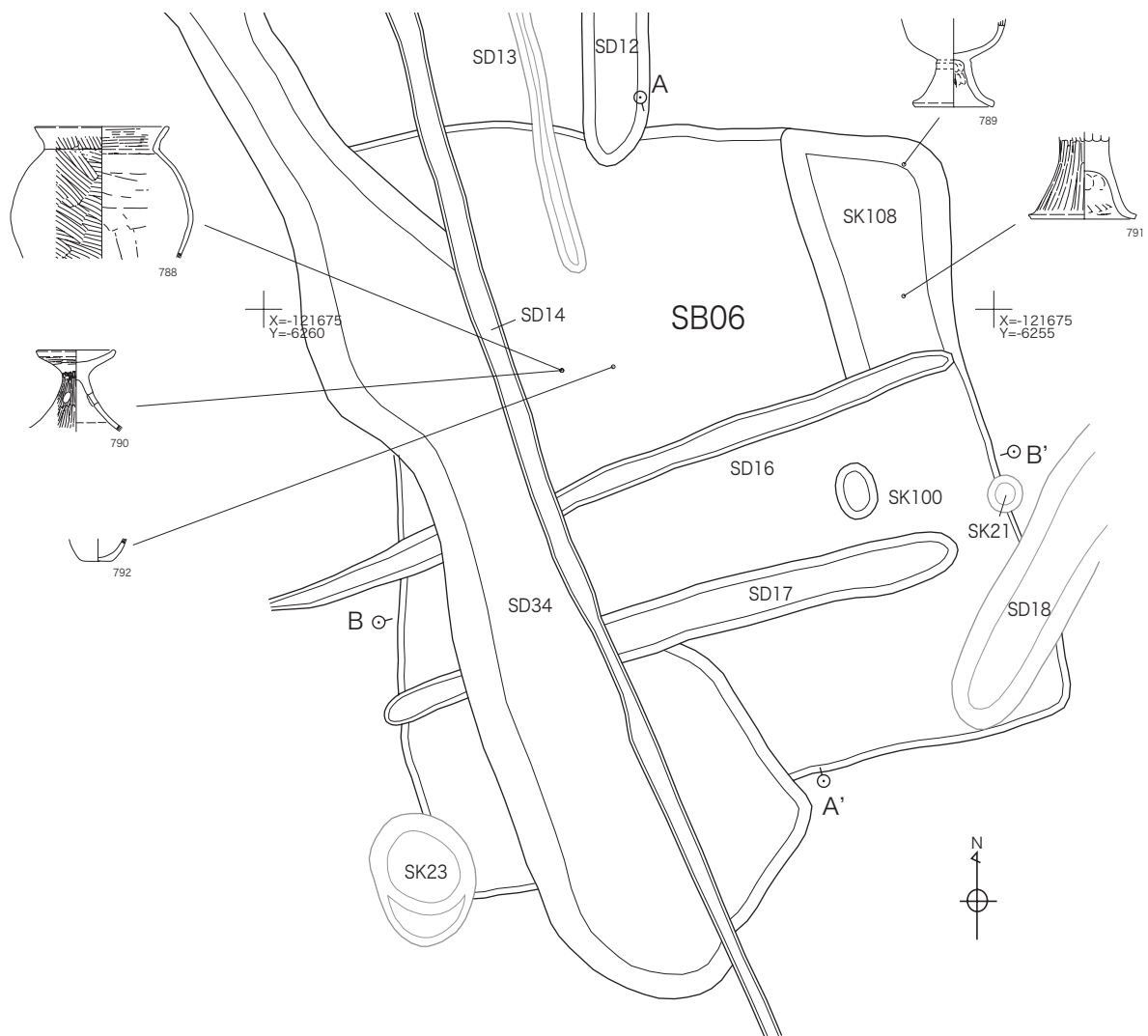
1層 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 炭化物5%含む
2層 2.5Y5/3 黄褐色シルト

0 1m



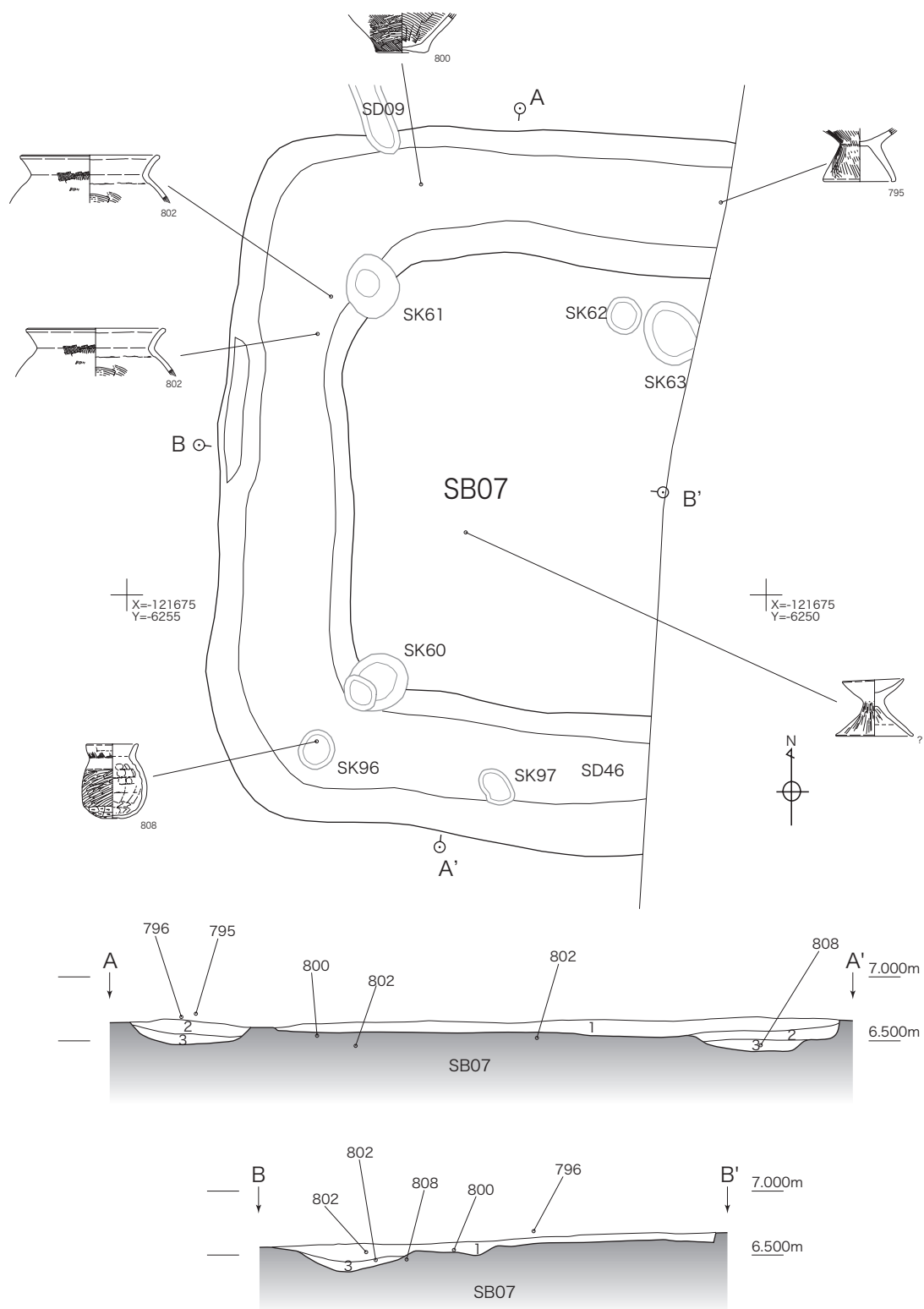
1層 5Y4/1 灰色 粒子細かく粘性なし、炭化物若干
2層 10YR3/1 黒褐色 粒子細かく粘性なし、炭化物若干





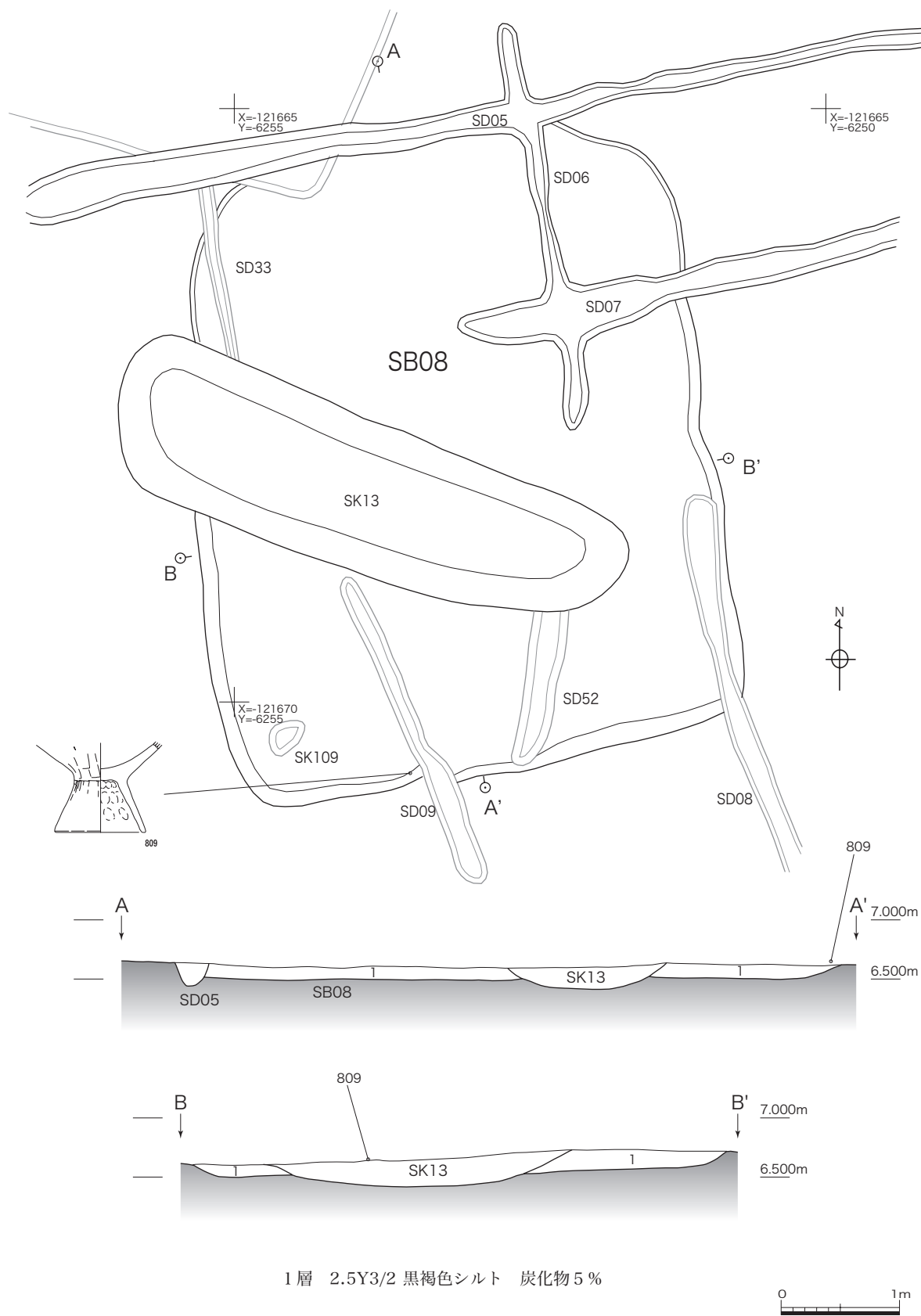
1層 2.5Y3/2 黒褐色 炭化物20%

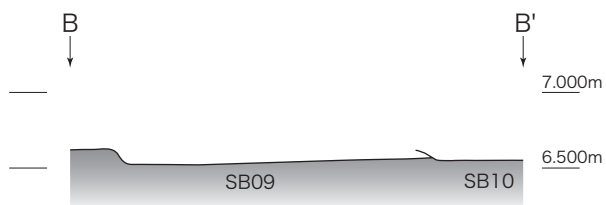
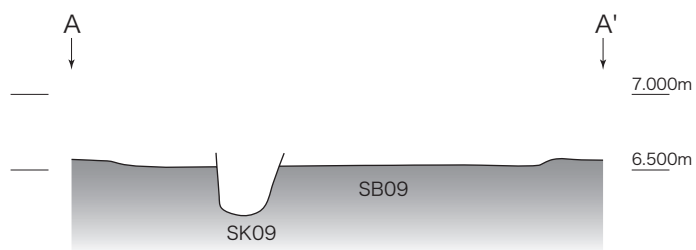
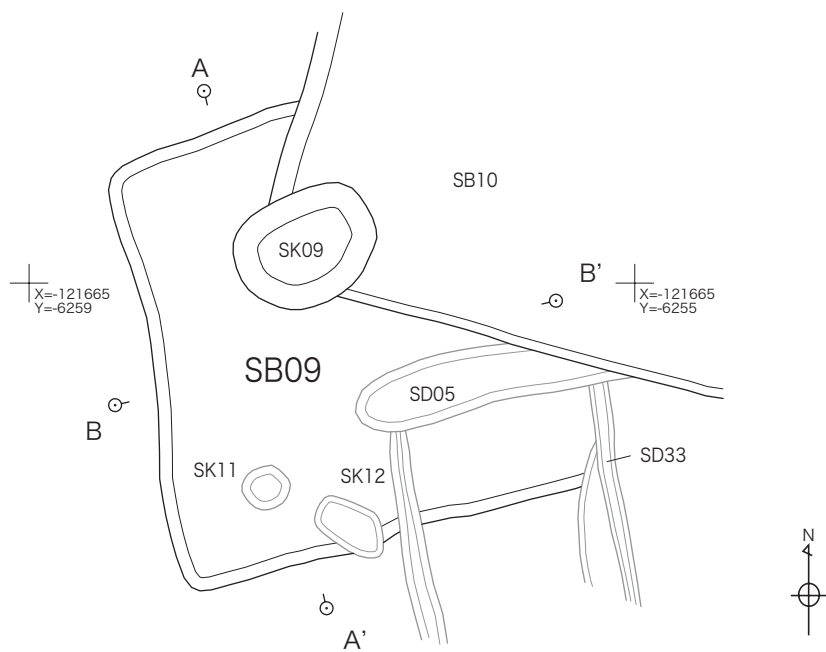


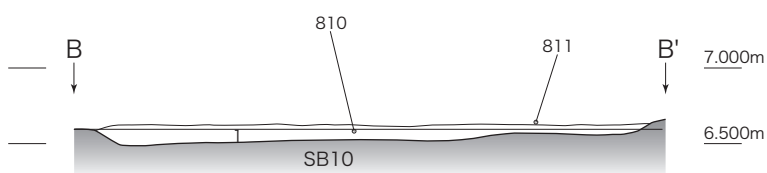
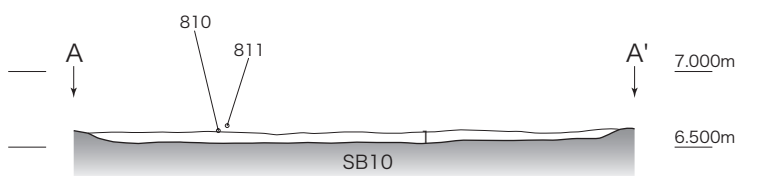
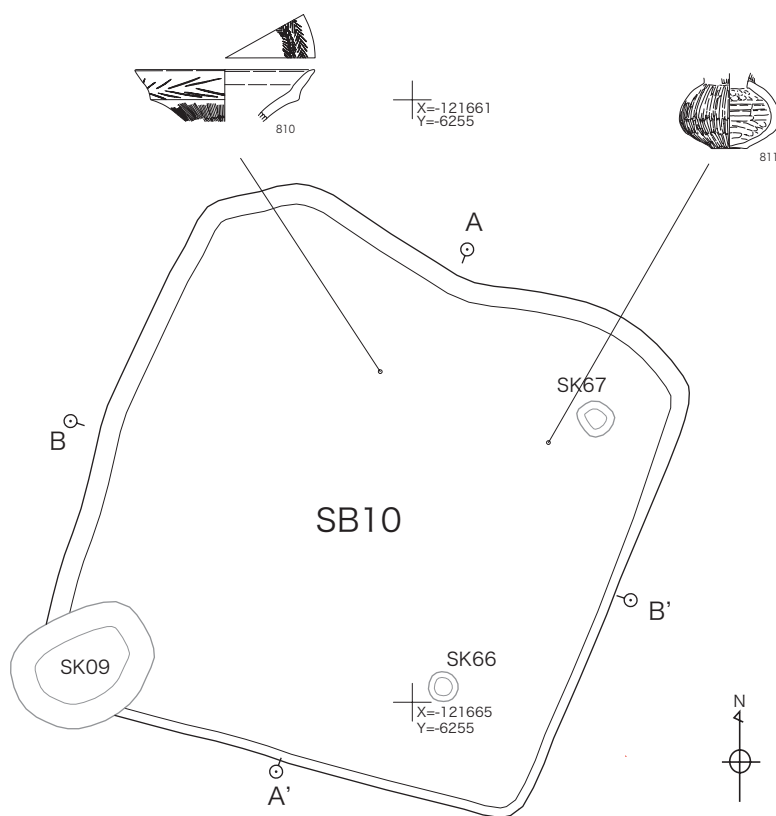


- 1層 2.5Y4/2 暗灰黄色 粒子細かく粘性なし、遺物10%、炭化物30%
 2層 5Y4/1 灰色 粒子細かく粘性なし
 5Y5/2 灰オリーブ色 炭化物若干
 3層 2.5Y5/1 黄灰色 粒子細かく粘性なし、炭化物若干



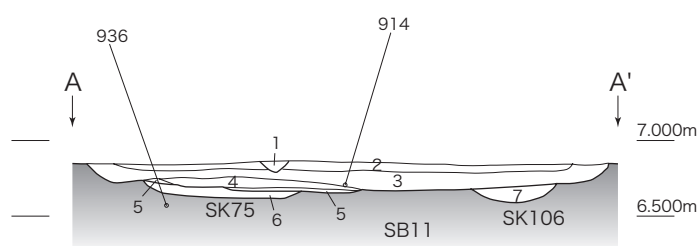
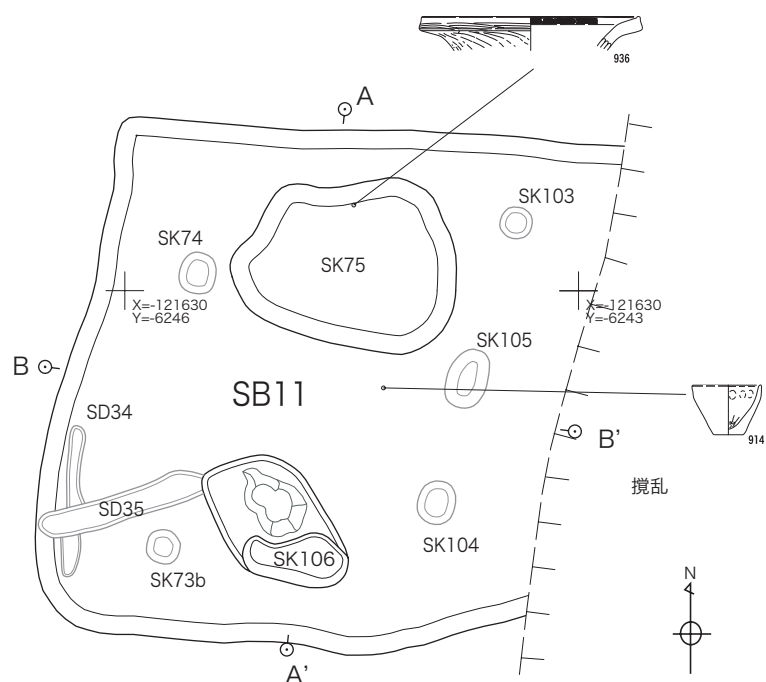




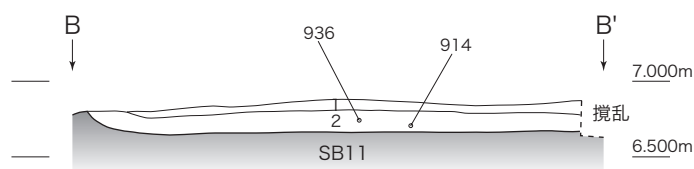


1層 2.5Y3/2 黒褐色シルト、2.5Y4/2 暗灰黄色シルト、10YR2/1 黒色シルトブロック (10~20cm)



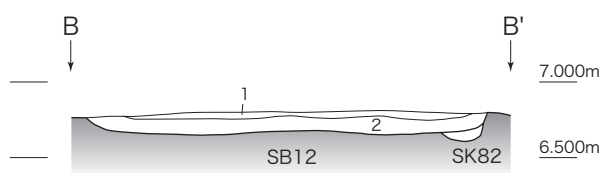
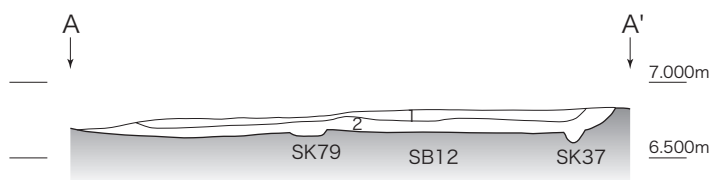
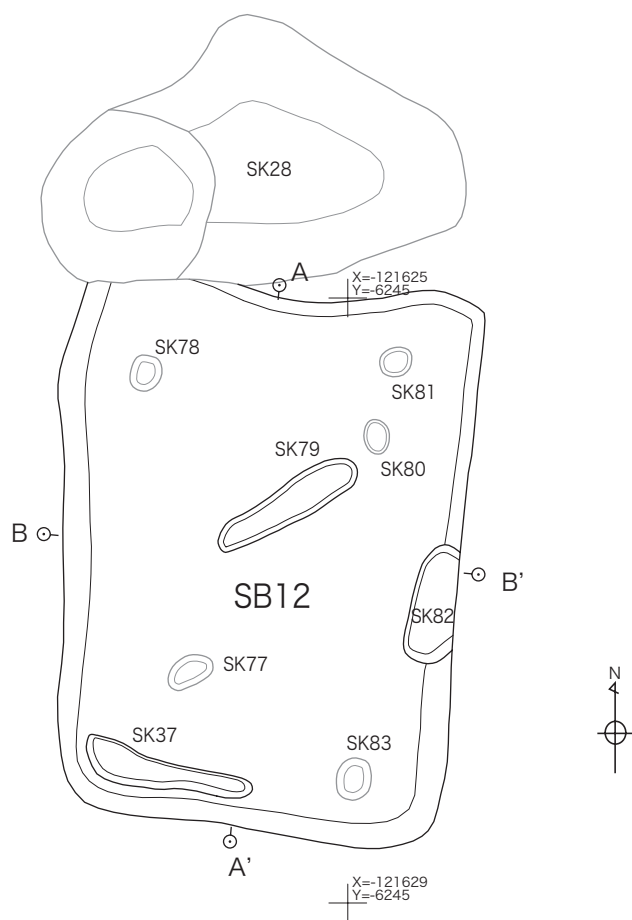


- 1層 2.5Y3/2 黒褐色シルト (SD15) 炭化物10%
 2層 2.5Y3/2 黒褐色シルト
 3層 10YR4/2 灰黄褐色シルト 炭化物 5 %
 4層 10YR2/2 黒褐色シルト 炭化物50%
 5層 2.5Y5/3 黄褐色シルト
 6層 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (SK75)
 7層 2.5Y3/2 黒褐色シルト (SK106)



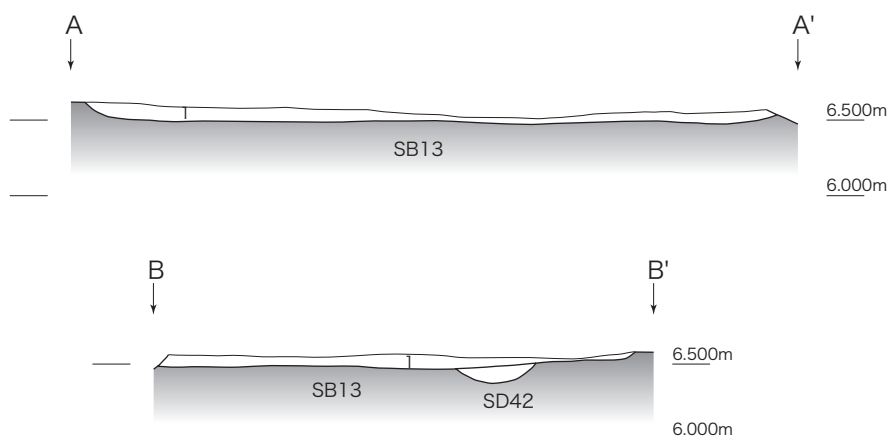
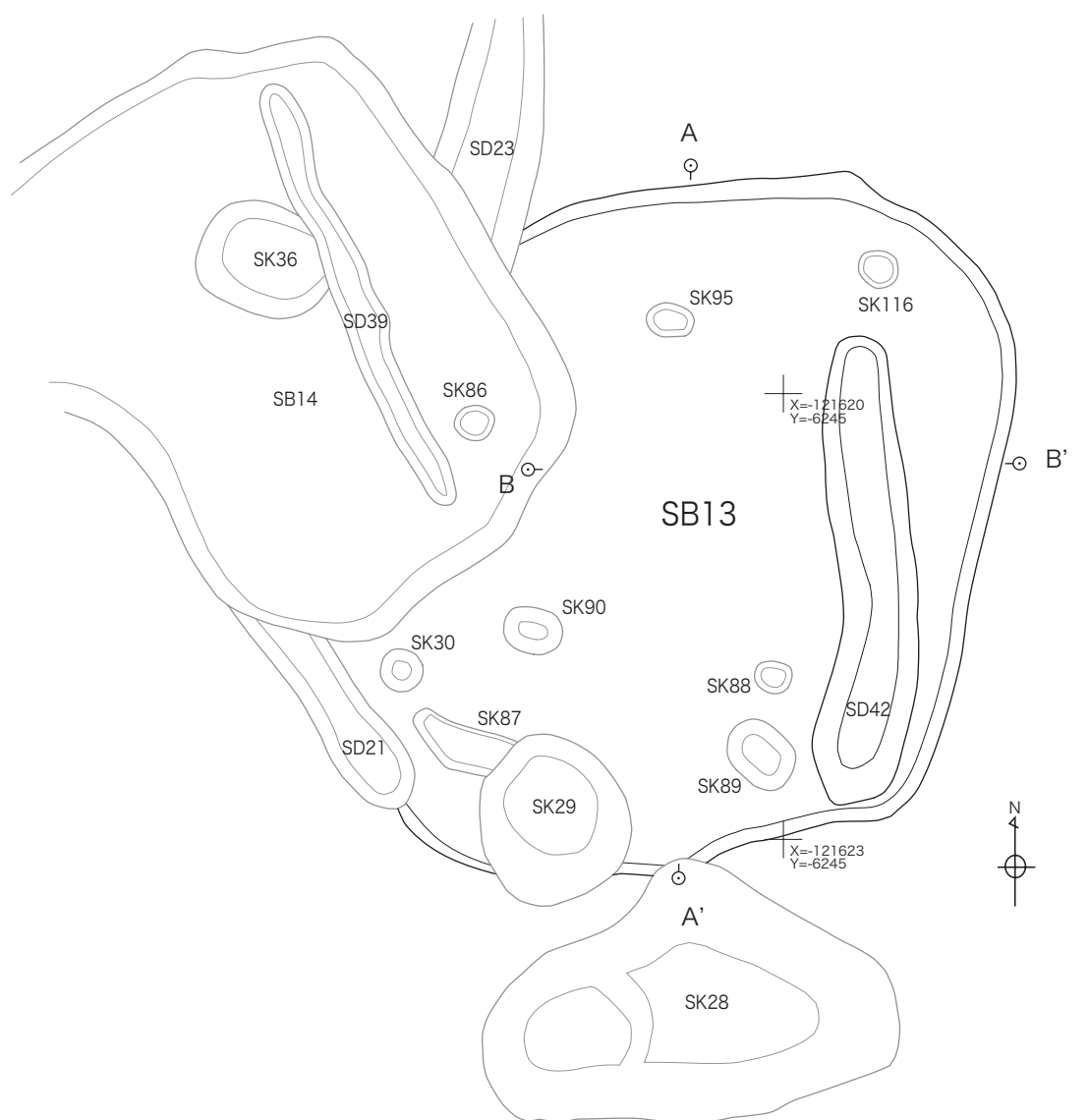
- 1層 2.5Y3/2 黒褐色シルト
 2層 10YR4/2 灰黄褐色シルト 炭化物 5 %





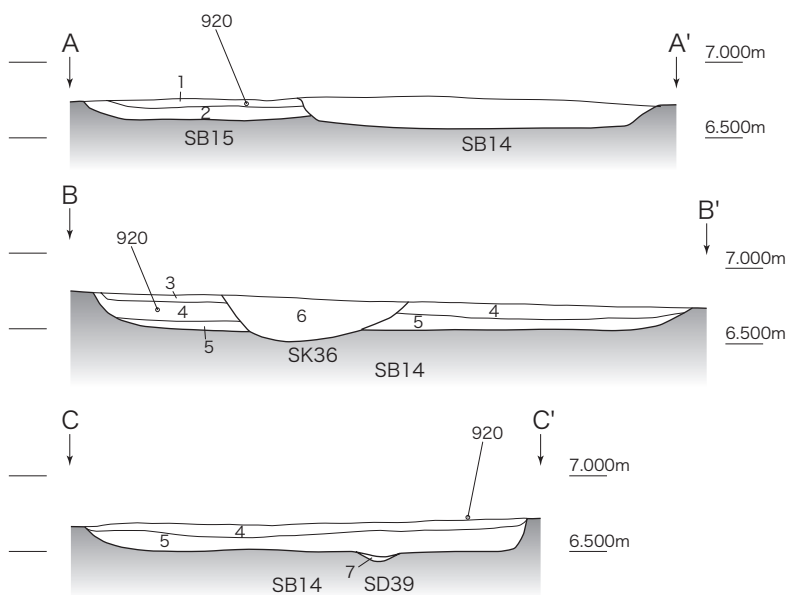
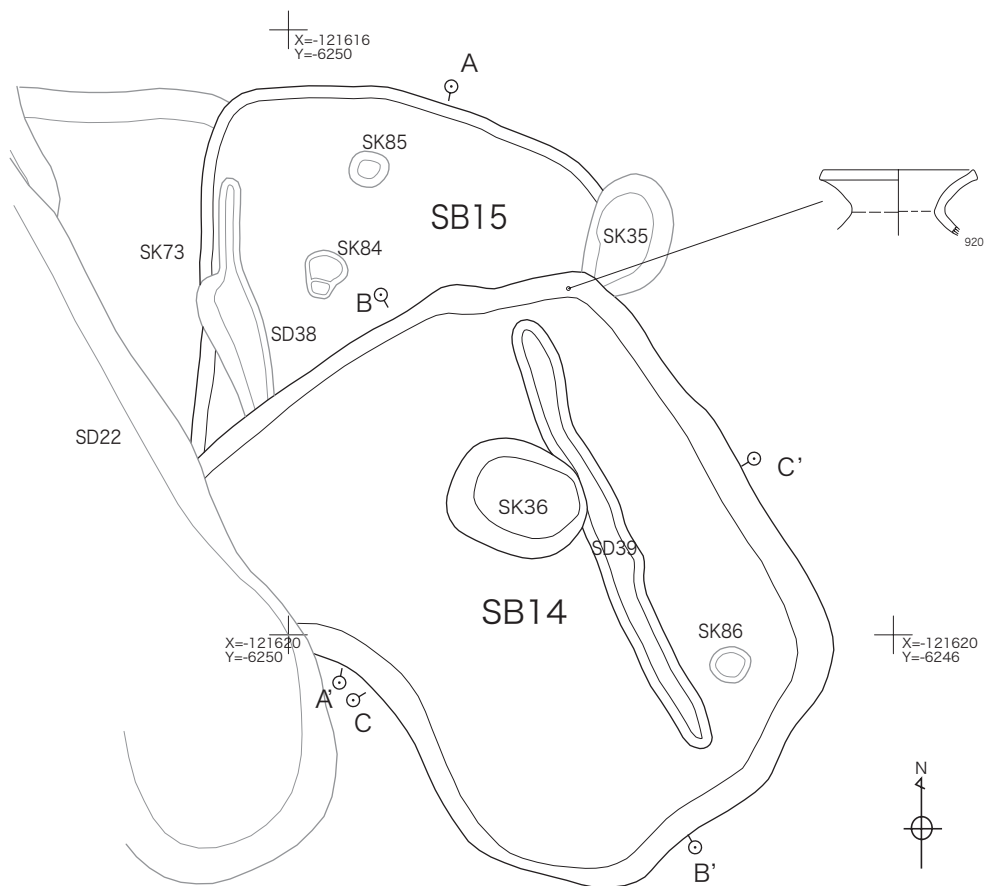
1層 2.5Y3/2 黒褐色シルト
2層 10YR4/2 灰黄褐色シルト 炭化物 50%



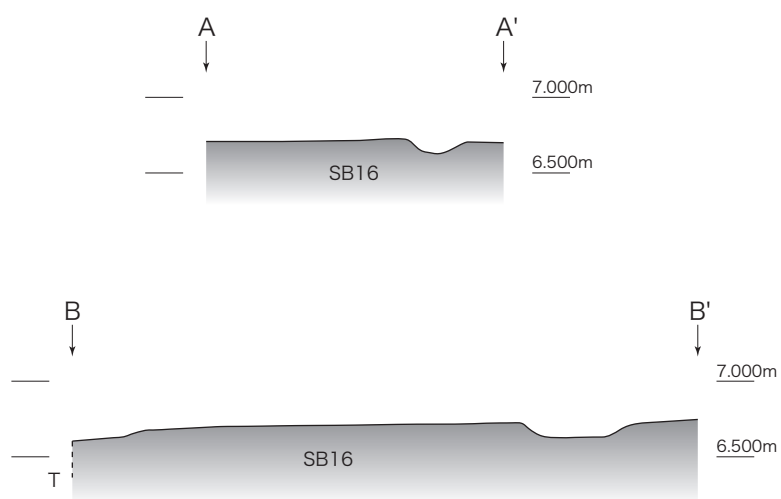
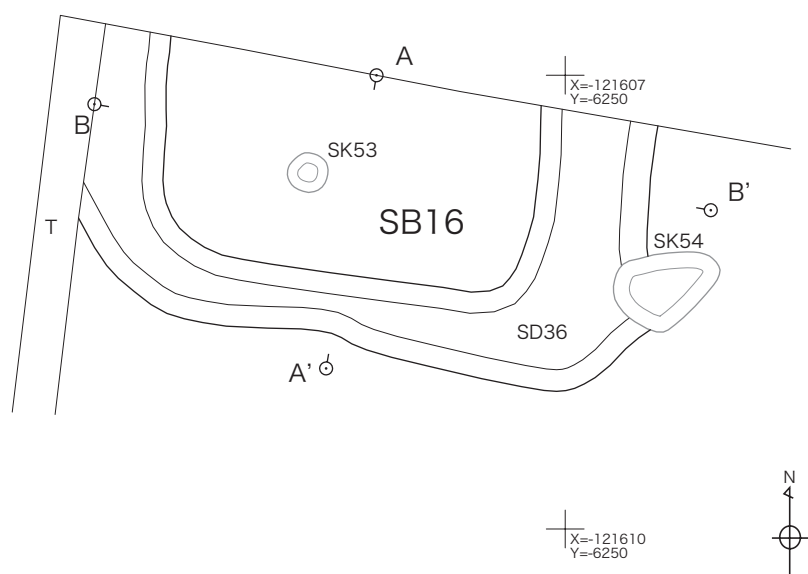


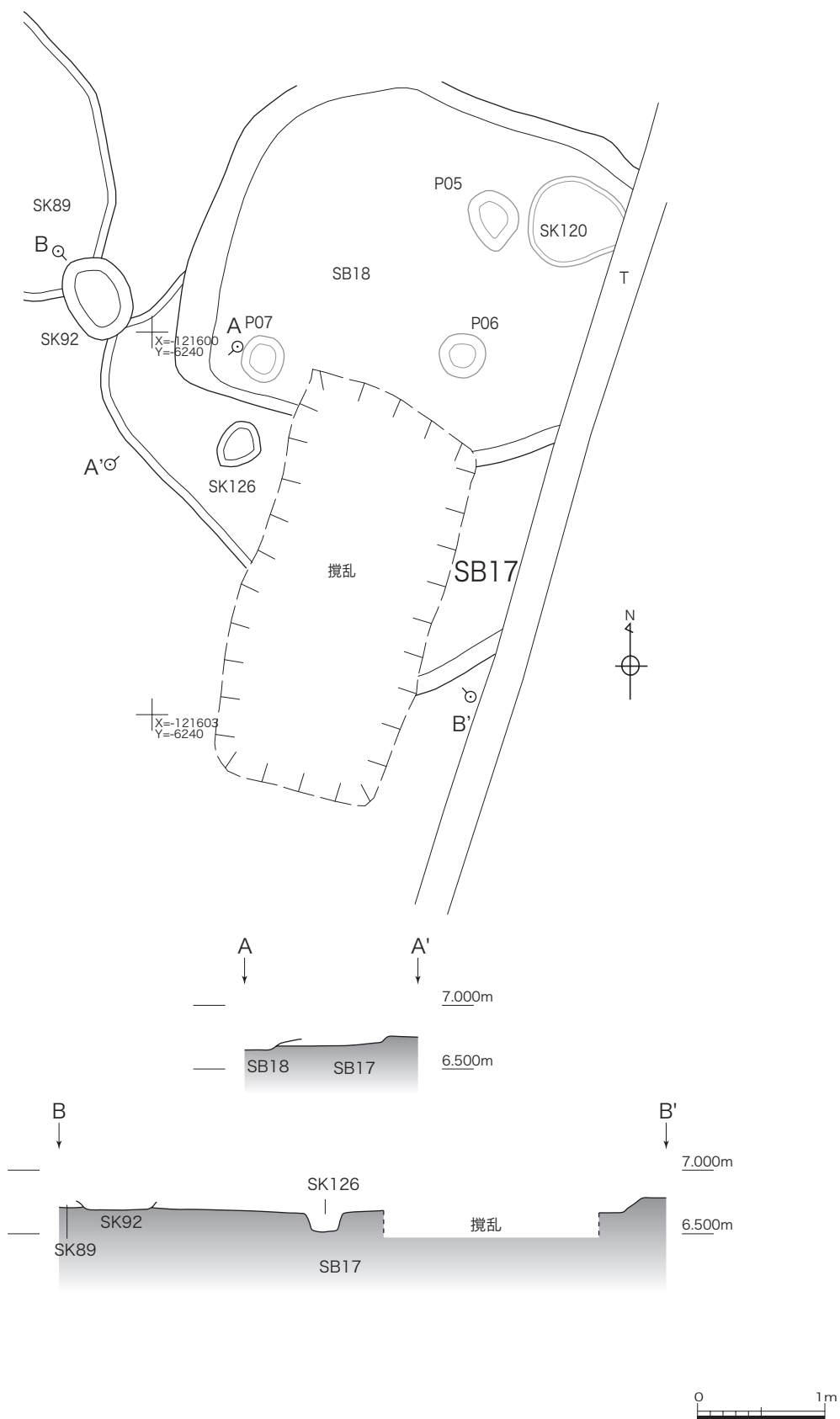
1層 2.5Y5/2 黒褐色シルト

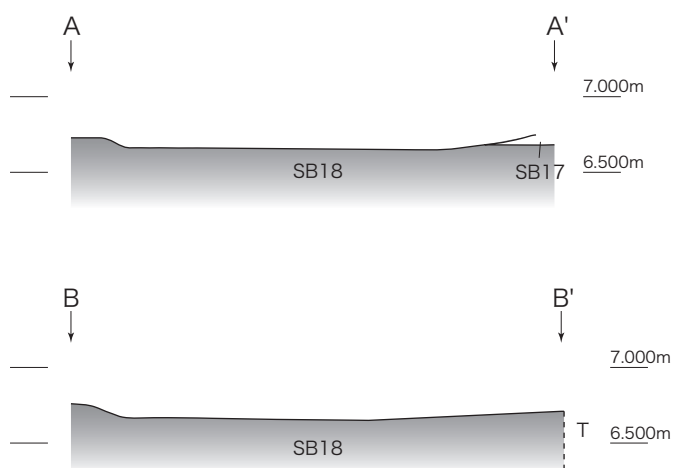
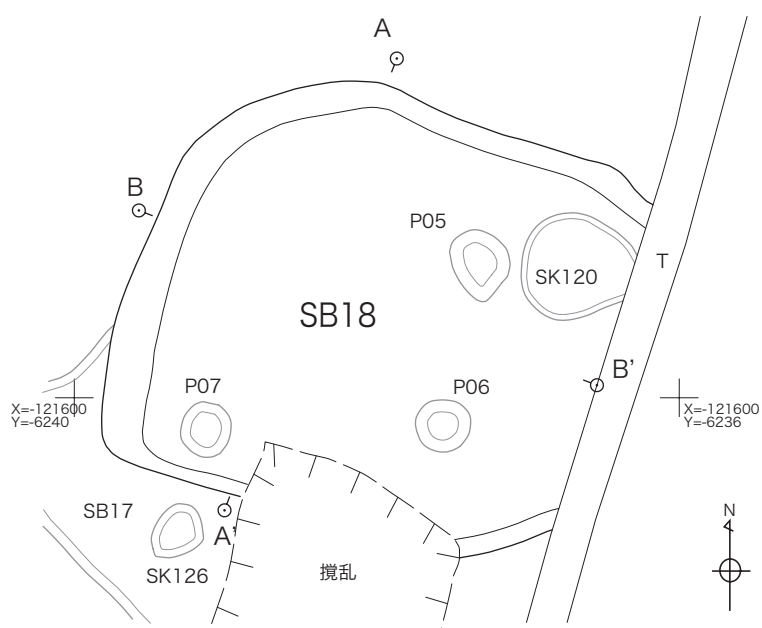


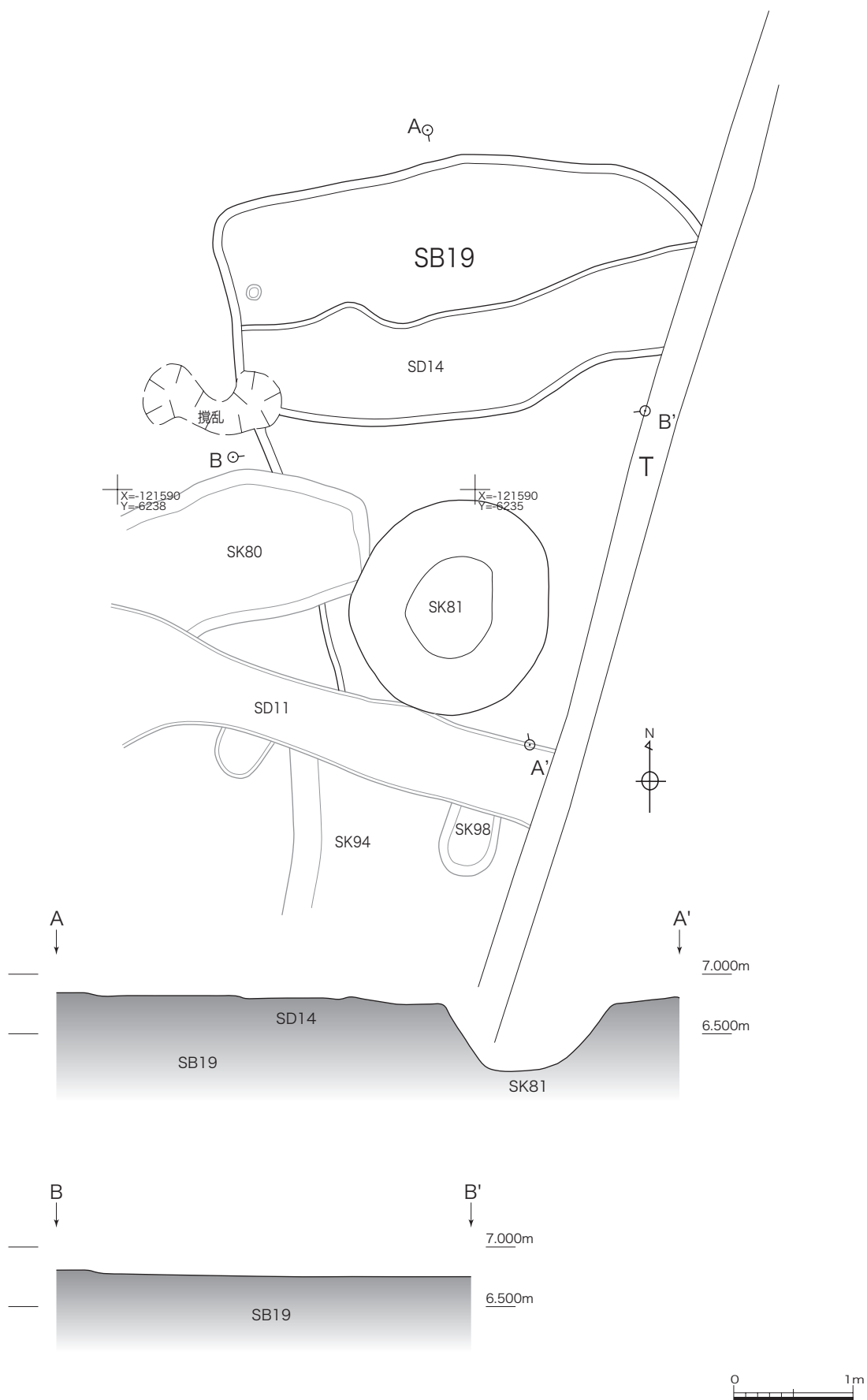


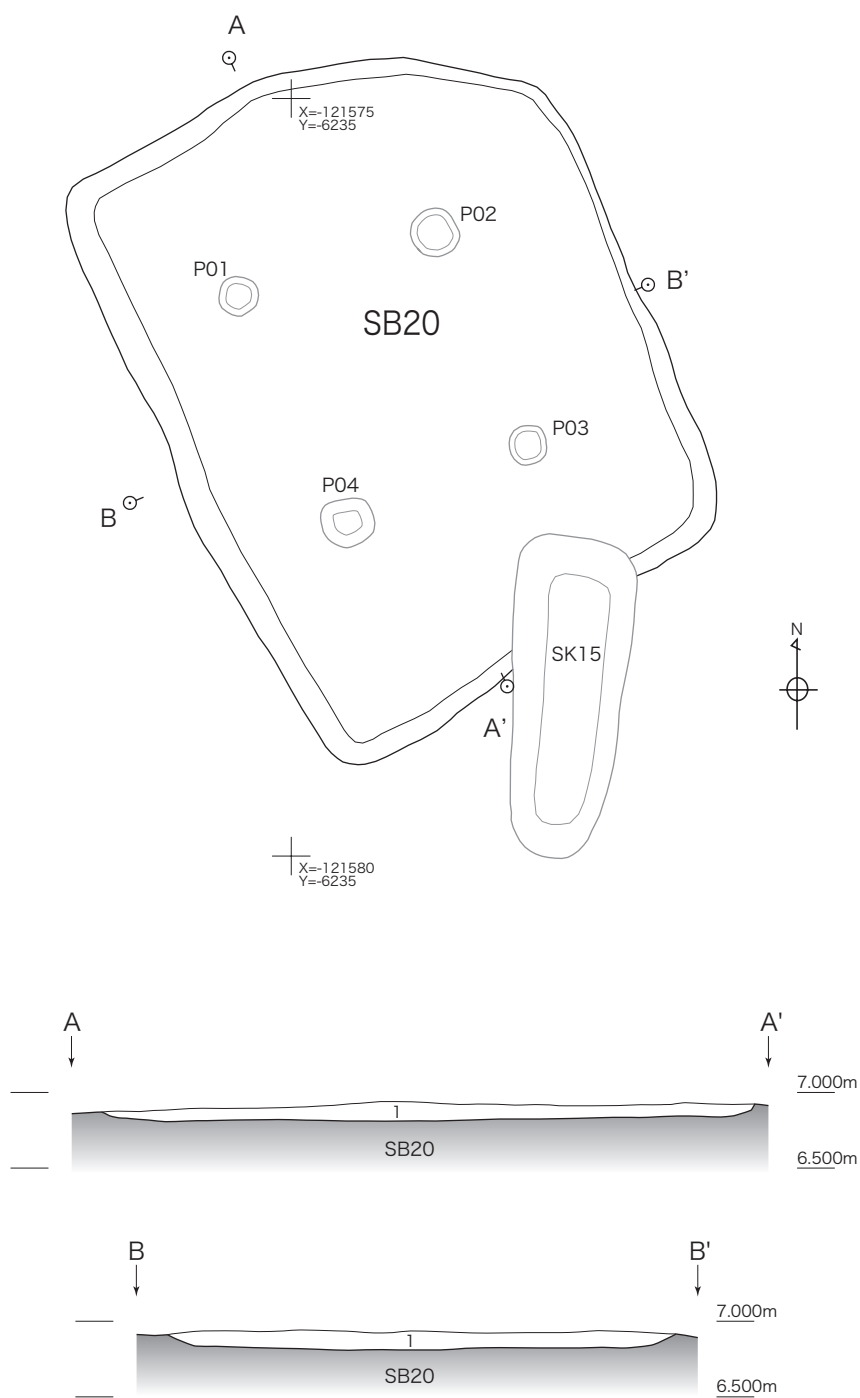
- | | | | | | |
|----|-----------------|---------|----|-----------------|--------------|
| 1層 | 2.5Y3/2 黒褐色シルト | | 5層 | 10YR4/4 褐色シルト | 7.5Y6/1 灰色 |
| 2層 | 10YR4/2 灰黄褐色シルト | 炭化物 5 % | | | 中粒砂をブロック状に含む |
| 3層 | 2.5Y4/1 黄灰色シルト | 鉄分含む | 6層 | 2.5Y3/1 黒褐色シルト | SK36 |
| 4層 | 2.5Y3/2 黒褐色シルト | | 7層 | 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト | SD39 |





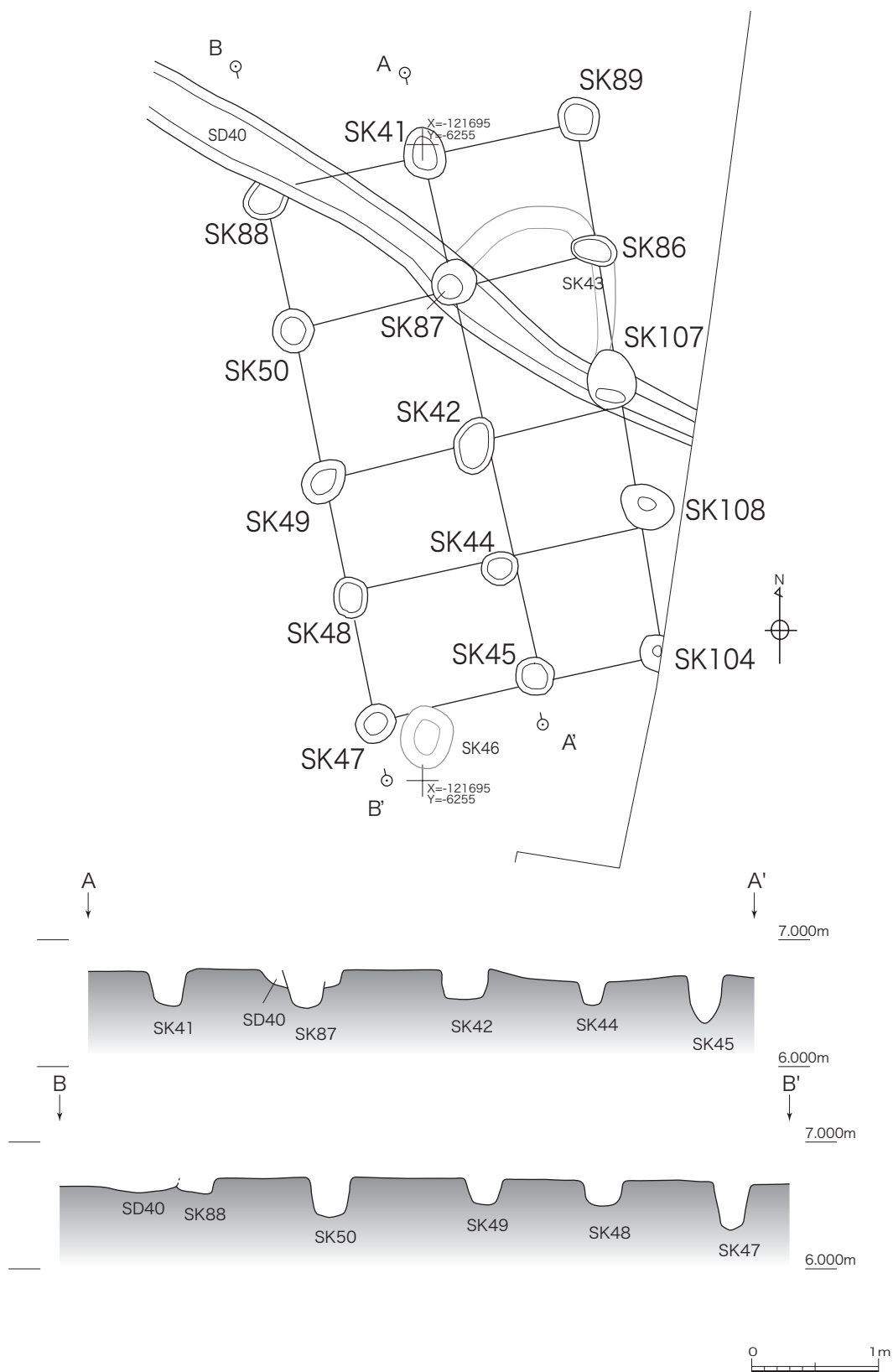


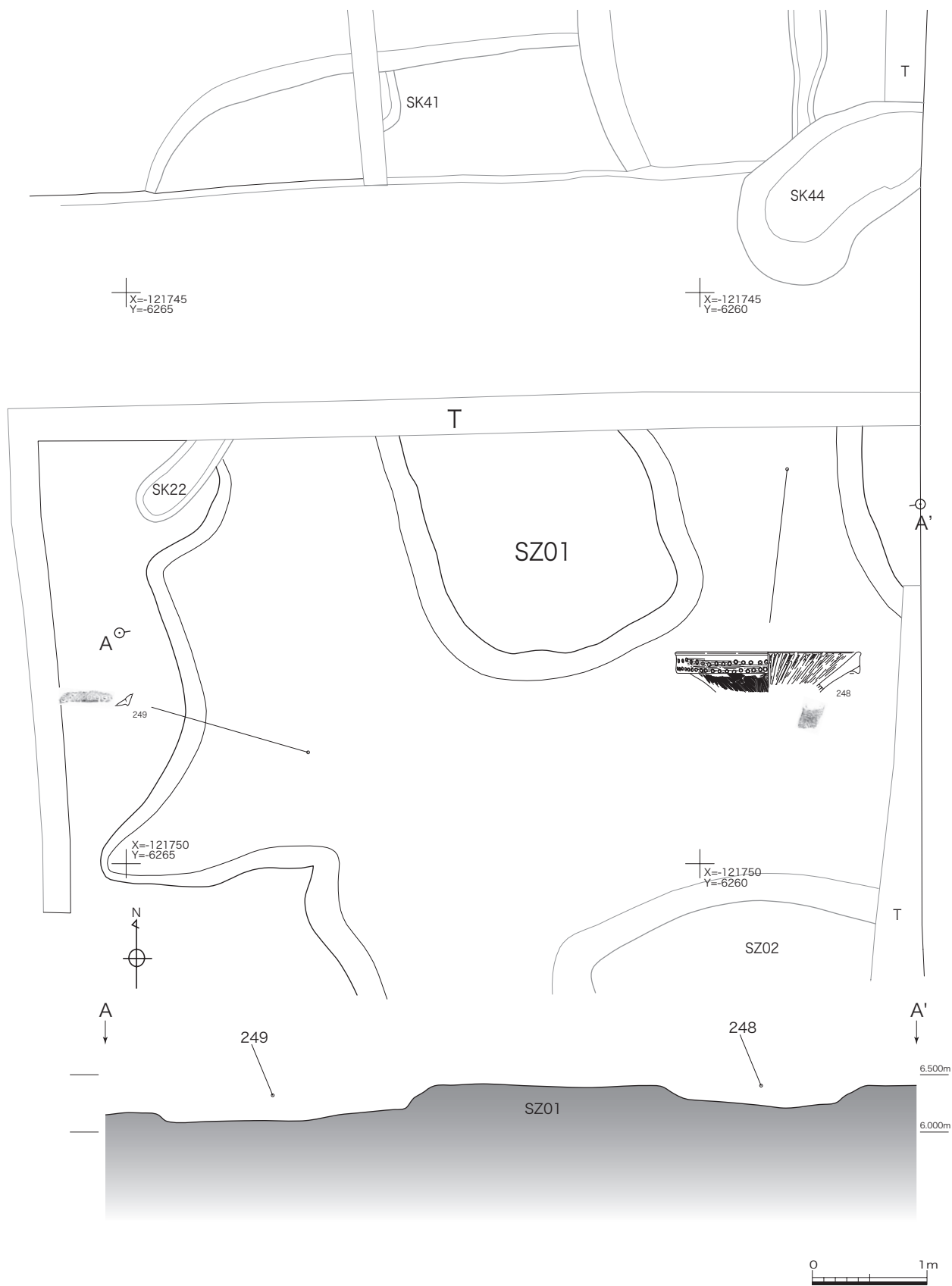


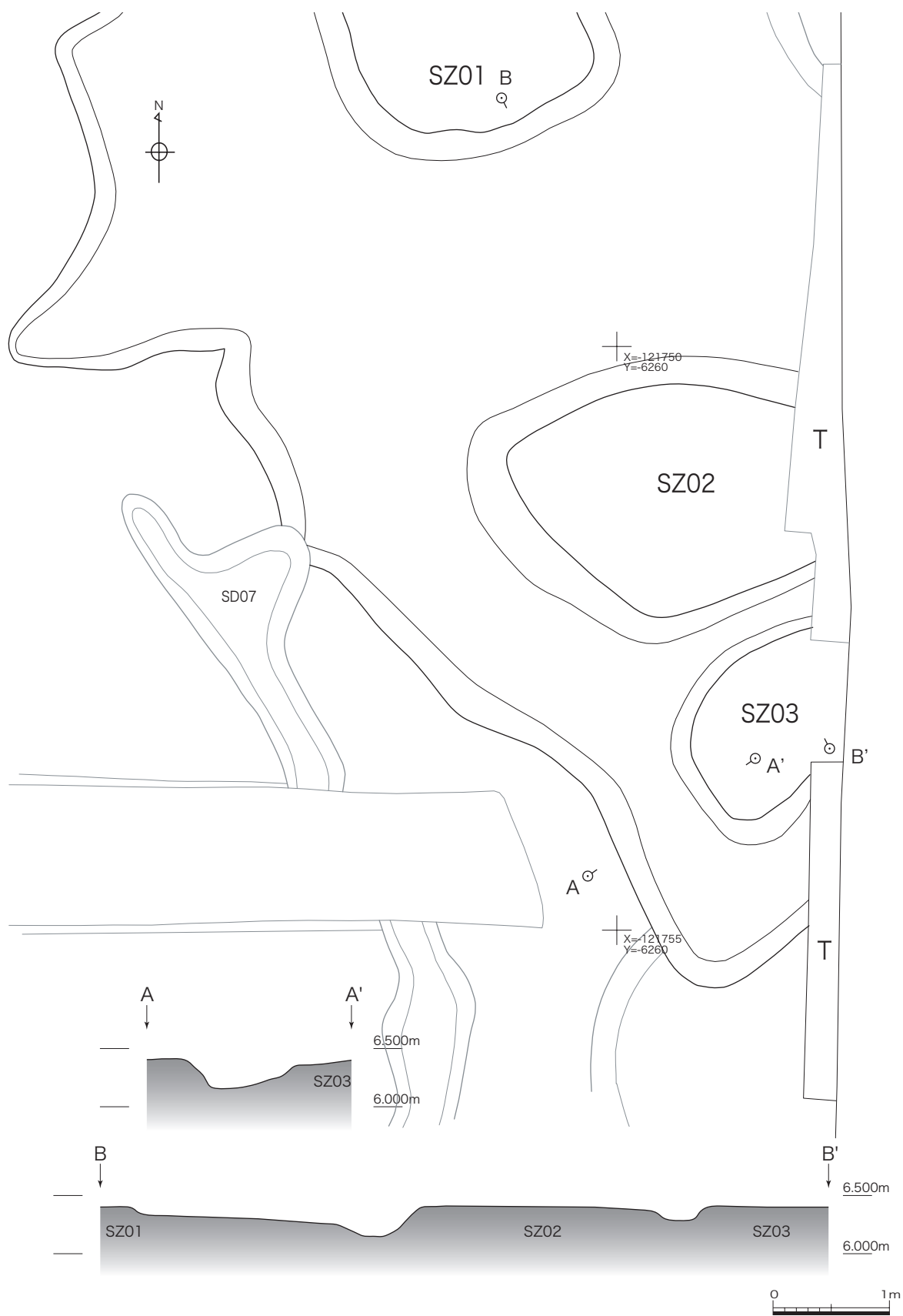


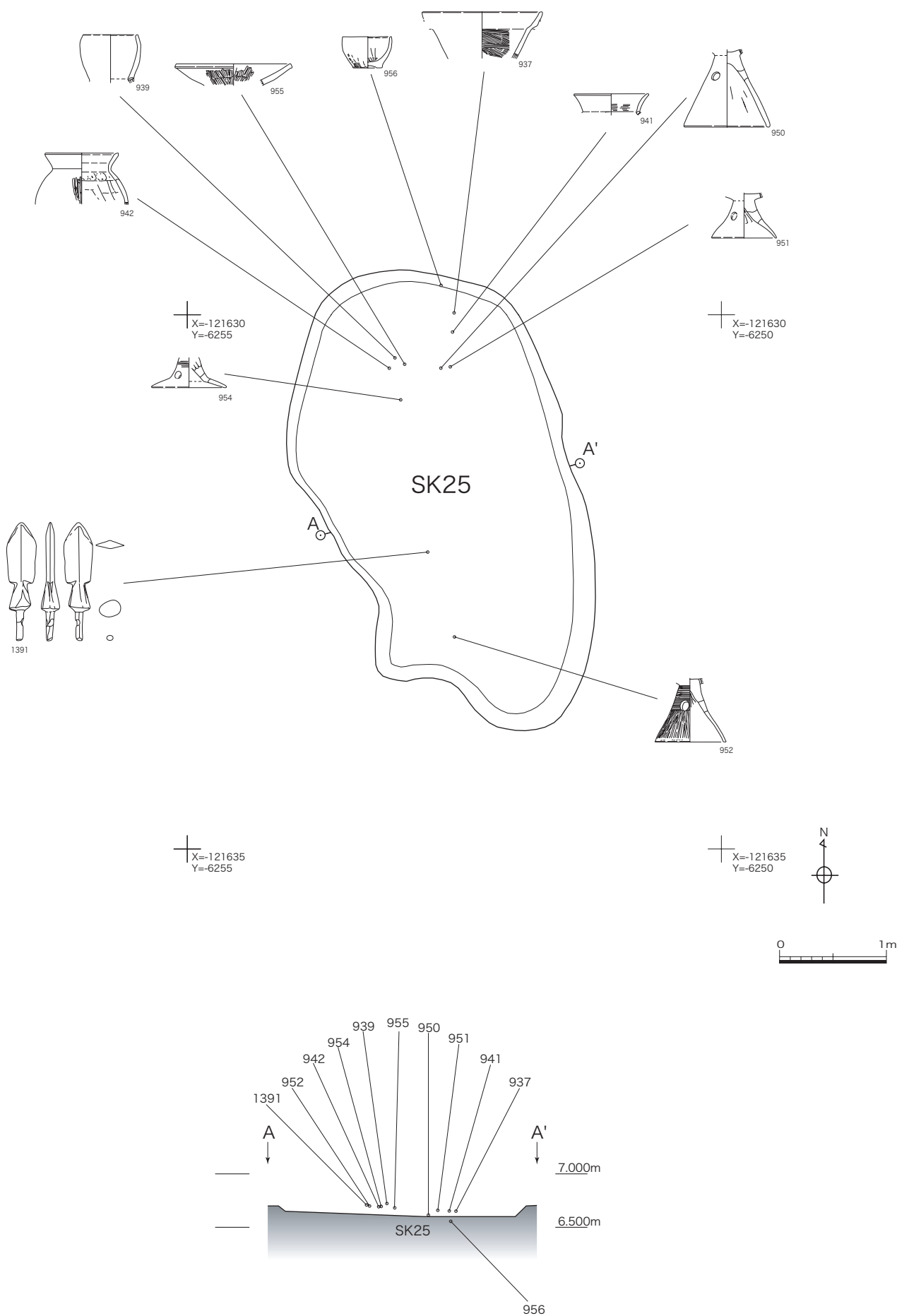
1 層 10YR4/1 褐灰色 粒子細かく粘性ややあり、遺物 10%、炭化物 10%

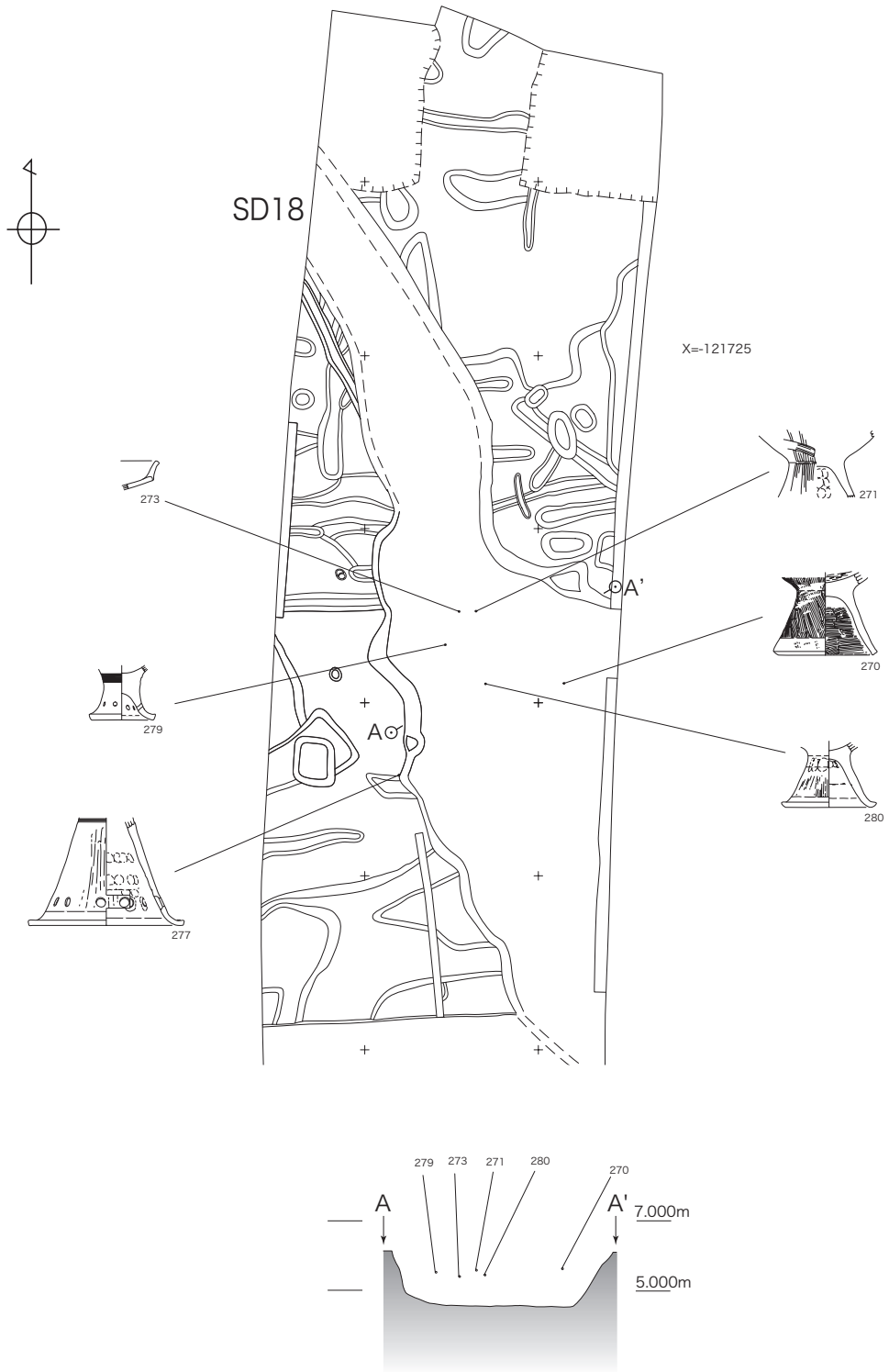


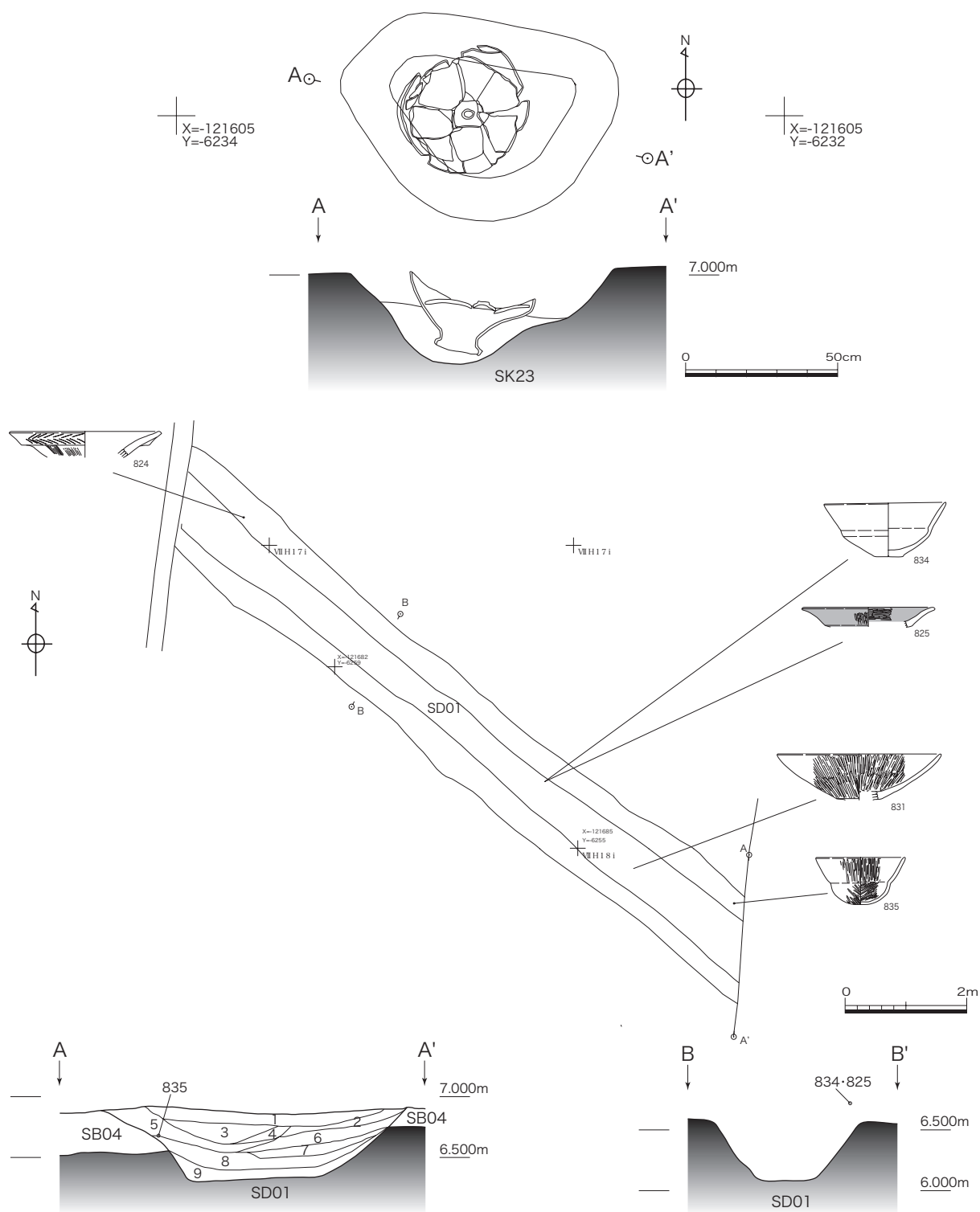






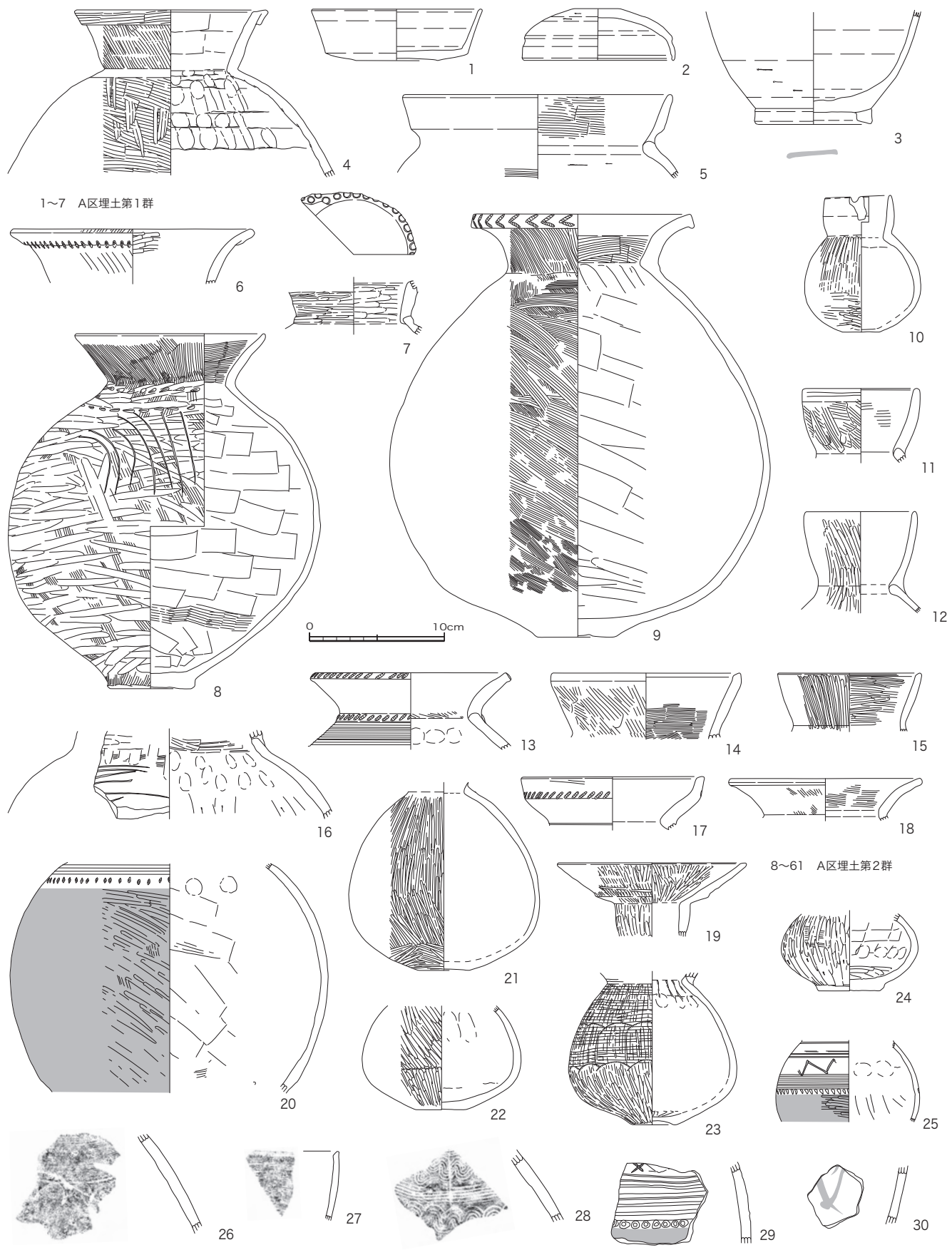


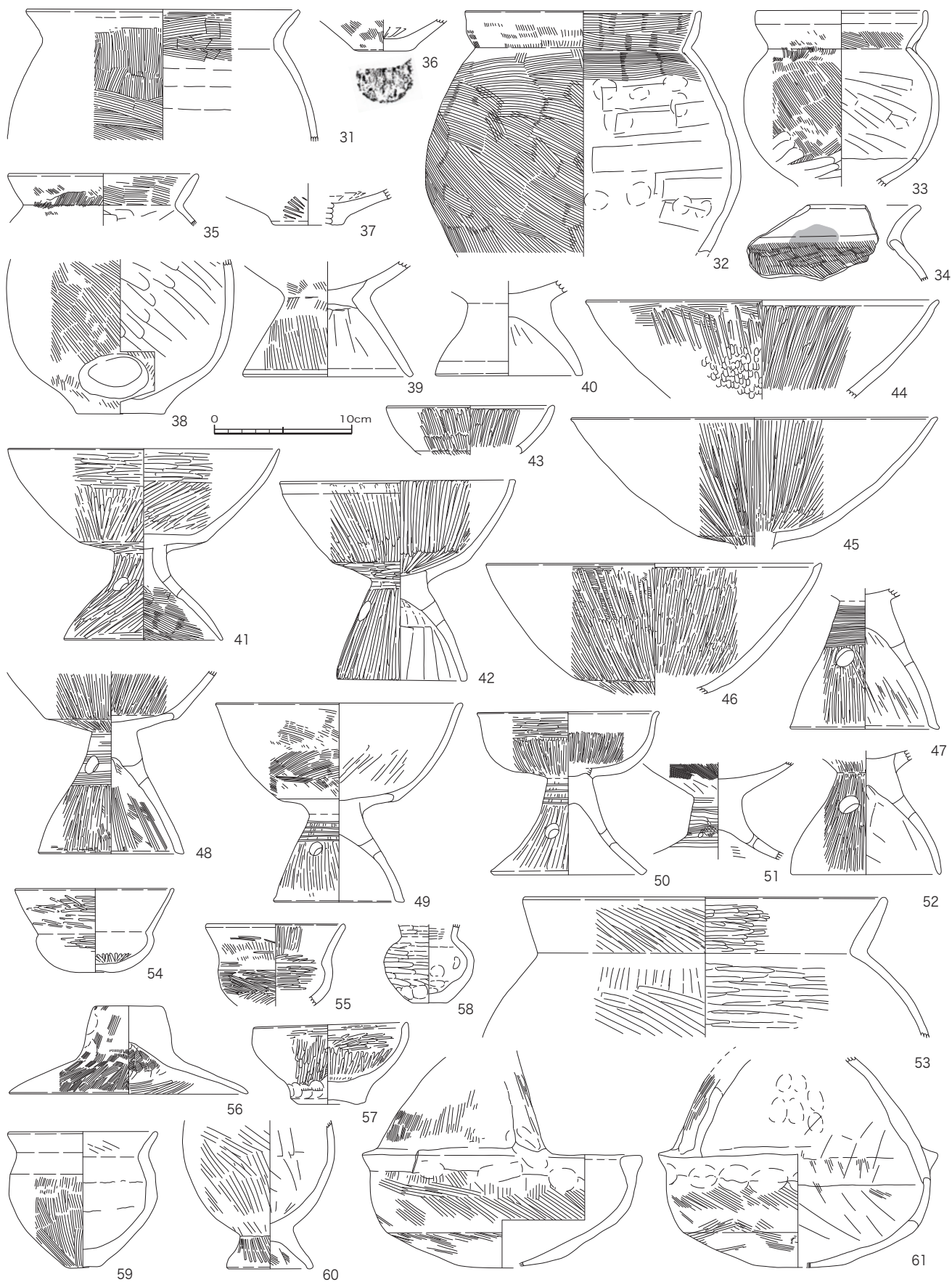




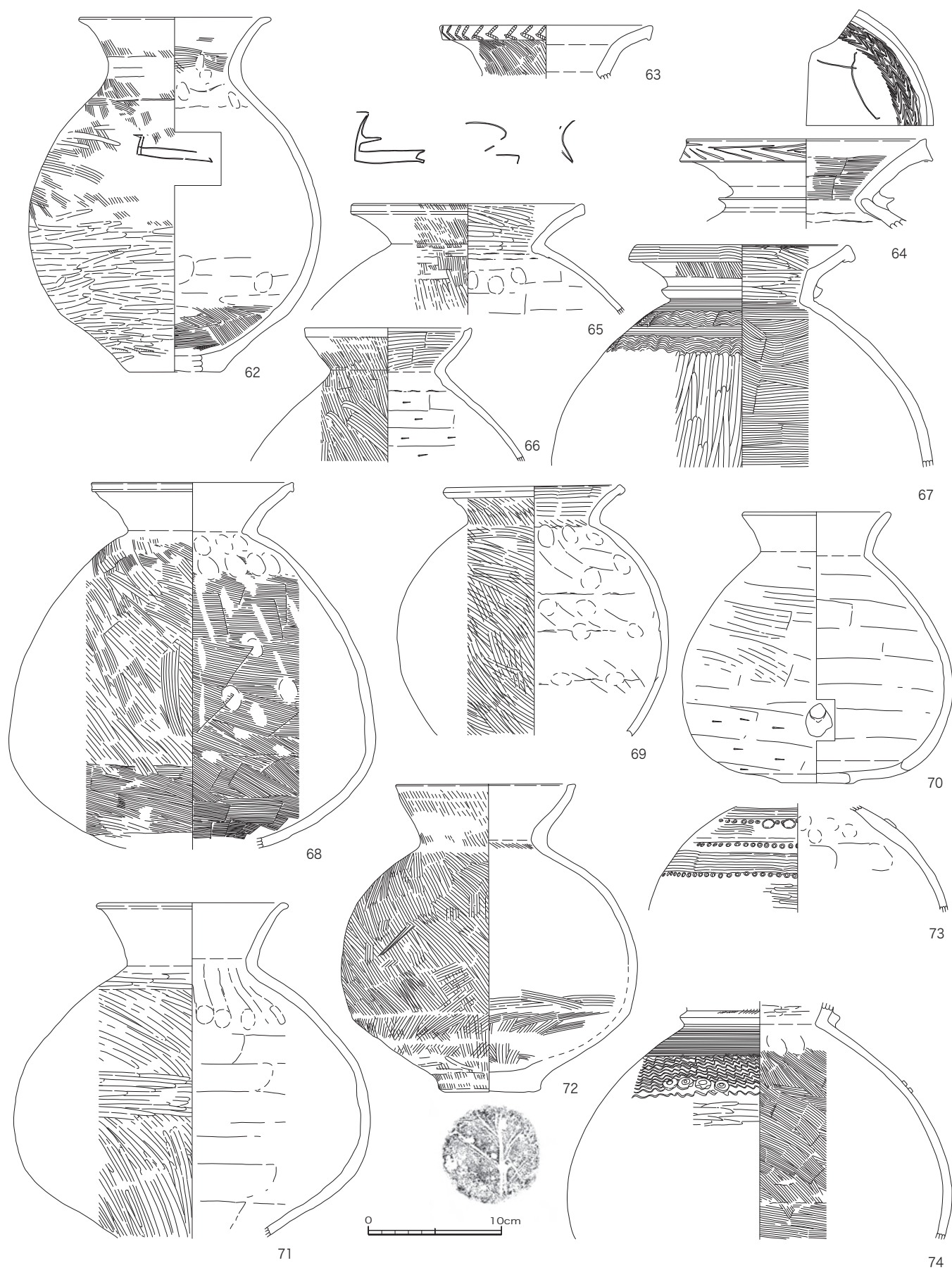
- | | | |
|----|----------------|--|
| 1層 | 2.5Y3/1 黒褐色シルト | 粒子細かく粘性なし、遺物若干、炭化物若干 |
| 2層 | 2.5Y5/1 黄灰色シルト | 粒子細かく粘性なし、炭化物若干 |
| 3層 | 2.5Y4/1 黄灰色シルト | 粒子細かく粘性なし、2.5Y4/2 (暗灰黄色) との互層、炭化物若干 |
| 4層 | 2.5Y4/1 黄灰色シルト | 粒子細かく粘性なし、炭化物極小片若干 |
| 5層 | 2.5Y3/1 黒褐色シルト | 粒子細かく粘性なし、遺物若干 |
| 6層 | 2.5Y3/2 黒褐色シルト | 粒子細かく粘性なし、炭化物若干 |
| 7層 | 5Y3/1 オリーブ黒色 | 粒子細かく粘性なし、遺物若干 |
| 8層 | 2.5Y3/1 黒褐色シルト | 粒子細かく粘性なし、2.5Y5/2 (暗灰黄色) 粒子細かく粘性なしとの互層 |
| 9層 | 2.5Y5/2 暗灰黄色 | 粒子細かく粘性なし |

0 1m

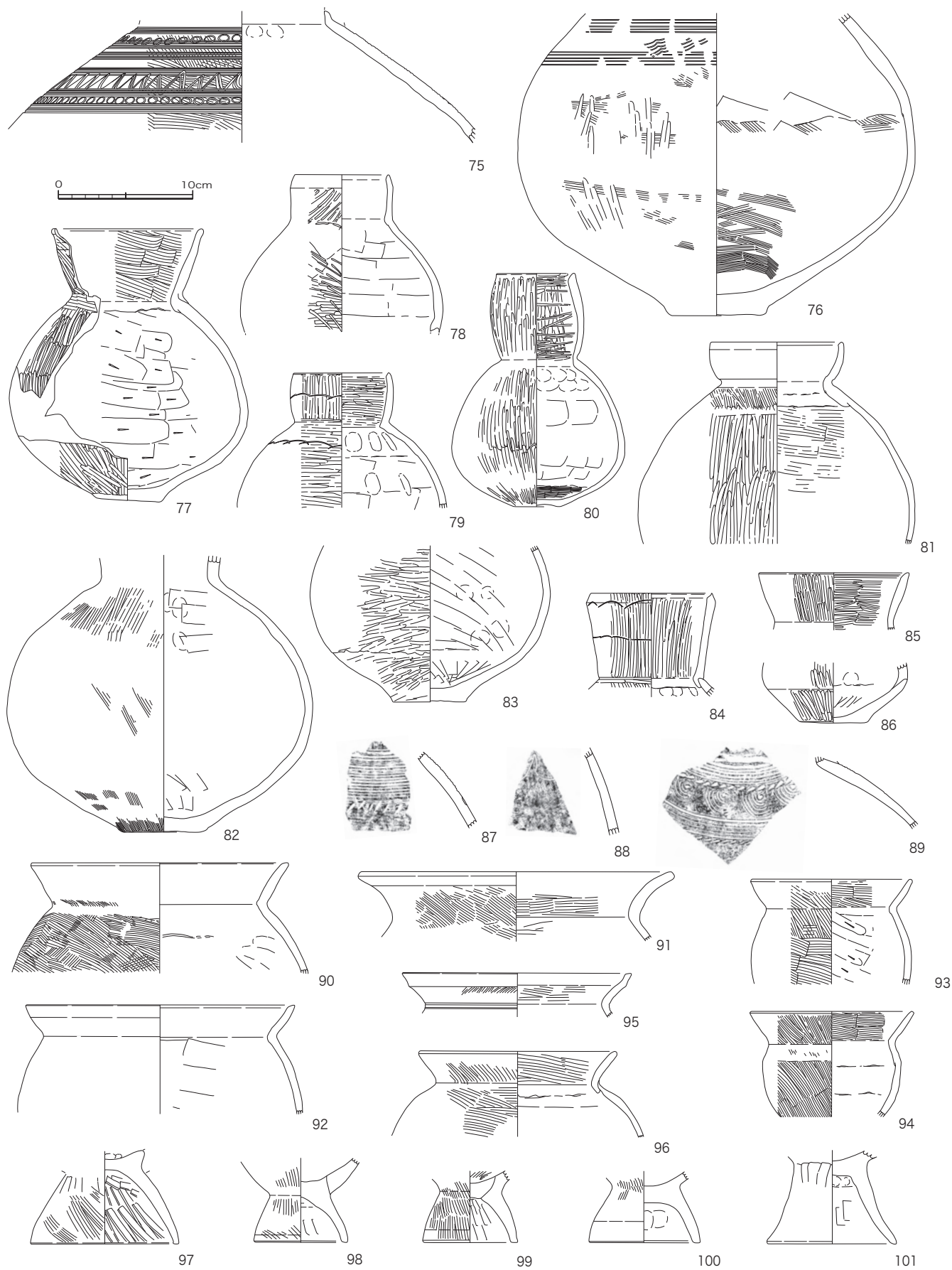




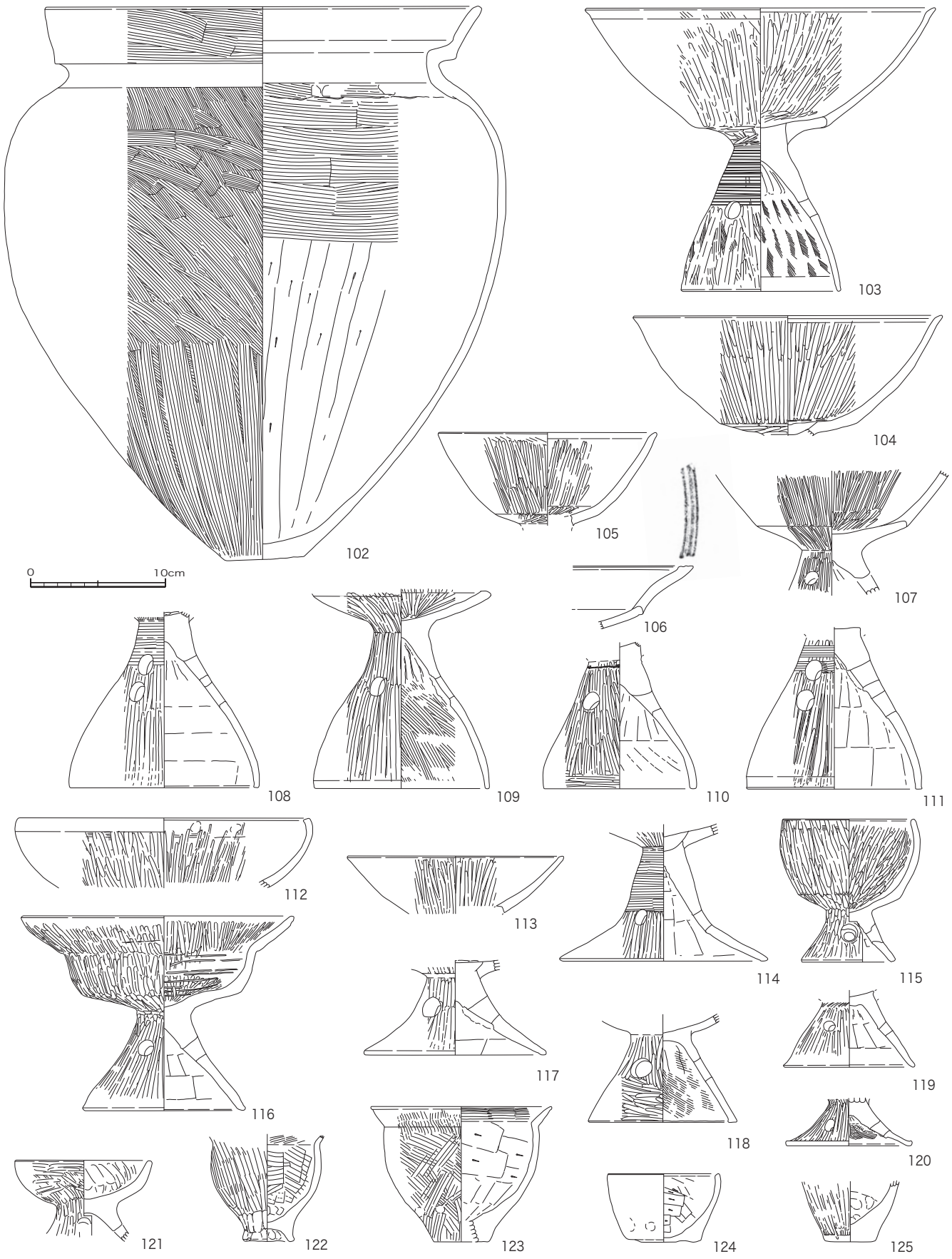
8~61 A区埋土第2群



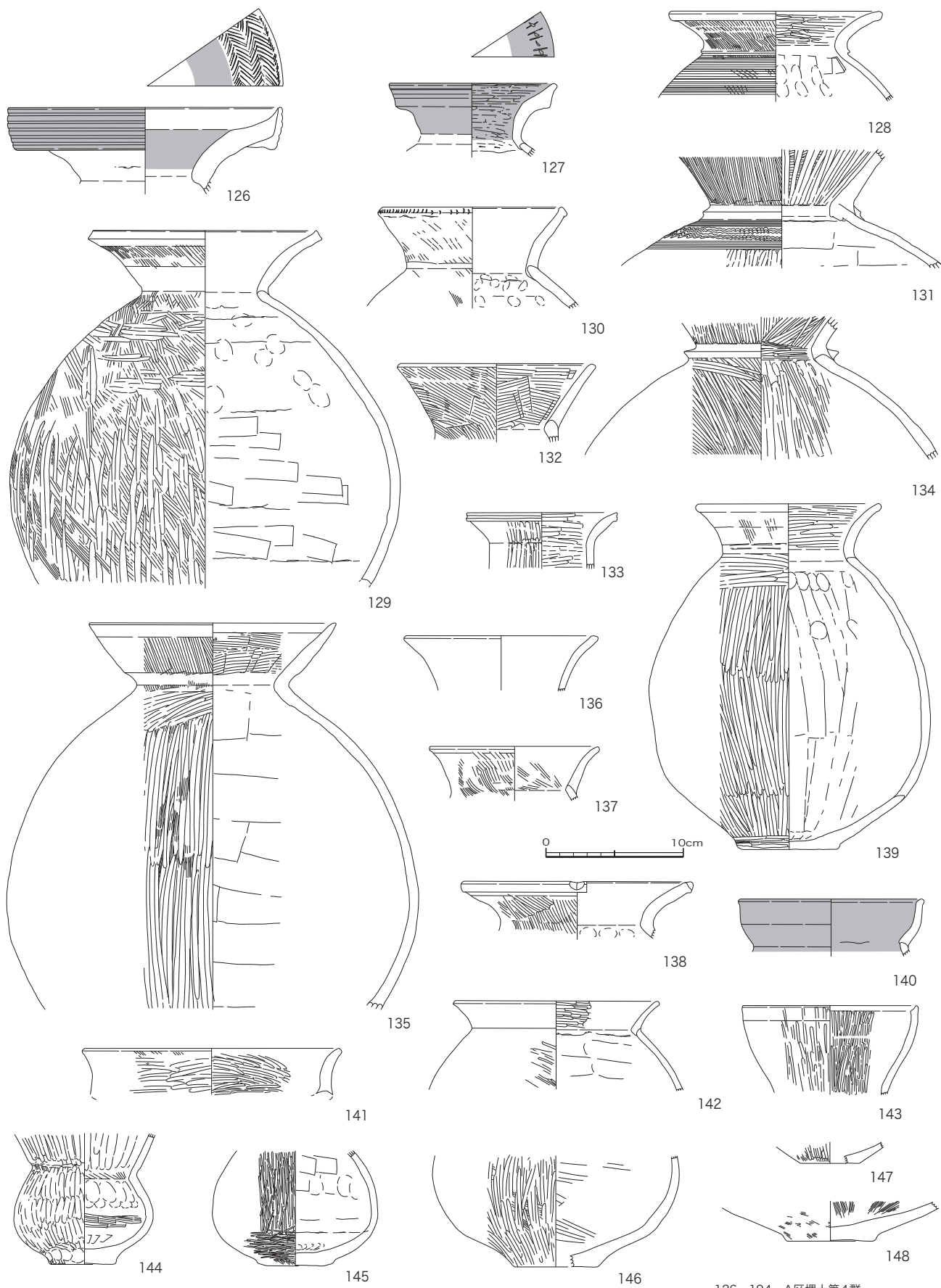
62~125 A区埋土第3群



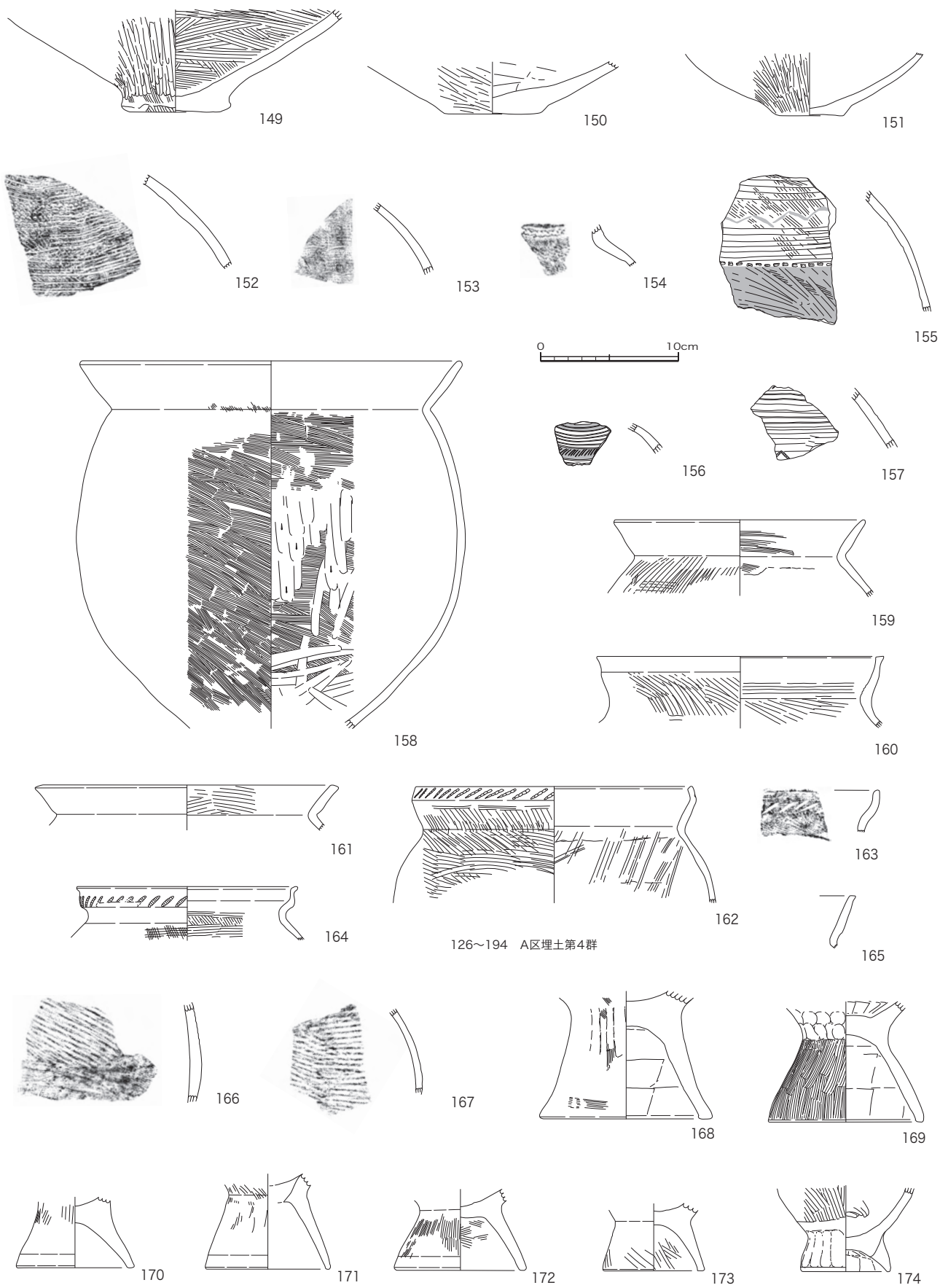
62~125 A区埋土第3群

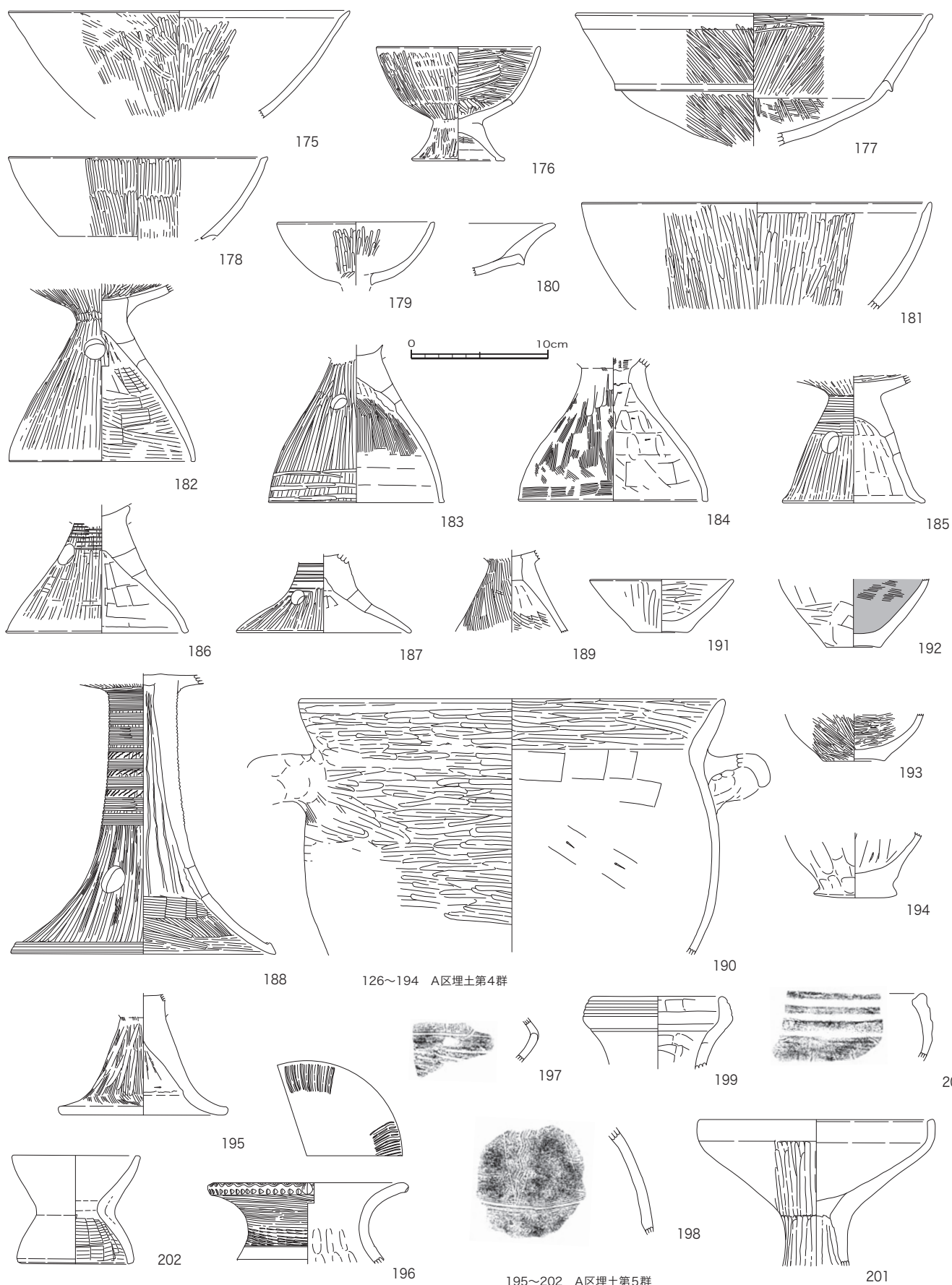


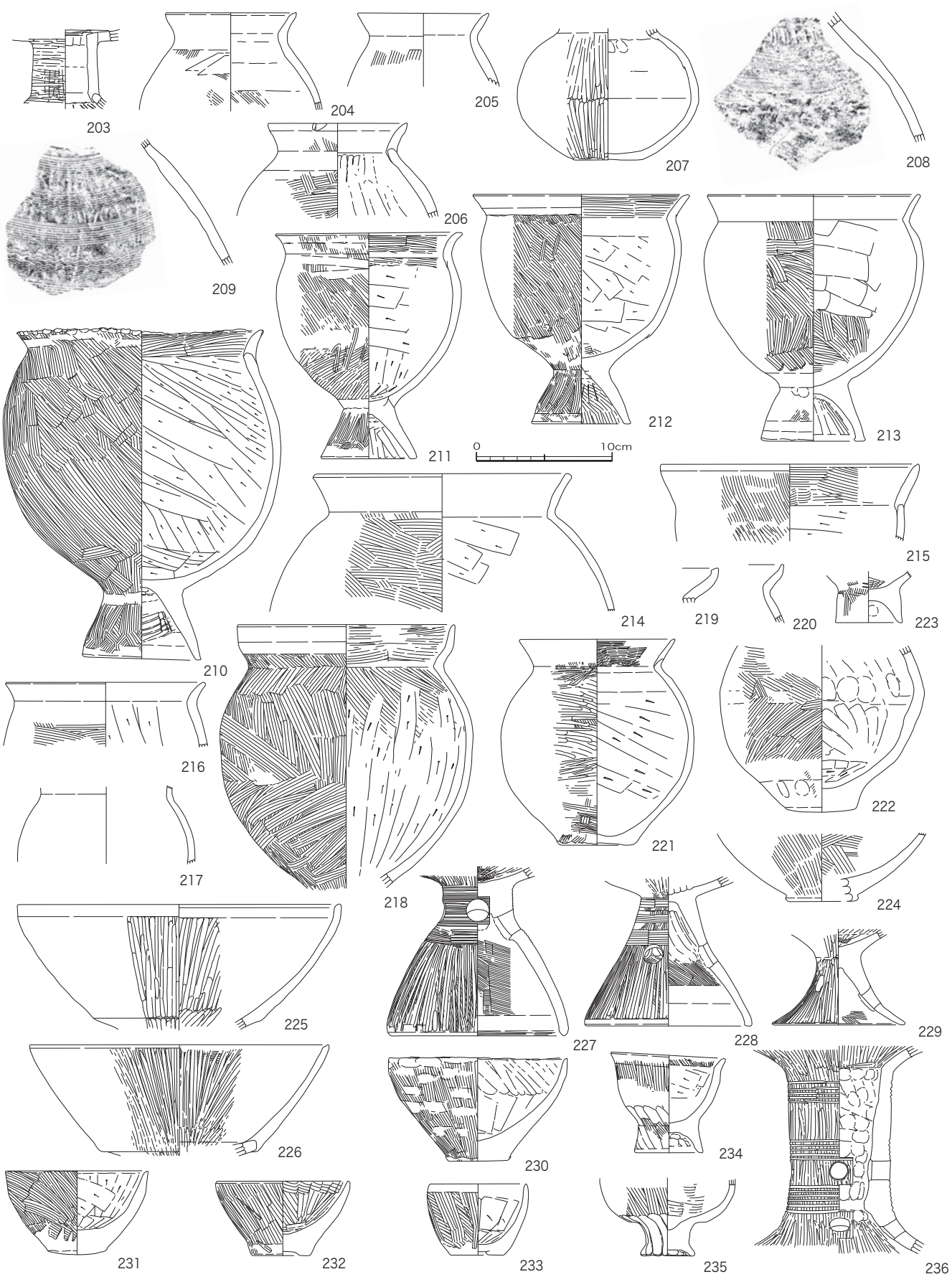
62~125 A区埋土第3群



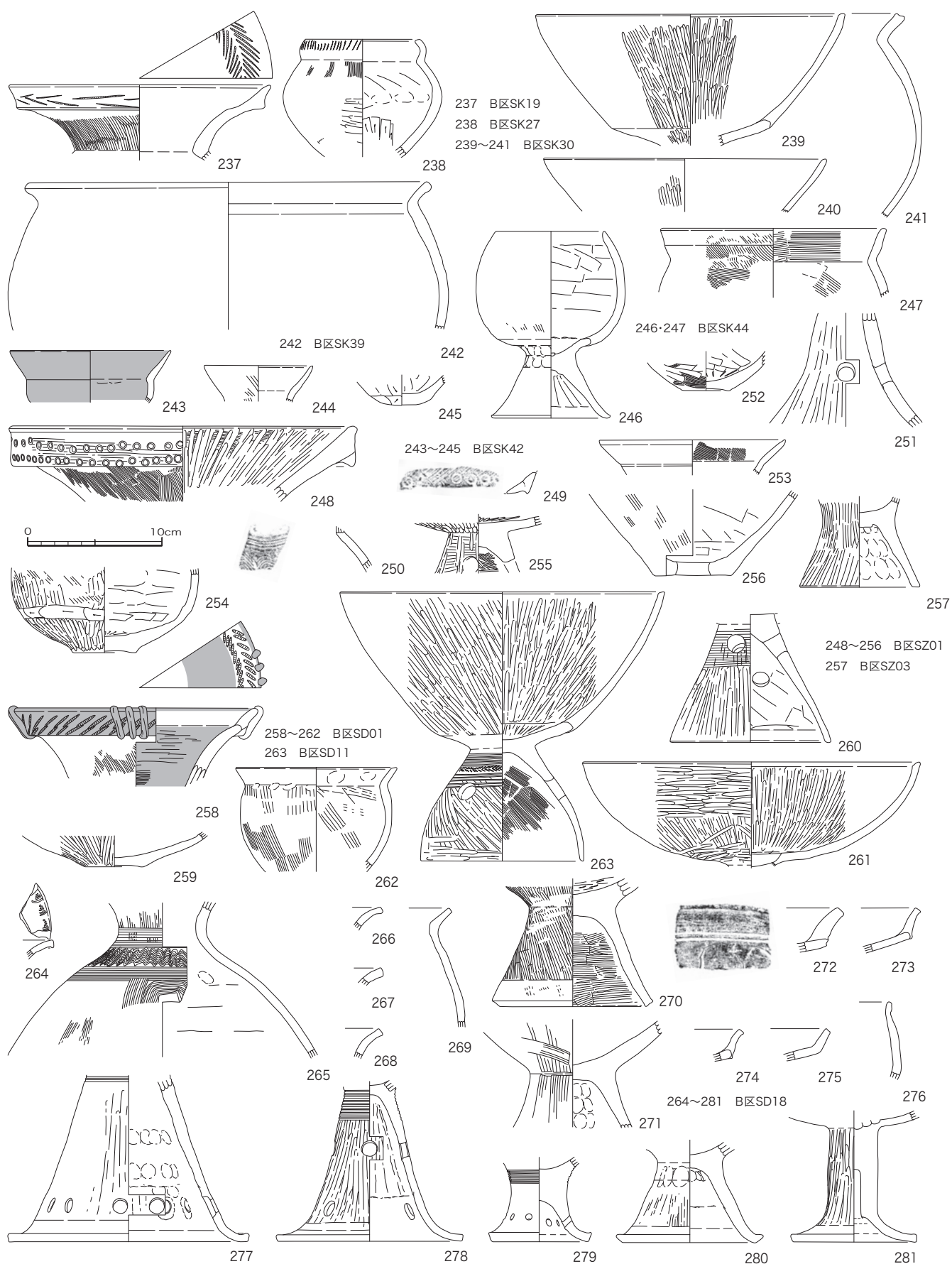
126~194 A区埋土第4群

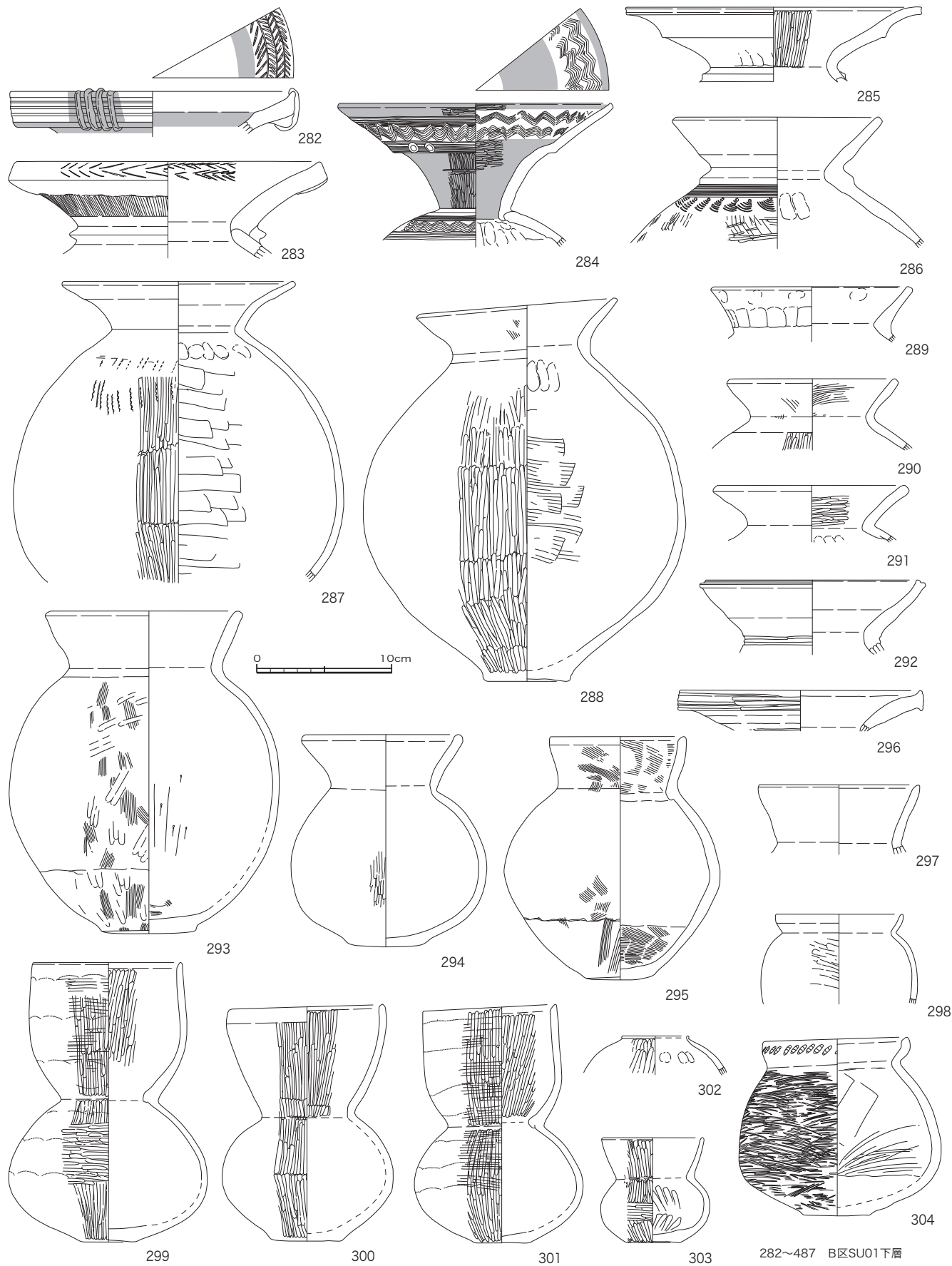


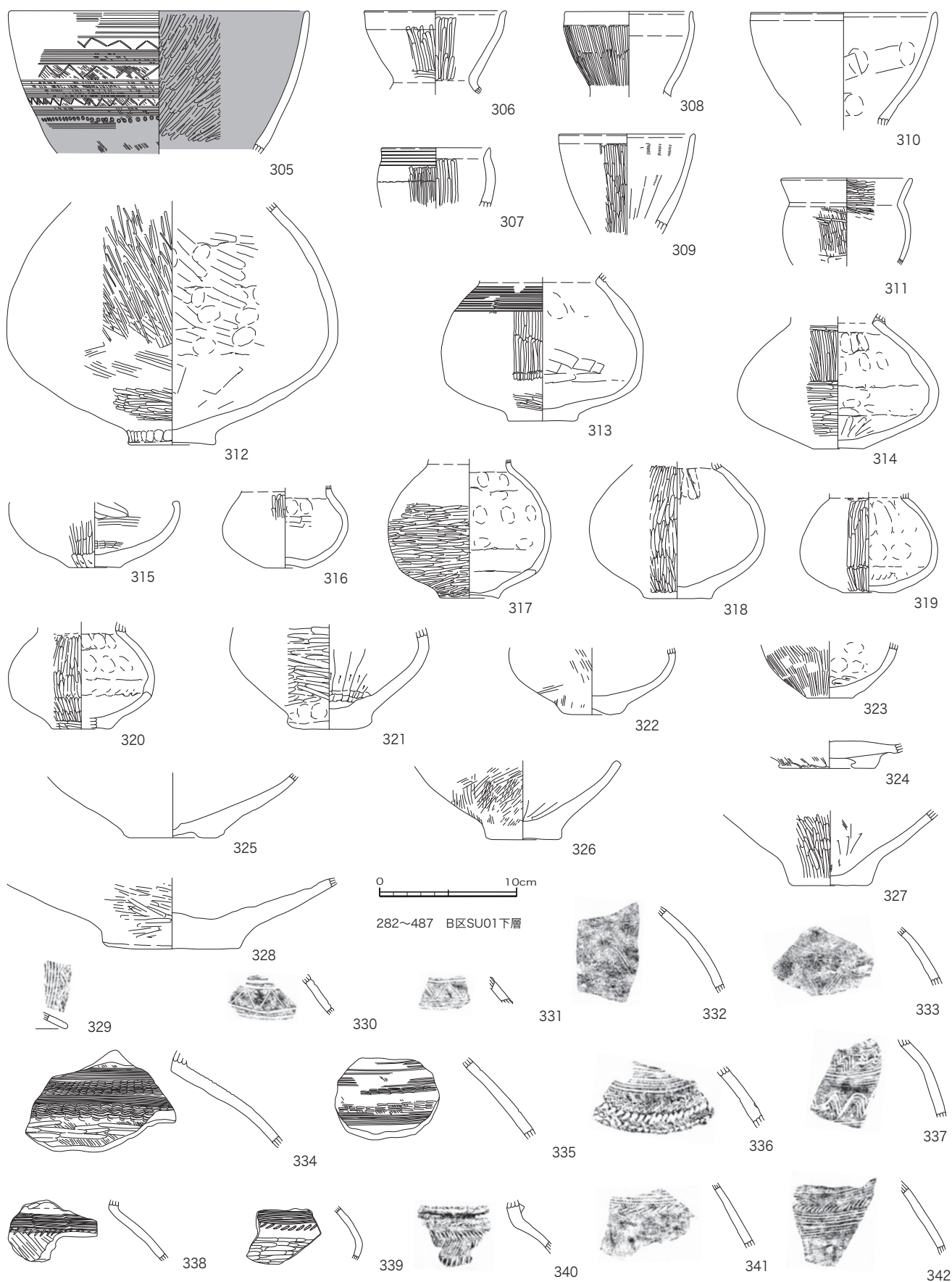


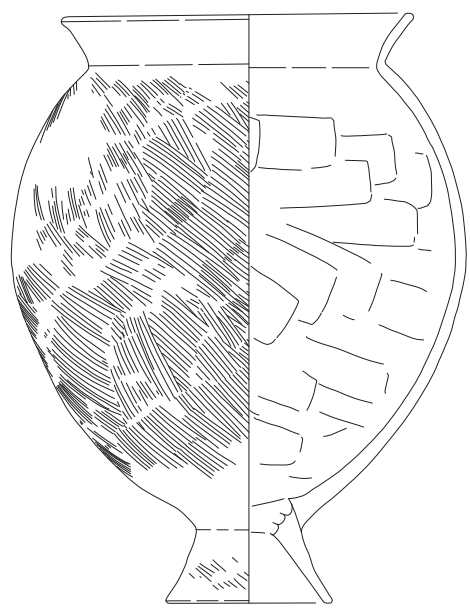


203~236 B区SK29

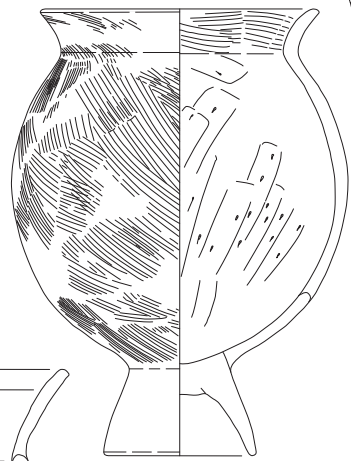








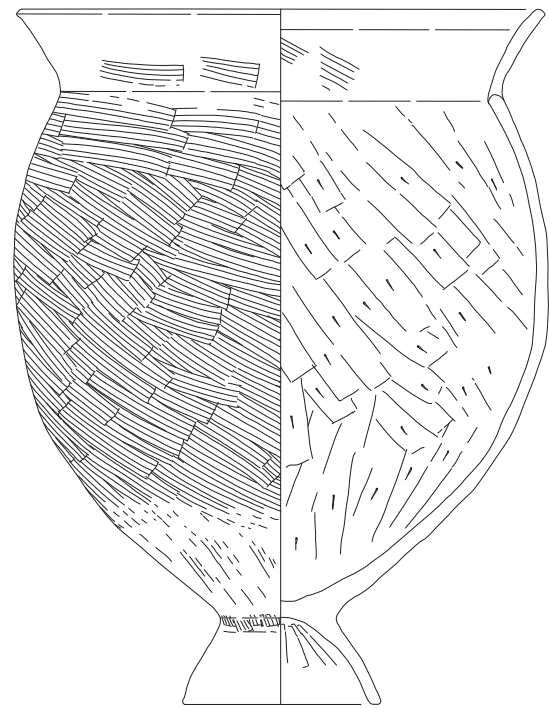
343



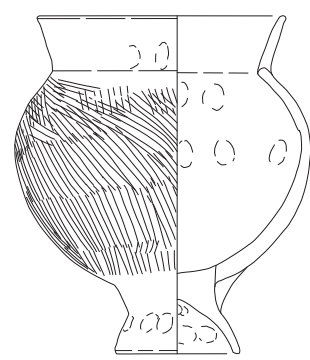
344



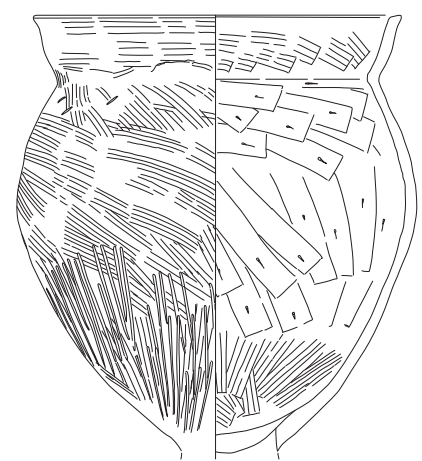
345



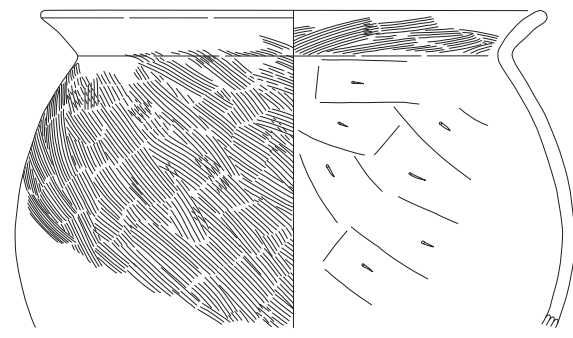
346



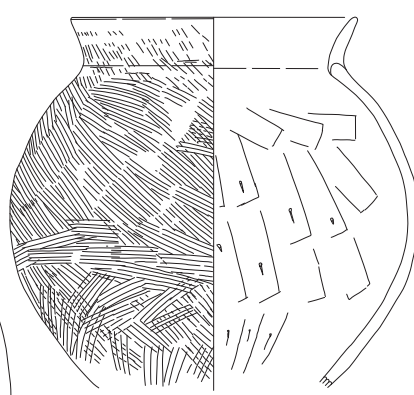
347



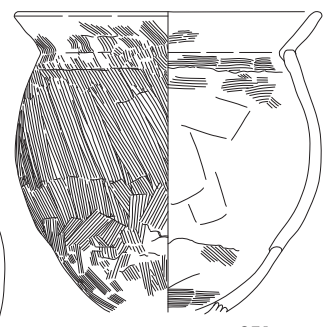
348



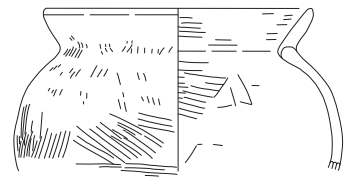
349



350



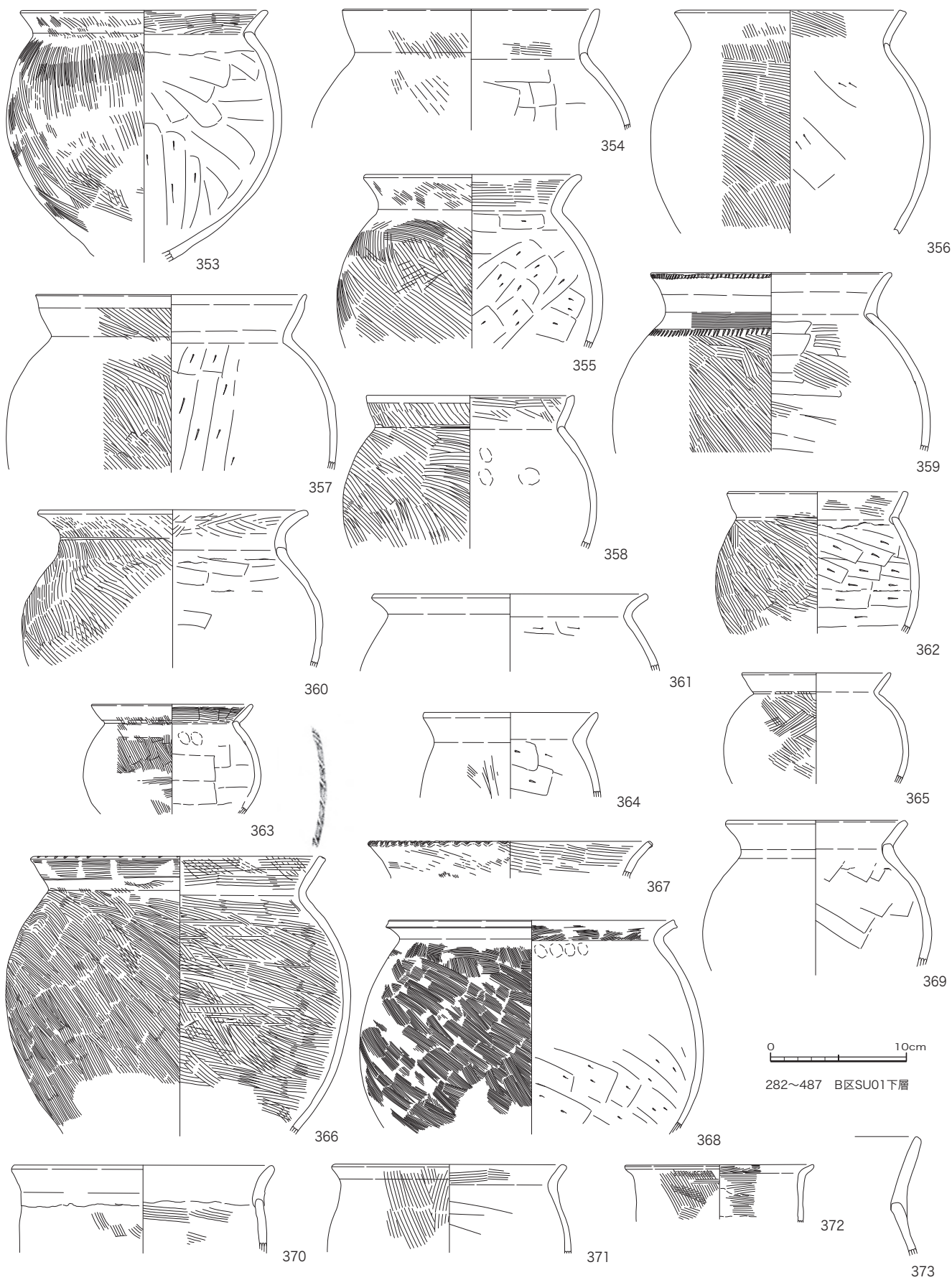
351

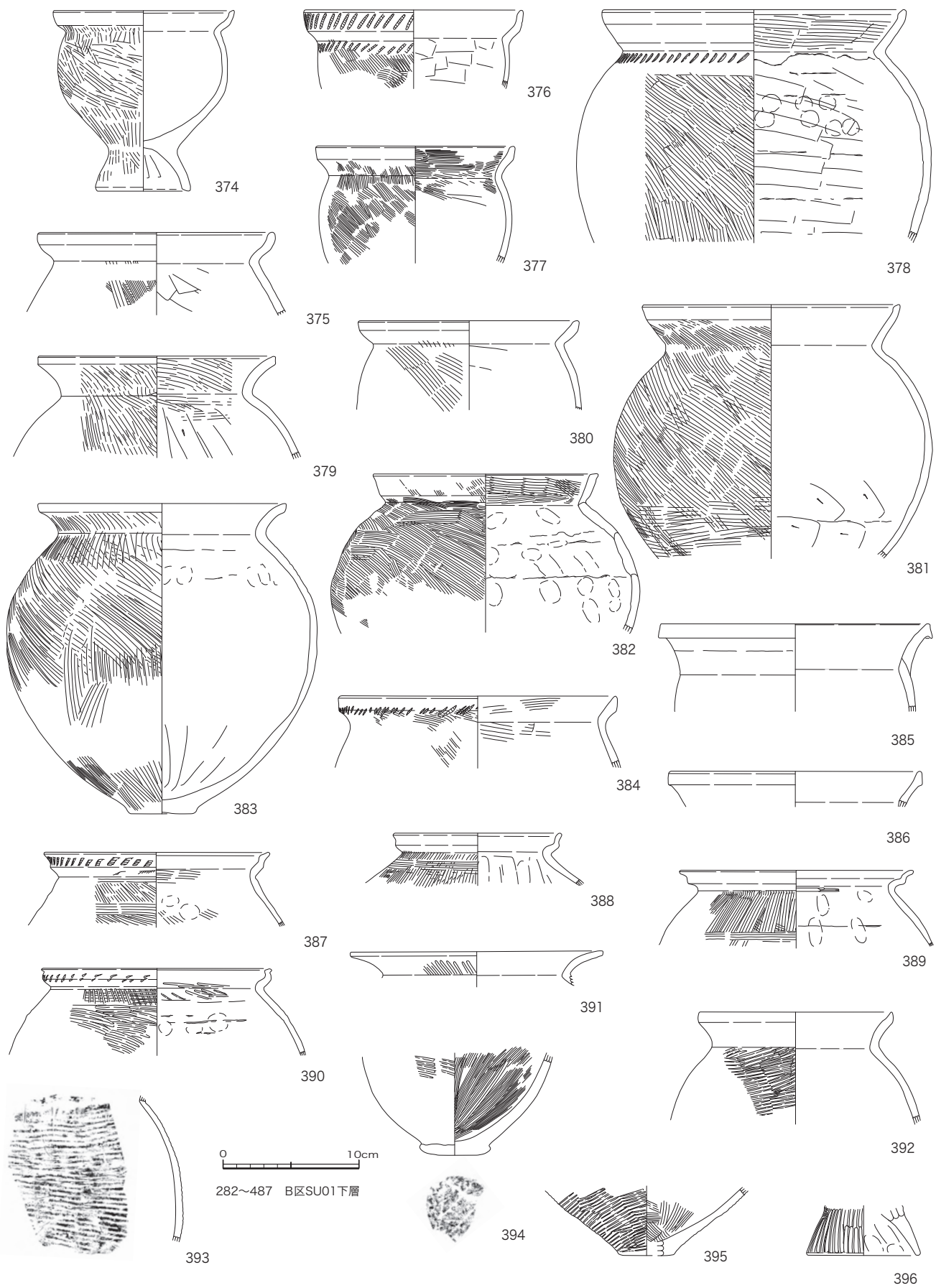


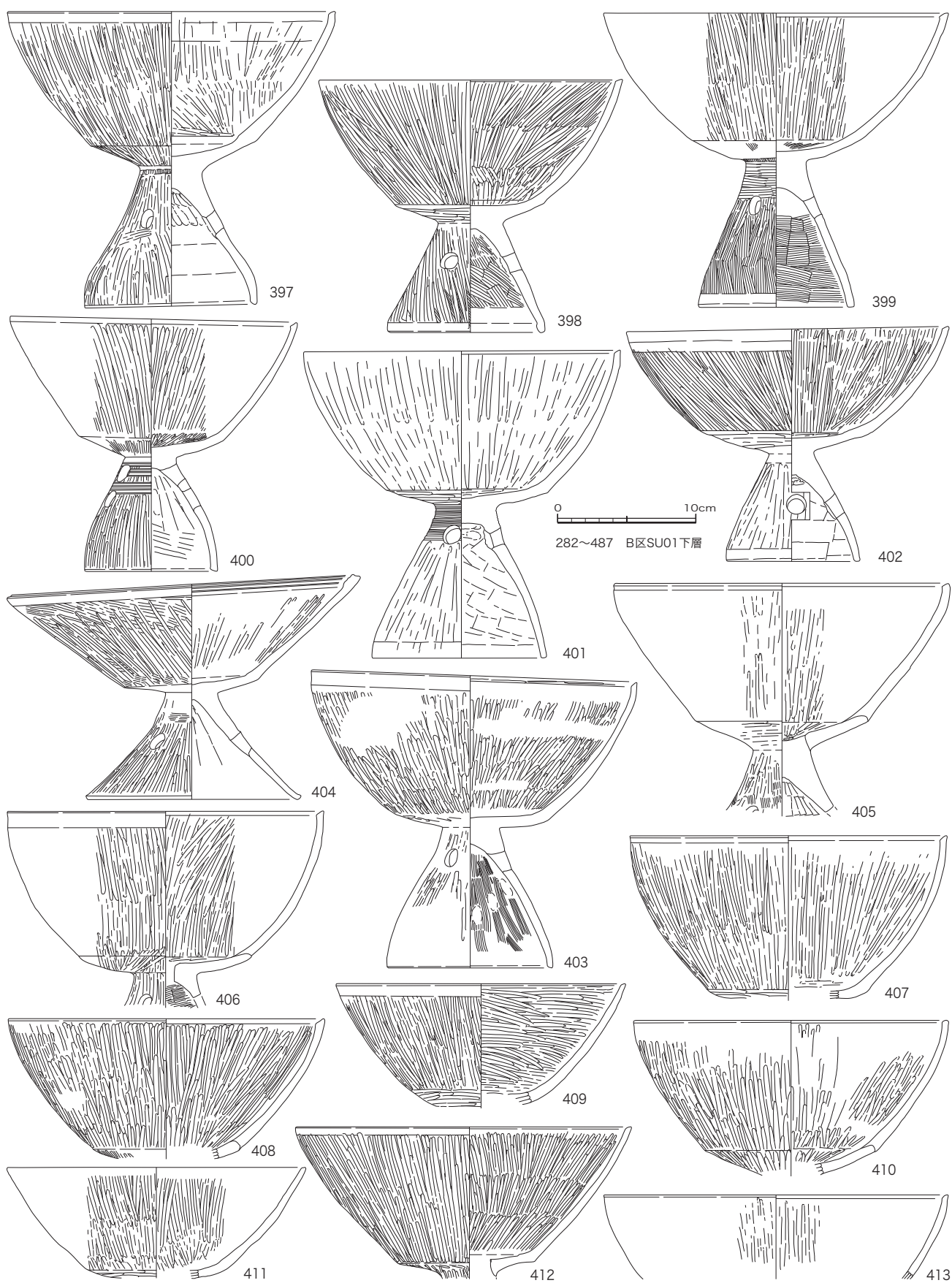
352

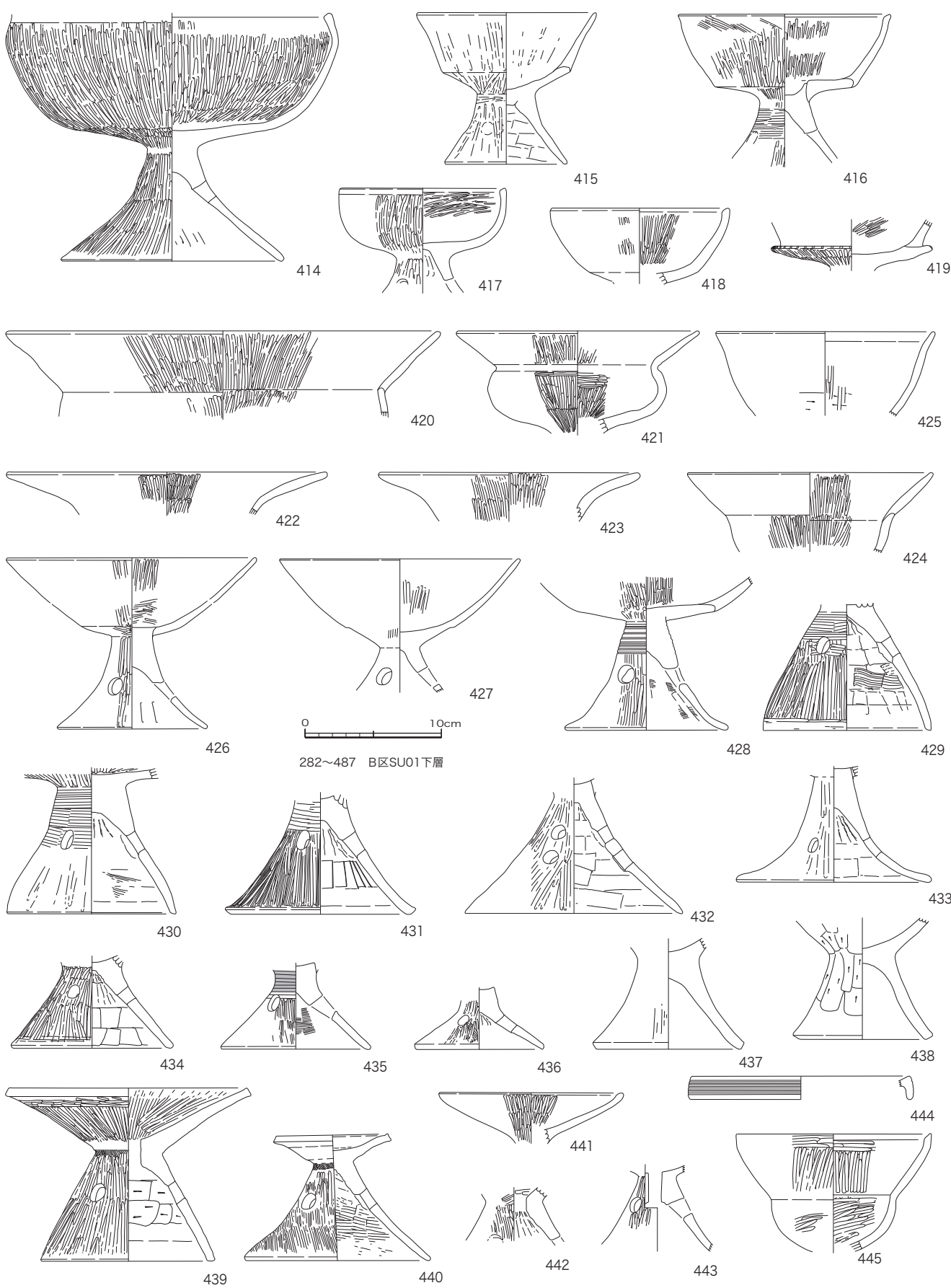
0 10cm

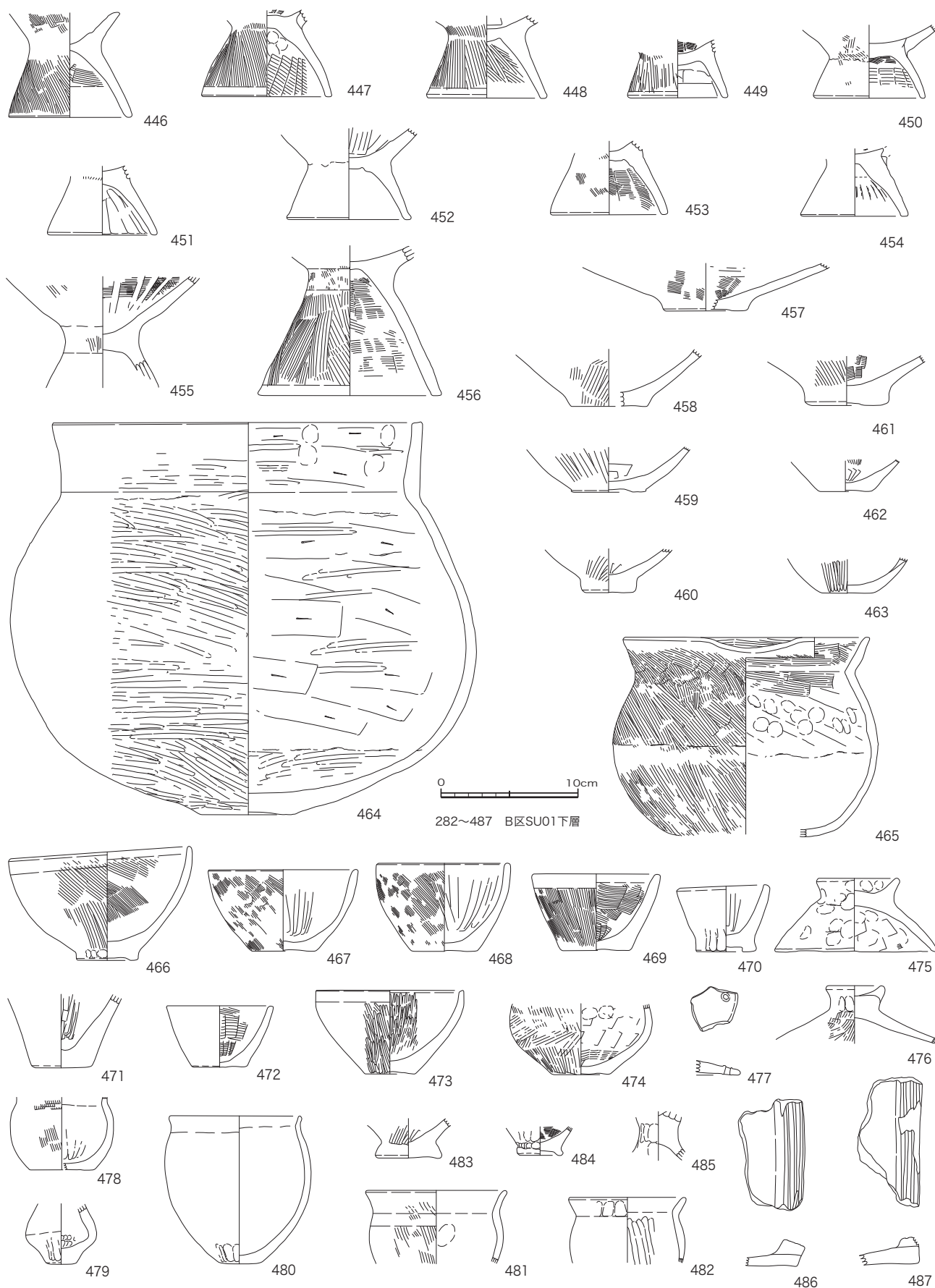
282~487 B区SU01下層

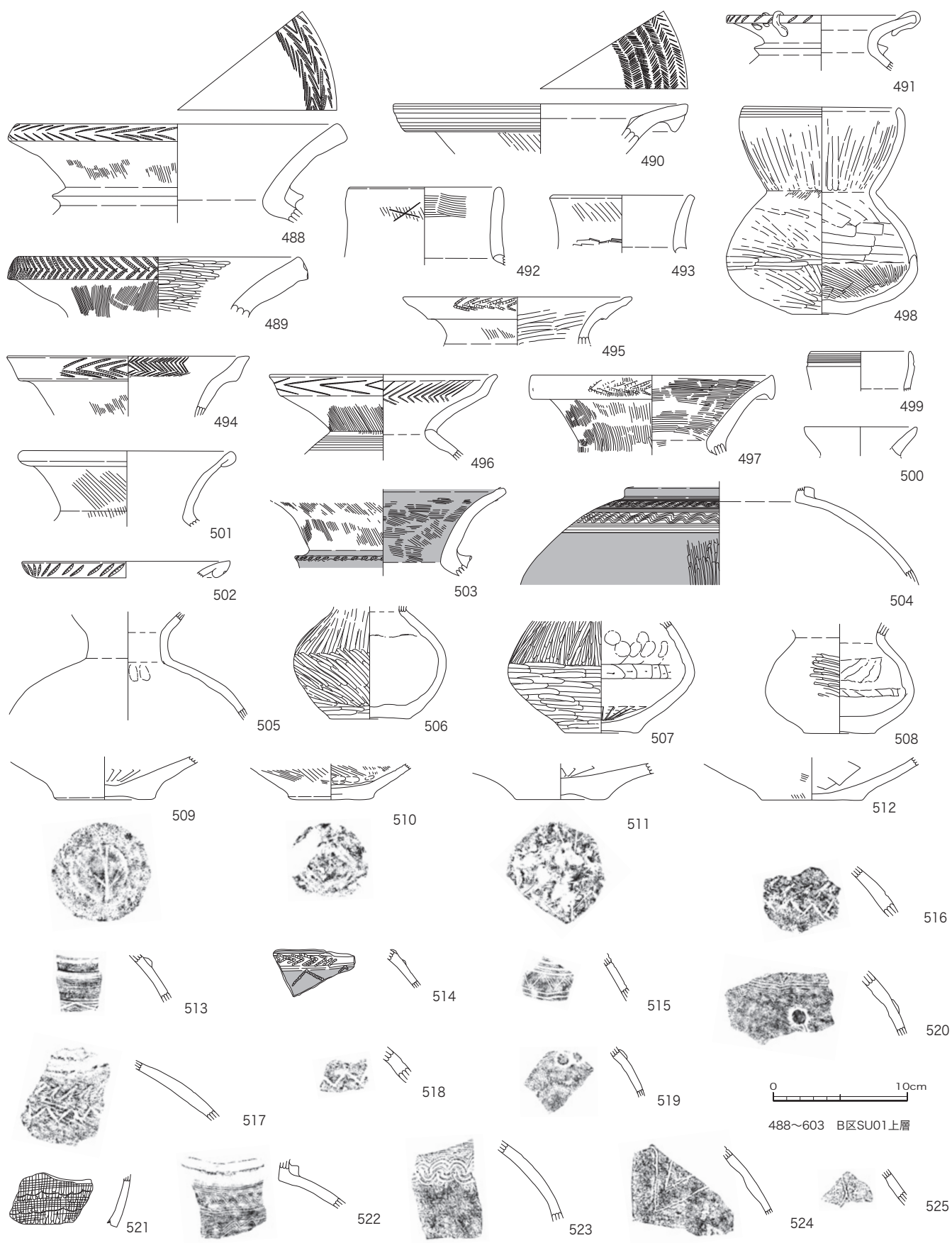


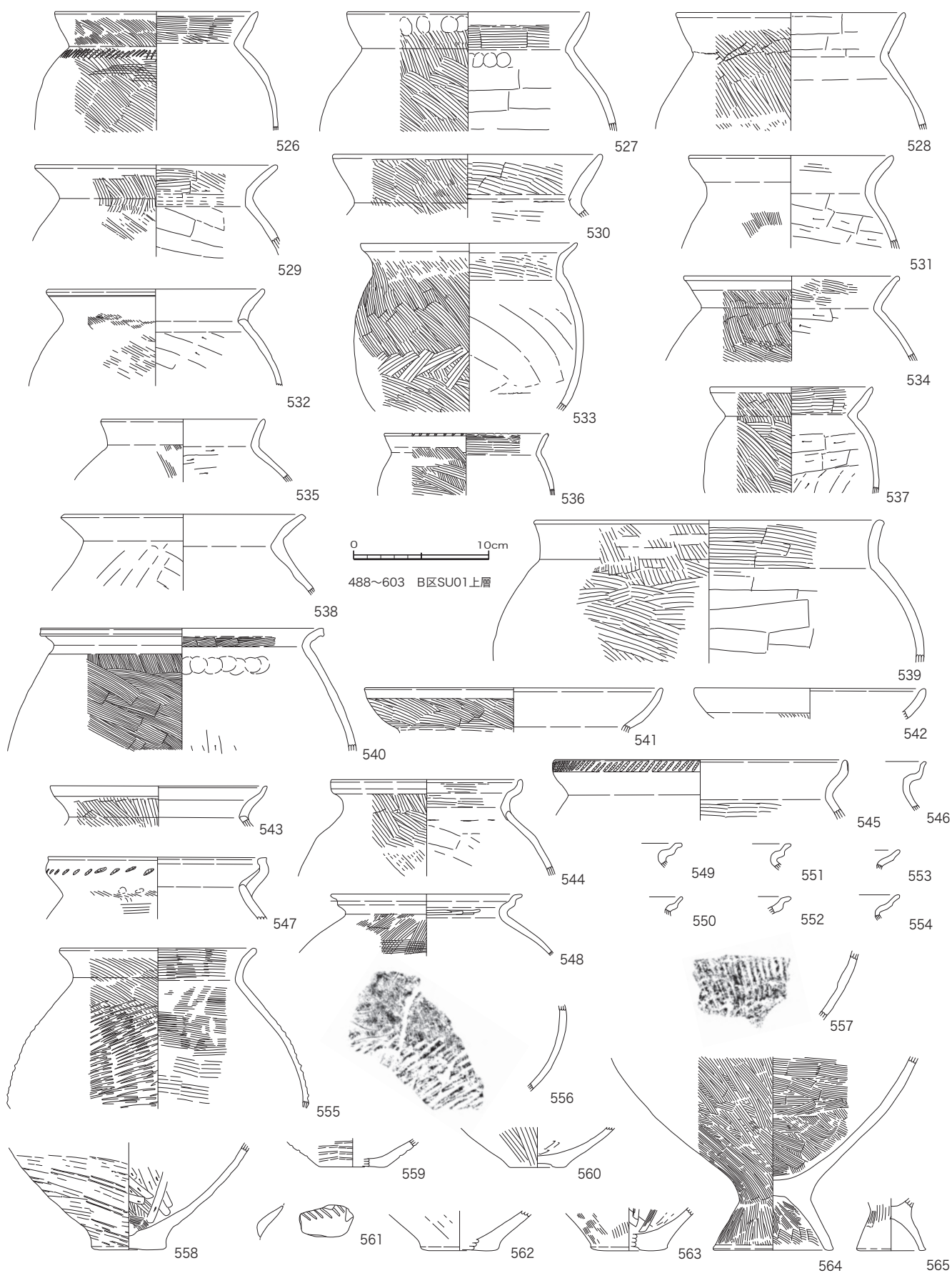


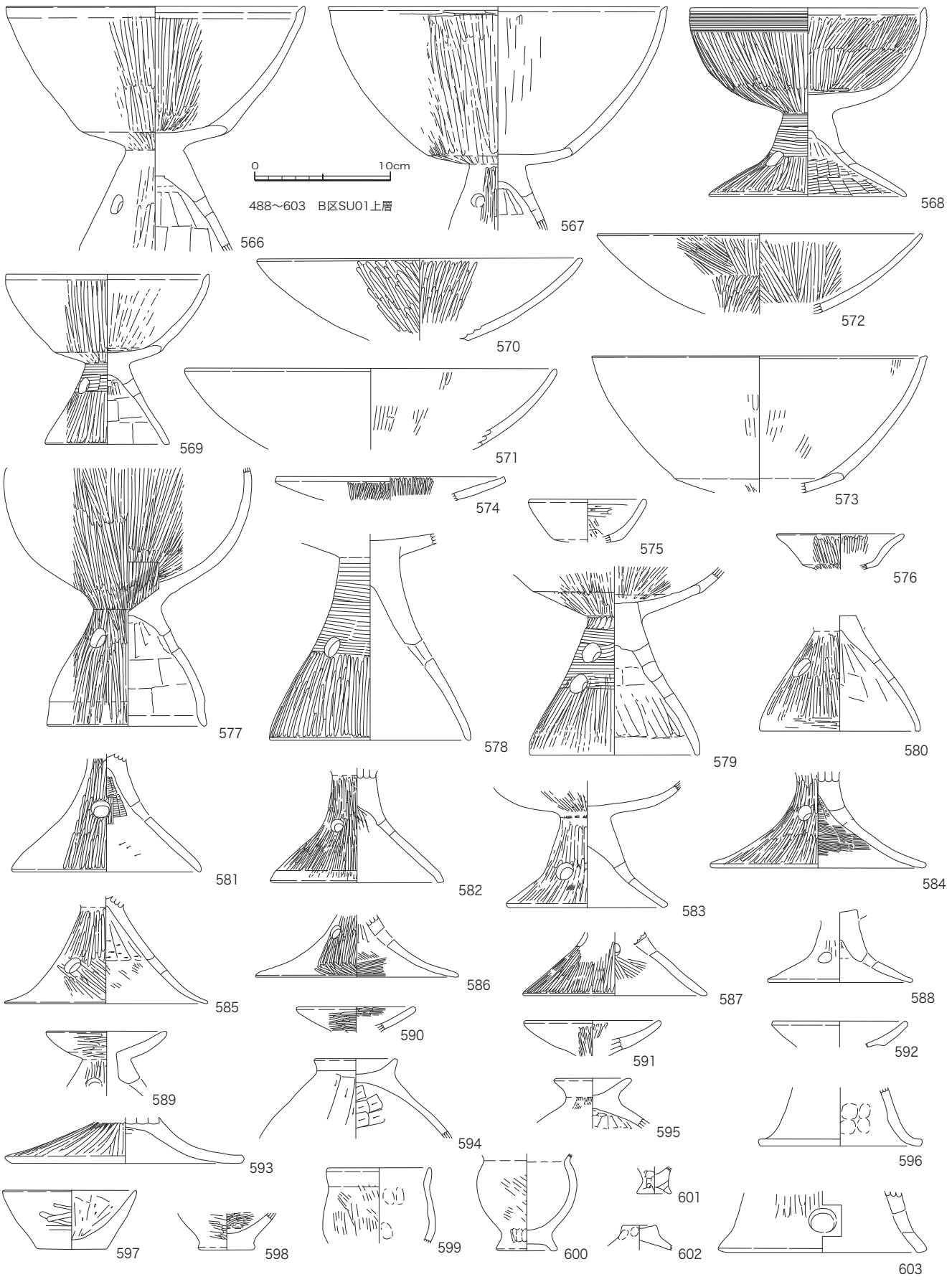


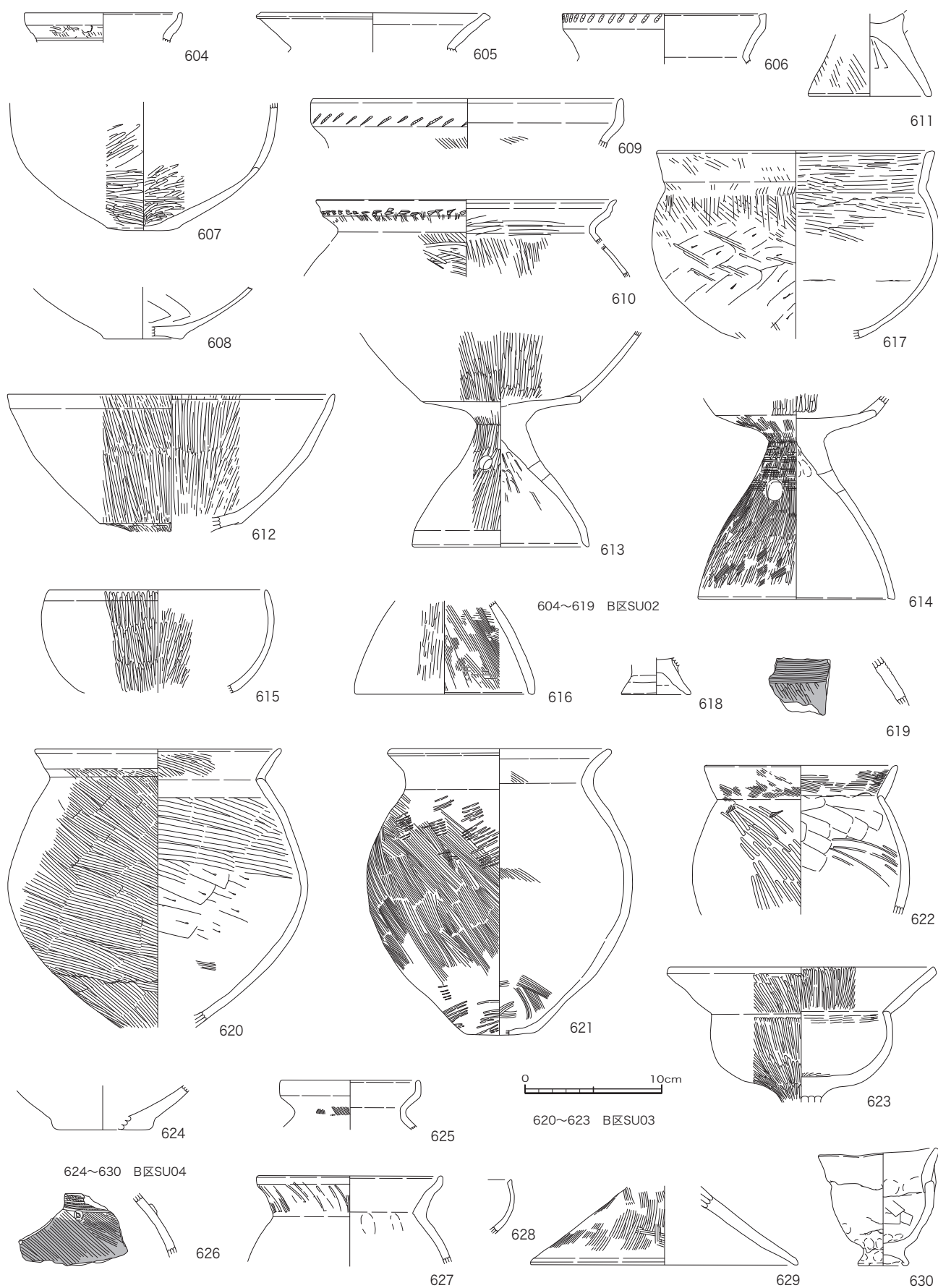


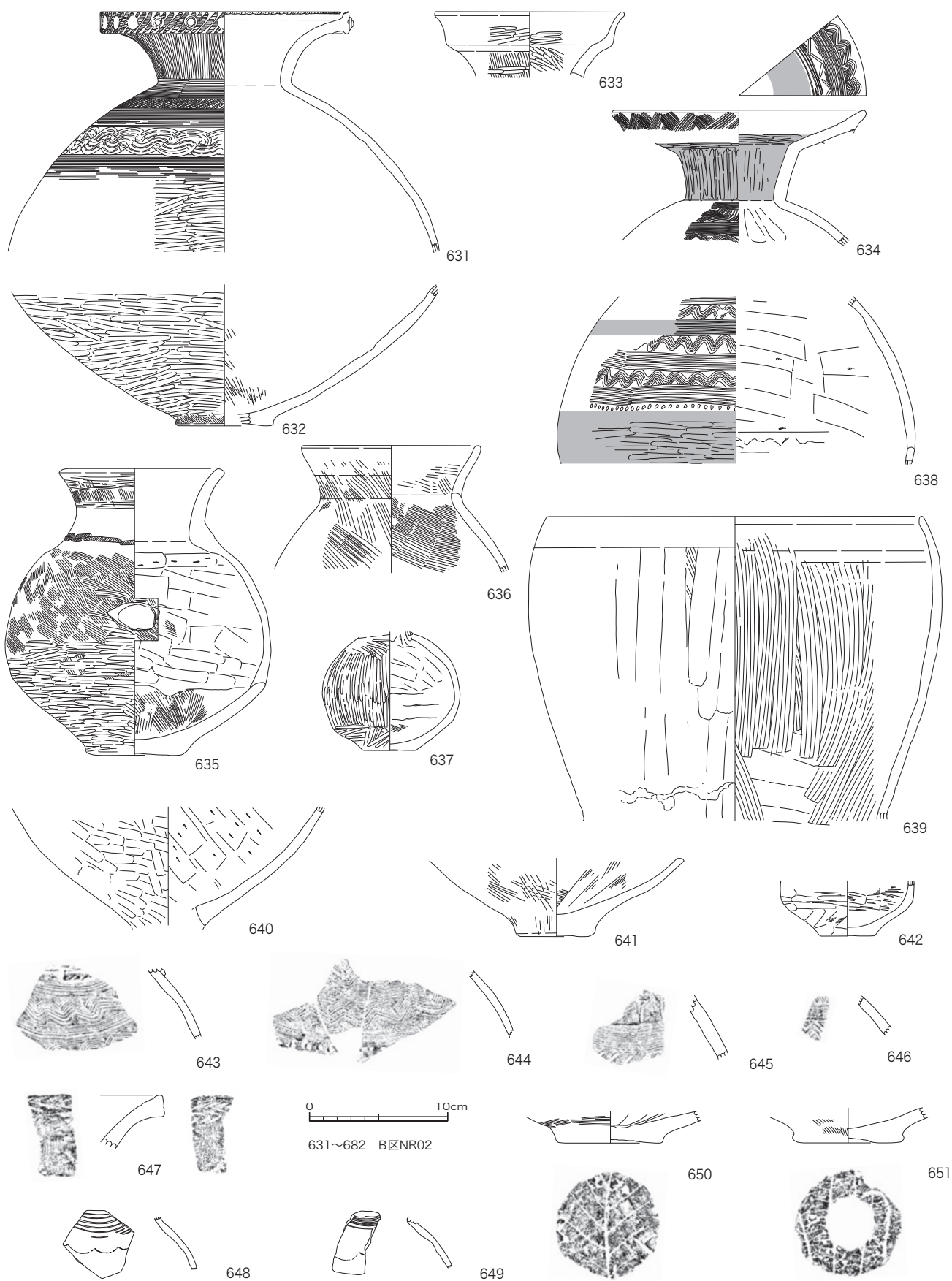


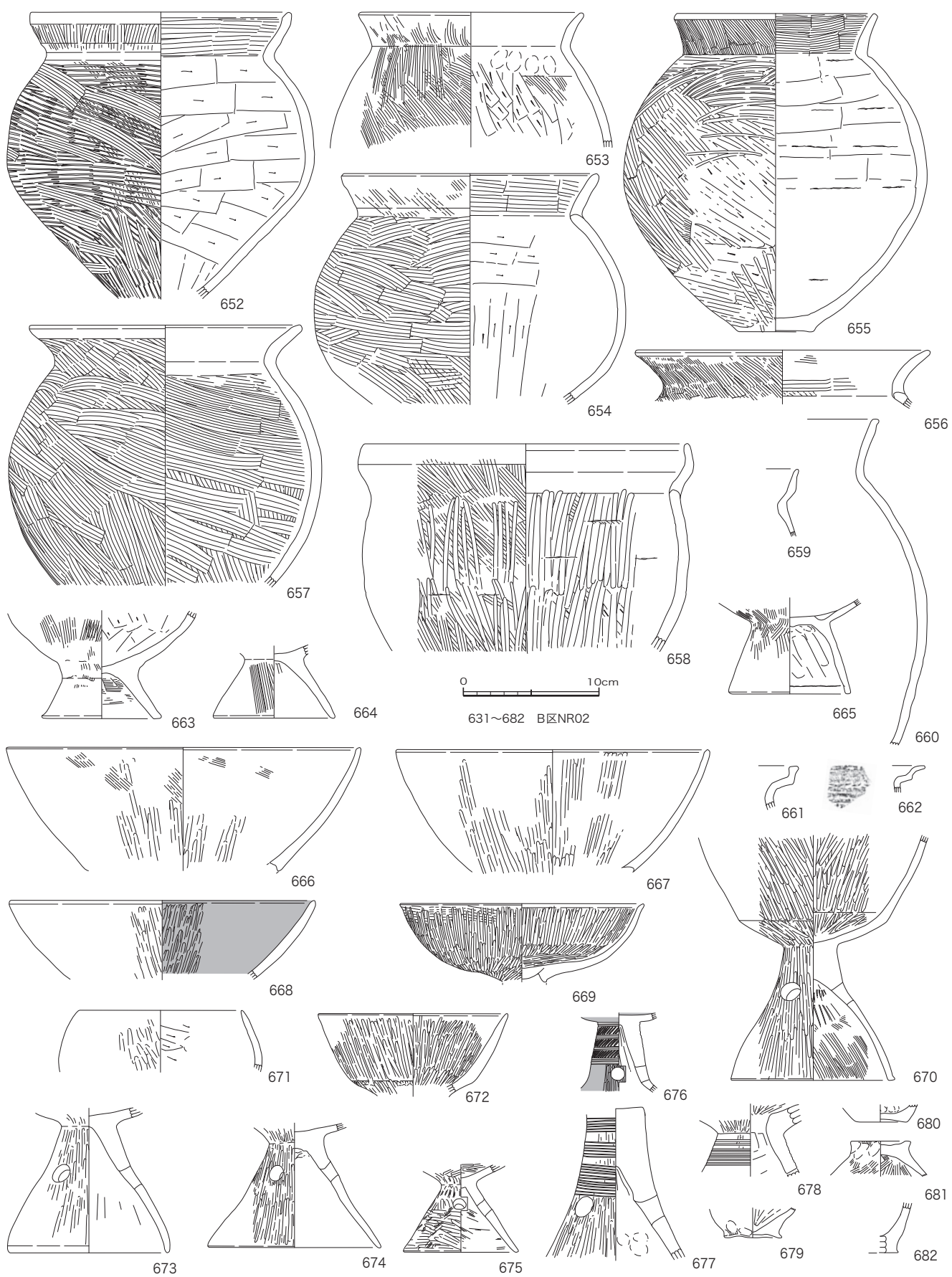


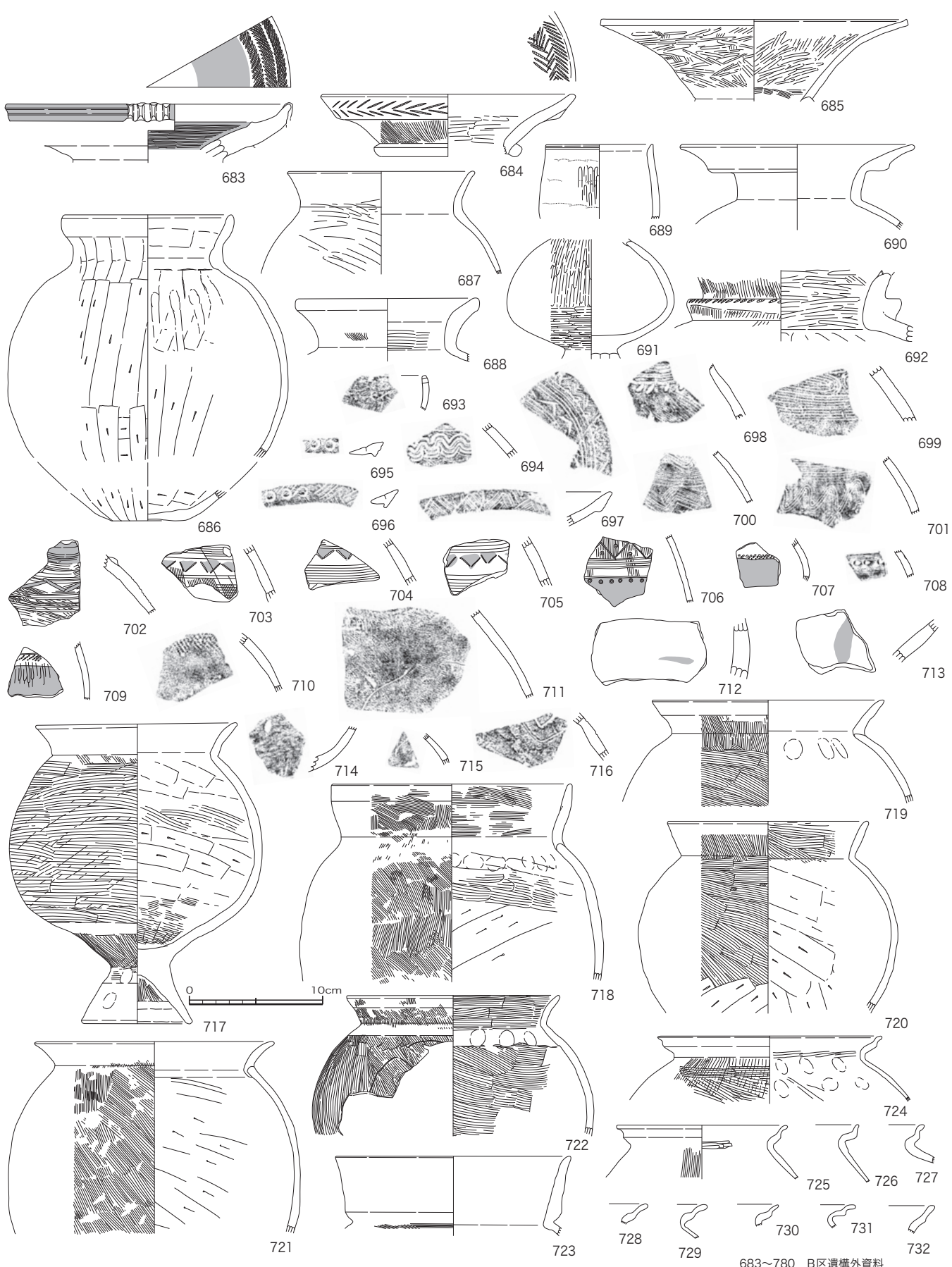




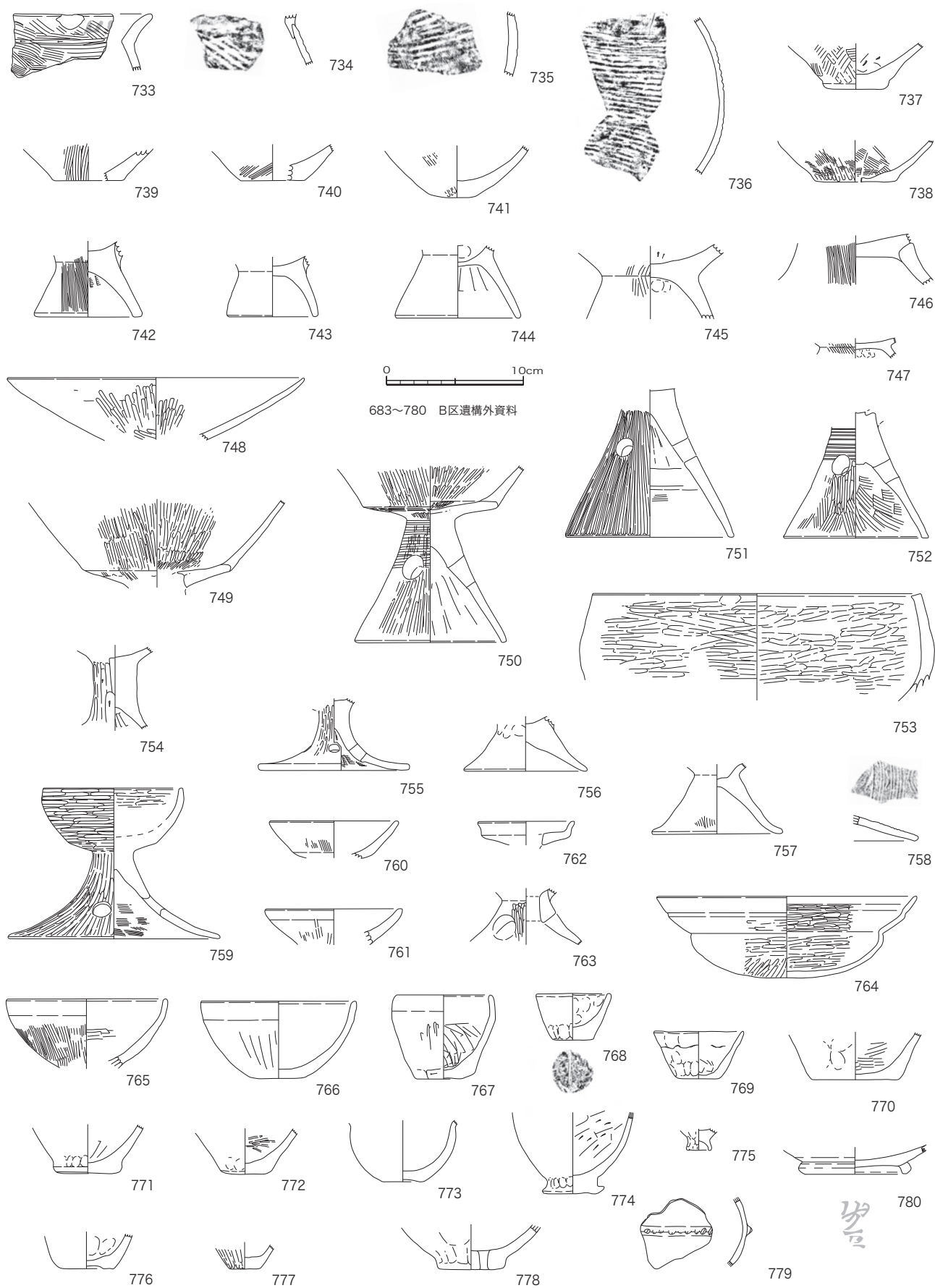


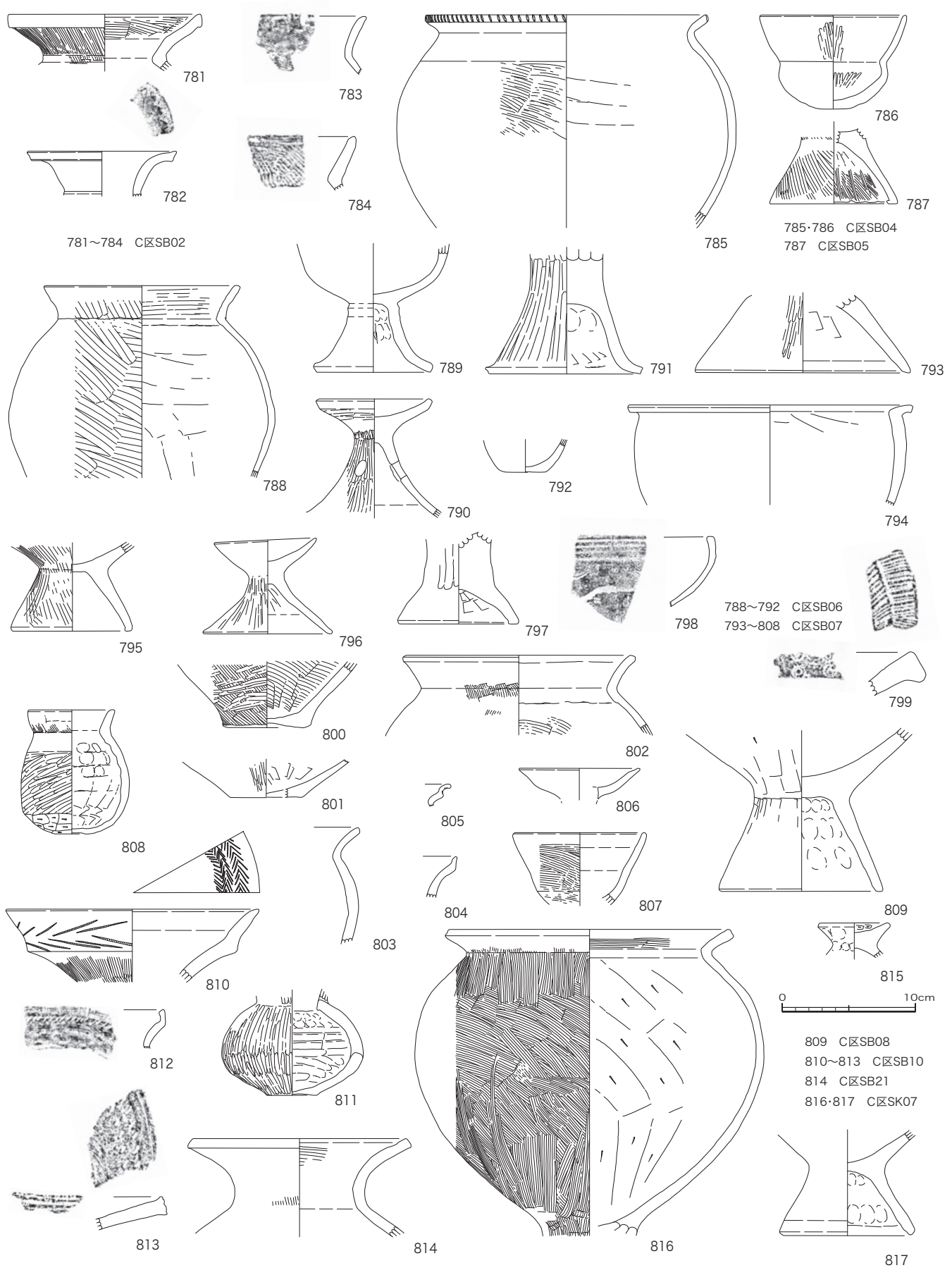


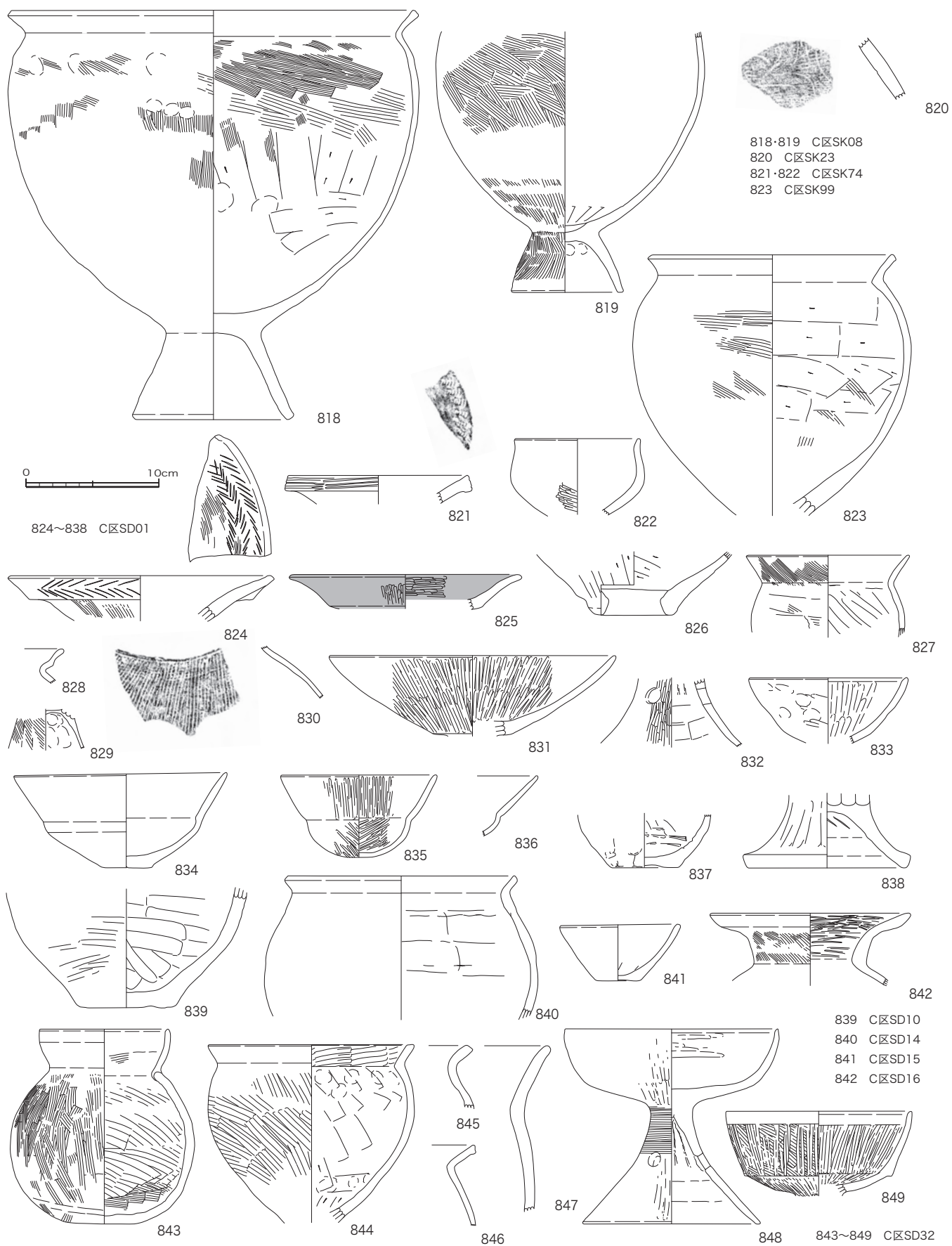


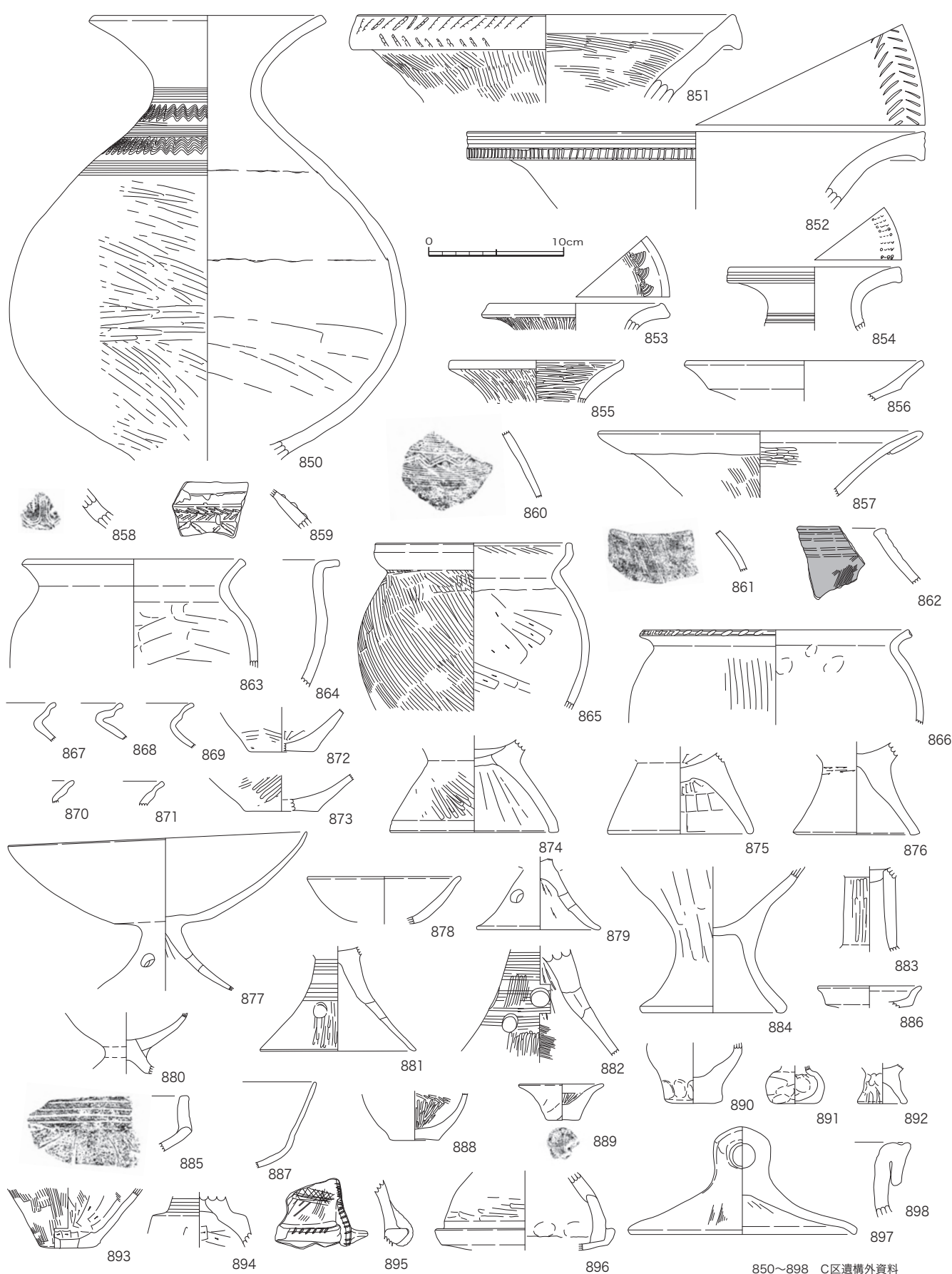


683~780 B区遺構外資料

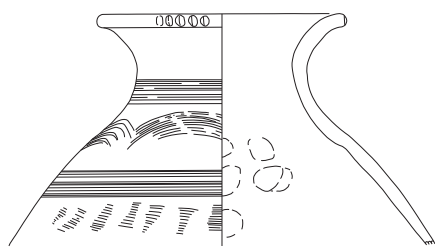




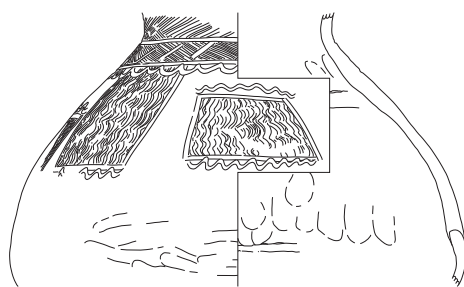




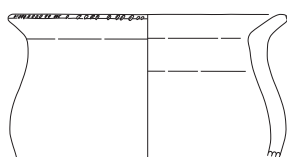
850~898 C区遺構外資料



899



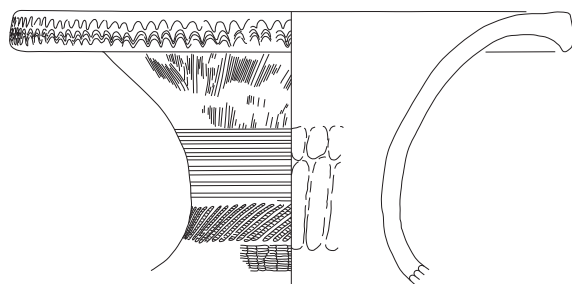
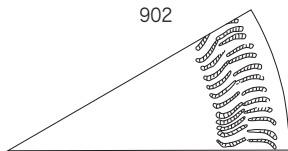
900



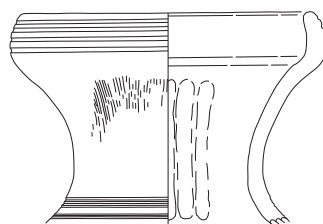
902



901



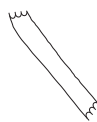
903



904



899~911 C区NR01



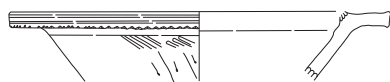
905



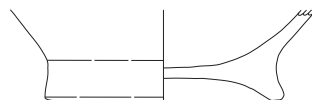
906



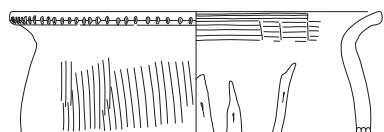
907



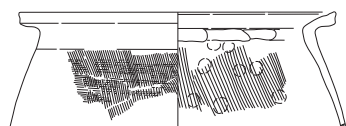
908



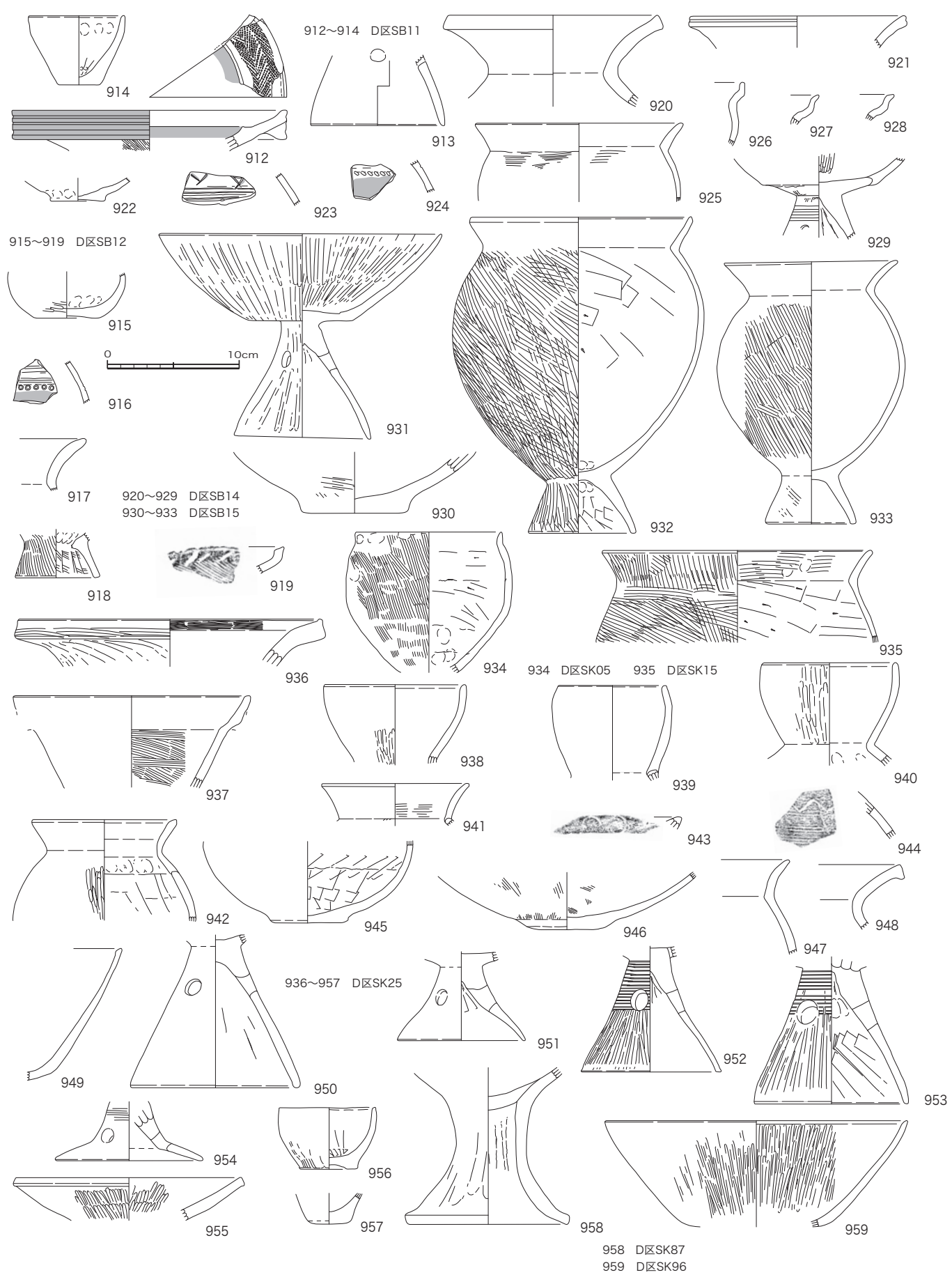
909

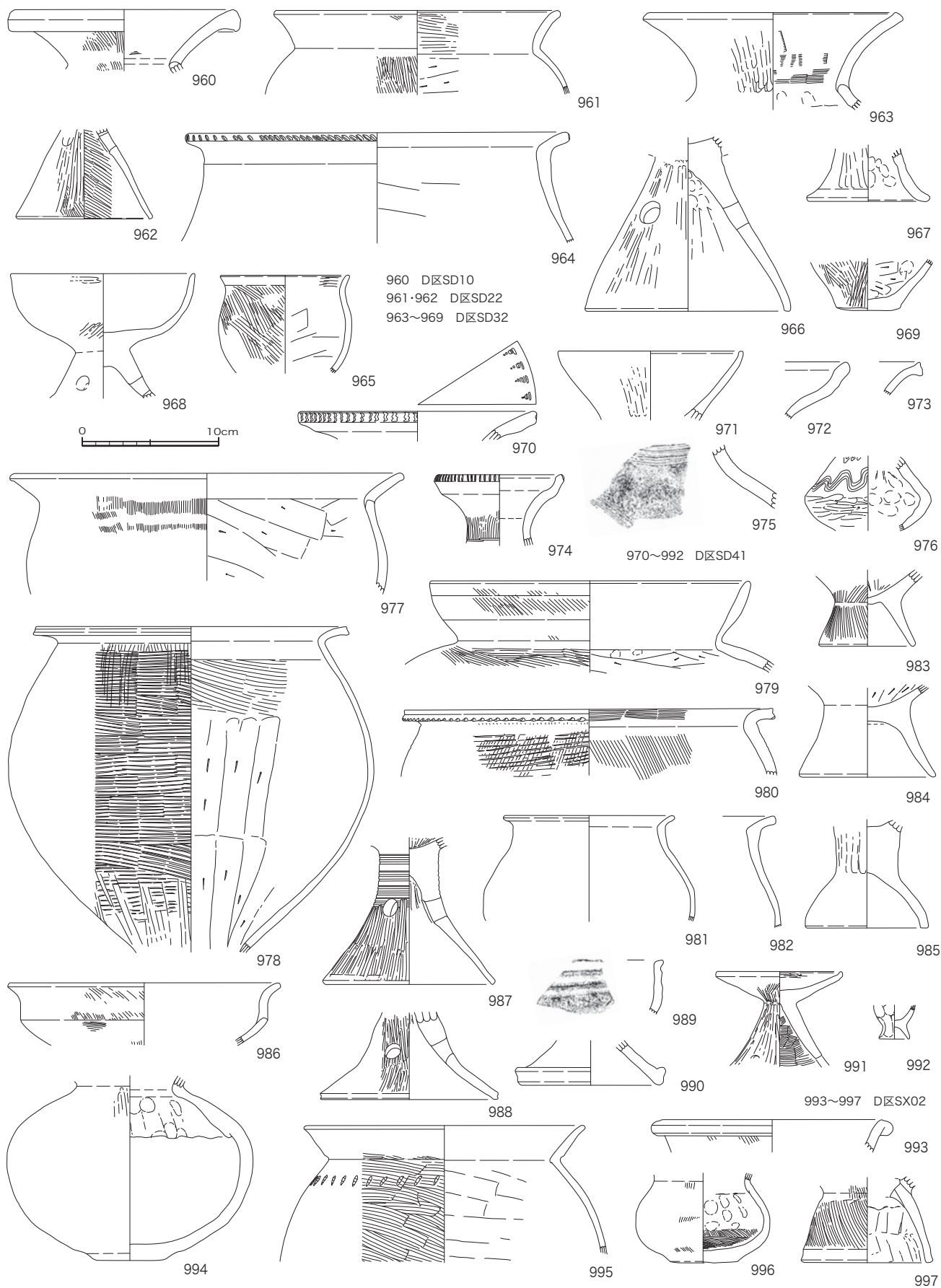


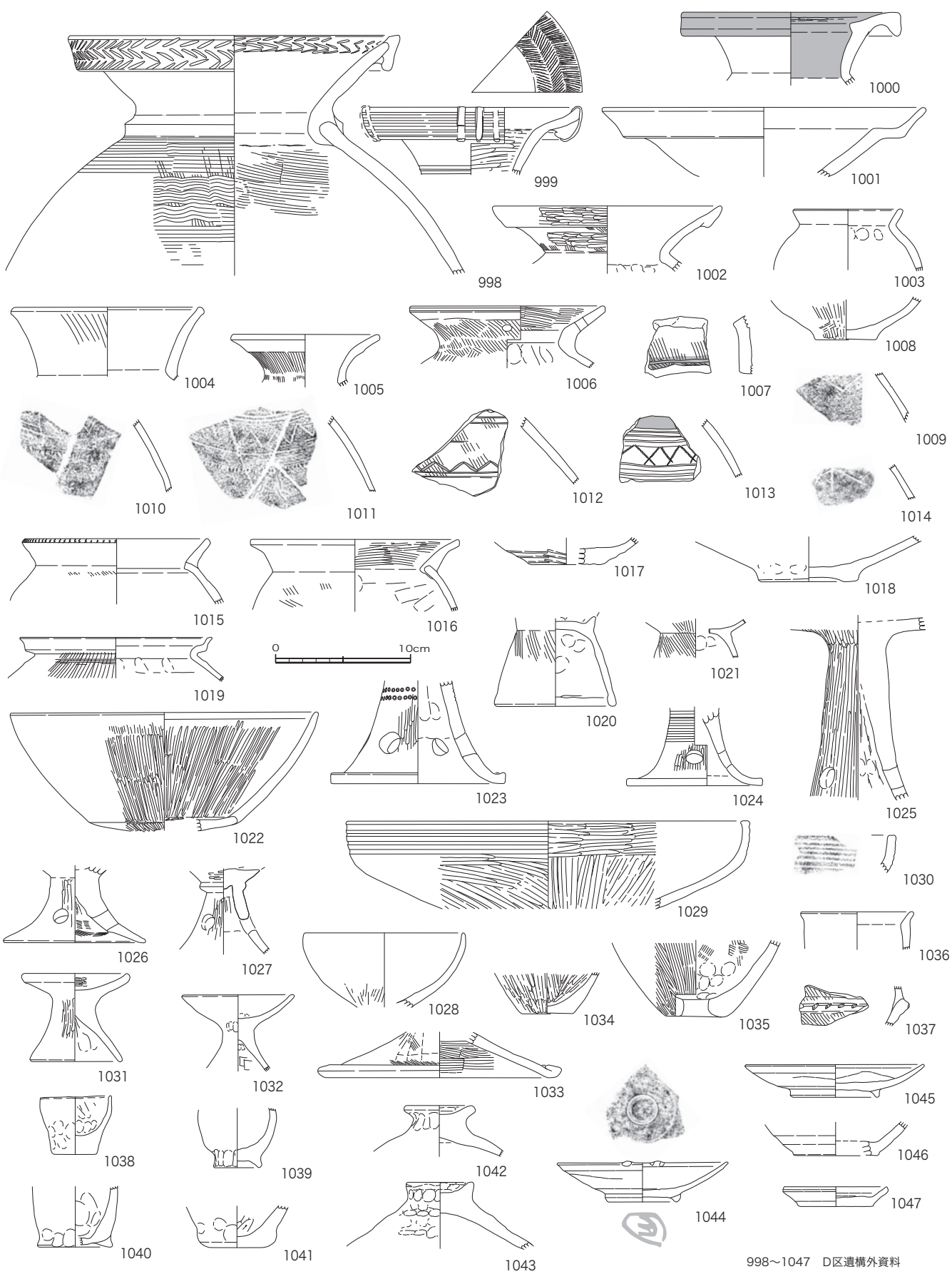
910



911

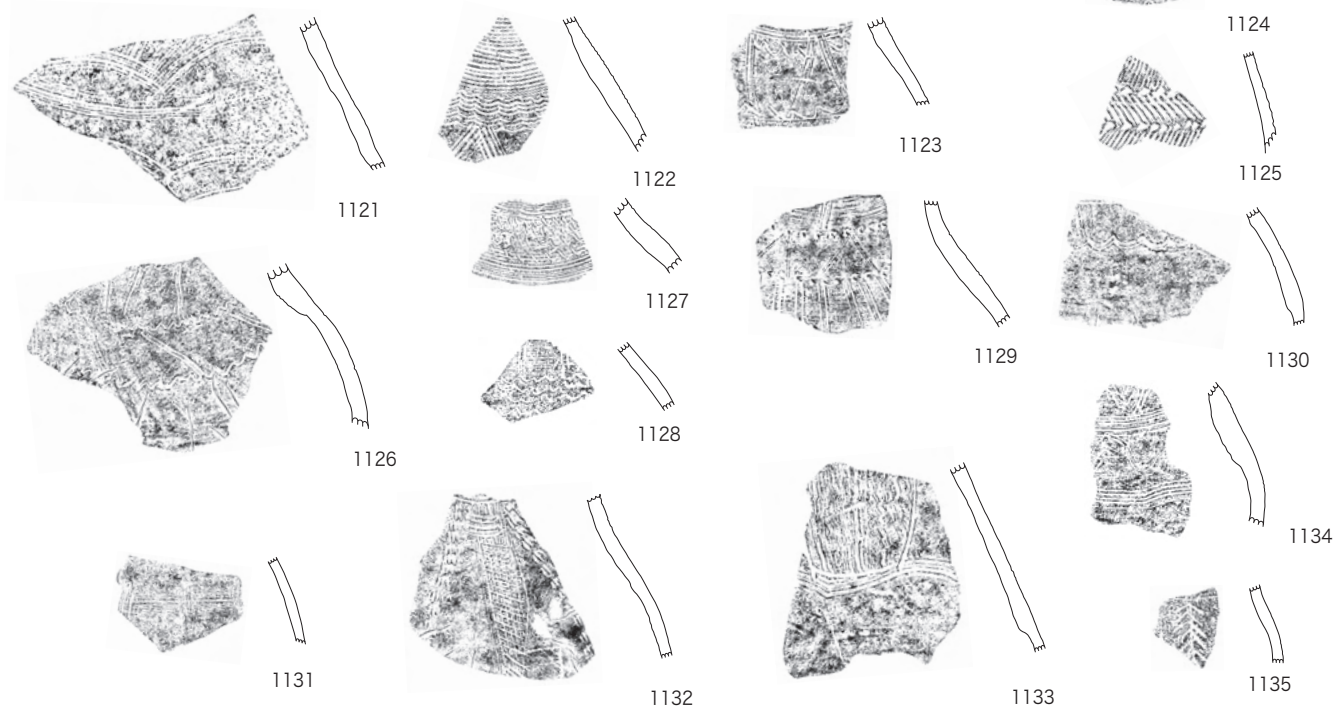
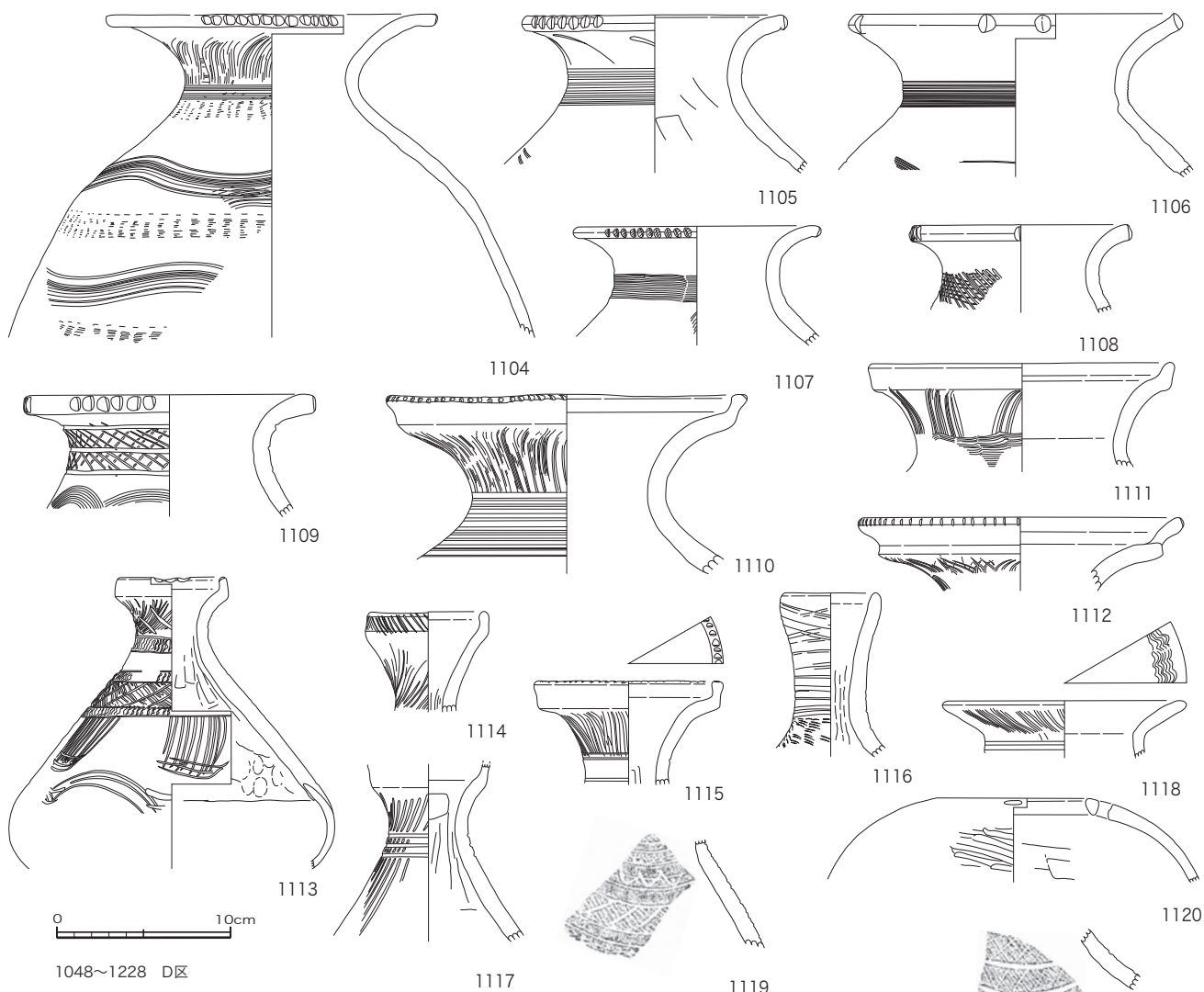


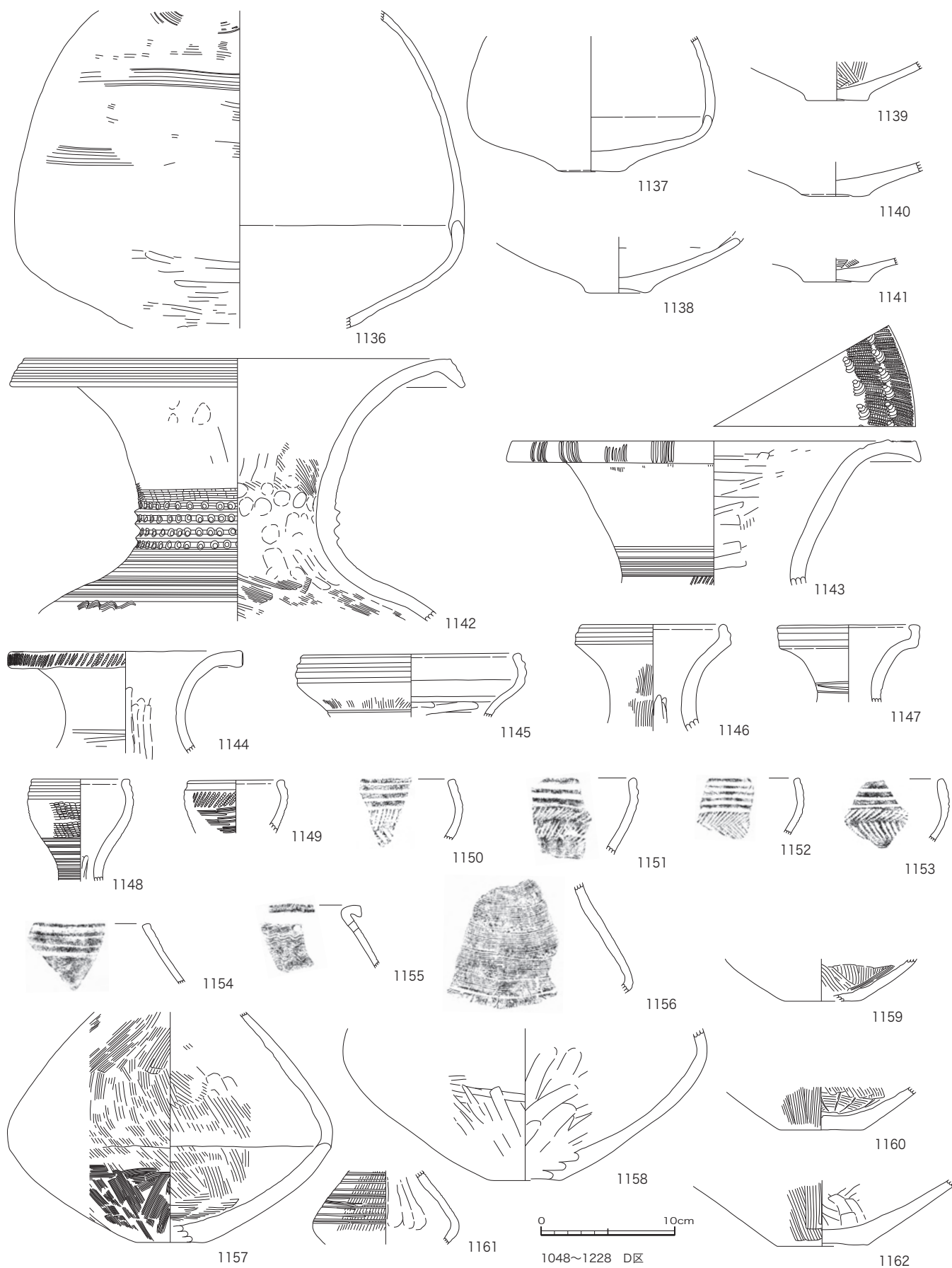


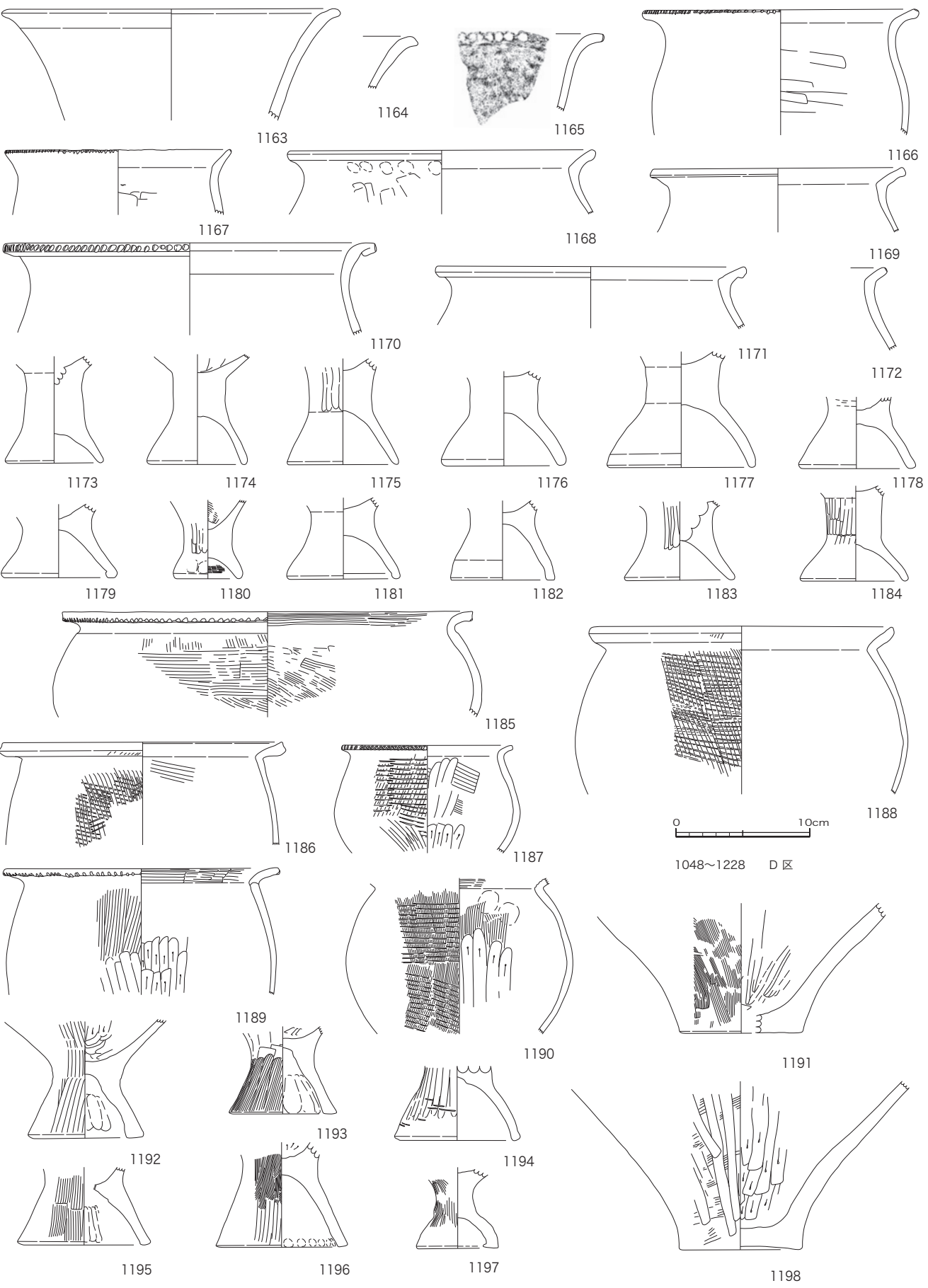


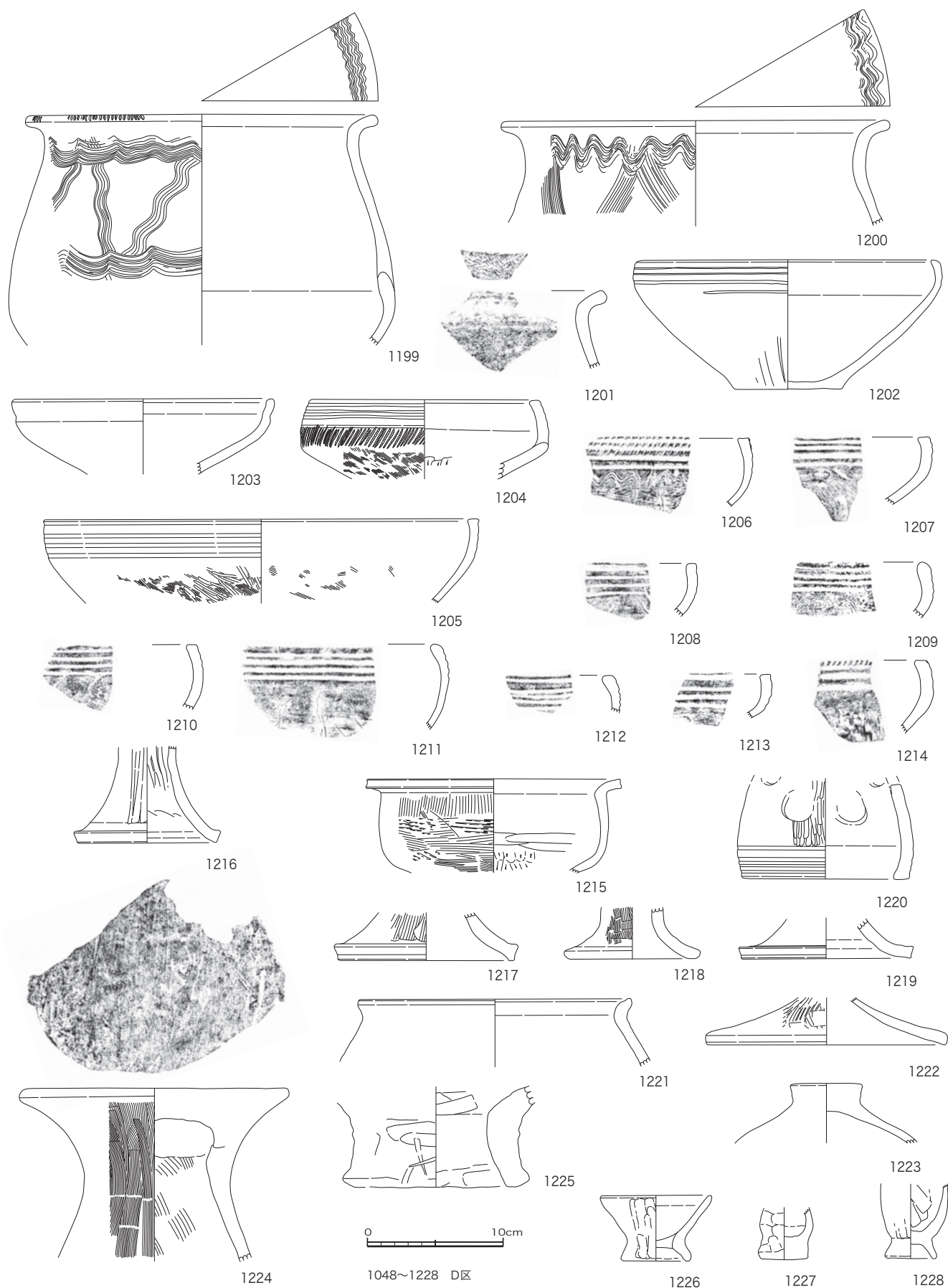
998~1047 D区遺構外資料

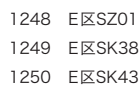


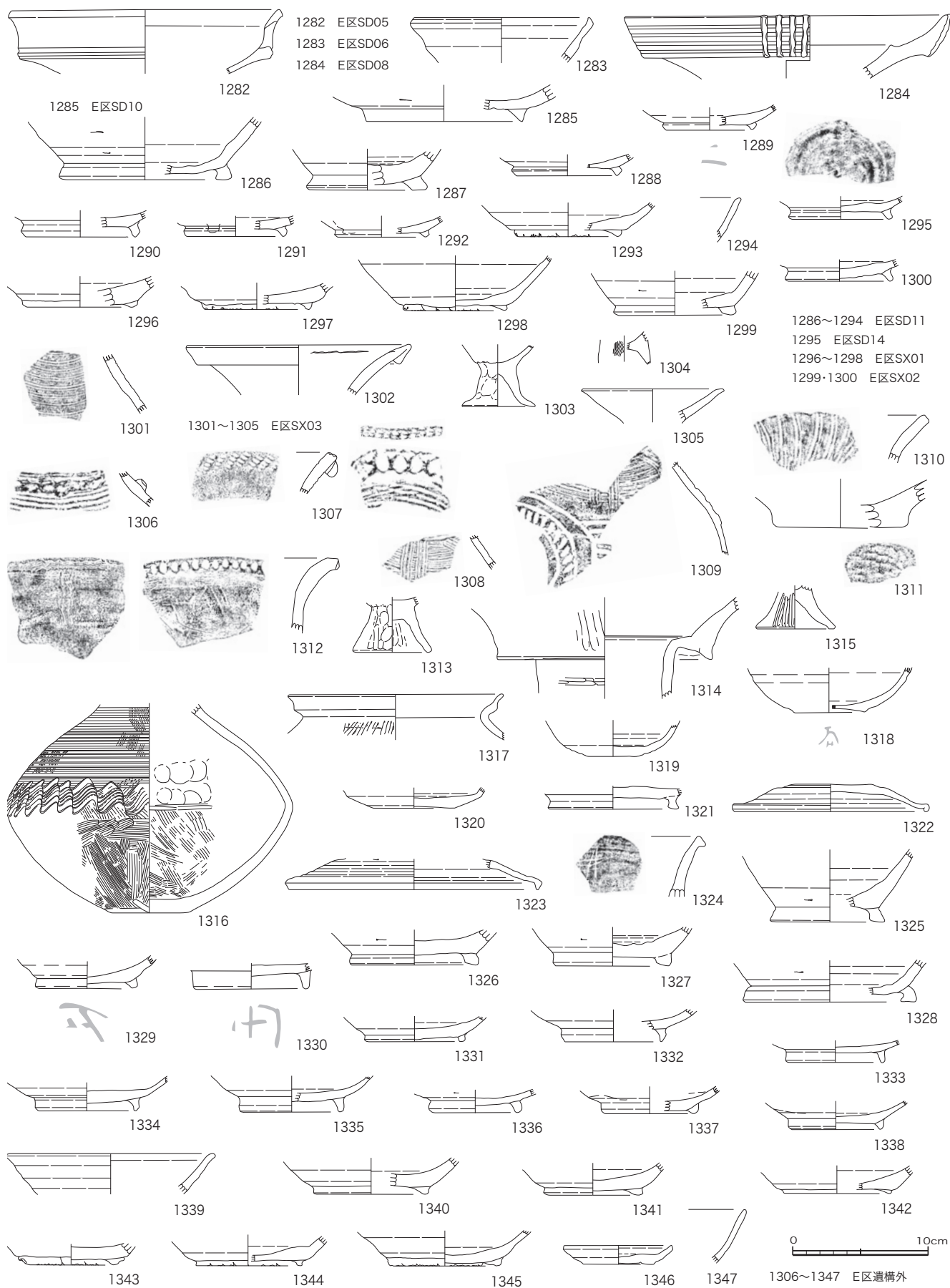


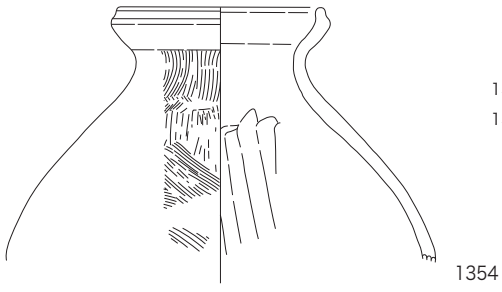
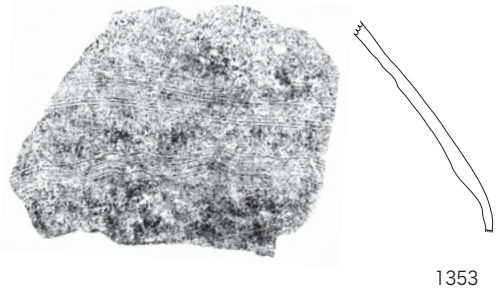
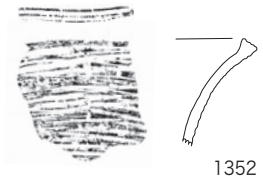
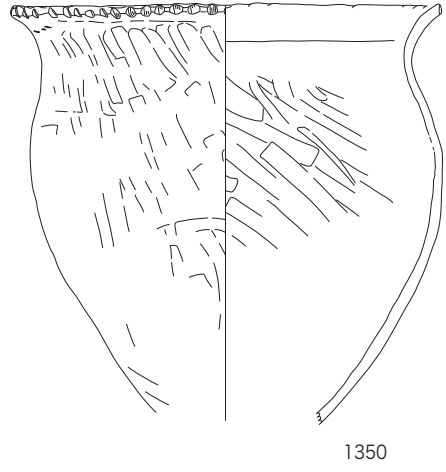
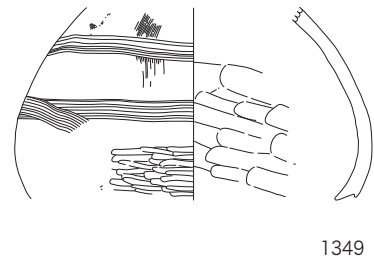
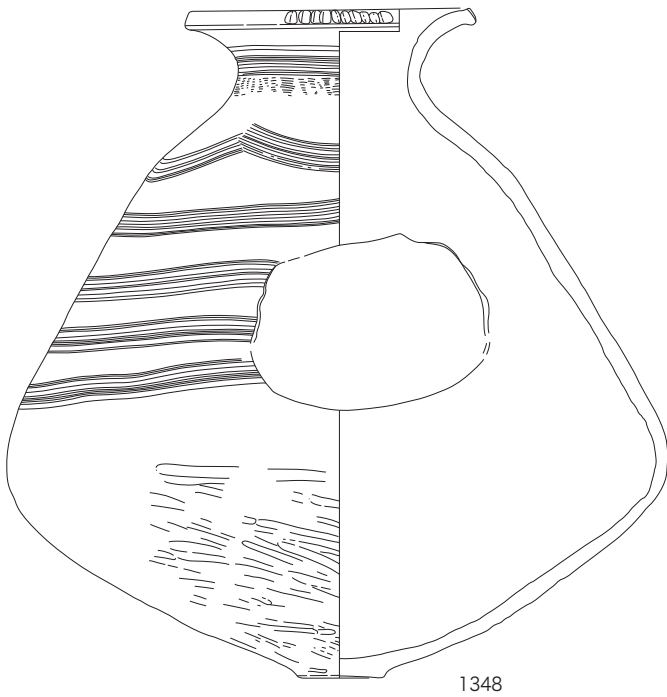




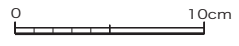
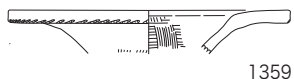
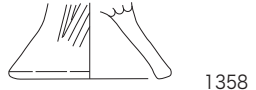
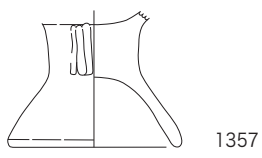
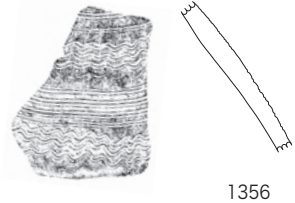


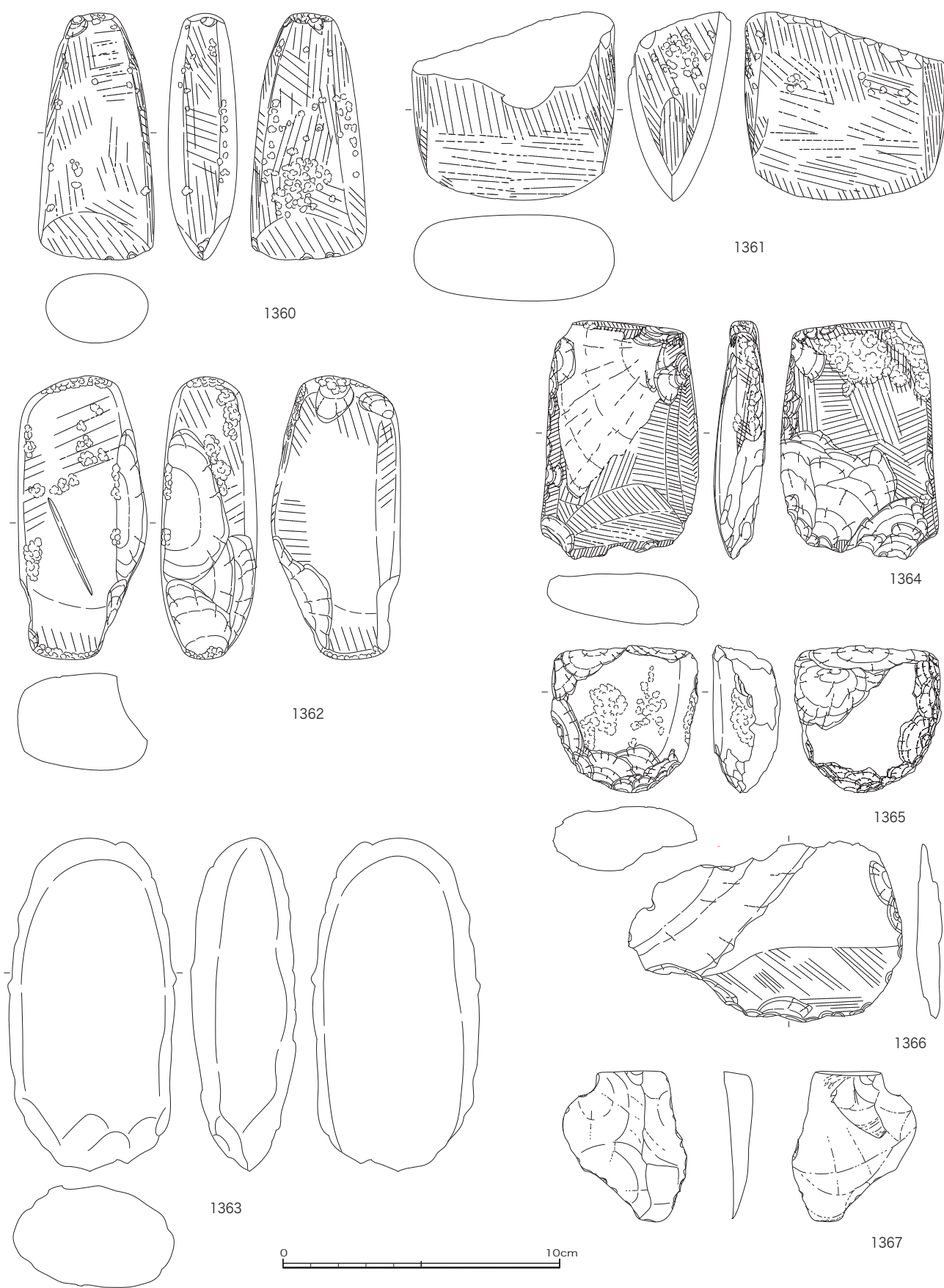


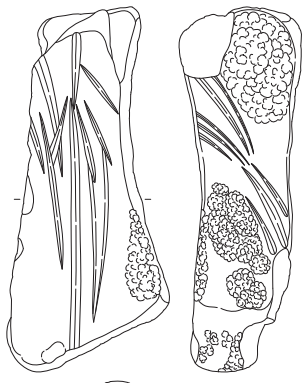




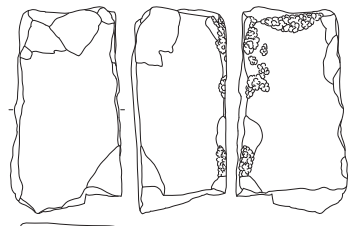
1348~1351 E区灰色シルト層
1352~1359 E区NR01



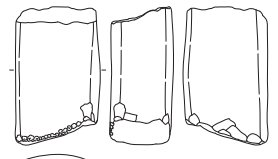




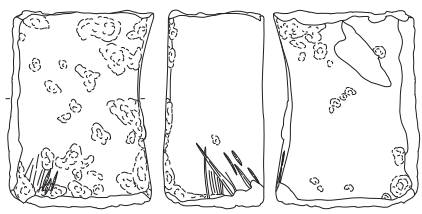
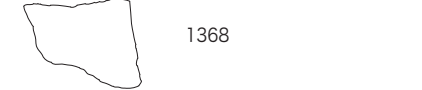
1368



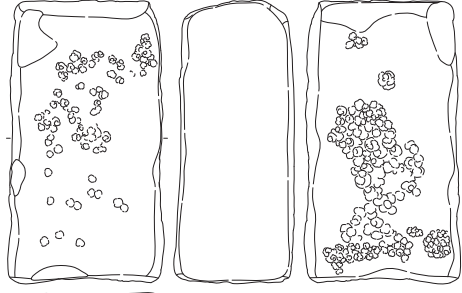
1369



1372



1370



1371



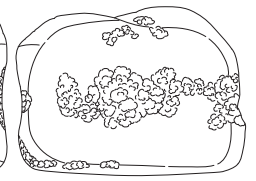
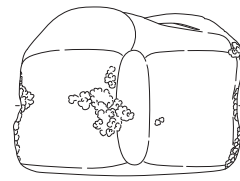
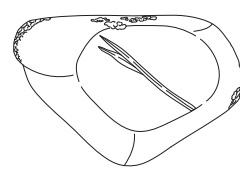
1373



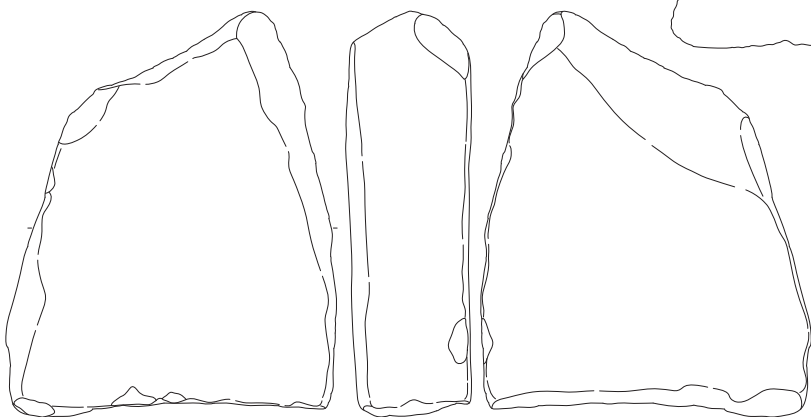
1374



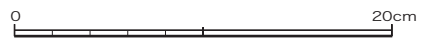
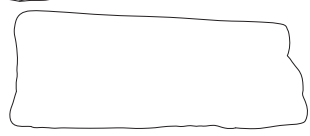
1375

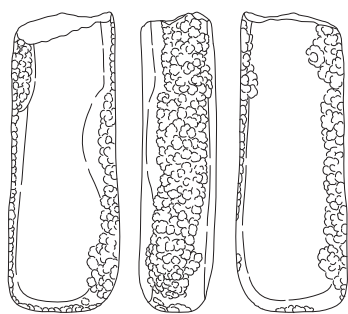


1376



1377

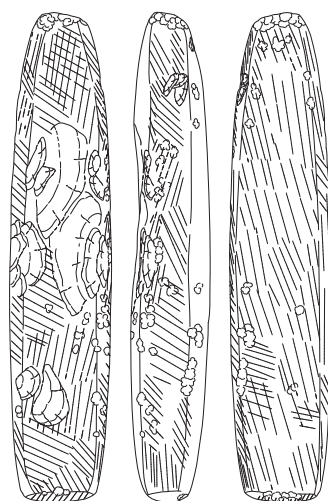




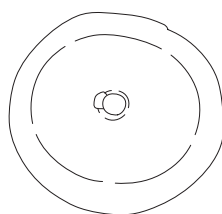
1378



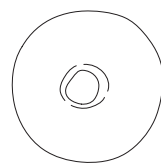
1379



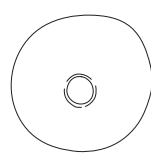
1380



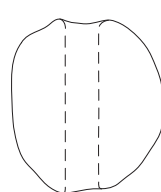
1381



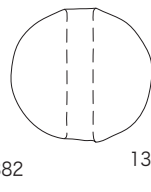
1382



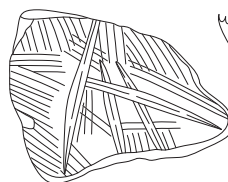
1383



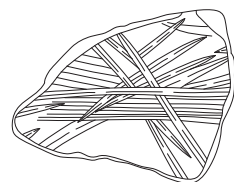
1384



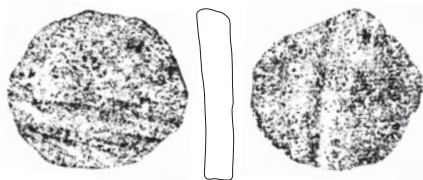
1385



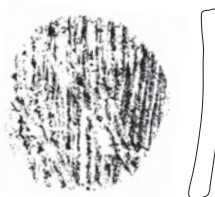
1386



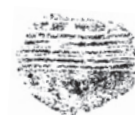
1378~1389



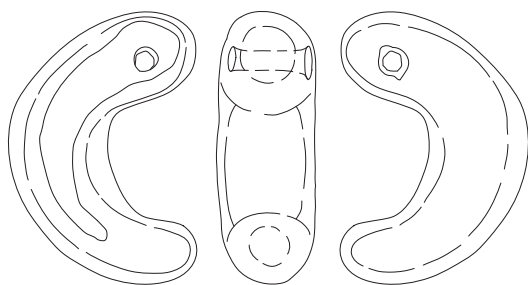
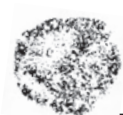
1387



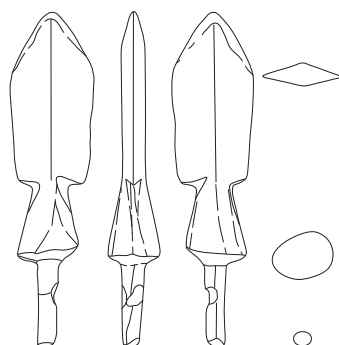
1388



1389



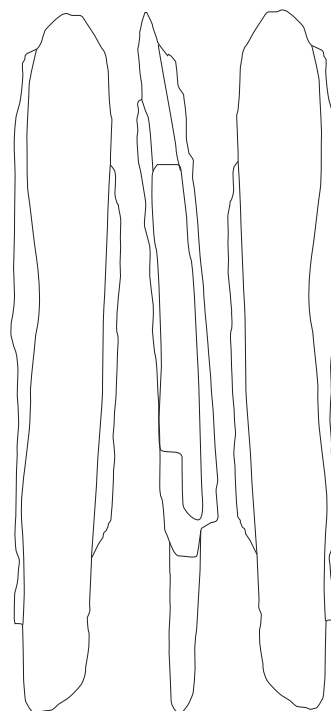
1390



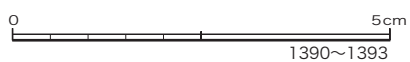
1391



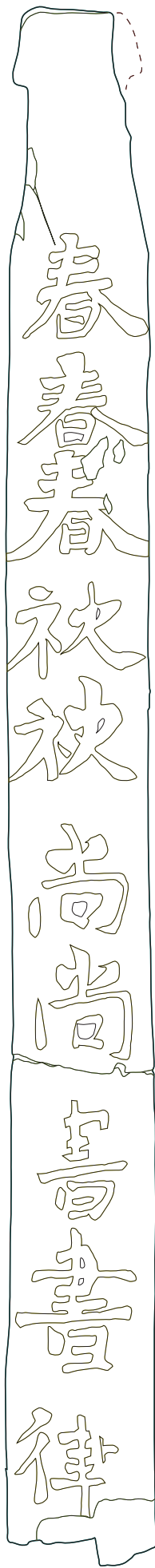
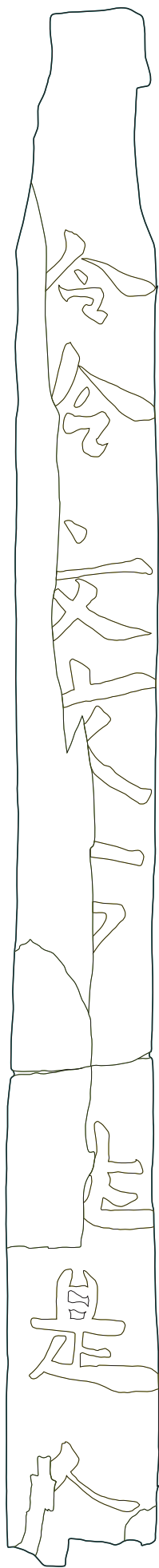
1393



1392

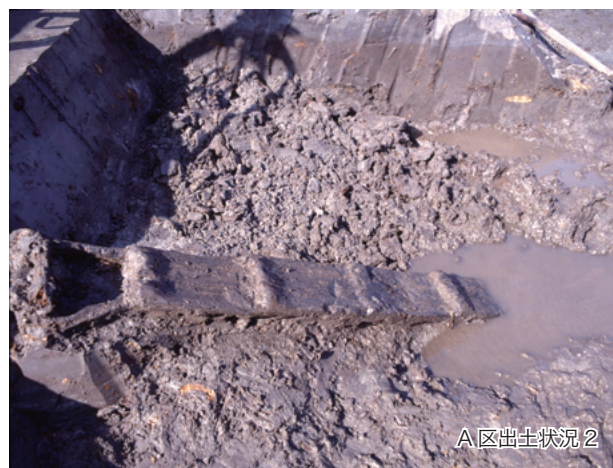
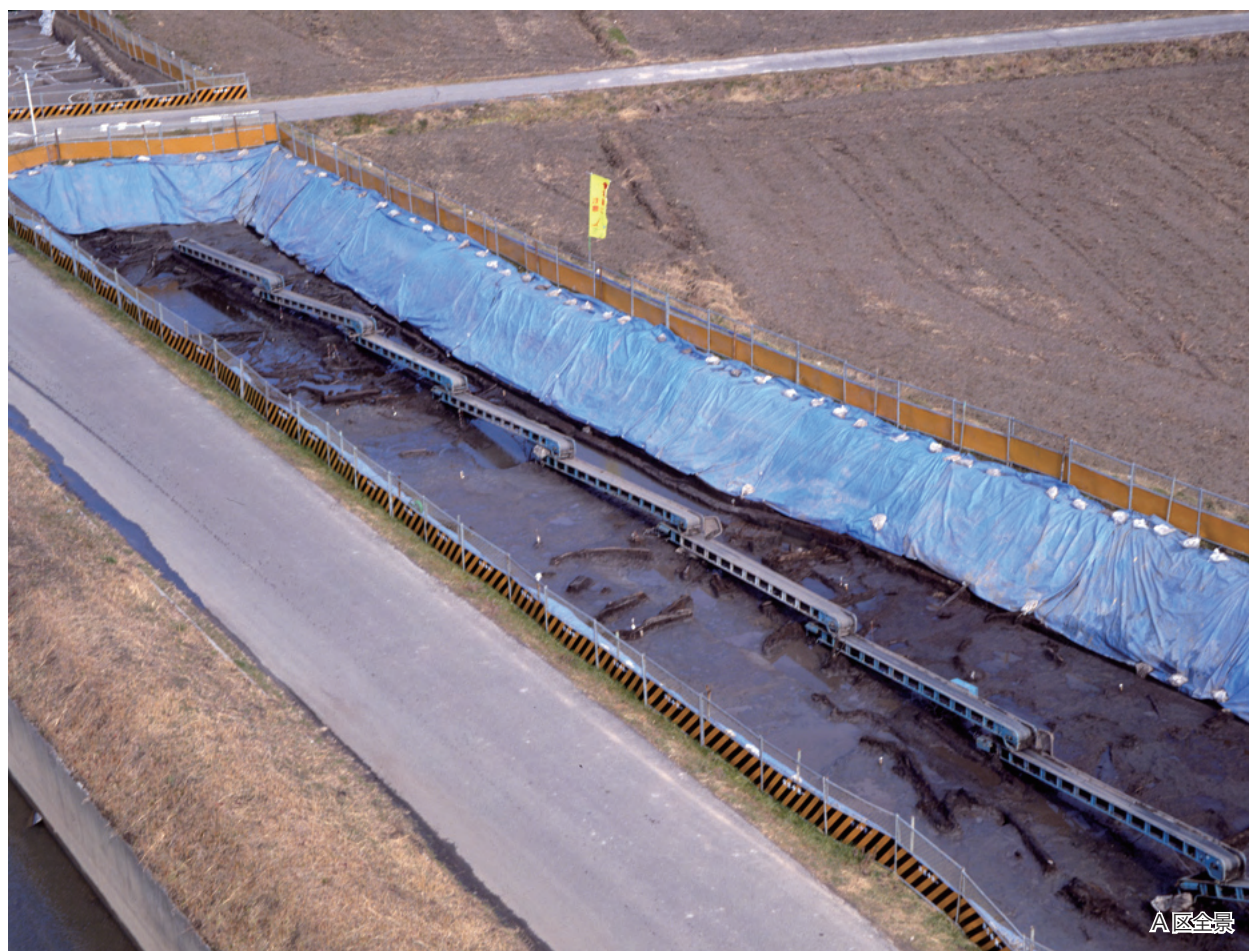


1390~1393



1394























59



61



62



68



69



70



71



72



76



77



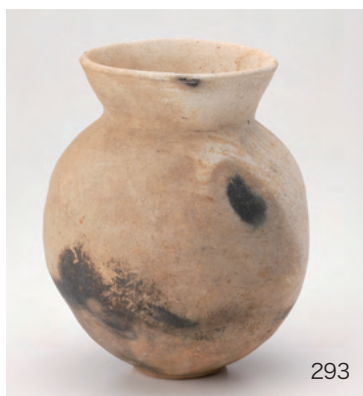
80

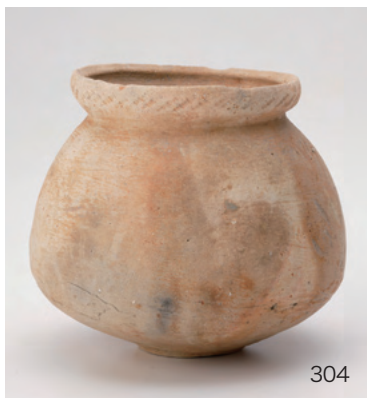


82

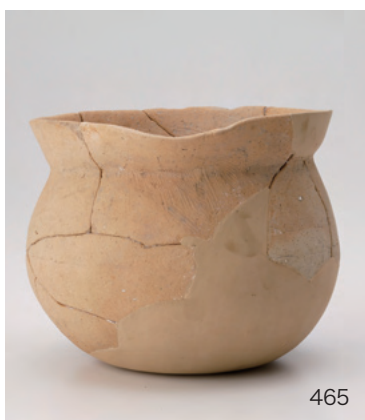














555



630



634(上面)



635



637



634



638



652



655



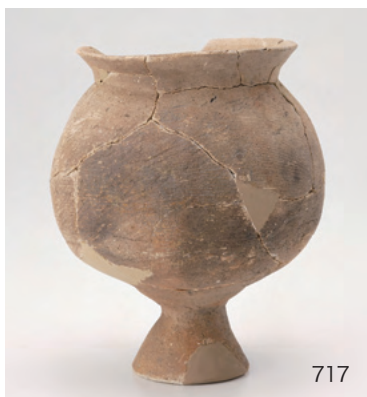
657



568



569





900



903



909



931



932



933



1000



1042



1136



1142



1224



1255





16



62 (部分1)





1360



1361



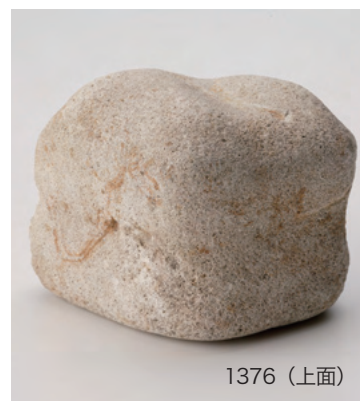
1362



1364



1375 (上面)



1376 (上面)



1375



1376



埋土5群



1403



1404

埋土4群



1405



1406



1427

埋土3群-1



1428



1432



1431



1430



1433



1434



1435



1436



1438



1439



1441



1442



1440

埋土3群-3



1455



1449



1469



1444



1484



1471



1470

埋土2群-1



1546



1550



1554



1551



1549



1553



1552



1557

埋土 2 群 -2



1555



1556



1559



1568



1564



1566



1570



1560



1562

埋土 2 群 -3



1579



1577



1576



1622



1591



1620



1621



1586



1623



1394



1633



1631



1634



1635



1636



1637



1638



1632

報告書抄録

ふりがな	しもかけいせき
書名	下懸遺跡
副書名	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 144 集
編著者名	池本正明・赤塚次郎・樋上 昇・堀木真美子・鬼頭 剛・森 勇一・永草康次・植田弥生・神谷巳佳・平尾義光・鈴木浩子
編集機関	財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	愛知県海部郡弥富市前ヶ須町野方 802-2 TEL 0567-67-4163
発行年月日	西暦 2009 年 3 月 31 日

収蔵遺跡名	所在	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	原因
		市町村	遺跡番号					
しもかけいせき 下懸遺跡	あんじょうしおがわちょう 安城市小川町	23213	540127	34°	137°	200012	3700	鹿乗川改修
	しもかけ			54'	05'	～		
	下懸			21"	44"	200103		

文書番号	発掘届出 (12 埋セ 125-1 12.8.31)	発掘許可 (12 教生 216-25 12.9.29)
	終了届 (12 埋セ 13.3.29)	発見届 (12 埋セ 13.3.29)
	保管証 (12 埋セ 13.3.29)	認 定 (12 教生 216-25 13.5.28)

収蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
しもかけいせき 下懸遺跡	集落遺跡	弥生時代後期	竪穴建物・方形周溝墓	弥生土器・木製品	
		～ 古墳時代前期		銅鏃・小型鉄製品	
		奈良時代以降	自然流路（谷地形）	木簡・墨書土器	

要約	本遺跡は沖積低地中の微高地に位置する。検出された遺構は弥生時代後期後半から古墳時代初期が中心で、竪穴建物・溝・土坑などが検出される居住域と方形周溝墓群で構成される墓域が検出されている。その前面には谷地形が広がるが、未成品を多く含む木製品が出土しており、近接して木製品の製作に関わるエリアが存在したと考えられる。
----	---

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第144集

下 懸 遺 跡

2009年3月31日

編集発行 財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷
新日本法規出版株式会社